芳賀檀編

芳賀矢一文集

冨山房發行

序に代へて

——古代の人、矢一——

こゝには矢一のエッセイ、隨筆、詩歌、日記、書翰等を集めました。鷗外の絢爛さはなく、漱石の深情はないと思ひますが、どの文章にも端々に至るまで「日本學」創立への意志と氣魄が烈々と動いてゐて、その思想は今日もなほ私達の心を打つものがあります。而も彼は、或ひは流行を追ひ、或ひは餘りにアジア的な祕事祕傳を尙び、或ひは詠歌三昧にその日を遊ぶ學者ではなかつたと思はれます。朝に希臘、ディオニソスを語れば、夕に國家、民族を論ずる。昨日は古事記、萬葉を說き、今日はフンボルト、シエーラーを論す。學は古今東西に亙り、思想は古今の華を集中して、而も自ら規矩あり。やはり一代の壯觀であつたと思ひます。ニイチエは近代の文學者の弊を論じて、近代の學者は、たゞ書を通して知識だけを得て、學の本質を知らない。古代の學は自ら多く旅し、自ら見、自ら聞き、書いた眞の學であつたと讐めた。矢一の場合は、少くとも日常流行の學ではなかつた。それは、私達は日常の矢一を知つてゐる故に、安んじて言ふことが出

來ます。彼は異常な博覽强記、漢詩など、一見卽ち暗誦して誤らぬ豐かな才能を具へてゐました。なほその上に、東西の書を問はず一日一冊を讀むといふ精力を以て勉强してゐました。（これは後に社交が忙しくなると共に衰へてゆきましたが）　併しそれにもまさつて矢一は旅を好みました。旅を無二の親友のやうに愛してゐたのです。生きた體驗をすることを本當の學問であると思つてゐたからです。日記にもあるやうに歐洲は二度訪れました。松阪在の山室に宣長の墓を訪ねた時には、「二十年來、一日として翁の書物を讀まぬ事の無い後進の一書生が、今始めて翁の墓前に額づいて、感慨は眞に無量であつた。」といつて、「百年の世は隔つれど敎へ子に數まへませとをがみ額づく」と歌つてゐます。同じやうに彼はワイマールにあの靜かなゲーテの家を訪れ、シユトラツトフオードのシエクスピーアの墓の前に敬虔に佇みます。今でも私は、瀨戸內海を通る船で萬葉を語つた父の愉しげな面影を思ひ浮べます。東京の郊外を一緖に步けば、きつと八犬傳の文章を引用して地名を敎へてくれるのです。「アメリカは言ふことがなくてつまらない。」とは矢一の口癖でした。日本の固有の文化が亡失してアメリカ化し、十九世紀化してゆくのが、彼にはどんなに殘念であつたでありませう。併し萬葉を說き、詩を論ずる時の彼は、誠に古典そのものであり、古典が彼の體より溢れ流れて來るかと思はれる程でありました。何一つ彼は書物

から知識を得たのではなかつた。彼の學は、身を以てする體驗であつたのです。獻身して自らの眼に見、身を捨てて學んだのです。ですから彼の學は、見て、旅して書かれた生きた體驗であつて、初めて私達はこゝに深い學問の生きた呼吸を感じ、無味乾燥な註釋や評解から脫れて、森嚴な夏の林の中に步み入る者の爽やかな心持を感ずることが出來ます。それ故にこそ、この人は、眞に眞の日本の民であり、あのやうに深く日本の國民を體驗し、日本の國家を愛することが出來たのです。

矢一は夙くして醫者にならうと志しました。その爲に少年の頃からドイツ語を學んだと語つてゐたことを覺えてゐます。文學者であつて醫者であつた者には、森鷗外、大野洒竹、カロッサ等がありました。もつと以前には、儒學と醫學とは殆んど分つことが出來ぬ位密接に結合せられてゐました。宣長もやはり醫者でありました。矢一が宣長を評して「國學大成といふ醫術よりももう一層廣い仁術を行はれた。」と言つたのは、誠によい批判であると思ひます。ルルケも「醫者は他のどの職業よりも美しい。」と語つてゐます。何故なら、醫者は直接人に接して人の苦難を救ふことが出來るからです。そこには生死を賭して人を救はうといふ奉仕があるだけです。これ以上に美しい人に對する奉仕があるでせうか。併し人を救ふ爲には、先づ自分から人を救ふこと

が出來るだけにはるかに健康でなければならず、又必ず人を快癒させ得るといふ強い信念が、特に精神的な決心がなければなりません。文學の場合も同じだと思ひます。矢一にとつては、文學は人間を快癒させる美しい科學であり、人間への奉仕であつたのです。誰か彼に接して、矢一の文學がそれ以外のものであると思つた人があるでありませうか。矢一は醫者にはなりませんでした。併し彼の國家、人間への強い信念は、來る者を安心せしめ、苦惱の人を救ひ、快癒への道を指し示しました。彼の文學は、その烈々とした奉仕の熱意の爲に、人間の本性をさへ全く變革する力を具へてゐました。彼は文學に於て何物よりも禮節を尙びました。何故なら、彼は人間精神の生成者として、その自ら創造してゆく精神の歷史と形態とを問題にしなければならなかつたからです。先づ何よりも心の美しさを磨けと言ふのです。又同じやうに人間の眞理を、たとへそれがどんなに單純であらうと、眞實である限り、その本當さを尙びました。「いつはり」を彼は何よりも憎んだのです。他の所でも言ひましたやうに、彼はたゞ科學や文學にだけではなく、この世界の惡に對して深い憤りを持ち、國學によつて少しでも世界を以前の姿に、もつと眞實のものに返さうと思つてゐたのです。彼が文學を言ふ時、歌や美文を問ふ先に、必ず人間と道とを求め、先づ文學の生地を嚴しく責めました。矢一の文學を知る二三の人は、きつとさういふ彼の儼とし

た體驗を持つてをられるに違ひありません。「禍事の多くなりゆく世のさまを直日の大神見なほしたまへ」とは彼の歌です。彼の祈りは、「世の中が關節を外してゐる。」といつた誇り高い王子の祈りに似てはゐないでせうか。

矢一は又學問の正傳といふことを言ひました。正傳といふのは、矢一の國學に於ける血統の自覺です。眞の精神、眞の思想といふものは、告白によつて人から人へ、時代から時代へ遺傳してゆくものではないでせうか。矢一は春滿、眞淵、宣長、篤胤等から國學の血統を受け繼ぐ者であると自惜しないまでも、春滿を以てその創立者とした古學を復興し、シェーラー、デルタイ等のドイツ文獻學をも採り入れて新しい日本學の基礎を置く事を以て生涯の仕事としてゐたと思ひます。ハンブルク大學の教授グンデルト氏等は親しく父の教示を受けた人です。氏は自ら父の「國民性十論」をドイツ語に飜譯しつゝ、「あの追憶に滿ちた本は、『月雪花』と共に、日本を語る最も美しい本である。」と幾度も繰返し私に語つてゐました。併しながら國學は、篤胤が言つたやうに「いつち廣い學問」であつて、儒學、佛學をはじめ西歐の學を修めた上、その最も良いものだけを集めて、眞の道を提示しなければならないのでありますから、なか〳〵に容易ではなかつた。彼はあらゆる學を奪取して、遂に確信する古道の復興を得たのでありませう。その破るが如

き果敢な學への武士道は、眞に私共の學ぶべき所が多いやうに思はれます。この文集にも載せましたが、矢一が眞淵、宣長の二大人を說く時、淡々とした文章の間にも、本當に自分の祖先を語るのだといふ喜びと眞摯さが溢れ、子供のやうな敬虔な氣持でこの二人の先驅者を祭典してゐる氣持は、惻々として今なほ私達の心を打ちます。

矢一は玉勝間から、眞淵が宣長を諭した言葉を引用してゐます。

「吾はまづもはら萬葉を明らめんとする程に、すでに年老いて、殘りの齡今いくばくもあらざれば、神の御典を說くまでに至ること得ざるを、いましは年さかりにて行さき長ければ、今より怠ることなくいそしみ學びなば、其の志遂ぐることあるべし。但し世の中の物學ぶともがらを見るに、皆低き所を經ずて、まだきに高き所に上らんとする程に、低き所をだに得ること能はず。まして高き所は得べきやうなければ、皆ひがごとのみすめり。此の旨を忘れず、心にしめて、まづ低き所よりよく固めおきてこそ高き所には上るべき業なれ。」

諭す眞淵はその時六十七歲、諭しを受けた宣長は三十四歲の壯年でありました。この眞淵の諭しの心こそ又矢一の心であつたらうと思はれます。自分は西歐の科學を移入して、漸く日本學の基礎を置いた。お前等若い者は私の志を繼いで古學を復興せよと言ふのであります。矢一が擔つ

た槍を、なほ擔つてゆくのは誰でありませうか。「この諭言は我が國學の歴史を語つてゐるのである。」と矢一は說いてゐます。學者の仕事は、先人の仕事の上に、更に新しく、より高い仕事が築かれて行かねばなりません。而も六十七歳の眞淵が「齡今いくばくもあらざれば」と語るのは、眞に戰場に仆れた武人の、仆れてなほ止まぬ雄々しい遺言のやうに思はれます。そこに古學を傳へようとする者の激しい意志と次代への責任とが切なく感ぜられます。矢一もそれを感じたのでありませう。又低きを固めて高きに上るといふことを說いたのは、日本の學者にとつて誠に適切であつたと思はれます。今日、本當に築き上げられた學者が何人あるでありませう。以前の學者は、今日の學者のやうに、他人の思想を借りて自分の衣を飾るやうな貧しいその日暮しの哲學は持つてゐませんでした。矢一にしても、「二十年來、一日として宣長翁の書物を讀まぬ日はない。」と言つた程です。當時の批判の精神は、今日のやうに一日一枚半頁を讀んで一題を論ずる輕薄さに比して、眞に悠々たる成熟であつたと思ひます。文學はそのやうな成熟がなければ文學とは言ひ難く、今日の混亂は實に私達の不幸であると思はれます。而も矢一は決して自分の思想を人に誇つたり、人に强ひたりすることはなかつた。「師の說なりとて、必ずなづみ守るべきにもあらず。」と言つた宣長の心が矢一の心でありました。自分は一つの例にしか過ぎないのであ

るから、より高く、より美しい道があれば、構はずにその道を歩めと彼は言ふのであります。彼こそ眞に現代に生きた古代の民、上古の人でありました。

千蔭が眞淵を評して、

「大人は今の世の人とは異にして、うち見にはさかしき事はおくれて、心おそきやうに思はれしかど、たまさかにいひいで給へる言に、敷島の大和心をあらはし、一言としてみやびならざることなかりき。筆とりて物書き給ふと見るに、五百年も經にけむ筆の跡の如くになむありける。――自らいにしへ人の心になりもて行きて、其の心より言ひ出でもし、物書きもし給ひしによりてこそしかありけるならめ。」

と書いてゐるのは、そのまゝ矢一に當てはまらないでせうか。今古代の人の姿なく、身邊の淋しさの身に沁むのを覺えます。何よりも先づこの文集にも沁み出てゐる矢一の人となりを懷かしみます。

この文集を編みますに際して、父の友人である諸先輩の厚い御同情と御指導を得ました。矢一への溫い友情に對して心から感謝申し上げてをります。眞にその友情は美しく、いつまでも殘つてゐることでございませう。文學の人ではありませんが、野路慶三氏等もやはり人生の危機に際

して父の薫陶を受けられた一人であります。あゝいふ人が今なほ殘り、あゝいふ友情が今になほ存するといふことは、私達の心を明るくいたします。文集の爲に坂本嘉治馬氏はじめ冨山房の方方に色々お世話をいたゞきました。厚く御禮申し上げます。特に島村剛一氏には日頃から編輯その他一方ならぬ御盡力をいたゞきました。父矢一に代つて厚く〳〵御禮申し上げます。

昭和十一年十二月七日

芳賀檀

例言

一、雜誌に發表せられた文章は、その雜誌の發行年月によつて排列した。

一、雜誌に發表せられた文章にして、後に「筆のまに〳〵」「筆にまかせて」のいづれかに收められたものは、右の二書によつて校訂した。

一、碑文は四篇收錄したが、その碑の所在地をしるしておく。田中大秀翁贈位記念碑は岐阜縣大野郡大名田町江名子松室岡にあり、殿様祭之碑は福井縣吉田郡淨法寺村栃原に、塙検校之碑は埼玉縣兒玉郡金屋村保木野に、平瀨儀作翁碑は福井市手寄上町旭小學校校庭にある。

一、留學日誌のうち、明治三十三年九月八日より同年十一月三日に至るまでの日記は、新村出博士の所藏である。本書編纂に當つて、特に博士より借覽を許され、こゝに收錄することを得たもので、この期間の日記だけ別冊になつてゐる。

一、卷末の年譜は、從來發表せられてゐるものの誤謬を訂し、更に增補を行つて掲げたものである。

一、裝幀は石井柏亭畫伯を煩はした。留學日誌を貸與せられた新村博士の芳情と共に、記して感謝の意を表する。

目次

目次

日記

口繪目次

旭日章を戴いた記念に　（大正九年九月二日）

書齋にて（大正二年頃）

ベルリンにて（明治三十四年二月十八日）
前列右より近角常観・福原鐐二郎・立花銑三郎・芳賀矢一
後列同吉田靜致・藤代禎輔・大幸勇吉・松本文三郎・薗田宗惠

Norddeutscher Lloyd, Bremen.

Gruss von Bord des Reichspostdampfers „Preussen".

芳賀鋼子宛繪はがき （明治三十三年九月・同三十四年四月）

七月二十九日　戊申　月曜

午前陰雨　午後晴

我軍成歡に戰ひ松崎大尉戰死す（二十七年）

十二月三十日　壬午　月曜

晴　夜雨

第五議會解散せらる（廿六年）

穂積陳重博士宛書翰
（大正三年八月十八日）

即位禮に際して（大正四年十一月）

國民道德教科書の原稿（大正七年）

昭和二年二月三日

鳥居博士殿

鳥居龍藏博士宛書翰（昭和二年二月三日）

論文隨筆

源平盛衰記と太平記と

余は今兩書の文學上に於ける價値を比較せんとするに先ち、豫め讀者の注意を乞はんと欲する事あり。他なし、近來此等の書をして其の史料たるべき資格を失はしめんとする懷疑說は、毫も其の文學上の資格を輕重する事能はずといふ事これなり。これ固より明瞭なる事理にして、古代に在りてこそ歷史は文學と同一體なりけれ、今は良歷史必ずしも良文學ならず、歷史としては非難すべきものも文學としては良好なるものあり。蓋し文學と歷史とは實に其の批評の標準を異にすればなり。故に今後世間の懷疑論者をしてよく其の志をなさしむる時ありとも、兩書は之が爲に毫も其の損失を蒙むる事なかるべきなり。何となれば元來兩書の如きは一の史料たらんよりは、寧ろ一の文學たるべき性質のものにして、たとひ其の短所たる史料の資格を失ふとも、其の長所たる文學上の趣味は之が爲に益〻發揮せられんとするが故に、其の益は其の損を償うて餘あるべければなり。故に余は從來の國史が、かの懷疑說の鐵槌に觸れて破碎せられんとするを悲しむと同時に、太平記、盛衰記等は唯其の史料たる資格を失ふにも拘らず、其の文學上の價値は永遠に不死なる事に安心するなり。讀者乞ふ、其の事實の正確に疑あるを以て併せて其の文學上の價値を棄つる勿れ。これ實を結ばざるを惡んで櫻樹を斷つの愚に類するなり。

兩書が文學として享有する永劫不變なる價値は何處に在るか、其の我が文學上に及ぼせる影響は何ぞ、是余が茲に解說を試みんと欲する所なり。而して兩書の成れる其の間一百年を隔つと雖も、前後の政治的事情大體同じきのみならず、社會一般文化の程度も亦格別の變化なきが故に、兩書の間固より非常なる懸隔を發見する能はず、況んや太平記は實に其の體裁文章等一に之を盛衰記に學びたるものなるをや。

盛衰記の世に出でたるは寶治、建長の間なるべしといへり。これ鎌倉の覇業已に固く、天下の實權すべて武士の手中に落ち、朝廷は全く其の權力を失ひたる時節なり。而して此の時は戰塵已に收まりて人また文學を弄する餘閑ありと雖も、昔日の才媛は今復見るべからず。かれは王朝の盛時を表せる花冠たりしが故に、王廷かく衰微しては再び現るべきにあらず、よし再び現るとも婉柔なる物語文は既に當時の人の愛好に適せず、保元以來の戰亂は風流閑雅の貴公子をして馬に跨り劍に仗らしめたり。而して遂には之を西海の底に驅つて、驕奢文弱等の氣風をして一掃跡なからしめたりき。是に於て東國の武人今は天下に主たり。乃ち文學が宮廷貴人の艶話情事を列ねたる物語文より一變して稍活潑なる物語文となれる事、實に自然の勢なり。然れども當時の人心は實に無常に動かされ易く、すべて斯の世を夢の如しと觀じたりき。これ亦其の故なきにあらず。思へば藤氏が富貴に傲りしも遠からぬ昔なるに、平氏が榮華を極めしは唯昨日今日の如し。然るに一門擧りて西海に亡びしも夢耶幻耶、一時旭日と呼ばれし木曾の武威も遂には粟津一片の煙と消えたり。興亡盛衰、無常轉變、佛家の說く所皆目擊親踏せざるなし。況んや親子夫婦の生別死別、佛法に歸依するに非ざれば何の日にか斯の憂を忘るゝ期あらん。これ

佛敎が當時に流行を增せし所以なり。而して盛衰記の作者は實に此の時代に生存したる人なるを以て、其の文章は雄壯活潑なる尙武の元素と凄涼悲哀なる佛敎の元素とを含めり。乃ち之を以て富貴榮華の夢幻の如きを敍述し去りたるは、一部盛衰記時代の筆といふと雖も、要するに此の時代人心の反映たるなり。

太平記の世にいでたる年月に關しては議論一定せずといへども、其の所謂南北朝時代の生產物たるに至りては疑を容るべからず。斯かる故に戰亂の人心に及ぼす作用、佛敎が社會の精神たる事等の事情は、さきに盛衰記時代に於て成立せるが如く此の時代に在りても亦成立したりき。これ太平記の作者が盛衰記の體裁及文章に倣ひて其の筆を執り得し所以なり。何となれば社會の狀況もし前と全く異ならんには、かく迄同樣なる著作をなさん事固より難かるべければなり。要するに兩書は同一時代の文學たるを免れず。卽ち同一事情のもとに發生せるものとす。故に盛衰記の價値たる事は太平記亦之を享有せり。卽ち物語文の婉柔なるより一變して雄快なる元素を交へ、漢語佛語を輸入して文章句法に幾段の進步を與へ、簡單なる中古の戀情玆に至りて一種の深奧なる觀念考察に其の所を讓りたるが如き、皆此の時代文學に通有なる進步といふべし。然れども盛衰記と太平記とは徹頭徹尾相均しく、所謂雙攣兒なるものか、兩者はいづれかこれ兄にして、いづれかこれ弟といふ區別なきか、其の出生の時代に於て前後社會の狀態は毫末の差異なかりしか。他語之をいへば、百餘年の長年月は文學に何等の變化をも來さゞりしか。これ實に重要なる問題なり。而して余は之に答へていはんとす、太平記は盛衰記に比して更に成長の域に進めるものなりと。これ其の文章外形上の謂にあらずして、內部精神上自ら進步の跡あるをいふなり。

然らば則ち其の少長の次第を生ぜしむる所以のものは何ぞ。曰く勤王の精神これなり。今、太平記時代と盛衰記時代とを比較するに、後者に在りては勤王の精神全く武家の爲に壓し去られたり。卽ち武家の政略として政は簡易を貴び、訟は神速を旨とし、人民をして京師を望むの志を黜して鎌倉を仰がしめんとしたりしが故に、人民は遂に爭うて武家に赴き、勤王の心は玆に全く喪盡せられたるなり。加之時は承久の後に在り。朝廷は一に武家の掣肘を受くるのみ。實に其の尊榮の源たる所以のものを缺きたるなり。然るに北條の末年に至りては公武の位置全く相反し、武家は政令日に暴恣に流れたるに際し、朝政は裁斷神速、下情よく上達するを得たり。是に於て天下の民、扨は鎌倉政府も最早是迄なりとて心を朝廷に寄するもの漸く多きに至れり。而してこの勤王心發起の反動力こそ遂に建武中興の盛業を成就したるものなれ。其の後南北の戰爭久しきにわたり、北朝の勢常に振へりと雖も、楠公以下義烈の士多きは皆これ此の時代精神の凝成せるものに外ならず。我が太平記は亦實に此の時代に生れたるものなり。其の勤王の精神に支配せらるゝ蓋し當然といふべし。況んや其の南朝方の手に成れりといふをや。

要するに余が太平記を以て盛衰記に比して更に成丁の域に在りといふものは、其の勤王の精神を含有すること多きを以てなり。盛衰記はたゞ會者定離を感じ生者必滅を歎ずるのみ。其の開卷まづ祇園精舍の鐘聲、沙羅雙樹の花の色を以て筆を起せる亦以て之を見るべし。然れども太平記は始終未だ曾て勤王の精神を離れず、盛衰記が平氏の榮華を寫すは、其の意他日必衰の理に漏れざるを明すに在り。太平記が北條氏の驕奢を寫すは、遂に其の

天棄を免るべからざるを明さんとてなり。其の他篇々章々心を沈めて兩書を比較する時は、一は無心に盛衰を説き、一は故意に褒貶を構へたる跡あり。前者はこれ世を悲しみて書けるものにして、後者はこれ世を憤りて成れるものなり。彼は女子の悲哀に沈めるが如く、此は丈夫の慷慨涙を揮ふに似たり。均しくこれ涕泣なり。而して其の趣大いに異なり。兩書を讀む者須く此の點に着目すべきなり。然れども盛衰記と雖も全く勤王の元氣を缺くものにあらず、只其の事實の彼此相異なれると時代精神の影響とは獨り太平記に於て其の重きを致さしめたるのみ。而して其の均しく鎌倉時代文學の鉅作たるに至りては固より論を待たざるなり。(明治二十三年十月「國文學」)

文學復興の時期

國史を繙き西史を手にするものは、必ず文化の進歩に於て東西同一の現象あるを認むべし。先づ我が國に於ては文學の花期金世と稱すべきは中古王朝の時代に在りしが、鎌倉室町の時代を經て一旦滅絶に垂んとし、德川氏の世に及んで再び大いに其の光彩を放てり。之と等しく希臘、羅馬の文學は一時舊世界の精華たりしが、西羅馬の顚覆とともに文學も其の基礎を失ひしかば、中世紀數百年が間は歐洲を通じて無文無學の暗世なりき。而してかの文學復興の日は遂に今日の歐洲文明を喚起する首途とはなれり。

東西文化の進歩斯の如く相類似し、其の開化に及ぼせる影響亦均しく莫大なりといへども、彼と此とは其の規模もとより大小を異にし、其の時世の事情亦多少の異同あるを免れず。姑く余をして東西のルネーサンスを比較せしめよ。

歐西文學の復興は社會の變動に伴ひて思想の自由、重要なるフアクトルとなれり。蓋し中世期に在りては宗教の束縛最も甚しくして、毫も之に背戻せる學説を許さず。故に人絶えて新奇の説に進む事能はずして、飽くまでも宗門の教誡を信ぜざるべからず。啻に經典のみならず、僧侶の一言一行といへども實に神聖犯すべからざるものなりしが故に、一般人心は遂に伸張する期なくして、社會は全く考察の力を失へり。故に哲學は死し、文學は息み、世運の進歩全く遏止せられたり。此の時に當りてかの十字軍は此等の歐人をして全く他種の開化人と相接せしめしかば、其の結果は人をして狹陋の見を開き、頑迷の夢を醒し、自由の意思を發揮せしめて、次第に宗門を輕んずるの風を養はしめ、教會の勢力漸く減退するに至れり。是に於てか壞敗せる當時を棄てて文化燦然たる古代に遡らんとする傾向を生じ、宗教の信仰心衰へたると同時に、希臘、羅馬の古哲學を研究するもの益〻增加せり。これ卽ち文學復活の大勢にして、各自其の思考言論を恣にし得たるを以て、數百年來壓抑せられたる潛勢力俄に其の活動を起して、文學の隆時遂に巨多の偉人を生成せるなり。

故に此の時に當りては、社會一般の狀態已に大變せるものにして、啻に文學のみ復活せしに非ず。宗教の羈絆解け、封建の制度やぶれ、譬へば凝結閉塞せし中世の時期始めて一陽の來復に會ひたる觀あり。玆に於て古哲學

は復興し、古文學は復奐し、社會百般の事すべて復活の氣運に際會せるなり。

顧みて我が國文學復活の狀態は如何なりしかといふに、關ケ原の戰はもとより十字軍の如き效果ありしものにあらず、又室町の暗黑時代には人心を支配する宗教の一大抑壓存在せしに非ず。(宗教の勢力はやゝありたれども)我が所謂暗黑時代は天下の戰亂に際して世人が文筆を棄てたるによれり。故に文學を抑壓するものは戰爭のみ。世に戰爭を絕ちて時運昌平に向へば其の勃興復活の勢もとより遏止すべからざるなり。然れどもこの復活は心思の自由を得たるに原因せず、はた新知識の之を促したるにも非ず、社會は依然たる社會にして、封建の制度は却つて其の鞏固を加へたる時に於て起れり。其の復活の未だ俄に恃むべからざる知るべきなり。

社會の進步を妨害し、百物の生長を遏むるものは封建の制度に如くはなし。何となれば封建制の精神は舊態を永遠に保持するに在ればなり。但わが德川氏は文學に向つては太だ寬容なりしが故に、他の藝術に比しては文學は割合に進步をなせり。然れども其の進步は如何にありとも、之を圍繞する百物悉く封建的なる以上は、到底封建時代の影響を脫却する能はざるなり。かの和學者が古文學を復興して遂に古人に超出する能はざりしが如き、又其の他の文學が儒敎主義を敷衍して千篇一律、人をして其の單純に倦ましめしが如き、皆封建制の烙印を被れるものとす。之を西洋の文學が單に古文學の復興に止まらずしてよく發達大成せるに比すれば、其の得失甚だ明瞭なり。要するに彼が文學は復活時に於て社會人心とともに一變し、我が文學は同一社會殊に封建制の下に在りて復活せり。復活の事は相似たりと雖も、其の結果に得失ある多くは之がためなり。

かく論じ來れば、我が國文學が封建守舊的雰圍氣中に發育せると、西洋の文學が百物一新の社會に生長せると其の趣大いに異なるを知るが故に、この東西復活時の比較は始めより適當を失へるものなるを知るべし。而して之と同時に眞正の復活時代といふべきものは明治維新後に外ならざる事をさとるなり。

明治維新の後は西洋の復活時代に於けるが如く、社會の狀態已に大いに一新せり。人民思想の更に高尚に更に濶大となれるも亦相同じ。而して新に西洋の開化と相接して彼が文學を玩味する事を得るは、西歐人が嘗て回々教徒の開化と十字軍頭に接したると其の事情太だ相似たるに非ずや。東西の長短こゝに比較せらるべく、材料の範圍は全世界に擴張せられたり。此の時に當りて奮つて古文學を研究し、しかも完全を古へに定めずして、大成を未來に求むれば、文學の黃金時代は決して遠きに非ざるべし。文學復興の時期は德川の初世に非ずして、實に明治の初年に在り。何ぞ旃を勉めざる、何ぞ旃をつとめざる。

（明治二十三年十一月「國文學」）

鋼子歌集序

敷島のやまとの人は、花ぐはし櫻の花のにほふがごとき本性にて、上下おしなべてみやび心もたらぬはなく、千早ぶる神の御世よりうつしみの今の世にいたるまで、折にふれて詠みいでたる歌どものかぐはしきにほひは、

とつ國人のゆめにだに思ひいたらぬところなりけり。さるは、海ゆかば水漬くかばね、山ゆかば草むすかばねと雄々しき眞心ふりおこしつゝも、花に月にうるはしき倭島根の景色にむかひては、みやびの心とゞめあへず。昔より情を知る武士といひ傳へたるなん、まことのやまとをのこにはありける。矢叫のたゞ中に弓しぼりて歌よみかはし、陣營の寒き夜半に戈を横へてうたずんじたるなど、いづこいづれの世にかは、吾が國とひとしなみのためしはある。されば、倭島根の國民と生れ出でたらん者は、雄々しき手ぶり忘れぬが中に、みやびたる心もちひをもちて、日ごとのなりはひをいそしむかたはらには、吾が國神ながらの淸きかぐはしきみやび心をもたんとこそ心がくべけれ。

さては、はしき吾が妻にも、ことよせて歌よまするこことはなしぬ。よろづの物ともしきがちなる貧しき家の妻たらんもの、歌よまんなどかたはらいたしといふ人もあらん。そはやがて吾が國ぶりを知らぬをこのしれものなりけり。家の貧しきをも苦しとせず、やすらかに歌よみかはして世をおくりしめをとこそ、なか〳〵に羨ましけれ。いたづらに千萬のこがねをかさねて北斗を支ふばかりになりぬとも、みやびの心しらひなくば、いかばかりくやしからまし。

いでわが妻よ、歌はいかに拙くともあれ、折にふれ時にあひて、おもひにうかびいづる言の葉を、この草子にかいつけて、友白髮に老いて後のおもひいでにはせん。いましが歌よまば、ふたりの間におひいづる子等も歌をよみならはん。子の子も亦うたをよみならはん。かくてつひには家の風を吹きおこすほどの歌よみもいで來べし。

そは遠き後のことなり。一日々々とおくりゆく今の世のなりはひ、悲しきことも苦しきことも多かるを、思ひ屈するをりもあらば、歌よみかはして慰みてん。さてはおひいづる子等にもみやびの皇國ぶりを教へてん。なでしこのにはのをしへはたらちねの親によると聞くものを、いかでか詠までずはあらん。めをとの歌よみあへるためしは、國柱めぐりあひたまひし二柱の神よりはじめて、代々につきせぬみ國ぶりなり。三十一文字のうた短しとないひそ。短きふしにこそ、淺からぬなさけはこもれ。いでや、いましもろともに歌よみならひてん。かくいふは、この冊子ぬしの夫、明治二十あまり八といふ年彌生の頃、上野の櫻やう〳〵咲きそめたるほどしるしつ。

(明治二十八年四月)

當代國學者の一任務

維新以降百般の制度文物、大抵模範を西洋に採りしが故に、我が國人にして彼の語學、文學、歴史、法制、其の他實科の學問を研究するもの日一日より多く、往々にして西洋人と角逐して其の上に駕するものあるに至れり。然るに自國の學術文藝に至りては、かへりて之を顧みるものなく、會々之を研究するものあれば、罵りて迂濶にして時世に適せずとなせり。これ彼を識らんとするに急にして、殆ど我を忘れたるものといふべし。

かゝる間に、西洋人にして我が國の事物を研究せるものは比較的に多し。制度文物より風俗習慣に至るまで、我が國の事物が、これら日本學者の手によりて西洋に知れ渡りたることは、實に意想の外にいづ。今其の最も著名なるものを擧げんか。歴史に關しては、ケンペルの日本紀事を初めとして、アストン氏、アダムス氏あり。チヤンバレンの古事記英譯、フロレンツの日本紀獨譯等、其の苦勞大いに見るべきものあり。文學に關しては、チヤンバレンの日本古歌集、サトウの祝詞、アストンの土佐日記、同氏の枕草紙一部、ヂツキンス及びランゲの竹取物語、トレンチニーの平家物語一部、ランゲの古今和歌集春の部、トループの御文章、イビーの徒然草、チヤンバレンの和莊兵衞及び謠曲、狂言、フロレンツの和歌集等の如き、或は一二章の飜譯に過ぎざるものあれども、西洋人は之によりて我が文學に就きて何程かの觀察を得るに相違なし。語學に關しては、ロドリゲ、コロラド等三百年以前、已に研究の端緒を開き、爾後シーボルト、ホフマン、アストン、ヘブン、チヤンバレン、ランゲ等各文典、字書等の著述あり。地理に就きてはラインの日本、其の他サトウ、チヤンバレン、オイツトネー等各著述あり。日本紀行等は枚擧に暇あらざるべし。其の他法律制度より生產興業は勿論、圍碁、將棋等の細技にいたるまで、皆多少研究せられざるはなく、英人の創立せるものと獨人の興立せるものと二箇の亞細亞協會ありて、其の報告は常に有要なる研究の結果を滿載して刊行せらるゝなり。

西洋人の研究は學術上の興味よりするものと、單に物數寄的詮索よりするとの二つあるべしといへども、いづれにもせよ其の結果は見るべきもの尠からず。顧ふに今日は最早彼を識る時代の頂點を經過して、自覺的時代と

なれりとせば、我が國の文物に關する研究の如き、從來の如く固陋自ら許し、狹小なる眼界を以て滿足すべからず。已に彼を識りし眼を以て我と比較し、東西を咀嚼融合して以て其の長短を相補はざるべからず。かれ西洋人の研究の如き、亦必ず參酌の用に供せざるべからざるなり。

西洋人の著書は凡そ左の三項より研究する價値あらん。第一、學術的なること、第二、比較的なること、第三、誤謬多きことこれなり。我が國從來の考證の如きは、幾多の事實を列擧するも、其の間統紀なく頗る錯雜に失せり。事物彌〻繁多なる今日に於ては、羅列的考證のみを以てせば到底其の繁擾に堪へざるべし。可成丈け概括的に秩序的に研究の順序を立てざるべからず。第二には、比較的攻究に非ざれば公平なる論斷を得べからず。固陋狹隘なる井蛙的眼光を以て事物を論證せんは危險の極なり。出來得る限り參酌對照せんことを要す。第三に、西洋人の著書は概して事實上に誤謬多し。何が故に之をしも研究の價値ありといふ。蓋し歐米各國の賴りて以て我が國の事情を知るものは、これら西洋人の著書あるのみ。然るに誤謬其の中に滿載しあらんか、我が國人はいかでか之を馬耳東風に附し去るを得ん。必ず誤謬を指摘し、以て誤り傳へらるゝを辯駁し去らざるべからず。一二月間の旅行に我が國を觀察し去りたるもの、往々無稽の説を構へて我が國を誣ふるが如き、殆ど常事に屬せり。而して未だ何人も其の誤謬を匡正し、失體を救はんとしたるもののあるを聞かず。方今萬國交通の頻繁なる時世にありて、我が國人たるもの何ぞかく自家の評に冷淡なるや。

之を要するに、外人の我が國に關する著書は、價値よりするも、缺點よりするも、ともに我が國人の一顧すべ

きものなり。一方に於ては、他山の石以て我が璞を攻め、一方に於ては、其の誤傳を正して眞相を宇内に明らかにせざるべからず。これ豈に明治時代の國學者の任務にあらずや。

（明治二十八年八月「國學院雜誌」）

神の名と上代の文學と

神代紀に傳へたる諸神の名稱は、單純なる固有名詞にあらず。其の中に含有せる意義は明らかに國民の理想を表彰せるものにして、國民理想の縮密せるもの、それやがて神祇の御名なり。故に其の本義を研究して、我が祖先の理想如何を知らんことは頗る緊要なる事とす。これ諸先哲の早く着目せられたるところにして、敬友木村鷹太郎君の本誌上に於て屢〻其の研究を公にせられたるも亦、讀者の洽く知らるゝ所なるべし。今余が神名に就ていはんと欲するところは、其の意義に關してには非ず。文學上の方面より見ていふのみ。諸神の名の文學的なるをいはんと欲するのみ。

抑々我が上古の文學、卽ち最舊の日本文學は祝詞と歌謠となり。世なほ文字なく、繪畫彫刻等一も見るべきもののなかりし時代にありて、歌謠は頗る發達せる形を以て男女の間に贈答せられ、祝詞は滔々數百言を列ねて神前に誦はれたり。我が國上代の風俗、百事簡易を尙びて、衣服に紋樣なく、住居も黒木立なりしが中に、我が國の

文學は已に幾何の進步を爲し得たりしが如し。おもふに社會全般文化の程度に比しては、文學は一步を進めたる地位にありたるならん。我が國人の言靈の幸はふ國と稱して自ら誇りたるもの、亦之によらずんばあらず。余神代紀を讀みて、每に其の神名の文學趣味に富むを歎賞し、殊に其の上代文學と密接するところあるを感ぜり。謂へらく、上代の文學は亦諸神の名稱中に縮密せられたりと。

本居大人もいはれたるが如く、神の御名はいづれも美稱なり。故に種々の語を加へて之を裝飾す。豐雲野命、豐日別、豐石窓神等は、豐を以て稱へたる名なり。大斗乃辨神、大宜都比賣、大戸日別、大事忍男神等は、大を以て稱へたる名なり。其の他、櫛石窓神、奇稻田姫の如く、奇を以て稱へたるあり。國忍富命、布忍富鳥鳴海神の如く、富を以て稱へたるあり。其の外可美といひ、足といひ、瑞といひ、若といひ、建といひ、各種の美稱を重ね用ひたる例は枚擧に暇あらず。天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇藝命といふが如き、殆ど一首の短歌に近し。又かの國作大己貴命といひ、眞髮觸奇稻田姫といふに至りては、神名に枕詞を用ひたるものにあらずや。塞坐黃泉戸大神の名も亦この類なり。又譬喩を用ひたる例を擧げんか。可美葦牙彥舅命は葦牙の如く成りいでませる神なり。番能邇邇藝命は穗の丹饒の君の義なり。木花開耶姫は妍麗花の如き義なるべく、木花知流姫は美にして早世せしを惜しみしならん。深淵之水夜禮花神の如き、其の例亦甚だ多し。希臘、羅馬等の神話に於ける神名も亦種々の意義を含有せり。然れどもいづれかよく我が國祖神の名の文學的なるに比すべきものあらんや。

神名を列擧するにあたりて、更に注意すべきは、其の名の對句的に用ひられたることなり。天之常立神、國之

常立神、伊邪那岐神、伊邪那美神等をはじめとして、石拆神、根拆神。角杙神、活杙神。白日別、豐日別、建日別。金山彥、金山姬。建布都神、豐布都神。底津綿津見神、中津綿津見神、上津綿津見神。正鹿山津見神、淤縢山津見神、奧山津見神、闇山津見神、志藝山津見神、羽山津見神、原山津見神、戸山津見神の如く、配偶の神、兄弟姉妹の神は、常に同樣なる御名を負はせ給へり。これ人代以後尙行はれたる慣習たりきといへ、又其の文學的趣味の津々たるを覺ゆ。

今神名を以て上代の文學に對照するに、その文學的趣味の由來するところ全く相同じきを見る。例へば對句を見よ。對句といはんよりはむしろ反復ともいふべき同樣なる語句を屢〻重用する方法は、上代の文學に於ては實に裝飾の最大要具たりしなり。かの祝詞に甘菜、辛菜。鰭の廣物、鰭の狹物。奧津藻菜、邊津藻菜。明妙、照妙、和妙、荒妙といへるは、單語を重用せるなり。狹き國は廣く、嶮しき國は平けくといひ、底津磐根の極、下津綱根はふ蟲の禍なく、青雲のたなびくきはみ、天のちたり、とぶ鳥の禍なくといふが如き、語句を重用せるものなり。其の

青海原は棹柁ほさず、船のへのいたりとゞまるきはみ、大海原に舟みちつゞけて、陸よりゆく道は、荷の緒結ひ固めて、磐根木根ふみさくみて、馬の爪の至りとゞまるかぎり

といふが如きは、寧ろ數句にわたりて、意義の上に對句を求めたるなり。かくの如く祝詞は、單語語句等の對句を反復錯綜して、以て其の文の妙をなせり。祝詞の莊重森嚴なる所以は、多く之に原因す。宣命に比して一層詩

的なる所以も亦之に在り。又かの歌謠を見よ。盛に對句を襲用せること亦同じ。八千矛神の歌の如き、後世の作なりとの疑はあれども、三十八句の中、五箇處の對句を用ひたるにあらずや。其の他神武天皇、日本武尊等の御歌等、皆對句、重句を含まざるなし。これ實に奈良朝の歌の基礎をなせるものにして、萬葉集に至りては、對句を用ひざる長歌は見るべからざるに至りぬ。亦以て對句、反覆句の我が上代文學に於ける勢力を見るべし。而してこは早く諸神の名を飾る所以の具たりしなり。

譬喩の方法も亦、祝詞、歌謠の美をなせる一要素なりき。神武天皇の鯨さやるの御歌、みつ／＼し久米の子等の御歌をはじめとして、其の例枚擧に暇あらず。祝詞の譬喩の更に壯大なるは、祝詞の價値を加ふること最も多し。

科戸の風の天の八重雲を吹放つことの如く、朝の御霧、夕の御霧を、朝風夕風の吹掃ふことの如く、大津邊に居る大船を、舳解き放ち、艫解き放ちて、大海原に押放つことの如く、彼方の繁木が本を、燒鎌の敏鎌もて打掃ふことの如く

などといへるを以て、其の一例を知るべし。又かの

白玉の大御白髮坐し、赤玉の御あからび坐し、青玉のみづ江の玉の行相に、明御神と大八洲しろしめす天皇の手長の大御世……

の如く用ひたるは、歌にも

たくづぬのしろきたゞむき、あわゆきのわかやるむね

といひ、

　　こもりづのしたよはへつゝ

など用ひたるに同じく、神名に用ひたる木花開耶姫、可美葦牙彦舅の如き、正にこの方法によれり。

枕詞を用ひたる例にいたりては、祝詞には少けれども歌には頗る多し。

　　いそのかみふるをすぎて、こもまくらたかはしすぎ、ものさはにおほやけすぎ、はるひのかすがをすぎ、

　　つまごもるをさほをすぎ

などを見よ。高光る日の皇子など用ひたるをも枕詞とし見れば、諸神の名は殆ど枕詞ならざるものなしともいひつべし。

之を要するに上代文學を装飾せる修辭的方法は、對句を用ひたること、枕詞を用ひたること、譬喩を用ひたることにて、この三者は實に我が上代文學の價値を作したるものなり。而してこの三者や亦實に神の名をして文學的ならしむる所以たり。この三者を除きては、文學と神の名と皆其の價値を失ふべきのみ。余故に謂へらく、上代の文學は實に諸神の名稱中に縮密せられたるものといふべく、諸神の名稱を擴充したるもの、卽ち上代文學なりといふべしと。

故に余等が古事記等を讀むにあたりて、祝詞を讀むが如く莊重端嚴に覺ゆるものは、啻に其の文の勁健壯大な

るが故にあらず、其の中に現れ來る諸神の名の大いに與りて力ある事を知らざるべからず。幾多の美稱、幾多の譬喩を以て飾られたる神名の反覆して對句的に現れ來ることは、古事記の文に莊重を增し、從ひて文學的價値を上すこと幾何なるかを知らず。若し試にこれらの神名を悉皆除き去りて、之に代ふるに希臘、羅馬諸神の名のツオイス、ウエヌス、ミネルウア等を以てせんか、其の文の價値は正に其の半を減ぜらるべきのみ。

（明治三十一年八月「日本主義」）

國文學にあらはれたる狐

狐は百獸中の最も狡猾姦黠なるものと見做されたること、東西符節を合せたるが如し。伊蘇普物語に見えたる獅子をたばかる話と、戰國策に出でたる虎の威を假る話とは、全く同趣向の寓話なり。この二者果して其の根源を同じうせりや否や。伊蘇普物語は印度に淵源すと聞けども、戰國策の時代は印度との交通表面上尙全く懸絕したれば、若しくは暗合になりしかも知るべからず。東西の人類に同一の擯斥を受け、同樣の性格を附與せられたるも、亦一奇といひつべし。狐は人を見れば躊躇逡巡容易くは奔げず。奔ぐるに際りてもふりかへり〳〵敵を諦視する擧動、一見して其の性質の猜疑深きを想はしむ。加ふるに深更竊に來りて家鷄を奪ひ去るなどの惡行は、

人をして之を嫌悪せしむる一因たらんか。英語の to fox は字書に to steal or cheat と訓ぜり。其の他 foxy, fox-like, foxish 等の形容詞、foxiness, foxship 等の名詞あり。いづれも狡猾、姦詐、猜疑、諂媚等の意に用ひらる。獨語亦同じ。fuchsicht, fuchsig 等の形容詞は fox-like に相當す。fuchsen は惱ます、戲弄する等の義を示す動詞なり。其の他一々擧ぐるに暇あらず。漢語に狐疑の語ある亦頗古し。國語に於ては物を隱しおく戶を狐戶といひ、空にそれたる流矢を狐矢といふ。狐の松原、狐の森は蜃氣樓の義として用ふ。野に燃ゆる陰火を狐火といふは、英語にも fox-fire の稱あり。日照りて雨降るを狐の嫁入といふは、英語にも陰晴の定まらぬを fox weather といふ。野草に狐のかみそり、狐のからかさ、狐のちゝ、狐のからし、狐のしやくぢやう、狐のぼたん、狐花、狐豆、狐薊、狐の茶袋等あるは、英にも fox-glove, fox-grape, fox-tail などあり。いづれも狐の性格より連想し來れる名稱にして、稍奇怪不思議の感あるものは、皆名づくるに狐を以てす。彼に fox & geese の遊あれば、われに狐拳の戲あり。野獸にして最も人類に接近し、最も人類に通俗なるは實に狐に過ぎたるは無し。

狐に負するに黠智、便佞、猜疑、姦譎等のあらゆる惡性格を以てしたるは東西相等しといへども、狐の變化して妖怪をなすといふは、東洋の特色にあらざるか。余深く西洋の習俗、文學を知らずといへども、狐に神變不測の力あり、萬物の靈長たる人類を誑かすといふが如きは、歐人の思想に存在せざるが如し。余未だ彼の國に狐つかひと稱するものあるを聞かず。又狐つきといふ病名あることを知らず。狐の邪淫にして人と交接することを欲すといふが如き說話は、彼の國の文學中に絕無なるべしと信ず。果して然らば東洋人の狐を憎み狐を怖るゝや西

洋人よりも甚しく、日本、支那の狐は歐羅巴の狐よりも靈妙奇怪の能力あるものといふべし。こゝに一問あり、日本人の狐に關する迷想は、これ我が國特有の發達なりや、又は支那より傳來せるものなりやといふ問題なり。余は疑もなく、こは支那傳來の迷想なりと斷言せんとす。

支那人の狐を見る、禮記に「狐死正丘首仁也」といへるは、君子に比べて其の本を忘れざるを稱へたるなり。說文に「狐有三德其色中和、小前大後死則丘首」といひ、孝經援神契の「德至鳥獸則狐九尾」といふが如き、強ちに之を嫌惡せざりしのみか、白狐、黑狐、九尾狐等の出づるはむしろ祥瑞なりと思惟せり。易に「小狐汔濟濡其尾」とあるは、其の怯懦なるを云へるなり。社鼠城狐も狐そのものの性格を憎みたるにはあらじ。但し說文に「狐妖獸也鬼所乘也」といへるは既に東洋的の性格を附與したり。抱朴子「玉策記曰、狐及狸狼皆壽八百歲、滿三百歲變爲人形」とあり、晉郭澄之が元中記に「狐五十歲能變化爲婦人、百歲爲美女、爲神巫或爲丈夫、與女人交接、能知千里外事、善蠱魅、使人迷惑失智、千歲卽與天通、爲天狐」とあり、又「狐者古先之淫婦其名紫、紫化而爲狐、故其姓自稱阿紫」(名山記)「野狐名紫、夜擊尾出火、將爲怪、必戴髑髏、拜北斗、髑髏不墜則化爲人矣」(酉陽雜俎)といへるが如き、皆妖狐變化の怪力あるをいふものにて、支那に發達せる特有の迷信たるが如し。事實の上に於ても之を證すべきもの尠からず。搜神記に後漢の建安中、沛國郡の陳羨といふもの、正海都尉たりしに、其の部曲の王靈孝といふもの、忽然として見えず。これ必ず妖狐の仕業なりとて、獵犬を放ちて城外を狩りたてしかば、果して靈孝を古穴中に得つ。之に問へば「一美婦誘ふがまに〳〵伴はれゆきて、歡樂其の比なか

りき」といふ。晉天福中、公安滄渚民家の犬、一婦の木に登れるを追ひ落して、咬むを見れば變じて老狐となる。尾の長七八尺なりといふ。宋高僧傳に河朔の人釋志淵の降州に到れる夜、狐妖を見たる事を記す。其の夜月色晝の如し。一狐あり林下より出で髑髏を首に置きてふり搖かし、落ちたるものは顧みず、落ちざるものを戴き、更に芳草落葉を取りて其の身を蔽ひ、俄に一美女となる。道の傍に佇みて車馬の聲を聞けば哀泣せり。やゝありて馬に乘れる一人の男、來りて之と語り、憐みて伴ひ行かんとす。志淵林間より出で、狐なりと告ぐれども信ぜず。よりて錫杖を擧げて咒文を唱ふるに、忽ち狐に化して飛び去れりといふ。其の他後魏楊衒之の洛陽伽藍記に狐の變じて婦人となりて衣服靚妝して行くを、近づけば忽ち頭髪を截りたる話あり（侯鯖一臠）。白樂天の古塚狐詩に曰く、「古塚狐妖且老、化爲婦人顏色好、頭變雲鬟面變妝、大尾曳作長紅裳、徐々行傍荒村路、日欲暮時人靜處、或歌或舞或悲啼、翠眉不擧花顏低、忽然一笑千萬態、見者十人八九迷、假色迷人猶若是、眞色迷人應過此」と。續古事談に曰く、「白樂天ノ遺文ノ文集ニ入ラザルアリ、ソノ中に任子行トイフモノアリ。カノ文ニハ、狐ノ女人トナリテ男ニアヒタリケルヲ、カノ男深ク愛念シテ暫クモ離レジトシケル程ニ、狩場ヘ出ヅルトテ馬ノ前ニ乘セテケリ。ヨキ犬ヲ具シタリケルガ、コノ女ノ狐ナル事ヲ知リテ、飛上リテ咋ヒ落シテケリ。ソノ事ヲ作リタル文ナリ云々」といへり。いづれもこの種の迷信を謳へるものなり。狐の人に化するは大抵は女子に化すれども、元中記にいへる如く、丈夫に化する事亦尠からず。老狐の美少男子と化して張華に詣りて講說せる話あり。董仲舒の許に經說を聞きし話あり。又岡の上に穽を設けて女人を陷れ、悉く之を奸せし惡狐あり。一卷の簿書には、犯さ

れたる女子の名數千百名を記したりといへり。是等の傳說一々擧ぐるに勝へず。支那人の狐は邪淫にして殘忍なることかくの如し。

本朝上代の思想は極めてやさしく極めてうつくし。かゝる殘忍暴戾なる事かつて無し。腰に下げたりし玉の化して女子となり、藤の花の化して男子となりしはあり。神の形を變へ給ふは多くは鳥なり。八咫烏、金鵄、日本武尊の白鳥陵など思ひ合すべし。大三輪の神は蛇となりて女子に通ひ給ひ、足柄山の神は白き鹿となり、膽吹山の神は白き猪となり給へり。神話の中に因幡の白兎やゝ狡猾なるものとして寫されたれども、狐狸の人を誑す事は一も見當らず。風土記の中に狐ありとは其の名のみ見えたり。支那文化の輸入漸く盛なる頃よりして、この魔物も亦次第に我が國民の淸淨なる精神界を蠱惑せり。日本紀推古天皇三十五年春二月「陸奧國有狢化人以歌之」とあるは禽獸變恠の始なるべし。支那思想の浸染すると共に佛敎の奇怪不可思議なる傳說は亦我が國民の心を動かしけん、欽明以後祥瑞を貴び怪力を語ること世を逐うていよ〳〵多し。齊明天皇紀三年「石見國言白狐見」、續日本紀元明天皇靈龜元年「遠江國獻白狐」、元正天皇養老五年「甲斐國獻白狐」、聖武天皇天平十二年「飛驒國獻白狐」等と見えたるは、例の支那流に白狐を以て祥瑞と見做されたればなるべし。雲雨氣候の變にも天意ありとし、四足の鷄、十二角の犢も體祥なりと思惟する時代、この時代は正に我が國思想界大變遷の時期に相當れり。狐の事の日本紀に見えたるは齊明紀五年「是歲命出雲國造修嚴神之宮、狐嚙斷於友郡役丁所執葛末而去」とあり、注に「天子崩兆」といへり。注は集解に私記の攙入なりといへり。舒明天皇紀九年二月「大星從東流西、便有音似雷、

時人曰流星之音、亦曰地雷、於是僧旻曰、非流星、是天狗也、其吠聲似雷耳」天狗はアマツキツネと訓じたれども、これはた後世私記の訓讀なるべきか。續紀に入りては、狐の怪をなす事已に多し。聖武天皇天平十三年「難波宮鎭恠、庭中有狐頭斷絕而無其身、但毛屎等散落頭傍」これ犬に喰はれたるにてもあるべし。かゝる事いつかは無からん。之を國史中に記するに至れるは、正に狐を靈怪と見做すに至れるを知るべし。光仁天皇の寶龜三年「有野狐踞于大安寺講堂之甍」寶龜六年五月「有野狐居于大納言藤原朝臣魚名朝座」同八月「有野狐踞于閤門」天長十年「有狐走入內裏、到淸涼殿下、近衞等打殺之」嘉祥二年「狐入內裏、犬逐出、自月華門逃、昇南殿上、遂爲犬所噬」余が大學豫備門に在學中、一ツ橋の寄宿舍床下にも一匹の狐ありき。狐の人家近く住むは珍しき事にあらず。これ皆支那思想におぢ畏れたる證據なり。釋景戒が作れりといふ日本靈異記には、早くも狐の女子に化せし事を記せり。同書に「狐爲妻令生子緣」として記せるは、欽明天皇御世、三野國大野郡人妻を覓めて廣野中に一美女に逢ひ、夫婦となりて住み一男子を擧げたり。或時妻、稻舂女の食を給せんとて碓屋に入りしに、家犬追ひ來りて離れず、妻驚き恐れて遂に本體をあらはし、籬の上に飛上る。夫之を見て「已に子を生める間なり、每夜倘來りて寢ぬべし」といひければ、妻每に來て寢ねたり。之よりキツネと書けり。キツネの語原をいひつるも笑ふべし。これ當時支那に行はれたる話を其の儘に、欽明天皇の時代として多少の古色を帶びさせたるものなるべし。邪淫なる狐の迷信は玆に至りてはじめて我が國にあらはれたり。狐の人につく話も同書に初めて見えたり。永興禪師の紀州牟婁にありて病者を醫せし時、病者自らいふ、「我は狐なり。この人我を殺すによりて、今つきて殺

すぞ」といひて、禪師の教誨を聞かず、遂に殺し了せたりとあり。これ卽ち狐憑病なり。この迷信一旦奈良朝に萌して、平安朝に至りては牢として拔くべからず。奈良朝の和歌を集めたる萬葉集には、第十六の卷に長忌寸意吉麿の歌八首の中、一つに「さしなべに湯わかせこどもいちひつの檜橋よりこむきつにあむさむ」とあり。狐の狡猾なるものと見做されたるは知るべけれども、其の他にはみえず。伊勢物語に陸奥なる女のきぬ〴〵の別ををしむとてよめる歌に「夜もあけばきつにはめなむくだかけのまだきになきてせなをやりつる」とあるきつには、異說多きが、狐と見んを正しとすべきか。總じて和歌は花鳥風月の雅興を吟詠するを以て、野干との緣は自らうすし。

妖怪變化の說が平安朝に於て如何に其の勢力を逞うせしかは、日本靈異記の系統を引きたりと思はるゝ今昔物語に於て證明するに足るべし。同書二十七卷に、近衞の舍人播磨の安高といふもの、夜更けて宴の松原を過ぎ、一人の美女に逢ひ、怪しみて之を刺さんとせしに、忽ち生體をあらはして逃げゆきし話あり。又京なる雜色男の妻を待ちわびたる夕暮、姿かたち少しもかはらぬ二人の妻かへり來りしを、一人は狐ならんと信じながら、いづれとも定めかねて當惑せし話を載せたり。紀海音が殺生石の淨瑠璃に、二人の中宮いで來し事を作れるは、全くこの話に本づきたるが如し。竹田出雲の義經千本櫻は謠曲の二人靜を骨子とせるものなれども、二人の忠信を出ししは海音の脚色を襲ひしならん。高陽川のほとりの狐、女の童になりて馬の尻に乘るを、或瀧口の捕へんとて、一度はかへりて狐に欺かれ、遂には之を捕へおほせし話も見ゆ。「狐を馬に乘せる」などいふ俚諺も本づくとこ

ろなしといふべからず。又或男の、狐につかれたる女の白き手玉を弄ぶを見て、其の玉を奪ひしかば、狐大いに歎きて「其の玉だに返し賜はらばいつ迄も守護せん」といふ。男其の言を容れて之を返ししに、後果して狐の保護によりて危難を免れたりといふ。妖狐も亦報恩の德義心ありと見做されたり。以上は皆女人に化けたるものなり。同巻に春日の宮司某、大夫と二人馬の食を求めんとて山に入り、思ひかけぬ杉の大木を見、怪しみて矢を射かけしに、翌日見れば老狐の杉の葉をくはへて倒れ臥したりといふ話あり。源賴光が美濃守たりし時、渡といふ處に產女(うぶめ)ありて眞夜中頃道行人を止めて子を抱けと迫る由聞きて、季武一人出向ひて其の兒を奪ひ還りしが、子と思ひしは木の葉なりきと書けり。季武程の武勇も、うま〳〵と騙されたりと見ゆ。同二十六巻に、利仁將軍京より敦賀に赴かんとする途にて狐を捕へ、「汝今夜の中に利仁が敦賀の家に行きて、明日客人具して下る由告知らせよ」とて放ちしに、其の夜果して使命を完うしたる由記したるは、將軍が武威の盛なりしを知るべし。同書二十五巻に三條院が春宮にておはせし時、賴光春宮大進にて狐を射たる事を載せ、古今著聞集には源義家が狐を射て左右の耳の間をすりざまに射たるに、箭もたゝぬに狐の倒れたることをしるせり。狐の妖獸と思惟せられたるより、狐を射止むることは武人の名譽と見做されたるなるべし。今昔物語には倚天井より希有の顏あらはれたるを狐の所爲なりといひ、同じ道を幾回も廻りたるをも狐の所作なりと傳へ、狐の人の形に變ずることは昔より常の事なりと斷言せり。この時代國史に狐の事を記せるはいよ〳〵多し。續紀、續後紀、三代實錄等、狐の內裏近傍に出沒せしこと、死體ありしこと、遺屎放溺せし事一々記載して漏さず。之を視ること實に天變地異と同一な

り。中には「狐耆見」と不思議らしく書きたるもあり。野干は夜いづるものなりと定めおきたるなり。耆狐などいふ俚言おもひ合すべし。扶桑略記には、相應和尙傳に仁和四年六條皇后の狐の爲に御惱あることを記し、著聞集には承平の頃數百の狐東大寺の大佛を禮拜せしことを記す。其の他擧ぐるに暇あらず。

狐を以て神異の獸類となすに及びて、いつしか之を神として祭る事始まれり。山城國稻荷山に鎭座します稻荷神社は、倉稻魂命、素戔嗚尊、大市姬命を祀れる社にして古來五穀の神として尊崇篤かりき。然るに倉稻魂亦名專女(たうめ)三狐神(みけつ)とあるより、狐を其の使者なりとし、後には印度にていふ荼吉尼をも交へて稻荷神をも狐なりと誤想するに至れり。この誤想は後世に至りて彌〻甚し。荼吉尼の邪法は、文德實錄に藤原高房朝臣の所刑せし妖巫卽ちそれ也と云ひて、由來の久しきを知るべし。守覺法親王の拾葉集に荼吉尼を以て稻荷神使なりといはれしを見れば、稻荷神狐の迷想亦頗る舊し。續古事談に「古へ野干ヲ神ノ體トナシタル社ノホトリニテ狐ヲ射タルモノアリケリ。ソノ者咎アリナシノ事、陣ノ定ニ及ビテ諸卿サマ〴〵ニ申シケル中ニ、帥大納言經信卿申テ云、白龍之魚勢懸預諸之密網トバカリウチ云テ居ラレタリケリ。イミジキ神ナリトテモ狐ノ姿ニテ走リ出デタランヲ射タランハ何ノ咎アラムトイフ心ナリ」と見えたるを以て、かゝる淫祠の當時に存在して狐の神と思惟せられしこと思量せらる。それかあらぬか後三條天皇の延久四年藤原仲季の土佐に配せられしは狐を射殺したる罪により、高倉天皇の治承二年源競の罰せられしも亦、白專女を射殺したるが故なり。安倍晴明は陰陽道の名人として、式神を使ひたる事など、大鏡を見ても知られたり。其の術の神祕なるよりして、狐の子なりとの說いつの頃よりか言ひ

出しけん。簠簋抄といふものに「晴明が母は化來の人なり。遊女往來のものとなり給ふを、猫島にてある人に留められ、三年滯留ある間に、今の晴明誕生あり。既に童子三歳の暮、歌一首をつらね給うて曰く、戀しくは尋ね來て見よ和泉なる信田の杜のうらみ葛の葉とよみ給ひて、かきけす樣に失せにけり。晴明上洛の砌、まづ母の詠み置きし歌を如何にと思ひ和泉國へ尋ね行き、信田の森を尋入りてみれば、祉壇これあり。伏拜みて母の樣子を祈請すれば、古老經たる狐一匹、わが前に出で來り、我こそ汝が母なれというて失せにけり云々」曲亭馬琴は燕石雜志に之を引きて其の妄を辨じ、この說は全く水鏡の話によりて設けたるものとし、「戀しくは」の歌は著聞集に和泉國なる尼が相傳の所領を人に押領せられしを賴朝に訴へし歌に本づきたるものなりといへり。馬琴がいふ水鏡の話とは前に擧げたる靈異記の三野國某の妻の事にて、こは水鏡の作者が靈異記より引用したる事明らけし。但し靈異記と同樣の話は、扶桑略記に引ける善家祕記にも出でたれば、狐の人に嫁して子を產みたる話は强ちに靈異記（若しくは水鏡）より作り設けたりとは云ふべからず。善家祕記には、寛平五年賀陽良藤と云ふ者妻に棄てられ懊惱の餘、女と通接せんことを念ひしに、或時一美女に逢ひ、心情搖蕩遂に之と同棲し、意愛纒密一男兒を生みて、鍾愛すること甚しく、長男を廢して其の兒を以て嫡子となさんとおもふ。會〻優婆塞あり、杖を持して其の背を突きしかば忽然大悟したりとあり。その優婆塞は觀音なりといへり。捜神記の王靈孝の話と同一體のものにして、子を生みたるは靈異記のに同じ。亦以て同樣なる傳說の人を替へ處をかへて行はれたるを知るべし。簠簋抄の誕妄なるは馬琴のいふ如くにして、晴明に關する傳說は大體に於て後代のものなるべけれども、其の陰

陽道を不思議視する餘、狐の子なりきといふ疑念は平安朝に起因せざりしとも限らず。この傳說の淨瑠璃に採られたるは人のよく知るところなり。

續本朝文粹卷十一に、大江匡房の狐媚記あり。「康和三年洛陽大有狐媚之妖、其異非一」といひて、朱雀門前に馬通牛骨の狐大饗ありしことをしるし、又律師增珍が一老嫗の請を容れて、六條朱雀大路の法會に赴き、心神迷惑して半途遁れ去りしことを擧げ、其の他尙一二の怪談を述べ、「今於我朝正見其妖、雖及季葉怪異如古、偉哉」といへり。增珍律師のは儲くる所の饌皆糞穢の類にして、金銀絲絹と見しは、弊鞋舊履瓦礫骨角なりと云へり。今の俗にいふ狐につまゝれたる話と全く其の趣を同じくせり。敬友萩野由之君の所藏なる狐の草子といふ御伽草子めくものに、ある僧都の女房と戲れたるを記し、忽然として醒め來るに、家の內を見渡せば金剛聖院の大床の下なり。御簾や疊とおもひしは、むしろ、こもきれなり。琵琶琴と思ひしは、馬牛の骨なり。半挿、盥色々の調度と見えつるは、くらつぼのわれ、されかうべなりといへる、全く之に本づきしものなるべし。こゝに至りては高僧の法力も遂に一狐の妖術に敵する能はざる事となれり。この話の最後に、地藏尊の僧都を呼覺し給へりといふは、善家祕記の話を加味したるものならん。增珍の話は奧義抄にも取られ、袋草紙にも見えたり。此等の歌書が鎌倉以後非常に珍重せられしは言を待たざれば、足利時代に入りて狐の草子の材料となりしも必然といふべし。今日に至る迄狐に魅せらるゝといへば、常に同樣なる趣を具へたるも亦由緣なきにあらず。

（明治三十三年二月、五月「帝國文學」）

言語の戲

國語には元來子音（コンソナント）の數が少い。又大抵は母音に伴うて居つて、單獨に現れて居る子音は誠に稀である。今日は尙多少獨立の子音が認められるが、昔はいはゆる五十音（イツラ）の呼聲で、一切の發音が網羅されたらしい。さてその五十音の呼聲は、いづれもそれ〴〵の意義、たとへばか（蚊）、き（木）、け（毛）、こ（子）、す（酢）、せ（瀨）、そ（苧）の樣に單純な一箇の熟語が、立派に一つの概念語を形づくつて居る。疑問、感動のか、形容詞語尾のさ、過去助動詞のき、し等を考に入れゝば、尙更の事、その上に漢語が加はつて、可、奇、苦、古、差、四、世、鹿などもある譯で、五十音いづれも同樣の次第、隨つていはゆる同音語（ホモニム）といふものの澤山ある事は日本語に越したものはなからう。鼻と端、箸と橋などは、同一の語根から出たのであらうが、柹、垣、牡蠣などは偶然の同音語であらう。漢語の日本化せられた音は、殊に數が少いから、漢文を朗讀しても聽くだけでは分らぬ。目で見なければならぬ。又全くの同音語でなくとも、同一の母音を有したり、半分位が同音であつたりする位に類似の音をなす場合、ハラ（腹）、サラ（皿）などは亦もとより澤山ある。

この同音、類音を有する語の多いといふことが、二つの結果となつて現れた。一つは國民の迷信と結付いた。

一つは遊戲の爲に用ひられた。前者は國民の宗敎心にも關係して、一般社會制度の上にも影響して來たが、後者は殊に國文學の上に大關係を及ぼして來た。兩方の場合、いづれも國民精神の表彰されたもので、なか／＼面白い。前者の例といふのは、シといふ音を嫌つてヨといふ類である。消防組をイロハで分けた時、ヘ組に當るものが不平を言うたといふ話がある。世の中に御幣を擔ぐといふことがあるが、これが今いふ言語の同音語に原由することが極めて多い。これは實に日本特殊の風で、國語の性質に大關係のあることである。正月の儀式にユヅリハ（譲の義）、橙（代々の義）などを飾るのも、數の子、ゴマメ、ニマメなどを食べるのも、又婚姻の式にカヘル、モドルといふ語を忌むのも皆同一の意思から出て居る。結納の目錄に子産婦、家内喜多留、壽留女抔と書くのは、文字の上に强ひてめでたい同音の字をあて嵌めたものである。酉の町の大繁昌も、取るといふ意義で、商家にては去ルを厭つて猿樂（エテガク）町といひ、スルを嫌つてアタリ箱といふが如き、皆緣起を嫌ふから起つたものである。柿本人丸の社が火除の神、安產の神となつて居るのは、ヒトマルを火止る、人生るの意味に取つたからである。か樣な例は誠に澤山あつて、冠婚葬祭の儀式を始として、一般に影響して居る事も尠くない。人の名を命ずる時にもなるべく宜い名を選ぶといふ事もあつて、卽ち固有名詞にも影響して居る。木で作つた佛像に靈があると信ずると同樣、言語に一種の魔力があるかの如く信じて、善い名には吉事が伴ひ、惡い名には禍が伴ふと思惟する。これは上古からの風であつて、日本紀、古事記、風土記などに地名、人名などを解釋するに、いつもこんな風な解釋をして居る。言語の迷信と結付くといふ方面は大略こんな事である。之をよく調べると、なか／＼面白から

うとおもふ。今日は國文學に大關係あるといつた第二のもの卽ち遊戲の爲に用ひる方面だけに就いて話さう。

この同音語が文學の上に利用されたことも上古からの事で、之は

(一)枕詞といふものの上に現れて居る。枕詞の中には色々の種類があつて、島つ鳥鵜、ぬつ鳥雉などの様に、單に同格語(アッポジション)を示す様なものもあり、又烏羽玉の黑、刈薦のみだれなどの様に、形容の意味に用ひたのもあるが、最も面白いのは二つの語をかけたもの、

○水たまる、池田の朝臣　○玉くしげ、二子(蓋)の山　○淺茅生の、つばら〳〵になどいふものである。いづれも同音の語を利用したものである。最後のは全く同音で無いのが亦面白い。こんな種類の枕詞は、日本紀、古事記の歌の中にも已に多く、萬葉に至つては更に多い。歌には近世迄も多く用ひる事は人の知つて居る通り。祝詞や宣命などの古文には用ひぬが、擬古文には文章中にも隨分用ひてある。この枕詞と同性質で廣く用ひられたものが、

(二)かけことば(兼句)である。之は三代集の歌には已に澤山あつて、かの竹取物語の全篇の洒落は皆この兼句に本づいて居る。(呉竹のよゝの竹取野山にもさやはわびしきふしをのみ見し)謠曲などの文章は、之が爲に餘程の美を增して居る。「鶯の鳴けども雪はふるき枝の」などと歌ひ、「三つの車に法の道、すはや火宅の門を今ぞ和泉式部」などと澤山の兼句に文の妙をなして居る。秀句といふのもつまりこれである。淨瑠璃の文章は謠曲から脫化した處が多いから、亦もとより多い。貝盡し、花盡しなど皆この類である。又太平記俊基朝臣の東下りなど

海道の驛名をかけた處、人口に膾炙したものである。馬琴の賴豪阿闍梨怪鼠傳に、

いぬる正月二十一日、敵に端なく近江なる、比叡山おろし寒けきに、比良の雪さへ深けれど、淺くも石田に計られて、射かくる矢走石山の、かたきは大軍、身方は小勢、逃れ堅田に落つる雁の、落ち殘つたる五百餘騎、われ唐崎にと打死し、果は兼平唯一騎、瀨田の入日に暮れそめて、無常を三井の鐘の聲、世に聞えたる名將も、時に粟津の夢の跡

などあるを見ても、兼句が如何に國文學に大切な修辭上の話色であるかといふ事が分る。

これが俗語に用ひられて滑稽を主とする樣になれば卽ち

(三)洒落　である。之に就いては十二三年前に土子金四郎氏の洒落哲學といふものがあつて色々分類して調べられた。「恥をかきつばた」「恐れ入谷の鬼子母神」などの類である。狂歌等には之を用ひて滑稽とした事が最も多い。

足ることをしる鍋一つ埒のあく庵は富貴自在かぎなり

垣一重東隣の梅の花匂はこちのものにぞありける

江戸言葉聞くにつけても故鄕のおや〳〵〳〵ぞ戀しかりける

狂歌者は戲名から紀定丸、蔦唐丸、智惠内子などやはり洒落である。狂文の類にもともとよりこの洒落を用ひる事が多い。疫拂の文句といふ樣なものに至つては全くかけ詞の洒落である。要するに上古の枕詞から近世の洒落に至る迄、皆かの同音語を利用した言語（ウォルトスピール）上の戲であつて、之は實に國文學の修辭上に大關係のあるもの、實に大

切な修飾法になつて居る。若し一切之を棄ててしまへば、國文學は餘程寂しくなるのである。こゝに又我が國ではまだ文學の一種とは見做されぬが、西洋では文學の一種として取扱つて居る

(四)謎　といふものがある。之は誰も知つてゐる如く、「燭臺とかけて何と說く――喧嘩の仲人と說く――心は明りを立てる」「破れ障子――くれの鶯――春（張）を待つ」「若い婆さん――野馬――馬子（孫）はあるまい」など今は三段に問者、答者の應對する樣に出來て居るが、やはり同音語の利用である。謎といふものは其の起源はなか／＼古いもので、殆ど神話時代からあると西洋の學者は說いて居るが、日本では拾遺集、枕草紙等に見えたのが最も古いらしい。もつと古いのが傳はらぬのは惜しいことである。勿論謎には色々種類があつて、「四方白壁、中チョロ／＼」(行燈)、「六角堂に小僧一人」(酸漿)なども之に屬するが、方今行はれる謎の大部分は同音語を利用したものである。尤も是は西洋にもある。謎が已に問答體であるが、三段ではなくて、二段の問答で少し性質の變つたもので、

(五)問答　といふ變なものがある。「一羽をには鳥とは如何に」と問へば、「一羽で千鳥といふが如し」と答へ、「勘當をキウリキルといふは如何に」といへば、「親を大切にするをカウ／＼といふが如し」といふ類で、大抵類似な物を以て答へるものであるが、やはり同音語を利用して問答が成立つのである。この種類にもなか／＼面白いのがある。次に又謎の一種で、

(六)考物　といふものもある。これも近頃新聞雜誌などで募集して居るから、誰も御存じであらう。三段な事は謎

の様であるが、其の說くべきものが、大工道具名一つとか、國名二つとかいふ鹽梅に、かねて知らせてあるに拘らず、謎よりも込入つた掛け方が多いので、普通の謎よりもむづかしい。考物といふ名の通り、餘程考へる事が必要である。手近な處で少年界第一卷第二號から一例、

(問)甲が貴君の國は何處ですかと乙に問ひますと、乙は蟲の名二つにて答へました。

(答)蚊、蜂(河内)

(問)暴行の悴家へは寄せつけず、勝手道具二つ。

(答)鎌、椀(構はん)

(問)學校道具、横に讀むと國名となるものあり。

(答)硯(石見)

以上は同音語を利用したものであるが、次に類音を利用したものには、

(七)地口口合といふものがある。これも近頃新聞などに見える。古い例は、

○旅は道づれ世は情――足袋は引パリ茱は畠　○お前百迄わしや九十九迄――慈姑百迄梨九十九迄　○天道人を殺さず――年頭人轉ばず　○渡邊の綱――赤鍋の鮒

などの類である。地口行燈などの地口は卽ち是である。これは卑俗なもの、滑稽なものであるが、元來同形を求める修辭上の話色、卽ち對句といふもの抔には、この地口の主義によることが多いのである。之を修辭學上では

Paronomasie といつて、西洋の詩人も用ひて居る。

地口の主義を狂歌に應用して滑稽にするのは、例へば百人一首の歌を、

　　さびしさに庭の栗の木眺むればいづこも同じ柿の夕ぐれ

　賣るからに秋の慈姑の安ければむべ山ばかり二十八文

といふ類である。これも西洋に隨分あつて、滑稽雜誌にシルラーやゲーテの樣な大詩人の眞面目な詩を、まるで諧謔的のものにしてしまつて居る。以上の謎や問答や地口の材料を使つて、又

(八)一口噺、落し噺　を作ることが多い。

「大きな瓶を貰つたから今夜の婚姻はこれですまさう。「ナゼ。「たうらい（蓬萊）の龜だから。

「ふとん着て寢たる姿や東山そんな大きな蒲團があるか。「ヘイ一國にも素襖（周防）。

といふのがある。落し噺には長いのも隨分ある。

以上つまらぬ長談義も、考へて見ればなか〳〵趣味のあることであつて、即ち國民が如何程迄言語を弄んだかといふことが分る。國語中に同音語、類音語の多いことを利用して、上は上代の枕詞から、下は近代の落し噺に至る迄、或は眞面目に、或は諧謔に、我等歷代の祖先も今日の我等も、之を詩歌とし、之を遊戲として精神上の娛樂を作つて居つたといふことは、見方によつては誠に面白い事である。西洋にはこれが極めて少いのである。又均しく同音語でありながら、一方には單に諧謔に供せられ、一方には迷信に附屬して社會の制度儀式にまで影

響したことも亦甚だ面白い現象と言つてよからう。社會的文學的興味——國民の心生活を研究する上に於ても、實は大切な事である。言語の戯に關聯して、文學上の戯文字鎖、折句の類も研究する價値はあらう。

（明治三十六年一月「文藝界」）

獨逸の單級學校を見た記

私は伯林に一年半ばかり居りましたが、遂に小學校を參觀する機會を得ませんでした。中學校以上の學校は、文部大臣の許可狀が無ければ見せぬので、其の方はかへつて許可狀を貰つて、あちらこちら見ましたが、小學の方は市役所の許可だけで見せるから、いつでも見られるといふ考で、且は私の專門には遠い樣にも考へて、强ひて見にゆく必要もなからうと存じ、其の儘になつて、とう／＼何も見ずに終りました。今日から考へれば、殘念にも存じます。何か小學校についての見聞をといふ御依賴ですから、暑中休暇中に見た片田舍の單級學校に就いて一寸お話しませう。

一昨年の八月、伯林で馬糞臭い夏を送るのもつまらぬ、どこか廉い處で、涼しい處で、勉强の出來る樣な田舍は無いか。獨逸の田舍生活を見るのも一興だと考へて、友人に相談した處、其の友人の友で大學生が今年歸省す

る、そこへ行つてはどうだ、食料等は伯林の下宿屋同樣で一切何もかも賄ふとの話。それではその事にしようと、マグデブルグから四五里はいつた片田舍に、避暑として出かけた。田舍となれば歐羅巴の眞中でも、人間は餘程質朴で、到着の第一に驚いたのは、村中の人が、知るも知らぬも途中で逢へば脫帽して禮をした事である。こゝに三週間ばかり滯在して、色々村人に近附にもなり、樣々面白い見聞もしたので、伯林の忙しい生活とは、うつて變つて、種々の方面に利益を得たと信じて居る。それ等の餘談はさておいて、この村に滯在中、一日參觀に行つた學校の話をしよう。私の滯在した村は、戶數はわづか百戶ばかり。至つての寒村ではあるが、アルカリ鹽採掘の工場があつて、職工が大勢居るから多少賑つて居る。先づ村中の目立つた人々は、牧師、學校敎師、小林區署の役人等であつた。これらの人々は勿論、郵便脚夫までも近附になつたが、ある日牧師が宿の主人を尋ねて來た時、學校の話になり、「どうせ日の永いのに閑でもあるし、學校を見せてくれないか」といふと、牧師は大いに喜んで、「私が案內するから是非見て行つてくれ」と言つた。御存じの通り、牧師は卽ち視學であるから、この村の牧師は近傍二三ケ村の學校を監督して居るのである。私の滯在した村の學校は普請中だから、隣村のを見ようといふので、翌日早く牧師の家に出掛けた。外面は汚いが、內部はなか〳〵立派に飾付のある客間に案內せられて、半時間ばかり雜談をして、さて學校へ出掛けた。豚小屋の前やら、人の家の納屋の裏など、曲り曲つた藁などの散かつてある細道を通つて學校についた。視學の事であるから、牧師は案內もせずにずつと通る。赤い煉瓦の平家作りで、右の方半分は學校で、左の方が敎師の住所である。入口からはいつて戶をあけると、髯の長い

痩形の背の高い五十歳前後の教師が牧師を見て一揖した。牧師が私を紹介して、私が其の挨拶をして居る內、生徒等の中にはクス／＼笑ふものもあつた。やがて教師は生徒に向つて、「これは日本東京から伯林へ留學に來られたお方だ」と話して、生徒に敬禮させた。生徒の數は三十四五人も居つたと思ふが、よくは記憶せぬ。著しい事と思つたのは、女が其の三分の二を占めて、男は三分の一位しか居らぬ事であつた。成程獨逸では女の數が多いなと合點した。授業を見て居る。左の方ではやうやくアー、ベー、チエーの字を書き習つて居るものがある。中間のものは簡單な十以下の計算をやつて居つた。右側に居るものは稍進んだ生徒で、第三讀本の一章を讀んで居るらしい。教師は特に私の爲に書取を書かせたり、數學をさせたり、讀本を讀ませたり、色々やらせて見たが、其のあとで私に「あなたの姓名を、日本字と羅馬字とで書いて見せてくれ」と賴んだ。そこで私は木板の上に、平假名、片假名と、獨逸字とで書いて見せた。教師は一同に之を寫し取れと命じた。大きな生徒はすぐ書取つたが、小さいのはなか／＼書取れぬ。うまく出來ぬと言つて、ワーワーツと笑つて居る。教師は、「これは先生にも出來ぬから無理は無い」と笑ひながら言つて居る。やがて其の机の脇から一幅の萬國地圖を取出した。大陸の名を二つ三つ聞いたあとで、蒙古人種の事を聞いて、「蒙古人種の標本になるのは何國人だ」と問うた。生徒の中で一番丈の高い女の子が、「それは支那人だ」と答へた。教師はその時支那の膠州灣を指して、「こゝは何處だ」と問うた。「それは膠州（キヤウチヤウ）で、獨逸の借地だ」と答へた。膠州灣は借地とはいふ條、殆ど獨逸の領分の樣に、坊間の繪圖などには染めてあるが、借地だと答へたには、私も一寸意外に感じた。私はまだ日本の單級學校の有樣を知ら

ぬから、比較は出來ぬが、教場の裝置其の他にも別に珍しいと思ふ事は無かつた。教師の机の前面が塗板になつて居つて、背の低い子供がそこで計算をして居るなどは、一寸面白く感じた。教師の机の後に小さな棚があつて、地球儀を始として、鑛物の標本、鳥類の剝製などが少しづつ、叉簡單な理學器械もあつた。それから博物圖や地圖などの精巧なものが割合に澤山あつた。これは恐くは日本には無からう。

十二時十五分前に、教師は生徒に向つて「今日は珍客があつたから、これでやめる」と宣告して、唱歌を歌はせ、敬禮をさせて、業をやめた。教師は私を導いて、次の客間に招じた。これは牧師の家のよりも美しい。油繪も一二枚ある。椅子、ソーフア皆なか〳〵綺麗である。やがて四十前後の女(これは教師の妻)が挨拶に出た。間もなく亭主たる教師は、赤葡萄酒を盆に載せて、杯を四つ添へて室に入つた。主客四人一二杯を傾けて、牧師は「獨逸にもかういふ學校があるといふ事を、日本の人に話してくれよ」など戲談をいふ。暇を告げて歸る時、子供等はまだ路草を食つて遊んで居るものがあつて、處々で禮をする。牧師は路すがら語つて言ふには、「今の教師は三十年來この學校を守つて居る。村中の若者は大抵その弟子である。可なりの資產家であつて、道樂半分に教師をして居るので、馬車なども置いて居る。娘が一人あつて、これがなか〳〵の美人故、あの聟になる果報人は誰だらうと、村中一般の評判である」抔と色々語つた。牧師は少々野卑な人物で、教師の方がサツパリとした嫌味のない人物の樣に感じた。馬鈴薯と烏麥の畑の中を通つて、家に歸つたのは一時頃で、丁度午飯時であつた。

伯林に歸つて後、牧師には新渡戸氏の武士道の獨逸譯一冊、學校の教師には日本の花鳥畫の木版刷十枚ばかり

を送つて、謝禮のしるしにした。兩人からは非常に禮を言つた手紙をよこした。

右は當時の事を記憶の儘に書記して見たのであります。一時の座興から思立つて見に行つたので、深く調査したのでもなし、又調べようといふ考も無かつたので、學齡の事も、學科の事も、級の成立の事も一向聞糺しも致しませんでした。「獨逸にもこんな學校があると知らせてくれ」と言つた事を思出して、一寸書いて見ました。學問上の參考にはなりますまい。笑話の中へでも御掲載を願ひます。

（明治三十六年三月「日本之小學教師」）

謠曲二十番はしがき

猿樂の能は足利三代義滿の頃から、八代義政の頃までに、略〻其の形を成したもので、謠の完成も其の時期に在つたものとみえる。群書類從に收めてある寛正六年卽ち義政の時の紀河原勸進能記に、三日にわたつて興行した能狂言の番組、舞臺の有様、今日の容子と大體は變らぬ。しかし其の後も絶えず新曲が作られて、豐太閤時代迄に、今日の様な番組が揃つたものであらう。德川太平の世になつては、引續いて武家の式樂で、芝居淨瑠璃の平民的技藝に對して、專ら中流以上の娯樂であつた。娯樂のみではない。武士のアツコンプリツシメントの一つとして、國民一般の冠婚の儀式にもはいり込んだ。五百年以前の、しかも一般學問の衰へた時代の產物として、

其の勢力影響の偉大なこと、忙がしい今日の世の中に、能樂流行の盛なのを見ても分る。
田樂の能を土臺に置いて、琵琶法師の平家を引入れ、其の頃世に行はれた延年舞、幸若舞、曲舞、亂舞、松囃、獅子舞の類まで、一切の舞容を總合したことや、色々の舞に伴うた謠ひ方に、朗詠、今樣の歌ひ方をも加へて、舞の方面にも、音樂の方面にも、衆美を併せて大成したことは、慥に猿樂の一大成功で、これがすべての舞曲を壓倒して今日迄勢力を維持する所以である。從つて謠曲の文章も、朗詠、今樣は勿論、從來行はれた小歌、宴曲、平家、源氏、一切の歌ひ物、語り物、讀み物、佛典の妙句を拔いて、創意の文は無いが、補綴總合の技巧を極めて居る。後の淨瑠璃の手本ともなつて、今日迄も渴仰者を失はないのは當然である。しかし、猿樂謠曲の價値は決してこんな事だけでは無い。もつと大きな所のあることを忘れてはならぬ。
猿樂謠曲の大切な點は、國民の傳說を詩化した點にある。平家、義經記、曾我物語等の敍事詩を演劇化(ドラマチーレン)した點にある。狂言に比べれば、幾分か技術詩の性質をもつて居るとはいふものの、つまりは國民詩である。元來、太古以來の傳說が、純文學に現れて來たのは鎌倉以後の事で、平安朝の中古文學には誠に少い。鎌倉から、印度方面の傳說も、支那方面の傳說も、日本古來の傳說も、種々に陶冶され、混和し、變化して、玆に雜然たる傳說圈の發生を促した。足利時代の文學は、謠曲に限らず、狂言も、御伽草子も、舞の本も、皆この傳說圈の外には出ない。桃太郎、花咲爺、猿蟹合戰の樣な童話も、足利時代に其の形を成したものである。德川時代のすべての小說、戲曲も、實は足利時代の傳說圈を脫せぬのである。貴族的文學が廢れて、こゝに國民的文學が起つて來たの

である。無學な世、宗教信仰の厚い世、盛な空想から傳說が出來、敍事詩が出來、演劇の起つて來る所、西洋の中古期の狀態とその揆を同じうして居る。平家も、曾我も、義經記も、つまりは傳說の敍事詩化されたもので、更にそれを演劇化したのが謠曲の手柄である。これらの英雄傳說の外、童話的のもの、神話的のもの、印度の種、支那の種、一切の傳說を次第に詩化して、今日迄傳へたのが謠曲の功勞であつて、猿樂謠曲完成の時期が、卽ち國民傳說完成の時期といつてよろしい。それだから謠曲は國民にとつて無限に面白いのである。後世の芝居、淨瑠璃も、つまりは猿樂謠曲の範圍を脫せぬのである。

敦盛や小町の傳說を能藝に仕組んだのは、田樂や幸若にもあつたらしい。併しそれを一步進めたのは、猿樂の能である。猿樂では幽靈を出した。この幽靈が大きな特色である。たゞ歷史劇では無くして、同樣の人物が、一度は假托した人物で、一度はむかしの形の幽靈で、二度迄あらはれて來て、時代が昔と今にわたる。それが佛果を得て成佛して、現世未來に連なるといふことが、大變面白いのである。全體が一篇の說教である。むかしからの傳說、英雄も、美人も、鬼神も、乃至は禽獸草木も、皆この說教の中に入れて來たのである。さうして草木國土一切成佛の理窟を示したものである。

當時の公卿の學問が歌學一點張で、歌を神祕に考へたこと、歌がどの位迄謠曲の中に勢力があるかは、僅に一曲を讀んだだけでも分る。當時の世は歌道を究めれば極樂往生が出來ると考へた時代である。神事の能にも、祝言の能にも、歷史傳說の能にも、世話物の能にも、其の裏面には和歌の德と佛法の力。一方では綺紲の學、一方

では僧家の教、この二つが、謠曲の生命をなす動脈、靜脈であつて、これが結付いて國民文學の地盤を造つて居る。縉紳の作か、僧侶の作か、相手とする公衆(プブリクム)は國民全體であつた。朗詠、今様の歌ひ方は貴紳の側からで、聲明の音節に似たのは佛家の側から來た。音樂の方面にも、舞容の方面にも、堂上と僧家と常に二様の源流が認められる。

上代からの傳說、室町時代に至つてこゝに國民的演劇の形をなした。後世の淨瑠璃、戲曲、その範圍を出ないことは前に言つた通り。一例を擧げていへば、出世景清の切の文句が謠曲から取つたのはいふ迄もなく、景清といふ人物の性格は謠曲以外に變つては居らぬ。辨慶の性格は謠曲の安宅も、芝居の勸進帳も全く同一。烏帽子折、七騎落は近松の戲曲に題名も其の儘、源氏烏帽子折、賴朝七騎落とある。曾我物語はこの書には取らなかつたが、江戶の三座の春興行、これを缺かしたことは無い。日本紀の傳說は謠曲を通つて妹背山のお三輪となつた。舞臺の構造をはじめとして、直接間接に關係の多いこと、今更いふにも及ばぬ。日本演劇史を研究する人、將來の改良を心がける人、猿樂謠曲の研究を忽にしてはならぬ。

謠曲の四流は人も知つて居る通り、觀世、寶生、金剛、金春。喜多はやゝ後れて金剛から出たので、今は觀世最も盛で、寶生これに次ぎ、喜多、金春は其の次で、金剛は最も振はぬ様である。この書は流行の最も廣い觀世流の文句によつて、三百番もあらうといふ中から僅に二十番を拔いたのである。しかしこれで以て五百年來國民の娛樂を形作つた高尙で優美な國文學の一臠を味ふ事は出來ようと思ふ。

（明治三十六年十月しるす）

希臘の古劇と我が國の能樂

能樂は發生當時のあらゆる美術を打つて一丸となせる總合美術として、古來の神話傳說を集めて詩化したる最初の國民演劇として、さては德川時代に發達せる戲曲、歌舞伎の淵源として、各方面より研究の價値あるものなり。啻に歷史的價値あるのみにあらず、四百年後の今日に於ても尙その劇詩的、演劇的興味を持續し近年益〻流行繁昌の兆あるは、如何に深く國民の嗜好に投じ、如何に永く國民の習俗に浸染せるかを知るべし。輓近歐洲各國の演劇も亦遠く其の源を希臘、羅馬に發せるものにして、羅馬の文明は正しく希臘より直系を引くを以て、希臘の古劇が今日歐洲詩劇の模型となり、濫觴となれるはいふ迄もなき事なり。その關係猶我が國今日の演劇が古代の能樂に於けるが如し。今少しく希臘古劇の狀態を述べて、演劇發達の徑路に於て東西其の揆を一にするものあるを辨ずべし。

希臘の古劇の濫觴に遡れば、其の初はヂオニソス（Dyonysos）の祭の餘興として用ひられたるヂトランボス（Dythrambos）のコール、リードに始まる。これがアデン人の手に發達して、後希臘全體に普及し、遂に流れて羅馬帝國に入りしなり。ヂオニソスは酒の神なり。この祭禮一年に四回あり。第一は春分の頃にして葡萄開花

の頃。次は葡萄摘取の時。次は葡萄壓搾の時にして、恰も冬至の頃に當る。最後は二月の頃にして、新釀を祝する祭とす。冬至、春分の日に於て各種の祭儀の行はるゝは、人類が陽春の氣候を喜ぶ所以を示して、クリスマスの如きもつまりは冬至の祝祭に過ぎず。我が國の新年の賀豈徒に生命を貪る意ならんや。收穫の時期に於て一年の豐稔に歡喜するは、農民の常態にして、我が國の祈年祭、神嘗祭等、或は播種の時、或は收穫の後に於て諸種の祭祀の行はるゝと同一轍なり。而して我が國の田儛、田樂の如き、其の淵源を農事に發して能樂大成の重要素たるを思へば、祭祀の農事と大關係あり、演劇の祭祀と其の根元を同じうするを知るべし。さて、このヂオニソス祭に歌はれたるヂトランボスに於ては、最初は唯其の神の功業を讃し、其の事蹟を述べたるのみにて、一人の音頭取ありて發聲すれば、衆之に和して、同聲に歌ひたるに過ぎざりき。之を最舊の形とす。この形一變して對(ヂァ)語(ログ)生じたり。歌ふ地の文と白と次第に別れて、同衆の中に對手ありて掛合に白を歌ふこととなれるなり。劇詩こゝに胚胎す。しかもこは尙コールの二部に別れたるに過ぎざりしが、尋でコールの同衆以外に役者あり、コールの人と相對して、別々に歌ひ、コールは全く獨立し來れり。演劇の形乃ち成る。こゝに於て酒神一人に限らず、他の諸神の事蹟をも同樣に演じ、又トロヤ、テーバ等の英雄勇士の功業を歌ひ、さては當代の材料をも採りて、早くも諷刺的性質を帶ぶるものあり。我が國の能樂に於ても、神代古傳説に基けるもの極めて多く、伊弉諾、伊弉冊兩尊、彥火々出見尊、素戔嗚尊等の神話を始めとして、いはゆる神事能と稱するもの、恐くは最舊の形なりしならん。但し今日の能樂に見ゆる淡路、大蛇、三輪、逆矛、玉井の類は、猿樂の大成以後大いに其の形を改め、

全く其の面目を一變したりしなるべけれども、能樂以前の舊材料を以て根柢となせること、亦疑ふべからざるが如し。今日尙諸神社に行はるゝ馬鹿囃神樂は、章曲を失ひたるパントミームの類にして、この種の神樂に神話的材料多きを以て見るも、思半に過ぐるものあり。又武門の勃興とともに生じ來れる各種の英雄傳說は、悉く採りて能樂の中に投ぜられたること、希臘の昔に同じ。源平二氏の祖先の時代に屬する羅生門、大江山、土蜘蛛より、下りて賴政、朝長、巴、兼平、實盛、敦盛、知章、さては景淸、義經、辨慶に至る迄、當時のエピークとして歌はれたる平語は悉く皆能樂藥籠中の物となりぬ。若しそれ當代の材料を採れる諷刺劇に至りては、希臘に於ても此の時既に悲劇の傾向を帶び來れる古劇と分離して、かへりて古酒神祭の面影を止めたる別種の喜劇を形成せると同じく、我が國に於ても狂言といふ一種の喜劇を生じて、自ら能樂と分離し、こゝに於て悲喜兩劇の分離を見ること、恐しき迄に同一の徑路をたどれり。狂言の性質に就いては、今玆に言はず。この發達期に於ける希臘の古劇は、歌舞を主要としてハンドルング寧ろ第二位に在り。抒情的戲曲といふを適當とすといふをみれば、日本の能樂と其の性質の酷似せるを知るべし。

役者に就いては最初はもとより常職のもの無く、役者と同時に見物人たりしこと今日の百姓芝居の如し。後には其の中にて舞のすぐれて上手なるもの、歌ひ方に殊に堪能なるもの、特殊の役者として立てらるゝに至れること、發達の自然順序といふべし。男役者のみにて女役者は全く無かりき。戲場は祭壇を中心として周圍に樂者居たり。これ卽ちオルケストラなり。コール分離することとなりてより見物人の場處出來、一轉して舞臺も出來た

り。最初は音頭取の居し處稍高く、そこに供物をせし處なりといふ。その机の代りに一段高く舞臺を作りしなり。然れども後世の如く幕をかくること無かりき。幕は希臘演劇には全く無し。羅馬時代に入りて祭祀を離れて單に庶人の娯樂となりし時始めて生ぜり。希臘の演劇は尚祭の一部たりしなり。我が國の能樂に於ても亦幕を見ず。舞臺の生ぜし時樂屋も出來、天幕にて役者の休息、化粧等の場とせり。すべて此の頃の戯場は特殊なる建築物なく、屋外野天の見物なりき。附近の樹木に攀ぢ上りて見物も叶ひしなり。中央に舞臺一段高く、その前にオルケストラあり。こゝに砂を敷きたり。我が國の能舞臺に於ても、舞臺以外は全く砂礫を敷詰めて、小松など植ゑたる樣、當初の風を見るべきに非ずや。希臘の劇いよ／＼隆盛の時代となりては、內外の裝飾非常に整頓し、繪畫、彫刻、美術の粹を盡して建築輪奐の美、人目を奪ふに至れり。この點に於ては我が國の能舞臺が、單純に松竹梅を畫きたるを以て滿足せると、霄壤の相違あり。顏面の粉飾は最初は葉を以て兩頰を掩ひ、エーピツヒを以て頭を飾れりといふ。人をして天の日影をたすきにかけ、天の眞拆を鬘として、天窟戸前に歌舞せし鈿女命を想ひ起さしむ。後には面を被る事となり、面は布又は木にて作れり。これはた能樂に似たりといふべし。

希臘古劇の舞容は如何。こゝに於て余等は益〻能樂と相近似せるを見る。希臘の舞を説明せる人の言に曰く、希臘古劇の舞は一種の摸倣術なり。歌と始終相一致するものなり。歌には歌ふところを形にて示すものなり。故にプラトーンをして語を形にて示さんとする摸倣は舞なりとの言あらしむるに至れり。その舞容により、體の屈折、位置、轉回等によりて種々の型を生ず。卽ち歌となるべく一致すべく、一語、一句、一曲折、一回轉、歌と

しつくりと合ふに至りて、舞の上乘なるものとす。故に舞ふものは歌の意を舞にあらはして、觀客をして歌を聽くと同時に、歌を見しむる心得なかる可らず。卽ち一種の模様語の如きものなりと。これ正しく我が國の能樂にも適中する言に非ずや。啻に能の舞のみならず、後世の踊は皆此の性質を備ふるものに非ずや。こゝに於て何の舞、何の踊、その歌に伴ひて舞踊の種類あるなり。こはなほ今日の演劇に於ても日常余等の目撃するものに非ずや。かくして作中にあらはるゝ事件及感情は全くその歌と舞との中に沒却せられ、役者は人として人格を容貌に、所作にあらはし出す必要なし。卽ち面を被りても事足るなり。故に希臘時代の名優とは、舞の上手なる人をいふなり。舞の發明者をいふ。歌のふりを附けたるものを Hyporchem といふ。これにて見れば日本の舞踊はみなヒポルヘムといふべきが如し。我が國の能役者、舊派芝居役者の名人といふもの、尙多くは舞踊の名人と同一義に言ひ來れるに非ずや。さればこの頃の希臘の詩人は、むしろメロディを書かざるべからず、踊の手を書かざるべからざりしなり。ハンドルングはむしろ第二の事たりしなり。能樂の半面は舞容を主としたることといふ迄もなく、石橋、猩々の如きは舞容を主眼とせしものなり。これ當時の總合美術としてやむ能はざりし勢なりとす。

最後に、希臘の古劇に用ひし樂器は笛なり。始めは五十人ありしが、悲劇始まりてより十五人となり、三列五人若しくは五列三人となれりといふ。興行は朝より始めたること亦我が國の能樂にひとし。役者の數は始めは一人、エスキロスは二人とし、ソフオクレスは三人とし、間〻從者として四人の人出づる事ありきといへり。能樂のシテ、ワキは二人なり、ツレあらはれて三人となり、四人となる。トモは從者なり、大要亦相似たり。之を要

するに希臘の古劇は其の發達の初期に於て、我が國の能樂に類似する多かりしこと、以上陳ずるところの如し。然るにアデンの隆盛とともに演劇大いに起り、作者に於てもエスキロス、ソフオクレスの外、オイリピデス喜劇を發達せしめ、アリストフアネス之を完成し、劇場も亦宏壯美麗を極め、最大なる劇場は優に四萬人を容るべく、普通のものにても、其の半若しくは四分の一なりといへば、一萬人を容るゝに堪へしなり。こゝに至りては最早我が國の演劇と比倫すべきにあらず。希臘演劇最盛の時に及びては役者も亦品行を愼み、衆人の尊敬を受け、其の報酬の多額なりしは姑く措き、親しく王侯と交り、役者にして直ちに公使に任ぜられて外交談判に當りしものありといふに至りては、今日の歐洲といへども、亦其の例を見ず。役者は國家の人物を以て尊敬せられ、死後記念像を以て飾らるゝこと、大政治家、大學者に異ならず。亦以て希臘演劇の盛況を想見すべく、今日の歐洲演劇の由來極めて深きを知るべし。其の初甚だ相近けれども、其の末や千里の差あり。一方に於ては東西文明の性質に元來の區別あるを知るべく、一方に於て我が國の能樂が其の發達の遲々として遂に彼に及ばざりしことを慨歎せずんばあらず。彼の發達の何ぞ速にして、我の進歩何ぞしかく遲々たりしや。狂言が空しく能樂の附庸として遂に喜劇の大發達を見ざりしも亦憾むべき事とす。余西劇にも通ぜず、能樂にも暗きものなれども、能樂流行して演劇改良の聲盛なる今日、この種の問題は一般國民の興味を有すべきものなりと信じ、聊かこの篇を草しぬ。

（明治三十七年一月「帝國文學」）

國學とは何ぞや

國學院の同窓會に出て何か一場の話をするやうにとのことでありましたが、學科の多忙なのと、五月頃から病氣にかゝりまして、養生かた〴〵なるべくかういふ席には出ぬやうにいたしましたので、だん〳〵と後れました。さて徒らに月日はたちましたが、まとまつたお話も考へて置きませんでした。ところが四五日前に須田君がお出でになつて、この日曜日には同窓會を開くから是非出てくれといふことでありまして、出ることは出ましたが、だん〳〵延び〳〵になつて居つたことで、何か大きなことでもお話するやうに御待受もありませうが、たゞお待たせ申して置いただけで、何事もこれぞといふ程のお話は出來ぬのであります。定めてまとまらない話でございませうが、たゞ私の精神のある所をお聽き取りを願ひたいとおもひます。

私の今日お話しようといふ題目は「國學とは何ぞや」といふのであります。諸君の御承知の通り、この國學院といふ學校があり、諸君も國學院で御修業なされて十分に國學を研究して居られることでありますが、一體この國學院の國學といふことはどんな學問かといふことを申上げる積であります。この國學といふ名稱を始めて用ひたのは、かの荷田春滿であらうとおもひますが、この國學といふものは西洋ではどういふものか、國學といふ名

稱があちらにも許されて居るかどうか、今日の科學上の見地から國學が學問として成立つかどうかといふことを一つ考へて見なければならぬとおもひます。

抑々荷田春滿の時代は幕府の昌平學校もあつた時代でありましたから、春滿はそれと同時に國學の方でも立派な學校を建てなければならぬといふ考へを起して、幕府に建議した位でありましたが、先生は早死をして、遂にその志を成さずにしまつた。誠に惜しいことで、世にいふ國學の四大人の中では一番この先生が早逝でした。それで先生の國學校を起さうといふ志は遂に成りませんでしたが、この弟子の賀茂眞淵が遠州から江戸に出て、先生の遺志をついで大いに國學を起し、弟子も澤山に出來ました。その上に眞淵の弟子に宣長が出でて、宣長以來は國學の研究はいよ〳〵盛になり、宣長の弟子は五百人、その養子の大平の如きは千人も弟子を集めて教授をしたといふ位でしたから、事實に於ては國學校が出來たのであります。實に德川時代の文教史に一つの時代を形づくつたのであります。これが間接直接に明治維新の大業を翼贊したことは申すまでもないことであります。春滿が國學といふことを唱へ出した時分には、學問が專門に分れて居らなかつたから、一人して制度、歴史から文學、語學、美術等すべての事を研究した傾がありましたが、國學が盛になつてからは、物語を專攻する人、歌の集に盡力する人、語學を專修する人、文學を專攻する人等それ〴〵專門に分れ、主として歴史を研究した人もあれば、神道の側を研究した人もあり、また有職故實を主として研究した人もありました。有職の中にも、武家の有職を主として研究した人もあつたのであります。かくの如く專攻する所が種々に分れて居りましたが、これらをひと

しなみに國學者若しくは和學者といつたのであります。さて、かう盛になりましてからは、何が故に國學は大切なものであるか、何が故に神道を說くものも一つの國學者であるか、何が故に語學文法を說くものも一つの國學者であるか、何が故に物語を說くものも國學者であるか、何が故に歷史を修めるものも國學者であるかといふことは、往々にして忘れてしまつてゐるものもあるやうであります。春滿や眞淵以來の學者は、理想を定めて進んだのでありますが、末流の輩に至つては、歌を作るのを以て一種の職分として、これを以て能事了れりとして、詠歌三昧の外には何事もしないものもあり、世間でも、少しばかり歌を詠むものがあれば、直ちに和學者、國學者として取扱ひ、天爾遠波の紐鏡でもひねくるものがあれば、これもまた和學者、國學者として見るといふ風でありました。これらの人々は、春滿等の理想として持つて居つたことを目の前に表して居つたかどうか、甚だ疑はしいのであります。春滿の時代には、神道を說くものも、佛說を交へて神佛混淆の道を唱へ、或は支那の陰陽五行の說を唱へて居つたので、春滿の書いた啓文にはそのことが漢文で書いてありますが、鎌倉足利時代の紛亂の後を受けて學問に正傳がない、それで春滿は日本語を基礎として、即ち國語國文に現れてゐる材料を以て日本學を設立しようとしたのであります。これを以て國學といふ名稱を附したのであります。春滿の時代は、儒教の方でも江戶で荻生徂徠、京都で伊藤仁齋などが復古學を唱へた時代で、その影響もありますが、とにかく春滿の見識は、國語國文を基礎として日本國を說明しようといふのであります。勿論その以前にも國語國文を硏究した人はありました。釋契沖、下河邊長流、戶田茂睡など、いづれも古學を唱へた人で、中にも契沖などは非常に見・

識があり、學問があつて、本居などのやつた事の基礎をなして居ります。しかしながら私はどこまでも國學の創立者としては春滿を推したいとおもひます。前に申上げた春滿の見識を重んじたいとおもひます。御存じの通り學問に正傳がなくて、祕事祕傳を尊ぶ世の中から引續いて、どれがよいかわるいか分らない、間違つた學問の仕方になつて居つた所を、すべて昔の世に戻してやらうといふのが契沖、長流、茂睡などの主義で、とにかく鎌倉時代の僻說を交ぜてはいかぬ、平安朝、もつと前の奈良朝以前に溯つて日本國の根本から研究して來いといふのでありましたが、たゞ奈良朝以前に溯つて歌を研究したり、物語を研究したりするのみでありました。さういふ中で春滿は更に一步を進めて、基礎を國語國文の上に置き、それを以て純然たる日本人の道とするところを明めようとしたのです。日本の國家を說明しようとしたのであります。

賀茂眞淵もその遺志を受けついで、萬葉集の研究に盡力したのであります。萬葉集は純粹な日本古代の言葉を集めてあるものでありますから、日本の國を說明せんとするには、須らく古い言葉を取調べなければならぬといふことに着眼したので、最も適當な順序を眞淵も履んだのであります。本居宣長に至つては、師の志を受けついで、更に之を擴張して、日本紀といふものは古いものであるが、漢文で書いたものであるから自ら外國の思想が交つて居ていかぬ。それよりか日本國家の性質をほんたうに知るものとしては、日本國學の據り所を知る書物としては、古事記を本としなければならぬといふので、斷然これに據ることにいたしました。眞淵が伊勢の松阪の旅の宿りで、始めて宣長に逢つた時、宣長を誡めて言つたのに「己れは萬葉集の研究に全力を注いで、最早古事

記を研究する餘日がないから、おまへは古事記を調べて古い歴史を明らめろ」と敎へました。これを以て見れば、眞淵の理想、宣長の理想を知ることが出來ようとおもひます。春滿以來の主義が、そのつぎ／＼の大家の思想に顯然として一貫して居ることが分ります。宣長などは、一つの神の名を研究するのでも、一つの古い言葉を研究するのでも、決してこの國學といふ大精神を忘れなかつたのであります。紐鏡を拵へるのでも、詞の玉緒を拵へるのでも、この大精神を忘れなかつたのであります。賀茂眞淵が萬葉考を拵へたのでも、冠辭考を拵へたのでも、この大目的を忘れなかつたのです。眞淵が、自分の門人が美文を作る方に走つてしまふのを歎いたといふことは、平田篤胤の玉欅にも書いてあります。要するにこれらの國學者諸大人の理想としたことを一口に言へば、我が日本語の上に現れた所の國民の思想、換言すれば國民の性質を、古語古文の上に於て研究しようとしたのでありま す。これが最も確實な國民の性質の研究法であります。人々には一個の精神がある如く、國家としてはその國の精神がある。奧州の人と上方の人と性質の違ふ様に、支那人と日本人とはその性質が違つて居ります。一個人の性質を研究するのと同様に、一國の性質を研究するには、即ち日本國の性質を研究するには、古來の日本語に現れた日本人の思想を取つて研究するより外に途はありませぬ。それでなければ、正確なものではありませぬ。支那からはいつて來た漢學儒教の說を以て牽强附會して日本の道を說かうとしたり、印度からはいつて來た佛者の說を以て日本の道を說かうとするから、とかく誤謬に陷つて、到底本當のことは分らないのであります。日本の道を知らうといふのには、日本の昔からの文學語學を研究しなければなりませぬ。それでなければ、日本の人民

の性質の由來する所を知ることは出來ませぬ。それ故後世の所は棄てて、古代に溯つて研究することに春滿以來着眼したのであります。畢竟するにこれらの學者は、この大目的を忘れなかつたから、如何なる微細な研究でも、例へば一つの動詞の活用を研究する時でも、國學の大目的の中の一部分に貢獻したことになるのであります。かういふことが、日本の德川時代に國學の出來た根本になるのであります。而してさういふことが果して西洋にもあるか無いかといふことを、これから少しくお話して見たいとおもひます。

今日の西洋の文明は、昔の希臘の文明を受けて居るのであります。希臘の文明が流れて羅馬の文明となり、羅馬の文明が流れ流れて、今日の歐洲の文明となつて居るのであります。日本で法典を拵へたのは、歐羅巴の法典の眞似をしたので、その他行政組織であれ、何であれ、文明的の組織はすべて西洋諸國の眞似をしたのでありますが、さてその根本に溯れば皆希臘、羅馬から出て居るのであります。希臘、羅馬の昔の文明が分らなければ、今日の歐羅巴は分りませぬ。それ故に希臘、羅馬の古代の言語を取調べて、それを歴史的に研究して來るといふことが、向ふにあつては大切なことになつて居ります。日本でも平安朝以前の文學語學を取調べなければ、日本國のよつて以て由來する所の分らないのと同樣であります。日本の鎌倉時代頃は、向ふでもまだ蒙昧で、寧ろ暗黑時代であつたのであります。漸く日本の戰國時代以降に至つて、始めて發達して來たのであります。併しながらその時に始めて發達したといふ譯ではない。その根本は希臘、羅馬に始つて居ります。それが近世に至つて復舊されて發展した來たのだから、割合に西洋の文明は早く出來上つたのであります。それですから、西洋では希

臘、羅馬の研究を先づ以て先にしなければならない。西洋の中學校などで現今ラテン語を廢するか廢せざるかといふ問題が起つて居りますが、實際に廢したのはまだ瑞典一ケ國だけであります。さてこの古學の研究が近來になつては益〻學術的になつて來て居ります。その學問を西洋ではフイロロギーと唱へて居ります。これを日本語に譯しますと、文獻學又は古典學ともいへます。先づ文獻學と唱へた方がよいやうです。卽ち希臘の文明を研究し羅馬の文明を研究するのに、昔の言葉を根本として研究するのであります。フイロロギーといふ言葉は、英獨では用ひ方が違ひます。英語のフアイロロジーといふのは日本でいふ博言學といふものに當り、コンパレーチーヴ、フアイロロジーは比較博言學といふ事に當りますが、この意味とは全く違ひます。先づ言語を取つて學問の研究題目とするのに、凡そ三色の別ちがあります。第一は言語哲學で、これは言語はどうして成立するものであるかといふので、言語の出來る原理を心理學から研究して來るので、哲學の一部分であります。第二は言語學、大學にも言語學科といふものがありますが、これは英語の比較博言學に當るので、英語でいふサイエンス、オブ、ラングエージ、獨逸語のシュプラツハウイツセンシヤフトといふのに當ります。それを日本で言語學と飜譯したのであります。そこで第三が文獻學、この三つが言語の學問の種類になつて居ります。昔の希臘、羅馬の文明の研究は卽ち第三の文獻學によつて進んで居ります。それで文獻學の仕方は、希臘と羅馬の言葉で書いた昔の文學を基礎とするのであります。詩でも散文でも、希臘語又はラテン語で書いたものによつて研究を積み、古代の文藝上に徵すべきものがあれば、これによつて希臘の文明、羅馬の文明を調べて見るといふことになるのでありま

す。そこで文獻學といふものは、文明のない國にはもとより出來ないのであります。言語學は文明のない國の言語でも取ります。アフリカの野蠻人種の言語でも研究上取ります。エスキモー語なども言語學者は研究しなければなりませぬ。文獻學に於ては、文獻の徵すべきものがなければ研究は成立たぬのであります。フイロロギーといふ學問、卽ち文獻學は、どこまでも昔の文明の盛大であつた國に於て始めて成立つのであります。

さて今まで申上げたこの文獻學が、卽ち日本の國學に甚だ似て居るのであります。希臘、羅馬の古代の文化を研究しなければ、今日の文明を知ることが出來ない。希臘、羅馬の文獻を取調べてこそ、今日の歐羅巴の文明の眞相が分るのであります。その眞相を尋ねたればこそ、實に今日の歐洲の文明の基が出來たのであります。卽ち文獻學者のした業は實に大きなものであります。そのやり方は我が國の國學、丁度春滿、眞淵などのやつた事と全く同じ方法でやつたのであります。言ひかへれば、その國の國語國文を基礎として國を說明しようとしたのであります。アルテルツームスウイツセンシヤフト、卽ち古代學と唱へて居つたのです。それは希臘、羅馬の古い所の事ばかりを取調べて居るので、日本でも國學者が古い所を調べて居るのと同じものであります。日本の國學も、西洋のフイロロギーも、同じ徑路をこれまで取つて來て居るのであります。近頃各國の文化もだん〴〵研究する價値があるといふので、昔は單に古學と唱へて希臘、羅馬の文明を研究して居つたのが、一歩進んで今度は英國の文獻學、佛國の文獻學、獨逸の文獻學といふやうになつて來たのであります。英國、獨逸等は昔は同じやうなものであつたのが、時代がかはつてから、だん〴〵分れて來たのです。イスパニヤ、フランスなども、もと

は同じであつたのが、後には分れて來たのであります。それですからその元に溯れば、同じやうな性質のものでありますす。故にローマンス人種の文獻學、ゼルマン人種の文獻學などといふのもあります。此の文獻學といふものが、即ち日本の國學者のやつて居る事と同じになるのであります。

ところでこゝに一の疑問がある。昔の學問の開けぬ時代にあつては、文獻學者が單に古い事を調べてゐる、それを學者としてもよかつたのだが、今日に至つても尙それを學者として差支へないかどうか。古文學を調べて知つてゐる人だから學者には違ひなからうが、今日の科學的の意味に於ける學者かどうか。ラテン語を知つて居つて、昔の希臘、羅馬の古い事を知つて居るのが學者であるか、果して學問としての價値があるものかといふ問題が起つて來ます。歷史家は歷史の眼を以て古今東西の歷史を研究しなければならず、法律家は法律の眼を以て古今東西の法律を研究しなければならず、美術家は美術の眼を以て古今東西の美術を研究しなければなりませぬ。この様に專門に分れて來ては、國學といふ意味はどこにあるか。學問が專門的に研究しなければならないことになつて來ると、國學の領分はどこにあるか。法律學は法律家がやり、歷史は歷史家がやり、文學は文學者がやり、言語學は言語學者がやり、美術は美術學者がやればよいとしたならば、國學者の領分が無くなる。研究が各々の專門家の手に落ちて來ると同時に國學はどんなものになるか。甚だ無意味なものになる。それらの集合體に過ぎぬといふことになる。それらの學問を總稱して國學といふことになるかどうか。文獻學そのものが、西洋人の間に疑の起つてゐるのはそこであります。美しいものは何かといふことに對して、花も美しい、繪も美しい、娘も

美しい、これだけで美といふことはいひ盡せたかどうか。かういふ疑が起つて來ます。國學は古い歷史も調べなければならぬ、古い文學も調べなければならぬ、古い語學も調べなければならぬ、古い美術も調べなければならぬ、古い制度も調べなければならぬ。歷史も、法律も、文學も、語學も、美術も、國學の一部である。國學といふものはそれらの集合體に過ぎぬとしたならば、今日ではその各々の專門家の手に渡してしまつたならばよいだらう、その方が更に精密に出來るかも知れないといふことになります。それについて疑を決するのには、國學は一つの學問として成立つ價値があるかどうか。國學は一つの學問と見做すべきものであるかどうか。いはゆる今日の學問といふ上に於ては文獻學といふものは許されるか許されぬか。隨つて國學といふものは許されぬものであるかないか。これが吾々の研究すべきことになります。

西洋の文獻學者の中に、アウグスト、ベイツクといふ人がありました。これは餘程の豪傑であります。この人が古學綱要といふ書物の中に、先づ一つの定義を下しました。この人の考へによれば、文獻學は、立派に今日の意味でいふ一つのサイエンス卽ち科學と見做すことが出來るといふのであります。この人の言つたことは、追つて後からお話いたしますが、日本の國學は日本の文獻學である。日本のフイロロギーである。これを日本人は國學と名づけたので、西洋の文獻學について、ベイツクの唱へた科學としての文獻學が成立するならば、日本の國學もまた立派に科學として成立つのであります。

さてベイツクの申しますのには、文獻學の目的とする所は、昔の人が知つたことを再び知るのだといふのであ

ります。昔の人が意識して居つたことを、再び吾々が目の前に出して知るのが文獻學の目的であると、かういふ定義を與へたのであります。これは一寸獨逸語を御分りの方の爲に書いて置きますが、Erkennen des Erkannten かういふ有名な言葉を以て表して居ります。とにかくこれは一時を動かした說で、一時の文獻學者はみなこれによつて居つたのであります。卽ち一時代の時期を形づくつた學說であります。この人は古學者で、希臘、羅馬の學問を研究して居つた人であります。さてこの言葉はどういふことを言つたのであるかといふと、昔の社會の或一つの國家の政治上の狀態、その他すべての昔の狀態といふものを、昔の人が知つて居た通りに、再び吾々が知り得るやうに現し出すのが、エルケンネン、デス、エルカンテンといふのであります。政治、文學、法制、美術はもとよりのこと、その他すべての社會上の事柄を、昔の人が知つて居つた通りに、今の人の目の前に構造して見えるやうにするのが、この學問の目的であります。それが十分に出來さへすれば、文獻學の能事は了るのであります。これをやるには、その昔の當時に現れた國語を研究して、その國語によつて現れた文學といふものを研究しなければならぬのであります。それ故吾々はどうしても昔の文學を土臺として、昔のすべての社會を研究しなければならぬ。それには先づ第一古い言葉から研究してかゝらなければなりませぬ。西洋の事にして見ると、先づ第一に希臘、羅馬の言葉を研究しなければならぬ。希臘、羅馬の文學が讀めなければ、決して西洋の古代文獻學に入ることは出來ませぬ。支那の文獻學を研究するには、先づ漢學を研究しなければなりませぬ。日本にすれば、日本の古い文學が讀めるやうにならなければ、日本の文獻學に入ることは出來ませぬ。古い文學が讀

めてから、その後に始めて文獻學に着手することが出來るのであります。文獻學者は古い言葉を知るのが本領ではない。言葉を知るのは一つの手段である。古語を研究し、その言葉を知るといふことは、昔の社會を研究する爲の一つの道具となるのであります。言語學者などは、言葉を知ればそれでよい。昔の言葉でもすべての言葉の構造さへ研究すれば、言語學者の能事は了るのであるが、文獻學者の仕事は、言葉を知るのは目的でなくして、一つの手段に過ぎぬのであります。吾々はその言葉で學び得た知識を以て、もつと大きな仕事をしようといふのであります。古語を知るのを第一段として、既に學び得た所の古文學の知識を以て、その社會全體の政治、文學、語學、法制、歷史、美術等のあらゆる一切の事柄を、一言でいへば古代の文化一切の事を知るといふのが文獻學者の仕事であります。換言すれば一つの國民の全體の社會上の生活狀態、活動狀態を科學的に、學術的に研究して知るといふ、これが文獻學の目的といふことになります。歷史を研究するのは歷史家の仕事、美術を研究することは美術家の仕事、文學を研究するのは文學者の仕事、法制を研究するのは法律家の仕事でありますが、その歷史、美術、文學、法制等の間に一貫した所の關係を見出すのは文獻學者の仕事であります。歷史、美術、文學、法制、風俗等の色々なものを研究すれば、その間に國民の生活狀態、國民の文化の程度が知れるのであります。人間の心の働きは、色々の方面に現れるものですから、平安朝時代の文學は平安朝時代の建築、繪畫と同じ性質を持つて居ります。何れにしても、その當時の人間の心から出てゐるもので、その一つの心が、方面によつて違つて現れるものではありませぬ。國民の精神上の働きは、どこにも同じ樣な形をなして外部に現れて來るのであ

ります。それ故に政治を研究する人にしても、歴史を研究する人にしても、文學を研究する人にしても、繪を研究する人にしても、それらはたゞ學術を研究する人といふだけで、社會の中の一部分の心の働きしか分つて居らぬのであります。その時代の文學、その時代の法制の間には、何か一貫した時代がこもつて居るのであります。これを見出してこそ、始めてその時代の人の性質が分つて來るのであります。それを知るのが文獻學者の目的であります。卽ちベイツクはそれを以て文獻學者の目的としなければならぬといつたのであります。それ故、文獻學者は色々な學科をごたまぜにやりますけれども、それらの學科はみなばら〳〵なものではなく、悉く關係したものになるのであります。どんな法制を作つて見ても、例へば支那の眞似をして大寶令を作つても、日本の國民の性質はその中に現れて出て來て居るのです。西洋の繪を眞似ても、日本人の畫いた繪はやはり日本の繪です。それですから、すべての國民性の現れた或一つの時代を取つて、卽ち比較的に限られた時代に於て、その國民全體の活動狀態、生活狀態といふものを今日の國民の前に再現するのが、吾々文獻學派の目的であると、かういふやうに論じてあります。それですから、地盤を大きくとると小さくとるとによつて、イギリスの文獻學、フランスの文獻學、スラボニツク人種の文獻學、ゼルマン人種の文獻學といふやうに分れます。更にこれを大きくすれば、東洋の文獻學、西洋の文獻學といふことも出來る。また分け方によつては亞細亞の文獻學、歐羅巴の文獻學といふやうにもすることが出來ます。かういふ風にベイツクは見て來まして、それで科學上、學術上の價値のあるものと斷定いたしました。

文獻學者は一人で色々なことを調べなければならない。先づ言葉を研究して、それを基本として、色々な古い事を研究しなければならぬから、立派な學者が終身うちかゝつてやるだけの價値が十分あります。その點に於ても、文獻學はたしかに學問としての價値があるといふことになります。然るにこれに對して反對說を唱へた人がありました。その人はウーゼナーといふ學者ですが、この人はさういふものは學問といふべきものではないと言つて、反對したのであります。文獻學及び歷史地理といふ標題の本を著して、この反駁論をしたのであります。ベイツクの言つた通り、文獻學はすべての學科を包含して、それを一つの學問としようといふのであるが、それはむづかしいことだといふのです。これからだん／＼學問が發達すれば、種々の專門學に分れて來る。それ故歷史は歷史家が調べ、法制は法律家がやればよい。法制ならば法制だけを古今に照らし、東西に比較して調べればよい。歐羅巴の法制、支那の法制、日本の法制と、各國の法制を比較して研究するがよい。さうして人間の社會に於て法制はどういふ風に發達して來て居るかといふことを知ればよいといふのであります。それでなければ本當の事は分らない。一國をつかまへて、その一つの國に於て法制を外の文學や美術などに比較して見ても分らないものである。例へば日本の平安朝の時代をつかまへて、その時代の文學、法制、歷史、何くれとなく調べて見て、その間の關係を見出さうとしても、それはいけない。日本の法制を取調べようと思へば、支那の法制も、西洋の法制も取調べなければならない。又美術にしても、各國の美術を總合して研究しなければ分らない。日本の昔の繪を研究するのに、その同時代の日本の文學、語學、歷史、法制、風俗等を比較して見た所で、局面が狹く

て分らない。何でも一つの事柄について比較研究しなければ分らないといふのであります。併しながら、これは横についての論です。ベイツクのは縱についての論です。平安朝の一時代を取つて、その時代の法律、宗教、文學、語學、美術、建築すべての事を研究するといふのではなく、美術なり宗教なりの一つを取つてこれを横のものと比較して、廣く研究するといふこと、卽ち人間の精神の發達を見るが爲に、西洋の美術の歷史、支那の美術の歷史、日本の美術の歷史を合せて比較研究するといふことは、もとより必要なことでありませうが、一國の國民だけを取つて、その宗教、美術、政治、法律、文學、語學等の各方面の關係を研究するといふのも、また必要なことであります。縱に研究することも、横に研究することも、兩方面共に必要なことであります。ベイツクのいふ通り、一つの國民の精神活動の現れた部分について研究するに當つては、その一つの國民が他の一方に現れた方、法律や美術や風俗などのそれぞれにも密接の關係があります。その關係を取つて、一つの一貫した道理を研究することの出來ないといふことはないわけであります。例へば繪を研究するについても、繪のことばかりやつて、その當時の文學の狀態、社會の狀態を調べずに居つてはいけないのであります。故に時代をきめて、社會の狀態、政治上の狀態、文學美術上の狀態をひつくるめて一つの研究をするといふことは、學問の研究にはづれたことではないので、立派に一つの學術が成立つのであります。一方の世界全體の學問を取つて研究をやるといふこともよいには違ひないが、國民的の性質をひつくるめて研究するといふことも大切なことであります。國といふことを根本と致して、すべてのことを研究する。國が全體のしめ括りになる。これによつて文獻學は立派に

成立つのであります。これがベイツクの說であります。ベイツクの說が、果して價値のあるものかどうか。ベイツクのいふ通り、國を基礎として、その上にしめ括りを見出すといふのが、國學者のしたことかどうか。國學院はさういふ事をやつて居るのであるかどうか。とにかく近世の文獻學者は、その形を飽くまで襲うてやつて居るのであります。このことは諸君の判斷に委せませう。

それからこれもやはり獨逸の大家ですが、ウイルヘルム、フンボルトといふ學者がありました。この人は文獻學のことを何と名づけたかといふと、ウイツセンシヤフト、デア、ナチヨナリテエート、卽ち國學と名づけたのであります。國民の學問といふ意味であります。日本の國學と同じ名稱を文獻學に與へたのであります。この人はどこまでも國を根本として、先刻申した通り、國學者のやること、卽ち西洋の文獻學者のやることは、これをサイエンス、オブ、ゼ、ナシヨナリテーといつてよいと主張したのであります。社會上の慣行、葬祭上の儀式は勿論、すべての生活上のあらゆる所にはいつて來て、その國民を外の國民と區別するのが國學の目的であると、フンボルトは更に明瞭に言つて居ります。すべて一國には、その國特有の特性がある。その特性を指摘するのが、國學者の役目であります。英國ならばその英國の國民の特性を指摘することが出來れば、英國の文獻學者の役目はそれですむのです。獨逸の特性を指摘することが出來れば、獨逸の文獻學者の役目はそれですむのです。卽ちそれは正確な學術的な言葉を以ていつたのですが、昔の本居、平田などの仕事はそれに外ならなかつたのであります。一言でいへば國學は、國體を知らせる學問といふことに歸するのであります。それ故にこの學は決して正確

な意味に於ての學術といふ語に戻るものではないのであります。文獻學とは單に文學、法律學、その他種々な學問の集りをいふのではなくして、それらの種々な學問の關係を見出す學問をいふので、つまり色々の學問を國といふものでしめ括つて居るのであります。これを文獻學とも國學ともいふことにならなければなりませぬ。現存の大家のヘルマン、パウルといふ人も、フンボルトと同じ說でありますが、一つの國民に特有な精神生活を知るといふのが文獻學の目的であると、かういつて居ります。これを小にすれば一國國民の特有な性質といふことであるが、大にすればローマンス人種の特有の性質といふ樣な大きなことにもなります。その國、その人民の團體の言語、並に文學の上にあらはれた材料を基礎として、その國民に特有な精神生活を知るといふのが文獻學の目的であるとパウルは唱へて居ります。これまで述べました學者の中では、このパウルの言ひ方が、一番明瞭になつて居ります。ベイツクなどは、昔の人の知つて居つた社會をそのまゝ今に現出するのだと說いて居るが、何となくその言ひ方が茫漠として居る。パウルに至つては、昔の人が無意識に知らずに居つたことでも、後の人が更にこれを明瞭にして知らなければならぬと言つて居ります。元來この文獻學は他の國にはあまりないので、獨逸に最も發達しました。他の國では獨逸の眞似をしてやるのであります。日本には卽ち春滿以來國學がありましたが、それも末流になりますと、昔の眞淵、宣長などのやつた實はなくなつて、たゞ歌でも作れば國學者とおもふやうになりました。併しながら一つの歌を作るのでも、日本の昔の俤を知る事業の一部であるといふ考へで居れば、國學の大目的にははづれぬのであります。語學をやるのでも、文學をやるのでも、歌を作るのでも、一つの

手爾遠波を知るのでも、その大目的の一部であるとおもつてやつて居ればよいのであります。とにかく國學は學術として立派に成立つ價値のあることと思ひます。なる程一人して歷史もやる、語學もやる、種々な事を皆やるといふことは、むづかしいかも知れない。寧ろこれらの事は、それ〴〵の專門家に委せた方がよいといふことは、理窟上成立ちませう。昔の大寶令を一つ調べるといつても、法律上の知識がなければ分らないでせう。繪を取調べるといつても、美學の知識がなければ分らないでせう。文學をやるといつても、心理學の知識がなければ分らないでせう。さういふ風に各專門の知識もいりませうけれども、專門家の取調べるのとは違ひます。これが大目的でなくして方便であるから、そこが違ふのであります。多少それらの知識をかりて、繪も取調べ、文學も取調べ、色々取調べて行く間に、共通の性質を發見して、國民の特性を知るといふのが、國學者の大目的、文獻學者の大目的になるのであります。それですから、專門學者でなくとも出來るといふことにならうと思ひます。たゞ近代の事柄になつては、これは到底むづかしいと思ひます。近代はだん〳〵學問が精密になつて來ましたから、殊に近代の法律の解釋、醫學の研究といふことになりましては、これは到底專門家の手によらなければ分りませぬ。また一方では知る必要がないのです。今の學問は世界的で、國民的ではない。世界的であるから萬國共通である。さういふものには文獻學者の研究はいらぬのであります。それ故國學はその研究の範圍を古代に置かなければなりませぬ。近代では學問が世界的に發達して來ることになりまして、交通が頻繁になり、西伯利亞鐵道が出來て、僅か三週間で露國の都まで行けるやうになつて來ましたから、國民の特性といふものはだん〳〵と少く

なつて來る。西洋の風は東洋に影響し、日本の風も西洋に影響するやうになります。さうなつて來ては、國の特性を學問の上に現すことは出來ませぬ。昔は各藩の風がありましたが、今日では到底そんなものは見ることは出來なくなりました。學問は元來世界的のものでありますから、交通が頻繁になりますと、いよ／＼世界的になつて、國民の特性がなくなります。また醫學を始めすべての學問にも、材料が多くなつて來て、信用すべき書物も多くなつて來ましたから、昔のやうに苦しんで書物を搜索するといふ苦痛もなくなつて來る。それですから文獻學は、どうしても古代に偏しなければなりませぬ。換言すれば古典學と言つてよいものです。卽ち昔の國學者が平安朝以前に溯つたやうに、どこまでも昔の時代を眼中に置いて研究しなければならぬといふことになります。古代ほど國民的の性質が分り易い。それ故古代に重きを置いて研究するのが文獻學卽ち國學の大切なことになります。要するに國學といふことは、その國當時の文明が、その當時の國民の言葉によつて現れた文明の俤です。言語卽ち文學に現れた所を材料として國體を知るといふのが卽ち文獻學の目的であります。日本國の上で言ふと、國學の目的はそこにあり、學術上の價値もそこにあるので、國學も學問として成立つものであるといふことになります。

もう大凡お分りになつたらうとおもひますが、たゞ一つ注意すべき事は、日本の國學者のやつたことはあまり古代に偏し過ぎたといふことです。それは當時鎌倉時代の學問弊風を一洗しようといふので、荷田春滿以來の復古學者が、儒學に於て伊藤仁齋が古學を唱へたやうに、平安朝以來に溯らうとして、鎌倉以後の時代に重きを置

かなかつたのですが、今日に至つては鎌倉時代も、足利時代も、吾々の思想の境にはいつて來るやうに時代を擴張するといふ考へが必要であります。いくら古代に基礎を置くといつても、鎌倉時代、足利時代を度外視してはいけないのであります。もう少し時代を擴張しなければならないといふことになりました。一面から見れば、歴史的研究によらなければならないといふことであります。必ずしも平安朝とばかり言はず、鎌倉時代にも、足利時代にも、その他の時代にもはいつて、歴史的研究をやらなければならないのであります。もう一つは科學的研究法をやらなければならないとおもひます。一體これまでの國學者のやつた事は偏狹に流れて居つたので、支那から何がはいつて來て居ても、印度から何がはいつて來て居ても、それらは頭から排斥してしまつて、日本の古い所を主としてやつて居つたから、たとへ古今集の歌に支那の思想がはいつて居て、それを知つて居ても、註釋には書いて置かぬといふやうな風がありました。私どもの目から見れば、さう見えます。それ故支那の文明はどこから日本にはいつて來て居るかといふことも、これからは知らなければなりませぬ。それから日本の道はどういふ風に發達して來て居つて、横の道はどこからはいつて來て居るかといふことも取調べなければなりませぬ。如何なる文明でも、決して單獨に發達した文明はありませぬ。日本は東海に僻在した孤島の國でありますが、支那の文明は絕えずはいつて來て居りました。印度の文明もはいつて來て居りました。その潮流を、こゝまでは純粹の日本的、こゝからは支那的、こゝからは印度的と分けて見て、それを合せて研究して行かなければならないこととおもひます。本居、平田のやうに、これは日本のものでないといふやうな考へを持つてはいけないのです。

併しながら、今日までやつて來た國學者の仕事が、日本の文明に裨益したことは大したものでした。如何にも一方の漢學者に相對して立派な學問を形づくつて居るが、今申す通り歴史的でない所も、偏狭な所もありますから、それらの點はこれからさき改良しなければならぬことゝ思ひます。隨つて研究の方法についてお話すべきこともありますが、だん／＼長くなりますから、委しくは申しませんが、すべてその研究の方法が總合的、批判的、比較的、分解的でなければなりませぬ。その學ぶ學科も、單純な國學ばかりでなく、多くの補助學科の力によらなければなりませぬ。また研究の範圍も、一時代に偏せず、歴史的に各時代に渉つて、殘らず研究するやうにしなければなりませぬ。今日以後の國學者は、徒らに古人の跡を蹈襲せずして、新しい方法によつて研究しなければなりませぬ。一方に於ては古人のやつた事業はもとより忘れてはなりませぬ。吾々はこれまでの國學者のやつた研究を基礎として、更に新しい研究方法によつて進んで行かなければなりませぬ。今日大學では文學、史學それぞれ專門に分れてやつて居るが、國學院ではベイツクの言つた通り、國學の名の示すが如く、一國の學といふことを中心として、すべての學問をやつていかなければなりませぬ。國語國文を基礎に置いて、國學のすべてを研究するといふことが、昔の諸大人のやつた事業でありますから、そのやつた仕事を基礎として、その上に新研究をそへて、合理的に歴史的に研究して行くのが、今日の明治の國學者の事業であらうとおもひます。

荷田春滿が國學校を建てようとして、遂にその志を成さずに終りました時と比較しますれば、今日は非常の進歩發達をいたして居ります。今日は國學院も出來て居ることですから、ます／＼研究して、いよ／＼發達させ、

昔の人の事業を大成するやうにしなければならないとおもひます。これが吾々明治の國學者の任務であります。今日は先づ「國學とは何ぞや」といふ題目の下に、國學は日本といふことを基礎としてやらなければならぬものである。國學とは國語國文に基礎を置いて、すべての學科を研究して行くべきものである。國學は西洋の文獻學と均しいものである。またこれからの國學者は、古人の研究を基礎として、尚新しい方法によつて研究して行かなければならない。またさういふ風に研究するのが諸君のお爲でもあるだらうといふ考へで、これだけのことをお話した譯であります。誠につまらないお話で、申譯がありませぬ。謹んで諸君の御靜聽を謝します。

（國學院同窓會講演、明治三十七年一月―二月「國學院雜誌」）

品詞の用法よりみたる萬葉集歌と古今集歌との比較

此の御會で何か話をしてくれといふ佐佐木君からの御依頼でございましたが、實は私は歌を作りませんから、かういふ席へ出てお話することもありませぬが、平常考へて居ることを少しお話をして、歌をお作りなさる御方の御意見も伺つて見たいと考へて、出ました譯でございます。

私の申上げようとおもひます題目は少し長いので、品詞の用法上より見たる萬葉集の歌と古今集の歌との比較

といふ題目でございます。御承知の通り萬葉集、古今集と申しますものは、我が國の古い歌集で、昔から今日に至るまで和歌の模範となつて居るもので、勿論其の後になりましても新古今集などといふものも出て來ましたが、後世の歌の手本となるべきものは萬葉集と古今集であるとは世間一般にいふことでありますから、其の萬葉集と古今集の歌がどういふ點に區別相違があるかといふことを一寸申上げて見たいとおもひます。

これに就きましては種々標準があるだらうと思ひますが、萬葉集、古今集の兩方の歌に現れて來ます思想の方面は措きまして、外形の上の論だけについて見ましても色々標準の立て方があります。御承知の通り萬葉集は奈良朝時代に出來たもの、古今集は平安の都が出來てから出來たものですから、言語の上に既に著しい變遷がある。時代の違ひに加ふるに奈良と平安、大和と山城の言葉が大變違つて居りますので、それらの言語の變遷から來る相違もあります。これらも萬葉集と古今集が外形上から違ふ一節でございます。それで普通の文法で分つ所の音韻論の上から申しましても、奈良朝の言葉と平安朝の言葉には音韻の變化があります。これは申すまでもない事で既に御承知の事でありませうが、例へば萬葉集で「ぬ」(野)といふのを古今集では「の」といふ。さうかと申しますと古今集で「あかつき」といふのを萬葉集では「あかとき」となつて居る。平安朝で「ゆめ」といふのが萬葉集では「いめ」といふ。「われ」といふ言葉を萬葉集では「あれ」というて居ります。或は「しばらく」を「しまらく」、「しられず」を「しらえず」、「おなじ」を「おやじ」といふやうに音韻の變化から言葉が變つて來たといふことがありませう。それですから同じ思想、同じ言葉を用ひて歌を作りましても、自然違つた形を現して來

るのである。「しばらく」といふ代りに「しまらく」といふ奈良朝の言葉を使へば萬葉風になる、「われ」といふのを「あれ」とすれば萬葉の調子が出て來るといふ風に、音韻の上の相違から同じ單語、同じ言葉を用ひても、平安朝と奈良朝の音韻の形が違つて來るのであります。ところが又同じ言葉の中の音韻の變化に止まらず言葉自身が變つてしまふことがある。これは單語論の上から見たので、例へば「田子の浦ゆ」といふ「ゆ」の字が後になくなつて「より」といふ言葉が用ひられるやうになつた。又感歎詞では「かな」といふ言葉が古今集では澤山行はれて、萬葉集では「かも」といふのが澤山行はれて居る。すべてさういふ風に「あらめやも」とか「がもな」とかいふ言葉が萬葉集には澤山あるが古今集には少い。それから又萬葉集には延べ言葉を用ひることが多い。「ぬ」といふのを「なく」、「くるゝ」といふのを「くるらく」といふ風に、これも言葉の變化であります。「もとな」といふ言葉は古今集には全くないといふやうに時代の上で單語が變つて來る。かういふ風に、單語が變つて、用ひられないといふやうなことは、これも外形の變化の一つの原因であるとおもひます。

これらは皆單語に關係したことですが、萬葉集の歌と古今集の歌を一見して其の差別を人に感じさせる道具になる。他のことは暫く措きましても、これらの變つた形はとにかく萬葉集と古今集を區別する所の一つの要素に違ひないのであります。併しながら更にもう一層強い要素になるのは何であるか。文法論から之を觀察しますと、即ち句の作り方から見ると、萬葉集と古今集とは大變に違ふ。言語が變遷しますと、音韻の變化や單語の一つ一つの變化に止まらずして句といふものが變つて來る。句の構造が變つて來るのであります。譬へて見れば萬葉集

で「ずは」といふ言葉を使つてある。「よりは」といふ時に「ずは」といふのを使ふ。あれは古今集にはないのでありまして、その外「こそ」などといふ結びも萬葉にはまだ十分に出來て居らぬといふやうに、文法の文章法上の違ひもあるのであります。此の文章法の中で一番大切なことは句の變つて來ることである。即ち古今集の方でいふと頭から終ひまですら〳〵と詠んだのが多くて、句を引繰返して言葉を倒さまに置く、言葉が元へ戻るやうな詠み方は少いかとおもひます。ところが萬葉集にはそれが大變にある。殊に四の句で切つて詠んだ歌が多い。

　　路の邊のいちしの花のいちじろく人みな知りぬわが戀妻は

といふのでありまして「人みな知りぬ」といふ所で切れて「わが戀妻は」といふのを後へ付ける言ひ方であります。それから

　　天雲に羽うちつけてとぶ鶴(たづ)のたづ〳〵しかも君しまさねば

といふのを見ましても、文章法からいふと附屬すべき句が前へ行き、主語が後になるのが規則であるが、それを引繰返して用ひてある。さういふ用法が多い。

　　やましなのこはたの山を馬はあれどかちゆあがこしなをもひかねて

「なをもひかねて」といふのを最後に置いて、それで歌が出來て居る。かういふ風に引繰返して後へ持つて行く。

　　おもわすれだにもえすやとたにぎりてうてどもこりず戀の奴は

これも四番目の句で切つて、一番終ひを元へ戻す言ひ方で、萬葉集の中にはこれが大變多いのであります。勿論

これは古今集にもありますが、甚だ少い。此の句の切り方は必ずしも四番目に限つて居ないで、二番目の句にも三番目の句にもかういふことが起つて來ます。又引繰返しの場合でも、一句の中で引繰返すやうなことがある。例へば

ますらをがふしゐなげきてつくりたるしだり柳のかづらせわぎも

「かづらせわぎも」といふ五の句の中で切れる、さういふことがある。

まこもかる大野川原のみごもりにこひこし妹が紐とくわれは

これも「われは紐とく」といふのを、五番目の句の中で引繰返して「紐とくわれは」といふので、文章の主語といふものを下へ持つて來るのである。

此の轉換の例が萬葉集の中では澤山に行はれて居りまして、古今集などよりは餘程多いとおもひます。これらは文章法の分ちに屬するのであります。尙二番目で切るとか、三番目で切るとか切り方によつても違ひますし、一首の歌が二つの文章から成立つか、一つの文章から成立つかといふ樣なことも、文章法の上から見ますと面白い問題であります。これらは文法上から研究すれば分るのであります。かういふ風に音韻の上から見たり、品詞の單語の上から見たり、文章法上から見たり、色々見方がある中で、特に品詞の用法卽ち動詞なり代名詞なりの用ひ方によつて萬葉集と古今集がどう違つて居るかといふことを、私の氣の付いただけ諸君にお話して、御參考に供したいと思ふのであります。それで今日のお話は幾らか單語論にはいり、幾分かは文章論に跨つたお話にな

ります。其の中の一節です。前置は長かつたが、これから極く簡單に申上げます。

第一に私が氣の付きましたのは代名詞の使ひ方である。代名詞の使ひ方について萬葉集と古今集とどう違ふかといふのであります。かういふ歌を御覽なさい。

あひおもはず君はまさめど片戀にあれはぞ戀ふる君が姿を

いくばくも生けらじ命を戀ひつゝぞあれはいきづく人に知らえず

これは萬葉集の歌でありますが、これをお聞きになつて、どういふ所が萬葉調であるかといふに、先刻申した樣に四番目の句で切つたのも、一つの區別になることは明らかであります。「知られず」といふべき所が「知らえず」とあつたり、「われ」といふ代りに「あれ」とあるのも慥かに一つの目星にはなりますが、私がこれから申上げますのは、「あれ」といふ代名詞の用ひ方についてであります。すべて文には主語といふものがある。其の主語に代名詞の「あれ」といふのを用ひて居るのが萬葉集の特徵である。古今集にはこれはないのであります。古今集では「わが君」とか「わが戀」とか「わが世」とかいふやうに、上の方へ付けて用ひる代名詞はあるが、主語として「あれがどうする」と使つたのはない。卽ち自分が思ふのに違ひないから、自分といふことは省いてしまつたのです。「迷ふ」とか「歎く」とかいふ言葉がありましても、「われが迷ふ」「われが歎く」といふことはいはない。これが萬葉時代と古今集の時代と違ふ一の點であらうと私は考へる。そこで古今集の歌の中に詠人知らずといふのがある。この中には時々古調の歌が殘つて居ります。例へば

かりこもの思ひみだれてわが戀ふと妹しるらめや人しつげずば

といふのがある。これは何處から見ても萬葉調の歌である。四段切れである。引繰返しもあります。其の上に「われ」といふのが主語になつて居る。またもう一つ

あかつきの鴫の羽がき百羽がき君が來ぬ夜はわれぞ數かく

これも詠人知らずである。併しながら、これは君に對して我といふ代名詞が特別に入れられたと見てもよい。其の他には古今集全體に於きまして、決して「われ」といふのを主語に使つたのは無い。詠人知らずは古調であります。

それから次に形容詞の用ひ方である。この形容詞をどういふ風に用ひたか、其の用法がどう違ふかと申しますと、

このごろの戀のしげけく夏草の刈掃へどもおひしく如し

「如し」といふ字で結んである。或は

この山の黃葉の下の花をわがはつ〳〵にみてかへるこひしも

といふ風に結んだのがある。これは終止段に感動詞の「も」を付けたのである。すべて「かなしも」「うれしも」といふやうなのが萬葉集には多いのであります。此の「も」を付ける付けないといふのもやはり一つの區別になりますが、とにかくいはゆる終止段で形容詞が現れて居るのであります。

みもろのその山なみに兒等が手をまきむく山はつぎのよろしも

天雲に近く光りてなる神のみれば畏しみねば悲しも

かういふ風に萬葉集の方は多くは終止段で形容詞が現れて「も」の字が付けてある。古今集ではそれがなくなつて「ぞくるしき」とか、然らざれは「くるしかりけり」と使ふのが普通である。「ぞくるしき」といふ連體段を使ふか、或は「あり」といふのを加へて「くるしかりけり」といふやうに使つてある。併し古今集の中にも無論「かなしも」といふのもあります。これは前に申した樣にやはり詠人知らずの中に澤山ありますが、普通は「ぞくるしき」「くるしかりけり」といふやうな形である。又萬葉集の中にも「ぞくるしき」といふやうに使つたのも全くない事はありませぬが、概してこれは古今集以後に多く用ひられて「かなしも」といふやうなものは古今集以後はなくなつたのであります。で、古今集のことは別に一々例を擧げなくてもよからうとおもひます。元來萬葉集と古今集を較べて見ると、形容詞の使ひ方が古今集では少くなつて居ます。古今集の一千餘首の中で「ぞかなしき」まで入れて形容詞のはいつて居るのは五十三首しかないが、萬葉では形容詞の數が非常に多い。これも其の區別をするについての一の要素となるだらうとおもひます。

次に申上げますのは動詞のことですが、動詞の用ひ方については、やはり形容詞と同じことが言はれるので、萬葉集では、何も他の助動詞などを附け加へないで直ぐ動詞で終るのが多い。

君待つとわが戀ひ居ればわが宿の簾動かし秋の風吹く

といふ歌がある。かういふ風に「風吹く」といふので終つて居る。

島づたひみぬめの崎をこぎためばやまと戀しく鶴さはになく

み吉野の高城の山に白雲はゆき憚りてたなびけるみゆ

繩の浦に鹽やく煙夕さればゆき過ぎかねて山にたなびく

かういふ風に動詞の形が其の儘に現れて來ることが多い。古今集ではそれに助動詞が附く。「らむ」とか「けり」とかいふ助動詞が付くのであります。かういふ助動詞を附け加へることになつたのは古今集以後に大變多いのです。萬葉時代にも勿論ありますが、古今集以後には動詞だけで暴露された用ひ方は少くなつてしまつた。だんだんと忘れられて用ひられなくなつたのだらうとおもひます。つまり「てむ」とか「めり」とかいふ助動詞を附け加へたのが多くなつて來たのであります。かういふことは內容に關係したことでありまして、萬葉集の歌は眼前の景色を詠んだのが多いのであつて、古今集は寧ろ想像が多いやうであります。

あまり長くなりますが、もう一つ副詞について申上げようとおもひます。此の副詞の用法といふものも、萬葉調の方が古今集時代より大變多いかとおもひます。萬葉集の歌に

死なむ命こゝはおもはずたゞしくも妹にあはざることをしぞおもふ

といふのがありますが、副詞といふものに一つの句を與へてある。かういふことは古今集以後には少いかと考へる。概して申しますれば、古今集になつては副詞にのみ多くの部分を與へることをしないのである。ところが萬

葉集の歌には大變に副詞が多い。隨つて掛け言葉なども副詞の方へ掛つて來るのが多い。例へば

いかるがのよるかの池のよろしくも君をいはねばおもひぞわがする

足引の山菅の根のねもころにわれはぞこふる君が姿を

大船のたゆたふ海にいかりおろしいかにしてかもわが戀ひやまむ

こせ山のつらくつばきつらくにみつゝおもふなこせの春野を

かういふ風に副詞の上に掛つて來ることがあります。後世になつては動詞や形容詞に掛け言葉が掛つて居るが、副詞の方に掛つて居るのは少いと考へる。勿論これも古今集の中にないことはない。殊に詠人知らずの中にはある。卽ち

陸奥のあさかの沼の花かつみかつみる人に戀ひやわたらむ

東路のさやの中山なかくに何しか人をおもひそめけむ

などといふ歌は皆副詞に掛つて居るのでありまして、さういふ例がないことはありませぬが、概して言へば、後になつては副詞にかゝつて來るのが減つて來たのであります。其の減つて來たのは何であるかといへば、副詞に十分の場所を與へない。副詞を澤山用ひないから、自然副詞が重んぜられなかつた爲にだんく少くなつたのだらうとおもひます。隨つて副詞に掛け言葉を掛けなくなつたといふことも、副詞についての著しい違ひであらうと考へます。

以上申述べましたことをもう一度簡單に繰返して申しますれば、代名詞の用法、形容詞の用法、それから動詞の用法、副詞の用法で、これが文法上に於きましては代名詞は文の主語となるもの、動詞、形容詞は文の説明語となるもので、いづれも大切なものであります。又副詞も動詞、形容詞の修飾語としてなか／＼重要なものであります。これらの極く大切な四つについて特別の用法の違ひがあると私は考へたのであります。其の他形の上について申上げることは澤山あるでありませうが、今日私は大體の著しい差別であるとおもふことをお話して、尚諸君の御考を願ひ御批評を仰ぎたいと考へるのであります。

最後に源實朝の歌のことについて申上げますが、實朝の歌は萬葉の調子であるといつて居ります。賀茂眞淵翁などもさういつて居ります。實朝の歌に、

山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも

といふのがありまして、無論萬葉調でありますが、一人稱の代名詞が主格に現れて居るのであります。私の先刻言つたことから考へて萬葉調に違ひないのであります。もう一つ申上げますが、

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に浪のよるみゆ

これも代名詞の主語が現れて居りまするし、又「沖の小島に浪のよるみゆ」といふ様に動詞が助動詞なしに終止段で現れて居りますから、萬葉調の歌であることは確かであります。かういふ風に直接に其の歌に當つて御考へになれば分るだらうと思ひます。甚だつまらぬことでありますが、御清聽下さいまして有難うございました。

元旦及び大晦日に關する獨逸人の迷信

（竹柏園歌會講演、明治三十八年一月―二月「心の花」）

光明と暗黒、夏と冬の爭はむかしの神話にあらはれて居るのみでは無い。今日の歐羅巴の一年中の節會は大抵耶蘇教と結付いて居るが、本を正せば自然の節序のうつりかはりを意味したもの、耶蘇教よりもずつと古い、いはゆるヒンヅー時代の風習が、耶蘇に緣故のある日と結付いたのが多い。降誕祭（クリスマス）に常磐樹を飾つて、一家團欒の歡をつくすのは、一陽來復のお祭で、日本の正月に門松を立てるのと寸分違はぬ。佛教の方でも彼岸などは晝夜平分の曆日に據つたもの。人生五十年、四時の推移と一年の交替が、人の心を新にし、人の望を起させ、人事百般の儀式に影響することは、東西少しも變らぬ。宗教も人の作つたもの、人は世界の人皆同じ人なれば、期せずして習慣風俗を同じうするのも、もとより怪しむに足らぬ譯である。元旦に屠蘇を飲み、七日、十五日に御粥をすゝつて一年中の健康を祝し、橙、海老、煮豆、ごまめ、數の子に家門の繁昌を豫め祝するのも、決して日本ばかりでは無い。日本の習慣の中には支那から傳來したものもあり、日本國民性のあらはれたものもあるが、その事は姑くさしおいて、大晦日と元日に關する獨逸人の迷信を擧げて、緣起を嫌ひ、御幣を擔ぐことは日本人ばか

りでは無いといふことを示さうとおもふ。一寸こゝに斷つて置かねばならぬのは、日本では大晦日といへば、一年の最終日、大祓で何もかも拂ひ去つて、元旦から新になるのであるが、西洋では大晦日の夜の十二時がうつと、新年がはじまるから、大晦日の晩は卽ち新年の朝である。それ故大晦日といふものの、新年、卽ち來ん年の希望を含めたものが一般に多い樣である。

十五の娘今年は十六になる。今年は嫁入が出來るかと、年の改まるとともにその境遇の變化を豫想して、輝いた希望を眼前に抱くのは當然である。それ故少女がその年に結婚出來るか否かをためす方法は、元日又は大晦日の晩にやることが多い。大晦日の晩に白墨で戶の上に二十四のアルファベットを書く。さて目隱(めかくし)をしてそれを探る。そのあたつた字が將來の夫の頭字だといふやうなトし方が色々ある。同じく大晦日の晩、林檎の皮をむいて右の手で後向きに左の肩越にその皮を投げる。その皮の形で夫の姓の頭字を知るといふ方法もある。新年の朝第一にあつた男の姓を聞け。その姓が卽ち將來の夫の姓であるなどは皆同樣であるが、更に進んで、今年出來るか出來ぬかを知るには大晦日の夜半、戶を背にして右の上靴を取つて頭を越して投げる。その靴が部屋の方に向いて居れば翌年亭主が出來る。又鷄小屋の戶を夜中に行つて叩く。その時雄鷄が第一に聲を立てれば夫を得られるが、雌鷄が聲を出せばその年も嫁入はむづかしい。雌鷄に答へられる少女の心中は嘸かしと思ひやられる。又大晦日の夜中の十二時裸でふりかへらずに戶口までいつて一寸ふりかへつてみれば、將來の夫の顏がありありとみえる。これらはあてもなく男を思ふのであるが、意中の人があつてそれを見たいとおもふものは、大晦日の夜中

の十二時に鏡の前に立つて、三度その人の名を唱へれば、忽ち鏡の上にその人の影がうつる。又同夜値段を聞かずに林檎を買つて枕の下に入れておき、正十二時にそれを食つて寢れば戀人を夢に見る事が出來る。同じ様に聖書を寢床の中で手探りであけて見て、翌朝その場處を見て希望の當否を卜するといふ仕方もある。こんな様な類似な方法はまだいくらもある。大晦日には鉛を沸して水に落し、その形で翌年の吉凶を卜するのが一般に行はれる方法であるが、その鉛の形によつて、兜に似て居れば軍人の妻になるとか、鉋に似て居れば大工の妻になるとかいふ様な事をする。今年は無事であつたが、來年も無病息災なれかし。今年は一年中不仕合で不幸續きであつたが、來年はもつといゝ年を暮したいといふ様な希望は人々によつて誰にでもある。それ故新年の初にあたつて之を占ふ。例のバイブルをあけてみる仕方などもその一つで、又他人の店にいつて、人の話を聞く。その時ヤーといふ聲を聞けば翌年はよい事が多い。ナインといふ聲を聞けば惡い。これは卽ち辻占の方法である。大晦日の夜辻に立つて居れば翌年の事が分る。辻に立つて第一に逢ふもので翌年の運命を卜するといふ純粋の辻占もある。萬葉にある夕占(ゆふけ)、橋占(はしうら)、水占(みづうら)色々な種類はどこの國にもあるものである。大晦日の晩小刀を新しいパンの中につき込んでおき、翌朝それを見て、少し濕り氣があれば翌年は不幸が多い。いはゆるナーセス、ヤールである。これは言語上から御幣を擔ぐことで、日本風ともいふべきもの。葱を十二に切つて一月から十二月にあてて鹽をふりかけておく。翌朝見て、濡れて居る月はやはりナースである。大晦日の晩皿に水を入れて貨幣を投げ込む。音がせねば無事、音がすれば病氣、貨幣が飛出せば死ぬ。又指貫(ゆびぬき)に鹽を盛つて人々にあてて机の上におき、翌朝見

て、鹽がとけてをれば其の人が死ぬなどともいふ。大晦日の御祈禱に蠟燭が倒れゝば死人がある。倒れた方の人が死ぬ。大晦日の晩に影が薄ければその人は翌年必ず死ぬといふのは日本のと甚だ似て居る。女が箒木を雪の中に立てて、自分の靴をそのぐるりにおく。翌朝それが墓の方に向いて居れば死ぬ。大晦日の晩にクルミを食ふのが一般の習慣であるが、クルミの黑いのを食へば必ず死ぬ。又皿に水を盛つてクルミの皮を浮べ、それに火をつける。その火が消えるとその人は死ぬといふ樣に種々に御幣を擔ぐ。新年に新しいシャツを着ると健康になるといふのは迷信よりも教訓である。大晦日の晩には自分の年齡をいふな、又肖像を人にかゝせるなどといふ教訓もある。

命についで欲しいのは富貴である。福壽草を床の間に飾ると同樣、獨逸の風習にも隨分慾ばつたのがある。ヨハンニスブルーメといふ花は大晦日に咲いてその晩に枯れる。もしこの種を一つ見付ければ金に不自由する事なく、富貴自在で、欲するもの得られざるなしとある。大晦日の晩に魚の鱗を食ふと一年中金に不自由せぬ。リンゼを食つても同樣、人參を食つても金が出來るといふ。橙で代々、數の子で多くの子供を意味して、ひたすら家門の永續を願つた日本の風よりも、一層實利主義である。黑い猫を袋の中に人れて、九十九の結び玉を拵へ、大晦日の晩お寺へもつて行き、戸を叩くか、又は鍵の孔から呼ぶと鬼が出て來る。さうして「何用か」と問ふ。「兎を一匹買ひたいから金を一兩貰ひたい」といへば直に出してくれる。若し出してくれぬ時は急いで家に歸れば、机の上に必ずその金がある。鬼が九十九の結び玉をほどかぬ中に家に歸らぬと禍があるから、大急ぎで歸らねば

ならぬといふ。黑猫を袋に入れるといふのが一寸面白い。農家などでは收穫が大事である。西洋では牛や豚を畜つて置くから、その方の利得も大切である。家畜の健康や生殖についても種々の迷信がある。大晦日にパンを燒いて牛に食はせれば健康だとか、大晦日に男が先づ來れば牡牛が生れ、女が來れば牝牛が生れるといふ樣な事もいふ。惡魔は家畜を襲ふものなれば、之を拒ぐには新年に食はせる餌の中へ鎌を入れておけば宜しい。隣の鷄が自分の處へ來て卵を生む樣な慾ばつた祈り方もある。大晦日の夜星が澤山出れば翌年卵が澤山取れるともいひ、元日に雪が降ればその年の蜜蜂の收穫が多いといふ。雪は豐年の兆といふのと同じである。獵人は墓場の十字架から集めた鉛で銃丸を拵へて獵に用ひれば、百發百中疑なしといふ。いづれも慾得づくの迷信である。

右の樣に元旦や大晦日に一年中の吉凶をつないで福は內、鬼は外。緣起をきらひ、御幣をかつぐことは實に澤山ある。今は僅かにその一斑を擧げたのである。人の思想は東西かはらず、古今相同じで、ゆふけといひうけひといひ日本の上代にあつたものが、西のはての文明國に今でも澤山にある。迷信といへば迷信、迷信をするのが人間の持前である。

（明治三十八年二月「帝國文學」）

雜感

近頃は神宮奉齋會で婚禮を行ふことがだん／＼と流行して來た。これは皇族方の御婚儀が賢所の前で行はれるのに倣つたのであらう。元來我が國の神道では、死の方よりも生の方を司どつて居るのがむかしからの習慣で、今日でも赤兒の宮參りといつて、三十日目位には產土神のお宮へ參る。死んだ時にはお寺へいつて坊さんの厄介になる人でも、生れた時には必ずお宮へ參ることになつてゐる。生は神、死は佛と分業があつた樣なわけで、少しも衝突をして居らぬ。近年になつて神葬式といふことが始まつて、神道流の葬式の儀式が出來たが、神道で葬式ばかり取扱つて居るのは感心しないとつね／＼思つて居つた。所がこの頃だん／＼と婚禮にまで關係する樣になつたのは喜ばしい事である。生れた時ばかりでなく、婚禮といふ人生の一大儀式も、祖神の前で執行ふといふのはさもあるべきことである。信仰なり、宗教なり、人生を通じて支配すべきものである。

佛法の方では死のことばかり司どつて居るが、これも佛法家の今日に勢力の無い一原因である。西洋の坊主は生れた時から死ぬ時まで、冠婚葬祭すべての場合に世話をするものである。然るに佛家の坊主は死人を取扱つて、世外に立つて居る。これは宗教の性質にもよるだらうが、もう少し社會に立交る樣にしなければ、宗門の繁昌は望まれぬ。學問のなかつた時代には坊主が名付親となつたり、いはゆる寺子屋の先生をした事もある。平安朝以前の佛法は鎭護國家の佛法で、朝廷のすべての儀式に關係した。未來の世ばかりでなく、現世を支配する宗教でなければ、勢力をもつことが出來ぬ。正月の元日に坊主が來ると緣起がわるいといはれる樣では、これからの世には一日一日衰へるばかりだ。教育事業や慈善事業で社會に立交るのも必要だが、もう少し家庭と結付く樣な方

面で、社會に容れられねばならぬ。佛前の婚禮は一人二人やつた人もあつた様だが、今日ではまだ行はれさうにもない。

佛教の方では死んだあとの七々日を懇に弔ふ。神道の方も祖先崇拜で死んだ人をしのぶ。これは決してわるい事では無い。併しながら死人にばかり厚くて、生きて居る人に薄いのは宜しくない。我が國では宗教の關係もあらう、とかく生前に人を尊ぶといふ風が足らぬ様に思ふ。功勲ある人や、偉業をなした人はどこ迄も尊ぶ風が欲しい。死んでからお宮を立てて祭るよりは、生前にその人の功業を稱へて崇める方が、風教の爲にもよい事であり、その人に對する敬禮である。外國では偉勳ある人を尊奉して生前からその銅像を建てたり、記念碑を作つたり、少しも他人の功業を褒めるに吝ならずといふ風が見えるが、我が國では生前にはどんなえらい人でもそんなに褒められる人は無い。今日の新聞雜誌を見ても、惡口をいふことが大流行だ。或外國人が「日本に豪傑の無いことは慥かである。なぜかといふと、誰に聞いて見ても、本當に褒める人は無い」と言つたさうだが、これらはよく穿つた評言かも知れない。少しも嫉妬の心をもたず、えらい人はえらい人として國の光を出す様にせねばならぬ。死人を尊ぶ風とともに、生きて居る人をも尊敬する風を養はねばならぬ。

外國では誕生日を祝ふことが日本よりも盛である。日本では死後の法事供養を大事にして、誕生日は第二になつて居る。激しい競爭場裡に立つて世界と競爭して行かうといふ國民は、誕生日を大いに祝つて現世の幸福を祝し將來の希望を促進せねばならぬ。死者を忘れ、祖宗を忘れるのは本よりわるいが、死んだものにくよくよして

居ては發達が出來ぬ。自ら自己の誕生日を祝して前途の奮發心を起すもよし、他人の誕生日を祝して他人の功業心を奬勵するのも必要である。日本國民は元來生々主義で、現世主義であるから、生誕祝賀のことはもう少しやるべき筈だとおもふ。

我が國には尙齒會といふことがあつて、老人の長壽を祝ふことがある。これは支那からの傳來であらうが、長者を尊敬することでもあり、人生を尊ぶ風をあらはしたもので面白い。併し唯長命ばかりでは何の役にも立たぬ。社會の實益をなし、國家に功勞のある人でなければ祝ふには足らぬ。無益に穀潰しとなつて隱居しただけでは少しも祝賀する値打は無い。獨逸などでは巡査や郵便配達夫などで三十ケ年勤續した人が八十の賀、七十の賀などをやることが多い。新聞に度々その記事がある。これは非常に面白い事で、たとひその仕事が如何に低いにしても、國家や社會に對して爲した功勞は同じことである。職務に貴賤尊卑は無い。自己の職務をよく守つて、二十年も三十年も國家に盡す人は實にえらい人である。之を尊敬する値打がある。我が國で巡査を二十年もやつて居れば意氣地なしの樣におもふ。これは大間違である。忠實に一つの職業を守つて、微力でも國家社會の爲に勤めて怠らぬ人は立派な人である。大政治家や大學者が國家に貢獻したのと同樣に祝賀すべき價値がある。金持の隱居が妄狂などをして長命をしたものを祝ふ樣なことはこれから斷然やめたいとおもふ。

（明治三十八年四月「中央公論」）

地名傳說に就いて

私は今日地名傳說に就いてといふ題でお話いたしたいとおもひますが、この傳說と申しますものは歷史とは何の關係もないもので、全く違つたものである。歷史といふものは實際起つた事件で、卽ちゲシェーネスであるが、傳說は實際起らなかつたもので、人の想像で考へ出したもので、エルダハテスであります。傳說は斯の如く人が拵へたものでございますから、歷史とは何の關係もないものである。然るにどういふものか、歷史と傳說とは混同をするのである。何處の國の歷史にしても、古い時代の歷史は半ば以上傳說である。神話時代の歷史は神話といふ廣い意味の傳說であり、それから後になつても色々傳說が新しく加はつて來ることが多い。太閤秀吉の母は腹の中に日輪がはいつたと夢みて秀吉を生んだといふ樣なことがあり、西鄕隆盛が死ぬと西鄕星が出て來たといふ樣な譯で、今に東鄕大將などにも何かの傳說が附加はりませう。黑木大將はポーレン人だなどといふ傳說が西洋人から出來かゝつて居ります。さういふ風で歷史には澤山傳說が加はつて居る。大鏡、增鏡、吾妻鏡といふやうな類が歷史の貴重なものになつて居りますが、これらにも傳說は澤山ある。當時の人の日記の中にも傳說を交ぜて書くから、日記とてもあてにはならぬ。源平盛衰記、平家物語、太平記などは正確な歷史でないといふこと

は一時史學界の問題となつて、太平記の如きものは史學に必要ないといふことで、辨慶や兒島高德などを抹殺して天下を驚かされたが、これは卽ち歷史に傳說の加はつたもので、歷史と傳說との區別を知つて居る人ならば、少しも驚くに足らぬことであります。實際起つた歷史と、人の拵へた傳說と混同して見て居りますから、愈〻本當に起つたことを調べ出すのにむづかしくなつて來るのであります。

この傳說といふものには色々の種類がある。八股のをろち、因幡の白兎などは、神話の傳說である。金岡の畫いた馬が草を食つたといふやうなことは美術上の傳說である。弘法大師が佛樣を呼出したといふやうなことは宗敎的傳說である。辨慶義經などいふ話は英雄傳說である。歷史にあつたことを本として作り出すこともあれば、全くないことも作り出す。今一々種類を擧げてお話することが出來ませぬから、簡單に地名傳說といふことに就いて申上げたいとおもひます。

傳說といふものには、人名と地名とが伴なつて來る。この二つが伴なはなければ童話のカチ〳〵山などと同じになる。童話の中にも桃太郞、鬼ケ島などいふ名前もありますが、實際歷史に起つたことの樣に、地名を伴なひ人名を伴なつて來るのが傳說である。或場所に起つて、或人がやつたといふことになつて、それから歷史と混同することになつて來るのであります。さてその傳說の中で、地名傳說といふものは、どんなものであるかといふと、傳說の內容そのものが地名と密接の關係をもつて居るのをいふのであります。例へば新田義貞が鎌倉で劍を海中に投じた。所が浪が退いて陸になつたといふことは歷史では無い。實際あるべからざることで傳說であるが、

併し地名には關係が無い。稻村ケ崎や鎌倉といふ地名は話の內容と直接關係が無い。之に反して風土記に餅を的にして弓を射た所が、その餅が鳥になつて飛んで行つてしまつた。これが山城の國の鳥部里(とりべのさと)の地名の起源になつて居る。さういふ風に地名に就いて傳說が出來て居るのを、地名傳說といふ題にしてお話するのであります。これは如何なる國にでも多少はあるものですが、我が國には殊に多い。さてこの地名傳說といふ中に、地名から傳說を生じたものがあり、傳說から地名を生ずる場合もある。どちらが多いかといへば、地名から傳說を生ずることの方が多い樣であります。

第一に地名から傳說を生じて來る場合をお話して見ませう。これは日本書紀、風土記をはじめ澤山ありますので、枚擧に堪へない位あります。日本には同音の語が澤山ある。「ハナ」といつても、鼻もあれば花もある、端といふこともある。それで日本では同音語を利用して、語尾に掛言葉の洒落を言ふことが多い。それでこの洒落を文學に使ふことは日本の國民の性質として發達して居る。これは國語の上の發達で、國文の上に著明なことである。卽ち言葉の上の戲でありますが、それで地名を解釋して、多くの地名傳說を生じたのでございます。言換へれば、この同音が澤山あることが地名傳說を容易ならしめたものでございます。これは地名ばかりでなく、人名にもむかしから應用されて居るので、磐を押開いて出たから磐押開命だといふやうに書いてある。かういふことが地名に應用されるのである。古い時代の枕詞といふものが、已にこの國民的性質を示して居るので、そらみつ大和といひ、あをによし奈良といひ、つぎねふ山城といひ、皆同音を利用して枕詞をつけ、地名を詩化して居る。

立別れいなばの山といひ、世を宇治山といひ、柞の森を母にかけ、羽束師の森を恥かしにかけるなど、昔からかういふ事を絶えずやつて居るので、これと同樣に歷史の事實を地名に結付けるのは必然の勢である。それで古い歷史上の事實といふものは大抵地名に結付けてある。神武天皇の御東征といふ樣な著しい事件になると、浪が速いから浪速、楯を列べたから楯津、大きな樹に隱れたから母木邑、血が流れたから血原、八十梟師をうつて女坂、男坂、墨坂が出來、金鵄があらはれて鳥見里となり、土を取つて八十平瓮を造つて埴安となるといふ樣に、悉く地名に結付いて居ります。又日本武尊の御東征の時にも燒津とか、吾妻とか、醒井とか、三重とか、皆面白い話が結付いて居ります。死なれてからまで白鳥の陵が出來ました。こんな類は非常に澤山あつて、日本紀、古事記、風土記などには到底枚擧に遑のないほどあります。袖が水に漬ぢて常陸、山の木がつきたから筑紫などいふ類で、土蜘蛛征伐、熊襲退治、皆この樣な地名傳說を拵へて居ります。チヤンバレンのアイヌ語の研究によつてみれば、出雲の國名は八雲立つといふことから來たものでなくて、岬の近くの灣といふ意味である。チヤンバレンの言ふことにも牽强附會があつて一々あてにはなりませぬが、昔天孫人種がやつて來て日本に居たものを逐ひ除けたのであるから、前の人の付けた名前が地名に殘つて居ることは疑のないことである。その地名が分らぬから、それに就いて歷史上の事實、英雄の事蹟の傳說が結付いて來たのであります。英雄の事業が常に地名の起源を示して居るのであります。さて今申上げた樣なことはとにかく歷史であつて、果してその場合に起つたものかどうか、足が三重に曲つたから三重と付けたかどうかよく分りませぬが、日本武尊がそこを步かれたといふことは確

かである。かういふ事は外の地方に持つて行くことが出來ない。何處までも歴史の事實に伴なつて行きます。ところが又この傳説で、どこにでも行はれて居るものがある。世界的のものが或地方に結付いたものがいくらもある。

日本で最も面白いのは、三輪山の傳説である。倭迹々姫といふ人があつて、そこへ男が夜な〳〵通つて來る。戸の孔からはいつて來る。それで綜を付けておいて、その綜を傳はつて行つたところが三輪山まで行つた。その綜が三輪だけ殘つた。それで三輪山といふ樣に解釋して居る。かういふ話は世界中到る所にあつて、朝鮮にもあり、歐羅巴各國にもある。この類の話は羽衣傳説とか浦島傳説などといふ樣に、世界各國到る所にあるものであります。さういふ話は何處へも持つて行ける。都合のよい所に持つて行つて、都合のよい人を付けることが出來る。桃太郎やカチ〳〵山と同じことである。餅が鳥になつて飛んだのは、豊の國にもあり、稻荷山にもある。昧臥山とか、戻橋とか、姨捨とか面白い地名になると、皆あとで他の國の話がその上に結付いて來る。元來の神話もあれば、支那、印度あたりから來るのもある。さうしてそれが日本の地名に結付くのである。これは地名の説明ばかりでは無い。話の傳説が自ら地名に結付けられることになるのが面白い。かくして一般の傳説がロカライズされるのである。中には故意に結付けるのもある。寺などには何々山などといふのが澤山あるが、これらには僧侶連が何か不思議な傳説を拵へて付けたのが澤山ある。すべてかういふ事は日本の語に同音が多いから來るので、日本のホモニムのみならず、一歩進んでは漢字にまで應用して來る。富士と不死の薬と結付けて竹取物語に

書いた。富士はアイヌ語では火山といふことである。相模の國の傳説に、昔神様が妻の死ぬ時「之を御覧なすつて下さい」と言つて鏡をくれた。その鏡を朝夕見て居て、それで相模といふのだといふ。これは天照大神の神話や松山鏡の傳説であらう。武器を秩父の山に藏めたから武藏、矢の羽根を出したから出羽、加賀の國は雪が澤山降る、雪は豊年の兆だから加賀といふのだなどといふのは、皆漢字の説明になつて居る。珠流河（するが）は珠の流れだといふことが都良香の記文にもある。石上布留（いそのかみふる）の祠といふのは、昔少女があつて布を洗つてゐた所へ劍が來て留つた。そこで其の劍を取擧げてお祀りをした、それで布留の祠だといふ。劍のことは古いが、布に留るは漢字の説明である。腰越を子死越と書いて、子死越といふのは、昔龍口に龍が居つた、これが子供を取つて食ふからであると言ふ。甲斐の國に鳳凰山といふ所がある。鳳凰が飛んで來たからだともいひ、弓削道鏡が住んだからだともいふ。浪が寄つて來て、浪を防ぐに堤を築いたから筑波、蹉跎として歎いたから蹉跎山、泥棒が横行したから盤坂だといふやうに、漢字の動詞まで加へた説明がある。實に際限なく進んで行くものであります。有也無也（うやむや）の關といふのは、昔鬼が出て人を食ふ。人がこはがつて通らぬ。そこに鳥が居て有也無也と鳴いて、鬼が居るか居らぬかといふことを知らせた。それで有也無也の關といふのだといふ。隨分面白い想像である。これらは地名の分らぬものを説明して傳説を加へたもの、否、國民の想像によつて詩化したものであるが、中には天然の景狀などで名を得たものに傳説が結付くことがある。信州の駒ケ嶽は數千年前から馬が居るから駒ケ嶽だとか、甲斐の國の駒ケ嶽は、聖德太子が金の駒に乘つてお出になつたから駒ケ嶽といふのだといひます。これらの山には形が似

て居るといふのもございませうとおもひます。恐しいやうな所を地獄越といへば、そこでは澤山の落武者が殺されたから地獄越の名が出來た樣にいふ。甲斐の國に傘山（からかさやま）といふ所がある。駿河勢の來た時に樹木に傘をかぶせた所が、駿河勢が驚いて逃げて行つた、それで傘山と稱へたといふ。遠くから見ると龜の形に見えるから龜ケ岡といふのを、昔教待上人が龜を食つてその骨を棄てたところで、遠くから見れば龜にみえるが、近くで見ると蓮華に見えるなど、例の宗教傳說を結付けて來ることも皆この類であります。その外天狗岩だとか鬼ケ谷とか、恐しい形や景色から、已に傳說的の地名を付けることがある。さうすると、あとで又それ〲の傳說がそれに添はつて來る。これも地名から傳說の生ずる例である。外の傳說を借りて來てロカライズするのである。三千年の歷史、文學を有する我が國民はかういふ風にして、一草一木に至るまで、悉く傳說を附加へ、弘法の獨鈷水、日蓮袈裟掛松、義經腰掛石、義朝首洗井などと樣々の事を附加へたのである。歷史を附會し、神話を附會したのである。何人かが之を附會して、多くの人が之を信じたのである。よし信じなくとも面白いのである。國民の想像、詩想の發展として面白いのである。

次には傳說から地名の生ずる場合をいつて見ませう。近江の三上山、一名蜈蚣山（むかでやま）などはその適例でありませう。三輪山の近處には緒環塚（をだまきづか）があります。常陸の處女の松原といふ所は、風土記の傳說によると、昔若い男と女が此の松原で會つた、曉方になつて人目を恥ぢて松の木になつたといふやうな話である。江の島の稚兒ケ淵は稚兒が身を棄てて死んだといふことを傳へてゐる。これらは傳說から地名が出來たものらしい。北海道には辨慶崎とい

ふ所がある。チャンバレンによれば、ペンニケンといふ語で、山の結び目、山の脊骨といふ意味だといつて居る。それが義經が蝦夷に渡つたといふ傳説が出來てから、辨慶崎とつけたのである。さういふ風に、もとの地名が傳説の爲に似寄つた名にかはる様なことがある。丹波の大江山に鬼ケ城とか鬼ケ池といふ所があるが、大江山の酒呑童子(しゆてんどうじ)の傳説が出來てから後の地名かと考へられる。東京の本所にオイテケ堀といふ堀がある。肴などを持つて歩くと、「置いてけ置いてけ」と河童が言ふといふことである。さういふ風に傳説から地名が生ずるのである。

三河の鳳來山に算木に似た橋がある。算木橋と言つて居つたが、それを猿橋といふ様になつた。それは昔勅使が來た時に洪水で橋が落ちた。所が數多の猿が來て橋を架けて渡した。それで猿橋となつた。これも辨慶崎の様にもとの名前があるのに新しくなつた。傳説が地名を變化する力を持つて居るのであります。傳説も空想、文學も空想ですから、もと／＼親類ですが、歌だとか詩だとか、文學から地名になることがあります。「かくとだにえやは伊吹の」といへば「かくと谷」といふ所が出來る。西行の「鴫立つ澤の秋の夕ぐれ」といふ歌からして「鴫立澤」といふ地名が現れて來た。「星月夜鎌倉山」といふことから星月夜井なども出來た。布留山を處女子の袖振山といふ風に萬葉あたりから詠んだから、今では袖振山といふ山の名が出來た。それから現に天女が舞つたなどといふ傳説を更に產出した。これは文學から地名が出て、それから又傳説が出來た例である。武藏の眞乳山(まつち)、庵崎(いほざき)なども角田川といふ川名について、文學から出來た地名である。大和の初瀨には玉葛の舊跡がある。關寺小町の跡もあれば、深草少將の舊跡もある。須磨には光源氏の舊跡が出來て居る。八犬傳の伏姫の舊跡もある。文學の

上からも地名を生じ、名所も生ずるのである。かういふ風に地名は傳說を產み、傳說や文學は又地名を產むこともあるのであります。

かういふ風に傳說を考へてみますと、地名傳說といふものは實に澤山ある。その勢力も大きいものである。さうして其の性質が色々ある。筑波山に行つて見れば高天原がある。それから大和の天香山、又日本武尊が矢を矧がれたから矢矧川、神武天皇が御東征の時大きな熊が光を放つたから熊野などいふのは、古い神話的傳說の結付いたのである。義經、辨慶のやうな中古の英雄譚に關したものは、辨慶の腰掛石とか、景淸の力競石など澤山ある。金剛山は金剛神の戰つた所とか、久米仙人の久米寺とかの樣に宗教的傳說もある。又筆捨山は狩野古法眼が繪を畫いて筆を捨てたから筆捨山、伊勢の山邊村は山邊赤人が住んで居つたなどといふのは、皆技術傳說の部類に屬する。かういふ風に各種の傳說が含まれて居る。

又其の淵源を顧みますれば、上代から現世まで始終新に生じて來るので、各種の種類が絕えず生じて居るのである。一旦生じた傳說は滅びることがない。其の生命は無窮である。唯形を幾分か變ずるだけである。傳說は丁度蠶の樣なもので、繭を結んだと思ふと蛹になり、蛹になつたと思ふと蝶になるといふ樣に、色々の形を持つて變じて來るのである。昔支那から渡つた事と同じ樣なものもある。毛蟲と蠶と違つても、實際は同じものが澤山ある。さうして絕えず古いのが繰返されて居る。龍田の神に就いての傳說がある。これは雷神の子で、大雨の時落ちて百姓に養はれて、大きくなつて龍になつて天に登つて行つたといふ傳說である。それは風土記に出て居る伊

福部（ふくべ）の神の話である。この話は雷神を捕へに行つたら、雷神が閉口して「堪忍してくれ」と言ふ。「その代りにお前の田を豐饒にしてやる」と言つた話で、龍田神のも、田が雷神のお蔭で良くなる話である。これが後に狂言の神鳴といふものになつたのである。雷神が落ちて腰を抜かしたのを醫者が癒してやる。雷は喜んで「お前の田はいつまでも良くしてやる」と言つたとなつて居ります。神話時代の古いものが形が少しづつ變つて傳はつて居るのであります。子死越とか、龍口とか、惡い神様が女を食ふといふのは素戔嗚尊が八股蛇を退治したといふのと同じである。昔にどこか聞き覺えた話を、何かにくつ付けて唱へるのである。東京の妻戀坂、あすこでは吾妻戀しと歎息したから妻戀だといふ様に、日本武尊の話を繰返してあすこまで持つて來て居る。鎌倉に蛇ケ谷といふ所がある。昔一人の女が、或稚兒を慕つて居つたが、其の稚兒が言ふことを聞かない。女はとう／＼死んでしまつた。死んでしまふと、今度は稚兒が病氣になつた。稚兒の兩親が心配して居ると、夜中に話聲が聞える。覗いて見れば稚兒と蛇が向きあつて話をして居るのが見えた。其の中に其の稚兒が死んでしまつたが、それを葬つてから、後で墓を發（あば）いて見たら、大きな蛇が稚兒のからだを巻いて居つたといふ恐しい話で、これは道成寺の安珍清姫と同じ話である。嫉妬心から鬼になり、蛇になるといふことがよくある。この蛇ケ谷の話もつまりさういふ話を繰返したのに過ぎぬ。蟹滿寺（かいまんじ）といふのは、一人の女があつて蟹を助けた。所が蛇はその女を見込んで、女の家を廻つて居る。女は恐れて御經を讀んで居ると、或晩屋根からはいりさうになつて來た途端、蟹が來て其の蛇を切つてしまつてそれで助かつた。此の話は印度からの傳來である。蟹と蛇とは付き物で、印度には澤山其の話

がある。これは靈異記や今昔物語にいくらも出て居る。蟹滿寺も同じことを繰返して居るのである。吉野拾遺に鳥塚の話がある。左馬介氏明が怪鳥を射た話で、源三位賴政の話と同じことである。

かういふ風に同じ傳說を繰返しますから各地方に同じ話が存在して居る。例へば姥ケ池といふ話がある。姥が嫉妬心で池の中に身を投げて死んでしまつた。人が若しその池の近所で女の惡口を言ふと、ブツ〳〵と動く、礬めるとじつとして居る。この姥ケ池といふのは駿河と攝津とにあります。水の中に死んだ人が今でも祟るとか、そこに行くと雨が降るとかいふ樣なのは、各地方に傳播して澤山にある。先刻お話をした鏡を記念にしたといふ話が、鏡川といつて筑前にもある。狹手彥といふ者が妻に「鏡を置いて己を見よ」といつて、妻が見て悲しんだといふことである。筑前にも足柄山のやうなことが童話となつて居るのもある。それですから筆捨山が伊勢にもあれば、金澤にも筆捨松などといふのもあります。鐘ケ淵といふ場所も方々にある。それだから、天香山は昔から半分づつ伊豫と大和の國に分れて居る。萬葉集にある菟原處女の處女塚は河內の國にも、大和の國にも、攝津の國にもある。萬葉時代にも幾通りもあつた。東京の神田にもお玉ケ池といふのがある。これも昔美しい一人の女が二人の男に挑まれて身を投げたといふので、つまり同じ傳說を繰返して居るのである。善光寺の如來も、淺草の如來も、堀の中から上つたのである。場所が違ふだけで、同じ傳說である。日本國中到る所に天滿天神や稻荷樣を祀るやうに、到る所に同じ傳說がある。同じ歷史の下に同じ傳說の狀態に住んで居る以上は、同じことを繰返すといふのは當り前である。それですから二千年來の開化を爲し來つた我が國民は、一寸した所にも由緖を

つけ、傳說をくつ付けて、到る所に傳說のない所はないやうになつて居ります。木曾の寢覺の床といふのは浦島太郎が釣をした所だといひ、甲州の太刀岡山は聖德太子が守屋と戰はれた所だといひ、信州の戸隱山には手力雄命を祀るやうになつて居る。大和の鷹取の城には、鷹取といふ名から竹取物語と同じ話が付いて居る。これらは分りきつた噓であるが、傳說といふものはさういふ風に擴がるものであると考へればなか〳〵面白い。

時代によつて傳說の變化をして行くことの例を申上げて見れば、養老の瀑は歷史によれば酒が出た泉でも何でもないのであるが、謠曲で見れば酒が出て來たといふ樣に變つて居る。又佐夜の中山の傳說がある。これは手兒(てこの)呼坂(よびさか)といふ所から來たらしい。昔女があつて或男と通じて孕んだ。或夜强盜に會つて殺された。法師に助けられて腹の子だけ助かつた。それから佐夜の中山の夜泣石といふ名が出來た。昔の手兒呼坂の話では、昔男女戀慕うて、坂一つ越えて通つて居た。眞中に惡い神があつて兩方から行くことが出來ぬから、呼び合うたといふのである。其の話で眞中の惡い神といふのが强盜になつて、日坂の女、金谷の男といふやうに變つて來たのである。傳說が形を變へて來るといふのはかういふ風である。伊賀といふ國は、昔或神樣が十握劍(とつかのつるぎ)を預つてお下りになつたが、神樣は伊賀の稻田姬に戀慕して政道を見られぬ。大神が怒つて「劍を返せ」と仰しやつたがお返しにならぬ。大神はいよ〳〵御立腹になつて、國中に色々の禍を下された。よつてお宮を立ててお祀りをした處が、大神始めて御怒がとけて「心安し」と仰しやつて、それから伊賀といふ國名が起つたといふ奇妙奇天烈な傳說もある。之を風土記の吾娥津姬(あがつひめ)の話に比べれば、非常に複雜になつて來ました。けれども昔の話が色々に結付いて變つて居

るのである。かうなると實に牽强附會で笑ふべき話であるが、これで傳說の發達變遷が分つて來る。同一のことでありますが、それ〳〵時代によつて變化があるのが面白いのであります。

それでかういふ風な具合に、地名を解釋するといふことは上代の人ばかりでない。近代の學者でもやつて居る。齋藤彥麿のやうな人が、伊豆の國は出湯の國であるといひ、賀茂眞淵は武藏、相模をムサシモ、ムサガミだと言つて居る。又鴨祐之は甲斐は甲斐の黑駒とて飼の義だといひ、薩摩は幸寶だといつた。鹿兒島の內海は天孫遊獵の遺跡だなどと眞面目にいつて居る。かういふ風に學者も解釋をする。宗教家は自分の宗教の都合のためには、色々の話を拵へて居る。それは昔から今日まで絕えたことがない。又文學者は文學の傳說を變化して、狸穴といふ地名は八犬傳では狸の出たやうなことにする。妹背山といふ面白い名は、もとより文學には適當である。文學者が傳說の源を拵へて詩化して來る。さういふ風に故意に拵へることも澤山あります。

そこで一つの疑問が起る。昔の地名傳說は皆こんな風に故意に拵へたものではなからうか。或は全くさう信じて居つたものであらうかといふことであります。これは昔は實にさやうに信じたのであります。誰が作つた、誰が結付けたといふことは分らない。國民全體がいつの間にかそれを作つて、國民一般がそれを信じたのであります。一般の人がさう思つて居つたので、文學者や宗教家が作つたとしても、作つた瞬間はまだ傳說ではない。坊主が二荒山(ふたらさん)といふのを補陀落山(ふだらくさん)の事だと直す。さうすると、長い間には一般の人がその方を正しいとおもふ樣になる。さうなると傳說になつて來る。要するに多くは誰が作つたとも拵へたともなくして、一般の人に傳へられ

たものであります。併し古事記や風土記を拵へる時分に、態と拵へたものが無いとも限りませぬ。それを多くの人が信ずることになつて來たのです。一旦文學者の手にはいつて來て國民に傳はると、讀む人が信じまいと思つても自然信ずる樣になる。子供の時に桃太郎やカチ〳〵山のことを聞いても、あるべからざるやうに聞いて居りながら面白い樣に感じて居る。

要するに傳說は國民の考へ出した一種の詩的產物であつて、全く史學に關係ないといふことは言はれないのであります。今日は單に地名傳說に就いて申しますが、一般の傳說に就いて申しますれば、皆史學に多少の關係があるので、史學は申上げるまでもなく、國民の思想の發達も硏究の題目として居らなければなりませぬから、國民の如何なる思想が傳說の上にあらはれたか、其の思想は何處に起つて、何處へ擴がつたか、どんな風に變つたかといふやうなことは、其の時代の傳說を見て參考にしなければならぬと思ひます。伊賀の國の二つの傳說をみても、國民思想の變化は分つて來る。傳說そのものは歷史に關係ありませぬが、傳說の硏究といふことは史家にも棄てたものでない。歷史材料として傳說を硏究し、本當の史料と甄別することも、今日はまだ〳〵必要であるとおもひます。又傳說は文學には最も必要である。面白い傳說で文學に謠はれないのが澤山ある。地名傳說にもなか〳〵面白い話があるので、まだ文學に現れてないものを文學に謠ふといふことは大切のこととおもひますから、どうか一般に傳說硏究の盛になる樣にといふ私の希望を序に述べて置きます。

（史學會講演、明治三十八年六月、十月「史學雜誌」）

七福神の話

私は今日七福神の話といふ題でお話をいたします。登張君のとは違つて、あまり面白くはありませぬが、近頃は大分言論が殺伐の風を帶びて、帝國文學なども發賣停止になりましたから、何ぞおめでたい事を申さうといふので、實はこの題を申出して置きましたが、一昨日の戒嚴令の解除と共に發賣停止も許されました。いよ〳〵以ておめでたいといふので、やはりこれをお話するのであります。

七福神といふのは、御存じの通り惠比須、大黑、毘沙門、辨財天、福祿壽、壽老人、布袋和尙、これだけであります。尤も昔は少し違つて居つたやうで、丁度七博士が時々變るやうに少しづつは違つて居ました。福祿壽の代りに吉祥天女があつたり、壽老人の代りに猩々が居つたことなどがあります。併しながら、今日では今申すやうな七福神であります。中に和尙が一人混つて居りますが、それにも拘らず神樣となつて居ります。すべて幸福を守る神として尊ばれて居つて、古い時分から今日まで、日本國民の迷信を掌つて居ります。惠比須の如きは、今日でも西の宮に神社として祀られて居る。又商家では惠比須講をやる習俗などもあつて、今でも尊ばれて居る。紙幣の裏には惠比須、大黑などが描いてあり、エビスビールもあれば、大黑葡萄酒といふのもあります。不忍の

辨天、神樂坂の毘沙門など、其の信仰は、今でも國民の間に擴つて居る有樣であります。將に來らんとする正月に於ては、此の七福神が寶船に乘つて、二日の晩に皆さんの枕の下に來るといふやうなことである。その他彫刻や繪畫の材料になり、詩歌に詠まれ、小說に書かれ、常に國民とは密接の關係をもつてゐる七福神でありますから、少し其の事をお話したいとおもふのであります。それでどういふ人であるか、いつ頃から起つたかといふ事について、委しい事はまだ調べて居りませぬが、却つて調べない方が面白いかも知れぬ。唯私の考へをざつとお話いたしたいとおもふのです。

どこの國でも、幸福を欲するといふ事は人情でありまして、幸福を得るについては、世界各國に於て、種々の迷信があります。四つ葉を喜んだり、馬の蹄を喜んだり、豚を喜ぶといふ風は今日の西洋にもある。又日本に於てもさういふ事が昔からある。印度の因果應報の說が我が國へまだ入つて來ない前の日本固有の禍福の思想といふものは、先づ神樣に善い神樣と惡い神樣とあつて、人生に起る禍は惡い神卽ち禍の神のする所作である、善い神樣が守つて居れば何時でも善い事があり、惡い神樣が妨げれば何時も惡い事が起るといふ風に考へたので、米がよく出來た時でも、火災があつた場合でも、皆それ〲神樣の關り知つた事と信じたのである。それは祝詞（のりと）などにも明らかに見えて居る事であつて、御門祭、大殿祭、遷却祟神の祝詞などを見ても分る。何でも神樣が澤山居つて、それが人生の上に種々の結果を及ぼす、卽ち人の禍福に干涉するものであると、かういふやうに考へて居つた。これらの祝詞を見ると、福は內、鬼は外といふ思想は古くから現れて居つて、善い神は歡迎するが、惡

い者は外へ出ろといふ厄拂的考へがある。七福神といふ福の神の考へはこゝに兆して居ると見なければならぬ。所が佛教がはいつて來て、かの三世因果の說や、恐るべき輪廻說をもつて、日本の傳說界を壓倒し風靡した。けれどもいくら壓倒されても、國民の記憶といふものがあるから、日本の昔の傳說はさうむやみに潰されるものではない。いくらか形を變へて殘つて居るのみならず、中には印度のものも日本化して來た。又支那も迷信の盛な國であるから、色々な支那の迷信も日本へはいつて來たが、支那のは陰陽五行の理窟などが附いてはいつて來、日本の昔のものも、その理窟で說明が出來るといふ樣な風があつて、彼此混同したのである。先づ大體さういふことをお考へおきを願つて、これから七福神の素姓を洗つて見ようとおもひます。

先づ第一に惠比須は何人かといふに、ずつと七福神を見渡した所で、日本の着物を着て居るのはこの人一人であります。尤も大黑も大分日本風の着物を着て居るが、これは少し怪しいのであります。惠比須は風折烏帽子に素袍を着て居つて、純粹の日本服裝であります。其の名を見ても惠比須三郎といふので、純粹の日本名をもつて居る。七福神中でも最も日本人に親密な人で、一番愛せられて居る。腋に鯛を挾んで居り、釣竿を持つて居るところを見ると、海に緣のある人に違ない。海國たる日本の福の神としては實に相應な神樣といはねばならぬ。「ゑびす」といふ名が夷狄らしいが、其の語原は判然せぬとして、「ゑむ」(笑)といふ事に多少關係があるらしい。みはびと通ずるのである。三郎といふのは第三男に當る。三男といふ事は分るが、お父さんやお母さんは誰だか分らない。所が古くから之を蛭子(ひるこ)と同じものと見て居る。蛭子は日本書紀に依ると、伊弉諾尊、伊弉册尊が、先づ

天照皇大神、其の次に月讀尊、第三番目に蛭子を御生みなさつたとある。蛭子といふのは不具(かたはもの)で、三年の間足が立たなかつたといふ。それ故、二柱の神が船に乘せて海へ抛り出されたのである。これが果して福の神になる價値がありませうか。一說によれば彥火々出見尊であるといふ。これも日本書紀一書曰によれば三番目の御子に當る。卽ち火の中から御生れなすつた神様で、火酢芹命(ほのすそりの)、火折尊(ほをりの)の弟である。現に大隅の國に祀つてある惠比須は女をつれて居つて、大隅では彥火々出見尊を祀つてあると言つて居る。その女は卽ち豐玉姬であらうとは柴田花守の說である。私の考へでは、これはどちらでも同じ事であるとおもふのであります。といふのは卽ち外國の神話にも例のある事であつて、神様の海へお流されなさるといふことは太陽神にはありがちの事であります。我が國の神話には第一に太陽が生れ、其の次に月輪が生れ、其の次に蛭子が生れたとあつて、蛭子は不具者になつて居られますが、此の蛭子を自然現象から說いて見たならば、日の薄暗い時分、トワイライトのやうなものと見ては如何かとおもひます。希臘の神話などで曙光が日から逃れるといふのが普通であることも參考になります。希臘のヂオニソスといふ神様も、生れてから箱の中へ入れられて海へ流されてしまふ。さういふ事は幾らもある。彥火々出見尊はやはり太陽である。太陽は海へ沒するのが普通でありますから、海國の者は海から生れるとか海へ行くとかいふ事を說くのであります。彥火々出見尊が海へ行かれるのは太陽神話の形式だらうとおもひます。ベレロフオーンといふ神様も海から生れて來る。ヘリオスといふ神も海神の娘を妻とします。私の考へでは、日本の神話では太陽が天照皇大神といふ女性の神におなりなさつた。太陽神は元來强い性質をもつて居らなければ

ならぬ。然るに女神におなりなさつたについて、太陽としての性質は外の神樣へだん〳〵渡つて行つた傾きがあるかとおもふ。素戔嗚尊にしても、彦火々出見尊にしても、或は大國主神にしても、太陽神話にある普通の性質を分けてもつておいでになるやうに考へる。さういふ說を私はもつて居る。委しい事は省きますが、それから考へて、蛭子にしても彦火々出見尊にしても、やはり太陽神話の一部分と考へるので、どちらでも構はぬ。惠比須が先にあつて、後世蛭子の二字を間違へて惠比須と讀んだといふことではなく、最初から太陽神話の續きとして蛭子又は彦火々出見尊の海へ行かれたといふ話が殘つて居り、それが後になつて惠比須三郎といふ名を得られたのだらうと考へるのであります。それだからこれは先づ七福神の中でも一番古い人で、日本固有の神樣である。西の海へ行つて鯛を持つて居るといふ事は、彦火々出見尊は海の幸を掌る神樣であるからよく當つて居る。西の海へ流れて行つたといふことで、攝津の國に祀られて居る。西といふことを考へなければならぬ。

西の海に風心せよ西の宮あづまにのみやゑびすさぶらふ（慈鎭和尙）

世を救ふゑびすの神の誓ひにはもらさじものをかずならぬ身も（安心法師）

などいふ歌があつて、惠比須といふ名も隨分古い事が分る。源平盛衰記の中にも平康賴が居つた硫黃ケ島の住居から五十町ばかりの所に惠比須三郞の社があつて、康賴が祝詞を唱へたといふ事がある。また惠比須と蛭子とを同じと見たのも古い事で、吉野拾遺に、吉野川の鵜飼の時、左衛門尉康方といふ人が、水練が上手で、鱸（すずき）と鯉とを抱へて來た所を見て、蛭子に似て居ると評したといふ事がある。狂言記の中に蛭子（えびす）大黑天といふのがあります

が、其の時には立派に蛭子の事にして說いてあります。或人が謂れを聞きたいといふと「汝は今までそれを知らぬといふは、ちと不信心でおりやる。語つて聞かさう」といふので「抑々伊弉諾、伊弉册尊、天の岩倉にて男女の御かたらひをなされ、日の神、月の神、蛭子、素戔嗚尊をまうけ給ふ。蛭子とはそれがし事なり。天照大神より三番目の弟なればとて、西の宮の惠比須三郞といはゝれ、威光を現す。貧なる者には福を與へ、福貴に守ることなり。何ぼう由々しき惠比須三郞殿にてはなきか」と自畫自賛をして居ります。卽ち元は神話から出で、足利時代には立派な福の神になつて居ります。

惠比須と並び稱へられるのは大黑であります。今お話した狂言にも惠比須大黑と一緒に並んで居る。神棚などにも並べて置くことが多い。併しこれは元來日本人ではない。もとは印度の種である。印度の人が日本へ渡つたので、卽ち印度の婆羅門の神話から出て來た人であらうとおもふ。大國主神を音で讀むと似て居る所から、後に同人としてしまつたので、日本の歸化人の樣になつた。印度の名は「マハカラ」といふので、「マハ」は大、「カラ」は黑いといふのであります。此の事は南海寄歸傳、あの高楠君が西洋で飜譯された寄歸傳の中に書いてある。それによれば、西方のお寺では臺所に木像を安置する。其の形、坐して金囊を頂き、一脚を地に垂る、常に油を以て拭ふ、故に大黑なりといふ。尤もマハカラの最初の義は大時といふので、時には破壞の意味があつて、恐しい破壞の神で、戰鬪の神であつたので、三面六臂の恐しい形相であつたのですが、後に福神となつたらしくみえます。阿婆嚩抄には福神として此の天を祀るといふ事が書いてあります。攝軌に「伽藍の中に安置して、日々供養禮拜

する時は、千人の衆徒を扶助せん、乃至人宅も亦然なり」とあつて、寄歸傳にも百味の飲食を供へれば福を與へてやるといふ風に書いてあります。印度の信仰から來た神であります。お寺の細君を大黑といふのも、臺所に居るからでありませう。又大黑柱などといふのも、このわけでありませう。とにかく臺所に坐つて居つて、食物を拵へる時にはこれに供養するので、福を得るために祀つて居つたものらしい。それ故、惠比須様と一緒に神棚へ坐るのはもと〳〵間違である。けれども例の神佛混淆の方から來たので、元來比叡神社に大國主神が祀つてある所へ、傳敎大師が歸つて來て天台宗を開くについて、日本の大國主神の音讀の「だいこく」と同じ名であつたのを利用して、忽ち叡山に大黑天が出來たものと見える。其の後になつて三輪の大黑なども出來たのです。狂言記を見ても、西の宮の惠比須と、叡山の大黑と兩方へ參詣に行つて居る。其の中に「大黑天の御由來を知りたうござる」と聞くと「畏つてござります。抑々比叡山は尊き御山なり。此の山に守護神なくては叶はじと、傳敎大師祈り給へば、此の大黑天現るゝ。……此の大黑を比叡山の守護神といはひ、佛法今に繁昌せり。信仰せよ、信仰せよ、汝に福を與へうぞ」といふ事がある。大黑の素姓を洗つて見ると、印度からして遙かに渡つて來て、日本の大國主神の席を奪つた譯であります。

それから毘沙門天がありますが、此の人もやはり印度の神様であつて、御存じの通り手に鉾を持つて、恐しい顔つきをして居る人であります。これは一名多聞天であつて、古くから佛法守護の神將として傳はつて居ります。印度の名は「ヴアイスラマナ」、漢字では吠室羅摩拏と書いてある。これは大層寶をもつて居る人で、三界に餘る

程の資をもつた金持である。佛法守護神であつて、惡い者は片つ端から退治するといふ役目をもつて居ると同時に、善根を施した者には福德を與へる。卽ち大金持の評判の高い人である。つまり印度の佛敎と共に早く傳はつて來た人でありますが、後に寶物をもつて居るといふ事で福神の仲間へはいつたものとおもふ。これは日本人と附會されたこともなし、正銘の印度人で押通して居る人であります。

其の次が辨財天であります。これは七福神の中で唯一人の女性であつて、これも印度である。辨財天、大黑天などといふ天の字でも印度といふ事が分るのであります。つまり天といふのは神(デウス)といふ事であります。此の辨財天を信ずれば福德の報を受くといふ事が光明經に說いてあるので、それによつて福神と立てられたものでありす。住居は河の緣とか巖の中などにある。日本でも江の島の辨財天、竹生島の辨財天、叉は不忍の池の辨財天といふやうに、皆水のある所に祀ることになつて居る。昔水の近所にあつた神社を後には辨財天と附會したのも多いのだらうと考へる。これは元來天女でありますが、日本では嚴島明神などを辨財天と附會して來て居る。嚴島明神は天照大神と素戔嗚尊と盟約の間に出來た神で何の關係も無いのであるが、これを同一にしてしまつた。それからもう一つは宇迦之御魂(うかのみたま)といつて日本の穀物の神樣に附會して居ります。日本は米の國でありますから、穀物の神樣と附會したのであります。元來日本では奈良朝、平安朝の昔から吉祥天女といふものが信仰されて、日本靈異記、今昔物語あたりにも吉祥天女に祈つて幸福を得たといふ話が幾つもある。辨財天といふことは見えて居らぬ。辨財はもと辯才で、音聲がよく、辯舌の神であつたらしいが、いつか辨財の財の方になつて、これまで

吉祥天女の方につながれた信仰といふものを奪つてしまつたらしく見える。吉祥天女といふものが七福神の一人であつた事もあつて、其の時には女が二人であつたが、終に辨財天一人になつた。辨財の字が氣に入つたものと見える。それから金が幾らでも出來る、巳成金(みなるかね)などといふ御守りを出したりする様になつたかと思ふ。

其の次に五番目と六番目とを一緒に申しますが、福祿壽と壽老人、これは二人とも支那人であります。身なりを見ても支那人である。福祿壽と壽老人とは一人で二つの名をもつて居るといふ説もあります。とにかく同じやうな人である。兩方とも仙人みたやうな人で命の長い人であります。頭の長い方が福祿壽であつて、普通の老人の形をして鹿をつれて居るのが壽老人であります。此の二人は何れも星の生れかはりで、支那の天文學に壽星といふ星と南極老人星といふ星がある。シユレーゲルのウラノグラフイー、シノアといふ本を見ると、其の位置は書いてありますが、名は分らぬ。何しろこの星が宋の世に人間になつて現れたといふ事が見えて居る。つまり星が殞ちて人間になつたのである。此の事は支那では古い思想であつて、日本でも昔から支那の思想が渡つて、星が下つて人間になるといふ事はある。太子傳曆にもその傳說が傳はつて居る。水滸傳などの思想はつまりこの考へであります。星を以て人の吉凶禍福を占ふことは支那では早くからの考へです。それで壽星、南極老人星といふ星が出るのは天下泰平である。之は春秋時代からの考へであつた。(老人星治平則見)(南極老人見則天下安)それが偶々宋の世になつて人間となつて現れて來たといふ事を言つたものと見える。其の中で壽星が生れかはつて福祿壽となり、南極老人星が壽老人となつた。福祿壽、天に在つては卽ち泰山府君だといふ説もありますが、

さうすれば源平盛衰記の櫻町中納言などの話もあり、謠曲にも出て居つて、泰山府君の事は古くから日本人の知つて居つたものです。いづれにしても、星が下つて人間となつたといふのであります。さて又命が長ければ頭が長いといふのも支那人の考へで、頭の長い人を書いたのであります。けれども風俗記の老人星傳といふものに書いてある文で見ると、錢の無いといふことは分つて居る。錢があれば飮んでしまふので、金の方からの福神ではなくて、命の長い方から此の二人は七福神の中に入つて居る譯であります。

それから第七番目に布袋和尙。他の六人は皆空想の人でありますが、此の布袋和尙だけは實際の人物らしい。卽ち唐の世の人で、唐の高僧傳に出て居る。寧波といふ所の嶽林寺といふ寺に居た和尙である。死んだのは後梁の貞明二年丙子三月卽ち日本の延喜十六年、死ぬ時に作つた偈まで傳はつて居る。

彌勒眞彌勒　分身千百億　時々示時人　時人自不識

などと洒落て居る。之を見ると自分を彌勒と稱へて居つた人である。餘程抱負の大きな坊さんであつたといふ事が分る。名は契此といひ、又長汀子と號し、大きな袋を備へて、何でも貰つたものはそれへ入れるから布袋といはれた。其の形を見るに乞食坊主であつて、決して福神となる價値がない。けれども自ら彌勒と言つた位だから、奇僧であつたに違ひない。已に宋の世には爭うて其の圖を作つたとあつて、元史に或女が子供を生んだ所が、其の子が布袋和尙に似て居たと書いてある。「如世俗所畫布袋和尙」とあるから、其の時分已によく畫にもかゝれ、人口に膾炙して居つたといふ事が分る。さうしてだん〳〵日本へはいつて來たのであります。布袋和尙は子供と

遊ぶのが好きであつて、常に十八人の子と遊んだとあります。その子供とにこ〳〵して遊んで居るところ、無邪氣で、洒々落々、呑氣なところから、いつか福神の中へはいつたのでありませう。

七福神の素姓を申すと、ざつとさういふ譯になる。男が六人で、女が一人。國分けにすると、日本が一人、印度人が三人、支那人が三人。系圖をたどすと、日本の神話から出た者が一人、印度の神話から出た者が三人、支那の傳說に出た者が二人、本當の和尙が一人。かういふ譯である。支那の方から來たものが一番新しい。唐の世などであるから年代が新しい。又福の神の資格をいへば、惠比須は海の幸を掌つた所からの福神で、大黑、毘沙門、辨財天は福祿を掌つて居る。就中大黑、辨財の二神は日本へ入つてから穀物と關係をもつて來た。印度では片足を下げて居た大黑が俵の上へ行儀よく坐る事となつた。それから福祿壽、壽老人は延命の福神である。福祿壽は琉球から來たといふ說もある。さうすれば尙面白い。合の子が一人はいることになる。布袋の福神の資格は、極めて呑氣で世の中の事を苦にしないで遊んで居る點に在るのであらう。子供が好きで、澤山の子供と遊んで居るといふ事も一資格かも知れぬ。それから又唯福神といふだけでは寂しいから、皆何かつれて居る。これは希臘の神樣でも皆それ〳〵附物がある。それで七福神を見ると、惠比須は鯛を抱へて居り、大黑樣は俵の上に坐つて鼠が其のお使である。印度では臺所に居つて片足を下へさげて居たのが、日本へ來てから行儀よく坐つて居る。鼠を使とするのは、元來北方を掌る神であるからで、甲子の日を緣日として居るのもこの譯である。今はペストなどの爲に鼠はあまり感心しない。それから辨財天は龍の上に坐つて居る。日本の奇稻田姬などの傳で、女人と

龍は關係がある。これは普通の神話の形式でありませう。それから毘沙門は百足(むかで)を使ふ。連歌毘沙門といふ狂言に「毘沙門の福ありのみと聞くからにくらまぎれよりむかでくひけり」とあつて鞍馬と百足とを詠み込んであります。それなどを見ると百足は毘沙門の附物である。これはどういふ所から來たか、お足が多いといふので、金の意味であらうか。まだ調べが屆かない。それから福祿壽は鹿です。鹿といふものは一體命が長い。支那でも白鹿二千歲などといふ。それから壽老人は鶴と龜で、鶴と龜のおめでたいのは分つて居る。唯福神だけではいかぬから色々おめでたいものを副へたのであります。そこで御一新あたりまでは神佛混淆でありましたから、七福神は皆佛樣に混つて居たらしい。江戶では七福神參りといふがあつて、彼方此方を廻つた。其の中には不忍の池の辨天なども入つて居つた。東都歲事記に七福神巡りの事が書いてある。神佛混淆を止められてから後は、惠比須樣は神樣になつてしまつて、あとは佛の方に屬した。谷中や向島にはもとは七福神が揃つて居たが、今はあまり有名で無い。神樂坂の毘沙門、不忍の辨天などは緣日があつて、人が知つて居る。

これらの七福神はどうして揃つたかといふに、先づ初め日本に惠比須といふものが古くからの傳說としてあつた。そこへ印度の佛敎と共に婆羅門の神話も傳はつて、それらとともに大黑、毘沙門、辨財天といふ三人もはいつて來た。就中大黑は大國主神と同名な所で日本人籍になつて、惠比須の仲好しになつた。吉祥天女も一時は行はれて居つたが、遂に辨財天に移つてしまつた。顏の怖しい毘沙門天も福德の神樣となつた。それから其の次に支那の福祿壽、壽老人、布袋といふ三人がはいつて來た(泰山府君は前からあつた)。尤も一時はその代りに猩々

などが居た事もあつたらしい。けれどもそれが後に直つて今の七福神になつたのであります。七福神といふ狂言、梅津長者物語などをみれば皆今日の七福神が揃つて居る。七といふ數は七夕、七夜、七曜、七賢人、七堂伽藍、なか／＼ある。「七人の子をなすとも女に心を許すな」といふ事もあるし、「色の白きは七難かくす」などともいふ。仁王經に「七難卽滅七福卽生」といふ事がある。此の七福卽生といふ御經の方の側からして、所謂神佛混淆の時代であるから、支那のもの、印度のもの、日本のもの等を合せて七福神といふものを拵へたのであらうと思ひます。

それで時代をいへば鎌倉あたりからして惠比須三郎の名は見えて居る。毘沙門や辨天は古くからあるが、北條の三鱗、楠木正成の幼名多聞丸など鎌倉以後その信仰の盛な事が分る。足利時代になつて例の緣起物の中に毘沙門の本地といふものもある。御曹司島渡りといふ小說の中には、義經が島巡りをして辨天に會つて辨天と夫婦になる。しかも義經の前身は毘沙門であるといふやうな事がある。密敎などの傳播とともに、かういふ方の信仰が殖えて、足利時代に於ては餘程盛であつたものと思ふ。狂言の連歌毘沙門でみれば、大晦日の晩に鞍馬の山の毘沙門へ參詣に行つて福を祈るといふ事がある。又同じく狂言の文句で惠比須大黑は其の頃已に商賣の神樣になつて居つた事が分る。節分といふ狂言で福は內鬼は外といふ事の行はれた事も分る。すべてかういふ事が其の時代に盛に行はれた。一體、帝釋天、摩利支天とかいふミトロギーから出たものは、多く眞言の方から出て來たのでありませうが、すべて形を成して拜まれるやうになつたのは、足利時代に起つたものかと考へます。狂言や其の他の小說類を見て、如何に廣く國民に廣がつたものであるかといふ事が分ります。又足利の末には七福神盜賊と

いふものがあつて、七福神の行裝をして盜賊にはいると、さあ福の神のお出でだといふので、ずん／＼物を出して渡したといふので盜賊ども大當りしたといふ事が實際あつた。これは當時の日記にあると田中博士のお話であります。とにかく足利時代に七福神の盛にもてはやされた事が分ります。

そこで印度の方から來たものは、いふ迄もなく宗教から入つて來たものであるが、支那の方から來た三人は、寧ろ美術の方から來たものであらうとおもふ。卽ち畫の方から入つて來たものではないかとおもふ。あの時分宋、から元、明あたりの畫を學んで來たといふ事から考へて見ると、其の時分支那では布袋和尚を畫に描き、壽老人を畫に描いて居つて、さうして福神とするといふやうな考へをもつて居たのであつて、支那の方で普通描いて居つたから、それを日本でも描く樣になつたものであらうとおもふ。それが結付いて來たのは卽ち七難卽滅七福卽生といふ事から出て來たのであらうが、これも誰か畫工が、七人を集めて描き始めたのに起因したかとおもふ。

七福神が結付いて寶船に乘るやうになつたのも、恐らくは足利時代の事柄であらう。御曹司の島渡りとか、桃太郎鬼ケ島征伐とかいふ話の出て來たのも同時代で、かの日本の倭寇といふものが支那沿岸を荒したといふやうな時代のことであらうと考へます。この倭寇時代は實に遠征冒險の盛な時代でありますから、隨つて寶船といふ考へも出て、寶船に乘つて七福神が、來るのか行くのか分らぬが、とにかく乘つて居ることになつたのだらうとおもふ。寶船といふ思想から、七福神を寶船へ乘せるやうに描いて、日本の膨脹の氣運を示したものではないかとおもひます。それから枕の下へ敷いて夢合をするといふやうな事にもなつて來たのでせう。德川家康が始めて

描かせたなどといふ說もありますが、私はもつと前で、足利時代であらうと考へます。安齋隨筆によれば、足利時代に寶船の夢合が描いてあつたらしくみえますから、已に寶船の考へがあれば、其の船へ七福神を乘せるといふこともあつただらう、自然に考へ及ぶ事だらうと私は考へます。

これらの七福神に對しては我等國民は福の神として福德を願ふのみならず、一方から見れば常に之を笑の材料として居ります。笑ふ門には福來るといふ事もあつて、福は必ず笑を伴ふ。日本人は單に之を迷信の結果として尊敬したばかりでなく、寧ろ之を滑稽の材料にした事が澤山あるやうである。第一に大津繪に引つ張り出されて、福祿壽の長い頭に梯子を懸けて頭を剃る所がある。或は大黑が尻をからげて川を渡る所を描いて見たり、布袋と大黑と首引するところを描いたり、其の他いろ〳〵描いてある。狂歌にも澤山出て居る(雅筵醉狂集)。狂畫にしても、狂歌にしても、或は又狂言のやうなものの材料にしても、いつでも此の福神を以て笑の材料としてあらはして居ります。これは又一方國民性をあらはして面白い事と思ひます。

かいつまんでざつと申上げましたが、要するに印度、支那、日本と、三つのものが混合して一つの七福神を形づくつたといふのは面白い事であつて、一方には我が國の文明を代表して居ると見る事が出事る。それが丁度足利時代の文明を代表して居る事になる。又一方に於ては日本國民の迷信を示して居るので、且はどの位まで支那並に印度の文化に感化されたか、影響されたかといふ事を現し、卽ち佛敎の影響、又支那の繪畫、美術の影響が何處まであつたかといふ考へが其處に浮ぶわけであります。又一方に於ては如何に幸福を希ふといふ狀態があつ

たかとおもふと同時に、之を滑稽材料に供する國民の快濶な氣象もあらはれて居ります。それであるから見方によつては、つまり日本の文化を縮めて現して居るといふ事に解釋が付かぬことでもない。寶船の上に海外貿易などの事もおぼろげにあらはれて居ります。とにかくこれまで久しく國民と親密になつた七福神で、關係も深い事と思ひますから、今後とても惠比須三郎を中心として、印度、支那を引從へ、寶船に乘つて遠征するといふ様な事を國民に吹き込み、之を理想として、教育上に利用するといふ様な事の出來ぬ事もありますまい。甚だつまらぬ話ですが、これでおしまひ。

(帝國文學講演會講演、明治三十九年一月「帝國文學」)

目で見る文學

其山則崆峴嶱嵑、嵣峿嶚剌、岩崟嵬嵬、嶔巇屹嶕、幽谷嶜岑、夏含霜雪、或嵍嶙而纚聯、或豁爾而中絕、鞠巍巍其隱天、俯而觀乎雲霓。

爾其川瀆、則澧灃藻濊、發源巖穴、潛虛洞出、沒滑瀎潏、布濩漫汗、漭沆洋溢、總括趣欲、箭馳風疾、流湍投濈、砏汃輣軋、長輸遠逝、滲淚淢汨。(南都賦)

右の様な活版小僧の迷惑するむづかしい文字をならべた文章は、餘程の漢學者でなければ了解が出來ぬ。併し

誰が見ても、山や川の事を書いたものだといふことだけは分る。一々の語は分らぬが、ずつと見渡してさうらしく見える。これが漢字の魔力である。漢字は元來象形文字の轉變したもので、其の成立には六書といふ方法はあるが、どうしても半ば繪畫といふ性質をもつて居る。單純に音をうつす文字ではない。同じ音でも字にすれば、色々に區別する。曼、慢、漫、蔓、幔、饅、縵、鰻、鏝などと、語根の意味は同じで、字にすれば、それ〴〵分類をして、どの部類に屬するか、分り易くなつて居る。音を聞いては同様でも、字を見れば直ちに區別が分る。音の數は限あつて、字の數は殆ど際限がないといつてもよろしい。それであるから、漢文學の價値は其の文字を棄ててしまつたら、餘程減殺されるものである。支那の詩文を羅馬字か何かに書きあらはしたなら、六朝文字などは勿論のこと、老荘の文でも、韓柳の文でも、決して元の興味は惹起し得られぬものである。支那の文學はどうしても目で見て其の漢文字の形を心で讀むから面白いのである。日本人が漢文を讀んだ様に、主要な文字は其の儘にしておいて、テニヲハだけを附加へて讀めば、原文の面白味は失はれぬのであるが、全く飜譯してしまへば、普通の飜譯上の損失にかてて加へて、漢字そのものの魔力を放棄してしまはねばならぬといふ大損失がある。獨逸文字で獨逸文を讀み慣れた人は、羅馬字で書いた獨逸文は獨逸文の様な氣がせぬといふ人もあるが、これは唯習慣上の事である。羅馬字で綴つた梵文にしても格別の差はなからう。併し支那文學にはどうしても漢字は離れられぬ。離れゝば、其の價値がずつと少くなるのである。半ばは目に訴へる文學である。

國文學が漢文の影響を受けたことは今更いふまでもないが、萬葉集の歌に漢字の義訓や戲書を用ひて、涙を戀

水、出でを山上復有山、北を向南、もちづきを三五月などと書いたのは已に目に訴へる傾向をもつて居る。併しこれは筆記する人の筆のすさびで、歌そのものに關係はない。後世の和漢混淆文で、漢語の語彙を音讀の儘、國文學に用ひる樣になつてからは、やゝもすればこの漢字の魔力を利用して、漢字の外形によつて文の裝飾とする樣な傾が見える。始終漢文學を見慣れた目から見れば、國文の假名ばかりでは、字體が已に柔かであつて、豪健な文には適せぬ樣におもふ處から、假名でも漢字でも同樣である處に、漢字を使用しなければ氣が濟まぬ。なりと書くところを也、べしと書く所を可し、容しと書いて、其の方が强味がある樣におもふ。かよりも乎、かなよりも哉の方が勢があると考へる。無用な場所へ、矣焉などの文字を使ふことは近來全く無くなつたが、こひねがはくはといふ一の國語へ庶幾、冀、尙などの漢字を宛て、ゆくといふ語に之く、往く、行く、逝くなどの漢字を使ひ分けることは依然行はれて居る。何々然、何々焉などいふ漢語から出た形容辭を使ふのは、漢文學に見慣れた形を使ふので、聞いただけでは分らぬ。字を見て始めて分るのである。淥焉逝くといふのを耳で聞けば、公園行くと同じである。「漢字不可廢、漢字を廢すれば國文學の價値がなくなる。古來の文學を奈何にせん」など絕叫するのは、幾分かは國文學が漢字の字形を賴みにし、生命にして居る證據である。馬琴の小說中の閑話休題、却說、浩處、傍室、縹致、熱閙場、十字街堂等を假名になしたところが、これは唯馬琴のペダンチックな鼻を挫うてしまふだけで、馬琴の作物には影響せぬとおもふが、貔貅、艨艟などの文字を列ねて、凱旋祝文の重要な裝飾として居る文學では、漢字を封ぜられると餘程困るのである。日本は早くから漢字を國字として用ひて居つて、

目に訴へる方からも少からぬ關係をもつて居るから、これは誠に當然な次第である。「岌々乎として殆い哉」といへば、如何にも危さうにみえるが、「きふ／＼ことしてあやふいかな」では危さの度が餘程減る樣に考へられるのである。支那文學と漢字の離れられぬ因緣のあると同樣、國文學でも幾分かは漢字とは離れられぬ因緣が添つて居るらしく見える。

これ程漢字の存在が國文學に必要なものならば、未來永劫漢字を廢する事が出來ぬし、又將來の文學でこんな困難は打克つことが出來る見込ならば、なるべく目に訴へる方の事はやめにして、漢字を離れて國文學の價値を獨立させたいと思ふ。これは漢語傳來の語を國文學から除去するといふのではない。漢字の字形を以て讀者をチヤームするといふこと、紙の上でばかり面白く見せるといふことを文章家がなるべく棄てればよいのである。漢字を離れて將來國文學の獨立が出來ぬといふ理由はどうしても無い樣に考へるから、どうかさうしたいと思ふ。

近來の韻文について實はこの考を起したのである。近年の韻文界は、むかしの外山先生時代から見れば餘程進んだものである。思想の點から見ても、外形の點から見ても、十年二十年の進步は殆ど別天地の感があるのである。唯一つ腑に落ちぬことは、卽ち前にもいつた通り、目に訴へるといふ工夫が往々用ひられて居る事である。今の韻文は多くは讀むためのもので、實際謠ふための詩歌でないのが多いから、自らさうなる事もあらう。かけ詞のウオルト、スピールなどは今の詩人は用ひぬが、漢文學の助太刀を賴んで詩歌の內容を豐富にしようといふ計略は今でも往々用ひられて居る。元來の國語が語彙に貧弱な爲、やむを得ぬとしても、これは國詩の發達上大

いに考へなければならぬ事項と考へる。卽ち詩歌の假名だけをたどつて讀むのと、漢字を知つて居つて讀むのとは、其の詩歌の味を享受するに於て大變な相違があるのである。たとへば理想をおもひ、眞諦をみなもと、運命をさだめ、祖母をおや、情人をひと、故鄕をさと、美觀をみえ、闇黑をまやみ等と振假名をしたのを見れば、漢字を知らぬものには、其の作者の思想は半分も通らぬかとおもはれる。假名で讀んで、漢字を見て、成程單におもひといふが、普通のおもひではなくして理想の意味のおもひだなと始めて合點するのである。いはば自分の國詩に漢字を振假名にしたもの、言ひ換へれば漢字の註釋を附加へたのである。かういふ事は漢字の助太刀を頼むといふもので、國詩の作家として甚だ卑怯な處置ではあるまいかとおもふ。國語にそれだけの語彙が足らなければ、漢語を其の儘に用ひるなり、外國語を用ひるなり、俗語を採用するなり、新語を作るなりして、其の調和をよくすればよいのである。其の工夫が必要である。あり來りの國語を樂に使つて、國語以上の意味を言顯すために、漢字の振假名ではない、振漢字を作つて、讀者の推察を乞ふといふのは、面白からぬ事とおもふ。

馬琴や紅葉などが用ひた樣に、わざとむづかしい漢字を宛てはめる事も、今後はやめにしたい。逍遙博士の浦島にも隨分むづかしい漢字があてゝある。あこがれるといふ語が、憧、憬狂、渴仰と三色に書き分けてある。併しそれは漢字を用ひて居る以上は、萬葉集の戲書同樣、意味の上に關係がない限り、勝手にしてよろしい。たゞし漢字を借りて國語以上の意味を運ばせようといふのは、文句の足らぬところを揷畫で御察し下さいといふ樣なもので、國詩として、なるべく避けねばならぬ事とおもふ。音樂の發達とともに、謠はれる詩歌も多くなり、樂

劇の論も盛になつて來る今日、目ばかりに訴へることは避けられるだけは避けたいとおもふ。

（明治三十九年五月「東亞之光」）

日本家庭百科事彙編纂の由來

歐米諸國の學者が百科辭典に焦慮せるはその由來頗る遠し。近時最も普通に行はるゝもの、英にエンサイクロペヂア・ブリタニカ、チヤンバース・エンサイクロペヂアあり。米にインターナショナル・サイクロペヂア、ゼ・ニユー・アメリカン・サイクロペヂアあり。獨にマイヤー、ブロツクハウス二家のコンヴエルザシオンス・レキシコンあり。佛にヌーヴオー・ラルース・イルユストレあり。其の他同種類のもの尙甚だ多し。いづれも數年每に新版を出して、日進の社會に應じ、國民の智能を啓發す。歐米國民の常識に富み、活動向上の精神を失はざるもの、洵に因由ありといふべし。我が國古くは三才圖會あり、最も通俗なるものに節用集、大雜書の類ありと雖も、もとより以て同日の談にあらず。近くは神宮司廳に古事類苑の編纂あり、經濟雜誌社に社會事彙の出版ありて、故事を拾集し、沿革を臚列せる點に於ては、學者の便益を與へ、社會の知識を增進せるもの亦甚だ大なりと雖も、一般國民に日常必須の知識を供給し、實用の利便を附與するに至りては、尙甚だ遠きやの感あり。加ふる

に二書共に本邦の事實をのみ採りて、海外諸國に及ばず、近年各專門字書の發刊、亦日に多きを加ふれども、これは尙通俗平易の旨に遠し。軍事上の進步に於て、世界を驚動せしめたる我が日本國も、社會的教育の道に於ては、徒に歐米諸國の後塵を拜するの憾なくはあらず。

明治三十四年春、余留學して獨逸伯林に在り。會々同市ユリウス・ベツケル出版のコンヴエルザシオンス・レキシコン・デア・フラウの刊行せらるゝを見、かくの如き辭典を以て我が國の家庭に供給せば、婚期早き婦女をして、修學年限の短きを歎ぜしむることなく、家庭の改善進步には莫大なる效果あるべしと思惟したりき。女子教育專攷の爲、當時ライプチツヒに留學せし下田次郎氏の伯林に來遊せるに及び、一夕談此の事に及びしに、氏も亦同樣の感想を抱けりとの事にて、歸朝の上は協力して我が國の家庭に適當なる一書を編纂せんとの契約を結びぬ。よりて余は直ちに書を富山房主坂本嘉治馬氏に送りて、余等の意見を陳じ、本書の性質、編纂法等に就いて縷述し、余等の歸朝に先ちて、幾分の用意を爲し置くべき旨を慫慂せり。越えて數月、坂本氏より返書あり、同社の編輯員杉谷虎藏氏と諮りて、編纂の手筈を定め、梅澤精一氏を以て之に當らしめし由報道あり。梅澤氏はまづ本邦に關する材料事實の蒐集に著手したりき。余は三十五年八月に、下田氏は同年十一月に歸朝し、爾後常に相會して編纂の方法に就いて商議し、材料を修正校閱するの任に當れり。此の時大鳥居弃三、石原和三郎の諸氏亦入つて梅澤氏と協力せられしが、幾くもなくして文學士長谷川福平氏に依託するに編輯主任を以てせり。これ明治三十六年九月の事にして、爾來氏は專心此の業務に當り、明治三十八年五月に至りて、略々大體の整理を

告げしを以て、まづア行の部より印刷所に送附し、隨つて成れば隨つて印刷し、遂に本年十月を以て、全部の竣成を見るに至れり。從來本邦此の種の著述少く、項目の調査、材料の蒐集、解釋の方法等に於ては、編輯上困難を感ぜし場合頗る多く、東西の書籍を渉獵して、飜譯に、叉拔萃に、圖書館の往復は極めて頻繁たりしのみならず、現今の技藝、工業、製作品等の調査、其の他日常の風俗流行、市井の雜事等に至りては、一々其の道の人に就きて實際を調査する必要あり、稿本一たび成れば之を專門諸家に送りて、更に其の訂正を仰げるものあり。社會の變遷に應じて、既成の原稿も亦改删せざるべからざるものあり。字句の修正、振假名、送假名、印刷の校合、挿畫の選擇、活版所、印刷工場との交渉等、各種の雜務の外部に現れざる苦心も亦多かりき。下田氏と余とは共に教職を帶びたる身にして、其の餘暇を以て、注意助言を與へ、編纂を督せしことなれば、長谷川氏は常に部下を指揮して一切の責務にあたり、晨起晩眠、大暑燬くが如き日も編輯室の領中に坐して倦怠の色なく、遂に今日の完結を見るを得たり。本書の成れるは半ばは長谷川氏が勤勉と健康との賜なりといはざるべからず。

本書は未だ以て歐米諸國のサイクロペヂアに比肩すべきにあらざれども、其の世界各國一般學術の知識を蒐集し、しかも實際日用の利便を忘れざる點に於ては、現今の社會教育上に幾分の裨補する所なしといふべからず。本書はもとより理想の幾分を現實にせるものに過ぎず。本書の缺點不完全は版を重ぬるとともに、次第に改善に進まんことは、余等の將來に期待する所にして、進步せる日本の社會に於ては、一層浩瀚なる各種の百科辭典の續出せんことも、亦余等の翹望して已まざる所なり。

本書發刊に際して、聊か本書編纂の由來を記す。

（明治三十九年十月しるす）

明治文學史序

徳川時代の學者は知徳を重んじて情を輕んじ、文藝の暗黒面を認めて、その價値の至大なるを忘れたるが如し。新井白石は猿樂の流行を見て、政綱紊亂の兆として苦言を將軍に進め、山本北山は淨瑠璃の文を愛讀しながら、尙之を厠中にのみ繙讀せりといふ。曲亭馬琴の如き、生涯を小說の述作に委ねたる人すら、言ふところは有用の書を購はんが爲に無用の書を著すといふに在り。何ぞその文藝に對するの冷淡にして、これを輕侮したるの甚しきや。日露戰爭の捷利は古來武士道の敎訓に原因すとは道學者の言にして、維新の鴻業は水戸學に胚胎し、學者の論議よく天下の大勢を左右したりとは史家常套の說なれども、その武士道を宣傳し、忠君愛國の思想を國民一般に浸染せしめたるものは、實はかの士君子の見るを陋とし恥としたる小說、淨瑠璃、演劇等、いはゆる平民文學の功勞によらずんばあらず。狂言の吉例とせられたる曾我兩孝子の名は草刈童にも知れ渡り、忠臣藏の幾幕かは津々浦々の村芝居にも演ぜられざる無かりしを思へば、無用の書は却つて有用の功を齎らし、戯作の影響は甚だ眞面目なるものありしにあらずや。

純文學の士君子の間に尊重せられざりし結果は、精神界第一流の人物をして筆を斯の方面に執らしむることなく、小說、戲曲の如き、眞箇に生命あり活氣ある文學を擧げて、嗜好低き中流以下の社會に委ぬるに至り、爲に文學も亦鄙陋淫猥の域を脫する能はざりしは、我が德川文學史上の一大遺憾といふべし。文藝を尊重する風の盛なること歐洲諸國の如くなりしならんには、白石の如きは蓋し世界に雄視する一代の大文豪たりしならん。

然れどもかくの如き時代にありて、いはゆる平民文學の發展のさばかりに顯著なりしを思へば、亦自ら人意を強うするものあり。凡そ國家の隆昌なる、必ず文學の見るべきものあり。國民の意氣銷沈するや、文學も亦萎靡して振はず。支那、朝鮮等近世文學の甚だ寂寥なるを思へば、我が國が東洋の覇者たるべき形勢は已に德川文學を以て豫言し得べかりしなり。

吾人はこゝに舊來の文學を繼承して、新に西洋の文化を受け、今よりは東西を融合渾化せる新國文學の發生を希望する地位に立てり。純文學に關する見解は一大變遷をなして、今や德川時代に士君子の繙讀するを憚りし無用の書は、多數の學者によりて硏究せられ、德川時代に士君子の列に伍する能はざりし戲作者は、詩人文學者を以て社會の上流に遇せらるゝに至れり。文學に對する尊重の此の如きを思ひ、國家の隆運前古共の比なく國民の發展亦益〻際涯なからんとする今日の狀勢を念ふに、國文學の前途に向つて赫灼たる光明の閃影を認め得たる感なき能はず。

今日は正にこれ過渡の時代なり。音樂に於て、繪畫に於て、尙蔚然たる大家の輩出せざる限り、國文學に於け

る偉人の發現も亦未だしかるべし。たゞこの過渡の時代が如何に經過し、如何に變遷し來れるかを見んは、將來の希望と理想とを滿足せしむる上に於て、幾多の興味を感ずべきのみならず、將來に起るべき新國文學の先驅たるべき現代文學を現今の人の手に敍述し評論せる本書（註―岩城準太郎著「明治文學史」）は、後人の目より見ば亦如何に多大の興味を惹起すべきならんと信じ、本書の刊行を喜悅するの情に禁へず。

（明治三十九年十二月しるす）

詩的言語と文法上品詞の價値

言語を性質、活用、職分より分類して、名詞、代名詞、接續詞などといふのが文法上の品詞區分で、これは諸君が外國語や國語の教授を受けられた時に學ばれた事とおもふ。卽ち英語でパート、オブ、スピーチ、獨逸語でレーデ、タイルといふものである。これらは言語の法則を說明する爲に便宜區別したものであるが、其の中の一つが缺けても、もとより完全な言語を構成する譯にはゆかぬ。助詞卽ちテニハの樣なものでも、その使用如何によつて、大變な間違を生ずる場合が尠くない。「文章が上手だ」といふのと、「文章も上手だ」といふ二つの言ひ顯し方の間には大きな相違がある。西洋人などが日本語を話すのを聞けば、大抵テニハを省いていふ故、完全な日本語ではない。品詞の間には自ら輕重があつて、名詞や動詞や形容詞等は最も大切なもので、それを知つて居れ

ば大抵な用向は足すことが出來ようが、場合によつては、さうは行かたい。「東京へ來る」と「東京から來る」一とでは大層な差別になる。故に正確を要する文章、理解を主要とする文章に於ては、どこ迄も完全に各品詞の職分を完うせしめて、卽ち完全な言語の法則によつて、文を構成してゆかねばならぬ。それでなくては完全な國語を使用するとはいはれぬのである。所が、美文や詩歌卽ち純粹の文學といふ方面から見ると、この品詞の價値といふことが少しく變つて來るのである。この事に就いて少しお話をして見ようとおもふ。

およそ美文や詩歌に用ひる言語卽ち詩的言語と、日常普通の言語とは、もと〳〵多少性質を異にして居らねばならぬ。これは日本今日の狀態の樣に、言文の二途に分れて居るのをいふのではない。西洋の樣に言文一致の國でも、詩的言語と日常の交際語との間には相違のあるものである。又說明理解を主として、論理上の正確を目的とする文、卽ち數學や法律文や、すべて科學上の知識を傳達する目的のものは、正確で順序が整然として居ればよいので、これらはいはゆる散文語といふもので、詩的言語とは自ら違ふものである。卽ちよしや言文一致の世になつても、この三つの言語の區別といふものは、いつまでも存在するものである。純文學は言語を美的に綴つて、內界外界一切の美をあらはし出すもの、卽ち言語を美的に使ふものであるから、詩的言語は他の二種の交際語、散文語とは自然に逕庭を生じなければならぬ。詩的言語は感情に訴へるものであるから、印象の極めて明瞭に、人の想像力に觸れ、讀者の感情を最も多く動かすものでなくてはならぬ。一語一句ゆるみのない樣に、最もよく切りつめた文句の中に、最も多くの內容を含ませなければならぬのである。この目的から見ると、品詞の價

値には自ら甲乙がある。

詩的言語として最も價値の尠い品詞は、助詞、助動詞の様な附屬詞である。これらは獨立して意味のない語で、唯他の語の下に附屬して相互の關係を示し、又は其の作用を助けるものである。概念をあらはす語ではなくして、形式の語である。それ故詩的語としては成るべく之を避けねばならぬ。必要な所には、どうしても入れねばならぬが、之を棄てて意味の通ずる所では、棄てる様にせねばならぬ。さうすれば文章が引締るのである。正當な順序を要する談話語、散文語等に於ては必ず言はねばならぬテニハ等も、詩的語としては略してよいのである。「衣ほしたり天の香具山」といふ句でも、實は「衣を」のを、「天の香具山に」のにを略したのである。和歌や俳句や、俳文や其の他の美文ではかういふ様な節略は始終行はれて居るので、文法上からいへば無ければならぬ所を略して居る。それ故美文を通常の語に譯して見れば、色々語を附加へていはなければならぬ場合が多い。普通の談話に「臺所の裏、着物ほした」では西洋人の日本語の様に、片言になつてしまふ。この區別を知らねばならぬ。漢詩などを訓讀するのに、あまり多くの助詞、助動詞を加へて國文風に讀むと、勢がなくなつてしまふといふのは、つまり詩的語の性質を失はせて通俗語にするからである。

次に美文に不適當な品詞は接續詞である。さて、さうして、それから、然り而して、然る時になどの様な接續詞は文章の接續上大切なものには相違ないが、詩的語としては不相應なものである。古來の美文學にはもとより少いが、談話でもこれを多く使ふ人は話の下手な人である。故に幾何學などの説明ならばいざ知らず、詩的言語

には努めて接續詞を避ける樣にするがよい。

代名詞も亦なるたけ使はぬがよい。日本文では一人稱の代名詞を省くことが出來る。むしろ省くのが普通であるが、西洋文ではそれが出來ぬ。この點は日本文が便利だ。一人稱のみならず、すべて代名詞を多く使ふのはよろしくないのである。西洋文を飜譯する時などは殊にこの注意が必要である。

そんならば、どんな品詞が美文の構成には最も大切であるかといへば、いふまでもなく物の動作狀態を示して居る動詞である。又性質形狀を示す形容詞、それから物の名をあらはす名詞卽ち概念語である。此の三種の品詞が最も必要なので、これを上手に選擇して適切に使ふことを第一にしなければならぬ。普通語でも、これが最も重いことは前にも言つたが、詩的言語の要素は全くこの三者にあるのである。ところが日本の純粹の國語では、悲しいかな、動詞や形容詞の數が極めて尠い。隨つて微妙な差別を言ひあらはすに於ては、甚だ困難を感ずる事がある。現今は多くの漢語を使つて、この缺點を補つて居るが、漢語は字を見れば分るが、音で聞いては同じ樣なのが多い。加之、歌などでは、他の純國語との調和といふ點もあつて、これらの事は將來の國文學の發達上肝要な問題である。外國の詩を飜譯したり、新思想を歌に詠まうとしたりした經驗のある人は、必ずこの語彙の不足を感じた事が深いだらうとおもふ。とにかく美文作者は動詞、形容詞の樣な品詞に最も多く骨を折らねばならぬのである。

副詞は普通用ひる大いに、甚だ、必ずなどは詩的言語には適せぬ。新奇な熟語を巧みに使へば、形容語として

大きな價値をもたしめることが出來る。ポカーリポカーリと、フワフワとなどいふ擬聲的副詞なども面白い。漢語の何々然、何々乎といふ副詞的語句が漢文の精彩を增すことは爭はれぬ事實である。何しろ陳腐なものはいかぬ。新奇なものを選擇して用ひなければならぬ。これは强ち副詞ばかりに限らぬ。

以上は例も何も出さず、極めて簡單にお話したのであるが、余の主意は詩的言語といふものは、一種別であるといふことを青年諸君に分らせればよいのである。學校の教場で文法を輕くおもへといふのではない。文法を學んで、正確な言語の法則を學ぶことは、他人の文章を理解する時にも、又自分が文を綴る時にも極めて必要であるが、美文といふ場合には必ずしも論文や答案の場合の樣に、文法上の順序や規則ばかり考へて居らぬでもよいとおもふのである。あまり文法上の細かい規則ばかりを考へて居れば、筆力が暢びぬ恐がある。丁度外國語を學ぶ人が外國人と話をする時、文法の時や數を間違へて笑はれはせぬかと、そればかり心配して居れば、言句が續かぬ樣なものである。ブロークンでも何でも構はず話しかけるのが、外國語熟達の第一階段である樣に、作文の時にも思想を十分に吐露して、それからあとで文法上の誤謬を一通り訂正するのがよからうとおもふ。これは序ながら話しておくのである。

（明治四十年三月「文章世界」）

萬葉集の歌の名所

大學で萬葉集を讀んで居る頃は畝傍、耳梨、香山の三山も今少しは高い山かと思つて居つた。佐保川も、飛鳥川も、もう少しは大きな川かと思つて居つた。大學卒業後はじめて大和の地を踏んで、案外にその小さいのに驚いたのである。「よしもあらぬか妹が目をみむ」といふよしき川などは、殆ど小さい溝渠の樣なものであるのに驚いた。併しそれに就いて萬葉集の歌といふものが、大いに分つた樣な氣がした。その時思つたのに、成程萬葉集の歌は奈良朝の大宮人の歌である。白銀の太刀の緒長く垂れてゆるり〳〵と歩いた大宮人が日常見慣れ、熟く知つて居つた地所を歌に詠み込んだのである。之を東京でいつて見れば、淺草、向島、御殿山、飛鳥山、不忍池、お茶の水といふ格である。墨水、茗溪、夢香洲、小西湖などいふ江戸詩人の詩を支那人が見たならば、どんな風流な勝地かと思ふであらう。それと同じ樣に、奈良朝の歌を見て、それが直ちに立派な山川を詠み、絕景なところを詠んだものと合點したのが、そも〳〵の間違であつた。たゞ都城附近の地名であるから、それが自然詠み込まれたのである。總じて大和一國乃至は平城附近の景色の好いところを選んで詠んだといふ譯ではない。勿論中にはさういふ勝地もあるが、勝地ばかりを歌に詠んだと思へば、大いに見當が違ふ。元來歌には緣語を使ふもの

が多い。その緣語の爲には何でも構はず手近の都合の好い地名を利用して歌の面白味を作つたのである。この點から考へて見れば、向島やお茶の水を詩人や歌人が名勝の地として詠むといふのよりも、むしろ都々逸や端唄に江戸の地名を詠み入れたのに類似して居るのが多い。勝地の爲に詠むのではなくして、緣語の爲に使ふのである。

併しながら、地名を詠んだ古歌があり、それが人口に膾炙すれば、後の人はその地名を聞いただけで、旣に一種の詩的情味を起す。その名の響が直ちに詩的に聞え、風流に思はれるのである。これが卽ち歌枕である。それ故都が平安京に遷つてからの古今集の歌にでも、萬葉の地名は多く用ひられる。京都附近の地名が同じ樣に歌枕となれば、平安朝以後の人々は、又それにも詩的情味を感じて、やはりいつまでも歌の名所として用ひる。奈良の都が廢墟となつた後でも、大和や山城へ一度も足蹈をせぬ人でも、これらの地名は歌の上の名所として保存され、詠み出されるのである。玆に至つて歌人は居ながらにして名勝を知るといはれるのである。併し尋ねて見れば實は名勝でも何でもないのが多いのである。我等は唯古歌の上から文學の上からこれは名勝の地と敎へられて居るのである。

奈良朝の歌人は決して居ながらにして名勝を知らなかつた。それ故萬葉には大和の地名ばかり澤山ある。山城もあるがまだ尠い。山城よりも攝津、近江、紀州の方がまだ多い。山上憶良、大伴旅人などが筑紫に居た爲に筑紫の地名があり、大伴家持、池主などが越中に居た爲に越中の地名が見える。人麿の爲に石見の國の地名が出、赤人の爲に東國の地名が出て來るといふ風に、實際見たところでなければ歌に詠まぬ。陸奥の國などは五六箇所

に過ぎない。要するに萬葉時代はまだ歌枕に發達せぬ時代であつた。

「歴史地理」の百號記念に何か一文をとの御注文であるが、公私多忙で論文起草の暇もないので、唯むかし感じたことを一寸記したのである。

（明治四十一年一月「歴史地理」）

猿丸大夫は傳説的人物か

未(ひつじ)の年の歩みも、多忙な身には、早くも過ぎて、又候(またぞろ)新年號に一文をとの事。申(さる)の年なれば、猿丸大夫について書いて見よう。

猿丸大夫の人物及び和歌については、安藤年山、谷川士清が早くも疑をさしはさんだ。古今集の眞名序には「古猿丸大夫之次也」とあるので、その頃聞えた人であつたらしいが、この人の歌といふものは一首も傳はつては居らぬ。百人一首に「奥山に紅葉ふみ分け鳴く鹿の聲聞く時ぞ秋は悲しき」といふ歌が猿丸大夫とあつて、婦女幼童にも猿丸の名は知られて居るが、これは古今集秋上に「是貞の皇子の歌合の歌」といふ詞書のある二首の歌の一首で、詠人不知である。三十六人集といふ歌仙歌集の中には、猿丸大夫の集があり、群書類従にもあるが、今試みに歌仙歌集を調べて見ると、皆萬葉集、古今集にある歌で、一首も猿丸の歌として慥かにいふべきものはな

い。歌仙歌集の猿丸大夫集の歌は、全體で三十七首あるが、之を調べて見ると次の様になる。

猿丸大夫集

集	部	首數
萬葉集	二卷	1
	三卷	2
	六卷	2
	八卷	2
	九卷	1
	十卷	2
	十一卷	5
	十三卷	3
古今集	春	6
	夏	2
	秋	4
	戀	2
	雜	2
	誹諧歌	3

合計三十七首

猿丸大夫は傳説的人物か

右の中で古今集のはすべて詠人不知で、萬葉集のは詠人不知の外に、詠者の分つてゐるのが六首で、その作家の名は高市黑人妻、麻田連陽春、弓削皇子、間人宿禰大浦、石川朝臣老夫、石川夫人の六人である。三十六歌仙の一人一首に出て居る歌は「をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな」の歌で、同じく古今集詠人不知の歌である。百人一首の「奥山に」の歌は出て居ない。尤もこれは群書類從本にはある。それで群書類從本を調べて見れば、出入はあるが歌仙歌集にない歌が十五首ある。その十五首は萬葉九首、古今四首、拾遺集一首で、萬葉のには弓削皇子、中臣宅守、丹比眞人などがあり、古今のは皆詠人不知、拾遺集のは人麿である。

以上から見ると、今の猿丸大夫の集といふものは只後人が出鱈目に萬葉、古今あたりの歌を集めて作つたもので、決して猿丸大夫の集ではない。尤も何か事故があつて、詠人不知として勅撰には採られたかとも考へられるが、現に他人の歌として分つて居る萬葉の歌がまじつてゐるのを見れば、其の他のものも疑はねばならぬ。古今集眞名序によつて見れば、大友黑主よりはよほど古い人と見えるのに、「奥山に」の歌は是貞の皇子の歌合の歌であるとすれば、時代が合はぬとは士清も已に論じてゐる。何よりの證據はこの歌は萬葉調、古今調樣々であることである。尤も「我が庵は都の巽」の歌で知られてゐる喜撰法師も、歌といふものはこの宇治山の歌の外には殆ど傳はつて居らぬ。唯歌人として名の傳はつてゐるだけで、歌が傳はつて居らぬのである。猿丸大夫も丁度喜撰法師の樣な隱遁家で、名ばかり傳はつてゐる人であるかとも思はれる。喜撰は六歌仙の一人で、猿丸大夫は三十六歌仙の一人である。六歌仙や三十六歌仙の中にありながら、歌がないといふのは誠に妙なことで、當人の幸か

不幸か分らぬ。

古今集の序の外、長明の作といふ方丈記、又同人の無名抄には猿丸大夫のことを載せてゐる。方丈記には墓を尋ねたことが書いてあり、無名抄には田上（たなかみ）の里の曾束（そつか）といふ所に墓があると書いてある。長明はやはり歌人で隱遁家であつたから、猿丸大夫をなつかしく思つたのであらう。これらを證據としたならば、猿丸大夫といふ人があつたとも考へられるが、もし疑つて見れば全く傳說的人物であつたともいはれよう。長明時代はいふまでもなく古今集を信じたので、古今集から墓などの名所が出來たかも知れぬ。近江の國に「かくと谷」といふ谷が出來たり、須磨に光源氏の舊跡が出來た樣なもので、文學から地理の名所の出來ることは珍しくない。古今集の序文にいふ事は元來あてにならぬことが多い。衣通姫をあげて小野小町に比較したことなどが、後に至つて衣通姫を和歌三神の一に尊んだ所以であらう。古今集の序文といふものは、萬葉集に無學であつたことを、色々の方面から證明するもので、柿本人麿の正三位などと途方もないことをいつてゐる。衣通、猿丸など唯傳說的にむかしから名人と呼ばれた人のあつたのを譯もなく並べたてたのではあるまいかと思ふ。然るに後世になつてはこれを信用して、墓はこゝにある、集はこれであると、出鱈目に作つたのだらうと思ふ。衣通姫や住吉明神（これは伊勢物語の歌から和歌三神に列したらしい。伊勢物語尊崇の結果である）には流石に歌集は出來なかつた。續紀に從四位下柿本朝臣佐留といふ人がある。どんな人かわからぬが、柿本といふ姓もあり、人麿は有名な歌人であるから、柿本姓から考へついて猿丸大夫といふ歌人があつたなどといふ傳說がいつしか出來て、それが最早古今集序

文製作の時代には擴がつて居つたのではないかとも思ふ。これは單に余が推測である。

（明治四十一年一月「帝國文學」）

夏目君

夏目君は學校で同級であつたこともあり、海外留學の時にも同船して巴里まで旅行しました。俳句をよくし、漢詩をよくし、英文學に於ては從來の英文科卒業中の故參であり、最も深邃な知識をもつて居られる人と信じて居ます。篤學で、寡默で、身を持することが極めて謹嚴であるから、よく君の性質を知らぬ人は、唯君を畏敬する方面ばかりに氣が附かうが、元來が江戶つ子で機警敏捷なところがあり、飄逸奔放なところもありますから、君がユーモアは全くこれから出て來るのだらうと思ひます。俳句漢詩で養つた修辭洗練の句法と英文學から得來つた思想着想が、君の沈着で、しかも機敏な性質と相合して、君の作物を成すのだらうと信じます。君の作物の警句に富み、對話に緩みのないところと、これ迄に例のないユーモアの發現とは、我が文學史に於て尠くとも一時期を作つたものと思ひます。唯君の文は觀察は誠に微細に入つて至らぬ隈のない、痒い所へ手の屆く樣な感はあるが、作中の人物に向つての同情熱誠な點は缺けて居る樣に思ふ。これから先はどう發展されるか、どういふ

方向に向はれるか分らぬが、余が感ずるところはそれだけである。余は君の作は大抵愛讀して居ります。

（明治四十一年三月「中央公論」）

大磯雜感

子供等を携へて大磯に來た。清涼な風は流石にこの地のものである。汽車は東から十三回、西からは十一回。都の友人も尋ねて來る。原稿の催促も相變らず來る。日中の暑さは東京と少しも違はぬ。友人との談話を書きつらねて、雜誌の責を塞ぐ。

大磯は日本海水浴の元祖、二十五年來建てつらねられた別莊の數は數百戸にも上らう。今年來て見れば、圓位堂の前も横も、すべて新しい別莊で埋められてしまつた。むかしから俳諧の俗宗匠の住家となつて居る上は、今更歎くにも當らぬが、これは又思ひ切つた侵略の仕方である。西行法師を再生せしめたならば、上の句だけはやはりむかしの樣に「心なき身にもあはれは知られけり」と口ずさむに相違ない。

岩崎家の別莊は日本一の富豪だけに、町の中央の丘陵を其の儘に恰も城砦の樣な觀がある。滄浪閣附近の顯官貴紳の別莊はいづれも數百歩の松林を邸内に圍ひ込んで、大磯としての景勝はまづこれらの別莊の中に收められ

てしまつてゐる。

天下に隱れない大磯の海水浴、鎌倉以來の名勝の地。外人も來れば回遊列車に初見の田舍人も來る。來て見ても何も見るものはない。娛樂を求める場處もなければ、知識を得る道はもとよりない。宏大な別莊は皆それ〳〵の城郭であつて、近寄る事が出來ない。

この別莊の城郭內から每晚相競つて花火が百本や二百本は上る。これを金に積れば尠くとも百圓は下るまいといふ。「一雨が花火間もなき光かな」の江戶の繁華は今はこゝに移されたのである。これらの富豪の城郭を綜合したものが大磯であつて、其の外に大磯はないのである。

富豪の豪奢はもとより當然である。けれども日本一の貴紳富豪のかく迄多く住居する場處としては、今少しく公共的設備は出來ぬものであらうか。公共的設備といふよりも上下打解けて親睦する樣な設備は出來ぬものであらうか。西洋では一寸した田舍にも、每日每夜奏樂の會が催される。神戶や橫濱の居留西人の仲間にも、夏の夜などは必ず音樂會があるのに、さりとては、こゝに音樂堂の一つ位はあつてい、ぢやないかと一友人は慨歎した。日本人の性質はどこまでも貴族的で、籠城主義であるのか。

國民の性質は家族主義である。家族團欒の樂を專らにするのが主になつて、社交の方には疎かになるのかも知れぬ。けれども別莊といふものの中には如何はしい家族以外の人の住んで居る事も珍しくはないのである。門塀嚴めしい城郭內へ賤しい婦人の出入することは更に最も珍しくないのである。一事が萬事、どこまでも內所的で、

衆とともに樂しむといふ風のないのは今日の上流社會、否一般國民の氣風ではあるまいか。これは單に別莊の問題ではないが、別莊を見て感じたからいふのである。花火を上げるのも衆人に見せる爲とはもとより受取れぬ。これは恐らくは虛榮の表彰に外ならぬのである。

これだけの海水浴場には圖書館の一つ位はあつてもよろしい。旅行中に多くの書籍を携へるのは人々の難儀であるから、相當な圖書館があれば讀書家には何よりの福音であらう。四方から集まつて來て居る男女學生の爲にもどの位の利益であらう。新刊の書物は何かないかと街上に散歩してみれば、繪葉書の外にはまづ博文館の文藝倶樂部、御伽草子、その外は小說類が少しあるばかりである。貸本屋は調べても見ぬが、やはりそんな事であらう。

今年始めて見たのは海岸に設置された新聞閲覽場で、これは狹い交番所然たる建物だが、東京新聞はもとより全國樞要な都市の新聞も餘程澤山集めてある。雜誌も少しはあつた。誠によい思付で、至極贊成である。今少し雜誌などを取揃へ、ゆく〳〵は新刊書なども集めたらよからう。

謠をうなるのも知合同士、碁をうつのも知人仲間、宿屋滯在の人の籠城主義は、別莊住居の籠城主義と少しも違つて居らぬ。天然の海そのものが一大共同浴場である外は、何等社交の倶樂部といふものがない。友人が尋ねて來ても一寸一緒に談話をする樣な場所がない。西洋人の尋ねて來た時などは殊更困る。大富豪にはそれ〳〵一家內にその設備があらうが、大磯そのものとしてはそれがどこにもないのである。建築の大小精粗は問はぬが、

何かかういふ建物があつて、會合でも出來る場所があらばと思ふのは余一人のみではあるまい。歐米の社交的國民ならばとくに出來て居る事とおもふ。

別莊以外には何もない大磯町民に向つてこの設備を迫るのは酷である。さりとて貴族主義、籠城主義の貴紳富豪から急に色々な設備をして貰ひたいといふのでもない。實は大磯だけの問題ではない。平たくいへば、もう少し國民の氣風が開けてくれなければ困るといふ所感を述べたのである。西行法師とは沒交渉の問題であるが、或點までは法師も贊成するかも知れぬ。

（明治四十一年九月「中央公論」）

假名遣と教科書問題

假名遣を復舊すると同時に、言文一致を文章體に復すといふやうな說もあるさうであるが、それは到底不可能のことで、第一さう斷行したところで、國民が承知してそれを實地の上に行はねば何にもならん。若し言文一致を廢するといふ說があるとしたら、それは軍人側の人の要求ではあるまいか。言文一致は權威がないといふやうな處から出たのではあるまいか。然しそれは到底實行出來ぬことと思はれるから、さう憂へるにも及ぶまい。

次には四十三年から採用される教科書のことである。私も其の編纂委員に內定されてあるのだが、どうも餘程

困難な事實が澤山あつて、私はそれに就いて苦心中である。

第一今度の教科書は、最初は成るべく字音を使はぬやうにしようといふので、例へば草履といふのを無理に草履でなければならんといふこともないと思ふ。字音を使ふまいと思へば靴で十分間に合つて行く。蝶々でなければならんといふこともないから、その場合には蜂で間に合はせておくといふことにしようと思ふ。

處で、今日まで使用して來た、今現に使用されつゝある小學校の教科書は、最初片假名五十音を教へるに半年も懸つて居る。どうも餘り時間に餘裕がありすぎると思ふ。私は半年の間に平假名も教へてしまつたら可からうと思ふ。五十音を教へるに半年かゝるとは餘り勿體ないやうにも思はれる。日本の五十音は西洋の二十六字に對して數が多いやうであるが、西洋のはプリントする文字と、普通使用されるのと、花文字と三種ある。それを悉く同じ半年間に於て教授する。それからみると日本の五十音に半年間の教授時間を費すのは餘りに贅澤である。

處が、茲に一つ西洋のに比較して日本の假名が割合に教へるに骨の折れる理由がある。西洋のはプリントする文字と普通使用されるのとは全然別々になつて居るので、プリントする文字は唯眼にだけ訴へておくだけで濟ませるが、日本のはそれがないので、一字々々に就いて其の字體を教授せねばならんことになる。

それは主として教授上の話だが、教科書編纂に就いて最も困難なのは、標準語が西洋のやうにきちんと定つて居ないことである。地の文——卽ち說明の文は差支へないが、さあ會話になると、實に頭を惱める。

ずつと最初の教科書は伊澤修二君が、ウイルソンの讀本を飜譯した「汝は釣をなしつゝありや」といふやうな

直譯口調のものであつた。あの頃では隨分革新的な大膽な遣方で、隨分賛同した人があつたが、又非難の聲も大分聞えたやうにおぼえて居る。

それが改正になると、今度は「太郎さん、あの鳥を御覽なさい」とか「山へ遊びにまゐりませう」とかいふやうな、普通使はれて居る口語でもない、さうかといつて直譯體でもない、一種特別な、いはば讀本的な言葉が作られた。

さて、そこで、今度の讀本でも此の會話には非常に頭を惱めて居る。加之、上流社會と下流社會とは、同じ意味の言語でも餘程現し方が違つて居る。例へば普通中流社會で呼ぶところのお孃様なる代名詞も、ずつと上流の華族社會では使つて居ない。といつて又ずつと下流社會でもお孃様などといふ代名詞は用ひられて居ない。其の他よくつてとか、いやよといふやうな言葉は實際使用されて居ても、之を教科書中に入れるとなると、どうも少し卑しくなつて耳に障る。さうかといつて今までのやうな實際と遠ざかつた「山へ遊びにまゐりませう」では飽足らない。

猶ひとつ今日までの教科書中の會話の缺點は男性女性共通で、其の區別が無視されて居る傾がある事である。女性はやはり女性の言語、男性は男性と區別せねばならんと思ふ。こゝらの調和が餘程苦心を要するところである。

（明治四十一年十月「文章世界」）

能狂言の滑稽

新年號の事ですから、おめでたいといふ事を本にして能狂言の滑稽に就いて簡單にお話いたしませう。

すべて事實を誇大にして、實際にはとても出來ない樣な事をいふのが一つの滑稽であります。豫想に反し、常規に外れて、あまりに馬鹿氣て居るといふところが笑の本になるのであります。「膏薬煉」といふ狂言で膏薬の力で大きな石を引つぱるといふ類、「磁石」といふ狂言で磁石の精だから刀を見れば皆呑みたくなるといふ類がこれであります。「文相撲」などで奉公人は一人では少くて困るから千人程抱へよう。置き所なければ野山におかう。野山に居らぬとならばくわツと減して五十人にしよう。もそつと減して一人にするなどいふのも、一人から千人と大袈裟になるところがをかしいのであります。

かういふ風に極端から極端に進むから、例へば「二千石」で大名が腹を立てて切つて棄てるといひながら、其の御手許が親御に似て居るといはれ、だん〳〵と親を思ひ出し遂には怒が悲しみに變じ、切つて棄てると言つたものに佩刀までも授けるといふ樣に極端に變化して行くのがをかしいのです。「飛越新發意」では茶の湯へ行く道で溝に落ちて、笑つたとて腹を立て、惡口をいひ遂に相撲の組討となる。風流の茶の湯と殺風景な組討と其の變

化の激しいのが滑稽です。「悪坊」では坊主に色々なものを持たせ、果は腰を叩かせて寝る。坊主が物を掠めて去つた後で目を覺し、佛の仕業と思つて出家する。出家を嘲弄した者が出家するのも極端から極端へ進んだのであります。

かくの如く物が倒さまになつて行くのがをかしいので、「胸突」では債主が債をはたりに行つて、負債者の爲にいひがかりをせられ、債主が却つて金を出してあやまるやうになり、「釣女」では下女が別嬪で、上﨟が不別嬪で、冠者め甘い事をせしめ、主人は却って之を羨む位置に立つ。「鬮罪人」では鬮で主人が罪人になり、冠者が鬼となつて主人を責める。其の外「寢聲」「あかゞり」「止動方角」等皆主從顚倒するところに滑稽が成立つてをるのであります。坊主が坊主らしくなかつたり、大名が大名らしくなかつたり、何でも豫想に反し、通常と變つて居るからをかしいのです。

それ故すべて有名無實が面白いのです。「腹不立」で正直坊が無暗に名を聞かれて遂には腹を立てる樣になるの類であります。「布施無經」で坊主が布施を催促したり、「米市」で貰ひ物の催促をするなど皆爲すべからざる事を鐵面皮に敢てするのが滑稽なのです。

それですから嘘言をつくことが滑稽になつて居ます。併しそのうそは直ぐに誰にでも嘘言と分るのです。本心は人に覺られながら表面だけごまかさうとするところがをかしいのです。「さし縄」のいひぬけ、「成上者」「二千石」のごまかし等皆口さきで人を欺かうとするので、結局は看破されてしまふのです。「鱸庖丁」で伯父をだまさ

うとし、「石神」で女房を說諭するのも同じ類であります。

ごまかすのは言葉には限りません。もとより動作が加はつて來ます。すりが田舍者を釣るといふ類のものが澤山あります。「磁石」「佛師」「二王」の類がそれであります。「伯母が酒」「昆布布施」など鬼になつたり、坊主になつたり骨の折れた事です。男女間のをかしいのは、妻を欺かうとして裏をかゝれた「花子」、大名をたらかして冠者の計略で發見された「墨塗」などが面白い例でせう。もと〳〵小ざかしい淺はかな計略で、大抵は其の計略の成就せず、直ぐに他人に看破されるところが滑稽なのです。つまり骨折損のくたびれ儲となつてしまふのです。

あらはれる事が分つて居る小詭計で人を欺くのがをかしいので、その敗れるのには油斷が本であります。油斷のあるところが、間抜けてをかしいのです。「二人大名」「太刀奪」などは皆油斷の滑稽です。他人の聞いて居るとも知らずしやべる不用意には「さし縄」「花子」「瓜盜人」の類があります。寢た爲の油斷からしくじつたのは「抜殼」「惡坊」「成上者」等であります。思ひ違ひで主人を縛るのは「狐塚」、噓言を本當と思つて怒るのは「內沙汰」の類で、油斷よりも忘れつぽいこと、臆病なこと、みえはり等から色々な失策を生ずるのが澤山あります。

中にも慾から來る失策は澤山あつて、食慾からの「こんくわい」「苞山伏」の類、酒からは「棒縛」「貰聟」「河原新市」「素襖落」「三人片輪」「樋の酒」など、色慾は「枕物狂」「水汲新發意」、財慾は「昆布布施」「どちはぐれ」の類であります。「雁争」に、雁を取られながら、せめてその羽でもくれといふのはさもしい了簡を極端まであらはしてをります。「文山賊」では盜賊が死なうとして、いやになつて別れる生命の慾があります。大抵小

計略、小詭計の根本動機になつて居る事は、叱られるのを恐れるか、又は何か役得に有りつかうといふ慾から來て居るのであります。

それから又言葉の上の戯を本として居る滑稽が澤山あります。方言や田舍者の言語を以て仕組んで居ることは今の落語などには澤山ある事ですが、狂言にはこの方は少いのです。「茶盃拜」といふのに唐人の語を寫したのがありますが、これは近松なども用ひる一種のものです。「文藏」の溫糟粥(うんぞうがゆ)、「忠度」の唯乘といふ當時の歌や連歌の様に同音語の上にかけた滑稽。それから當時流行の連歌を詠み合ふといふことがあります。これも無論言語の上の滑稽です。「連歌盜人」「八句連歌」などの類です。「入間川」ですべて物事を逆にいふのも、言語滑稽の中でせうし、「通圓」や「樂阿彌」の様に謠曲を摸した一種のパロデイも亦言語滑稽に相違ありません。囃の上に面白味をもたせたのもあります。その歌ひ方、囃し方が面白いのです。「末廣がり」から「煎物」「烏帽子賣」など澤山あります。

大抵は來るべき結果がはじめから見えすいて居ます。偶然の出來事から生ずるといふ樣な滑稽はありません。「伜道心」で坊主の料理番、俗人の坊主が同時に一處に落合つた事、又「手負山賊」で山賊が坊主に手を負はされ、後その坊主がその宿に來るなどは幾分か偶然と見れば見られるのです。まだ日常の言語動作の間に滑稽を認めるといふ事は出來てゐません。前からだん／＼いつた様に、つまり不自然な事がいつも土臺になつて居る様です。ざつとこの位でやめませう。

（明治四十二年一月「心の花」）

今昔物語中の犬

戌（いぬ）の年といふので、諸新聞等も例によつて犬の繪や話を掲載する。多忙で外の事を調べる暇が無いから、今昔物語にある犬の話に就いて一言しよう。

九の巻に遂安公李壽が平生鷹狩を好んで常に犬を殺して鷹の餌食として居つた爲、病中に五つの犬があらはれて安公の命を責めた話がある。これは法苑珠林巻六十四に冥報記を引いて出て居る話で、今昔の文は冥報記と殆ど同じである。殺生を戒めた話で面白味はないが、狐のゐない四國では犬神といつて犬憑の病氣もあるといふ。この話で犬憑の迷信の古い事も分る。廿六巻に小女が隣の犬と非常に仲が惡く、小女が病にて外へ出された時、犬は其の跡を追うて行つて遂に小女と咋合つて死んだ話がある。これも前世からの仇敵であらうといふので、犬が人と敵になる話である。犬をいぢめたり、殺したりする方面からかういふ話が出て來るのであらう。

八犬傳の伏姫は槃瓠の話を基として作つた事は馬琴も明言して居るが、今昔にも犬の人と婚した話がある。第卅一巻の北山の犬人を妻とする物語といふのが、それである。或人が山路に蹈迷つて、此の容子を見聞して、大勢の人に話した爲、大評判となつて、一同弓矢などを携へて、犬退治に向つたが、犬は之を見て、其の妻をくは

へて飛ぶやうに山奧へ行つてしまつたといふ話である。瀟湘錄には杜修已といふ醫者の妻の薛氏が自分の家の飼犬に姦せられ、後其の犬に負はれて恒山に入つた話がある。どらにしても、支那から渡つて來た傳說であらうと思ふ。

忠義な犬の話は廿九卷に陸奥の國の獵師が山に入つて木の空洞中に眠つて居つた所、一匹の犬が嚙付くやうに吠えるので、木の外へ出ると、忽ち犬が大蛇の頭へ食ひついた話がある。これは弓張月にも取つてある話で、搜神記二十にも華隆といふものの愛犬が奮闘して蛇を殺した話がある。これと同一の話を西洋の本で讀んだ事もあるが、今何にあつたか記憶せぬ。御存じの方は御敎示を乞ふ。恐らくは印度あたりの種で、東西へ廣まつたものかと思ふ。

廿六卷に三河の國の郡司の妻が夫に棄てられて細々と暮して居つた所、蠶を食つた飼犬の口から二三百のわくに卷く程の絲を吐いて、それが爲に妻も富饒になり、郡司も再び其の妻を愛したといふ話がある。蠶絲を口の中で紡いだことは神代紀にもあるから、それらから一轉した話で、これは純粹の日本種かとも考へる。犬の爲に富貴になつたのは花咲爺の話と其の系統を同じうして居る。花咲爺でも、桃太郎でも、後世では犬は常に忠義なもの、おとなしいものとなつて、人を責めたり、人に害を與へたりするものではなくなつた。廿八卷に時の博士紀長谷雄の家へ犬が每日築垣を越えて尿をするので、長谷雄が陰陽師に占はせたことが見える。能く其の時代の精神が分る話である。

（明治四十三年一月「帝國文學」）

弔詞（藤岡作太郎博士に捧ぐ）

文學博士藤岡作太郎先生逝けり。嗚呼我が友藤岡東圃君逝けり。我が知友中、蒲柳多病なる君の如きは無く、篤學勵精なる君の如きも亦無し。君の宿痾は、君の幼時始めて學に就くの齡に發し、爾來一日として君の體軀を惱まさざるは無かりき。然れども君の頭腦は毫も之が爲に屈服せられず、却りて異常非凡の發達を爲したりき。余は今より二十年以前大學生として始めて君と相識り、後大學教官として共に國文學の授業を擔當せること玆に十年に及べり。常に君が體力の虚弱なるに似ず精神力の旺盛なるに驚歎し、深淵なる君の學殖と超邁なる君の識見とに推服し、君の國文科に在るを以て竊に我が國文學科の誇なりと思惟せり。況や君の蘊蓄は其の專攻の國文學に於て無盡藏なるのみならず、美術史に於ける造詣と卓越せる美術批評眼とは世亦已に定評あるをや。君の著書は大學在學中に起稿せし日本風俗史を始として、近世繪畫史、國文學全史平安朝篇、國文學史講話、松雲公小傳の如き、いづれも材料充實し結構整頓せるのみならず、文辭流麗殆ど人を魅する力あり、一として千載に傳ふべき名著にあらざるなし。日常湯藥に親しめる君にしてかくの如き大著あり、天の君に與ふる、體軀に甚だ薄うして精神に最も厚かりきといはんか。嗚呼君は今溘焉として世を捐てたり。我が國文學科の光明は驀地消失せた

り。余は忽ち二十年來の益友に離れ、我が國文科は俄に百歳罕に見る良師を喪ひたり。四十年の短生涯、世人が君に囑望せる幾多の事業を完了せずして君は明治の文壇を棄て去れり。誰か文學界の爲に悲しみ、美術界の爲に惜しみ、國家の爲に一大損失を感ぜざらんや。回顧すれば今より數年前、京都大學は君を聘して國文學の教授たらしめんとせり。然れども君は辭して就かず、ひたすらに江戸時代文學の研究に心を委ね、助教授の卑きに甘じて孜々として今日に至れり。研究略其の緒に就き、國文學全史未だ全く成らざるに際り、空しく宿志を齎して泉路に就く。其の憾如何ばかりぞや。加ふるに家に儋石の儲なく、堂に盛白の親あり。孩兒三兒の哺養一に未亡人の手に在るをおもへば、誰か哀悼痛惜の情に禁へんや。然れども君の一生は初より身體の生活に非ずして精神の生活たりしなり。もとより俸祿の爲に生きず、名譽の爲に生きず、ひとへに學問の爲に生きしなり。而して遂に學問の爲に殉ぜしなり。焉んぞ知らん、天は暫く君の病軀に四十年の世壽を假して、人の精神の如何に肉體に超越せしかを示せしに非るかを。君は逝けども、世に布ける君の著書は永く我が國文學の光明として學界を照鑑せん。君の音容は復大學の教壇に見るべからず、君の才筆は再び明治の文壇を飾らざれども、我が國文科の學士、學生は深く君の學德を慕ひ、君の事業を繼ぎ、皆爭うて東圃先生の宿志を成さんとす。嗚呼我が友東圃君はもとより不朽なり。藤岡博士は決して死するの時なかるべきなり。尙くは饗けよ。

（明治四十三年二月六日）

嗚呼藤岡君

藤岡博士の逝去は國文學界の一大厄難たるのみではない。國家全體の爲にも一大損失と感じる。文學、美術の史的研究に於て燃犀の眼を有したるのみならず、文學方面に於ては美文家として自己も亦優に文學史中に入るべき人であり、美術品の鑑定批評に於ても、卓然衆を抜いた君が、我が國文學科出身の一人であつた事は、實に我が國文學科の誇とし、光彩としたのであつた。君の大學助教授となられたのは、今より十年以前、明治三十三年であつて、爾來十年間、君の薫陶を受け、君の指導を受けたものも少くないが、僅々十年間に、君の成し遂げられた著述は實に驚くべきものがある。日本風俗史は其の以前の著であるが、近世繪畫史、國文學全史平安朝篇、異本山家集、國文學史講話、松雲公小傳等皆萬世に傳ふべき名著であつて、これが平生湯藥に親しむ君の著述としては、この間にかゝる大著が出來るかと驚かれるばかりである。國文科出身の第一の美文家（僕の見解）であり、國文科出身中論文を以て博士となつた最初の人たる君が、第一に世を捐てられることは、國文學關係の一同悼惜に堪へぬ所である。余は博士の送葬の當日、小學讀本編纂趣旨演說の爲、浦和師範學校へ行つたが、その歸途、汽車中、電車中、實は泣通しに歸つた。君の生前をおもひ、君の將來もしあらましかばといふことをおもひ

て、家に歸るまで、涙は止らなかつた。嗚呼藤岡君、今や我が國文學科に此の人は居らぬのである。君は蒲柳多病の人であつた。しかも頭腦ばかりは著しい發達をした人であつた。

君は精細極微な研究を考證する人であつたと同時に、隨分寸鐵殺人的の皮肉な批評を下す人であつた。學生は君を敬すると同時に畏れた。君は多病の爲、この二三年來缺勤勝であつた。たまく君が講壇に上るのを見れば、學生は喜んで君が講壇の下に集つた。教官としてこの學德共に高い人が助教授として十年間を過し、遂に助教授として終つたことは、學界の一恨事であるが、年々の豫算に國文學第三講座の削られたといふ事は、今日に於て僚友として痛歎に堪へしめぬ處である。併し君はもとより教授といふやうな人爵に着目せられた人では無い。

君が京都大學の教授に聘せられたのにも拘らず、應じなかつたこと、平素人爵を輕んじ、虛譽を棄てて、篤學勵精であつたことは今更いふまでも無い。君の親しむ所は持病の喘息と、書籍のみであつた。喘息と書籍のみに親しんだ君は逸事といふべきものは無い。幼時の事は知らぬが、余が僚友として十年來、君は唯篤學の人であり、病身の人であつた。

友誼に篤いことは君が同窓もしくは知人を引立てようとつとめた事、平出鏗二郎君が病蓐に在るので、君が多忙多病中、同氏の著述を補正して世に出したといふ點を見ても、世人は君の厚誼を認めるであらう。藤岡君の訃報が傳はると、平出君は醫師が外出を禁じて居るのにも拘らず、老母に扶けられて、病歩蹣跚として藤岡氏の病床に臨んだ。余等それを目擊したものは一種異樣の感に打たれて暗涙を呑んだのである。

顧みれば國學界の耆宿は次第に殘り少なになつた。木村正辭、本居豐穎、小杉榲邨等諸先輩が殘つて居られるのみである。かばかり國學者の落莫を感ずる際に於て、少壯有爲、君の如き人の世を去るのは、取わけ歎惜の念に堪へぬ。從來葬儀の場に於て、國家の爲に惜しむとか、天下教育の爲に惜しむとか、將た學界の爲に悼むとかいふ悼辭は度々聞いたが、それが十の十までは大抵諛辭である。藤岡君の葬儀の席に於てはそれは悉く眞實の聲であつて、徹頭徹尾身に沁みて感じた。嗚呼、君にもう十年の命を假したらばなどいふことは言つても及ばぬ愚痴である。此の大なる損失を償ふのは、現今及び將來の文科大學生の責任であらう。明治四十三年二月十六日藤岡博士二七日の夕

(明治四十三年三月「帝國文學」)

身體に關する色々の言廻し

風を引いたといふことを I have drawn wind といつたり、煙草を吞むなといふことを Don't drink tobacco といつたりして、笑はれた事はよく耳にする話である。日本では煙草を吞むといふが、支那流にいへば喫煙で、たべるのであり、西洋流の smoke はくゆらす、ふかすの義である。かやうに國々それぞれの言廻し方が違ふ。外國語を學んで一番むづかしいのはこの言廻し卽ち Idiom を吞込む(これも一種の日本の Idiom)ことで、わ

れわれが平生何の氣もなく使つてゐる言廻しの中にも、よく考へて見れば、隨分に面白いことが多い。まづ、身體に關したものを擧げて見よう。

頭と顏

「あの人は頭がいゝ」、「頭がしつかりして居る」といふのは、腦のよい事で、これは明治以後の新しい言廻し、西洋語を知つた人の使ひ始めた詞であらう。つぶりを縱に振るのは承知すること、横に振るのは不承知の事、頭が高いといふのは御辭儀の仕方の丁寧でない事、此等は實際の擧動を言現したのである。

顏の廣いといふ事は顏幅の廣いのでは無い。世間の附合の廣いこと、附合が廣ければ方々へ顏を出すから自然に其の顏が廣くなるのである。顏は個人の看板の樣なもので、お互同士識別するのも顏に依る。嬉しいことも、悲しいことも、嫌なことも、先づ第一に顏にあらはれる。喜怒色に形れぬといふのは餘程の英雄であつて、恥かしい時には誰でもぱつと赤くなる。人の感情は顏にあらはれる樣に造られて居るのである。それ故恥かしい時には袖で顏を隱したり、顏を背向けて人に見られぬ樣にする。顏が出されませぬとか、面目が無いとかいふのは卽ちそれで、古い國語ではおもて伏せといつた。どの面さげてきやがつたと罵られるのはかういふ時である。それでも平氣で居るのを面の皮が厚いといひ、鐵面皮といふ。面の皮千枚張などといふ恐しい形容の語もある。それ故人の言分を通し、其の人の意志を承認することを顏を立てるといふ。おれの顏を立ててくれといひ、君の顏に免じてさうしようなどと話が落着する。之に反して承知せぬ時は言出した人の顏が立たぬ、顏が潰れる。顏は元

來立つて居るものでも無いが、潰れては大變だ。不名譽の事をすれば自分の顏の潰れるのみでは無い。親兄弟朋友の顏をよごす。所謂面よごしになつて、みんなの顏に泥を塗るのである。其の外借りる時の地藏顏、返す時の閻魔顏、知らぬ顏、泣きつ面など顏の種類は數限りも無く多い。

目

顏には目や鼻や口がある。顏の表情は此等のものの助が多い。人間の眼の眼睛(ひとみ)は猫のやうに太くなつたり細くなつたりはしないが、喜怒哀樂につれて第一に變化を生ずるのはやはり目である。情の激しい時には涙といふものが目の中に湧いて來る。それが悲しい時と可笑しい時の兩極端に出るのも不思議では無いか。眠る時には目を塞ぐ。これが人の最も安靜な時である。それ故目を細くする時は平和な時で、目を怒らす、目に角を立てる場合などは感情の激越な時である。目を逆立てることは實際はむづかしからう。樊噲が闥を排して入つた時は目眦皆裂くとある。怒つた時には目が大きくなるから、叱られる方では大目玉を食ふと感ずる。驚いた時に目を丸くするのもあり勝である。目の色を變へるのはとにかく非常の場合で、目がすわるのは醉つた人の形容。諺に曰く、「目は口程に物をいふ」と。

鼻

鼻は顏の中央に位して顏の品位を作るのに與つて力がある。あぐらをかいた鼻は低くて上品でない。高いのが上等と思はれたから、自慢することを鼻にかけるといひ、鼻を高くするといふ。少し得意になれば鼻をうごめか

す。威張る人は鼻の先で人をあしらふことがある。この私がなどと鼻を指すのを見ても、個人は或意味に於て鼻を以て代表されるのである。昔は自分の事を鼻様とも言つた。古い軍記物語で鼻白といふのはびつくりすること。びつくりすれば鼻が白くなるといふのは、恥かしい時に顏が赤くなるのと正反對である。鼻につく、鼻つまみなどは嗅覺の官能から出た言廻しである。

口

口は食物を容れる關門で、同時に言語を發する機關である。口に合はぬ、口が驕るなどは食物の方から言つた詞で、口が惡い、口が重いなどは言語に附いての慣句である。口すぎは糊口といふのと同樣、この語を聞くと、生きる爲に食ふのか、食ふために生きるのか、何となく生活難の感を惹起す。之に反して口車といふ一語は如何にも詐僞の多い世の中を眼前に浮ばせる。口は禍の門といふことは主として物いふ戒であらうが、暴飲暴食の戒にも應用が出來る。重寶なのも口、危いのも口、とかく口を塞がうとしても、人の口には戸は立てられぬものである。

耳

耳を傾けるといふのは漢語が本で傾聽する容子。耳を塞ぐは聞くを厭ふので、聞いて心に感動を與へる場合には國語では耳立つといふ。これは見る時にも同樣で目立つといふ語がある。目安い、耳安いなども目耳に通じて用ひられる。耳よりの話といふのは望ましい事を聞いた時にいふ。耳は顏の外に出て居るから、外氣に觸れ易い。

隨つて外方から來る音聲は一番早くはいる。其の代り寒い風などは最も強く感じる。それ故耳を切るやうな寒さなどといふ。耳にたこの出來る程聞いたといふのも面白い形容である。

胸

顏は濟んで胸に下る。胸が痛い。胸がつかへる。精神狀態の苦悶は胸に來てあらはれる事が多い。やう／＼胸が開いた、胸が透いたはその平癒したのである。胸の中には心臓がある。人の感情は忽ち心臓の鼓動に影響するから、昔の人が之を精神作用の本源地と思つたのも無理は無い。胸算用、胸勘定などの語もある。胸が潰れるのは驚の時、胸の火の燃えるのは怒の時である。

腹

腹の中には食物を消化する胃腸がある。腹が減る、腹がふくれるは至當の事であるが、こゝも感情をあらはす處と見られて腹が立つといふのは、考へれば面白い。腹に据ゑかねるから反對に立つのであらう。それが落着くのを腹がゐるといふ。腹いせといつて、日頃の無念を晴すこともある。膽力といつて、腹の中の膽から元氣が出ると考へたから驚くのを膽を潰すといふ。腹黑といひ腹がきたないといふに至つては全く精神が腹の中に在ると考へたらしい。よく腹で味はつて見ろといふのも考へて見よといふことである。武士の切腹は腹の綺麗なのを開いて見せる爲だといふ人もあるが、これは疑はしい。笑ふ時に腹筋をよるといふのは實際の情態である。又腹の皮をよるともいふ。それと同じ様に臍で茶を沸かすといひ、又甚しく嘲り笑ふことを臍が西國するともいふ。

腰がすわらなければ武藝は出來ぬ。それ故卑怯な奴は腰ぬけ武士である。尻に關しては尻餅をつくといふのが一番面白い。尻に目藥といふのも思切つた譬喩である。まだ〳〵澤山あるが、だん〳〵下つて來たからこれでおしまひ。

（明治四十四年一月「學生」）

新謠曲百番序

佐佐木信綱君は、現代に於ける和歌の一名匠たるのみならず、和歌及び歌學の史的研究者として、之に關する著書已に等身に及べり。今また新謠曲百番の珍書を刊行して、學界の人を喜ばしめんとす。謠曲は和歌との緣由淺からず、廣義にいへば謠曲も亦和歌史の一部分たるべきもの、佐佐木君が終始其の志を改めずして、歌學を研鑽せらるゝ誠心や、眞に多とすべきなり。

史料の蒐集、美術品の保存は、官府の事業として早くより實行せられ、近年は各地の舊蹟遺存の方法をも講ずるに至れり。獨り我が古文學に關する典籍の搜索、保存、出版等に至りては、尚個人の手に委するのみにて、官府は何等の力を假さず。佐佐木君の斯學に忠實なる、東奔西走、故老に諮ひ、舊家を叩き、苟くも未見の書あれば數百里を遠しとせずして、探討到らざるなく、從來湮滅せし古書の、君の獨力によりて發見せられしもの頗る

多し。余が知れる限を擧げんに、歌經標式異本一卷、天治本萬葉集一卷、萬葉集抄二卷、元暦校本萬葉集十四卷、顯昭の六百番陳狀完本一卷、仙覺の奏覽狀一卷、源承の和歌口傳一卷等、いづれも希世の珍籍にして、國文學の至寶とすべきもの、皆君が熱誠を以て羅致し得たるものにして、本書新謠曲百番の如きも亦、其の一に數ふべきものとす。本書の原本が、英人チヤムブレン氏の藏本中より出でたりといふに至りては、人をして一層感慨の念を深からしむ。

維新以後、百事舊を棄てて新に就き、只管西洋の學問を入るゝに急にして、何人も固有の文藝を顧みざるに際り、潛心我が國語を研究し、國文學を研鑽せしは、かのチヤムブレン氏を始めとして、サトウ氏、アストン氏等の英國紳士なりき。チヤムブレン氏は、後文部省の命を受けて、日本小文典を著し、又東京大學に聘せられて、日本文法を講ずるに至れり。是に於いて世人漸く外人に國語を學ぶの冠履顚倒たるを論ずるものあり。爲に一層國學復興の氣運を促成せしが如し。之より前、米國人フエノロサ氏が日本美術の特長を論じて、世人の視聽を動かししも亦時にとりて一服の清涼劑を投じたる觀あり。國民が次第に自覺心を喚起して、遂に日清日露の二大戰役に克つを得たりしもの、回顧すれば、これら外國紳士の啓發に負ふ所なしといふべからず。學界未知の謠曲百番が、早くサトウ氏の手に入り、チヤムブレン氏の所藏に移りて今日に至れるは、適々以て明治初年の學界の形勢を窺知すべく、チヤムブレン氏の今や頽齡に近づきて歸國せんとするに際し、我が國の學者によりて本書の世に出づるを思へば、誰か一種の感慨に打たれざらんや。而して誰か又國家の祝福をおもふの情に堪へざらんや。

史料の蒐集はもとより大切なり。古美術品の保存も亦固より必要なり。然れども國民が思想感情を吐露せる國文學は、祖先以來の心性的作物として、吾人にとりて無上の珍寶たること、論ずるまでもなし。之が蒐集、保存は、個人としても、國家としても、力を極めて盡さざるべからず。余は本書の刊行せらるゝに臨み、一には、本書を佐佐木君に贈遺したるチヤムブレン氏の好意を喜び、二には、佐佐木君の熱心能く此の珍籍を世に出すに至れるを喜び、三には、世人をして古文學の尊重すべきは古美術に劣らざることを知らしむべき機會を得たるを喜ぶなり。

（明治四十四年一月十日しるす）

學者の逸話

一

書物に載つてゐる人々の逸話を讀むと、如何にも能く古人の風采が想望されて、面（まのあた）り其の人に接する感がある。就中昔からの碩學鴻儒が幼時からの刻苦勉勵、遂に能く學問に成就した經歷に就いての逸話の如きは、片々の小話中にも絶大の教訓があり、後世を感化する力は頗る大きいといはねばならぬ。併しよく考へて見ると、世上に傳はつて居る逸話の中には或は全くの作り話では無いかと思はれるのもある。如何にも能く其の人物を示す

やうには出來て居るが、實際あつたかどうか、疑はしいと思ふやうなのが隨分ある。中には却つて其の人物を害ひはしないかと疑はれるのもある。日々の新聞紙に出て居る話を見ても、隨分誤謬は免れぬ世の中であるから、古い時代の傳記逸事に間違の無いとは決して言はれぬ。古來の偉人にすべて何等かの傳說が附加されて來るのは寧ろ當然の事である。

二

古學派の鼻祖、伊藤仁齋、實に一代の儒宗といふばかりでは無い、日本支那を通じて、斯學に有數の大學者である。此の人が節分の祝に必ず麻上下(あさがみしも)を着けて、福は內、鬼は外の豆撒をしたといふこと、並びに或時お寺を通つて佛像の前にお辭儀をしたといふこと、此の二つの話は溫厚篤實な仁齋の性行を誠によく現した話とおもふ。宋儒の說を排斥して古學を主張する程の大見識はありながら、世間一般の禮法を棄てず、豆撒を自分でしたこと、又儒學者ではあるが、寺院に入つては佛像をも輕蔑しなかつたこと、此等に就いて門人が彼是言つたとすれば、門人がつまり先生を了解しないので、仁齋が常規を外れなかつた大學者であることは此等の話で分る。然るに又一つの話に、或時近所で井渫(あとさらひ)があつた。仁齋も之に加はらうといふ。「それには及びません」と近所合壁の者の止めるにも拘らず、仁齋先生みづから出掛けて、繩を引つぱつて、井渫に與つたといふ。これは何だか嘘らしい。仁齋の性質からいへば、平常飲用して居る井の井替(あとがへ)であるから、自分も之に力を添へようといふのは如何にも言ひさうな事で、又しさうな事であるが、さりとて近所の人が之を承知して、させたとはどうしても考へられぬ。

仁齋先生如何に貧乏をして居つたとはいへ、とにかく學者として知られて居る人である。その大先生に井浚をさせて、裏長屋一同平氣で居つたとはどうしても思はれない事である。

三

仁齋の赤貧であつた事は疑がない。其の赤貧を苦ともせず、千石で抱へようといふ肥後からの招聘をも斷つたのは流石に仁齋の仁齋たる所以で、同じく處士では終つたが、二百石以上ならば何時でも仕へたいと言つた太宰春臺などとは同日の論では無い。さて其の赤貧な有様を語る逸話として、或年の暮に餅を買ふことが出來ない。仁齋は平氣で机によつて讀書して居ると、妻なる人が「貧乏には慣れて困りも致しませんが、子供の原藏(長子東涯)が、頻りにせがみますから」と泣きながら言つたので、仁齋は一言も言はず、着て居つた羽織を脱いで與へたといふ話がある。成程東涯のまだ子供の時分、貧乏で年越の出來ないやうな苦しい時代もあつたかも知れぬが、仁齋とも言はれる人が羽織を脱いで、それを賣るのか、或は質に置くのか、とにかくそれで一時の凌ぎを附けるといふのはあまりに無鐵砲無頓着なことで、思慮ある君子の所爲では無い。如何に赤貧でも何とかしてまだ別に方法の立て方はある筈である。節分の日には上下を着けて豆撒をする程きちやうめんな人が、まるで裏店の其の日暮しのやうに、着の身着の儘の羽織を脱ぐといふことは到底あり得べからざる事のやうに考へられる。謠曲の鉢の木に、佐野源左衞門は祕藏の梅松櫻の植木を燃して行脚僧を饗應する事がある。如何に貧家とはいへ、祕藏の梅松櫻を燃やさずとも、何か燃料にするものはありさうに思ふ。それと同様、赤貧といふことを示すが爲に作

られた話ではあるまいか。かういふ話は却つて仁齋の人格を傷つけるやうに感ぜられるのである。

四

仁齋が追剝にあつた話がある。四五人の盜人が刀をつきつけて、着物を脱げといふ。その時仁齋は問うて「お前方は何の商賣をして居るか」といふ。盜人は口を揃へて、「夜中に歩いて、人の物を掠奪するのが商賣だ」といふ。仁齋「さういふ商賣があるならば、仕方がない。着物をやらう」と、悉皆脱いで與へた。其の時盜人どもは感心して、「年來此の商賣はして居るが、あなたの樣な落着いた人は無い。一體あなたの商賣は何ですか」と。仁齋答へて「余は儒者なり。儒者といふものは、人の道を以て人に教へるもので、親には孝行、兄弟には友愛、それ〴〵の道を教へるものだ」と、かう言ひ聞かせたので、盜人は皆頓首涕泣して、「同じ人でありながら、あなたと私どもとは雲泥の相違、これから改心して眞人間になりませう」と、着物を仁齋に返して、それから改心したとある。仁齋の大德が多數の人を感化した事は言ふまでもないから、もし一種の譬喩談と見たら誠に面白いと思ふが、實際仁齋の一言に盜賊どもが其の日から飜然非を悟つたかどうか甚だ疑はしい。それのみならず、追剝に遇ひながら、一體お前は何商賣かと聞いて、さういふ商賣があるならば、仕方が無いから着物をやらうといふに至つては、大儒仁齋を全く迂濶な人物と見下した話である。如何に朝から晩まで讀書三昧に耽つて居る人でも、追剝の何者たるかを知らぬ理窟は無い。又さういふ商賣ならばやらうといふ馬鹿な應對があるものでは無い。

五

追剝に遇つて感化した話は近江聖人といはれた中江藤樹にもある。藤樹のは少し話の模樣が變つて居る。藤樹は始め二百文を投げてやつたが、盜人は承知しない。「着物も大小もよこせ」といふ。藤樹は目を塞ぎ、腕をこまぬいて色々熟考したが、むざ〳〵と自分の物を人にたゞやるといふ理窟は無い。勝負をして負けて取られゝば、それ迄の事だ。勝負をする時に名乘り合ふのは昔からの仕來りであるから、先づ我が名を名乘らう。「我は近江の者で、中江與右衛門といふものだ」と。之を聞いて盜賊どもは刀を棄てて一同藤樹の前に平伏して、「我等の鄉里でも先生の名を知らぬものはございません、誠に御無禮を仕りました」と頻りに詫入るので、藤樹は「人として過の無いものは無い。過ちては能く改めよ」と例の知行合一の理を說いて聞かせたので、賊は感泣して皆善人になつたといふ。これは近江聖人といふ名が誰にも知られて居つたといふ事を傳へた話で、藤樹の盛名如何にもさうであつたらうとは思ふが、併し實際の話とは受取れない。追剝に向つて名乘を上げて勝負をするといふ馬鹿な事があるものか。若し藤樹が名乘を上げたとすれば、自分の名は盜人も知つて居るだらうと試みに名乘つて見たと外、考へられぬ。馬鹿か策略か。いづれにしても聖人たるものの所作では無い。或人が藤樹の墓に詣でて案內を賴んだところ、百姓が着物を着替へて案內して、誠に丁寧であつたといふ話、又或人が藤樹の筆蹟を示すとて、禮服に着替へて禮拜したといふやうな話は、如何にも藤樹の餘德の同鄉人に及んで居ることを示すもので、藤樹の人格を想見せしめるのであるが、强盜の話になると、まるで之を打壞して滑稽にしてしまふ。

六

仁齋の子五人原藏、重藏、正藏、平藏、才藏。伊藤の五藏といつて、揃も揃つて家學を繼いだ立派な學者であつた。中にも長男の原藏が卽ち東涯、末子の才藏が蘭嵎で、此の二人が最も有名で伊藤の首尾藏といはれたのである。此の東涯も亦仁齋に似て溫厚篤實な人であつたらしい。或時路で拾物をした。中を開けて見ると、十兩餘もある。落した人は嘸難儀をして居る事であらうと長い間其處に立つて待つて居たが、いつまで待つても來ない。とう〳〵日が暮れてしまつた。やむを得ず、持歸つて棚に上げて置いて、その後伊勢大神宮に寄附したといふ。今ならば早速警察へ屆出るのであるが、其の時分の事とて、かういふ處置を取つたのであらう。錢を拾つて自分の物にせぬ位の事は東涯先生で無くても、誰でも分つて居るが、落し主が來ないかと暗くなるまで立つて待つて居た事がこの話の生命であらう。これは或は本當の話かも知れぬが、始め之を拾つた時從者をして擧げしめたとあるから伴の者が居たのに相違ない。さすれば伴の者に言付けて落主を尋ねさせるか、待たせるかしてもよかつたらうと思ふ。又自分の內の棚へ上げて置いて、後で大神宮へ寄附しなくても、別に屆出て落主を搜索するといふ方法の無かつたことはあるまいと思ふ。東涯の篤實な性行をあらはす爲に出來た傳說ではあるまいか。

七

父の仁齋は或時娼家に呼上げられて、それとは氣附かず、唯慈善家が馳走するものと思ひ、茶を飮み、煙草をふかし厚く謝禮を述べて歸つて來たといふ話があるが、それと同樣、東涯は接棹の三味線を入れる箱と氣附かず、古道具屋から買つて來て書物を入れて置く。弟子の者が、「それは三味線を入れる箱です」といへば、東涯「そん

な事があるものか、三味線がどうしてこんな小さな箱に容るものか」と言つた話がある。いづれも大學者が世事に疎く、花柳の事情を全く知らないといふ事で、殊に東涯の三味線箱の話などは、全く實際あつた事であらうと思ふ。併し仁齋の娼家に呼入れられた話は恐らくは作り話であらう。仁齋の娼家を知らなかつた事は當然としても、それを慈善家の事業と思ふに至つてはあまりに仁齋を迂濶視して居るではないか。

八

物徂徠も一世の大儒である。此の人にも吉原の方角を反對に指さした話がある。徂徠は儒學のみか、兵學にも明るく、何から何まで雜學にも博くわたつた人で、一種の將棊まで發明した人である。江戸に永く住んだ人で吉原の方角を知らぬ筈が無い。たとへ吉原の方角を知つて居たとても、決して徂徠の價値が下るものでは無い。あまりに學者を神聖にしようと思ふ考から、却つて學者を迂濶な人にしてしまふ。

徂徠は資性豪邁、眼中に人なしといふ有様である。講學の外の趣味は煎豆を噛んで宇宙間の人物を誹るのだと言つた位である。隨分大言壯語した人であるが、併し其の學問と勉強とは誰も及ぶものが無かつた。死んだ時大雪が降つた。臨終に際しても、「海内第一の大人物徂徠が死ぬから、天が銀世界を作つたのだ」と言つたと傳はつて居る。又一説には「偉人の死ぬ時には紫の雲が空を掩ふ。早く行つて見よ」と息を引取るまで頻りに門人や家人に語つたと傳はつて居る。いづれにしても末期まで大言壯語を止めなかつたといふので、徂徠の人物を能くあらはして居るが、實際であつたかどうか。

（明治四十四年三月「學生」）

辭書に無い語

上

辭書といふものはあらゆる國語を包含すべき筈であるが、余等が平常話す詞の中で、辭書に採られて居らぬのが澤山ある。それは物の音聲を擬していふ語、又音聲でなくても音聲の連想から其の模樣を言つた語である。いづれの國語にしても、音聲に擬して作つた語は可なりに多いので、或言語學者はすべて人の言葉は物の擬聲から出來るものであるとさへ論じた。之を言語起源のワンワン說 (Bow-wow Theory) といふ。即ち犬の聲から附けた名である。此のワンワンの一語でも分るが、日本ではワンワンといふが、英語では Bow-wow といふ。猫の鳴聲は日本人にはニャー、ニャーと聞えるので、赤ン坊は猫の事をニャーゴといふ。即ちネコである。併し英語の讀本などを見ると、ミヤウ、ミヤウと鳴くので、nとmとの區別がある。鐵砲の音を形容する語でも、英語では Bang などと書いてあるが、日本ではズドンである。同じ音聲を聞いても、人種が違へば異樣に聞分けるのが面白い。但し Cuckoo と郭公(ホト、ギス)などは東西甚だ相似て居る。鳥の名でいへばガン、カラス、ウグヒス、蟲の名のキリ〴〵ス、チンチロリン、音聲を擬した物名は國語にもなか〳〵多い。午砲をドンといふのもつまり

は擬聲である。太鼓をデン／＼といひ、三味線をペン／＼といふの類、子供の言語の中に多いのは人をして言語發達の順序を會得せしめる。漢語の牛馬犬猫をはじめ、鳥も鴉も金も風も大方は擬聲の語であるに相違ない。今はさういふ起源を敍べるのでは無い。擬聲の形容語に就いて一言するのである。

「戸をほと／＼と叩く」「涙をはら／＼と流す」の類は雅文にも用ひられてある。「ザンブとばかり飛込む」「スラリと一刀引抜く」などは小說中によく出逢ふ形容である。「ひいとなく尻聲悲し夜の鹿」「わや／＼と植ゑて去りけり田一枚」など俳句にも尠くは無い。これ等はよく用ひれば文章の勢を增し、狀勢を躍如たらしめる效がある。平常の言語に氣を附けて見ると、隨分澤山あるものである。

鐘の音のゴーン、車の音のガラ／＼、笛の音のピーなどは實際の擬聲語である。チリン／＼、ガタン／＼、ガチヤ／＼、ガフ／＼、カン／＼、ゴト／＼、ガブ／＼などは皆此の一類に屬する。すべて日本語の擬聲語にはかういふ樣に二つの同じ音を繰返していふことが多い。時計の響でも、チヨキ／＼鳴るといふ。西洋人は前後を少し變へて Tick-tack と響くといふ。ガタピシするとか、ペチヤクチヤ喋舌るといふやうに前後を變へていふのは日本語には比較的に少いかと思ふ。ヤンヤ／＼は聲を出して譽める音聲、ムシヤ／＼は頻りに食ふ時の音聲、ムニヤ／＼は寢言の音聲。笑聲は殊に種類が多い。アハハハは男の笑聲、オホホホは女の笑聲、ケラ／＼、ゲラゲラ、カンラカラ／＼など樣々である。

ソロ／＼、スル／＼、サラ／＼などは多少音聲を擬した點もあらうが、音聲からの連想で、むしろ其の模樣を

あらはすものである。その濁音のゾロ〳〵、ズル〳〵、ザラ〳〵なども同樣である。タラ〳〵、トロ〳〵、ダラ〳〵、ドロ〳〵などもこの類に屬する。すべて日本語では淸音にいふ時は上品で細かいものが、濁音になると稍下品に大きく聞える。カン〳〵に對するガン〳〵、コロ〳〵に對するゴロ〳〵、カタ〳〵に對するガタ〳〵、トク〳〵に對するドク〳〵、トン〳〵に對するドン〳〵の類である。ソロ〳〵とゾロ〳〵、トロ〳〵とドロ〳〵などもやはり其の例である。チチ（父）の濁音はヂヂ（祖父）、ハハ（母）の濁音はババ（祖母）でやはり大きくなるのである。

ピカ〳〵、ヒラ〳〵などは視覺の感をいひあらはした語で、音聲には關係がない。「目をキョロ〳〵する」「頭がテカ〳〵して居る」なども此の類であらう。「舌をペロリと出す」のペロリの如きは音聲も交つて居るやうに思はれる。ツル〳〵、ヌル〳〵、ペタ〳〵、ベタ〳〵などは觸覺の感から出た語で、「ツン〳〵頭が痛む」のツンツンのやうなのも、つまりは觸覺の經驗を應用したのである。

下

カ行の音は堅い、ナ行の音は軟いといふ樣なことは所謂音義說といつて、昔から盛に唱へられたことであるが、擬聲、模樣の音には是があてはまる事が尠くない。ナ行の音nは鼻へ抜ける舌音であるから、成程やはらかい。緩漫なのんびりして迫らない、粘着力のある氣味がある。ヌル〳〵、ネチ〳〵、ノロ〳〵、ノソ〳〵、ノタ〳〵、ニチヤ〳〵、ニコ〳〵、ニタ〳〵、ヌラ〳〵の樣な類である。ヤ行の音にはヨロ〳〵、ユラ〳〵、ヨチ〳〵、ヨ

タ〱、ユル〱等これは物の一定しないで、動いて居るやうな模様を示す語が多い。サ行の音にはスラリ、ソロリ、サラ〱、ソロ〱など物が靜かに摩擦して進行して行く様な處が目立つ。カ行ではカラリ、コロリ、カン〱、コン〱、クン〱など金か木かのやうな堅い音を爲すことが多い。

徒歩するのを「テク〱歩く」といふのは、どういふ形容であらう。これ等は音聲を擬したのではあるまい。「メソ〱と泣く」「ヌツツスツツして居る」「ケロリカンと坐つて居る」「仕事をテキパキ片附ける」などは聽感や視感や觸感の方からは了解の出來ない語である。語の音と語の意味とに何かの聯絡があるのである。「ポカンとして居る」「ズン〱捗取る」「チンチクリンな人」など皆此の類に屬するのである。

ラ行の音は元來の日本語では語の上に出て來ることが無い。ラリルレロの頭に附いた語は漢語か西洋語かが日本語になつたのである。それ故、昔の音義學者はラ行は從屬の音であると唱へた。擬聲、模様の形容語には不思議にラ行の音の附いたのが多い。カラ〱、キラ〱、クル〱、コロ〱、ソロ〱、スル〱、サラ〱、シル〱、タラ〱、ツル〱、テラ〱、ヌル〱、ノロ〱、ヒラ〱、ハラ〱、ボロ〱、ヘラ〱、ユラ〱、ユル〱、ヨロ〱、ガラリ、ブラリ、ヒラリ、スツテンコロリンなど皆これである。

漢語にもかういふ種類の語は澤山ある。蕭々、颯々、涓々、滴々、霏々、紛々等の類は古來の慣用に從つて誰も誰も詩文に用ひて居る。何々然、何々乎といふのも擬聲語である場合が尠くない。和歌には元來あまりかういふ語を用ひなかつたが、俳句には隨分用ひられて居る。野卑なのは棄てねばならぬが、將來口語文の發達の爲に

はこれ等の擬聲語を使つて見るのも面白からう。

（明治四十四年四月「學生」）

變つて行く名稱用語

雜誌「新日本」には十二人の顧問がある。いづれも當代第一流の大家で、誠に結構な次第である。それに就いて想出すと、この顧問といふ語は近頃種々の方面に用ひられる。會社などにも折節顧問といふ名が見える。今度文部省に設けられた維新史料編纂局にも顧問といふ顔觸が山縣公以下六七人見えた。樞密顧問官、宮中顧問官等は明らかな官名である。元來顧問といふ語の意義は顧みて問ふといふので、一寸横を向いてあれはどうだつたかなと質問するやうな氣味があるやうに思ふ。卽ち身分の上の人から、目下の人に相談する時に用ひるのが本當ではあるまいか。

天皇陛下に、樞密顧問、宮中顧問あるのは不思議では無く、大隈伯の位置名望又其の年輩から言つて、「新日本」の十二先生を顧問とせられるのも格別不妥當とも思はぬが、最も面白く感ぜられるのは愛國婦人會の顧問である。各府縣の支部長はいづれも知事の夫人で、その顧問は知事閣下である。女房の後に坐つて、其の質問に應ぜられる有樣を想見すると、どうしても明治時代の女權擴張を尤もと首肯（うなづ）かせるのである。

大隈伯主宰といふ主宰の二字も雜誌には始めて用ひられたかと思ふ。書物に監修といふことは、支那に例もあり、職名にさへなつたかと思ふが、日本で始めて用ひたのは三省堂出版の「漢和大辭典」に重野、三島、服部三博士の監修と銘を打つたのが嚆矢であらう(余が記憶によれば)。その後種々の書物に用ひられる樣になつた。近頃目新しいのは「新日本」の主宰と、「社會政策」の板垣伯董督である。漢文復興とあつて、隨分色々な熟語が用ひられる。今に眞宰とか守宰とか、乃至は選督、親督、專督なども必ず用ひられるであらう。熟語の意義の時代によつて變遷すること、又新奇な熟語の喜ばれることは當然の事である。

會に會長があり、總裁があり、評議員があり、幹事があるのはまだ聞えるが、會員の中に色々の區別のあるのは甚だ面白くない心持がする。會といふものは元來協同一致で、或目的をするものであるから、成るべく平等でなければならぬ。然るに名譽會員、特別會員、贊助會員、通常會員などの色々の階級があり、軍人の或會の如きは元老といふ特別な名稱さへ設けた。誠に以て面白くない。しかも其の種々な名稱は多くは寄附金、會費などの多寡によつて區別するに至つては、誠に現金な世の中である。

會社といふのは日本の新熟語。社會といふ語を上下にひつくりかへしたのださうだ。外國では Society, Gesellschaft 社會も會社も同一語である。社會といふ語は支那にも用例があるので、それを倒にして社會と區別する爲に會社といふ飜譯語を造つた機轉には誠に感心するが、Office といふ一語が、役所でも、私人の事務所にでも用ひられる輕便さに至つては、うたゝ東西習慣の相違を驚かずには居られぬ。

頭取、肝煎などの舊名稱はだん／＼廢れて、今日どんな民設の會社でも社長である。監査役である。それでもまだ監査役の役の字、取締役などの名稱が殘つて居るのが面白い。徳川時代には役人の名稱は餘程通俗的であつたが、此の點では明治時代になつて、かへつて官民の區別がこちたくなつた。

明治の王政復古は大寶令の職員令の名稱を其の儘に復活した。それが新しい行政の仕事が起ると同時に色々に變化すべき必要が起つて、今日は實に種々雜多である。明治十八年の官制改革までは各省の長官は卿、次官は大少輔であつたが、それが皆大臣、次官と變つた。今日でまだ昔の面影を殘して居るのは宮内省だけで、寮の長官が頭、次官が助、職の長官が大夫、次官が亮である。又軍人の將、佐、尉なども昔の餘波を留めて居るが、軍醫正といふ正の字は元來司（つかさ）といふ役所の長官。その上に更に軍醫監があり、又軍醫總監があるのは今の官制である。檢事にも正があつて、正の語が軍醫と檢事などに殘つて居るのは面白い。家令、家扶、家從といふ順序が昔の儘であるのは珍しい心持がする。今の世の官制の複雜なのは昔と比較にはならぬ。それも其の筈、樺太民政長官、臺灣總督などの官名は昔の人の想像も出來なかつた事である。飛行機研究委員とか、震災豫防調査會委員とか、奈良朝、平安朝の人には何の事やら分らぬに相違ない。試みに職員錄を開いて縣の事務官の肩書を見給へ、其の官職を到底一息で讀下すことは出來ない。

昔は院といふ役所はなかつた。院と申せば上皇の御所を申した。明治には左院、元老院、樞密院、それから貴族院、衆議院。曰く大學院。曰く學士院。曰く鐵道院。曰く何々病院。

大學院は英語で University Hall そのホールで想出したのは近頃ホールの增加した事である。Beer Hall がはじめで、ミルク・ホール、菓子ホール。ホールといへば、少し廣さうな氣もするが、間口二間、奥行二間位のホールが東京市の到る處に存在する。二十年位前の事かとおもふ、散髪床の看板に何々樓としてあつて、しかも二階も何もない店が多いのを、支那人が見たら嘸びつくりすることであらうと或新聞に書いてあつた。現今のホールを西洋人が見ても同樣にびつくりするに違ない。

昔は何々屋といつた商賣屋も今はだん〳〵と屋號を止めて店、廛、鋪、軒、舍、堂、館などといふのが多くなつた。昔の越後屋は卽ち今の三越呉服店である。

古い書物を見ると、卷末に山城屋佐兵衞、山中市兵衞、淺野屋彌兵衞、須原屋茂兵衞などいふ名が見えるが、今の書肆にはそんな名は甚だ少い。嵩山房は徂徠先生の逸話も想出されて古い名であるが、それに似たのは富山房。金港堂、錦耕堂など、一寸聞くと同じやうなのも色々ある。いかめしいのは弘道館、弘文館、日進堂、有朋堂、誠之堂、育英舍、育文舍等の名稱で、此等の名を聞くと、舊幕時代の諸藩の學校が思出される。儒教を根本とした諸藩の學校は明倫、造士、養賢、時習、修猷、修道、明道、弘道、尙德、日進、明德、誠之といふやうな名をつけたので、今日中學校等の其の名を殘して居るものも三四はあるが、今の學校は概して實用的に何縣第一中學校、第二中學校等といつて居る。さうして前の學校の名稱が却つて本屋の方へ移つて行つた。

今の本屋の名稱で一番多いのは文の字を用ひたものであらう。就中何文と文を二字目に置いたのが非常に多

い、博文館、弘文館、同文館、寶文館、興文社、郁文舍、廣文堂、廣文館、泰文社、建文館、生文館、好文堂、敎文館、敎文堂、積文堂、原文堂、開文館、益文堂、昭文堂、魁文堂、海文堂、敬文館、國文堂、雄文館、尙文館、貢文堂、芳文堂、明文館、誠文堂、尙文堂、北文館、原文館、豐文堂、集文館、明文館、彙文堂、隆文堂、郁文堂、以文堂、盛文堂、正文堂、養文館、ざつと勘定しても四十。これは東京だけの發行、小賣の書肆等をも入れての話であるが、田舍のを加へれば、もつと多い。中には、熟語にも何にもなつて居らぬのもあるが、とにかく文といふ字を附けたのである。文の字を上に置いたのは、文昌閣、文會堂、文光堂、文寶堂、文錦堂、文進堂、文星閣、文友館、文盛堂、文林堂、文祿堂、文光堂、文求堂、文明林、文淵堂、文學堂、文友堂、文圃堂、文章堂、文行堂、文進堂、文樂堂、これもなか／＼多い。開發社、開成館、文明堂などは明治式を氣取つた名である。

紫金錠、奇應丸といふ藥の名も今は古い。寶丹、精錡水等今でも賣行は盛であるさうだが、名稱はやはり古い。此等になると古いので又能く賣れる。すべて近頃の藥は西洋流の名が必要である。ゼム、グリコナール、タカヂアスターゼ、ツヨール、アンチピリン、新聞の廣告で名を見るばかりで、どんなものか知らぬのが多い。洗粉でもクラブ洗粉、齒磨でもライオン齒磨、サイダー、シトロン、シナルコ。藥種の名で想出したが、昔は丸、散、丹、膏といつて、丸は丸藥、散は散藥、丹は煉藥、膏は膏藥、其の名稱通りであつたが、此の頃のは仁丹といつても煉藥では無い。やはり丸藥である。昔風にいへば仁丸といはねばならぬものである。併し萬金丹、清心丹な

ど古くから丸薬に丹の字を用ひてあるから、これは余が思違かも知れぬ。

治療といへば今の醫術らしく聞え、療治といふと漢法醫らしく聞えるといつた人があつた。少しの事で違ふものだ。今の醫術はそれ〴〵に分科して誠に精密になつた。內外科、小兒科、婦人科、耳鼻咽喉科、眼科、齒科等。專門醫だけの事はある。併し泌尿器とか、生殖器とかいふことを麗々しく電車などに廣告してあるのは、あまり感心した事とは思はぬ。就中思切つて付けた名は東京肛門病院、露骨といふことは或點からいへば現代の一特色である。

醫者といふと腹を立てる醫者がある。我等にはさうは思はれぬが、何となく侮辱して聞えるとの事。成程考へて見れば役者、藝者、易者など者のつくものはあまり高尙には聞えぬ。但し學者といふ語は例外だ。何故に學者がをかしくなく、醫者が侮辱らしく聞えるかと考へて見ると、學者といふ語はやはり漢文に用ひられるからで、醫者は全く日本作りの漢語であるからであらう。

之と反對に者の字をつけて言はぬと叱られるのがある。それは新聞記者で、新聞屋などと言つては非常に失禮に當るさうである。

醫者は醫又は醫師と呼ぶべきである。昔は物の製作人が何々師と稱したのが色々あつたが、今は一向見當らぬ。獨逸などで何々 Meister といふのが甚だよく似て居る。今でも立派に師の字を殘して居るのは大經師だけである。さうかと思ふと靴屋の看板に靴師と書いてあるなども折々見受ける。

洋服裁縫店に限つて高等といふ二字を冠するのはどういふわけか。高等下宿に至つては眞に明治式の新熟語である。

相撲の土俵場が國技館と銘を打ち、浪花節が武士道を鼓吹する時勢、用語のずん／＼と變つて行くのは當然の事で、いくら言つても盡きるものではない。

（明治四十四年六月「新日本」）

本居翁遺蹟

一

かつては雜誌「學生」に前文部次官澤柳氏が、近頃の學生が文科に向はずして、醫者や工學者になりたがる事を説かれて、お醫者さまの側から大分反對説が起つたやうであつたが、昔の學者には醫者と文學者と兼業の人が澤山あつた。現在でも醫者で兼文學者たる森鷗外氏や、井上通泰氏や、大野洒竹氏などを、しばらく擧げぬにしても、文學と醫學とはさうかけ離れたものではない。一つには醫者といふものは、朝から晩まで、病人、人生の悲しい半面を見て居る職業であるから、文學といふものに自らの慰藉を求めるやうになるのは自然である。加之昔は醫者になるのには漢學の力も必要であり、旁々いはゆる儒醫といふものが出來、醫者で職業を求めながら、

同時に儒學を研究し、文學に遊んだ人が多かつたのである。因つて余は忠告したいと思ふ。若し文學で飯が食へないと思へば必ずしも文科にはいらぬでもよい。醫者なり、工學者なりになつて、さて文學を研究して貰へばよい。唯金が多く取れるからといつて、其の方に向ふといふ考の人などは、醫者にならうが、何にならうが、決して第一流の人物にはなれぬのである。

二

我が國學の大家で、德川時代に於ける國學を大成したといつてもよろしい本居宣長は、醫者を業として居られたのである。口過ぎの爲に醫業をせられ、それで家計を維持しつゝ、國學大成といふ醫術よりも、もう一層廣い仁術を行はれたのであつた。今の世の中は專門だから、それでは專門の醫術に不親切だなどといふ評があるかも知れぬが、すぐれた人は常人の三倍は仕事が出來る。森鷗外君が文學をやられるにしても、醫術の方に不忠實だといふ評判はない。やはり醫學博士たると同時に文學博士である。本居翁はもとより醫者としての大家では無かつた。しかし食へぬからといつて、文學を見棄てる人では無かつた。食ふ方を醫業に求めて、好きな學問を研究された人である。眇たる伊勢松阪の一庸醫、それが天下を動かした大學者である。皇學の基礎を定めて、千古の模範となつた先生である。事を成すと成さぬとは、つまり其の志の如何にある。大學で選ぶ專門などはどうでもよい。

本居翁の著述には徹頭徹尾漢意に僻するのを戒めてある。それは其の當時の積弊に反對せられたのである。漢

學が盛で、何事も漢學で無ければ夜も日も明けぬやうに思つた時代、日本固有の道を忘れてはならぬといふのが、大人の主義、敷島の大和心を振ひ起さうといふのが、其の本領であるから、片つぱしから漢學に佞する輩を筆伐せられたのである。大人の此の主義が遂に尊王攘夷論の大本となつて、王政維新の大業に關係の大きかつた事はいふまでも無い。翁が醫者だけで自ら甘んじて居られなかつたのは國家のため大幸福であつた。

三

夜八時半頃、汽車を下りて、松阪の山川ホテルに投宿した。出發前翁の五世の孫本居清造氏から、此の宿が一番よいからと聞いて居つたのである。ホテルといふ名に、何となく西洋風の様式を連想して居つた余は、まづ其の純日本式の宿屋たるに驚いた。表二階の一室に通されて第二に驚いたのは、其の室の掛物も、額もかつて日本に居つた淸國人王漆園の書で、二枚立の屛風が韓國人の筆、一として日本趣味の無いことであつた。何事も漢心を排斥せられた翁の鄕里の宿屋としては、甚だしく不相應な感を起した。ホテル――松阪――支那人――少しも調和しないと思ひながら、眠に就いた。

四

翌朝ホテルの主人が挨拶に來た。誠に純朴な老紳士である。生粋な日本の松阪の人である。今日は山室山の翁の墓に參詣しようといふと、「私も久しく參詣せぬから同行したい」といふ。空に一點の雲も無い秋晴の天氣、車を聯ねて山室山へ向つた。

薄寒い朝風に面を吹かせて、野山の景色を眺めゆく樂しさ。早稻田は已に刈盡したが、晩稻田は金色に波立つて、豐年の喜を見せて居る。一里以上の路を往復するらしい一年生位の小兒の連立つてゆくのも、いさましく心地よげに見える。尾花や野菊の交つて居る疎らな小松原の道を通つて、やがて喬松亭々と聳えた山の麓を過ぎる。あの山は何、この山は何、「お墓はあそこの山の茂みの處です」と車夫の語るを聞きながら、いつしか山室へ着いた。車を捨てて爪先上りの坂道を上つて行く。繁つた木の間を流れる溪流の音、都に慣れた目や耳には淸らかに珍しい。杉、松、椎など小暗い道を稍四五町も上つた處に淨土宗の寺がある。妙樂寺といつて、翁には深い關係のあるお寺である。それから右へ左への九十九折を喘ぎ〳〵六七町も上ると、古い木の鳥居があつて、十數段の石磴の上、二三十坪位が平地になつて居る。其の中央の小高い土盛が卽ち翁の墓である。上に櫻の木が一本。「本居宣長奧墓」と題した墓石がある。山室山神社といふが祉殿も何も無い。翁の墓の左手に丸い石があつて、平田篤胤大人の、

なきからはいづくの土になりぬとも魂はおきなのもとに行かなん

と鐫つたのが立つて居る。

篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に敎を受けられた事はない。しかもあまたの門弟子の中で、ひとり翁の傍に侍つて居られるのは、嘸かし滿足の事であらうとおもふ。此の墓所はかの妙樂寺の持地面であつたのを、翁が懇請して生前に占定して置かれたのである。其の承諾を喜んで、住僧に宛てられた手紙は今尙同寺に珍藏して居

る。

山室の山に千年のやどしめて風に知られぬ花をこそ見め

と詠まれたのは此の時である。二十年來、一日として翁の書物を讀まぬ事の無い後進の一書生が、今始めて翁の墓前に額づいて、感慨は眞に無量であつた。

百年の世は隔つれど敎へ子に數まへませとをがみ額づく

翁が歿後の門人は幾百萬の多きに上つてゐるであらう。其の著書の卓絕な學術上の價値と、偉大な感化力とは、未來永劫に歿後の門人を作りつゝあるのである。世に學者の事業程絕大なものは無い。

此の墓所は山の頂にあるので、眺望の美しさは比類がない。靑々とした伊勢の海を見はるかして、志摩、三河、尾張等の崎々、山々。近くは松阪町を眼下に見る。「富士の山もいつもは丁度あのあたりに見える」とホテルの主人は指さした。千古に卓越した偉大な學者の奧城としては誠にふさはしい場所である。

妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅を拜し、參拜名簿に記入などする。此處の眺望も誠に美しい。元來、翁の祖先の檀那寺で、翁は折々此處に遊ばれたのである。今日は住僧が不在といふので、寺男が一人留守居して居たが、いざ歸らうとすると、その男は居ない。車夫に聞けば今在所まで行つて來るとて出掛けたといふ。さながらに太古の民である。

五

松阪へ歸つて城跡の公園に行く。こゝに鈴屋遺蹟保存會があつて、翁の舊宅が其の儘で保存せられて居る。又新しい倉庫には翁の自筆の草稿、遺愛のもの、醫業用の藥箱なども陳列されて居る。どの稿本も丁寧に綺麗に認めてあつて、翁が四十餘年の勤勉篤學、人をして襟を正さしめるに足る。舊宅はもと魚町にあつたのを、市中で火災の恐もあるから、保存會で、此の舊城址の一角へ移したのである。併し庭の樹木置石まで一切舊態を存するやう苦心したといふことで、本居清造といふ表札まで其の儘になつて居る。臺所の竈も井も便所も、本の儘の形が殘されて居る。下が引出になつて居る小さい階子段を上ると、二階が四疊半の書齋、その床の柱に三十六の鈴が六つづつ六段につながれて懸つて居る。(これは模造品で、本品は陳列庫に在る。)これが卽ち翁が一切の著述の製作せられた場所で、此の四疊半から日本全國を吹靡かす風が舞起つたのである。西向の窓からさし込む夕日は、嘸堪へ難かつたらうとおもはれて、此の質素な家居の樣が、いよ〳〵翁の人格を大ならしめる。獨逸のワイマールで、ゲーテやシルラーの舊宅を見た時にも、其の偉大な事業と其の質朴な家居の狀態との對比を面白く感じたが、此の鈴屋の遺蹟には一層其の感を深うした。ゲーテ、シルラーの舊宅を見た時は、日本にもかういふ樣に偉人の遺蹟を保存したいものだと思つたが、今やそれが實行せられて、先づ之を翁の舊宅に見ることを得たのは、誠に悅ばしいことである。

六

此の松阪の公園は四望豁然、パノラマを見るやうで、絕景であるが、翁の遺蹟を移して、更に崇高の威嚴を加

へた。我が國に翁あるは、我が國の誇、松阪町民の誇は翁の遺蹟に越したものは無い。城の大手門を出でて數十歩、縣社山室山神社がある。社殿瑞籬が、神宮風の様式であるのは一しほうれしく感じた。小春日和のうらゝかさに、此のあたりの櫻の木が幾本ともなく返り咲をして居る。宿の主人の話に、先年東郷大將の來られた時も、返り咲を見られて、「流石に本居翁の郷土故、櫻は一年中咲くのだらう」といはれたといふことである。

櫻木にゑりし百千の巻々ぞ風に知られぬ花にはありける

十月十一日奈良の宿にて（明治四十四年十一月「學生」）

私の中學生時代

私の中學生であつた時代は今から三十餘年以前で、其の頃教を受けた先生達の中で、まだ御存命のお方も澤山あるから、そんなに古い事では無い。自分から考へれば尙更昨日のやうで、今の氣分も其の頃の氣分と少しも變りはない。唯中學校の學科や、一體の書生の風が大分違つて居るから、私の頃はこんな樣子であつたと、今の中學生諸君にお話をするのである。

私は小學教育を新潟で受けて、最後の一年は東京の番町小學校で學んだ。そこを卒業して、入學したのが仙臺

の宮城中學校、其の時分は課程が二つに分れてあつて、邦語中學科と英語中學科とあつた。入學試驗を受けて邦語科にはいつたのである。此の頃の作文の模範として喜んで讀んだのは頴才新誌や小學教文雜誌などであつて、これ等は毎號待兼ねて讀んだ。外に中學生の見るやうな雜誌類は何も無い。これは今日の有樣と比べれば大變な相違である。學校で作つた文章は例の「一瓢を携へて杖を曳く」といふ體裁で、最後は「日西山に春く」とか「暮靄蒼然として來る」とかで收めたもの。「陶然として醉ふ」とか、「玉山已に頽る」とか平氣で書いて居たものである。總じて仙臺の地方(ばかりにも限るまいが)は、漢學がまだ／＼なか／＼盛で、學生は歸宅後必ず漢學先生の塾へ通つて勉强して居つた。同級生の中にも漢文を作つたり、漢詩を作つたりして居るから、羨しくてたまらない。それで私も親に願つて、其の頃名高かつた國分先生の許へ行つて、分りもせぬのに左傳の講義などを聽いた。先生の御座敷はいつも一杯で、聽講者が部屋の外まで溢れて居た。それから又佐久間晴岳といふ先生(これは有名な洞巖先生の後で畫家兼儒者)の許へ通つて、作詩を少々學んだ。もと／＼漢學の力が無いのだから、どうせ碌なものは出來ない。詩語粹金、幼學便覽などもひねくつて、始めて平仄とか韻とかいふものを覺えた。今日から考へると、此の時分に學んだ漢學が私の爲には餘程役に立つて居る。總じて此の時代には、學校の學科が今のよりは餘程樂であつたやうである。家へ歸つて後も、あまり學校の課目を勉强しないで、外の事をして居たやうである。そこで友達同士寄合つて詩を作つたり、文を作つたりして批評し合ふ。又輪讀會を開くといふやうなことが絕えず行はれた。此の時の同級生には今劇壇で名の高い松居松葉君も居られた。

今でも忘れられないのは、此の頃グールドといふ英語の先生が居られて、これが私等に地球儀の製圖法を教へられた。處が先生は日本語が出來ず、日本の英語の先生（有名な花輪虎太郎先生）が通辯して教へられる。邦語中學科の生徒で、何しろペラ／＼といふ英語は始めて聞いたので、グールド先生の話される間はをかしくて／＼たまらず、一人がクス／＼と言出すと、他の一人が又笑ひ出す。遂には全級アハハアハハと笑ひ崩れるので、其の度毎に花輪先生から叱られる。グールド先生も困つて居られる。これが毎日のやうであつたのは、今から考へれば誠に馬鹿げたことである。今日の諸君中には英語を用ひて笑ふやうな人は一人も無からう。翌年私は英語中學科の方へ轉科した。此の時私と一緒に轉科したのが、今の東洋汽船會社取締役の白石元治郎君であつた。

今日では英語の教へ方、學び方に正則とか變則とかいふ區別は無い。すべて正則であるが、其の頃は變則といふものがあつた。發音などは隨分勝手なもので、英米人に通じようが通じまいが構はない。直譯を旨として、手取早く英書を讀まうといふ流儀のやり方であつた。私どもの讀本の先生は卽ち變則の先生で、此の方から「蟻と、さうして猿、蟻が足をもつ、猿が手をもつ」といふやうな具合に、ウイルソンの讀本を學んだのである。先生が丁寧に一人づつ机の前で教へて行つて下さる。それを一生懸命で復習するといふ有樣で、勿論私ども學生等は字書などを持つて居るものは一人も無い。漢學の方では可なりむづかしいものを讀んで居るのに引かへ、英語といふものは馬鹿に子供らしい事が書いてあるものだといふ感を起して、英語には一向興味をもたなかつた。

一年程たつと、學科改正で邦語、英語の區別が無くなり、すつかり新規程を施行されることになつた。それで

全校生徒が試驗を受けて學力相當の學級に編入されることになつた。今迄の上級生もずつと最下級へ入れられる人も出來、最下級から一つ二つ上の級へ行く人なども あつた。今度は動物學、植物學、代數、幾何いろ〳〵な課目を教へられた。

何しろ漢學を面白がつて居つた子供等（少くとも私一人）に一番つまらなく思へたのは動物學であつた。それも先生がニコルソンの動物學とかいふ英書をもつて來られて、プロトゾアやアミーバなどの說明がある。少したつと蝶だの、蜻蛉だのの說明、それが今のやうに立派な教科書があり、面白く分るやうに出來て居るのではないから、隨分つまらないものに感じた。それで動物學をば「蟲つ子學問」と私どもは名づけて居つた。併し試驗前にはやはり一生懸命に筆記をさらつた。

一番面白いとおもつたのは地文學の講義で、松本文平といふ先生が講ぜられたのを、非常な興味をもつて聽いた。貿易風のこと、日蝕月蝕のこと、潮流のこと、熱帶、寒帶、溫帶の事など。それから物理學にもはいつて、寒暖計のことや、レンズの講義なども聽き、成程西洋人はえらいとおもつた。

幾何學は一向興味をもたなかつたが、代數學は誠に面白いものだとおもつた。併し點數はよくなかつた。

國文などといふものはもとより無い。讀本も無ければ、文法も無い。假名遣などは先生も無茶苦茶、生徒も無茶苦茶、唯漢文ばかりである。修身として論語、孟子を習ひ、漢文兼歷史として通鑑擥要を課せられた。ずんずん讀んで行くので、あの通鑑擥要を一學年の中に大抵終まで讀んでしまつた。何をいつても漢文が重要な學科で

自分等も一番面白いとおもつた。併しその時分から考へると、今日は國文の讀本も出來、文法も敎授されるといふ風になつて、誠に進步したものである。

試驗に讀んだことのない漢文の書物を試驗されたことがあつた。一人づつ呼出されて口頭試驗を受けるのであつて、其の間の監督が誠に嚴重であつたが、何でも今日は蒙求が出るので、しかも蒙求といふ書物の名はどうして出來たのかと第一に問はれる。それからこれ〳〵の質問があると、どこからとなく聞えて來たので、それを用意して行つて、首尾よく良い點數を貰つたことがあつた。

體操はあつたか無かつたか、よく記憶せぬが、慥か無かつたやうである。擊劍がなく、柔道もなく、唱歌などはもとより無かつた。

學校に演說會があつて盛に討論會が催されたことがあつた。一度出て見たが、今日から考へれば政談演說のやうなもので、私どもには分らぬことが多かつた。

今日では小學校生徒でも制帽を被つて居るが、其の頃には制帽も制服も無い。靴をはく人も二十人に一人位であつた。

學校から歸ると、三國志だの、八犬傳だのすきな本を讀んで遊び、叉例の近處の友だちと詩や文を作つて遊んだ。友だちの一人で頻りに小學敎文雜誌へ投書する人がある。其の人が或時私ども二三人の詩や文を書いて投書した。それが掲載されたので、私どもはこれは必ず例の某君のしたことに相違ないと、其處へ押しかけて行つて、

絕交しようなどと騷いだ事もあつた。

友人の中で、佐藤君(これは工科大學在學中死去)、遊佐君(これは陸軍中尉で死去)等は立派な文章家で、私どもが敬服して居つた。私の仲よしに一人は內藤文平君(これは私より一つの年上)、一人は和達陽太郎君(これは私と同時に上京、同時に大學卒業、電氣工學の專門家)、私と三人で、內藤君は年長故愚伯、私が愚仲、和達君が愚叔、三愚といつて喜んで居つた。內藤君は漢詩文の俊才であつたが惜しいことに夭折した。和達君は年少から非常の俊英であつて、何でもよく出來た。大學でも始終優等生であつた。今は電氣工學の方面の大家である。

宮城圖書館の出來たのは明治何年であつたか、何でも私どもが中學生時代に出來たのである。例の內藤君と和達君とは始終出掛けた。何といふことなく、手當り放題に讀んで遊んだが、五雜俎、搜神記、池北偶談などいふ書物を最も愛讀したやうに覺えて居る。

學校で運動會を催されることは無かつた。遠足會といふやうなものも無い。まして泊りがけの見學旅行などは一度もない。友だち同士で、近傍の山川を跋涉して紀行文を作ることなどを樂しみとして居た。

友人の只野成重君(工學士で鐵道院技師で先年死去)が上京されたのを羨しく思つて居ると、伯父が東京へ勤めることになつて世話してやるから來いとの話。早速父に願つて出京したのが十六歲の夏。愚叔の和達君もそれならば一緒にと愚伯君一人を殘して上京した。

東京へ來て見ると何でも英語でなければならぬ。算術でも、地理でも、歷史でもすべて原書でやらなければな

らぬ。朝から晩まで英語の字引と首引である。來年の豫備門の入學試驗には是非とも及第しなければならぬといふので、一心不亂に英語を勉强した。仙臺の愚伯君からは別れてから寂しいといふので時々詩などを作つてよこす。それを次韻などして居る暇は無い。あはれや愚伯君は其の翌年の春頃死んでしまつた。何しろ父母の膝下を離れて、仙臺の空なつかしく思ふ所へ、此の訃音を聞いて、これ程悲しいと思つたことは、生れて始めての經驗であつた。愚叔君も後には私の伯父の家へ寄宿して、一緒に勉强した。伯父は卽ち先般亡くなつた斯波有造で、其の頃は大藏省書記官であつた。從弟の斯波貞吉君、今の山形縣知事馬淵鋭太郎君、それから愚仲、愚叔などが、伯父を中心として八家文の輪講などをやつて貰つた。併しどうしても英語でなければならぬやうに思はれて、仙臺から持つて來た左傳や史記列傳などは一度も出して見たことは無い。外山正一先生の漢字破(やぶり)などの議論を聞いた時は、漢學などは全く止めようかとおもつた。所が斯文學會の演說を聽くと、今度はいつそ漢學ばかりで世の中に立たうとおもつて、英語も一切止めようかなどと考へたこともある。思想の一番定まらぬのは此の時代で、青年の最も愼むべきは此の年輩の頃であらうとおもふ。今から考へればどちらも止めなくてよかつた。

翌年にはどうやらかうやら豫備門の入學が出來た。すべての學科が英語で、生理も、動物も、歷史も、數學も、簿記までも英語であつたが、玆に至つて宮城中學時代の有難味が分つた。書物が英語で書いてあるばかりで、地文でも、動物でも、數學でも大抵の學科はまづ一と通り學んだものであつたから、大變に有難かつた。中學校で馬鹿にして居た學科も、大變必要な學科であると悟つた。此の有難味は三十年後の今日に至るまで忘れぬのであ

る。

宮城中學校は其の後一旦廢止された。舊宮城中學校の同窓生は今でも折々會合を催す。四五年の先後はあるが、其の中には控訴院の相原祐彌君、海軍省の吉川孝治君、大藏省の菅原通敬君、醫學博士の志賀潔君等がある。群馬、鹿兒島等諸處の中學校長として良校長の譽あつた岡元輔君も亦私どもの竹馬の友の一人である。

(明治四十五年四月「學生」)

年中行事の研究

私は玆に年中行事の研究に就いてといふことを揭げて置きましたが、別に年中行事の研究をお話する譯ではないのでございます。唯年中行事の研究といふことが必要であるといふ私の希望を述べたいといふだけでございます。其の積りで御聽取を願ひます。

こゝに私が申しまする年中行事といふものは非常に廣い意味のものであります。卽ち朝廷に於きまする正月元日の四方拜の御儀式を初めといたしまして、或は神嘗祭のやうなもの、大祓のやうなものも勿論含まれて居ります。それから又通俗の歲事記といふやうなものに書いてあります所の、例へば正月の七日には七種粥(なゝくさがゆ)を食べ

る、十五日の朝は小豆粥を食べるといふやうな民間の習俗、其の他神事佛事、何日には何處にどういふお祭があるとかいふやうな事柄を一切集めたものを、こゝに年中行事といふ意味で言つて居るのであります。

日本は近い頃まで各藩に分れて居りましたので、地方によつて風俗も違ひ、習慣も異なつて居ります。例へば九州と上方と東北とはすべての風俗習慣が餘程違つて居ります。これは交通の關係、政治上の關係、地理上の關係などから違つて來たこともありませう。又昔から今日までにだん〳〵と變つて來たこともあらうと思ひます。併し何しろ、此の年中行事といふものは廣く申しましたならば一國の文明、其の國の文化を示して居るものと言つて宜からうと思ひます。卽ち先刻佐々君も仰しやつた通り、一國の文學を研究いたしますのには神話、傳說といふやうなものから、俚諺、謎等の末に至るまで其の國の文學と看做すべきものでありまして、それを研究するのが、國民の性質を研究することになるのであります。

此の年中行事といふものは、吾々の日常の生活には密接の關係があるのでありまして、廣く言へば朝廷の御儀式から政治上のこと、殊に日本の國體にも關係があり、道德の淵源も其處にあるのでございます。つまり此の年中行事といふものは、やはり其の國民の思想の反映であります。隨つて文學の上にも大なる影響をもつて居りますから、文學を研究する上に於ても餘程必要なものであるのであります。

そこで日本の文明は御承知の通り餘程支那の文明を受けて來て居る。今日に於ては却つて支那の方から日本へ留學生を送つて、日本の文明を學んで居りますけれども、昔は餘程支那の文明を受けたものでございます。先づ

第一に日常のことに關係しまするものは暦であります。十干十二支で六十を一週として繰るのも、或は二十四氣、七十二候といふ立て方も、支那の暦に據つたものであります。さういふやうな譯で、この暦といふものが農業と餘程關係をいたします。農業からいろ／＼家事上に關係をして參ります。例へば何時種子を播くか、苗は何時植ゑるかといふやうなこと、大根の種子は何時播くか、芋の苗は何時植ゑるかといふやうな農業上のことから、蠶を掃立てるのは何時、梅干を拵へるのは何時といふやうなことまで、すべての日常の業務に關係をもつて參ります。

暦の關係でさういふことがきまつて來ると、今度は家の中のことに關係をして參ります。農業の方の關係からして、餅は何時搗く、煤拂は何時する、蟲干は何時するといふやうな、家を齊へる側の方に餘程關係をして來ます。隨つて先祖の祀は何時する、墓詣りは何時するといふやうなことに關係を及し、更に社交の上にも大いに影響して來るのであります。それから又梅雨の後で蟲干をすると同じやうに、身體の養生の上にも關係を及して參ります。夏の土用の中にはどういふことをするとか、寒い時節にはかういふ養生法をしなければならぬとか、かういふものを飮むとか、あゝいふものを食べるとかいふやうないろ／＼のことに關係して參ります。さういふことから、又何の日に藥を飮むとか、灸を据ゑるとかいふやうなことになり、隨つて醫者の方にも影響して參りまして、此の日には夫婦が交はつてはならぬ。萬一其の日に子が出來ると、惡い子が生れるとか、死ぬとかいふことを言つて來る。かういふ風に暦といふものは廣く人類の生活に影響し、個人の行住坐臥の上にも關係するので

あります。

そこで正月の初からのことを考へて見ますと、吾々のやつて居る事の中で昔から日本でやり來つたのであらうとおもふことが、意外にも支那から入つて來たものが澤山あります。中には暗合したやうなこともありますが、これは純粹の日本古來のことであらうと思つたものが、案外にも支那から傳はつたものであるといふことが幾らもあります。朝廷の御儀式の四方拜、一月一日の朝早く天子が神嘉殿へ出て御拜をなされるといふやうなことは、全く日本の昔からの儀式であるやうに思はれるが、此の四方拜の儀式も支那から入つて來たやうであります。支那で星を祭ることが傳はつて、それが日本の儀式と結び付いて、あゝいふ儀式が出來たのであります。

さういふ風に考へて見ますと、其の他にも澤山さういふことがある。正月に年を祝ふといふことは何處でも同じですが、殊に陰曆の新年になりますと、年の改ると共に季節も改つて春になる。大抵は年の改ると共に新春を迎へるといふことになるのでありますから、太陰曆の新年は殊に非常に喜んで之を迎へるのであります。そこで年を祝ふといふことに就いて、お互に酒を飲んで新年を祝ふといふことは日本にもずつと昔からありましたが、支那にも辛盤と稱へまして、同樣のことがあります。それから鏡餅を拵へて飾るといふことも、やはり日本の古來からの風習のやうに思はれますが、これも支那の書物を見ますると膠牙餳(かうがたう)といふものがあります。やはり其の形を鏡のやうに圓く拵へてそれを飾つて祝つたといふことがあります。これ等は或は暗合かも知れませんが、さういふことが支那にもありますから、事によると支那から傳はつて來たのかも知れませぬ。

それから屠蘇の如きは、これは公事根源にも書いてありますが、もとより支那から來たものであります。貝原好古の日本歳時記にも屠は「ホフル」、蘇は「ヨミガヘル」と言つて惡氣を避けるものである。故に元旦に此の藥を飲むのだといふことがあつて、やはり支那から來たものであります。それから蹈歌の節會、これは支那の千秋萬歳蹈歌を歌つて踊るといふ所から來たのに相違ありませぬ。名前からさうであります。

それから人日、正月の七日に粥を食べる、七種粥を食べるといふことは、古くから日本人のやつたことでありますが、支那でも此の日に七色の草を入れて粥を拵へて食べるといふことがある。現に今日でもやつて居ります。七種の菜羹といふことをやつて居ります。白馬の節會といふのも支那の方から入つて來たものであります。

それから子の日に小松を引くといふことがあります。これは日本固有のことのやうに一寸考へられて、支那傳來では無いことのやうに思はれますが、實は支那でも野原に出て松を引いて遊ぶといふことがありますから、これもやはり支那から傳はつて來た風習ではあるまいかと思ひます。

それから十四日に綱引をやつたことも、これも支那から來たことは明らかであります。それから鼹鼠打といふことがあります。これは俳諧の題にもありますが、土の中に居る鼹鼠を打つので、正月の十四日に田畑を打つて歩いた。これも支那から來たことであらうと思ひます。

それから十五日の左義長、これは青竹を燃すのでありますが、元は全く今日でも支那でやつて居る爆竹に相違ありませぬ。左義長といふ名前も妙でありますが、支那では二十五日或は年の暮にやつたものであります。除夜

から元日にかけて盛に爆竹をやりましたが、日本の左義長はそれを眞似してやつたらしく見えます。

十五日には小豆粥を食べる。これは地方によりまして違ひますが、荊楚歳事記に正月十五日に豆粥を作つて其の上に油香を加へて食べるといふことが書いてあります。これは支那のことでありますから豚の脂でも入れて食べたものかと思はれますが、日本で小豆粥を食べるといふことは、かういふ所から來たものであらうかと思ひます。

正月十六日の藪入、此の日は雇人などが自分の家へ歸つて一日遊ぶことになつて居りますが、支那でも此の日は一般に遊樂して遊ぶことになつて居つて、幾ら晩くまで何をして遊んで歩いても、巡査も咎めなければ、誰も何とも言はぬことになつて居ります。日本で雇人を遊ばせるといふことは、それから來たものであらうかと思ひます。それから二月十五日涅槃會はお釋迦樣の死んだ日で、支那から來たものではありますが、本元は印度から來たものでありませう。

それから社日、立春から第五の戊の日であります。立秋後の第五の戊の日もやはり社日と申します。此の日には支那では治聾酒と言つて、聾を治す酒を飲んだものであります。治聾酒といふのは俳諧の題にはありますが、全く日本の風習ではありませぬ。俳諧の方では支那の歳事記を土臺にして、季節に合はせて詠んだものでありませうが、日本には此の樣なものは實際は無かつたかと思ひます。

三月三日の節供でありますが、これは元上巳の節供と言つて、必ずしも三日ではなかつたのであります。三月

の初めての巳の日にやつたもので、此の日は母子草といふもので餅を拵へて食べたものです。支那では古く母子草で餅を拵へて食べた。文德實錄を見ると、やはり母子草で餅を拵へたといふことが書いてあります。それが後になつて、蓬で餅を拵へるやうになつたのでありませう。それから曲水の宴といふのも、これも古くから支那にあつたことでありまして、日本では顯宗天皇の時分から見えて居ります。年中行事には此の日に鷄合せをしたといふことがありますから、鬪鷄をやつたものと見えます。支那でも三月三日には鬪鷄をやつたやうであります。それから雛遊びといふことは日本でやり出したことでありませうが、支那では別に女の祭といふ譯ではありませぬ。日本では女子の祭になつて居りますが、三月三日に鷄合せをすること、曲水の宴をするといふことは支那から入つて來たことであります。

それから四月八日の灌佛會、これは印度に起つたことでありますが、申すまでもなく早くから日本に傳はつて行はれたことであります。

それから五月五日の節供、此の日には艾人と言つて、艾で人間の形を拵へて、屋根に突刺して置くといふことを支那でやつて居ります。唯今でもやるかどうか知りませぬが、俳諧の題には艾人或は艾虎と言つて出て居ります。唯今では菖蒲を葺く、或は菖蒲酒を飮む、或は菖蒲湯に入るといふやうなことをやつて居ります。これは毒氣を拂ふといふ爲で、やはり支那から來た風習であります。それから藥玉を下げる、いろ／＼の絲で美しく拵へた、あの藥玉を下げることも支那から來た風習でありまして、支那では長命縷或は五色縷と言つて居る。多分そ

れから來たものであらうと思ひます。それから五月五日には御承知の通り賀茂の競べ馬といふものがある。これは日本固有のものであらうと考へて居りましたが、支那にもこれと同じやうなことがあります。即ち踖柳といふことがあります。さういふことがいつの間にか日本に傳はつて來たものと思はれます。それから菖蒲刀で毆き合ふといふやうなことも、やはり日本ばかりではなく支那にもあつたやうであります。此の日は屈原が汨羅に投じて死んだ日であるから、これは南方だけの風習のやうですが、粽を拵へて河へ流して屈原を弔ふ、さうして此の日には競漕をやる、ボートレースをやるのです。これから考へると、大學のボートレースも五月五日にやつたらいゝかも知れません。現に今日でも臺灣ではさういふこともやつて居ります。又內地でも長崎などには此の日にボートレースをやる習慣があります。さうして粽を拵へることは殆ど日本全國に行はれて居ることであります。

五月十三日は竹醉日、或は竹迷日と言つて、此の日に竹を植ゑると、よくつくとも言つて居ります。これも發句の題にありますが、日本で行はれたことかどうか知りません。

七月七日の七夕、これも日本にも古くから行はれて居りますことで、星祭或は星迎などと申しました。支那では乞巧奠と言つて、女が五色の絲で願の絲といふものを拵へる。此の時、雨が降ると、それを灑淚雨、或は洒淚雨と申します。日本では芋の葉に溜つた水を取つて來て、それを硯の中へ入れて磨つて、櫨の葉に歌を書いて七夕樣に上げる。これはつい近頃までやつて居つた風習でありまして、古くは萬葉集などから七夕のことはありますから、誰でも知つて居ることでありませう。また此の日の晩には素麵を食ふことがあります。此の素麵も日本

に古くからありますが、やはり支那から來たものであります。盆の贈物などによく使ひますが、元は支那から傳はつたものであります。

それから七月十五日の中元、よく盆の贈物に「御中元」などと書いてありますが、此の中元といふのは上元、下元に對して言ふのであつて、上元は正月の十五日、それから下元は十月の十五日であります。日本では今日では上元、下元はあまり言ひませぬが、中元だけは誰でも知つて居ります。此の日は所謂盂蘭盆でありまして、死んだ人の靈を祭るのであります。此の上元と謂ひ、中元と謂ひ、下元と謂ふは、いづれも望月のことをいふので、太陰曆を使つて居る所では、月を愛するといふことに伴なうて、十五日を非常に喜びます。

八月の十五日、卽ち仲秋觀月といふことはもとより支那で行はれたことでありますが、日本にも古くから其の風習が傳はつて、月見の宴といふやうなことはよく催されたのであります。

それから九月九日の重陽でありますが、これも申すまでもなく支那の考でありまして、此の日は菊花の酒を飮む。これは桓景といふ人に費長房が語つたといふことから出たことで、丁度五月五日の屈原と同じやうな俗說から菊花の酒を飮むことになつたのだと申しますが、今日ではだん〳〵廢れてしまひました。

十月一日に日本では爐開(ろびらき)といふことをいたしますが、支那の方にも煖爐會といふことがあります。やはりさういふことが日本に傳はつて來たものではなからうかと思ひます。それから亥(ゐ)の子餅(こもち)と言つて、これも俳諧の題にもありますが、いろ〳〵の穀物を混ぜて搗く餅であります。其の餅を食ふといふ風習があります。それから又冬

至にも餅を食べますが、さういふことも支那の方にもあるのであります。

十二月八日の臘八、これは竈の神を祭るので、無論支那に行はれたことでありますが、日本にも傳はつて居つたのであります。それから人に御歳暮を贈るといふことをいたしますが、支那でも餽歳と稱へて親戚故舊に物を贈るといふことをやつて居ります。

除夜、これは何處でもやることでありますが、やはり支那から傳はつた習俗であります。それから節分に豆を撒く、鬼は外、福は內と言つて豆を撒くといふことも、日本では昔からやつて居つたことでありますが、これもやはり支那にもあつたやうであります。豆を撒いて鬼の目に打付けるといふことが支那に古くからあつたのであります。

これ等は主なることを申上げたのでありますが、かやうに支那の風習が日本に傳はつて、朝廷の儀式にも、民間の風俗習慣にも入つたといふものは、これは恐らく前に申しました暦が本になつたので、暦の中に季節が入つて居て、又支那の習慣なども入つて居つたから、自然それを用ひるやうになつたのでありませう。殊に日本では推古天皇以來始終支那と交通して、向ふの人も來れば、又此方からも遣唐使、或は遣唐留學生などといふものを送り、それ以來坊さんは往つたり來たりして、支那の生活の狀態に親しんだ人が澤山ありますから、其の人々によつて支那の風習が傳はつたものもありませう。又別のことから傳はつたのもありませうが、今日行はれて居る日本の年中行事といふものは、多くは支那の風習、殊に今日謂ふ南方の風習が餘計に入つて居るのであります。

北の方の風習はあまり入つて居らぬやうでありますが、南の方の風習は餘程多く入つて居るやうであります。これは交通上の關係から、さういふ風になつたことで、さもあるべきことと考へます。

以上は一寸大體のことを申上げたに過ぎませぬが、朝廷の御儀式すらも餘程佛教の方から入つたものがあります。例へば五七日の御修法(みしほ)であるといふやうなものは、無論佛教から入つて來たことであります。初卯(はつう)の祭、大原祭、葵祭などはこれは日本固有のものでありますが、昔からのことをだん〳〵研究いたしますと、餘程支那の風俗も入つて居るのでありますから、之によつて餘程さういふ側の研究といふことも出來るであらうと思ひます。殊に小さな民間の風俗習慣といふやうなもので、これまであまり研究の出來なかつたことも、さういふことを調べて見ると、餘程面白いことがあらうと思ひます。

此の種の研究は文學の上から申しましても必要なことは申すまでもないことで、朝廷の御儀式、朝廷の年中行事は殆ど平安朝文學の一部分を形づくつて居りまして、鎌倉以後の有職故實も半ば年中行事で打立てられて居るので、其の方の研究からも餘程必要であります。又足利時代の狂言などを見ましても、宮詣りをするとか、大黑樣を信ずる、地藏樣にお詣りをするといふやうなこともありますが、さういふことも此の年中行事に關係するのであります。其の他小說の如きものも皆關係を持つて居りまするし、俳諧の如きは日本のも、支那のも、年中行事を餘程材料にして居りまするから、文學の研究といふ方から言つて見ても、年中行事を調べる必要があります。

年中行事が如何なる程度まで支那から入つて來たか、如何なる程度まで印度から入つて來たか、如何なる程度

まで日本の純粹のものを保存して來たか、如何なる程度まで日本と支那の風習が混つて變化して來たか、又どういふことは變化し、どういふことは變化しなかつたかといふことも分ります。又今日は支那の方を調べる材料も多くなつて來ましたし、朝鮮の風俗習慣に關して調べる材料も澤山出來て來た譯でありますから、朝鮮の年中行事を調べるのも面白からうし、それから琉球などは最も日本に近いので、琉球の風俗習慣が入つて來たのもありますから、それ等も調べて見る必要があらう。殊に其の中でも支那のことは、陰暦を用ひたといふ關係、又國民が直接に接近したといふ關係から、餘程調べて見る必要があらうと思ひます。

朝鮮のことは私も少しく調べて居りますが、いろ〳〵日本と似て居ることがあるやうでございます。其の他進んで樺太や蒙古などの研究もすべきことだらうと思ひます。これは大きく言へば我が國の歷史の研究の一部にもなりませうし、日本の國民道德の上にも大きな關係をもつて居るのであります。極く小さな神事佛事、例へば龜戸天神の鷽替(うそかへ)といふやうなことでも、やはり國民道德の上に餘程の關係をもつて居ります。でありますから、さういふ國民道德といふ側から言つても此の研究は必要でありますし、其の外言語學、人類學の上からも面白い研究にならうと思ひます。

近頃では神話の研究といふことが大分進んで、各地方で集つて、それ〳〵仕事が出來て行くやうでありますが、それと同時にかういふ私の言ひますやうな廣い意味の年中行事、民間の風俗習慣から朝廷の御儀式、神事佛事等に至るまで、廣く材料を集めて比較し、或は地方によつて集め、或は時代によつて集め、或は文學の上に現れて

居るものを集めて、さうして研究を進めて行つたならば面白からうと、心附いた事を申上げただけであります。願はくは諸君も此の方へも少しく心を向けて調べて見られたらどうであらうか。文學史研究の上にも、餘程利益があらうと思ふのであります。

私はかういふ研究の盛になることを希望するといふことを今日の機會に述べたのであります。

（國文談話會主催故藤岡博士記念講演、明治四十五年四月「帝國文學」）

先帝の御製につきて

本年は豫てより廣島に催さるゝ夏期講習會へ出席のことを約して置いたので、二十六日から同地に滯在して居つた。然るに出立の當時から竊かに恐懼し奉つて居つた天皇陛下の御容體が、二十八日以來御危篤に陷らせられたといふことを遙かに承つたので、講習會は僅か一日で閉ぢて、倉皇彼の地を出發し歸京の途に上つたのであるが、三十日の未明、恰も汽車が大垣に着いた折しも、陛下遂に崩御との御事を車掌より承知いたしたのである。去る十日我が帝國大學へ最終の臨幸の折、御前に於て萬葉集の古寫本を天覽に供する光榮を擔ひ、親しく天顏に咫尺し奉つてから僅かに三週日の後、かゝる御事があらうとは宛がら夢の中を辿るやうな心地して、三十日の午

後宅に歸り、直ちに參内をしたので、今尙新聞紙上に先帝とか大行天皇とか稱し奉つて居る文字を見るにつけても、此の御事實をば夢か現かと疑ふやうな氣分になつて來るのである。

先帝の御製の御和歌に就いては、御政務の御暇每に非常に澤山御詠みあそばすといふことは仄かに拜承いたして居つたが、その拜見いたしたものは弘く世間に流布して居るほんの一部分の御製に過ぎぬのである。さりながらそれに就いて常に感佩して居るのは、道德的の意味を籠めさせられたものが多いことで、一世に冠絕したまへる天皇の御製であると每時拜誦して居るのである。故におそれながら御製は直ちに仰いで敎訓の材料に資するに足るものが多く、現に我々が編纂して居る國定の小學讀本の中にも、十首ばかり拜載したやうな次第である。殊に例年の歌御會始に於ける御題詠を拜見しても、其の御諷詠に雄大な處があらせられ、御聖德はどの御製の中にも發揮せられて居るのである。

嗚呼今や先帝には遠く神去り給ひて、諒闇の世の人事光景悉く皆寂寥の中に包まれ、其の御在世を回顧すれば愁思長く、聯想盡きず、悲哀の感胸に迫つて、その多くを拜陳するに忍びないのである。（大正元年九月「心の花」）

殯宮御通夜の記

八月二十八日、今日は殯宮三十日祭と承る。夢に夢見る心地の中に、早くも一月は過ぎたのである。秋立つと目には見えねども、朝夕の風も何となく身にしむ頃となつた。特別の御思召とあつて、今夜殯宮の御通夜に參內すべしとの御沙汰を承つた。數ならぬ身の此の上なき光榮、潔齋して家を出ようとすれば、年老いた母を始として、幼き兒等までも、今夜は眠らずに御夜伽仕らうといふ。夜の十一時車上から眺めれば、諒闇のさびしさ。大方の家は、はや戶を閉ぢて、街の上も人少なである。折しも十六夜の明々とした月は薄雲の間を漏れて、しばらくして、又雲に隱れる。日頃通ひ慣れた文部省を左に見て、竹橋より宮城の通用門に入る。三大節の晴の御儀式に參內する折々は、日も麗々として、參內文武官の車馬引きも切らぬが、夜中始めての參內、御門の大扉は閉されて、小門ばかりあいて居る。皇宮警手の擧手の禮も、何となく力なげに覺えて、御門の內の物寂しさよ。宮內省の內は流石に電燈の光もきらめきて見える。東御車寄に近づけば、御所の內は煌々として明るい。併し森として人氣も聞えぬ。御廊下を過ぎて東溜の間にゆく。御通夜に參候する人は、こゝに待合はすのである。德川公をはじめとして、何がしの侯爵、何がしの伯爵、其の他文武官の名立たる人達、二十人ばかり詰められて居る。御通夜とはいふが、大方三十分又は一時間交代で、殯宮の前に出で、交代して又此の間へ下るのである。豐明殿にも眞晝の如く電燈は輝いて居る。殿前の噴水のしぶきが月影にかゞやいて、單調な蟋蟀の聲が間斷なく聞えるばかり。大內山の夜の景色、森嚴の氣身に迫る心地がする。

殯宮殿は四方に立てられた蠟燭の力ばかりで、薄暗くなつて居る。每年の朝拜に、天顏に咫尺し奉つた美々し

き正殿は、今や殯宮を奉安して、すべてが白布を以て被はれて居る。正面御簾の中に御靈柩は据ゑられて、種々の御神供が置き足らはしてあるのであらう。神前の光は白絹の御簾を透して、ほのかに照らすのである。此の殿内の左右に數十脚の椅子が置かれて、御通夜の人々が端坐して居る。拜禮して座に着く。滿殿しはぶきの聲一つも聞えぬ。夜半の秋風の衿元を襲ふのが寒い。

微臣余が如きが、今夜こゝに侍坐することを得るのは、身に餘る勿體なさとおもふにつけても、今年七月十日の大學行幸に、萬葉集に就きて御前講述の榮を擔うたのは、余が身に取りては、此の上も無い思ひ出である。彼の時は龍顏も美しく、余がおそる〳〵御前に進んで申上げる說明に對して、一々畏くもウン〳〵との御應答を賜はつたものを、其の行幸を最終の臨幸としてそれより十日の後、御不例と聞え、御不例より十日にして崩御、何とも申すべき言葉は無い。かばかりの大帝が、かく俄に崩御あらうとは殆ど現し事とは信ぜられない。過去四十五年間の御治世を靜かに囘想し奉つて、彼を思ひ、此を思へば、知らず識らず湧き出る淚に、眼鏡を拭ふこと幾度、早くも交代の時刻は移る。

東溜の間に休息して居る人々も、うち語らふ聲はしめやかである。徐かに內庭に下り立ちて、空の景色を眺める人もある。濃き淡き雲の來往は頗る早い。御庭の樹影も、或は鮮かに、或は薄らぐ。何處の停車場であらうか、高い汽笛の聲が夜の靜けさを破つて響く。新橋か有樂町か、飯田町か。餘りに手近く聞える。御不例中、電車の軋る音が御病床に響いたといふことを聞いたが、成程恐多いことであつたと首肯かれる。

再び殯宮殿にまゐる。風にひらめく蠟燭の光も力弱げに、侍坐の人々の心臓の鼓動も聞えるばかりの靜けさである。二人の祭官が靴すりの音靜に交代して行く。をり〳〵は供物を捧げて、御簾の内にはいる。

いつとはなしに思は復馳せて、御盛德の數々をしのび、御不例中六千萬の國民が熱誠を籠めて祈り奉つたことなど思ひ浮べる。二重橋外にひれふして、頭を擧げ得なかつた民の眞心、これは輦轂の下の民ばかりでは無い。津々浦々に至るまで、上下貴賤の別なく、ある限りの誠を捧げて、ひたすら、御平癒を祈り奉つたのであつた。或は神社に、或は佛閣に、おもひ〳〵に、其の信ずる所に禱つたのであるが、其の大君をおもふ眞心に至つては卽ち一つである。あはれ此の貴き眞心よ、今こゝに神去り給うた大天皇の稜威の下に、我が帝國をして今日あらしめた原動力である。日淸日露の二大戰役に强敵を仆して、凱歌を奏し得た根本の力である。此の眞心は神代ながらの眞心である。獨り日本國民の胸裡に潛んで居る眞心である。宗敎の感化から來たのでは無く、我等の遠い祖先から受傳へたものである。美しい貴い此の眞心が、此の大天皇の御不例に際して、遺憾なく發揮せられたことは、まのあたり國體の美しさを示した生きた敎訓である。思へば、微臣は今や殯宮間近く、御通夜申上げるの光榮を負うて居る。露にふす六千萬の民草の中に、此の光榮を有する一人となり得た心の喜は、又直ちに熱涙を催すのである。

かくて交代すること三度、御名殘は盡きないが、微臣に許された御通夜の時間は終を告げた。恭しく神靈を拜して宮闕を辭したのが、二十九日の午前三時、遙かに鷄の鳴く聲が聞える。街には街燈の影も寂しく、牛乳配達

の車、新聞紙を載せた車が、はや二つ三つ動いて居る。曉の氣にフロツクコートの袖も冷くしめつた。

（大正元年十月「學生」）

九月十三日の夜

大喪儀に隨從し奉つて森嚴莊重の感に打たれた。午後七時半頃、正門外で儀仗兵の喇叭が響いたと思ふと松明ふりかざした仕人（つかうど）を先頭に、長い行列が靜々と練出して來る。儀容肅々、一絲亂れざるの觀がある。大眞榊に懸けた鏡が榊にふれて、鈴のやうな音を發するのは、神々しさ、いふばかりが無い。正八時靈柩を轜車に奉つて、御名代宮、大喪使總裁宮兩殿下つゞき給ふ。轜車のきしめく音は形容は出來ないが、誠に高く哀しい音である。すでに二重橋を出たと思ふ頃、其の音はまだ門内に在る我等の耳に響く。鐵橋外の御假屋には、畏くも三陛下、三殿下の拜送して立たせ給ふを拜し奉る。砂を敷詰めた御通路を靜かに蹈んで、兩側に堵列して居る兵隊、其の後に多少の間隔を置いて拜觀して居る民衆の間を過ぎて行く。兵士は捧銃（さゝげつゝ）して不動の位置を保ち、拜觀團體も靜肅で少しの人波も打たぬ。唯此の靜寂を破るものは、堵列兵の吹奏する哀の曲と、數分毎に打出す弔砲の響とである。沿道數箇所の寫眞場からは、時々マグネシヤを燃す白光が閃く。葬場殿の總門から第一神門を入れば、電

燈の光、篝火のかゞやき、白晝のやうである。左右の幄舍の前には、菊の黑い御紋章を附けた大提灯が、いくつともなく連なつて居る。やがて御儀式が始まつて、誄歌の聲が悲しげに聞える。葬場殿に据ゑられた轜車の前に今し陛下の御拜があると思へば、そゞろに淚ぐまれて、御誄詞を稱へ給ふ玉音は聞えないが、御心中を恐察して滿場皆聲を呑む。英、獨、西、佛、米等諸國の御名代、特派大使等の參列して居る大喪儀、我が國史あつて以來の盛儀たるのみならず、東洋に於て未曾有なことたるを思ひて、今更ながら先帝の大稜威をしのび、崇高の感、感謝の念が交々湧く。零時四十分、御葬儀は終つて、午前二時といふに、汽笛一聲、文武百官の最後の敬禮を受けさせられて、御靈柩は永へに東京の地をお去りになつた。轜車は葬場殿の中央に榻に乘つたまゝで橫たはつて居る。

松明の火、鈍色の衣、千年以前の昔に返つて、古代の日本がしみ〴〵と身に沁む。之に對して電燈の光のかゞやき、文武官大禮服のきらびやかさ。轜車の軋の怨むが如きに對して、弔砲の轟の大空を劈くが如き、誄歌の古樂、喇叭の哀の曲、一として舊日本と新日本とを對照せぬものは無い。神代ながらの皇國を憶ふと同時に、國光の世界に輝く新興國を念はしめるのである。眞に曠古の御盛儀、これは我が國より外には見得られぬものである。沿道數十萬の拜觀者も、皆此の心を以て靜肅に首を垂れたのである。諸外國の特派使節も恐らくは亦同一の感を有したであらうと思ふ。此の間に國民の感受すべき偉大な敎訓は、實に明治天皇の最後の御敎訓である。

（大正元年十月「心の花」）

日本文學と和歌

日本の文學を昔から今日まで通觀して考へると、その發達の根柢は和歌であるやうに思はれる。和歌は縱にも又横にも國文學を貫いて居る。人の知る如く、日本の歌は歴史と共に古いもので、日本の歴史が起つた當時既に歌があつたのである。神代から既に歌があり、素戔嗚尊の詠まれたのが歌の濫觴だと書いてある位であるから、とにかく神武天皇以前に歌のあつたことは明らかである。又其の後には神武天皇を始めとして、御製もあるし、皇后や皇子達の御歌もある。それで一般國民の歌もあつたであらうが、何分歴史が不完全な爲に、これは傳はつては居らぬ。けれども支那の文學が日本に入らぬ前、又印度の佛教も入つて來ない以前に既に我が國に和歌といふ獨得の文學があつたことは、歴代の天皇の御製や皇后の御歌が遺つて居るのを見ても分る。其の後支那の文學が入つて來て、この最古の歌を基として、一層その文學思想を發達させたのが奈良朝時代の文學である。

降つて平安朝時代の文學上の狀態はどうかといふと、この時代の特徵と見るべきは、女の書いた女文が發達して來たことである。この女文の起源はやはり歌にあつて、日記とか物語とかいふ平安朝の文學は、元はやはり歌から出て來たものである。面白い歌があれば、人が喜んで聽いて、且其の歌はどういふ時にどうして出來たとい

ふ由來緣起を聞きたがる。卽ち其の歌の出來た事情を知りたがるのである。そこで歌のいはれ因緣を書いた物語が出來る。萬葉集十六卷はそれであるが、これは漢文で書いてある。國文で歌の由來を記す物語が出來たのは、伊勢物語が初めてで、續いて大和物語などが出來た。これ等は種々の場合に詠んだ歌を一つづつ由來を說いたもので、それが集つて物語をなして居るのである。これを私は歌物語と名づける。

歌物語のやうに斷片的でなく、系統を立てて、自分一個の境遇上から、過去の事を考へて、種々の場合に應じ種々の歌を作つた由來を書き集めたのが卽ち日記で、蜻蛉日記とか和泉式部日記とかいふのは皆此の類である。つまり日記は自分の和歌を年代を逐うて書きつないだものである。又他の人物を取り出して趣向を立てたのが、源氏とか宇津保とかいふ物語をなしたのである。それが一轉して大鏡や榮華といふやうな歷史物語が出、又それから鎌倉時代に移ると、今度は時勢が少し變つて來たから、源平盛衰記や平家物語といふやうな軍物語となつて出て來たのである。

鎌倉時代には男文も女文も混合して來た。朝廷の方では政治が閑になつたので、尙更歌を喜ぶ時代となり、歌ばかりでなく、歌に關する學問卽ち歌學が盛に起つて來た。その以後の學問といへば、つまり佛法と歌學の二つで、公家は歌の學問、僧侶は佛法、この二つが結び付いて出來たのが當時の一般の文學で、軍物語もつまりそれである。それが戲曲化されて室町時代に至つて謠曲となつた。それ故謠(うたひ)には、一方には僧侶の學問、又一方には公家の學問を含んで居るといつてよい。謠には歌の講釋が入つて居るし、佛敎の講釋も入つて居る。謠の半面は

和歌によつて形づくられて居るので、謠曲は歌の趣味の上に成り立つて居るといつてもよいのである。
次に連歌もやはり歌から起つて來たのである。歌の法則が漸次嚴しくなつて、作ることがむづかしくなり、又言葉が漸次昔と異なつて來て、之を學ぶことが困難となつた。且歌は神聖なものと考へられて來たので、慰み半分にやるにはあまり規則の無い連歌がよいといふので、之を作る遊戲が始まつた。これが源となつて鎌倉足利の時代には、連歌が流行したのである。卽ち歌が根柢になつて居ることは勿論である。それから連歌が又一變し、その發句だけ獨立して一の短い詩が出來た。卽ち十七字の俳句である。これが德川時代になつて芭蕉などが出て大いに盛になつたのである。又德川時代の文學の主なるものは淨瑠璃である。これは畢竟謠曲を稍俗化したもので、謠曲を本として平民化したのが其の起源である。謠は上流、中流の社會に用ひられて、一般の平民社會には淨瑠璃が代つて盛に流行して來たのである。
前述の如く、日本の種々の文藝はすべて和歌が根本になつて發達して來たのである。日本で美人といへば小野小町を擧げ、美男子といふと在原業平を指すが、それは畢竟古今集の序に六歌仙として選ばれた爲で、昔から今日まで評判が變らずに居る。光源氏の君の美しいといふのも、源氏物語が歌の書籍として讀まれたからである。かくの如く我が國の歴代の文學を通觀すると、和歌がそも〳〵根柢になつて居ることは爭はれぬ所である。
さて昔の平安朝の物語は、當時の人には面白く讀まれたであらうが、其の後言葉が變つて來て、今日では讀むことがむづかしく、又讀めても今の人にはあまり面白くない。謠曲や淨瑠璃は今日も勢力があるけれども、連歌

の如きは衰へて居る。文學の種類は時代によつて盛衰あるを免れぬものである。然るに歌だけは、如何なる時代に於ても必ず流行して居る。極く上古の代から三十一文字の歌が行はれて、奈良朝時代、平安朝時代、鎌倉時代に至つても衰へず、足利時代、德川時代にも盛であつた。今日の明治時代に至つてもなか〳〵勢力がある。現今は普通教育の普及と共に、男も女も歌を詠むものが益〻多くなつた。かく和歌だけは古往今來毫も衰退せざるのみか、益〻盛である。これ等から考へて見ると、古來我が國人の作つた歌の數は莫大なものであらうと思はれる。歌がかく如何なる種類の文學にも入り、又如何なる時代にも國民の嗜好に投じて居るのは、果してどんな理由に基づくかといふと、余は之には二個の原因があると考へるのである。

歌が各時代に通じて行はれて居る事と、又すべての文學に入つて廣く行はれて居る事とに就いての第一の原因は何かといふと、歌は我が皇室卽ち國體と深い關係を有し、日本人の忠君愛國の思想は古來歌と結び付いて居ることである。元來我が日本の文明は、印度、支那等の文學や宗教と接觸して、自國の文明が未だ十分發達しない前に、既にこれ等强大な外國文明の影響を受けて、之を咀嚼同化して、終に現代までの文明を作り得たのである。外國の文明の特長を採つて已の短所を補ひ、漸次發展して今日に至つたのである。然るに我が國の文明中、少しも外國の文明の影響を受けぬ時代に既に出來て居たのは、唯歌だけである。純粹な日本の文學は歌より外に無いのである。片假名や平假名のない時代から、日本人は歌を作ることを知つて居つた。其の後支那の美しい文學に接しても、日本人は自國特有の歌といふものは忘れなかつたのである。

奈良朝時代には、詩を作り漢文を作ることが盛に行はれて、朝廷の學問は專らそれに據らなければならぬのであつたが、それにやはり歌は相對峙して行はれた。朝廷では文人を召して詩文を作らせらるゝのと同時に、歌も作らせられた。他の學問はたとひ支那に劣つても、歌だけは日本古來の文學として獨立して居つた。而して片假名や平假名が發達して、自由に國語を書き現し得ることとなつてからは、勅撰集も出來た。こゝに至つて歌と皇室とが結び付いて來た。又勅撰集に載せる歌は公平に選定して、官位の有無に係はらず、時の攝政關白でも、歌が拙ければ採らず、いかなる匹夫匹婦の歌でも、歌が良ければ選に預つた。それ故勅撰集に入つたものは、非常な名譽と感じたのである。勅撰集に一首でも採錄されることは、西行法師や鴨長明のやうな名人でも非常な榮譽として居たのである。

鎌倉時代に至つて、兵馬の權が幕府に移ると共に、朝廷は自ら文藝の源となつた。文藝のみならず、すべての藝術の權力を握つて居たのは朝廷であつた。此の時代には昔の制度がすたれて、質素簡易を旨とし、專ら武士道を磨くことに力を盡したのである。それにも拘はらず、當時の人は何となく平安朝の華やかな時代をなつかしく思ふ念があつた。これは古へを貴ぶ、所謂尙古の風とでも稱すべきものであらう。我が國で「みやび」といふのは「宮び」卽ち朝廷の風をいふことである。朝廷の儀式作法は如何にも順序よく行はれて居る。その神々しい所が卽ち風流な所である。日本は元來祭政一致の國であるから、神を祭る禮儀作法は卽ち朝廷の禮儀作法で、それが又一般國民の禮儀作法である。然るに高位高官の人が平安朝の華やかな時代の禮儀作法、年中行事、或は有職

故實の如き種々の儀式によつて仕事をする、それが如何にも風流に思はれ、閑雅に見え、なつかしく感ぜられたのである。ところが鎌倉時代に及んでは、一般國民はさういふ事を知らぬ。知つて居るのは唯公家だけであつたから、公家と僧侶とは相對して知識の本源となつたのである。

歌の道は日本特有のもので、朝廷と最も密接な關係を有し、之と同時に國民にとつては、必ず知らねばならぬ風流の道であるといふやうに、愈〻深く染み込んで來た。「敷島の道」といふ言葉は、鎌倉時代に至つて始めて出來た言葉である。其の外に「豐葦原の道」とか「大和言葉の道」とか樣々の名が附いて居るが、これ等は多く鎌倉時代に出來たのである。

歌が皇室に密接な關係を有する純日本的なものとして、漢文學の行はれる時代には其の對照として、俗文學の行はれる時代にも亦其の對照として、絕えず流行したのは前に言つた通りである。これは國民が恰も昔の故實作法を貴ぶのと同じ精神から出たのである。之と同時に、今一つの原因があるとおもふ。それは外形の上からの論である。日本語は多綴語であつて、支那語のやうな單音語ではない。隨つて漢語のやうに少い音の中に多くの槪念を容れることが出來無い。又其の音韻組織が極めて單純であつて、子音の數も少く、子音と母音との配合がいつも規則立つて居るが故に、西洋語のやうな發音上の變化が尠い。動もすれば單調冗漫に流れ易い。且又言語の性質からアクセントもなく、長短母音の差別もなく、韻も用ひられず、唯五七の交錯より節調を作つた韻文の性質としては、何分冗漫平板に陷り易い缺點がある。これには五七の交錯が二度續いて、最後に更に七の一句を加

へる三十一文字あたりが最も適當したものと見える。そこらあたりの長さが、耳に聞えて最も愉快な調子を與へたのであらうとおもはれる。萬葉集の長歌には隨分長いのがある。百四十句餘に亙つた長篇もある。併しこれは支那の詩賦等に影響せられ、當時の祝詞等を利用して、新時代の爲に起つた新文藝で、わざと作つたものと考へられる。國語の性質に適當したものでは無かつたらうとおもふ。人麿等は流石に對句や枕詞等を利用して、よく變化を多くして居るが、天平の家持等に至つては、唯長いばかりで、誠に單調である。面白味が甚だ尠い。其の後は長歌は愈〻振はぬ。これは他にも種々原因はあるが、一つは國語の性質に由來するのである。若し純粋な國語のみを以て、少しも新來の漢語等を交へずに進めば、最も國民に適當な手頃な長さは、先づ三十一文字あたりにあるのに相違ない。同じやうな節調をあまりいつまでも續けることは、思想の變化に伴なはないから、むしろ一旦中止して、別にした方がよいのである。言換へれば六十文字の一の長歌が出來るよりも、三十一文字の二つの歌が出來る方がよいのである。日本の單語の長さ又は文（センテンス）の構造から言つても、この邊の數が適當であるのである。

（大正三年一月「心の花」）

牛に關する雜話

大正二年は丑の年だといふので、牛に關する事柄を、唯思出し放圖に書列ねて見る。

牛は元來日本語では無い。朝鮮では소といふ。今は我が國では耕作運搬等に盛に之を使用し、特に關西地方に多く用ひるが、もとは大陸の方から來たものだ。隨つて今日でもまだ西國の方に餘計居るのであらう。世の中にこれ程人間の爲になる獸類は少いので、世界全部、昔も今も之を珍重することは變らぬ。日本の古い話には古語拾遺の外には出て來ないが、佛敎の方では頻りに之を說くから、日本にもまづ佛敎說話として傳はつて居る。お寺の坊さんが、お寺の薪を一把盜んで用ひたから、死んでから牛になつたといふ類の話である。子供の物を取つて使つた爲に牛と生れた母親などもある。すべて、牛は終生勞働に服さなければならぬから、誠に苦しさうである。特に印度あたりの牛と來ては、熱國であるから、肉も落ちて、骨立して居り、如何にもいた／＼しく見える。それが喘ぎ／＼重いものを運んで居る樣子を見ると、誠にかはいさうに思はれるのである。それ故、惡いことをすれば牛になる、死後牛になつて苦しまなければならぬぞと、誡めたものと見える。「飯を食つて直ぐ橫になると牛になる」といふのも、つまりそれから來た誡めである。それを德川時代の遊民的俳人が歌つて

牛になる合點ぢや朝寢夕涼

牛は大陸から輸入され、牛の話も印度から支那を經て日本へ渡つて來たのである。「牛に曳かれて善光寺參り」といふ諺があつて、佛法嫌ひの婆さんが、布を角に引懸けて行つた牛の跡を追うて、遂に善光寺にお參りしたといふ話がある。これももとは支那の話で、支那の神母といふ極めて邪見な婆さんが、自分の帶の惜しさに、牛を

追懸けてとう〳〵お寺へ行つたといふのである。

牛が佛法の爲に盡したので著しいのは、牛佛の話である。これは逢坂の關の關寺に出たので、お寺の建築に必要な材木を此の牛が一匹でどし〳〵運んだのである。時の人は之を迦葉佛の化身だと噂して、天皇、東宮を除くの外、關白道長をはじめ一門の人々が悉く參拜したのである。

此の牛なやましげにおはしければ失せ給ふべきか。

など敬語を使つて居るのがをかしい。佛法盛りの當時の世が想見せられる。

平等院の近所に武藏阿闍梨勝覺といふ坊さんがあつて、此の勝覺の家の飼牛は毎夜何かうめくやうである。よく耳を立てて聽くと阿彌陀經を誦して居つたといふこともある。牛の如きものでも然り。人は尙更信心しなければならぬと考へたのであらう。

三韓交通時代からだん〳〵渡來し、諸國に牧を置かれて奬勵せられた結果として、平安時代になつては、耕作用、運搬用にも澤山用ひられるやうになり、又貴人の乘物用としてはすべて牛車が廣く行はれたので、祭の見物、其の他の場合に牛車が立連つたのは、今日でいへば馬車や自動車が澤山集る樣な容子であつたのであらう。其の牛車の立場所からの喧嘩が車爭といつて、昔の物語にはしば〳〵あらはれて居る。群書類從の中には駿牛繪詞、國牛十圖などいふ本がある。如何に牛を珍重したかが分る。

牛は馬に比べれば步くことが遲い。且武人は牛よりもともと馬が大切である。大宮人の牛車があまり勢力の

無いやうになつてからは、馬の方がどうしても重く見られる。それ故我が國の諺では「牛を馬に乘りかへる」などと牛の方を一段と低く見て居る。併し其の皮、その肉、其の乳などの功用を考へると、今日では却つて馬よりも有用かも知れぬ。尤も軍馬も大切ではあるし、競馬用の馬などには非常に高價なものもあるといふから、値段からいふと、やはり馬には及ばぬかも知れぬ。支那にも死馬の骨を千金で買ふ話はあるが、千金の牛といふことは聞かぬ。

埃及では Apis といつて牛を神として祀つた。これは牛を最も尊んだ例であらう。其の牛は黑牛で、額、腹、脚の先、尾の端などが白いのであつたといふ。

日本でも黑牛が多い。「闇やみから牛を曳出した」といふ諺などもある。朝鮮へ行つて見ると、赤牛、飴牛が多い。又近來洋種が澤山輸入されて、乳牛用のには色々な毛色が見える。牛の種類を動物學者に聞いたら隨分數の多いことだらうとおもふ。

牛はまことに緩りした性質に見える。「馬も千里、牛も千里」などといひ、「怠らず行かば千里の外も見ん牛の歩のよし遲くとも」などいふ歌もあつて、堅忍不拔、急がず、あわてず、遂に其の目的を達するといふ模範に取られる。その緩りとした性質は涎にも小便にもあらはれて居る。牛の涎はだら〳〵としていつまでも間斷が無い。小便も同樣で、「牛の小便十八町」といふ諺さへある。

牛溲馬勃敗鼓の皮といふことを子供の頃に漢文で習つたが、牛の糞は日本では昔藥用に使つたこともある。又

印度や西藏では今でも薪炭の代用にするさうである。勿論よく乾かして使ふのであらう。軟い牛の糞は決して燃えるものでは無い。「牛の糞に火の附いたやうに」といふのは、物の進捗の遲いことを言つたのである。すべて日本では涎や小便や糞まで遲い例に引いて居るのである。

糞まで役に立つ有用動物であるから、所有者にとつては立派な財産である。遊牧の民族に於ては羊や馬と共に其の頭數を以て財産とするのは當然の事である。日本でも、古來之を飼養することを奬勵せられ、稻や錢とともに牛を獻上して位を賜つた例などもあり、天災で良家の損はれた時には牛馬が幾頭死んだと數へてある。「女賢しうして牛を賣損ふ」といふのも、重い家産であるからである。徒然草にも牛を賣る話がある。漢字の物といふ字が牛扁であることも考へて見る價値がある。

天平十三年の詔に「馬牛代レ人勤勞養レ人。因レ茲先有二明制一。不レ許二屠殺一。今聞國郡未レ能二禁止一。百姓猶有二屠殺一。宜下其有レ犯者。不レ問二蔭贖一。先決二杖一百一。然後科上罪。」とある。昔は日本でも隨分殺したと見える。支那で犧牲といふ字がすべて牛扁であることを見て、之を殺して神に捧げた事が知られ、牛酒といひ、太牢之味などいふので、牛を御馳走にしたことも分る。しかし今では支那人は牛肉を用ひず、大抵は豚を用ひるさうである。

明治以後西洋風が來て、盛に牛乳を飲むやうになり、西洋料理にはバタやチーズを食べることになつたが、奈良朝の昔にも既に牛乳を飲んだので、其の時分には乳師といふ役人が居て、乳を取り、養生の爲に供御に奉つたのである。又酥これをツクリチノウハズミといつて、乳を煮て乳の皮を取つて拵へたものがあつた。クリームの

やうなものであらう。之を諸國から獻上する順番があつたのである。國文には蘇と書いてある。又酪といふのは卽ち今のバタで、之を古語では乳のかゆと言つた。バタ臭いといふと一概に西洋風をいふが、奈良平安時代の雲上人にもバタの匂はあつたのである。又醍醐といふのは今いふ乾酪卽ちチーズのことで、これは乳の最上味としたのである。佛一代の說法を乳味に喩へて、法華經を最も意味の深い高尙な經典として醍醐に比較してある。佛法の流行した時代で、それが恐多くも天皇の御稱號になつて居る。

牛を鬪はせ遊ぶことは八犬傳に馬琴が書いたやうに日本でも國によつては少しはやつたやうであるが、最も大袈裟に今でも盛に行はれて居るのは西班牙の鬪牛戲である。これは昔の羅馬時代の觀戲で、猛獸を奴隷と鬪はせたりして樂しんだ餘波であらう。今も尙西班牙の國民的遊戲とも言ふべきものであつて、此の場の鬪士は他の國の花形役者のやうに、非常に人氣があり、收入もあるとの事である。見た人の話に、隨分殘忍なものであるといふ。西洋人は日本の裸になつて相撲を取るのを野蠻と笑ひながら、かういふ殘酷な遊戲を、紳士も淑女も打連れて見物して居るのである。昔西班牙人の亞米利加土人を征服した時代には隨分殘忍無道な所爲が多かつた。平生からかういふものに慣れて居つたからであらう。昔の日本の遊に牛追物といふのがあつたが、もとよりそんな殘酷なものでは無かつた。

英語でも ox, cow 獨逸でも Rind, Kuh 支那の牛、牸など、牡牝各其の名を異にすることも、如何に人類に接近し、親密であつたかが分る。支那では女の名などは碌に無いさうであるが、牛には犢（こうし）、㹀（あかうし）、犏（くろうし）、抨（ほしまだらうし）、犥（ぶちうし）、

犠など色々あるのも面白い。

支那では牽牛星で彥星は牛に乘つて居る。日本で天神樣が牛に乘つて居るのはどういふ因緣であらう。牛天神といふのは「物部大人神祉なるべし」と徂徠の南留別志に書いて居る。

牛の雜談はこの位でやめる。諸君が此の丑の年に於て、牛のやうに堅忍して、一筋に目的を追はれることを望む。さりとて牛のやうに遲鈍がよいのでは無い。

（大正二年一月「學生」）

久能山東照宮に詣づ

日光山は三十五年以前に既に參拜した。久能山へは幾囘となく東海道を往復したにも關らず、まだ一度も參拜するの機會を得なかつた。去年押詰つての二十八日、靜岡の旅寓から僅か三時間の少閑を利用して登山、年來の渴望を醫することを得たのである。午前八時師範學校の森本教諭が東道しようとて來られる。幾度も辭したが聽かれぬので、遂に同行を願つて、車を列ねて鐵道の蹈切を横ぎる。夜來の雨は霽れたが、斷雲はまだ空に飛んで居る。日の光はキラ〳〵とさし出て、冬の朝とは思はれぬ暖さ。富士は山腹以上雲に包まれて居る。「だん〳〵お山が見えて來たぞ」と車夫は前後相呼應して走る。雨後のぬかるみはあるが、全體としては良い道である。一面

の冬田見るものの無い中に、梨木棚も多がれて居る。之に反して、家々の後園に果々として金色を輝かしたオレンヂの見事さは、行く處に富貴の色を漂はせて居る。僅か數尺の樹に直徑二三寸もある柑實が二十も三十も實のつて、それが幾十株となく立並んで居る所もある。一本の高い樹が見越の松といふ具合に門の外へ覗き出して枝もたわゝに熟つて居るのも見える。何處にも豐かな天然の惠の色が漲つて、徒然草にあるやうに、周圍を嚴しく圍ふといふ殺風景は無い。かういふ賑やかな冬景色は北國は勿論、東京の近傍でも決して見得られぬ眺である。柑橘の類ばかりでは無く、畑には葱が高く青く茂つて居り、大根は半分以上青い肌を挺出して、右に左に傾き合つて居る。すべて物資の饒かな感じが浮ぶ。既に收穫された大根は納家や母家の軒下又は壁をめぐつて干し吊されてある。

道に出逢ふ人は十人が九人までは女である。娘もあれば婆さんもあり、中年輩のものもある。三三五五或は荷車を曳き、或は籠を負ひ、或は天秤棒を肩にして陸續として來る。野菜、魚類等を城下へ賣りに出るのである。それが悉く女であるのが目立つ。すり違ひがけに、何を話して行くかと耳を傾ければ、大抵は何某の聟は働き者であるとか、何某の家の病人はむづかしさうとか、主に世帶じみた話らしい。黎明から起出でて、營々として働く農民の生活、嗚呼これこそ眞に國家のオホミタカラである。

農家の前に遊び戲れて居る子供、女も男も各一群をなして、到る處に多い。やゝ大きいのはやゝ小さいのを背負つて、父母の留守を守るのであらう。しやがんでメンコといふ遊をして居るのが一番澤山目につく。今は學校

も休みのせゐか、學齡兒童らしいのも大分交つて居た。牛小屋に牛の寢て居るのも所々に見受けられる。

緣側で網をすいて居る老人が居るので、最早海が近いなと思ふ程もなく、右手に海が開けて見える。ひろ〳〵とした海の眺はいつ見ても心地がよい。此のあたり殆ど波打際近くまで、畑になつて居る。砂地のやうで、しかも眞つ黑な土である。數百年來耕しに耕して、海濱の砂地もいつしか立派な畑地になつたのであらう。豌豆畠に花が咲いて莢が實のつて居るのにも驚かされた。「此の豌豆が東京へ出るのです」と車夫は自慢顏に語る。成程この邊の地勢、北は一帶の山續きで南は卽ち海、誠に天然の溫室である。靜岡縣全體が日本國中では溫室のやうな所で、さてこそ蜜柑や茶や天然の產物は頗る豐富であるが、其の中でも此の邊が特に暖い處であらうと思ふ。

久能山下のとうふやといふ旅舍に小憩する。その家の小童は余が外套を手にして案内する。之の字の形に左右に曲折する石磴は十七折、一千三十六段といふ。一千三十六といふ數を聞いて、富山房の電話番號を想ひ出す。傾斜が割合に緩いので、思つた程には苦しくない。それでも八折九折すると大分汗ばんで、息がはずんで來る。曲り角のベンチに腰掛けて、且は憩ひ、且は眺望を恣にする。上れば上る程、景色はいよ〳〵開けて、下の民家は益〻小さく見える。大名屋敷の番所のやうな所を通つて、稍少し上ると右手に平地がある。こゝに山本勘助の掘つたといふ勘助井がある。深さが十八丈とか書いてあつた。こんな高い所へよく掘つたものだと感心する。森本敎諭が骨を折つて汲上げられた一釣瓶の水に口嗽ぎ手洗ふ。元來此の山には昔觀音のお寺があつた。行基菩薩の建立と傳へて隨分古い緣起のお寺であつた。然るに戰國時代になつて、甲斐の武田氏が之を占領し、此の要害

を見て取つてお寺を脇へ移し、こゝに城を築いたのである。山本勘助が井を掘つたといふのは此の時からの言傳であらう。大慈大悲の觀音の靈場が修羅の戰場と變つたのも、時世の勢やむを得ないことであつた。こゝの平地なども、つまりは城塞のあつた址らしく、前後ともに切立てたやうな絕壁、昔の戰爭には究竟の要害たるに相違ない。日露戰爭戰利品の記念物などを見て行くと左手に社務所がある。杉江禰宜の案內によつて、しばしそこに休憩する。額に慶喜、家達兩公の肖像畫があつて、柱隱しもすべて葵の紋所、床の間に大日本史の書函の積んであるのも何となくふさはしい。こゝからの例の海上の眺は、丁度繪に書いた石山寺のやう、併しそれに比して規模の大きいのはいふまでも無い。月の夜の美しさは思ひやられる。社務所にも井があつたが、これは何時誰が掘つたものか、勘助よりもえらい人があると感じたばかり、其の由來は聞きもしなかつた。宮司の宇都野氏は旅行不在との事で逢はなかつた。歸京後妻から聞けば宇都野宮司は、かつて妻の嫂であつた人の近親であつたとの事、妻の兄たる人も其の妻も十數年前、妻の未だ余が家に嫁がぬ前既に死去せられたので、余は少しも之を知らなかつた。是に於て其の奇緣を思ひ、又宇都野氏に逢ひ得なかつたのを少からず遺憾に思つた。

杉江禰宜の案內で樓門を入り、まづ寶庫を拜觀する。第一に目に着くのが、西班牙製の時計である。又硝子の藥瓶。これ等は家康の遺品で、當時の外國物で如何ばかり珍重せられたか思ひやられる。德川將軍初代から第十五代慶喜公までの鎧が順序よく列べられてあるのは、今日よりも寧ろ今後數百年の後からは、更に多大な興味を以て見られるものであらう。

家康三百年祭が近づいたので、本殿は今修覆中である。御靈は右の方の假殿に鎭座あるといふので、其處に參拜。御神酒を戴く。やがて殿堂の後方の寶塔を拜す。これが卽ち我が歷史の大立物たる德川家康埋骨の地である。家康の病に罹つたのは元和二年正月二十一日、駿府から出て田中に鷹狩の最中俄に不例とあつて二十三日までは田中に滯在、二十四日に駿府に歸つた。それから二月もくれ、三月も過ぎて、四月十七日に薨去、隨分の長わづらひ故、何から何まで遺憾なく遺言した。

大御所御病床に榊原大内記照久を近くめし、久能山御廟地の事つぼらに命ぜられ、汝幼童の時より常に心入れておこたらず近侍し、且魚菜の新物を獻ずる事絕えず。我死すとも、汝が祭奠を快く享けんとす。東國の諸大名は多く譜代の族なれば、心おかるゝ事もなし。西國鎭護のため、神像を西に面して安置し、汝祭主たるべし云々。

此の遺言によつて同十九日駿府からこゝに葬り、榊原照久の子孫世々之を守つたのであつた。これで見ると、家康は早くから此の形勝の雄偉且壯麗な場所を見立てて、自分の廟所としたのである。豐臣氏の亡びたのは其の前年卽ち元和元年の夏で、家康は最早心おきなく死ぬことが出來たのである。しかもまだ心懸りなのは西國の諸大名、それ故西國鎭護の爲神像を西に面して安置せよと遺言したのである。どこから見ても家康式である。

家康死後の神號に就いては權現とする說と明神とする說とがあり、遂に大權現となり、後東照宮といふ宮號の宣下さへあつたのは誠に勿體ない事であつた。それ故今日でも日光も久能山もともに別格官幣社東照宮と稱して

居る。藤原鎌足も談山神社、和氣淸麿も護王神社、楠木正成は湊川神社、豐臣秀吉は豐國神社、人臣にして宮號を稱するは家康一人である。家康が德川霸府を開いて、前後三百年の昇平を成し得た勳功はもとより尊ばねばならぬが、將軍を御所と稱し、家康を大御所といひ、死後尙宮號を僭し、天照皇大神に似寄つた東照の號を冒すことを怪しまなかつた時世の態(さま)は、今日から見ればあまりの事といはねばならぬ。德川の世には權現樣とあがめ、東照神君と唱へて誰一人惡口いふことも許されなかつたが、國史の研究、學問の發達とともに、尊皇の論は次第に盛になり、さしも綿密周到な組織で固めた德川幕府も忽ち土崩瓦解した。就中關ケ原の役でひどい目に合はした毛利、島津等いはゆる西國の大名が王師の先鋒となつて幕府を討つたのは、家康の懸念した通り。久能山の廟所に西面した家康も、こゝに至つては何とも致方が無かつた。

石礎盤回老樹間　此中何事設重關　鐵槌難入三泉底　知是祖龍埋骨山

と松本奎堂の詩を吟ずれば、旣に幕末の鬱勃たる勤王心が認められるのである。こゝといひ、日光といひ、又は大和の談山神社といひ、金碧煌々、人目を眩ずる觀はあるが、こは或西洋人の言つた如く、徒に自己の功勳を誇らうとした裝飾に過ぎないので、素朴な伊勢の神宮は永久に人をして敬虔の念を起さしめるのである。

禰宜に別れて山を下る。下るときは餘程樂であるが、どうしてこんなに上れたかと怪しむ位、下りる時でも十七折は可なり長いものである。生憎やゝ曇り勝ちの空で、海上は晴れやかでない。「いつもならば伊勢、伊豆の岬端を左右に見て絕景なるものを」と森本教諭の言はれるのをさこそと領く。歸りてとうふやに憩へば正に十時。

歸途は同じ道を同じ速度で走る。もとより變つたことは無い。物賣りに出る婦人に出逢はぬのが違である。ふと氣が附いたのは、此のあたりの井は、すべて井げたが無い。地面より下に掘下げてある。子供などの落ることは無いかと危險に思はれるが、それよりも一層危險なのは惡水の流れ込むことであらう。これは何とか改めたらよからうと思つた。靜岡に近づく頃雨がポツ／＼降出した。それでも母衣をおろさずに、大東館に着いたのは十一時十五分であつた。午後四時出發の際は大ぶりとなつたが、これが東京昨年末の大雪であつた。

靜岡はよい都會である。久能山一帶の海岸有度（うど）の濱のあたり、風光明媚、羽衣傳說のあるも無理は無い。誠によい所である。此の處に老を養ひ、此の地に骨を埋めた古英雄の快心は嘸かしと思はれる。しかも朝の中に此處を見物して、夜已に東京の家に歸つた余の快心は古英雄も亦知り得ない所である。　（大正二年二月「學生」）

源平の武人と乃木大將

いろ／＼諸大家の學術上のお話がありましたが、私のは學術上の話と申すよりも、寧ろ通俗講談の方であらうと思ひます。併し今日の貼出しを見ると、東亞協會講演大會と書いてありまして、別に學術講演大會とも書いてないやうでありますから、私が通俗講談をやるといつてもお叱りを蒙ることはないと考へるのであります。乃木

大將が古武士の典型である、或は武士道の權化であるといふやうなことは、大分言立つたことであります。私は生前乃木大將と別に交際を願つたことはありませんが、いろ／＼新聞雜誌等に出た所の乃木大將の平生の言行等を伺つて、成程世間で言ふ通り、古武士といふものはかういふものであらうかと考へました。卽ち古武士の典型、武士道の權化と世間で申すのは尤もであると考へて居りましたが、それに就いては一體古武士といふものと比較して見たらどんなものであらうか、古武士とはどんなものであらうかといふやうな考をもつて參りまして、そこで今日のやうな演題を揭げた譯であります。

さて、先づ第一に、古武士の本場は源平時代でありまして、すべて日本の或は謠曲なり、或は演劇なり、小說なりに於て、此の時代は最も武勇談の賑やかな時代であります。子供の時から吾々の頭腦に染込んで居るのも源平時代であります。そこで源平時代の武士は、どんな武士であつたかといふことを見たいのであります。尤も此の比較は少し當を失して居る所がある。何故かといふと、彼の源平時代の武士といふものは、所謂豪族の家の子郞黨で、それが自分の主と賴む人のために働いたといふだけのことでありまして、その戰爭といつた所が、一ノ谷の戰でも、宇治川の先陣でも、極めて小さい。堂々たる陸軍大將といふ資格を以て、世界の大强國を相手にして戰爭をしたといふやうな事とは大變な相違であるから、此の比較は旣に當を失して居るかも知れぬ。併しながら、世間が乃木大將を稱して、古武士の典型とか、武士道の權化とかいふことを頻りに申しますから、其の精神、其の人格といふものを比較して見るといふことは、別に當を失したことでないかも知れぬのであります。又一つ

お斷りして置きたいことは、私は歴史家でない、歴史上の事實といふものを一向知らぬのであります。私の知つて居るのは、唯平家物語のやうなものである。歴史上の眼から見ると、平家物語などは歴史ではない。本當の歴史ではなくて、あれは實は半分小說である。卽ち日本の長い敍事詩である。私は元來歴史よりも文學の方が最も能く國民を理解し得るものと考へて居る。歴史上の事實を穿鑿して、日記や記錄などの一日や二日のことを調べて見た所が、本當のことが分るものでない。やはり日本の國民が本當に分るのは、日本の文學の上にあると思ふのであります。日本の或は歌なり、或は物語なり、又昔話といふものは、いろ〳〵後の人が作り變へたり、或は作者の想像によつて出來たのもありませうが、其の想像といふものは、日本人の想像である。作り直すのは、それが日本國民の思想に合つたからに相違ない。であるから歴史の事實が如何にあるか、今日の事柄でさへ新聞の記事が毎日間違つて居る位であるから、記錄などはそんなに當になつたものでもないと考へて居る。私は歴史上の穿鑿よりも、寧ろさういふ國民的傳說、國民文學といふものが大いに日本國民を理解する上に力のあるものと考へて居ります。そこで平家物語だけに就いて論ずるといふことにいたします。

先づ第一に乃木大將の御先祖たる所の佐々木四郎高綱から始めて行きます。この佐々木四郎高綱といふ人は、御承知でもありませうが、賴朝が範賴、義經といふ兩人の弟を遣はして、木曾冠者義仲を攻めさせた時に、近江の國から馬に乘つて一生懸命に鎌倉へ駈付けて來た。賴朝がいふのに「お前は一體近江の國の者ではないか。今度都攻の軍があるのに、なぜ都へ行かないで鎌倉までやつて來たか」と、かういふ問を發した。所が佐々木四郎

答へて申しますに、「都上りはたやすいことであるけれども、久しく御目に懸らぬので御目に懸りたい。都へ攻入るにしても、是非一旦御目に懸つた上でなければならぬ」といつて答へた。隨分遠方を馬に乘つて駈けて來た。そこまで盡したといふことを賴朝が大いに感心して、池月といふ名馬を與へるやうになつたらしい。さういふことはなか〳〵尋常には出來ないことで、これで佐々木四郎が忠實な人であつたといふことが分る。早く都へ行けばよいのに、わざ〳〵鎌倉まで走つて來た。其の代りに馬はいけなくたつた。そこで新しい馬が欲しいと、かういふことになつた。武士が馬を愛するといふことは、もとよりのことでありまして、乃木大將も非常に馬を愛されたといふことであります。御先祖の佐々木四郎高綱は馬を賴朝に貰つた。乃木大將もステッセルから馬を貰つたことがある。所がこれを比較して見ますと、佐々木四郎高綱は先づ半分は强ひて貰つたのである。「自分はどうしても宇治川の先陣をいたします。それには馬がなければ働が出來ませぬ」と、かういふことを言つて、賴朝が義經にも範賴にも遣らぬものを强ひて貰つた。所が乃木大將の方は別にくれよとも言はないのに向ふからくれたのである。其の時乃木大將は直ちに貰ふかと思へばさうでなくして、「軍律といふものがあるから、いづれ其の手段を盡してから」と答へた。其の事は露國人も非常に賞讃して居る。其の馬の貰ひ方も御先祖の方が宜しくないと思ふ。それから梶原源太景季といふ人が、やはり磨墨を貰つて居る。これも池月が欲しかつたけれども、どうしても賴朝がくれなかつた。所が高綱が池月に乘つて出掛けて行つて、それを景季に見せつけた。景季は怒つて、どうも賴朝公は怪しからん、自分が賴んだのにくれないで、高綱に遣つた。一つ高綱と刺違へて死んでしまはう

といふ權幕で出掛けて行つた。所が高綱が旨く欺した。「さういふ譯ではない。これは貰つたのではない、實は盜んで來たのだ」かういつてしまつたから、景季も安心した。成程其の時に刺違へてしまつた所がつまらぬ譯で、宥めて置いて兩人とも生きて居つて忠義を盡すのもよいのであるが、併し噓を吐いたといふことは免れぬ。佐々木四郎高綱卽ち乃木大將の御先祖は噓も吐いたといふことになる。

それから宇治川の先陣であります。宇治川の先陣といふものが、やはりあまり立派なことではないと思ふ。梶原は磨墨に乘つて居る。佐々木は池月に乘つてゐる。所が第一等の馬に乘つた佐々木四郎の方が少し遲れたのであります。そこで「馬の腹帶(はるび)が緩んで候」と言つた。梶原が止つて腹帶を締直す、其の暇に乘じて先登したといふのでありまして、これも稍欺いたといふやうな形跡がある。それは武士の戰場に於ける駈引であつて、昔はかういふことが隨分あつたらうと考へますけれども、併しながら、正々堂々たる遣方ではないと思ふのであります。つまり其の點は何であるかといふと、非常に功名を急ぐからである。自分の功名を立てたいといふことは、これは武士として當然のことでありませう。一番槍の功名といふことは大事なことであるから、其の功名の念に急であつたが爲でありませう。併しながら、乃木大將はどうでありますか。極めて謙遜な人であります。彼の旅順を攻擊して、さうして要塞を陷れたといふことは非常な大功名である。大難戰をして、とう〳〵陷れたといふことは、世界の歷史に於て特書すべき事件である。併しながら、乃木大將は嘗て其の功を誇つたことがない。加之、多くの國民を殺したといふことを自ら責めて非常に心配して居られた。卽ち功名といふ念は少しもなく、さ

うして自ら謙遜するといふ所がある。これは祖先の佐々木四郎高綱に比較したならば、非常な相違である。祖先の佐々木四郎高綱よりも、どの位偉いかも知れぬ。餘程大きな所があると思ふのであります。それでありますから、乃木大將は祖先よりも遙かに偉い。佐々木四郎高綱は數百歳の後に、自分の子孫に自分より非常に偉い人が出たといふことを喜んで居るだらうと思ひます。これは卽ち血は佐々木四郎より傳はつて居りますけれども、其の後の學問、其の後の動機といふものが、いろ／＼な側から養はれて來た結果に相違ない。

それから、賴家の時代になつてからでありますが、越後の國の城資盛といふものが叛いたことがある。其の時に佐々木四郎の兄である所の佐々木三郎盛綱に對して、征伐に行けといふ命令が下つた。盛綱は家に歸らず、卽刻駈出したといふことである。此の點は洵に偉い。盛綱も立派な武士であつたのであります。流石に乃木大將の先祖に關係ある人と思はれますが、併し此の人の功名談に就いても、甚だ面白くないことがある。それは、例の備前兒島の戰でありますが、其の時に敵が海を隔てて扇を以て麾いたけれども、海であるから渡れない。そこで佐々木三郎盛綱は竊かに浦人を招いて、「此の邊に淺瀨があるか」と聞いた。すると「月の初頃には東の方が淺くなる、月の末頃には西の方が淺くなる」と答へた。「そんならば、一つ案內してくれ」といふので、其の者に刀をくれたり、鎧をくれたりして案內を賴んだ。さうして蘆か何か立てて標をして置いて、翌日いよ／＼戰爭が始まると、ちやんと昨夜の中に標が付けてあるから、盛綱は一騎駈出して行つて海に飛込んだ。外の者は驚いて止めたが、肯かないでどん／＼進んで行く。成程淺くて行けさうであるから、「佐々木討たすな」といふので、後か

ら大勢附いて行つて、遂に向ふに達した。そこで昔から河を渡る者はあるが、海を渡つた者は前古未曾有であるといふので、大變賴朝に褒められた。所が其の淺瀨を自分に敎へたといふことを、若し人に告げられては困るといふので、其の浦人をぽんと斬つてしまつた。これは甚だ殘忍なことであると思ふ。自分の功名を立てるが爲に、自分に功名をさせてくれた所の者を斬つてしまふといふのは甚だ殘忍である。武士といふものは、さういふものでないと思ふ。謠曲に藤戸といふのがあるのが、卽ちそれである。さういふ殘忍なことをしては、佐々木四郎高綱の宇治川の先陣より、もつと汚い先陣であるとおもはれる。卽ちそれが古武士であるならば、古武士といふものは甚だ面白くない。

それから佐々木四郎高綱と先陣を爭つたところの梶原源太景季であります。どうも梶原といふと、あまり好い心持はしない。とかく梶原といふのは惡い方に引つ張り出されるが、併しこの景季といふ人は私も大變好きな人である。これは立派な人である。血氣にはやつた强い武士であつたから、まあ宇治川の先陣も出來たのでありますが、さう汚いことはして居らない。其の弟の梶原景高といふのがある。此の兩人が一ノ谷の合戰に奮戰した。これは平家物語で見ると、丁度乃木大將の兩人の子供のことを想ひ浮べるのであります。其の時に景季は箙に梅を挿んで戰つた。平家の者が見て感心して、「東夷(あづまえびす)ばかりかと思つたら、さうでもない」といつて感心したといふことがある。卽ち謠曲の方では箙の梅といふ風に作つてある。所で此の兩人が進んで戰つたといふことは洵に結構でありますが、其の時に親の梶原平三景時といふのが、どういふことをしたかといふと、此の人も決してそん

なに臆病な人間ではない、やはり坂東武者で強かつたが、自分の子供が兩人今敵の中に斬込んだといふのを聞いて、非常に心配して後から追駈けました。さうして子供に出逢はうとして居るうちに、「源太景季が討たれた」といふ噂がある。「景季が討たれては自分が生きて居る甲斐がない」と言つて、夢中になつて飛んで歩いたといふ話である。乃木大將はそんなことはしなかつた。兩人の子供が討死をしても、泰然として居られた。子供に對する愛といふことは、人の父として尤もなことであるけれども、さう慌てて「子供が討たれたら自分は死んでも構はぬ」と言つて、飛んで歩くのは武士らしくないと思ふ。それからかういふことが一つあります。諸君は御存じでありませうが、吾妻鏡にある話です。奥州の泰衡が滅びた時に、由利八郎といふ者が擒にされました。所が其の捕まへ手が分らなかつた。功名を爭ふ者が二人出て來た。どつちか分らない。それで、これは由利八郎に聞いたらば、其の時の鎧の色でも分るからといふので、賴朝が梶原平三景時を召して、「先づお前が行つて聞いて來い」と言つた。そこで景時が八郎の處へやつて來て、「貴樣を捕まへた者に就いて議論があるが、一體誰が貴樣を擒にしたのか」と言つた所が、由利八郎非常に怒つて、「何といふ一體物の言ひざまだ。貴樣の主人は何者だと思つてゐるか。已れの主人といふものは鎭守府將軍で、三代も續いて居る。運拙くして今擒にはなつてゐるが、貴樣のやうな分際として、何といふ物の言ひざまだ」と言つて、怒つてどうしても白狀しない。そこで仕方がないから歸つて來て、賴朝に其の旨を告げました。賴朝は流石の人でありますから、「それでは」といふので、今度は畠山重忠を遣つた。畠山重忠が出て行つたが、非常に禮を厚くして「先づ敷皮を一つお敷きなさい」と勸めて置

いて、「さて洵にお氣の毒なことであつた。擒になられたのは武運の拙かつたので、お氣の毒千萬である。併し時勢であるから已むを得ない」と言つて、いろ〳〵慰めたあとで、「あなたを擒にした者が誰であつたといふことに就いて功名爭ひがある。其の時の鎧の色なりとお覺えがあらば敎へて下さい」とかう言つた。由利八郎は感心して、「先刻來た奴とは大變違ふ。一體あなたは何方(となた)であるか」「畠山重忠で御座る」「成程噂に聞いた秩父殿で御座るか」といふので、そこで悉く其の時の様子から鎧の色なども話したといふことである。これは明白に吾妻鏡に書いてあります。さういふことが忌憚なく書いてあります。卽ちこれは畠山重忠の立派な人物であるといふことを示すと同時に、梶原景時が惡いといふことも示してゐる。であるから小說にあることも、大抵は本當のことが書いてあると思ふ。決して善いものを漫りに惡くするやうなことはないだらうと思ひます。此の點なども、梶原は感心すべきでありませぬが、とにかく畠山重忠と共に大變に用ひられた人であつたのであります。

子供を伴れて戰爭に行つたことで、これも諸君は御存じだらうと思ふけれど、熊谷次郎直實のことであります。直實は其の子供の直家といふ者を伴れて行つた。其の時直家は僅かに十六歲でありました。鎌倉評定では十七歲以上でなければ伴れて行くことを許さぬ。然るに息子も進んで「軍(いくさ)に行きたい」と言ふし、直實もこれを伴れて行きたいといふ考があつたからして、十六歲の者を十七歲と僞つて伴れて行つた。こゝらは流石に面白い所である。今では成るべく徴兵に出したくないといふやうな弱い者もあるが、構はず進んで伴れて行く。所が一ノ谷で親子兩人が先陣をした時に、十七歲と噓を吐いたことを忘れてしまつて生年十六歲と名乘つたので、隱した事も

顯れてしまつた。此の直家が薄手を負うた時、「矢を拔いてくれ」と言つたのを拔いてやらず、「そんな薄い傷だから構はずやれ」と言つて子を勵まして置いて、自分は其の儘進んで行つて顧みなかつたといふのは誠に偉い所でありますが、併し其の時には、唯勵ます積りで言つたけれども、後から大變心配して居る。直家の傷はどうなつたか、死んだらうかといふ風に心配して居る樣子が見える。其の點も乃木大將とは大變な違ひであらうと思ひます。もとより乃木大將と雖も、決して自分の子を失つて悲しくなかつたのではありますまいが、其のことを少しも表さない。此の時分の武士は梶原でも熊谷でも頻りに子供のことをくよ〳〵言つて居る。熊谷直實は御承知の通り敦盛といふ直家と同年の平家の公達を討取つたが、「誠に武士といふものは情ないものである」と言つて、始めて發心して坊主になつたといふことである。だから物のあはれを知つて居る人だといふので、後世から非常に人望を得て居る。自分の子を愛すると同時に又敵をも愛する人であつたので、武勇ばかりでなかつたといふことは考へられますが、併しながら又或歷史家の說によると、熊谷直實の坊主になつたのは實はさういふ譯ではない。領地爭ひをして、それに負けての憤慨の餘り坊主になつたのが事實であると言ふ。若しこれが本當とすれば、熊谷直實の人物は一層下る譯である。之を乃木大將と比較すると又違ふ。乃木大將は恩賜金でも何でも皆人に遣つてしまつた。自分の邸まで東京市に寄附してしまつた。某博士が乃木大將を論じて、「乃木大將は熊谷直實ほどの決心がなかつた。若し熊谷直實ほどの決心があつたならば、旅順の戰爭から歸つた後坊主になる筈である」と言はれたが、これは以ての外の論であると思ひます。乃木大將が旅順から歸つて坊主になつたつて、少しも偉いこ

とはない。坊主にならぬ所が偉いのである。坊主になるのが日本の武士道ではない。さういふ議論は最もをかしい。或は平家物語をよく讀まなかつたものだらうと思ふ。

それから又乃木大將の子供に就いて想ひ出すのは卽ち佐藤繼信、忠信兄弟であります。やはり乃木大將の子供の如く母を殘して戰爭に出たが、兩人とも義經の爲に立派に命を捨てた。其の潔く命を捨てたといふことは、乃木大將の子供に似て居る。所で其のお母さんはどうかといふと、非常に歎いた樣子が見えて居る。これは乃木大將の夫人より偉くなかつたと、かう考へる。これは序を以て乃木大將の夫人のことまでお話した譯であります。

それで私は源平時代の人を見渡して、稍立派な人であると思ふのは、今お話した畠山重忠一人であると思ふ。平家物語の中では餘程立派な人であると思ひます。先刻お話をした由利八郎に對する態度でも、敵をいたはつてやるといふ樣子が見えます。さうして此の人は智慮ばかりではない、なか〳〵武勇の人であつた。それ等の證據は幾らもあります。宇治川を徒歩渡り（かちわたり）したり、或は一ノ谷の戰には、いつも馬の御厄介になるから、今日は馬を擔いでやらうといふので、馬を擔いで下りたりして馬をいたはつた。又此の人は大變誠實な人であつたのであります。或時重忠の目代が惡いことをして、伊勢の神樣の領地を侵した。それを神主の方から賴朝に訴へたので、賴朝が非常に怒つて重忠を責めた。重忠は自分の使つて居る者が犯した罪であるから、それを聞いて非常に驚いて、自ら食を絕つて死ぬといふ位までに決心した。これは自分の責任を思ふので、如何にも誠實な所が見えます。それから度々人に讒言された。或時賴朝が疑つて、人を遣つて樣子を見させた所が、これは已れを殺さうが爲に

人をよこしたのであると考へて、自分の罪のないことを割腹して示さうといふので腹を切りかけた。使に來た人は驚いて「決してさういふ譯ではない。樣子を見て來いといふ仰だから樣子を見に來たまでである」と言つて止めた。其の後賴朝に會つた時も、賴朝は一言も言はずに濟んだといふことである。即ち重忠の至誠に動かされて君臣の間がもとの通りになつたので、何となく誠實を以て人を服するといふ樣子が見える。それから又賴朝の所謂奥州征伐の時に、即ち國衡、泰衡を攻めました時に、向ふは阿武隈川を引いて山の下に瀦めて守つて居る。重忠は此方から行く路を拵へて計畫して居つた。所が三浦義村と葛西淸重といふのが、竊かに魁をしようといふので、其處を通らうとした。それを畠山重忠は知つたけれども、彼等が先陣をしたいならば先陣をさせてやらう、そんなに功名を急ぐならば功名をさせてやらうといふので、自分が知りつゝ默つて通してやつたといふことがある。即ち同僚に功名を讓つたのであります。功名を爭ふといふことは武士の氣概として尊ぶべきでありますけれども、併し又自分の仲間に功名させたといふことは洵に尊い精神であると思ひます。これは誠もあり、度量もあつて始めて出來る事だと考へます。結局讒言を受けて死にましたけれども、死んだ後にも大變惜しまれました。平生は極めて穩かな人であつたが、誰でも畠山重忠の側へ行けば自ら襟を正したといふことであります。

かういふ風に觀て參りますと、古武士古武士といつても、抽象的の古武士といふものはあるけれども、どれが本當の古武士かといふことを詮索して見ると、あまり古武士らしい人はない。先づ只今最後に申した畠山重忠の如き人が、稍乃木大將に似て居るやうに考へられるのであります。武勇もあり、誠實もあり、仁義もあつた人で

あります。けれども此の人は所謂文雅の趣味といふものが少しもない。文雅の趣味に至つては梶原の方がある。梶原一家は洵に文雅に達して居つた。梶原平三景時などはなか〳〵文藻があつて、頼朝が歌なんぞ詠んで「われひとりけふの軍に名取川」といふと、「君もろともにかち渡りせん」などといつて、頼朝の御機嫌に入つたこともある。一族皆さうです。景季、景高、みな文雅の道に達して居つた。源氏方には一體さういふことの出來る人が少い。畠山重忠も馬は背負へたけれども、歌は作れなかつた。平家は流石は久しく都に居つたから、何れも風流文雅でありました。就中薩摩守忠度の如き歌の名人が居つた位であります。とにかく古武士といつても、古武士の典型になるといふ人は見當らぬ。唯ずつと考へて見ると、一つ〳〵によい所はあるけれども、全體としてはあまり立派な人はない。所が乃木大將は、それ等の武士のよい所をすべて備へて居る。即ち集大成して一身に集めて居る。卽ち古武士の集合體である。さうしてこれまで武士道の權化とか言つてゐたけれども、それは意味の上で言つたので、初めて所謂人間となつて現れたのが乃木大將であらうと考へるのであります。これは單に源平時代が、先づ日本のすべての小說等の本源であるから、源平時代を取つてお話したのでありますが、其の後太平記時代を取つて考へても、とても乃木大將ほどの人格の人はありませぬ。武勇があり、膽略があり、至誠を以て人を動かし、さうして文學もある。詩歌に其の文藻を示して居る。それのみならず學問もあつた。色々な書物を澤山讀まれたといふことは、もとより古武士の及ぶ所でない。人格からも源平の武士を兩方集めてもかなはない。況して學問などは尙更かなはない譯である。私はさういふ風に平家物語を讀んで感じた次第であります。乃木大

將以前に乃木大將なしと書いたのは、さういふ意味で書いて置いたのであります。先づ乃木大將は昔からいつて居る武士道とか古武士とかいふものを本當に實現したのであつて、其の行たるや萬世に傳ふべきものであるし、又其の文藻も萬世に傳ふべきものであると考へられます。卽ち吾々がいつまでも忘れてならぬことであります。これから後は平家物語、太平記を讀むと同時に、乃木さんの傳記も讀んだら宜からうと考へるのであります。

（東亞協會講演、大正二年三月「東亞之光」）

攷證今昔物語集序論

今昔物語集三十一卷。國文で記した最舊最大の說話集として、優に世界文學の珍寶と見做すべきものである。古くは宇治大納言物語、又は宇治拾遺物語ともいつたもので、卷一から卷五までは天竺、卷六から卷十まで（內卷八缺）は震旦、卷十一以下（內卷十八、卷廿一缺）が本朝の部で、各條今昔（イマハムカシ）といふ語を以て說話を起して居るのが、書名の由緣である。天竺部は直ちに釋家の經典から飜譯したものらしく、震旦の部も概ね佛教の流通宣布に關する物語で、支那一流の孝子說話が加つて居る。本朝の部に於ても、佛教部は堂塔の緣起、齋會の由來等に關する說話、其の他往生傳、靈驗談等を集め、大抵は印度說話の同一形式を繰返したものである。之に依つて、

佛敎の說話が如何に我が國の精神界を風靡したかといふ情勢が覗はれる。又本朝世俗部に入つては、上は王侯貴紳から下田夫野人に至るまでの、あらゆる畸行異聞を輯錄して、武勇談もあれば、技術談もあり、妖怪談もある。はては桑中の喜をも洩さず、已に正史に載つた話もあれば、僅かに此の書にのみ傳はつて、一般史乘の缺を補ふものもある。印度及び支那の文明を鎔化した當時の社會を遺憾なく暴露して居るので、日本の文化史料としては眞に恰好の資材であるのみならず、世界說話の系統を比較硏究するもの等に取つては、缺くべからざる至重至寶の書である。

四圍の風物が一として强猛峻烈の性質を帶びざるなき印度の地。其處の住民は早くから熱烈な宗敎心を抱き、又深遠な詩的想像を養つて居つた。說話の術は其の最も得意とする所で、就中譬喩に於ては巧妙無類である。釋迦一代の說法は、常に能く此等の說話を利用し、之を以て其の敎旨を宣傳するの資に供した。今や此等の說法を滿載した經典が、支那譯となつて、次第に我が國に將來せられたのである。從來簡易恬淡に甘んじ、現世の幸福に滿足して居つた我が國民が、始めてかの不可思議無盡藏の妙法を聽いた時には、如何ばかり驚歎に堪へなかつたであらう。旣に支那の文明に醉はされた我が國民は、其の大文明國に盛に流行して居る大宗敎に接しては、更に又一段の讃歎を以て之を迎へたのである。其の恐ろしい地獄の話に戰慄を禁じ得なかつたと同時に、莊嚴な極樂淨土の有樣を夢みては、卽ち渴仰の念に堪へなかつたに相違ない。當時の佛徒は拔目なく此等の說話を物語つて、弘通の方便に供した。かくて平安朝の初、延曆年間には、冥報記、冥報記拾遺等に收められた說話と同一形

式のものが、地名と人名とを日本に改めて、日本靈異記となつて現れるまでになつた。いふまでもなく、諸經典や、冥報記や、日本靈異記も皆漢文である。今昔物語中の佛教說話は取りも直さず、其の日本語化せられたものである。

天竺部は釋迦の一代記から始つて居る。釋迦が兜率天の內院を出て、摩耶夫人の腹に宿る所から、誕生、出家、苦行、降魔、成道、敎化、涅槃に至るまでの一代の行蹟はすべて神怪な衣を以て包まれて居る。卽ち神話化せられたる佛陀傳である。佛陀傳は早く既に印度に於て神話化せられたので、其の中に印度古代の神話を含んで居るのは言ふまでも無い。隨つてそれが希臘神話其の他との異同を暗示する所もあつて面白いが、もとより皆漢譯佛經に淵源するから、新しい材料ではない。それよりも注意すべきことは、此の佛陀傳の影響によつて後の高僧傳の作られたことである。日本でも聖德太子を始めとして、爾後の歷代の高僧の傳記は皆之と同形式になり、遂に其の範圍を脫せぬのである。例證は一々擧げるまでもない。又佛陀傳は一方に於て悉皆說法であるので、佛陀の一生を說明すると共に、佛法の貴むべく、外道の斥くべく、人生の脫離すべきを說く。或は王者を拈出し、或は貧女を拉し來り、老といはず、幼といはず、種々の人物、種々の境遇を擧げて、すべて佛德の廣大無邊なのに歸著させるのである。これが卷一から卷三までであつて、卷四は佛滅後弟子の阿難が經典を結集する話に始つて、釋迦涅槃の後、佛法保護者と佛法妨害者の事蹟を擧げ、苟くも佛敎に志あつて、佛像を禮拜し、佛經を讀誦したものは福德利益を受け、又假初にも佛法を誹謗し、佛敎を蔑にしたものの禍害を蒙り、罪報を受けた事を語つて

居る。要するに佛教說話の根柢の訓誡となつて居るのは卽ち因果應報の倫理思想で、これは從來の日本人の夢にも知らぬ事であつた。

卷五には本生說話卽ち Jātaka がある。ジヤータカは釋迦が生れぬ前の過去の話である。一の說話を說いた後で、其の說話中の誰は卽ち現世の誰、誰は卽ち今の我であると明すのである。かういふ物語は輪廻といふ思想が無くては成立つことが出來ない。印度人には古くから輪廻轉生の思想があり、佛教にも六道輪廻、三世因果の說を立てたのである。それ故本生說話に於ては、其の前身たるものは必ずしも人では無い。或は天人であることもあり、乃至は禽獸であることもある。要するに釋迦が當時の民間說話を利用した說法であるのである。其の中には釋迦自身の創作もあるであらう。錫蘭にある巴利語の三藏の雜藏には、本生經が二十二卷あつて、五百五十のジヤータカが含まれて居るといふ。近年カウエル氏 (Cowell) 監督の下に、其の飜譯が出來、又リース、デウイツヅ (Rhys Davids) の研究もある。これは漢譯の經文には、あちらこちらに散在して居つて、纏つて居るのは尠い。此の輪廻轉生といふことも、日本人のこれまで少しも知らなかつた事で、當時の國民は少からぬ驚異の念に打たれて、此等の話に耳を傾けたことであつたらう。

本卷の僧迦羅五百商人共至二羅刹國一語(第一話) は英譯によつて見ると (No. 196. Valāhassa-Jātaka,)、三獸行二菩薩道一兎燒レ身語(第十三話) は (No. 316. Sasa-Jātaka,)、身色九色鹿住レ山出二河邊一助レ人語(第十八話) は (No. 482. Ruru-Jātaka,)、象足蹈二立株一謀レ人令レ拔語(第廿七話) は (No. 156. Alīna-citta-Jātaka,)、龜不レ信二鶴教一落レ地破レ甲語(第廿四話) は (No. 215.

Kacchapa-Jātaka,）、龜爲レ猿被レ謀語第廿五話は（No. 208. Suṁsumāra-Jātaka,）である。此の龜が鶴の教を忘れて地に落ちた話はイソツプにもあり、パンチヤタントラの第一巻第七話にもある。猿の爲に謀られた話も同じくパンチヤタントラにも出て居るのである。又前の本生説話の身色九色鹿住レ山出ニ河邊一助レ人語巻五第十八話もパンチヤタントラの第二巻第二話と同じである。ベンフアイ（Benfey）や、カウエル諸氏の論じたが如く、こゝに印度説話と希臘のイソツプとの交渉はいふまでも無い。此の同一寓話を我が今昔物語の中に見るのは頗る面白いことである。

以上天竺部の説話の排列を見ても、本書が唯漫然と數多の説話を得るが儘に書記したもので無い事が分る。其の間に自ら分類があり、順序が立ててある。又考證として擧げた經典の文と比較して讀んで見れば、必ず其の文の忠實な飜譯文である事が分る。中には明白な誤譯も往々見受けられる。決して記憶から喚起して書いたものでは無い。最初に佛傳、次に佛後、次に佛前と分類して、珍奇な説話を群籍にあさつて集めたのである。分類の工夫は震旦の部、本朝の部にも亦認められるのである。

震旦部第六、第七の二巻には主として佛法に關係した説話を收めた。先づ佛法の支那に傳來する初から、其の弘通するに至る説話を次第し、其の間經典を將來した人、佛像を造立した人、又は經文を書寫し、讀誦し、受持した人々の蒙つた實驗のあらたかな説話を澤山に集めて居る。其の地名と人名とは支那には相違ないが、全然印度式の説話で、いづれも佛法僧の三寶に歸敬したものは現世の福德、死後の冥報を得ることを示したのである。例へば佛像を造るか、佛經を寫すか、佛名を唱ふるか、乃至は僧侶に施與するか等の中、どれでも一つの仕事を

成したものがあれば、現世の應報として、或は富貴を得、或は病難を免れ、或は劍難、水難を逃れ、或は一旦死しても復蘇生する。死後の冥報としては、或は天に上るものもあり、或は極樂に生れるものもあり、女人は變じて男子となる等、因果覿面恐ろしい程明白なのである。而して此等の原因となるものは、必ずしも意識的ならずともよいので、無意識に自然に行つても、それが善因なれば必ず善果を結び、惡因は必ず惡果を伴なふのである。單に僧坊に寄宿したといふばかりの爲に、其の日一日に限つた兒の命が、七十までも長命した（卷六第四十八話）例もある。「此レ佛法ノ不思議ノ力也。淺キ智ヲ以テ不レ可レ量ズ」といふのである。

無意識どころか隨分之に反對の意見を有して居るものでも、偶然に善果を得る因緣に出逢ふこともある。豫州神母が般若波羅密多經の名を聞いて、怒つて耳を洗つて歸つてすら、閻魔の廳では其の功德を認めて忉利天に生れしめたとある。（卷七第三話）「嫌ムト云ヘドモ般若ノ名ヲ耳ニ觸レタル功德如レ此シ。何況ヤ心ヲ發シテ書寫シ受持シ讀誦セラム人ノ功德无レ量シ云々」といふのである。それ故信心を發して、經文を書寫したり、佛像を造立したりする人の果報を受けた話は數限りも無く多い。一旦死んで冥途に至つても、前生の功德によつて、命數未だ盡きずとて、再び蘇生させられる事も多い。詳密に死後蘇生するまでの容子を話すのが常例である。

要するに其の原因は善惡ともに如何に微細でも、其の果報は極めて重大であることを說くのである。人間にあらぬ禽獸でも鬼でも福德を受けるのである。鴿の法を聞いて人と爲る事もあれば、（卷七第十話）猿が法華を聞いて忉利天に生れた話（卷七第廿四話）もある。又前生に牛であつたが、般若經を負うた功德によつて人間に生れた例もある。（卷七第四話）前生

の罪業で、厠の中で糞を噉つて居た鬼が法華一部の供養の爲に生を改めた話（卷七第廿一話）等、いづれも誇大廓大して、佛法僧の功德を述べて居る。

かくして善事は如何に小さくとも爲さゞるべからず、惡事は如何に小さくとも爲すべからざることを示し、結局務めて身、口、意の三方法を以て佛、法、僧の三寶を供養すべき事を說いたのである。其の原因と其の果報との割合が懸隔すればする程、人心を動かす事は多い。何となれば、かばかりの小事にして此の果報あり、もう一層の大原因ならば其の果報はどれ程であらうかと、遙かに其の大を想像せしめるからである。つまり極端から極端に、人の想像力を活かしめて、或は喜悅せしめ、或は恐怖せしめるのである。これは佛法說話の慣手段であつて、之によつて人心を畏怖せしめ信仰を起させるの功を收めたのである。

なまぬるい、中庸の說方でなくして、飽くまでも非常で、大袈裟で、强烈である所が其の特色で、說話としての興味も亦一段と之が爲に高いのである。

輪廻轉生はあらゆる生物に通じて行はれるから、前生に禽獸であつたものが、人界に生れ、天界に生れるのはいふまでもなく、又人間が死後牛となり、馬となり、羊となる類はおろかなこと。蟲の忉利天に生れた話もあれば、蚯蚓の人間となつた例もある。其の轉生の因緣となつたことは、やはり輕微なことで、天に生れた蟲は華嚴經を讀む僧の手洗水の中に居たからである。蚯蚓の人界に生れ出たのは、前生に寺の庭の土中に居つて、常に法華經を聞いたからである。こんな極端な場合を思へば、何ぞ況や人が信心したならばとの感を起すのは當然であ

る。人の死後は生前の罪惡によつて牛や馬となるものが最も多い。印度の熱國で重きを荷ふ牛馬の苦役は如何にもつらさうに見えるのである。又女は蛇となることが多い。嫉妬、貪婪の惡行は死後に至つて蛇と生れ變るのである。總じて蛇は何處の國でも人間の敵であるが、印度は殊に甚だしい。蛇は邪淫で最も忌むべきものとなつて居る。狐も亦狡猾で邪淫である。すべてかくの如く禽獸を人格化したのは輪廻說には最も相應しいことで、日本人は印度及び支那の說話を聞いて、始めて蛇淫、狐妖といふことも學んだのである。

第九卷は震旦部孝養で、孝子傳說を採つて居る。支那で孝道を百行の本と立てることはいふまでもない。隨つて孝養の話は極めて多い。母の孝養の爲に子を埋めようとした二十四孝の一人郭巨を始として、孝道を誇大した話が多い。孝道以外の話には同じく印度式の輪廻談が骨髓をなして居る。十卷は主として支那の史乘、諸子、小說等にあらはれた巷談を採つた。其の第十話に例の本生說話が交つて居るのは、著者の思違であつたのであらう。尙出典の分らないものの中にも、印度種で無いかとおもはれるのがある。

天竺部、震旦部もとり〴〵の興味はあるが、最も面白いのは本朝の部である。第十一卷以下卅一卷まで二十一卷の中、惜しいかな二卷が缺本で、現存して居るのは十九卷ある。其の內卷十一から卷二十までは佛教に關した物語で、卷廿二から卷卅一までは一般世俗の話である。尙各卷に於ける說話の大要を言へば、

卷十一　聖德太子の佛法弘通から佛法各派傳來の事、諸大寺建立の事。

卷十二　主として各齋會の由來、佛像、經典の功德。

卷十三　持經者、讀經者の談、特に法花讀誦の功德。
卷十四　法花經の功德、特に前生談及び誹謗者の惡報。
卷十五　僧俗の往生傳。
卷十六　觀音靈驗記。
卷十七　主として地藏靈驗記普賢、毘沙門、夜叉等もあり。
卷十八　缺本。
卷十九　諸人出家談、其の他佛敎に關する雜話。
卷二十　天狗、狐、蛇等、其の他冥途に行つて歸來する話等。
卷廿一　缺本。
卷廿二　藤原大臣家の話。
卷廿三　主として强力の話。
卷廿四　藝術談。
卷廿五　武勇談。
卷廿六　民間の宿報談。
卷廿七　靈鬼。

巻廿八　主として滑稽談。
巻廿九　主として盜賊談。
巻三十　雜談、主として男女の情事。
巻卅一　雜談、外國の話あり、旅行の話あり。
以上の中、巻廿八に本朝付世俗とあるのは廿五巻の次に來るべき順序であらう。
佐藤誠實氏は巻廿二、巻廿三を併せて廿二巻とし、廿八巻は巻廿三と定め、缺本の廿一巻より廿五巻まで五巻を本朝付世俗の部と定められた。尙「本書の撰びざまは五巻十巻を一つ類としたやうだから、これから下も尙あつたのであらう」と言はれて居る。
以上示したやうに、もとより正確な分類は出來ないが、各巻には、自ら同種類の說話を彙類して、餘程整つて居る所が見える。之を天竺、震旦の部に續くものとして見れば、最初から一定の目的を以て、此の物語を記述したかと察せられる。もし佐藤博士の言はれる如く、五巻毎に一類としたものと見れば、尙更の事である。さるにても、かく浩瀚な大著を心掛けた人の博識と熱心と氣力とは大いに感ずべきことで、之を成遂げさせた時代も亦注意せられなければならぬ。
本朝付佛法の巻々に於ては、震旦付佛法の巻々を見ると同樣、いはゆる印度式の說話が已に日本人に浸染して、多くの日本說話を生じた事に心附かねばならぬ。前にも言つた通り、漢文の日本靈異記は已に平安時代の初に出

來たので、其の後も佛教は日に興隆して、佛家の著書も數多くある。佛教說話の勢力は滔々として、國民間に傳播したのである。本書に考證した靈異記、法華驗記等の外、尙幾多の淵源となつたものもあつたに相違ない。一般供養の力で現世及び後世に利益を蒙る話は非常に多く、それが例の如く、殆ど輕微な因緣で過大な應報を受けることも同樣である。僧迦羅が五百の商人とともに羅刹に追はれ、觀音を念じて其の難を免れた話（巻五第一話）は道に迷うた肥後の國の一書生が、羅刹に食はれようとして、觀音を念じて助かつた話（巻二十第廿八話）と何の差別も無い。羅刹女に亂れた話といへば、震旦の一僧も（巻七第十五話）日本の良賢も、（巻十三第四話）全く同一である。日本の久米仙人も、（巻十一第廿四話）一角仙人の話の變形である。支那に法華讀誦者の死後、舌ばかりが殘つた話（巻七第十四話）があれば、日本にもそれに相當する話が無ければならぬ。（巻十三第十一話、第廿九話、第三十話等）其の他供養を盡して、福德を受けた話、地獄に行つて蘇生した話など、皆全く同じ型で、巻六、巻七の諸說話と巻十三、巻十四、乃至は巻十七等を比較すれば、唯同一說話のあまりに頻繁たるのに驚かざるを得ない。但し支那の說話には死後も閻魔の廳に役人として召される話（巻九第卅一話等）などがある。どことなく支那風の色を帶びて居る所が面白い。

各種の傳說は印度、支那、日本と傳來して、幾分か其の外衣を改め唯其の固有名を取換へたばかりである。其の骨子は動かぬのである。かういふ事は此の今昔物語ばかりにあるのではなく、此の時代にばかりあつたのではなく、後世の寶物集、沙石集、十訓抄、元亨釋書等に繰返されて居ることを注意しなければならぬ。又今日の民間說話にも尙殘留して居ることを知らなければならぬ。玄奘三藏が病人の膿を吸つた話は、日本では光明皇后の

話となつて居る。鳩摩羅焔が佛を負うて走る話に、晝は羅焔、佛を負ひ奉り、夜は佛、羅焔を負うて走り給ふといふのは、信州善光寺の善光の話の本であらう。又豫州神母の話（巻七第三話）卽ち神母が牛に曳かれて寺參りする話が、「牛に曳かれて善光寺參り」の說話を作つたのである。「飯を食つてすぐ横になれば牛になる」も、「親の因果が子に報いる」といふやうな諺も、皆印度思想に本づいて居る。地藏や觀音を信仰することは今日でも尙盛である。西國三十三番の札所を尋ねるまでも無い。淺草觀音を見ても分ることである。

本書巻五第十三話に見えたやうに、月中の兎ももとは印度思想であるが、支那にも玉兎といひ、日本でも兎が餅を搗いて居るといふ。單に宗教に關したことばかりでは無い。いはゆる世俗部の話にも、三國傳來の話は多々あるのである。日本に蟻通の明神の話がある。これは枕草子にも已に日本の事蹟として記されて居り、謠曲にも蟻通がある。併し其の根本は棄老國の話に在ることは明白である。（巻五第卅二話）此の棄老國の話卽ち老人を棄てる話は、震旦部には厚谷（巻九第四十五話）があり、本朝の部には姨捨山（巻三十第九話）がある。此の三話を比較すると、次第に其の說話が時代と國土とによつて變化して行く跡が認められるやうにおもふ。浦島の子の話は神代紀の彦火火出見尊の神話が其の根元であらうが、釋種成龍王聟語（巻三第十一話）と何かの聯絡があるに相違ない。龜を救つた話はいくらも類話がある。（巻九第十三話參照）前にも述べた龜が猿を欺いて其の肝を取らうとする話（巻五第廿五話）は一般に肝取の話の根源で、丹後守平貞盛取兒干語（巻廿九第廿五話）を始として朝顔日記や合邦辻など、淨瑠璃に行はれたものは皆印度說話の餘波である。巻廿九の第卅二話に陸奥の獵人の狗が大蛇を噛殺して主人を救つた話がある。これは本書にも考證した通り、搜神記に

出て居るが、西洋にも全くこれと同じやうな說話が擴がつて居る。馬琴の弓張月に、此の忠犬の話を載せて居るのは人の知る通りである。

支那の韓伯瑜の話（卷九第十一話）と日本の隨身公助の話（卷十九第廿六話）とを比べて見よ。一は母に鞭うたれて母の老を悲しみ、一は父の杖の下に父の力の弱つたのを悲しんだので、全く同一型の類話である。又第十卷の第廿一話長安の女が夫に代つて敵に討たれた物語を讀むものは、必ず日本の袈裟御前の話の由來する所を知るであらう。

凡そ說話は時代とともに、場處とともに變轉して行くもので、そこに說話の興味が存し、說話研究の面白味が存在するのである。右に擧げたやうな例は本據（クエルレ）の研究がすゝむとともに、尙いくらも明白になるべき話である。曲亭馬琴は昔語質屋庫に於て、眉間尺の髑髏の話（卷九第十四話）は吳越春秋の事實を改造して搜神記の作者が作つたやうに書いて居る。其の着眼は面白いが、搜神記の作者が製造したといふのは、自らが小說家であるだけにさう考へたのである。作つたのでは無くして、時代が變化させたのである。搜神記の作者は蓋し忠實に當時の說話を筆述したのに過ぎまい。色々の話が變化し、混合して、別の說話をなして行くことが、說話の常例であつて、卽ち自然の小說家によつて作られるのである。

純粹の日本說話と思つて居るものの中に、よく調べて見れば、外國傳來のものが種々存在するのである。もとより又話の暗合といふことも注意しなければならぬ。之を比較研究して行くのが、說話學者の事業である。本書は卽ち其の考證の幾分の資料を供する積で編纂したのである。惜しいかな、まだ分らぬ部分ももとより多い。こ

れは偏に大方諸賢の教を待ちたいとおもふ。殊に其の感を深うするのは本朝世俗部の說話であつて、これは僅かに本書のみに發見せられるものが多い。一方から言へば、これが又本書の價値である。併し尚博く捜り、旁く求めたら、思の外の所に關係があるのもあらう。

蛇淫狐妖の話が印度から傳はつた事は前に述べたが、總じて日本の上代には禽獸の妖といふ者はなかつたらしく思はれる。それが本書に至つては、非常に多い。狐、野猪の化物は卷廿七等に出で、蛇の女性を犯すことは卷廿四、卷廿九等に見えて居る。こゝに於て人獸結婚の說話がある。卷卅一の第十五話北山の狗が女人を妻とする話は、八犬傳の伏姬のやうな話である。卷十九の第四十四話、達智門の棄子を狗の來て養ふ話は、羅馬建國の昔を思はしめる。

鬼といふ思想も亦佛敎とともに傳來したので、卷廿七には種々の鬼がある。一口に人を噉ふのもあり、（卷廿七第十三話等）血を吸取るのもあり、（卷廿七第十七話）板のやうになつて人を押殺すのもあり、（卷廿七第十八話）油壺になつて踊るのもあり、（卷廿七第十九話）人家に入つて射られるのも（卷廿七第廿三話）ある。つゞいて疫病の神の話、生靈死靈の話、此等は當時の物語類に見えて、其の頃の迷信を推測することが出來る。第廿七卷第十七話は取りも直さず源氏の夕顏の卷であり、同第二十話の生靈は六條御息所に外ならぬのである。天狗も亦當時の物語等に見えるが、こは日本で新に發達した怪物らしく、第二十卷等に種々の話がある。本書によれば、これも印度から支那を經て、三國傳來のもののやうに見えて、即ち第二十卷の第一話には天竺天狗聞㆓海水音㆒渡㆓此朝㆒語があり、第二話に震旦天狗智羅永壽渡㆓此朝㆒語がある。

とにかく佛法を邪魔する惡魔外道の如きものと思つたらしい。第二十卷第三話に天狗が佛と現じようとするのを、光大臣が見あらはしたといふ話がある。又同じ卷の第五話に尼天狗の話がある。これは天狗が尼と現じたの、である。或は阿闍梨をたぶらかすものあり、或は皇后を嬈亂するものあり、天竺の失通仙人、又皇后を犯した仙人の類で、天狗の道を學ぶものは人狗であると言つて誡めて居る。最もをかしいのは第二十卷の第十話で、男の閇を九本まで奪はれる話がある。人をさらつて行く話も（同卷第十一話）ある。翼があつて、（卷二十第三話及び第四話）又鵄の形を有して居つた。（同第十一話）即ち、後世に畫いた天狗、鳥天狗の形態は當時已に出來上つて居つたのである。

かやうに迷信の強い時代として、僧侶に依賴する外、陰陽師に信賴したことは亦隱れの無い話で、其の神術を語つた物語は第廿四卷に見える。其の術を以て、近く禍の身に及ぶことを知り、或は現に禍のかゝつたのを免れる。川人といふ陰陽師は地神に追はれるを覺つて其の難を免れ、（卷廿四第十三話）僧登照は朱雀門の倒れるのを知つて多くの人の命を助けた。（同卷第廿一話）智德法師が海賊に奪はれた船を取返した話などもある。（同卷第十九話）又人の物忌に籠つたのを咀ひ殺す話（同卷第十八話）などもあつて、陰陽師は活殺自在である。それのみか、目に見えぬ鬼神をも服するので、前の盜賊船を謀りよせた智德法師と技能を比べて勝つたといふ（同卷第十九話）安倍晴明は、大鏡にも見えて居るやうに識神を使つたのである。識神を使つて、人も無きに、自在に戸を上下したり、門を開閉したりしたのである。すべて入神の技術を貴ぶ所から技術說話を生ずる。醫師の妙技を稱へた話には、或は蛇に犯されたものを救ひ、（同卷第九話）或は龍に値つたものを治する。（同卷第十一話）算盤をおいて人を笑はせた話（同卷第廿二話）も面白く、百濟川成が飛驒工と爭ふ話（同卷第五話）も面白い。

北邊大臣の箏に感じて天人の下り舞うた話同巻第一話は狹衣大將その儘である。すべて繪畫、建築、美術、音樂等に關しては、どの國にもかういふ話があるものである。詩歌文學も亦人の心を感動させる力が多いもので、亦技術說話を構成することが多い。第廿四卷には和歌感吟の物語が澤山あり、中には天神の夢の中に詩の句を示されたこと、第廿八話藤原義孝が死後歌を詠んだ話第三十九話もあるが、概して神祕的性質を帶びたものは尠い。

それよりも面白いのは古歌に附着した物語である。淺香山、卷三十第八話姨捨山同卷第九話などの類である。姨捨山の說話は、前にも言つた如く、恐くは印度傳來の棄老國の話が、たま〳〵姨捨といふ地名に結付いて、「我が心慰めかねつ」の和歌を取入れたのであらうとおもふ。淺香山の歌は萬葉集第十六にも出て、橘諸兄の逸事であるが、これが全く別の話になつて、しかも更科日記に出て居る竹芝寺の說話に酷似したものとなつて居るのが面白い。同一の古歌に、色々な說話が附着するのである。古歌の由緣を說明することは萬葉集第十六卷を始として、伊勢、大和の歌物語となつた。これがやがて平安朝の物語、日記の發達の源である。さて三十卷の第十、第十一、第十二の說話等はすべて和歌に嗜のある妻を戀ひて、むかしの妻を呼戾す話である。沖つ白浪立田山の流儀である。かういふ話は古くからあつたのであらう。併し概して言へば、鬼神をも驚かしたといふ程のものはまだ無い。多くは普通の人情を動かすだけに止つて居る。和歌が目に見えぬ鬼神をも驚かすやうになつたのは、もう少し文學がむづかしく思はれた後の事であつた。

文學美術の嗜はあつたが、迷信に富んで文弱の風に流れ、概して神經過敏で、鬼や、天狗や、狐におどされた

平安朝の國民は、一方に於て武者の武勇譚を發生させたのも無理の無い話である。況や第廿九巻に見えるやうに、京師の街にも强盜が出沒して、恐しい事件の續出する時に於ては、武者に依賴する心を生ずるのは當然である。武者は或は狐を退治し、（巻廿五第六話）或は盜賊を射、（同巻第十二話）又其の威望のみを以て盜賊を震慄させる（同巻第十一話及び第七話）等、季武や、公時や、貞道の名も第廿八巻の第二話に見えて、齊しく人に畏れられたのである。後世の大江山、羅生門、戸隱山等の武勇譚が多く此の時代の武者になつて居ることは由來の久しい事である。

此等各種の傳說が直接本書から出て後の文學に入つたことは頗る多いが、强ち本書からといふわけではなく、民間說話として口碑に傳はり、それが後の文學の材料となつたものの多いことも注意しなければならぬ。而して其の古い說話が本書に書留められて居ることの興味を感じなければならぬ。竹取物語の竹中の女子は巻卅一の第卅三話に見えるが、これが竹取物語と、話の上に出入のあるのが面白い。第廿七巻の從㆓東國㆒上人値㆑鬼語第十四は、安達原の話によく似て居るが、謠曲安達原が本書から採つたものとは言へない。狐が女に變じて同じ人が二人出來たのは、第廿七巻の第廿九話、第卅九話もそれであるが、近松の殩靜胎內捃、乃至はそれを本とした義經千本櫻の狐忠信は果して本書から出たと言へようか。謠曲の二人靜がその粉本であるに相違ないが、二人靜もやはり別の淵源から曲を成したものであらうとおもふ。但し京傳の優曇華物語が、卒塔婆の血塗を材としたのの如きは、古學硏究の盛になつた後で、恐くは本書を書直した今の宇治拾遺から採つたのであらう。種々の說話が文學に入ることとは、鎌倉以後に多いことであるが、此等は本書によつて、幾分かまで其の淵源に遡る目安が得ら

れるのである。何にせよ、支那印度思想の浸染して來た平安時代殊に法華信仰の盛な時代の面影を、本書によつて十分にしのぶことの出來るのは、我が文化史の上、及び比較說話學の上に大きな價値の存在する所以である。

本書が宇治拾遺物語といつたものと同一書であること、又一に宇治大納言物語といつたといふ考證は、佐藤博士が委しく宇治拾遺物語考（史學雜誌第十二卷第二號所載）に論ぜられた所で、動かすべからざる論斷のやうにおもふ。拾遺といふことは强ち續篇とか、補遺とかいふ意味では無いので、晉人の拾遺記や、我が朝の古語拾遺や、吉野拾遺などの用法に見るべきものである。今の世に宇治拾遺物語といふものが別にあつて、それが本書の補遺のやうに考へられて居つたが、これは全く誤である。其の補遺でないといふ證據は、今の所謂宇治拾遺物語は總計百九十六段ある中、八十五段は本書から出たものである。その上に後の世の事柄も書加へたもので、其の語句から見ても又其の事實から見ても、明らかに鎌倉時代のものである。つまり本書の舊名を襲うたものに過ぎない。又別に宇治大納言物語といふもの、それと同じ物で世繼物語といふものもあるが、これもやはり本書の一名を名乘つて居るだけのもので、本書を始め、伊勢、大和、今の宇治拾遺、枕草子、十訓抄等から種々取集めたもので、新しい說話は何程もない。隨つてずつと後のものである。十訓抄、古今著聞集などもよく似たものであるが、皆鎌倉時代のものである。

此の物語の作者に就いては古來源隆國といふ說がある。本朝書籍目錄に宇治拾遺物語廿卷源隆國作とあり、順德天皇の八雲御抄に宇治大納言とあつて、隆國と記されてある。其の外寶物集、古今著聞集等にも宇治大納言の

物語と言つて居るから、多分さうであらう。此の隆國といふ人は權大納言俊賢の次男で、西宮左大臣高明の孫にあたる。長元中參議權中納言正二位となり、後冷泉天皇の御世關白賴通の女が立つて皇后となられた時に、皇后宮大夫となつた。賴通には深く信愛せられて居つたのであらう。治曆三年權大納言となり、承曆元年病を以て出家し、同四年七十四歲で薨じた。宇治に別墅を構へて居つたので、世に宇治大納言と稱したとある。小馬に乘つて賴通の門を出入したのを咎められて、これは足駄であると辯解したといふのに、飄逸な性格が想はれる。但し今の宇治拾遺の序に、

此の大納言は隆國といふ人なり。(中略)年高うなりては、暑さをわびて暇を申して、五月より八月までは平等院一切經藏の南の山際に南泉房といふ所に籠り居られけり。さて宇治大納言とは聞えけり。髻を結ひわけてをかしげなる姿にて、席を板に敷きて涼み居侍りて、大きなる團扇をもてあふがせなどして、往來の者たかきいやしきを言はず呼集め、昔物語をせさせて、我は內にそひ臥して、語るに從ひて大きなる雙紙に書かれけり。

とあるのは、恐くは後人の作つた話で、佐藤博士もこは恐くは藤原忠文が宇治民部卿と言つて、宇治別業に避暑したことを混同して書いたものだらうと疑はれて居る。卷廿三の第十五話に「只今アル駿河前司季通」とあるは橘季通といつた人で、隆國と同時代の人、併し其の次の第十六話に「今昔駿河前司橘季通ト云フ人アリキ」とあるのは季通の死んだ後書いたのであらう。又同卷の第廿一話陸奧國眞髮の成村といふ相撲人の事を書いて「眞髮ノ成村ガ父、此ノアル經則ガ祖父ナリ」とあるのも、多分隆國と同時代の人であらうと、これも佐藤博士の說で

ある。作者は隆國として、唯その宇治別業で避暑がてらの聞書だといふのは信ぜられぬのである。前にも言つた通り、天竺、震旦の部はもとより、日本の部も、攷證した部分に就いて見れば、其の原漢文を本として書下したことは明瞭なことで、決して唯の聞書とはおもはれぬ。卷々の順序や排列から見てもさうは思はれぬのである。又其の卷帙の浩瀚な點から考へても、決して短い間に出來たものではあるまい。

余はこゝに自ら揣らず、尙稿本のまゝ、此の書を刊行するに際して、ジャータカやパンチヤタントラと同じく日本の古文學中に此の世界の珍寶あるを喜び、我が國唯一の古說話集として、かばかり厖然たる一大典籍の存在することに就いて、宇治亞相に感謝するの念を禁じ得ない。

（大正二年五月しるす）

北莊遺稿序

北莊先生予伯父也。幼而好學。成童遊於芳野金陵之門。又學書於貫名海屋。明治之初。出仕笠松縣。尋爲岐阜縣書記官。功績頗顯。後轉大藏書記官。又爲行政裁判所評定官。常以淸廉剛直聞。晚年退職。詠觴自娯。先生最嗜書畫。長于鑒識。一時所藏至數百幅之多。皆天下逸品云。亦可以見其襟懷瀟洒。治劇有餘裕也。予之初來東京也。寓于先生之家。日夕親炙。受其薰陶。先生外嚴而內寬。事無細大。敎訓備至。以予之不敏而致有今日者。實先生

之賜也。恩誼侔父。何日諼之。先生既歿。嗣子貞吉君。裒其遺詩若干。將刊行頒諸知人。余受而讀之。先生音容。歴々在眼。嗚呼予之始謁先生時。先生年四十。而予今過不惑者七歳。僂指既三十年矣。俯仰今昔。不堪感慨。乃謹記一言以敍追慕之情云。

（大正二年九月識）

信濃丸から

「敵艦見ゆ」との信號

明治三十八年五月二十七日、假裝巡洋艦信濃丸は曉霧の中から露國艦隊を發見して、「敵艦見ゆ」との信號をいち早くも東鄕大將に送つた。世界の歴史に比類の無い日本海海戰の黒幕はこゝに切つて落されたのである。此の偉功ある信濃丸は今や平和の常職に返つて、神戸基隆間定期航海の任務に服して居る。七月十三日余が臺灣行に際して、此の船の甲板上の人となつたことは、余をして何となく一種の快感を覺えしめた。余が船室はサロンへ下る階段の直ぐ脇にあつたが、階段の前に當時の感狀が英語を添へて揭げられてある。

感狀

假裝巡洋艦信濃丸

明治三十八年五月中敵艦隊の北上に對し連日連夜の哨戒勤務に服し同月二十七日拂曉早くも敵艦隊を發見し其確實迅速なる警報は聯合艦隊の作戰を利せしこと少なからず其功績大なりとす仍て玆に感狀を授與するものなり

明治三十八年六月二十日

聯合艦隊司令長官　東郷平八郎

島山は日本固有の語

船へはいると、農科大學の河合林學博士に逢つた。同博士は專門學術上の關係から、毎年少くとも三回は臺灣に往かれるさうで、大の臺灣通である。色々臺灣の話を聞く。阪田法學士(幹太)、北村工學士(耕三)も居られる。臺灣の紳士陳氏、李氏等もゐる。正午十二時出帆して、鷗のやうに群つて居る小舟の間を駛りゆく。空に雲なく、海に波なく、袂を拂ふ風は夏としも覺えぬ。昨日の汽車旅行とは到底比較を絕する。午餐の席上事務長に「三十八年當時の船員は居らぬか」と問へば、「機關士一人、下級船員一人だけで、その下級船員たる人、東郷元帥の花押ある感狀を有して居る」といふ。午餐を終へて甲板に出れば、左舷は淡路島である。人家點々數ふべき程近い。小さい漁舟が六千四百噸の我が信濃丸の舷下をすれ〳〵に行違つて、泛々と搖られるのも面白い。喫茶の時刻から左右兩舷の島山は殆ど應接に暇が無い程である。家の屋根のやうな屋島が第一に目に附く。其の左のが五劍山、その左が何々など指點する中、船は見る〳〵進む。平たい島、圓い島、大きいの、小さいの、遠いの、近

いの、或は重なり合つて居り、或は離れて居る。岡つゞきかと思へば島であることあり、島であるかと思へば四國、中國の山であることもある。島山といふ語は日本には古くからあるが、支那には島山といふ熟語がない。日本の此の景色を見れば、成程島山の語の意味は最も適當に感ぜられ、大陸の支那には無い理由も首肯かれる。

瀬戸内海の景色は世界一

汽船は多くの島山の間を縫つて行くので、或は煙波渺々たる灘に出るかとおもへば、忽ち島と島との間の細い水路を通る。風向も船首の轉ずるによつて轉ずるから、右舷の涼しい事もあり、左舷の涼しいこともある。全體を見て美しいパノラマを眺めるのも面白いが、船の進んで行くまゝに、其のパノラマの變化を見るのが更に絶妙である。外山先生がかつて言はれたことがある。「松島を日本三景の一に數へるのは、昔小さい船で漕いで行つた時代の觀察である。今の汽船では瀬戸内海こそ丁度松島のやうな佳景である」と。げに其の言の通り、汽船の早い船脚につれて、千變萬化極りない此の景色は、世界中恐らくは比類はあるまい。西洋の旅行者が口を極めて稱讃して居るのも當然である。夕暮の空の景色、夕日が紅の波に疊む色合など、得も言はぬ美しさである。水平線に近い黑ずんだ一帶の雲が、山に列つて見分けがつかぬ。水天髣髴たるあたり、著しく光るのは處々の岩石の上に建てられた燈明臺である。今日は陰曆十日の月が海波を照して、燈明臺は入らぬ程である。

月下の來島海峽

夕食の後浴衣を着て甲板を歩めば、そよ〳〵とした涼風と、やさしい月光を浴びる。左の方煌々たる一簇の燈

光を見る。「何か」と問へば、「四阪島なる住友製錬所だ」といふ。例の鑛毒のやかましい爲に、こゝ無人の島を切開いて製錬所を拵へたが、折角の其の計畫も、風の具合によつては今治の市街附近へ鑛毒をふりまくので、やはり無效であるとのこと。工業と農業との爭はいつまでもやむ時は無い。やがて今治の市街の光が左手に見える。來島(くるしま)といふあたり、兩岸最も迫つて、潮流も急であるといふ。甲板の籐椅子にもたれて、海山の美景を眺め入つた時、都會の塵埃、混雜、煩冗、繁華皆忘れられてしまふ。世界に類のない此の好風景は、國民としては必ず一度は見たらよからうと思ふ。夏期には富士登山も必要であらう。併し海國男兒としては登山ばかりが能でもない。休業を利用した回遊團も折々は催されたさうであるが、これは尙一層奬勵したいと思ふ。昔の船では色々の危險もあつたが、今はその恐がない。山登り、遊山といふことよりも、むしろ遊海といふ方が愉快では無からうかなど洒落を言ひ合ふ。

曉風霧を拂うて門司に入る

夜は愈〻更けた。甲板の人は、一人減り、二人減る。送迎する島山、展開する風光、いつまで見ても飽かぬが、瀨戶の名も山の名も分らぬ。ボーイに聞けば「內海の島の數は三千にも餘る。一々其の名を覺えてゐる者は誰一人あるまい」といふ。十二時甲板を下りて船室に入つた。一眠したかと思ふと、汽笛が頻りに鳴る。やがて船が止つて半鐘を時々打つ。二時間程前までは晝のやうな月明であつたのに、今は濃霧咫尺を辨ぜぬといふ程で、船は航行を止めたのである。午前五時半頃曉風の吹き起ると共に霧は次第に薄らいで行く。直ぐ目の前に薄墨で描

いたやうな他の商船の影が浮ぶ。霽れる儘に、船の形も山の姿もだん〳〵明瞭になる。姫島を通つたのが朝餐の頃、昨夜の濃霧に三時半の延着は止むを得なかつたが、それが爲夢の中に過すべき景色の幾分を、朝に延ばして見ることを得たのは仕合であつた。さるにても戰爭當時こんな濃霧の夜などは嘸難しい事であらうと思ふ。十時門司に着く。（大正二年七月十四日午前十時、停泊中に記して上陸直ちに郵函に投ずる。）（大正二年九月「學生」）

臺灣の十日

一　臺北に入る

船が基隆に着いたのは七月十七日の未明、五時頃ボーイに呼覺されて起上ると、大石視學官、大塚視學がわざわざ出迎へられて居る。導かれて停車場前の一旗亭に小憩、窓外の山を見れば、既に故國と同じからず。瀨戶內海あたりで見慣れた美しい圓錐形の取りよろうた山ではなくして、如何にも形の不規則な幾重にも皺の折重つた山である。汽車中の座席に籐を敷いてあつたのは、流石に熱國らしく感じた。沿道の景色も何となく物珍しい。萱顏の花も眞紅である。絲瓜の花は眞黃である。葉の潤い蘭科の植物や芭蕉など、內地では植物園の溫室で見たものばかりである。強烈な赤、黃、綠の色彩が交互に汽車の窓を掠めて行く。田は已に刈收めて、積んである稻

穂の傍、早や第二回の植付が始つて居る。古今集の「昨日こそ早苗取りしかいつの間に稲葉そよぎて秋風の吹く」といふ歌を思ひ出して、夏だか秋だか分らぬやうな氣がする。今日は有栖川宮殿下國葬の日に當るので、處々の土人の民屋にも黒布を附けた日章旗が飜つて居る。急行で二三の驛を通過して、九時臺北に着く。隈本學務部長をはじめ、土屋中學校長、尾田高等女學校長、小川編修官、山口臺灣神社宮司、其の他の人々が出迎へられて居る。直ぐ前の鐵道ホテルに入れば、中川臺灣銀行副總裁、木村商工頭取など皆遠來の勞を慰めてくれられる。始めて臺灣に來て舊識の人の多いのを驚きもし、喜びもした。

二　臺灣神社

服裝を改めてホテルの自動車に乘り、直ちに臺灣神社に參拜する。隈本、大塚の二氏も同行、車上諸處を指點して說明せられる。相思樹の並木がある一直線の坦路は卽ち勅使街道で、明治橋を渡つて、やゝ坂路にかゝり、劍潭山上の神社の境域に達する。境內に大樹木は無いが、その位置といひ、社殿といひ、申分が無く清淨を極め、森嚴の氣に滿ちて居る。大前に額づきて今更ながら故宮の御偉績をしのび奉ると同時に、此の新領土に此の官幣社の鎭座あらせられたことは國民敎育の上に偉大な效驗のあることを感じた。すべての官廳、學校等が種々なスタイルの洋風建築の中に、此の社殿の白木造は、誠によく國民性を代表したものである。故宮妃殿下が御參拜の折、

この島のあらむ限りは輝かむ名も高さごの神のみいつは

と詠ませられたと承るもかしこしや。山口宮司は余が亡き父の友。社務所に小憩、舊を談じて後、民政廳に立寄り、內田民政長官に面晤。夜は長官の招に應じて官邸に至る。河合林學博士、隈本學務部長、井村、津田兩廳長等同席。長官は明朝出發、討蕃に出で立たれるといふ。

三　北投溫泉

翌十八日から三日引續きの大風雨で諸處の出水、汽車も數箇所切れたといふ。蕃界討伐隊の困苦は察するに餘りがある。午後古山、大石、志保田、田中の諸君と北投に行く。途士林を過ぎて、志保田君から往年學務官吏遭難の顚末を聞く。領臺以來已に二十年、今は何處へ行つても、諸般の設備が充實して居るが、當初の不便、困難は想像に難くない。今日の臺灣となるまでには、多大の犧牲の拂はれたことも記憶せねばならぬ。臺灣の地質は全體に水成岩であるが、此の邊一帶は火山岩ださうで、此處に溫泉の湧出て居るのも、日本の領土になる因緣があつたやうである。山の形も圓くて、浴衣を着て欄に凭つた時は箱根山に居るやうな氣がした。此の地の公共浴場は內地には見られない規模の大きなものである。浴槽は五間に十間もあらうか、深い所は背がやう〳〵立つ程である。優に幾人も游泳するに足るのである。休憩所も廣いし、西洋料理店もある。近傍一帶の地を公園として、花壇も作られてある。これは井村廳長の經營に成つたとの事で、今年の六月から開場。總督の一視同仁の主義から臺灣人も內地人同樣に入浴を許されて居る。二十七日の午後中川氏と再びこゝに遊んだ。短い滯在中二度までこゝへ來たのである。

四　東薈芳

東薈芳といふのは臺北支那料理の第一等の老鋪であるさうな。十九日の大雨中、學務部及び諸學校の諸君の招待を受けて晩餐を倶にした。瓦敷の土間に、板戸のしきり、日本の家の瀟洒たる風は無いが、書や畫や、壁に挿した草花や、流石に幾多の裝飾はある。來會者二十五人、四箇の圓卓を圍んでおもひ／＼に陣取る。十數品の獻立、例の燕巣もあれば、饅頭もあり、鼈もあり、鷄もある。所謂山海の珍味とはこれである。東京で食べた支那料理とは全く別である。支那は流石に古國だけに、調理の方法は世界中で最も進歩して居るといふ。昔の人が「食味に耽つて、天下を亡すものがあらう」と言つたといふのも、無理は無い。つまりは酒池肉林などと、昔から豪奢をする風が、だん／＼調理法をも進歩せしめたのであらう。日本人の食味に淡泊なことは、一方からいへば、やはり國民性の然らしめる所である。十分御馳走になつて、こゝを辭したのが夜の九時。隣室には支那人の板を叩くやうな單調な、やかましい絃歌が正に酣であつた。

五　種々の會

教育會、官民懇話會、父兄會、臺灣銀行倶樂部等に講演をと乞はれて、各思付の談話をしたのは、今から思へば背汗の次第である。お聽きになつた諸君は嘸かし退屈であつたらうと思ふ。中川君、井村君、其の他種々御馳走になつた中に、二十三日の夜には第一高等學校出身者の饗宴があつた。高等學校を卒へ、大學を卒へて、或は官業に、或は民業に、行政官となり、法官となり、技師となつて、此の新領土の各方面の事業に從事せられて居る

人は約五十人に上るとのことである。十數年前の書生時代を回憶して、舊師の一人として余を招待されたのは、余に取つては眞に喜ばしく、且は名譽のことであつた。席上鐵道技師たる某君が、國語の文法に就いての質問を出されたのも昔覺えて面白かつた。高等學校といへば、久しい間同校の書記をして居られた大和田胤修君が今國語學校の書記を務めて居られるのも奇遇であつた。

二十七日には公園内のライオンで福井縣郷友會が開かれた。會長は總督府祕書官三村三平君で、舊知の人である。會員名簿の總數八十人と聞いて、同郷人がか程まで多いかと驚かされた。官業、民業種々あるが、中には領臺以來引つゞいて居られる人もあるといふ。

六　臺中

汽車の復舊事業は迅速に捗取つて、もう徒歩聯絡で南部へ行かれるといふ。二十四日朝の急行でまづ臺中へ向ふ。三叉河と後里庄の間の長橋を徒歩するのである。上りの汽車が來ないので空しく待つこと三時間ばかり。橋は山上の隧道と隧道を連ねた所にあるので、非常に高い。下を見れば目が眩(くるめ)くやうである。普通なら五時間半で着くべきを、九時間かゝつて日暮方に臺中に着いた。臺中の市街はまだ完備して居らぬが、街衢は極めて整然として居る。公園の規模はなか〳〵大きい。茲にも臺中神社があつて、故宮の御功績を傳へて居る。公園内の香園閣、總檜木造で、内地にも珍しい大建築である。庭園も純日本式で美しい。ふと扁額を見ると、常陸山とある。支那人かなとおもふと、やはり横綱の常陸山であつた。此處の守備隊長小松少佐、「是非兵營を一覽せよ」といは

れる。熱地に適するやうな種々な設備、殊に蚊を防ぐ爲すべて戸に網を張つてあるのは、內地の兵營には無いことであらう。階子段までが鐵製で、船中のやうである。火災豫防の爲である。廊下もひろくて心持がよい。唯近傍に草木の無いのを遺憾に思つた。隊長の話に「どうもこゝは樹が育たぬ」との事である。宿屋の寢心地も惡くはないが、夜中をり／＼守宮(やもり)の鳴聲を聽くのは不氣味であつた。壁の上のきり／＼すは歌にもなるが、天井の守宮は稍不風流である。

七　臺南

濁水の大鐵橋を徒歩聯絡で通つて臺南に向つた。濁水溪とは眞に其の名の通り、水は全く眞黑である。丁度どぶ泥のやうな色をして居るが、これはスレートを流すからであるといふ。それ故下流では漉して飲水にもするとのことである。何にせよ、濁水滔々といふ有樣で實に汚い。歸途箱根山を通つた時、山も川も日本程美しい國はないとつく／＼感じたことである。臺南廳長の松木君は余が同窓の松木鼎三郎君の令弟で舊知である。川中事務官の案內で、まづ北白川宮御遺蹟所を見る。さゝやかなる拜殿の後に、薨去當時の御居間が其の儘に保存してある。當時御使用の御寢臺、御椅子、御便器まであつて、そゞろに當年の御不便をしのばしめる。炎熱瘴癘の氣を侵して、征討の事に當らせられ、途中御發病にも御無理をなされ、遂にこゝに御落命になつたのは、實に御痛はしい極みである。日本武尊の御再生と申上げるより外は無い。

臺北融々仁政成(ル)。皇軍到(ル)處湧(ク)二歡聲一。旭光將(レ)被(ラント)臺南地(ノ)。殲(シテ)二彼渠魁(ヲ)一安(ンゼン)二萬姓(ヲ)一。

といふのが、臺南に向はせられた時の御作である。灣裡といふ所から臺南まで今は汽車で一時間であるが、當時は轎に召されて一日路であつたといふ。其の灣裡から御容態が急にお重りになつたといふことである。當時の御事を考へれば、汽車の少し位の遲刻などは彼是いふべき事では無い。御遺蹟所を拜してから、開山神社に參詣する。これは鄭成功を祀つた廟であつたのを領臺後開山神社として縣社に列せられたのである。舊い支那風の廟に日本の〆繩を張つた所は何となく不調和に見えるが、致方が無い。鄭成功のことは日本の演劇にもなつて誰でも知つて居る。其の母たる人は日本人であつたので、日本人の忠義の血がやはり其の體中には流れて居つたのである。社司たる人の好意で鄭成功の書も見た。遒勁な筆力である。祠前の枝の繁つた榕樹は自ら敬虔の念を起さしめる。すべて此の邊榕樹が非常に多い。臺灣の松の木といつて居るさうである。

八　製糖會社

南部は一面の平野で、風光が更に熱國らしくなつて來る。北緯二十三度半の回歸線は嘉義の少し南方に當るので、前にはそこに目標が立ててあつたさうであるが、去年の大暴風雨で壞れてしまつたとの事、來年は又新設せられるさうである。芭蕉の畠、檳榔子の林などは、南方に行つて特に目立つ。鳳梨（パインアップル）などがなつて居るのも見える。見渡す限り米田と甘蔗畠である。水牛、黃牛の水につかつて居るのや、豚の子が步きまはつて居るのが、日本の農家とは違ふ。農家は皆竹林を繞らして墻として居る。暴風を防ぐ爲であらう。所々に高い煙突、大きな煉瓦の建物の見えるのは製糖會社である。其の數は二十以上もあるさうである。砂糖は近年までは外國からの輸入

を仰いで居つたのであるが、今日では最早內地の需要を充し得るばかりでなく、海外へ輸出までするやうになつた。これだけでも大した富源である。北方は御役人、南方は砂糖屋といふのが、臺灣の通り言葉と聞いた。

九　博物館と苗圃

博物館に入つて種々の天產物を見れば如何にも富源の多いのに驚かれる。之と同時に毒蛇の多いのにも驚く。蕃人の風俗の模型、蕃人の衣服什器、蕃人から奪ひ上げた銃器の陳列等が目に立つ。それ〴〵專門の知識で研究したら面白い事が多からう。苗圃は植物園で、無數の花や草が時を得顏に笑み榮えて居る。植物の知識のさつぱり無い身には何が何やら分らず、唯うつくしい、見事で通覽する。隈本君の話に每朝七八人の僚友等とこゝを散步して、こゝで茶を飲むとの事、それは誠に羨しいことと思つた。園內に猿やら、鹿やら、臺灣產の動物も集めてある。アルコホル漬では無い、生きた毒蛇もこゝには居た。

一〇　出　發

十七日に着いて、二十九日に出發。發着の日を併せ數へて十三日間である。何等の觀察も研究も無い。暑いことは暑いが、思つた程では無い。領臺以來今日までに作り上げた代々の總督、長官の骨折、其の他民間の人々の苦心は、實に察するに餘りがある。諸處に銅像があつて、此等の人々の功績を語つて居る。後代の人は永く此等の銅像に對して明治時代の偉績をしのぶであらう。臺北の市街は市區改正が出來て、煉瓦造の店鋪が相並んで居る。學校も皆揃つて居る。唯國民としての娛樂機關の少いことは官民共に困つて居る樣である。博物館は更に新

築中であるが、圖書館の無いのは寂しい。舊知友の見送を受けて、基隆碇泊の備後丸の船客となつたのは七月二十九日の午後であつた。

（大正二年十月「學生」）

山座君

山座圓次郎君は初は上田といふ苗字を名乘つて居た。明治十七年大學豫備門入學以來の友人で、卒業の年も同じである。法科大學では水野內務次官、福原文部次官なども同窓であるから、それ等の人々にお聞きになつた方が尙よく分らう。山座君の青年時代を記憶から喚起せば、非常に快濶な、さうして頭腦の明瞭な勉强家であつたのである。其の頃はハイカラといふ語は無かつたが、今の所謂ハイカラが大嫌で、同級生中でさういふ評判のあつた某氏をどぶの中へ蹴飛ばしたやうな事があつた。酒はその頃から嗜んだやうである。牛込築土八幡の裏の筑前寄宿舍を尋ねた時、竹皮包の煮豆と澤庵で冷酒を馳走になつたこともある。併し粗暴で人に嫌はれたことなどは決して無い。最も快濶な人、俠氣のある人として級中には尊敬された。一見磊落な性質であるが、極めて細心な勉强家で、學校のノートなども綺麗に丁寧に書かれたとおもふ。どの學科もよく出來たので、大學へ入る前の年は全級の首席を占めて居つたのである。大學卒業後永らく英國に居つて歸朝した時は、昔の書生時代とは違つ

て、英國紳士風にキチンと襟飾などを着けたが、唯それだけの相違で依然たる山座君であつた。世間では山座君を唯三國志時代の豪傑のやうに思つて居るが、非常な緻密な頭腦をもつて居る勤勉家であるのである。大凡事業に成功するのには必ず一面に豪放な淸濁併せ呑むの度量がなければならぬと同時に、又細緻な着眼と研究を忘れてはならぬ。余は山座君の性行が此の點に於て成功者たるの資格を備へて居るとおもふ。外交官としては最も適任と信ずる。いつも愉快さうな氣分が眉宇の間に現れて居て、快活な笑聲が人を引付ける力がある。光風霽月一言でいへば男らしい男である。今でも時々同窓會をやるが、山座君が居ないと寂しいやうに感ずる。

（大正二年十月「中央公論」）

羽衣

謡曲の「羽衣」

「われ三保の松原にあがり、浦の景色を眺むる所に、虚空に花降り、音樂聞え、靈香四方に薫ず。これ唯事と思はぬ所に、これなる松に、美しき衣かゝれり。よりて見れば色香妙にして、常の衣にあらず。いかさま取りて歸り、古き人にも見せ、家の寳となさばやと存じ候。「なうその衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ。「こ

れは拾ひたる衣にて候程に取りて歸り候よ。「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべきものにあらず。本の如くに置き給へ。」「そも此の衣の御ぬしとは、さては天人にてましますかや。さもあらば末世の奇特にとゞめ置き、國の寶となすべきなり。衣をかへすことあるまじ。」「悲しやな、羽衣なくては飛行の途も絕え、天上に歸らんことも叶ふまじ。さりとては返したび給へ。

これたれ人も知つてゐる羽衣の曲である。駿州は三保の松原、空も水も一つ色に澄みわたつて、遙かに見やる富士の高根の雪、近くは寄せ返る荒磯の波と天地を青と白に染め分けて居る。いづくよりともなく、一片の白雲のやうに、ひらりとこゝに下り立つたものがある。照る日に輝く薄衣(うすぎぬ)を松が枝に掛けて、清い汀に浴したのは天の少女である。白龍といふこのわたりの漁夫、この薄衣を松の上に見つけて、家に携へ歸らうとする、「それを取られては再び天に上ること叶はず、是非かへし給へ」と歎けば、「天人の舞樂を奏し給はばかへし申すべし」と、こゝに奏づる霓裳羽衣の曲、天の少女は羽衣を得て、天上に歸つて行くといふのがこの曲の概要である。謠曲の文には佛語が加はつて居つて、其の文を見ると、お寺の欄間などに彫つてある天女を連想するが、これは我が太古から傳はつた神話である。しかもそれが方々にあつたのである。

風土記中にも同じやうな話

古い風土記の今日に殘つてゐる文から見ると、近江國と丹後國とに同じ樣な話がある。近江國伊香郡與胡鄕伊香小江(いかをえ)に八人の天つ少女が白い鳥となつて、天から下つて江の南の津に浴した。伊香刀美(いかとみ)といふ男、こは神に相

違なからうと覗つて居たが、竊に白犬をやつて、一人の天女の羽衣を盜ませた。神女之が爲に遂に天上に歸ること能はず、伊香刀美の妻となつて、男女各々二人の子を產んだ。男の名はおみしる、なしとみ。女の名はいせりひめ、なせりひめといつた。

もう一つは丹後國丹波郡郡家西北の隅の方の比治里(ひぢのさと)といふ所がある。この里の比治山の頂に眞井(まなゐ)といふ井があつたが、或時天女八人こゝに來て浴した。わなさ老夫(おきな)、わなさ老婦(おうな)といふ老人夫婦が之を見て、其の一人の羽衣を取隱した。その天女はやむことを得ずして、老夫婦の子となつて、十年程住んだが、其の間に天女は旨酒(うまざけ)を釀し、一杯飲めば萬病立どころに癒るといふので、老夫婦の家は忽ちに富み榮えた。然るに恩知らずの老夫婦は其の後この天女を追出したので、天女は天に歸ることも出來ず、諸處を流浪したといふ話である。白鳥の下つた話は尙常陸風土記にも見えて居つて、其の話に多少の相違はあるが、とにかく餘程ひろく傳播した話らしく見える。謠曲の羽衣は畢竟その美しい古傳說を基礎として作つたものである。

Swan-maiden 式の說話

所が面白いことにはこれは決して日本固有のものではなくして、世界中に弘くひろがつて居る話である。西洋では白鳥卽ちSwanが最も美しい上品な鳥と考へられて居るが、天女がこの白鳥となつて浴して居る中、其の羽を取られて歸れなくなるといふ同じ筋の話が澤山ある。よつて傳說學者は之を Swan-maiden 式の說話と名付けて居るのである。所々國々によつて、少しづつ違ふが大體の筋は變らぬのである。瑞典では若い獵師が三つの白

鳥が羽を棄てて海中に浴するのを見付けた。其の中の一つの羽衣を隱して置くと、他の二つと一緒に歸れぬので、遂に其の獵師の妻となつたといふ。露西亞のミカイロ、イワノウイツチといふ男は海邊を逍遙して、水中に浴して居る一羽の白鳥を見た。矢を以て射取らうとすると、やがて美しい女となつて現れた。

白鳥ばかりでなく外の鳥の話になつて居るのもある。エステルボツテンのフインランド人の話では、死んだ父親が三人の息子の夢枕に立つて、夜海邊へ行つて雁を見よと告げる。二人は闇夜を恐れて行かなかつたが、一番末の弟は夜中張番をして居る。夜明方に三羽の雁が來て皆其の羽を脫いで美しい少女となつて海中に浴した。其の中の最も美しい一人の羽衣を隱して渡さぬので、少女は遂に其の男の妻となつた。雁で無くて、家鴨と傳へられて居る所もあるが、又或地方では鳩になつて居るのもある。

地續きの亞細亞、歐羅巴ばかりでなく、南亞米利加のギヤナにも同じ話がある。アラワツクスといふ土人の話に、一人の獵師が美しい鳥をつかまへた。これは天上に國を有する王樣アヌアニマの娘で、やがて人間の形になつて、その獵師と結婚したといふ。これには尙長い話がある。エスキモーではその鳥が Sea-fowl になつて居る。

世界に遍在する說話が太古からある

ポメラニヤの話に次のやうなのがある。獵夫が森の中をたどつて沼の脇へ出ると、一人の少女が浴して居るのを見た。多分近處の村から來たのと考へて、いたづらに其の着物を隱した。少女は水から上つて是非返してくれといふのを拒絕して、遂に其の少女を妻とした。其の着物は錠をおろして箪笥の中へ入れておいたが、夫の不在

中妻は其の姑に向つて是非其の着物を見せてくれといふ。姑がそれを出して見せると、忽ちそれを持つて見えなくなつてしまつた。夫は歸宅して妻の行方を尋ねるとて、これから色々の冒険譚があるのである。

或地方になると鳥ではなくして獸になつて居るのもある。海豹が毛衣を脫いで浴して居る話もある。やはり同様に人の妻となつて子供まで產むが、子供が何の氣もなく其の毛皮を母に見せると、母は忽ち本の海豹になつて海に躍入るなどといふのもある。

白鳥が雁や鳩や色々の鳥になり、果ては獸にまで變つて居るが、其の筋道は全く同じである。これは其の國の風土動植物の差から起つて來るのである。謠曲の羽衣には鳥の事はないが、前に擧げた近江、丹後、常陸等の風土記のは皆白い鳥である。天から少女が下つたといふ話には天武天皇が吉野の瀧の宮にお出でになつて、唯一人琴を彈じていらせられると、雲の中で少女が袖を振つて踊つたのを御覽ぜられた事がある。これがそも〳〵五節の舞といふものの始であるが、つまりは同種類の話である。かういふ世界一般に擴がつた話が太古からあるといふことは面白い事では無いか。

文學上の影響は少い

太古からあつた神話が文學にはいつたのは、日本では甚だ少い。むしろ印度や支那から傳來したものが多く、敍事詩にも謠曲にも歌はれた。和歌などは三十一文字故、尚更かういふ古傳說を入れにくい。かの百人一首の

天つ風雲のかよひぢ吹きとぢよ少女の姿しばしとゞめん

といふのは五節の舞姬を詠んだのである。

春の着る霞や空に重ぬらん天つ少女の天の羽衣

など天の羽衣を詠んだ歌も少しはあるが、天の羽衣の歌は日本の古傳說といふよりも佛敎の方の天人の思想から來たのが多い。

君が代は天の羽衣まれにきて撫づとも盡きぬ巖なるらん

佛敎の方で刧といふ長い時間を說明するに、四十里四方の巖があつて、三年に一度梵天から下りて來て、三銖の衣でこの巖を撫でる。さうしてその巖が全く撫で盡される時間を一刧といふのである。此の歌は卽ち右の意で、「君が代は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで」と言つたのと同じく、むやみに長い時間を意味するのである。

動きなき巖のはても君ぞ見ん少女の袖の撫で盡すまで

といふ歌も、全く同意同工である。竹取物語のかぐや姬の上天する時にも天の羽衣を着ることがあり、七夕姬の歌にも天の羽衣と詠んだのがいくつもある。つまりこれ等は上代思想も、支那や印度から來た思想も皆混同して唯何となく天人の着る着物といふ思想になつたので、羽衣を奪はれて天に上れぬといふ話の筋を歌つたものでは無い。其の話は卽ち謠曲の羽衣に至つて始めてはつきりとうたはれたのである。併しこれも佛說などのと交つてからのことで、却つて昔の純粹な白い鳥が下りて來るといふ話では無くなつて居る。井上哲次郎博士は曾て「帝

國文學」の誌上に比治山の歌といふ長篇を掲げて此の古傳說を詠まれた事があつたが、これも完結にならずに濟んだ。羽衣が謠曲になつてからは繪にもよく畫くが、昨年の文部省展覽會には洋畫になつてあらはれた。

（大正三年一月「學生」）

和詩

風俗文選に辭、賦、譜、說、解、記、紀行、序、箴、銘、誄、歌、文、傳、碑、辯、表、論、頌、讃、書などと、むやみに漢文をまねしたのは、種々の點から見て興味の多いことである。俳文そのものの性質が別途に發達して、六朝駢儷文に似よつたものとなつたのはまことに奇とすべきことであるが、よく〱考へて見れば、連歌の發達からして、實は駢儷文に起因したとも考へられるのである。さういふ議論はさておき、かくの如き戲文とともに支那の詩の通りに、日本語を使つて見ようといふ一種の計畫も亦甚だ面白く感ぜられる。一には滑稽洒脫、一には和歌の不甲斐ない有樣の反動、これ等も文學史上からは見逃しに出來ぬことである。去來の鼠の賦などに韻を蹈んだのは戲に相違ないが、戲以外の意味、試みといふことも考へなければならぬ。かういふ時代に、當時大いに流行した漢詩の形で歌を作つた和詩といふものも亦一顧する價値がある。和歌に對する狂歌、漢詩に對す

る狂詩があつた時代に於て、和詩の試みのあつたのも當然である。和漢、漢和などいふものも古くからあつたが、こゝに玄武老人和詩集といふ一卷の書がある。五言、七言の絕句、律詩、全く漢詩の形式に國語を並べた所が面白い。今左に其の一例を示す。

五言絕句（題影法師）

影法師影法師　立ちつゐつ寢つ起きつ
すべて我に從へど　留守居には賴まれず

五五の句を四つ並べて第二句と第四句に韻を蹈んだのである。

七言絕句（旅中の老懷）

旅にあそべは旅の氣になりて　旅に李白が跡をこそ追はね
月を雪かと詠めまどへば　老いにけらしとをかし我さへ

七七の四句で、第一句、第二句、第三句に押韻したのである。

五言律（五月雨）

花に曇るとはかはり　ながめあく梅雨空の
鳥はだまる竹の奥　梅はいろむ時得がほ
明けて來る窓のかげ　くれて行く軒のおと

たかはしとむかひゐる　人と咄すこゝちかも

隔句押韻の上、前聯後聯の對句も詩の通りである。

尙七言律もある。

七言律　（冬籠）

芋に團子の月見さへ過ぎて　千々に物こそ悲しともよみつ

書物にひろく道を踏まねば　詩歌に近き友ものぞかず

立つたり居たり口につかはれて　寢るも覺むるも目にはかたれぬ

窓の穴から空を眺むれば　我が身一つの冬にぞありける

全く漢詩に眞似たといふことは馬鹿らしいけれど、其の馬鹿らしい所に面白味がある。句末の韻礎は一向に響かないが、對句はなか／＼面白い。五五や七七に語を連ねた所に新しい試みがある。七五、七五とばかりに傾いて居つた時代に、この新しい句形を試みたのは、現今の新體詩人の先驅者と見てもよろしい。日本人には珍糞漢の平仄を合せて詩を作るのに比べて見れば、この方がまだ餘程興味のある事業であつた。（大正三年一月「心の花」）

國定讀本の文章に就いて

序言

維新以後小學讀本も度々變つた。國定讀本となつてからも、今度は二度目である。文章の上から見ても、だんだんと變遷が無いでもない。現行讀本の編纂者といふ立場から、今の讀本の文章に就いての雜談を述べる。

一 口語文と文語文

讀本の文體は大體から見て、口語文、文語文の二つに別けることが出來る。これは明治二十年の文部省編纂の讀本以來一般に蹈襲せられたやり方で、國定制度以前の民間讀本も皆さうであつた。つまり最初は口語で練習して、それから文語に進んで行かうといふのである。これは西洋諸國には無いことで、日本の國語教育に於ての一つの特色で、現今の事情上やむを得ない事柄である。それで今回も尋常三年前期までは全くの口語文で、後期からそろ〳〵文語文を加へ、高年級に進むに隨つて口語文の數を少くしてある。それで第一回の國定讀本に比較して、今度の方が口語文の割合が少いといふので、或評家は文部省の意思は口語文よりもむしろ文語文を重んずるのであらうと論じた。余は編纂者の一人として、決してさういふ譯では無いといひたい。日本將來の文が口語文

でなければならぬことは最早何人も疑はぬ所であるし、近來の口語文の發達も亦著しいことである。國民教育としては最も口語文の教授に力を盡して、兒童をして自由自在に其の意思を發表せしめるやうにするのが、非常な便益でもあり、必要な事であり、延いては國家將來の利益であるのである。今更口語文を排斥して文語文をのみ奬勵するといふやうな愚策を取るものは無い。文語文は早晩口語文に其の地歩を譲らねばならぬものである。然るに今日社會の實際では、法律文を始め、一般の著書も新聞もまだ多く文語文を用ひてゐる。之を讀んで理解させるには、餘程よく之に練習させなければならぬ。それには紙數の少い我が國の小學讀本ではなか〳〵骨の折れることである。それ故高年級では、やむを得ず、出來るだけ多く文語文を課して、之に習熟させようといふ考から來たので、決して口語よりも文語を重んじたといふ譯では無い。舊讀本よりも割合に多いといふので、直ちに文語文を重んずる方針だと論ずるのは、恰も漢字が增加したのを見て、直ちに漢字奬勵と考へると同じやうな譯である。漢字の舊讀本より增加したのも、實際の事情に鑑みて、舊讀本の漢字ではあまりに少いから、多少殖したといふまでで、漢字の負擔は成るべく少くしたいといふ精神は決して變つたのでは無い。少くとも余一人の考としては、文語文は讀本だけで敎へることとして、他の地理や歷史や算術や理科の書物は皆口語體にしたいとおもふのが山々である。卽ち綴り方や話し方の練習に於て、口語文を主眼とすべきはいふまでもないことで、高年級に進んでも此の精神は一貫してよからうとおもふ。文語文の語句や形式によつて、發達して行く小國民の思想に、一種の形式を敎へ込む程有害なことは恐らくはあるまいと信ずるのである。文語文を教へるに際しても、そ

の邊の手心は常に忘れてはならぬ事と考へる。

二　口語文の二體

口語文といふ中にも凡そ二種類のあることを知らねばならぬ。一は談話體の口語で、一は筆述體の口語である。我々の通常談話に使用する形（大抵はますを附加へる）のが談話體で、演說や書物などに用ひてあるものが筆述體である。尤も其の間に、口語と文語といふやうな大きな差別のあるものでは無いが、用ひる語彙の上にも、又其の述語となる詞の形式の上にも多少の相違があるのである。例へば

これは甚だ立派である

とは筆述體でいふことで、

これはまことに美しうございます

といふのが談話體である。話し方、綴り方の練習等に於ては、この二つの區別を常に眼中に置いて居なければならぬ。第一學年、第二學年、第三學年の前半期までは、韻文を除いてはすべて談話體の口語を用ひたので、それから上になつての口語文には、いはゆる筆述體のものが多い。第五卷の瓜といふ課が筆述體口語文の最初のものといつてよろしい。

三　口語文の困難

口語文といつても、我が國にはまだ適當な標準とすべきものが無い。殊に談話體に於て其の困難を感ずる。こ

れは我が國が從來の封建制度から離れて日が尙淺く、あまりに階級の區別が多い爲に、尊卑貴賤によつて詞遣が種々雜多であるのが一つの原因である。例へば父母に對する稱呼にしても「おもうさま」「おたたさま」といふのは姑く措き、「おとうさま、おかあさま」「おとうさん、おかあさん」「おとつさん、おつかさん」「とつさん、かあさん」「とつちやん、かあちやん」「ちやん、おつかあ」など種々雜多である。それに對しての形容詞、動詞も皆それぞ〵に違ふので、行くといふ詞に對しても「お出でになります」「いらつしやいます」「いらつしやる」「行かれます」「行きます」など數へられぬ程である。その中でどれを讀本に取つて行かうかといふことが問題になる。父母の稱呼に關しては「おとうさん、おかあさん」を採用することにしたが、さてさうなると、どんな低い階級の人の容子を寫す時にも、この名稱を用ひねばならぬ。貧しい農家の子供などが實際使つて居らぬ稱呼を用ひることになる。隨つて不自然に聞えることが多くなる。一方貴族社會からは讀本の詞遣が汚過ぎるといはれ、一方下層社會の方には丁寧過ぎるといふやうな有樣になるのはやむを得ない事柄である。これ等も亦西洋の讀本編纂者の全く知らない困難である。加之日本の口語には男女の間に餘程の區別があつて、男の子の詞遣と女の子の詞遣が大いに違ふ。これもその儘では讀本には出し難い。要するに實際の談話語そのものを讀本に出すことの出來ない場合が頗る多いのである。小說ならば譯の無いことが、讀本には書けないことがある。これも今日の事情でやむを得ない事柄である。讀本の文が生氣を失ふといふ所以はこゝに一の原因があるのである。又方言の種種に分れて居ることは統一しなければならぬが、これは大體を、敎育ある東京人の言語と定めたばかりで、これ

にも確乎たる標準は立てられない。第三年級以下の談話體に於ては殊になるべく東京語を採つたのであるが、中には多少の地方語を交へた。例へば火ケシガトンデュク、犬ガトンデクルなどのトンデは東京人は使はないが、使つてもわるい詞では無い。東京語でも「しなくつちや」「さうすりやあ」の類の省かれ約つた詞は一切用ひないのである。一概に東京語といつても選擇をしなければならぬ。それ等はやはり東京の方言と見做したのである。綴り方等を教へるに際してはこれ等の點も注意して置かなければならず、話し方の教授には多少の斟酌をしなければならぬ。

四　口語文と方言

口語といふことに就いては隨分誤解して居る人がある。口語は口でいふ言葉、それ故口でいふ通りに書けば、卽ち口語文が出來ると思つて居る人がある。それは大きな間違である。口語と文語の差別はその文法が今の語則に據るのと、昔の語則に據るのとの區別から生ずるので、お互に喋舌る通りの言葉が直ちに口語文といふわけでは無い。我等の日常の談話は今の語則に據つて居るのであるから、大體に於てはそれに相違ないが、前にも言つた通り、口語文にも二體があつて、口語文といふものは、我等の談話よりはもう一層範圍が廣い。加之我等の今日の言葉は多くはいくらかの方言を交へて居るので、餘程注意しないと、方言文になつてしまふ。殊に各地方に生活して居る人は餘程注意しなければならぬ。生れてから其の地方に住んで、其の方言を話して居る人には、方言といふことに氣が附かぬ。知らず識らず方言の儘を書いて、口語文だと思つて居るやうなことが多い。まして

兒童などに方言、非方言の區別が分る譯が無い。兒童に綴り方を書かせる上に於て、教師が常に注意しなければならぬのは此の點である。さりとて、それも程度問題で、唯方言匡正ばかりやかましく言つては、思想が伸びない。綴り方教授の第一義は思想をおもふ儘に書かせるのにあるから、あまり方言匡正をやかましく言つて、思想を萎燈させてはならぬ。方言の匡正はむしろ談話の際に多く行ふがよからうとおもふ。併し綴り方に於ても、常に注意しなければならぬのである。

五　上方詞と東國詞

日本諸國の方言は各藩列立の後を承けて種々雜多といふ有樣であるが、大別すれば、上方詞、東國詞の二つになる。濱松あたりを分界として、西の方は關西語系、東の方は關東語系に屬する。今の談話語は東京語を標準と立てるから、讀本の三年までの處では、まづ東京語である。併し例の敍述體の文になると、幾分か西國語を交へて來る。打消のナイは關東語で、ヌ（ン）は關西語であるが、敍述體の口語文になると、打消のヌを用ひることが多い。「しなければならない」は東語で、「せねばならぬ」は西語である。これ等も上級には兩方採用してある。但し上方語の音便に「買つて」を「買うて」といふやうなのは用ひない。命令法は西語では、「見よ」「見い」で、東語は「見ろ」であるが、これはよを用ひて、ろは採らない。之を要するに、正確な標準語がまだ極つて居らぬので、大體は從來國語調査會などで調査した事柄等を標準として、讀本は書いたのである。東京語を標準とするといつても、純粹の東京語ばかりでは無いのである。幾分か上方語の系統も加味されて居るのである。さうして

それは例の敍述體の口語文には殊に多いのである。明治二十年の文部省讀本とも、又第一回の國定讀本とも、この點には多少相違があるのである。

六　文語文の口語譯

文語文を說明して聞かせるのが、國語教授の方面から見ては、最も大切なことである。之を教師が方言でやつてのけてしまへば、其の效果たるや、甚だ心細い事である。一言一句、適切に口語に合ふやうに、又口語を文語に譯する時にも、きちんと文語になるやうに、平生工夫して置いて、明確に言分けることの出來ることが必要である。「スベシ」「セザルベカラズ」「セザルベケンヤ」は口語ではどういふかといふことを、平常から考へて置かなければならぬ。さうして新しい言廻しの出て來た時に、確に敎へ込まなければならぬ。口語、文語、卽ち文法を異にした二體の文を敎へることが、今日の國語教育に於て必要である以上、この點の注意は餘程必要の事である。第六卷が口語から文語にはいる場處であるので、六卷の文語文は皆簡單な句法のものを採つてある。又諺の一課にはわざと口語のと文語のと交ぜて擧げてある。初から注意すればそんなにむづかしい事ではあるまいとおもふ。兒童をして文語文を口語文に譯させる練習は絕えず必要な事であらう。

七　候　文

候文などもいつか廢止すべきものである。否直ぐにも廢したいものである。併しこれも現今の社會には尙用ひられて居るといふので、讀本には載せることになつて居る。卽ち九卷以後に每卷一二文づつ、高等科卷三まで出

て居る。口語文、文語文の外に、又此の一體を教へなければならぬことは、實に厄介なことといはなければならぬ。併しそれもやむことを得ないとして、これも口語文に對照して敎へたらば、格別面倒はあるまいかとおもふ。候は口語のますに最もよく似た語であるから、其の心持で教へたらよからうとおもふ。

實をいへば、候文などは讀本に擧げなくても、卒業の後多少の練習を經るか、世故に熟すれば、讀めも、書けもするやうになるものと信ずる。それ故余は讀本に擧げなくてもよいといふ論者である。余一人の意見としては、讀本に出さず、むしろ實際の手紙を兒童に示して、讀ませて見たらどうかとおもふのである。其の方が却つて進歩は早くあるまいかとおもふのである。

八　いはゆる普通文

普通文といふことは何時頃誰の言出したことか記憶せぬが、一般に用ひられて居る名稱で、雅文でもなく漢文でも無い通常の文といふ意味に用ひられて居る。一時は假名交り文と言つたこともある。これは漢文に對しての名稱である。然るに、一派の論者は、假名こそ日本の文學であるのに、假名交り文とは怪しからぬ。今日の文は漢字を以て、主要な名詞や動詞やすべてを寫して居るので、テニハだけを假名であらはして居るもの故、どう考へても漢字に假名を交へたもの、即ち假名交り文に相違ないのである。併しこの名稱もあまり文字の上に重きを置いたので、目に見る方から附け、漢文に對して附けたので、近頃はあまり用ひなくなつた。それで普通文といふ名稱は今でも行

はれて居るが、さてこの普通文體といふものも、誠に標準が立てにくい。一人の先生に相談すれば、「左樣まづ今の新聞論說位の所だらう」と答へようし、又別の先生に問ふと、「忿軒や鳩巢あたりの文章が標準とならう」など と答へるであらう。併し新聞論說にも種々の文體があり、忿軒や鳩巢の文も、新聞論說とはひとしなみに置くことは出來ぬ。唯普通文といふ名稱の下に大抵一致して居ることは大凡左の事柄であらう。

一、純漢文でないこと

一、擬古文卽ち雅文でないこと

一、口語文でないこと

一、大體は漢文讀下しの句調であること

かういふ漠然たる條件の下に、自然に漢文を分り易く書いたといふやうなものが、普通文と稱へられ、それが學校でも敎へられるやうになつたのである。かういふ漠然たるもの故、書く人の心持によつて、種々の文體の差を生ずる。漢文直譯風の勝つこともあるし、雅文詞の餘計雜ることもあるし、或は西洋文の直譯を多少交へる人もある。又俳文の筆致を加味する人もある。誠に種々雜多である。明治二十年以前のいはゆる普通文と、二十年以後のいはゆる普通文とは、大體に於ても、いつの間にか大分變化をして居る。前には一層漢文調であつたものが、今は多く國文調になつて來た。昔の普通文には時や敬語の如きは大抵用ひなかつたが、今日は大抵之を用ひるやうになつた。昔の中學生の文と今の中學生の文には非常な相違がある。法律論や政治論には尙昔の普通文の

面影が殘つて居るが、紀行や、敍事や、其の他は餘程變つて來た。をかしいのは、卒業式の祝辭や弔文などに昔の儘の普通文が殘つて居ることであるが、これも大分近頃は變つて來る傾向が見える。かくしていはゆる普通文といふものが、絶えず變遷して居るので、普通文卽ち時文といふものの標準は殆ど立てられぬのである。こゝに於て國文中學讀本などには、隨分種々雜多の文體が集められて居る。これは今日の日本の情態として、やむを得ない事柄であらう。加之單にいはゆる普通文に通曉するのみならず、古文學の味をも感得させようといふのには、更に古文體にも接しさせる必要がある。それ故、國定讀本の文體に於ても、大體を今頃の詩文といふものに置いて、さうして稍古い形までも一斑だけは知らせるといふ考を持つて居るのである。初年級の分には其の用意は無いが、五學年以上あたりには幾分かその考が加へてある。例へば兒島高德や齋藤實盛の課などは大體に於て軍記物語に據つたのである。かういふことは高等科の讀本に至つては殊に著しいので、謠曲文の書直しや、藩翰譜の書直しなども加つて居る。高等三年用に至つては各家の特色を知らせるために、わざと各作家の名を割註にして課末に添へたのである。卽ち中等讀本と全く同じやうになつて居る。敎授にあたられる諸君はこの邊の編纂者の心持をよく知つて置いて貰ひたいとおもふ。

九　文の種類

文には敍事文、記事文、議論文等の區別のあることはいふまでもないが、それを非常に明瞭に辨別するといふことは實際に於てむづかしい。敍事の中に議論の加つて來ることもあるし、敍事の中に記事の交ることもある。

近頃出て居る教師用參考書を見ると、一切の讀本の課をこの分類法によつて分類して居るのがある。教師の參考としては、或はよいかも知れぬが、もし兒童に之を授けるのなら、無用ではあるまいかとおもふ。編纂者の心持では最初からそんな分類を眼中に置いて居たのでは無い。誰が文章を書く時でも、そんな事を考へては居まいとおもふ。文章軌範的に序記論說を書いたり、論じたりすることは今日では如何であらうか。讀本を教授するに方つて、その方にあまり力の入り過ぎるのはどうであらうかと領かれるのである。

一〇　模範文

讀本の文を模範文として、其の構造を色々に解剖したり、組立てたりすることに工夫を凝す人もあるが、これも無益なことではあるまいか。無益どころか、或意味に於ては有害であらうかともおもふ。文の面白味は解剖しないで、自然に感得させる所にあるのである。科學的に分析說明すると同時に、文學的趣味は失はれてしまふのである。要するに知のはたらきで、的確に、理窟づめで教へ込まうといふのは、文學教授の上から見て、決して得策では無いのである。加之讀本にある文章を模範文として、その形式によつて文を綴らせるなどといふことは、いはゆる角を矯めて牛を殺すといふ類で、自然に發達すべき兒童の能力を墅へ附けるものである。これは國家將來の爲ゆゝしい大事件で、かういふ教育法の下に育てられた少國民から、大文豪の生れ來ることは望まれない。教授法の煩瑣な形式に拘つて教育の本義を忘れてはならぬ。なるべく形式を棄てて自然の發達を助長させねばならぬのである。

（大正三年一月―七月「文章研究錄」）

な

「な」といふ語に就いて、少しくお話をして見よう。

菜、魚、ともに、古語では「な」と言つたので、卽ち食物の總稱であつたと言つてもよろしい。今では菜ばかり、「な」と唱へて、魚の方は單獨に「な」とは言はないが、それでも、「さかな」といふ語が殘つてゐる。「さかな」は、酒を飮むときに食ふ食物といふ意味であらう。平生の茶漬飯には魚を用ひず、酒でも飮む御馳走の時には、必ず魚が出る故、「さかな」といふ語が出來たのかとおもふ。鯨のことを「いさな」(勇魚)といつたのも古語である。魚彥(なひこ)、魚足(なたり)など、人名には古語の「な」が殘つてゐる。豐後國には魚返瀑(ながへしのたき)といふものがある。また伊豆、駿河邊の海岸で、魚の多く寄せて來るのを「なぶら」といふ由。これは魚群の義であるといふ。魚を賣る家を「なや」といふのも、現に用ひる語である。

むかしの土製の瓶を、「へ」(瓮)といつたが、「なべ」は卽ち食物を煮る「へ」の意味である。「鍋」といふ漢字から見ると一つの單純な語のやうに見えるけれども、實は、「な」と「へ」との二つの語が結び付いて、一つの語になつたものなのである。

この「な」を動詞にはたらかせたのが、「舐」「嘗」などの漢字であらはす「なむ」（口語なめる）といふ詞なのである。しかし、神嘗、新嘗をカンナメ、ニヒナメと訓むに就いて、これをナメル意味に解するのは間違である。これは神の饗、新の饗の約である。大嘗會の嘗もこれと同じことで、古くは「オホニエ」「オホンベ」とも言つたのである。嘗は支那の秋祭の名である。

（大正三年五月「學生」）

萬葉集卷五に就いて

萬葉集卷五の初にある愛河波浪云々の詩及び日本挽歌一首並短歌を、鹿持翁は山上憶良が其の妻を悼む歌と見られて、神龜五年六月二十三日とある次の行へ、「筑前守山上臣憶良悲傷亡妻詩一首並序」といふ標題の落ちたものと斷言せられた。此の日本挽歌が憶良の歌であることは、余にも異議はないが、これは自分の妻を悼んだのでは無くして、旅人卿の妻の死を悼んだものであらうと思ふ。其の最も強い理由は、同書卷三の挽歌に、

　　神龜五年戊辰太宰帥大伴卿思戀故人卿（歌歟）三首

　愛人纒而師敷細之吾手枕乎纒人將有哉

右一首別去而經數旬作歌

應還時者成來京師爾而誰手本乎可吾將枕
在京師荒有家爾一宿者益旅而可辛苦

右二首臨近向京之時作歌

とあるのがある。この三首の歌は、疑もなく旅人卿が最愛の人を慕うて歌はれたので、第一首は別れて數旬の後、次の二首はずつと後旅人卿が上京する時に詠まれたのである。卽ち天平二年大納言に任ぜられて歸京せられようとした時の作である。この最愛の人は卽ち大伴郎女で、それは卷八、石上堅魚朝臣に、

霍公鳥來鳴令響宇乃花能共也來之登問麻思物乎

とある左註に、

右神龜五年戊辰太宰帥大伴卿之妻大伴郎女遇病長逝焉　于時勅使式部大輔石上朝臣堅魚遣太宰府弔喪並賜物色（也）　其事既畢驛使乃（及歟）府諸卿大夫等共登記夷城而望遊之日乃作此歌

とあり、旅人卿は、

橘之花散里乃霍公鳥片戀爲乍鳴日四曾多寸

と詠まれたので分る。

神龜五年は旅人卿が六十四歲の時、卽ち筑紫在任中、晩年になつて其の妻を失はれたのである。其の落膽はさこそと察せられる。かくて二年の後上京せられて間もなく薨去されたのである。郎女の死なれたのは春の末であ

つたらうと鹿持翁は言はれて居るが、此の堅魚の歌に郭公を引合に出したのは、巻五の開巻第一にある大伴卿報凶問歌の左に神龜五年六月二十三日とあるのと比べて、勅使の筑紫に着いたのが、後れたのである。それはとにかく、前に擧げた三の巻、八の巻の歌、又この五の巻の開巻の歌も大伴卿の妻を喪はれた事實を語るもので、此の事は鹿持翁も氣が附かれて居るのに、其の次の日本挽歌を、なぜ此の時の歌とは氣が附かれなかつたのであらう。余の考では、此の長歌及び短歌こそ、憶良が郎女の死を悲しんで、旅人卿に奉つたものと思ふのである。この歌の中に、「慕ひ來まして」「家さかりいます」など敬語の存在するのは、第一の證據である。鹿持翁は「こやす」といふ語の敬語なるを說いた序に、自らの妻の上に敬語を用ひるのは普通の事で、それを訝るのは今の世の俗意だと說かれたが、これは隨分苦しい說明である。全く之を憶良の我が妻を悼んだ歌と見られた先入の誤から、さうなつたのである。短歌では憶良が旅人卿の積になつて作つたのを察せられなかつた誤である。「妹が見し楝の花は散りぬべし」といふ歌から察すると、五月頃作られた歌だらうと契沖は言つたが、これから考へると大伴郎女の死は多分五月頃であつたに相違ない。さうすれば勅使の來た六月もよく合點せられる。春の末では少し遲いやうである。そこで此の日本挽歌の左註に、

神龜五年七月二十一日筑前國守山上憶良上

とあるのは、憶良が此の歌を旅人卿に奉つた時に書いた其の儘で傳はつて居ることが分る。「筑前守云々」と標題を附けるといふ鹿持翁の說は全く無意味な事である。此の誤は昔から人が氣が附かなかつたので鹿持翁のみでは

無いが、翁が最近の大註釋家ゆゑ、特に翁の說を引いて、其の誤を正したのである。

さて此の「山上憶良上」と書いた事に着目すると、卷五の性質が分るやうに思ふのである。かういふ書方は「憶良誠惶頓首謹啓」「筑前國司山上憶良謹上」など、卷中諸處に見えて、貧窮問答歌の下にも「山上憶良頓首謹上」と書いてある。これから察すると、これ等の歌は皆憶良が太宰府の長官たる旅人に奉つた儘の形で傳へられたのであらうと思ふ。言換へて見れば、卷五は旅人卿の家に傳はつたもので、憶良の歌は奉つた儘の體裁で、其の儘に卷かれてあつたか、或は書寫されてあつたものであらうと考へる。謹上や頓首などと書かない分でも「筑前國司守山上憶良敬和爲熊凝述其志歌六首並序」などと大分鄭重な辭令になつて居るのがある。これ等は皆長官に見せる爲に謹んで書いたものだらうとおもふ。松浦河贈答歌には下官などいふ語もある。憶良は筑前守で、かねて學者といふ評判もある所から、時々歌を見せよなどいふ旅人卿の言付もあつたかも知れず、憶良も晚年田舍に住つて居る故、旅人卿に見て貰ふのを喜んで居たのかも知れない。とにかく兩人の間に風雅の交際があつたので、憶良が時々奉つた歌が其の儘に旅人卿の家に保存せられて居つたものだらうと信ずるのである。それが外の人のよりも多いから、卷五は憶良の家集といふ觀を呈したのである。尤も天平五年の好去好來の歌などは旅人薨後のものであるが、これは後に書加へられたのであらう。或は家持卿が書加へたのかも知れぬ。家持卿と萬葉集との關係、萬葉集卷一から「山上憶良類聚歌林曰」などある事情、それ等を察すれば、憶良と家持、隨つて憶良と萬葉集との關係も何等かの絲がつながつて居る事は疑ない。

要するに、萬葉集巻五は旅人卿の手許で、色々な歌を書込んでおいた一巻に相違ない。それ故帥自身の歌も巻頭のを始として所々にあり、梅花歌三十二首の序に「萃于帥老之宅」などあるのは、旅人卿が自分からいふ口調で、これ等は旅人卿の書いて置いたものが交つたのである。又「淡等謹狀」と書いたのなどもそれである。面白いのは松浦河贈答歌で、「下官」といふ詞もあつて憶良らしいが、其の後人追和の詩の下に「都帥老」とあることである。卽ち旅人が附記したのである。藤原房前との應答なども、旅人卿の家に憶良から奉つた歌と一所になつて居つたのであらう。さうしてこれが萬葉集二十巻中の一巻となつて傳はつたのであらう。尙憶良の歌が家持の歌などと同じく、全く音韻的に卽ち一音一字で書かれたことも注意すべき點で、これは憶良が旅人卿に見せるので、成るべく讀違などの無い様に丁寧に書いたものかとも察せられる。

（大正四年三月「心の花」）

和歌と近古小說

こゝに和歌と近古小說といふ題を出して置きましたが、近古と申しますのは、鎌倉時代、足利時代を總稱して申すのでございまして、德川時代は入りませぬ。又平安朝時代も除くのであります。つまり專ら鎌倉時代、足利時代に於ける和歌と小說との關係に就いて、少しくお話をして見たいと思ふのであります。

一體和歌と申しますものは、日本文學を經緯に貫いて居るものでありまして、三十一文字の歌は、日本の極く古い時代から今日に至る迄連綿として傳はつて居り、さうして何れの時代の文藝を見ましても、和歌が必ず其の根柢をなして居るかと思ひます。通俗の淨瑠璃のやうなものまでも、和歌が其の根本となつて居るといふことは、私が申上げる迄もなく御承知のことと存じます。又平安朝時代の文學、即ち最初の純國文學も、實は歌が根本となつて居りますので、日本文學は和歌が源泉となつて發達したと言つても差支へないと思ひます。「伊勢物語」の如く歌の由緒を書いたやうなものがだん／＼發達して、終には色々な事件を綴り合せ、結構を付けるやうになつたのが即ち「源氏物語」「宇津保物語」のやうな小說物語であります。又多くの歌の由來を自分の懷舊談に列ねたのが「和泉式部日記」のやうな日記類であります。又「枕草子」の如き隨筆も、歌人が天地萬物を觀察したもので、半ばは日記もまざつて居り、和歌とは密接に結び付いて居るものであります。

されば此の平安朝時代の文學を模倣した所の近古文學、即ち鎌倉足利時代にあらはれた小說が和歌に關係のあるといふことは、申すまでもないことであります。近古の小說と申しましても、色々の種類がありまして、平安朝時代の物語に模倣して、其の直系に屬するものがあります。例へば「苔の衣」「岩淸水物語」「兵部卿物語」の如きものであります。又平安朝時代には見えない英雄豪傑の武勇談、戰爭談、例へば「義經記」「曾我物語」といふやうな題材で、「辨慶物語」だとか「酒顚童子」「富士の人穴草子」などといふやうな、武勇がかつた小說は此の時代になつて初めて出たのであります。それから、これも平安朝時代にはなかつたもので、子供の話を本にし

た「一寸法師」「物臭太郎」「浦島太郎」「福富草子」などといふものも此の時代に初めて出たのであります。又同じ子供の話でも、動物を材料にして作つた寓話もあります。例へば「狐の草子」「木幡狐」などといふやうな類であります。尙又、本地物と言つて、神佛の由來、緣起等を書いたものも此の時代に多く出來て居ります。「七夕の由來」「嚴島の本地」「梵天國」「毘沙門の本地」の類がそれであります。大體に於て此の時代の文學は、平安朝時代のものよりは、餘程劣つて居ります。もとより「源氏物語」のやうな立派なものはありませぬ。所謂武家時代で、學問の方は餘り發達して居らない時でありますから、槪して劣つて居りますが、其の代り空想は却つて廣くなつて居ります。眞實ではなくして、夢幻に遊び、宗敎に入つて居る所が多いので、其の幼稚な點に却つて面白いふしもあります。

さて此の近古時代の種々の小說を總括して申しますれば、一面に於ては和歌が其の根柢をなし、一面に於ては佛敎が其の根柢をなして居るのであります。卽ち歌學と佛學との上に立つて居るのであります。到る處「古今」以下の歌を引歌にするとか、「古今集」の序文の講釋をするとかいふやうなことの一方には佛敎の說法が入つて居る。佛法の方は無論坊主が知つて居るが、朝廷のこと、日本のことに就いては歌學を學んだ人(主に公家)でなければ分らぬ。そこで其の歌學と佛法とが結び付いて近古文學といふものが成立つたのであります。さうして歌學は有職故實といふ方面と結び付いて、尙古の敎訓をなし、佛法は道德の方面からの敎訓の意義をなして居りますので、言換へれば一方は日本固有の文明を承けたものであり、一方は外來の知識を入れたものであります。さ

うして此の歌學と佛法とが融和して、佛道卽ち歌道、佛道を學ぶのも、歌學を學ぶのも結局同じだといふ風にも考へられたのであります。さうして巧に歌を詠み、深く佛法に通じた人が、此の時代の理想的人物に相違なかつたのであります。小野小町を絕世の美人といひ、在原業平を日本一の美男であるといふやうにいつたのも、「古今集」の序から來て居るのであります。

それ故先刻申しました武勇談にせよ、或は「物臭太郎」のやうな童話物にせよ、何れも歌が本になつて居ります。何でも彼でも歌に結び付けてあります。例へば戀の成就するといふやうなことも歌から來、失望落膽して世をはかなむといふやうなこともやはり歌から來るやうにして、歌といふものは此の時代の小說の脚色の重要なる地點を占めて居つたのであります。「和田酒盛」といつて後の歌舞伎の「草摺曳」や「矢の根」の本となつた舞の本の中に、大磯の虎が、曾我十郞と和田義盛と兩人から一時に盃を差されて、何方へ返盃してよいか頻りに思ひ惑うて居る所を形容した語に、其の有樣は恰も明石の浦に人丸が硯と料紙とを備へて置いて、ほの〴〵と明けゆく浦波を眺めて思ひ煩ふ風情に似たりけりといふやうに書いてあります。大磯の虎と歌道とは緣の無い話であるが、それに和歌を結び付けて居るのであります。又「八島」といふのには、義經が辨慶等を隨へ、越路から陸奥に落延びて、佐藤の家を訪れた時の家の容子を書いて、佛壇に阿彌陀三尊の像が掛つて居つて、其の傍に人丸の像が掛つて居つたと書いてあります。又靜が鎌倉に捕はれて、愈々由比ケ濱で首を刎ねられようとする時に、平政子の歎願によつて助命せられる。さて靜が政子の前へ出ると、政子は靜に向つて、「お前は歌の道を知つて居る

さうだから歌の問答をしようでは無いか」といひ、それから「伊勢物語は誰の作か」「初冠とは何事ぞ」などと、今日の口頭試驗でも受けるやうな、歌學の問答が始る。さういふやうに此の時代の小說には、緣の無い歌談を必ず何處かに入れてある。これは全く歌といふものが其の頃の學問でもあり、趣味でもあつたからであります。

かういふ風で、此の時代の小說は、歌に關係の無いものは殆どありませぬが、就中純粹に和歌を本とした二三の小說に就いてお話をして見ますと、前にも申したやうに、此の時代には鳥や獸を人に擬して作つた寓話が澤山あります。例へば「鴉鷺合戰物語」、これは鷺に美しい娘がある。其の娘を鴉が見染めて、貰ひたいといひ、それが本で鷺と鴉の合戰が起るのであります。又「魚鳥平家」と言つて、魚類と精進物の戰爭もあります。戰爭を盛にして居つた時代であるから、滑稽小說としても自然かういふものが出たのであります。

さういふ風でありますから、歌の物語にもこれに似せて擬人的に作つたのがあります。これは「群書類從」にあるのでありますが、「十二類歌合」といふのがあります。八月十五日の夜、子、丑、寅、卯といふやうな十二支の動物が集つて、月を觀ながら歌合をしようといふことになつて、十二の動物がそれ〴〵歌を作つた。それで六組の歌合が出來たが、其の判者がなければならぬ。「判者には誰がよからう」と言つて居る所へ鹿と狸がやつて來た。鹿はかね〴〵歌にも詠まれ、優美なものと見做されて居るから、鹿が判をすることになつた。さうして鹿は一同から尊敬され、歡待されたので、狸は羨しくて堪らぬ。其の次に又歌合のあつた時、今度は狸は獨りで出掛けて行つて、賴まれもしないのに判者にならうとした。十二支の動物はこれを承知しないで、散々に狸を嘲弄し

た。そこで狸は大いに憤つて、かはうその守だとか、稻荷山の狐だとか、熊野山の若熊だとか、蓮臺野の狼だとかいふやうな色々の獸類を集めて、十二支の動物と戰爭をするといふ滑稽的物語であります。其の歌合の一つを申して見ますると、

つれなしと夕告鳥のなくなべにかげほのめかす有明の月

これは鷄の歌であります。

あけがたの月の光のしろうさぎ耳にぞ高き松風の聲

これは兎の歌であります。さうして此の歌合には判の詞があります。

これに類したものに「こほろぎの草子」といふものがあります。これも小說の形を以て現した歌合であります。こほろぎが發起で、色々の蟲が集つて歌を詠んで樂しんだのであります。はたおり、すゞむし、きり〴〵す、ほたる、か、かげろふ、たまむし、みのむし、きこりむし、てふ、はち、こがねむし、まつむし、はへ、くつわむし、ひぐらし、かまきり、くも、けら、あり、けら〳〵、いもむし、みゝず、けむし、とかげ、へび、しらみ、のみ、むかで、とびむし、ゐもり、かへる、やすで、せみ、かういふやうな蟲が集つて歌を詠むことになつた。さうして判者には中納言在原のひきがへるがなりました。水に鳴く蛙といふ所から、ひきがへるがなつたのでせう。これには判の詞はありませぬ。勝負だけがあります。其の中にゐもりが蛙を妬んで

立ちもせず下にも居らずさわがしくかへる〳〵といふぞをかしき

と詠むと、蛙が之を聽いて、

あさましや墨の衣に身をそめてなどか色にはふかきゐもりぞ

と言つて罵つたといふ滑稽もあります。

それから又「玉蟲の草紙」といふのがあります。これも「こほろぎの草子」と同じやうなものでありますが、色々の蟲が玉蟲の美しい姿にあこがれて、歌を玉蟲に送つて、其の返事を求めたのであります。蜻蛉兵衞、蛙雅樂助、蝗宰相、鈴蟲三位中將、蟬右大臣、松蟲左大臣などといふやうにして、それ〳〵歌を作つて玉蟲に贈つたのであります。玉蟲はそれに對して一々返歌をしたが、中に肥蟲といふ糞の中の蟲などは、及ばぬ戀とは思ひながらも、歌を贈つて居ります。好い返事がなかつたので、失戀の結果死んでしまつたのもあり、結局松蟲左大臣が玉蟲とかたらふといふ事になるのであります。

其の外「蟲歌合」「鳥歌合」といふやうなものも「讀群書類從」の中に見えて居ります。此の「蟲歌合」は「こほろぎの草子」の眞似をして作つたものと見えて、やはりこほろぎの發起で、蛙が判者となつて十五番の歌合をします。さうして一番最後の歌は蛇と蟾蜍の歌であつたが、判者は蛇が怖いので恐る〳〵蛇の顏色を見ながら、非常に蛇の歌を賞めて、これ程の名歌は昔から恐らくあるまいといふやうなことを言つて、倉皇として竹藪の中へ逃げて行つたといふやうな、「こほろぎの草子」よりも一歩進めた滑稽の作意があります。

「鳥歌合」といふのは、「蟲歌合」よりは後に出來たものらしく、蟲さへ歌を詠んで居るから、鳥でも歌の詠めた

いことはない。蟲が藤原氏ならば鳥は源氏である。源平藤橘、皆歌を詠むのだから、鳥の仲間でも歌を詠まうではないかといふので、これはみそさゞいが發起をして、第一に贊成をしたのは鶯であつた。それで色々の鳥が歌合をすることになり、例によつて判者を選むことになつた。其の時にみそさゞいは、「君は鳥の中でも一番の歌人であるから判者になつてくれ」といふと、鶯は辭退して「私が判者になるといふやうなことは借越である。鶯に頼んだらよからう」と言ふ。それから色々相談の結果、梟の智慧を借りたが、梟もそれは「力の强い鷲の方がよからう」といふので、鷲に頼むことにした。さて此の催しを鳥仲間だけでやるのは面白くないから、獸類にも知らせようといふことになり、みそさゞいと鶯とが其の使に行くことになつたが、みそさゞいも鶯も此の使者に立つことには困つたといふやうな滑稽があります。かういふ風にだん／＼滑稽の趣も進んで來て居りますが、要するに皆小說の形式を以て現した歌合物語であります。

それと同じやうなもので、鳥や獸のやうな生物でなく、無生物の「調度歌合」といふのもあります。これは或家の主人が夜半に不圖眼を醒した所が、物置の方で何だか話聲が聞える。何事かと思つて耳を澄して聞いて居ると、屛風だとか、長持だとか、簞笥、机、鏡臺、燭臺、盥などといふ道具が集つて歌合をやつて居るのであつた。「昔語質屋庫」のやうな有様です。最後に

鶯も蛙も歌をよむなれば聲なきものの聲もありけり

といふ歌があります。

先刻も申しましたやうに近古時代の小說には種々の種類がありますが、それ等の小說は皆歌を土臺として居るのであります。「鴉鷺合戰物語」の中にも長い歌學の講義があります。實は小說ばかりでなく謠曲でもやはりさうですが、特に歌合を小說にしたのは今申したやうな五六種のものであります。これ等のものを見ますると、まことによく其の時代の有樣が分るのであります。卽ち歌學が尊重され、歌合が行はれた時代の趣味、それが寓話的物語となつて現れたのが、非常に面白いことと思ひます。又戰爭のあつた時代故、軍記物語となつたのも面白い。和歌と戰爭、それが結び付いて居るのであります。判者の蛙が蛇を恐れて蛇の歌を賞めるとか、鶯が鷲を恐れて判者になる事を避けるといふやうな、實力に壓せられ權勢に媚びる時代の風潮も窺はれるのであります。さうして眞面目の中に滑稽が見える。これは一面に於て我が國民の機智が現れたものであると思ひます。

甚だつまらぬお話でありましたが、和歌に趣味をもたれる方々の御集りでありますから、近古時代の小說といふものは、和歌が其の半面をなして居るといふことの一端をお話した次第であります。

（竹柏會大會講演、大正四年五月「心の花」）

大日本國語辭典序

十年一昔といふことを思ふと、上田、松井の二君が國語辭書の編纂に著手せられてからも、一昔はとくに濟んだ。編纂開始の心祝といふので、知友數名が晩餐會に招かれて打興じたのは、つい此の間のやうな氣もするが、其の頃始めて小學校に入つた余が娘は、已に人に嫁いで人の子の母となつて居る。短いやうで長いものである。今や其の第一卷がいよ〳〵出版になるといふ音づれを聞いて、余は初孫の誕生を見た時と同じやうな、しかもそれよりは大きい一種の喜悅を禁じ得ないのである。

年の流は水の流と同じく、世事の變遷は行く雲のやうに極りがない。此の一昔の間には、日露戰役といふ大事件が起つて、我が日本の國勢を一變せしめた。政治や軍事や工業や貿易やの進步發展の跡を見ても、其の間の十年は通常の十年では無かつた。二君の編纂事業はかういふ中に、徐々と其の工程を進めて行つたのである。鑛山から掘出されて、選分けられ、鑄分けられて行く鑛石のやうに、幾萬幾十萬とない古語や新語は幾百部幾千部の典籍圖書の中から摘出せられ、拾集せられて、書留められ、整理せられる。編輯室に山を成したカードは、次第に墨やインキで染められて行く。一月二月三月四月、秋も暮れ、春も逝いて、暦も幾度か改る。同じ仕事がはてしなくいつまでも續く。傍から見れば捗の行かぬことは齒痒いやうで、何時方のつくことかと危まれる程であつた。編輯室は松井君の邸內の離れ家にあつたが、それでも夜半の半鐘に肝を冷して、餘所ながら無事を祈つたことも幾度か分らぬ。二君の筆と頭腦は間斷なく此の間に活動して、採るものは採り、棄てるものは棄て、其の進步は遲いが、其の成果は確實であつた。かくて粒々積上げた砂子も遂には山を成す喩のやうに、編纂の稍緖

に就いたまでには、鐵道は何千哩落成の祝賀會を催したし、何萬噸といふ軍艦は幾隻となく進水式に浮び出たのであつた。

學者の仕事はじみである。目覺しく世人を驚かすやうなことは無い。二君が拮据十餘年の編纂事業も、靜かな一室に靜かに行はれたのである。けれども一たび其の室に入つて、山成す材料を見上げるものは、何人も其の難事業たることを承認せずには居られぬ。又編纂者の決心と根氣を尊敬せずには居られぬ。さうしてそれが決して學者の閑事業では無くして、實は國家的大事業であつたことに考へ到らなければならぬ。國民精神の基礎、隨つて國家教育の根柢となる國語の調査整理が、現今に緊急であることはいふまでもない。國家は軍備ばかり進んでも一等國とは言はれぬ。あらゆる方面の發展は教育の力に賴らねばならず、教育の進步も國語の普及が根本である。狹い編輯室に行はれて、何等世人の注意を惹かなかつた學者の研究が、實は絶大な國家的事業であつたといふことに於て、學者の生命があり、學術の意義があるのである。十年以前に比べて、鐵道の哩數や、軍艦の噸數の大いに增加したのを祝賀する人は、之と同時に數隻の巡洋艦位で滿足して居つた我が國語界が、十餘年後の今日、こゝに一大戰艦にも譬ふべき本書を有するに至つたことを驚歎し、歎美しなければならぬ。文物の整備するのは國家の誇であり、飾である。又精神界を支配する大きな武器である。完全な一辭書の存在することも、國民にとりての立派な强みになる。此の一大產物が、堅忍不拔な二君の手によつて成就せられた事は、友人たる余の言ひしらぬ喜悅を感ずる所以である。この十年は國語界に於ても亦無意味な十年では無かつたのである。

學者の事業はいつも世間と沒交渉のものでは無い。專心な研究は書齋の中から起つても、世間は常に研究の題目となるものである。辭典の編纂に於ては、進歩して行く世間を、一日も餘所に見て居る譯には行かぬ。十年一昔の間には、國語そのものの中にも絕えず變遷が行はれて居る。それに注意するだけでも容易の業では無い。靜寂な編輯室は紛糾した實社會と、常に相往來して居るのである。

幾多の困難に打克つて、國民の覺知せぬ間に、其の背後に大きな國家事業を建設せられた二君の勞苦は今更述べるには及ばぬ。後世の人は必ず之を明治時代に企てられて、大正時代に完成した大事業の一つに數へるであらう。

余は二君の滿足と喜悅を察知すると同時に、今か今かと十餘年を待暮らした同友とともに、まづ二君の成業を祝して、一大白を浮べようと思ふのである。

（大正四年九月しるす）

藤島神社

越前の國は舊國であるから、名所舊蹟は到る處に少くない。福井は卽ち北庄（きたのしやう）であつて、柴田勝家が豐臣秀吉に攻められて、妻女とともに自刄した所である。其の落城の日四月二十三日には、首のない人が夜半馬に乘つて、

町中を通るといふ話を余等は子供の時に好奇心を以て聞いたものである。今も柴田神社といふのがある。我が福井市で、最も新しい、最も著しい名所といへばまづ藤島神社を擧げなければなるまい。何故に最も著しいといふか、そは新田左中將義貞朝臣を奉祀した別格官幣社であるからである。何故に最も新しいといふか、そは明治三十一年に始めて福井の足羽山に鎭座あつたからである。

藤島神社といふのはもと藤島にあつたからで、即ち義貞戰死の跡である。太平記に、

義貞聞きもあへず、士を失つて獨り免るゝは我が意にあらずといひて、尙敵の中へ驅入らんと、駿馬に一鞭を進めらる。此の馬名譽の駿足なりければ、一二丈の堀をも前々たやすく越えけるが、五筋まで射立てられたる矢にや弱りけん、小溝一つを越えかねて、屛風を倒すが如く岸の下にぞころびける。義貞左手の足をしかれて、起上がらんとし給ふ所に、白羽の矢一筋、眞向はづれ、眉間の眞中にぞ立つたりける。急所の痛手なれば、一矢に目くれ心迷ひければ、義貞今は叶はじとや思ひけん、拔きたる太刀を左の手に取渡し、自ら首をかき切つて深泥の中に藏して、其の上に横たはつてぞ伏し給ひける。

一代の名將、南朝の忠臣義貞の末期はかくあはれなものであつた。楠公が舍弟を顧みて「七たび人間に生れて賊を亡さん」と言つたのよりは、一層はかない、あはれな最後である。それで別格官幣社は始め藤島にあつたが、同所は度々の出水などで、折々は神社の殿上へ浸水するといふやうなこともあり、遂に福井へ鎭座せられることになつたのである。新田氏の子孫たる大館氏が最初に宮司を務められて居つたが、後に今の伊勢神宮の權宮司今

井清彦氏が宮司となられ、其の在任中、朝野の間に奔走せられて遷座の事が成立つたのである。さうして福井の一名所が増したのである。

之に就いて特筆しなければならぬのは我が藩の先君光通公である。此の君が深く義貞公の精忠を慕はれ、其の戰死の地の我が領内に在る事から、其の戰死の跡とおぼしき所へ、新田左中將義貞戰歿之處といふ石碑を建てられたことである。これは南朝の忠臣をあらはされたことに於て、實に先頭第一の事業であつた。水戸の光圀卿が神戸湊川へ嗚呼忠臣楠子之墓を建てられたことは、誰しも人の知る所で、それが往還の人にも知られ、勤王心を激勵したことは、大きな事蹟であるが、光通公の義貞公戰歿の處を示された事は、實はこれよりも三十年ばかり前の事である。明治になつて藤島神社の建つたのも、實はそれが本になつたのである。然るに、楠子之墓の事は世間に知らぬ人もなく、光圀卿の事は最も著明であるのに、我が光通公の事は全く知らぬ人が多い。誠に殘念な事である。

神戸は東西往還の要路であるから、西方諸大名の往復などにも注意された事が多かつたであらう。今の神戸市が微々たる寒村から、今日人口四十萬の大都に早變りしたのも、皆明治以後の發達であるが、山陽にも「平公塔下兩維レ船」などいふ詩もある通り、船路を行く人などは必ず兵庫を通つたのである。それ故水戸公の嗚呼忠臣楠子之墓碑も一層早く人の注意を惹いたのであらう。我が藤島は大街道を外れて居るので誰も知らず、光通公の誠心も世に傳はらなかつたのである。

今の藤島の社殿は足羽山の東の部分にある白木造の瀟洒な建築、福井市街を俯瞰して居る。つゞいて足羽の公園、風光の美は得も言はれぬ。余等が幼少の時に嬉戲した所、いつも余が念頭を去らぬ。湊川神社に奉賽する人は、米原より北行して我が故郷福井に到り、必ず此の藤島神社に參詣し給へと勸める。今は越後からの線も通じた事故、此の故忠臣の社へ詣でるのも極めて容易いことになつた。

（大正四年九月「學生」）

卽位禮拜觀記

曠古の大典に參列者の一人たる榮譽を擔ひ、こゝに學生諸君に向つて、其の御模樣を語ることを得るのは、余の最も喜とする所である。

時は大正四年卽ち紀元二千五百七十五年の十一月十日、人皇第百二十三代の帝祚を踐ませ給ふ天皇陛下は、登極令の規定により、內外の文武官僚及び貴衆兩院議員、地方在住者總代等二千餘名を平安京の舊都に召させられ、卽位の旨を皇祖の靈に告げさせられ、天下萬民にもお知らせになるのである。

京都市は街上の裝飾、掃除殘る處なく行屆いて、數夜來軒提灯の光、イルミネーションの輝きに照り渡つて居る。生憎の細雨は八日九日と降續いたが、此の光榮の日はどうして霽れずには居られよう。九日の夜半から密雲

は次第に薄らぎ初めた。大禮使參與官たる同宿の福原氏は午前六時までに參朝するといふので、三時頃雨戸を明けて空を仰いだが、「星斗闌干」と喜んで叫んだ。余も續いて起出で、水浴して身を潔め、禮服を着けなどする中、夜は次第に明離れて、朝日の光が東山の上に輝く。元旦の日の出を見るよりも一層嚴粛な、壯快な氣分になる。門に待つて居た人力車に乘つて宿を出たのは、午前六時三十分。

賢所大前の儀

參集した第二朝集所は新に御造營になつたのであるが、一時的建造物であるにもかゝはらず、節なしの檜木造で、天井も高く、廊下も廣く、流石に規模の大きなものである。敷詰めた紅い段通(だんつう)を踏んで、勳一等以下の參列員は第一室、第二室、第三室と各自定めの室に入る。やがて、午前八時振鈴の合圖と共に、第一室第一班から順次進行を起して左右二列になつて賢所大前の左右幄舍に導かれる。

春興殿(賢所)は木の香も新しい新宮で、菊章の御金具が朝日にキラ〳〵と光る。御扉は既に開かれて、青い御簾の下には奉仕の掌典長以下掌典が蹲つて居る。左手には羽車舍があり、右手には樂舍があり、大前には威儀の人が四十餘人、黑袍、緋袍、縹袍、緑袍の束帶姿にて、威儀の物、楯、桙、太刀等をそれ〴〵奉仕して左右二列に控へて居る。誠に一幅の古繪卷を見るやうで、其の美しさ、尊さには、形容の詞が無い。次に大勳位、大臣、大臣待遇者、親任官等が同じく左右に別れて、幄舍の前席に着く。次には總員の起立の中に、各國主權者の代表者たる大使、公使等が同じく左右幄舍の座に着く。參列文武官の金色燦然たる大禮服、此の日は白ズボンを穿つ

大人等が今日を晴れと裝うた美々しさは、大前の威儀の人の古代服裝と相映じて、東西古今の文華が一時に玆に展開した觀がある。

たので、殊に鮮かである。動一等以上の夫人は袿姿の盛裝おもひ／＼に着飾り、各國の大使、公使、其の夫人等が今日を晴れと裝うた美々しさは、大前の威儀の人の古代服裝と相映じて、東西古今の文華が一時に玆に展開した觀がある。

賢所正面の御簾が上つて、幾十合の折櫃で神饌が供へられる。終つて掌典長の祝詞があつたのであらう。しばらくして陛下には、宮内大臣等前行し奉りて、帛の御袍とて、白練衣の御袍を召して、出御あらせられる。侍從は劍璽を奉じて隨ひまゐらす。陛下が內陣の御座にお着き遊ばされたのであらう、內掌典の奉仕する鈴の音が起る。內侍所の御鈴の音の神々しいといふことは、昔の人も言つて居るが、數秒每に鳴りひゞく御鈴の音は幾千の參列者の心耳を淸ませて、咳の音一つも聞えぬ。此の間に陛下が御告文をお讀みになつて、萬世一系の皇位に上らせられた事を親しく皇祖天照大神の靈にお告げあそばすのである。やがて元の供奉員を隨へて入御あらせられたが、畏くも參列員一同に向つて御會釋を賜はつたやうに拜み奉つた。つゞいて允子內親王が皇后陛下の御代拜をつとめさせられ、次に皇太子殿下の御拜があつた。殿下の古代服裝を召させられた御姿は、恐れ多いが、誠におかはいらしく見奉つた。さて撤饌し、御簾を下して、こゝにめでたく午前の賢所大前の儀は終つたのである。

此の日、參列員の進退はすべて鉦鼓の音で合圖されたので、誰一人言語を發するものはない。威儀の人は儼然として控へて、身動きさへもせぬ。神代のことを思はせる樂舍の和琴の音、大前の砂を蹈んで退下する參列員の靴音の外には、靜寂を破るものは何物も無かつた。參列の外國使臣たちも、定めて森嚴の感が身に迫つて、坐に

我が國の古代を想ひ、後の世までの語り草にすることであらう。一同元の朝集所に還つたのが、十一時四十分頃で、そこで辨當を賜はつて休息した。

紫宸殿の儀

紫宸殿の儀は午後に行はせられた。一時五十分から參列員の行進が始つたが、今度は第三室の末班から、長い廊下を傳ひ建春門を入つて、紫宸殿の方へ導かれた。さて左列の人は日華門から、右列の人は月華門からはいつて、東西の軒廊に一列九人づつ程の割合で整列した。余が席次は東の軒廊の半よりは少しく北の方にあつて、大庭に近い側であつた。紫宸殿の南榮には日輪と瑞雲とを畫いた帽額が一面に懸渡されて、御簾は高く捲上げられてある。大庭には威儀の人が、午前の賢所大前の儀と同じやうに、各威儀の物を捧持して並列して居る。殊に美しく見えたのは大小二十餘旒の旛である。東側には金色の日を畫いた緋色の日像纛旛、それに對して西對には銀色の月を畫いた白色の月像纛旛が立てられ、赤地錦の頭八咫烏形大錦旛と白地錦の靈鵄形大錦旛は相對して東西に飜つて居る。つゞいて菊花章の中錦旛が、縹色、黄色、緋色、白色、紫色の順序で左右各五本、同じ順序で小錦旛が五旒づつ、萬歳旛は少し内側に二本相對して立つて居る。神武天皇の御時の故事によつて、五つの魚と嚴瓮が畫かれてあつた。其の外に桙二十竿が立ててある。

此の時空は一片の雲もなきまでに晴れ渡つて、午後二時過の日の光はまともに南殿を照して、大庭の白い砂がキラ〱と光つて見える。まして二十餘旒の旛の金銀の光、紅黄白紫の色々が、風に飜つて入り亂れた有様、目

もまばゆい程きらびやかである。壯麗である。距離の遠いのと、左近の櫻の枝が階の四分の一程を遮つて居るので、殿内の南廂の西の半分が見られるばかり、高御座は拜することが出來ない。束帶姿の大臣達がだん／＼と座に着くのが見える。大隈首相も杖によつてあらはれて來た。やがて階上に緋の袍を着て立つて居た蜂須賀式部官が高聲で、警蹕を傳へた。今しも出御、高御座に御登りになることと、一同姿勢を正した。鉦鼓の響に最敬禮をすることは午前の儀の通りである。首相は間もなく人杖に助けられて西の階段を下りて來た。さうして威儀の人人の間を通つて、南階の下に立つた。此の時陛下は勅語を賜はつたのであらう。玉音は遠いから聽取れぬ。やがて首相は十八段の階を上つて、高御座に向つて最敬禮の後、壽詞を申上げた。其の聲は朗々としてよく聞かれた。終つて階段を下り、萬歳旛の中間に立つて、萬歳、萬歳、萬歳を三唱し、參列員一同も之に和した。建禮門外の儀仗兵の喇叭も聞える。祝砲の響が重々しくつゞく。今や全國の津々浦々、苟くも日本國旗の飜る所には萬歳の歡聲が湧くのである。時は正に午後三時三十分であつた。

首相が座に復すると再び警蹕が呼ばれた。今入御になるのである。かくて束帶姿の宮殿下、大臣達も相つゞいて退下、參列員一同も此の晴れやかな大儀に列した光榮を喜び合つて、元の朝集所に還つた。日華門を出る時、余は櫻の木の枝蔭から高御座を仰ぎ奉ることが出來た。西の軒廊に參列した人々は右近の橘の影に妨げられて、何も見られなかつたさうで、余等東側のものは尙更其の幸福を喜んだ。

かくて曠古の大禮の前半である卽位の禮は滯なくめでたく相濟んだのであつた。今日は卽位禮後一日の御神樂

が春興殿前で行はれるのである。今日もうらゝかな小春日和である。大正四年十一月十一日謹みて記す。

大嘗祭

十日から引續いての好天氣、大禮日和といふ語さへ出來た。十四日の夕方から仙洞御所内の朝集所へ參集。世界に類のない森嚴な大嘗祭は、夜を徹して行はれるのである。控所は幾室にも分れて、まばゆい程の電燈の光、一々呼上げる官氏名の順序によつて、左右二列に分れて、大嘗宮南板垣門内の幄舍に着席する。電燈を籠めた數箇の燈籠がホンノリと明るい。大嘗宮の柴垣が微かに認められるだけである。火焚屋に燃える庭燎は時に明るく時に暗い。一同の着席が濟むと、薄明るい燈籠の火も消されて、ぬばたまの暗の夜である。

一聲長い笛の音が樂舍から起つて、稻舂歌が高らかに吟ぜられる。徐かに嚴かな調子で、神々しさが身に沁むやうである。稻舂歌が終つて、稍しばしの程を經て、再び歌聲が起る。今しも國栖の國風が奏せられるのであらう。つゞいて風俗歌が歌はれる。大禮使の官人が起立、着座を呼ぶ毎に、或は起立し、或は着座する。闇に包まれた千餘人の參列員は、端坐凝念して、身は宛ら神代の昔に返つた心地である。今は掌典長の祝詞が濟み、廻立殿からの渡御もあつたのであらうと、御祭の次第を想像し奉るにも、森嚴な氣が刻々に迫るやうに覺える。余が着座したのは左の幄舍で、折しも八日か九日の月が松の葉越しに、白砂の上を照す。折々一陣の寒風が吹いて、古雅な單調な樂の響がいつまでも絶えず續くのである。聖上には正に天神地祇を奉請あつて、御對坐あらせられるのである。樂の音の外には人の音は全く無い。眞に莊重嚴肅を極めたものである。此の莊重嚴肅な御祭は、太

古さながらの建築を傳へた大嘗宮の中に行はれて居るのである。かくて悠紀殿の御祭が終つたのは十一時二十分の頃であつた。

朝集所へ立戻つて、夜食を賜はる。溫い御酒、熱い吸物、幾度か朱の御杯を傾けて、夜寒も忘れ果てる。十五日の午前一時三十分、主基殿の御祭が始るので、再び幄舍の座に着く。老齡の大官達が拜辭して退下した爲であらう、幄舍の座席は、以前よりも廣く覺える。此の度は左の幄舍に近いので、歌樂の音も一層鮮かに聞える。曉の寒さは三十分、一時間次第に身に沁むとともに嚴肅な氣分は一層に加はる。樂の音が止んで御祭の果てたのは午前五時二十分であつた。朝集所に退下して、再び御酒、御食を賜はる頃、東の空は漸く明るくなつた。

十日の卽位の禮には、賢所大前の儀にも、紫宸殿の儀にも、外國の使臣も悉く參列した。それは朝日の輝く御宮、夕日の照す大庭に行はれたので、莊嚴であり、雄大であつた。それに引かへて、大嘗の大御祭は、夜陰の中に行はせられる。參列の臣僚は柴垣を隔てて、肅然として陛下の夜を徹しての親祭に侍坐するのである。唯「森嚴」といひ、「神々しい」といふより外に、形容の語は無い。卽位の大禮に於ても、遠き國史を想ふの念は油然として湧いた。春興殿前の威儀の人、紫宸殿前の大小錦旛、古き國史の跡を考へて、いよ／＼國家の昌運を欣慶するの情に堪へず、今より六十年前に御建築になつた紫宸殿に對し奉つては、殊に最近五十年來の皇室の隆運を默想し奉らざるを得なかつた。此の太古の儀によらせられた大嘗祭に於ては、更に國史の各時代を超越して、西洋の文明は勿論、唐土、三韓の文化も入つて來ない神代の昔を追念して、我が國體の尊嚴無比なことを、今更のや

うに感激するのであつた。

　いそのかみ古りし神代の神業をををろがみまつるけふのかしこさ

大饗第一日

卽位の禮、大嘗祭いづれも滯なく濟んで、十六日には二條離宮に於て大饗を賜はつた。微臣が大禮參列の榮譽を得たことさへ、身に餘るうれしさであるのに、大饗に御召しを受けたかしこさ、たふとさ。亡き父の今までいまさましかばなど坐に思出でられる。午前十一時、南大手門の新しい橋を渡つて、御車寄から第三休所に入る。金碧の美を盡した格天井（がうてんじやう）、壁、襖の繪畫裝飾、長押の葵の紋所も、徳川將軍の繁榮を追想せしめる種であるが、こゝに大權奉還の儀も定まつて、一時は京都府廳となつて居つた事などを想へば、これも亦、維新以來の歴史を物語るものである。

振鈴によつて參進、饗宴場に入る。席は左右に分れて、余は右方第三班である。軟障（ぜじやう）を後にし、悠紀、主基の屏風を左右に立列ねた玉座は一段と高い。舞樂の臺は中間に朱欄の色も鮮かに、火炎太鼓が高く相並んで、繪よりも美しい。四面に張渡した朽木形の壁代（かべしろ）、氣高さが全殿に充滿ちて居る。

警蹕の聲に一同最敬禮の中、出御あらせられる。玉座より勅語を賜はつて再び最敬禮、大隈首相及び露國大使の奉答いづれも嚴肅に行はれて、陛下先づ御盞を擧げさせらるれば諸員皆着席、陪宴。右の方の折敷に齋田の御飯を盛つて、それに白酒（しろき）、黒酒（くろき）の御土器（おんかはらけ）も載つて居る。三つの折敷に盛られた御料理には、それ〲の名もあり、

故實もあらう。一向に辨へ知らぬ身には一々の記憶も慥でない。まづ白酒、黒酒を戴いて、次に清酒を賜はつたのである。

御宴の最中、笛、篳篥の音とともに、久米舞が始つた。續いて、風俗の舞、次に五節の舞。とり／＼に、麗しく優雅であつた。いづれも日本古代の舞樂であるのが、折につけて最も似合しく感ぜられた。さうして一千名に餘る陪宴者、古への德川將軍の一族も、締盟十八國の外交官も皆參列した此の大饗宴は、大帝國の今日の日本を遺憾なく發揮したものと思はれた。

警蹕の聲に入御を送り奉つて、各員は銀製の挿頭の花と第三の折敷や折詰を風呂敷に包んで退下の途に就いた。

大饗第二日の夜宴

十六日の大饗につゞいて、第二日の夜宴にさへお召しを受けた。今日は貴衆兩院の議員も一同召されたので、休所等は昨日よりも賑かである。張渡した壁代も取拂はれて、豐樂殿は其の面目を一變したやうに見える。中央の舞臺を取巻いて觀覽席がヒシ／＼と設けられてある。余は右方觀覽席に居つたが、玉座の左の所で、起立の儘拜觀する。最初は文の舞の萬歳樂、次が武の舞の太平樂、笛、簫、篳篥の音律につれて、徐に進退曲折する舞の姿の優美嫻雅なこと、其の裝束の美しさ、麗しさ。折々鳴渡る大太鼓の響は雄大で溫雅で、四人の樂人が寸分も違はぬ均齊を以て右に旋り、左に轉じ、悠揚迫らぬ中に、豪健の氣風も伸張して見られる。電燈は晝よりも明るく輝いて、閃かす劍の光、舞の袖、折も折とて、人間界の物とは思はれぬ。一同は唯醉うたやうな心持になつて、

咳一つもせぬ靜かさであつた。

舞樂訖つて入御、各員も皆元の休所に歸り、十一時半頃、夜宴は開かれた。此の度は西洋の管絃樂賑しく、君が代の奏樂の中に出御がある。洋風の御料理に美酒を頂戴する中、各國の樂曲が代る／＼奏せられる。賑しさいふばかりで無い。還御を送り奉つて、一同の退下したのは翌日の一時半頃であつたらう。此の日も一同に菓膳にかたどつた銀製の菓子器を賜はつた。

かくて十日に始つた大禮は十七日を以て終つたのである。否大禮はまだ終つたのでは無い。陛下には尙伊勢神宮、神武山陵、前朝四代の山陵へ親謁の儀を今月の末まで引續き行はせられるのである。東京へ還幸、三十日に皇靈殿親謁の終るまでは尙大禮中であるのである。

召されたる參列員は大饗を賜はつて、歸京を許されるので、各締盟國の君主等を代表した大使以下、それ／＼に歸途に就くのである。

十日の嚴肅敬虔な朝の祭、賢所大前の儀に始つて、十七日の夜宴は壯大で、華麗で、賑かであつた。神代をしのぶ大嘗祭をはじめ、種々の御儀式は、一として日本の過去の歷史を示さぬものはない。束帶と大禮服と、袿袴とローブ・デ・コルテと、五節舞と西洋管絃樂と、古今を合せ、東西を集めて、一切の文明を融和し、發展させた大帝國の面影は、此の大禮に於いて覗ふことが出來たのである。

（大正四年十二月―同五年一月「學生」）

田中大秀翁贈位記念碑

石根こゞしき飛驒の國に早くより國つ學の古き道をふみ開きて、高山の里の高き功あるは荏野翁田中大秀大人なり。大人の著しし書いと多かる中に、物語の祖といふなる竹取物語の解はしも初學の人もまづ讀みならひて、この道に入り立つ栞とはすめり。大人が神を敬ひ國を思ふ心の厚かりしは、處々の神社又は舊蹟をたづねて、あるは社殿を再建し、あるは石文を立て、あるは考證の書を物せられしにても知るべし。其の外雅樂を始として有職故實の事にもいたり深く、ひたぶるに古の道を弘めんと眞木柱立てし心は一すぢに動かず、數多き敎子を敎へ導かれけり。去年の秋かしこくも今上陛下の大禮を行はせ給ひし時、普き大御惠の波は深山路の奥にも及びて、大人に正五位の位を贈らせ給へるは、高山の里の譽、飛驒の國の誇にして、やがてぞ學の道の光にはありける。大人の世に在しし日、夢の中に百敷の大庭に參りて、親しく大御言を賜はると見しことあり。そは弘化二年の冬の頃なりきといふ。それより六十餘年を經て、見し夢の現し事となりぬるは、大人が眞心の天に通じたりとやいふべき。同じ學の流を酌む身のうれしさに默しもあへず、請はるゝまに〳〵其の由を記しつ。（大正五年四月）

米國に於ける英語俳句

米國大使館の參事官であり、現に我が文科大學の學生であるアーネル君から、先日ヴアニテー、フエーヤといふ紐育發行の雜誌を示されたが、其の中に發句の懸賞募集があり、受賞者の姓名が吹聽されてあつたのは面白く感じた。發句といつても、もとより英語でやるので、つまり最初の行が五綴(シラブル)、次が七綴、次が五綴といふ俳句の形式を襲うた短い英詩であるのである。題は「少女の戀と義理の判斷」といふので、薔薇の花に戯れて居る蜂に寄せて作れといふのである。それで最優等の選に入つたのは、紐育のアリス、マクスウエル、アツポー孃といふ人で、其の句は

Toiler of ages,
Culling sweetness with labor,
I thy disciple.

戀よりも義理を選んだのである。第二等賞はコンネクチカツトのストラツトフオードのポーウエルといふ人で、其の發句は次の通りである。

Passionate flower,
　Yielding sweets to thy lover,
　　God smiles upon thee!

選者はいづれも誠に發句らしいと賞めて居る。其の外入選の人名七八を擧げて居るが、或はカリフオルニヤの人もあり、或はマツサチユセツツの人もあつて、可なり各處から募に應じたことが考へられる。不審なのは、其の選者が Kwaw Li Ya とある事で、どうも日本人の名らしくはない。挿圖中に郭禮雅といふ漢字があるのを見ると、其の支那音らしい。こんな日本人がある譯が無い。雅號にしても變であるし、雅號に支那音を用ひる日本人も無い。且又其の出題も俳句らしくは無いし、入選の句も俳味はないやうである。唯義理と人情との爭といふことを、日本人の思想と見たことと、薔薇の上の蜂といふ季を入れさせたといふ處に、俳句の約束を守つたといふだけである。

思ふにこれは俳句を心得た日本人の仕事でなく、雜誌記者が日本人らしく裝つて、やつて居る事であらうと思ふ。さうして讀者の好奇心を釣つて居るのであらう。郭禮雅といふ選者の名が、明らかに其の事を裏切つて居るやうに考へられる。例の日本と支那とを混同する西洋人の無識がたま〳〵暴露されて居るのである。

それにも拘らず、とにかく日本の俳句といふ短い詩が西洋人に認められ、其の五七五といふ形式で、自然の景色を結付けた短詩を作るといふことが流行して居るのは面白い事といはねばならぬ。勿論繪畫などは早くから知

られたが、文學の知られるのは何といつても遲いものである。

（大正五年六月「帝國文學」）

伊勢物語の歌に就いて

伊勢物語の作者、著作年代等に就いては、學者の議論區々であるが、これは實事物語といふよりも、むしろ名歌の由來を物語るもので、萬葉集十六巻に有由緣歌として、色々古歌に就いての由來を書記したものがあるが、それと同系統のものと思ふ。さうして萬葉集の歌の漢文の詞書を、國語で書いたといふだけの相違である。それ故余はこの物語及び同系統の大和物語などを歌物語と名づけて、これから平安朝の日記及び物語が湧出でて來る源泉と見て居るのである。それで伊勢中の歌を調べて見ると、次のやうな結果になる。

歌の數が總體で二百九首ある中で、明らかに古歌を引いて、物語の筋に關係の無いのが二首あるから、それを差引くと、二百七首が物語の中の男女によつて詠まれたものである。其の中で又業平以外の人の歌と斷つてあるのが、帝、住吉明神、業平の母、藤原敏行、在原行平、源至、各一首で、紀有常が四首、それから女の歌が五十三首あるから、計六十三首卽ち全部の歌の約三分の一が他人の歌であるから、ざつと三分の二が昔男、卽ち業平の歌と古來信ぜられて居つたのである。

よく〱此の物語の歌を調べて見ると、萬葉や六帖や菅家萬葉などの歌が交つて居る。これ等の歌集は傳說的に傳へられた古歌、むしろ國民詩ともいふべきものの蒐集であつて、誰の作とも知られず傳はつた歌である。それが交つて居ることが、此の物語の歌物語たることを證明して居るかとおもふ。二三の例を擧げると、第三十三段の

　蘆邊よりみちくる潮のいやましに君に心をおもひますかな

といふ昔男の歌は、新撰萬葉に、

　蘆間よりみちくる潮のいやましにおもひませどもあかぬ君かな

とある歌が、少し變つて居るばかりである。併しこれは尙遡れば、萬葉集第四に

　蘆邊よりみちくる潮のいやましにおもへか君が忘れかねつる

とある歌が少し變つたのである。又第三十六段の

　谷せばみ峰まではへる玉かづら絶えむと人をわがおもはなくに

とあるのは、萬葉集十四の

　谷せばみ峰にはひたる玉かづら絶えむの心わが思はなくに

といふ歌である。第百十三段の

　須磨のあまの鹽燒く煙風をいたみおもはぬ方にたなびきにけり

は古今集戀四に、題知らず、詠人知らずと出て居る歌で、六帖には一の句が、「伊勢のあまの」となつて居る。これも萬葉七に

志珂のあまの鹽燒く煙風をいたみ立ちはのぼらず山にたなびく

とあるので、傳說的の歌らしい。

こんな風に調べて見ると、「なか〳〵に戀に死なずは」「君があたり見つゝも居らむ」「玉の緒をあわ緒によりて」「二人して結びし紐」「岩根ふみ重なる山」「浪間より見ゆる小島の」及び前に揭げた「蘆邊より」「谷せばみ」「須磨のあまの」等、萬葉から出たのが九首ある。それから六帖のは「みよし野の田のもの雁」「我がかたによると」「いでていなば心かろしと」「今はとてわする丶草の」「風吹けば沖つ白浪」「いへばえにいはねば胸の」「出でてこし跡だに」「うらわかみねよげに」等他書との重複を除いて八首ある。中にも「風吹けば沖つ白浪龍田山」の如きは、誰も業平の古事として疑はぬのであるが、六帖にはかぐ山の山のはなの子といふ作者が出て居り、且、又萬葉集の

わたの底沖つ白浪立田山いつか越えなむ妹があたり見む

などが本であるらしい。こんな風に古歌に色々の面白い物語を附けたのが、伊勢物語作者の手際であつて、其の中に業平の歌が最も多いのである。これは業平の生涯が餘程風流韻事に富んで居つたのと、業平の歌が情緒纏綿の趣に勝つて居たから、喜ばれたのであらう。

後世では在五中將日記、在五中將物語といふ名に押されて、此の物語の昔男の歌をすべて業平の作と考へて、勅撰集の中にも、業平として擧げられるやうになつた。勅撰集に業平の名があつても、實際は誰の作か分らぬのである。

昔男の歌として擧げられたものの中に、他の勅撰集や家集などから考へて、他人の歌と思はれるものが隨分ある。例へば女の詠んだ

風吹けばとはに浪越す岩なれや我が衣手のかわく時なき

とあるのは新古今戀の部の紀貫之の歌である。こんな類、明白に他人の作のこの物語に採られて居るのは、貫之、忠岑、定基、友則、家持、望行、元方の七人までである。男の歌が女の歌になつて居たり、雜の歌が戀の歌になつたりしてゐるのもある。要するに、古歌に種々な由來が添はつたり、歌句が幾分か變つたりして居るのが多いのである。

伊勢物語の作者が古歌の句を多少變へて、色々の物語を附加したとすれば、それは作者の手際であるが、傳說として傳へられる間に、自然にそんな變化も出來、別な話が附加つたとも見られる。卽ち作者は唯それを忠實に筆記したと見るのである。どちらが多いかといへば、余はむしろ後の方が多いと言ひたいのである。

（大正五年八月「帝國文學」）

外遊間話

布哇だより

一　人種展覽會

日章旗の國土を離れて、十一日目に、星條旗の飜る布哇の港に着いた。米國の領土となつてからの布哇の發達はすばらしいものであるとのこと。布哇八島の人口は二十三萬人、其の内日本人が九萬餘人といふのも、驚くべきことである。ホノルルの人口は六萬人で、内日本人が二萬人。日本人ではあるが、朝鮮人も少しは居る。支那人も居る。葡萄牙人も居る。露西亞人も居る。米國人はもとより居る。土人のカナカ人も、もとより居る。それが種々に雜婚して、種々の混血兒が生れて居る。世界中で、こんな處も珍しいであらう。とりも直さず、人種の展覽會である。

二　太平洋の樂園

椰子類の樹木がまづ熱帶の氣分を浮ばせるが、こんもりとした鳳凰木、垂條柳(しだりやなぎ)に似たキヤベ、藤の花のやうで

鬱金色の美しい花が咲く金雨花、いづれも荳科植物で、其の外に種々雜多の赤い花、黄色な花、白い花、草も木も濃厚な色彩を發揮して、處々に一面に綠の芝生、實に美麗といふより外は無い。それで、絕えず貿易風がそよそよと吹いて、溫度は八十五度を上らず、寒い時でも六十五度を下らず、米國人が太平洋上の樂園と誇稱するのも無理は無い。併しこれが、一年中この通りでは、何等の變化がない。春夏秋冬、四季の移り變りがあつてこそ、始めて面白いのである。一寸見ると良いやうだが、やはり日本に越したことは無いと思つた。

三　三週間を寢てくらす

果物の多いことは數へ切れない程ある。バナナを始として、パパイヤ、マンゴ、グアバ、オヒヤ、ペーヤなど、とても覺え切れない。切つて盆や皿に盛つてあるのを見ると、果物だか瓜類だか分らない大きいのがある。この中には隨分野生のものがあるから、そんなもので腹をふくらせれば、安く上るに違ひない。その上勞働賃銀が、比較的高いから、世界の各人種が、こゝに集つて來たのも無理はない。朝鮮人などは一週間だけ働いて、あとの三週間は寢て居るといふことである。

四　野生の鷄豚

野生といへば、鷄の野放しになつたのが、いつの間にか原野に繁殖して、野生の鷄が居る。さうなると、羽が高く飛べるやうになつた。豚も山に入つて、昔の先祖の猪に退化しつゝあるものがある。之を山豚といふさうだ。これはまだ實見はしない。

五　不勤勉な蟻

蟻が勤勉な蟲であることは、蟲扁に義の旁(つくり)であるのでも分るが、イソップ物語の蟻ときりぎりすの話も有名な訓話である。處が熱帶の樂園に生れた蟻は冬の用意をする必要はない。毎日の其の日暮しで貯蓄の必要はないから、蟻は此の地方に於ては、何よりの害蟲である。なまけものの標本である。

六　you の頭

カナカ語でモロハといふのが、なまけるといふことださうで、なまけものの事はモロハ、メンといふ。人種の混同と同じやうに、言語も無教育者の間には随分と混同する。日本人の勞働者などは、自分の事を單に me(ミィ) といふさうだ。地方の方言が、已に標準語からは隔つて居る上に、英語がまじる、土語がまじる。随分混亂して居るといふことである。國語教授は大抵な仕事では無い。現に余は或日理髪店に行つた、主人曰く、「you の頭一分刈ですか。all right!」

七　日本人の勢力

日本人は甘庶畑の栽培の爲に渡來した移民が多數を占めて居るが、立派な商店もあり、あまり立派でない商店も随分多い。ホノルルの市街を散歩すれば、どこへ行つても、日本人の廛鋪が目に附く。殊に町はづれのパラマといふ方面は、全部日本人の店である。そば、しるこの看板もあれば、御料理もあり、湯屋もある。理髪店は大概日本人の營業である。自動車の運轉手にも、日本人が居り、ホテルの給仕にも、日本人が居る。日本人の男子

は洋服で、婦人は日本服である。浴衣掛に下駄の日本服で、子供を連れて歩いて居る。電車の中には、振假名附の日本語で、注意書が貼つてあるし、電話帳を見ても、日本語で注意が書加へてある。以て日本人の勢力を察すべしであるが、大體に於て上流の人も少く、知識階級の人も少いから、布哇生れの日本人といふものは、どうしてもえらい大國民とは映じないさうである。

八 キ ャ ン プ

耕地の勞働者の住居をキャンプといふ。館府と書いて居るが、英語の camp である。緣の下をすかして、高く段々で上るやうになつて居るのは甚だ衞生的であるが、大抵は三疊と四疊位に臺所といふ具合で、これが夫婦者の住居である。頭分になると、もう少し廣くて、一寸家の周圍に花などを植ゑてあるのもある。一村の中には、おかみさんが片手間に、豆腐を拵へて賣つて居るのなどもある。湯屋もあり、共同雪隱もあつて、低い日本的生活をやつて居る。唯感心したのは、このむさくるしいキャンプの部屋を覗くと、大抵兩陛下の御寫眞を飾つてあることである。キャンプはすべて地主が給與するので、勞働者の得る賃銀は低いのが二十五弗卽ち五十圓、夫婦共稼ぎで、百弗卽ち二百圓を得るものもあるさうである。

九 一年一千五百萬圓

それでこれ等勞働者の日本へ送金する金額が一年一千五百萬圓といふのは大したことである。中には、二三萬圓の貯金を有するものも珍しくはないさうだ。布哇の移民は明治元年が始りで、其の中の一人は、五十萬圓の財

產家となつて、今は東京で御前樣と呼ばれて住んで居るさうである。

一〇　米國の軍備

とにかくいつの間にか、日本がこんな勢力を作つてしまつたのである。布哇の繁昌を起したのは、日本人が與つて大いに力があつたのである。近年米國では、それを有難いとは思はず、あまり日本人の多くなるのを恐れて移民を禁止した。それで新しい勞働者は來られない譯であるが、妻を呼び寄せることは出來る。寄婦人といふ一種の名詞が出來て居る。一年間に出生する日本人の子供が約三千人。何と言つても、米國人は不安心に思ふらしい。こゝに二萬人の陸兵を置き、又ホノルルの近傍眞珠灣に軍港を經營して居るのは、太平洋の樂園といふ名に對しては、甚だ矛盾した處置である。

一一　獨艦ガイヤー！

ホノルルの港に獨逸の小軍艦ガイヤーが武裝を解除したまゝ横たはつて居る。これは今回の大戰爭の開始とともに、この軍艦がこゝへ逃げ込んで來たのを、日本の軍艦肥前が來て見張つて居たので、やむを得ず武裝を解いたのである。乘組の水兵などは、三々五々市中を散歩して居る。二年越しの滯在、隨分と退屈なことであらう。「その時分は大變な騷ぎでした」と古い在住者から、當時の話を聞いた。

一二　自動車

流石は米人の住む所、人口六萬の都會に、自動車の數が三千臺あるのは、驚くに足る。平均すると、二十人に

一臺の割合である。一人づつ運轉手が要るとすると、もつと比例が變るが、此の地では男でも、女でも、自分で運轉して居る人が多いやうである。又一寸した人も自動車をもつて居る。或縣の學務課長に逢つたが、その人が翌日人に言傳して、「御見物の時は私の自動車をお使ひ下さい」と言つてよこした。日本の人力車といふ格である。

一三　電　話　料

電話料も他の割合にすれば安い。自宅用は一ケ月二弗半卽ち五圓であるから日本よりは安い。商館等は其の倍額であるさうである。電話帳を見ると、加入者の數は七千五百に上つて居る。人口に割つて見ると、八人に就き一人が加入者といふわけである。とにかく、何處までも機械を利用するのである。

一四　店の内は電燈ばかり

營業時間が濟むと、日本人や支那人の店の外は皆戸を閉ぢてしまふ。店員は各住宅へかへつてしまふ。「商賣は明日の朝始ります」といふ札を置いた儘で、店中一人も人氣の無い店が多い。表の硝子戸から覗いて見ると、品物は立派に陳列してある。留守居をして居るのは、煌々たる電燈許である。

一五　ワ　イ　キ　キ

こゝは年中海水浴が出來るが、ワイキキの濱邊が名高い處である。立派なホテルも澤山あるし、紳士の住宅や別莊もある。そこの土人の浪乘りも見物である。名高い水族館があつて、珍奇な魚類が澤山集めてある。魚類の

形の面白いのも多いが、其の色の美しいことは珍無類である。とても繪の具では、あの色は出せない。八月三十一日遙かに天長の佳辰を祝しつゝ　ホノルル府、ヤングホテルに於て。

カリフオルニヤだより

一　半熱帶の氣分

米領布哇を去つて、アメリカの西の入口サンフランシスコに着いたのは九月十二日。カリフオルニヤ州を巡遊したのが約半ケ月。氣候は年中八十五度を上らず、六十五度を下らずといふ桑港あたりから、少し隔つて百度にも上るといふサクラメント、又は桑港の南五百哩のロスアンゼルスまで、何處となく半熱帶の氣分に滿ちて居るが、薄霧に包まれた松の木、樫の木などを見ると、自ら故國の初秋の面影が身にしむやうに思はれる。合衆國の大きな領土から言へば、カリフオルニヤはほんの一部分に過ぎないが、これでも其の面積は舊日本（臺灣や朝鮮などを除いた）程あつて、しかも其の人口は僅かに三百萬人といふのである。まだ〳〵移住すべき餘裕もあるし、開拓すべき原野もある。

二　日本人の成功

從來カリフオルニヤの農業の開けなかつたのは此の地方は雨が少く、水を得るのに不便であつたからである。然るに近年の學術の進歩は河川なり鑿井なりから、水を引上げる工夫を容易ならしめたので、此の新灌漑法とと

もに、ドシ／＼新しい耕作地が開けて來たのである。最初は米國の教育を受け米國の學術を學ばうとはいり込んだ書生ばかりであつたが、いつの間にか、澤山の日本農業移住者が渡來して、この新耕作地の農業に從事した。さうして葡萄やイチゴや野菜や桃や無花果のやうな果樹園、ポテトの畠、薔薇や菊の花園等で着々と成功したのである。中には布哇から移住して來た人もある。格別特殊の教育を受けたのでもない人が、腕一本で成功して居るのがなか／＼多い。布哇の日本人の多くが、耕作地の雇人たるのに比べて、こゝでは立派な大地主もある。子孫々、この土地を守つて、永久米國の市民とならうと心掛けて居る人もある。併し成功者の裏面には多數の失敗者のあることをも知らねばならぬ。日本人の勤勉、儉約、怜悧の美質が、一面に於ては此等成功者を出したのであるが、小成に安んじたり、放逸に流れたりする側の人々には、已に半白にしてまだ將來の計を成し得ぬ人が多い。生存競爭に打克つことは何處でも同樣である。外國へさへ行けば濡手で粟と思ふのは、大間違である。

三　排日運動

とにかく人が少くて、仕事が多い處であるから、勤勉で、機敏で辛抱さへすれば、優に他の人種に打克つて行ける。これが日本人の成功の原因で、さうして又排日論の起つた所以である。日本人は骨を惜しまずに働いて、廉價に生活するから、とにかく叶はぬといふのである。排日論には種々の元素が含まれて居るが、この經濟問題も慥かに其の一つであるのである。勞働で金の取れる一例を擧げれば、熟した葡萄の實を二尺に三尺位な板一枚に摘取るだけで、三仙半卽ち七錢、一日出精すれば十弗卽ち二十圓の賃金を得られるさうである。農業ばかりで

無く、他の勞働でも、一時間二十五仙、一日二弗五十仙とすれば五圓の金が得られるから、廉價な生活を過せば、數年にして相應の貯金も出來る譯である。初め一文なしの勞働者が、かくして次第に產を起したのがなか〳〵多い。カリフオルニヤの農業は日本人のお蔭で、大いに發達したと言つてもよろしい。いつぞや此の雜誌に紹介された牛島ポテト王の如きは、今やこの邊のポテトの全權を握つて居る。オークランドの堂本花園から出る花は、桑港全體の飾り花を供給して居ると言つてもよい程である。人口五萬のフレスノ附近には日本人の土地所有者は四十三人もあると聞いた。今度は所々の農園も尋ねて見たが、僅か二三人の手で大きな仕事をして居るのには、實に感心した。一人の農夫の手で年額八千圓位は樂に得られるのである。ロスアンゼルス附近の一農家に行つて見たが、同家の主人は僅かに十エークル（日本の約四町六畝）を耕して居るのであるが、年收一萬二千圓、其の內半額は純利であると言つて居つた。かういふ成功は他の人種には出來ぬので、一方には日本人排斥論が根ざして來たのである。カリフオルニヤ排日論といふのは全くこの州だけの問題であるが、それがだん〳〵と中央まで侵して行くのである。カリフオルニヤの政廳の所在地はサクラメントで、この議事堂も見たが、この議事堂こそ卽ち排日議案の論戰の行はれる處である。排日の結果、サクラメントあたりでは、日本人入るべからずといふ料理店や茶店がある。もし其處へ入れば、いつまで經つても、誂へを聞きに來ぬ。又茶一杯でも出せば、代金五弗（十圓）を請求することになつて居るさうである。サンフランシスコでは、今はかういふ店が少くなつたと聞いた。

四　活動寫眞の本場

サンフランシスコよりも氣候がよく、且あまり日本人を嫌はぬのはロスアンゼルスで、此處の日本人は氣持よささうにして居つた。此の土地は方々から轉住者が集つて來るので、人口の增殖は十五年間に五倍したと領事の話であつた。今や人口は五十萬以上、桑港よりも盛になつて來た。こゝは天氣もよく、廣い土地があるので、活動寫眞のフイルムを製造する大會社がいくつもある。領事の話に百萬圓以上の會社が三、十五萬圓以上が二十、南カリフオルニヤ總體で六十三會社あつて、米國製フイルムの八十パーセントまでは、此の邊で出來るといふことである。こゝには日本人が市內に一萬、市の附近に居るのを合せれば一萬八九千に上るといふ。序にいふが、桑港の日本人は六七千、オークランドに二千人、ベルクリーに千二百人、アラメダ附近に一千人、サクラメントには二千人位だといふ。余は諸處を巡つて、日本人の日本語學校を見たが、いづれも米國の小學校へ行つた後で一二時間づつ日本語を授けて居るのである。米國に生れて米國人の間に育つた日本の子供故、日本語よりも英語が上手である。先生の惡口を言つたり、子供同士の喧嘩をする時には、英語を使ふさうである。これ等の子供の敎育問題は大切な事である。余は到る處に「國語敎育の必要」を說いて廻つた。これは布哇の子供にも同樣必要な事であると思ふ。

五　史蹟の缺乏

外國へ來て見れば感心する事もあるし、不感心な事もある。面白いとおもふ事もあれば、いやな事もある。日

本人排斥の話などを聞けば、誰でもよい心持はせぬ。永くアメリカに住んで居て、頭から足の先まで、米國に感心して居る人の話を聞いても、やはりよい心持はせぬ。金の力、富の力、機械の力の比較にならぬ程大きいのを見て、感心すると同時に、歴史の無いのが、最も不愉快に感ぜられる。歐羅巴を巡遊すると、到る處に歴史上の古蹟や記念物があるが、それが殆ど全く無い。あつても極めて新しいものばかりである。これは殊に米國の西部に著しいので、何となく新開の國、機械の國といふ感じのみがする。要するに一つの大きな建築物に對して立つた時、之が何百年以前の物で、誰それの遺跡と說明された心持と、之は誰それの寄附で、何百萬弗かゝつたと說明された時との相違である。米國へ來て何人も不愉快に思ふのは、史蹟の缺乏であらう。併し之も餘儀ない事である。

六　公共的事業

一代の富豪が巨額の資金を公共事業に投ずる事は、米國に於ける特殊の見物で、今日に於てこそまだ歴史的古色を帶びないが、これが數百年、數千年の後には、すべて歴史上の古蹟となるのであらう。個人主義の國、自由奮鬪の國として、自己の伎倆で、自己が築き上げた富を、惜氣もなく抛つて、同胞の爲に、公共事業をなすことは、誠に感心すべき美德である。大學や、圖書館や、病院や、其の他各種の公共團體はこれ等の寄附によつて出來て居るのが、極めて多い。米國人を目して單に物質に憧憬すると思ふのは淺見である。米國人は其の巨大な富を成し得る伎倆を感心する國民である。

七　新聞雜誌

空中に築き上げた幾十層の高屋、縱橫に走る電車や汽車や自動車、サンフランシスコやロスアンゼルスの繁榮は流石に米國大陸であつて、もとよりホノルルの比では無い。マーケツト街あたりの店飾りの美しさ、往來の人の華美な服裝、夜のイルミネーションの眼を眩するばかりの麗しさも、格別感心するには足らぬ。唯感心だと思つたのは、街頭に賣る新聞紙、雜誌の山を、來る人も來る人も、五仙なり十仙を抛つて買つて行くことである。教育の普及といはうか、讀書趣味の普及といはうか。とにかく、男も女も、金持も貧乏人も物を讀むことは容易で、近づき易いのである。桑港の新聞では、クロニクル、エキザミナー、コールなどいふのがあるが、エキザミナーは二三十萬も賣れると聞いた。之が有名な排日新聞である。勢力の偉大なのと同時に、善惡共に影響の著しいのは言ふ迄もない。雜誌は多く東部から來るのである。

八　赤リボンの人

桑港へ着く前に米國鐵道の役人の大罷工があると聞いて心配したが、大統領の盡力で無事に濟んだ。併し此の同盟罷工といふことは、米國を通じて、何の方面にも行はれるらしい。面白いのは桑港の料理店や飯屋の門口に、胸の邊に赤リボンを附けた男が立つて居る事である。これは給仕人や何かの勞働組合で、賃金を增させる爲に、之を承知しない飮食店の前に立番して居るのである。つまり間接に其の家へ出入するお客を監視するのであるが、さりとて出入の客の妨害をするのでも無い。唯根氣よく、朝から晩まで、入口の處に立つて居るのである。

こゝらが、米國式で面白い處である。

九　物のすたり

米國の飲食店で一人前を誂へると其の分量は無暗に多い。ビステキの一人前が日本の四五人前分もある。これを悉く平らげるとは、米國人は非常な大食家だと思つたが、十分食はずに棄てるのも多いらしい。何にせよ、物が豐富で贅澤であるから、粗末にすることが多い。或人の話に、米國人の食棄てで、佛蘭西人全體が養はれるさうだと言つた。これも米國式の大ザツパな所である。

一〇　細君の書記

サクラメントの政廳へ行つて、學務局長のハイアト氏に逢つた。教育の熱心家で色々な書類をくれたが、其の祕書役を務めて居るのがミセス、ハイアトであつたのは一寸驚いた。而して米國式の簡易なのに感じた。

一一　米國の國旗

國旗を大切にして、學校の式日などは勿論、毎日これに就いて注意させるやうにして居る。各國の民族が入込んで來て居る國柄故、近頃は殊に之に注意するらしい。諸役所は勿論、料理店でも、宿屋でも、少し大きな建物には、毎日星條旗が閃いて居る。

一二　将來はどうか

日米の間には色々な疎隔が横たはつて居る。歐洲大戰後の形勢は如何。日本人が開いた農園等は将來どうなる

であらう。日本人の移住は今の條約ではなか／＼むづかしい。妻を呼寄せることや親を呼寄せることは出來るが、その他の者はなか／＼移住が出來ない。今の所、新に生れる子供は繼續者としては小さ過ぎるから、中間の事業繼承者がなければならぬ。永年勞働して、いまだに產を成さず、體力が次第に衰へて行く老年の日本人はどうなるであらう。スタツクトンの日本人會の書記は殊にこの後の問題に注意して居つた。將來米國民はカリフオルニヤの問題としてでは無く益〻排日案の方針を固執するであらうか。日米の協約は今の儘で、改正せられる時期はあるまいか。カリフオルニヤにはまだ／＼富源は多い。

（大正五年十月、同六年一月「學生」）

歐米旅行談

單純に今日は旅行の道筋だけをお話いたしたいと思つて居ります。色々旅行間に見聞いたしましたことは、又追々書きもし、お話もいたしたいと思つて居りますが、今日は單に記憶から、自分の旅行の道筋だけをお話いたします。

私は昨年七月三十一日に日本を立ちまして、八月の初旬頃に布哇に着きました。布哇には一ケ月程居りました。御存じの通り布哇といふ所は所謂天然の樂土でありまして、一年中美しい花が咲いて居る。夏の最中でありまし

たけれども、風がそよ〳〵と吹いて誠によい所であります。こゝに一ケ月の滯在は私の旅行中でも今日から回顧しても非常に懷しいやうな氣がいたします。果物なども豐かにありまして、實に愉快な所であります。御承知の通り布哇は、その昔中濱萬次郎などが漂流した時分とは雲泥の違で、其の時分には非常に寂しい所であつたさうですが、近來殊に亞米利加が併合して後は急速に發達して、ホノルルのある島は誠に小さい島でありますが、今では自動車が三千臺もあるといふ位の有樣でありまして、亞米利加人の金の勢力で非常に賑かになつて居ります。人口は布哇の八島を合せまして、二十三萬人程あつて、其の中日本人は九萬人、殆ど三分の一以上居るのであります。日本人の勢力は中濱萬次郎の漂流した時分と比較しまするとと非常に發展して居るのであります。つまり布哇は米國の資本と日本人の勞働とで開けた島と言つても宜しい位であります。資本は亞米利加、勞働は日本といふやうな譯であるから、日本人はどうしても低い地位に居る譯であります。それで何處へ行つても頭が上らない。立派な家は皆亞米利加人の住んで居る家である。少數の商店とか何とかいふのは立派にやつて居りますけれども、大多數はいはゆる館府(キャンプ)住居です。向ふに居る日本人の學齡兒童は一萬五千人程もありますが、其の一萬五千の兒童といふものは、とにかく彼所で生れた者が多いのでありまして、彼等の頭には深く日本人といふものは餘程劣等な人種と映つて居るさうです。偉い者は米國人である、日本人は下等な人種だといふやうに彼等の頭腦に映つて居るのはやむを得ない事です。つまり子供等は、日本人には二種類あつて、一は立派な人、一は下等な者といふやうに考へて居るさうであります。そこで成るべく教科書を書くのでも、日本人といふものはさういふ下

等なものではない、日本は亞米利加より古い國である、亞米利加よりもずつと昔から特殊な立派な文明の開けた國である、金は無い國だけれども、偉い國であるといふことを書かうといふのが、私どもの讀本編纂の趣意でありまして、それを大分書いたつもりであります。ちよつとしたつまらぬ話ですが、茲に讀本編纂の苦心を申しますと、アイヱエオ五十音を教へる處で、「へ」の字に困つた。「へ」といふ字は何に當てて教へてよいか困つたのです。彼所は暑い國であるから、蛇が居るだらうといふので、蛇に當てて「へ」の字を教へるつもりで書いた。所が蛇が全く居らぬのです。もう一つは蟻です。蟻の貯蓄に就いてはイソツプの教訓の話がありますが、布哇では蟻は怠け者です。一年中暖いから貯蓄などはせずに遊んで居る。さういふ行つて見ないと分らぬやうなことが澤山あります。そこで讀本の初めから色々訂正いたしました。それから氣候風土を見ますと、なか〳〵面白いことがあります。そんなことで苦も無く一ケ月を過しましたが、私が初め行つた時分、新聞記者が來て私の話したことを聽いて、頻りに何でも珍しがつて書き、其の中には惡口もいはれましたが、其のうちに茅原華山氏が來られて、華山氏が今度は大きな氣焔を吐かれたので、「火山の大噴火で、芳賀の日蝕」などといふポンチが出たのはをかしうございました。

九月の初めに桑港へ渡りました。桑港も全體やはり日本人の勞働の爲に大半は開けたのであります。稻垣農學博士と一緒に農園を方々見ましたが、私にも日本人の居る所へ來て日本語に就いて話してくれと度々頼まれました。スタツクトン、サクラメント、フレスノ、ロスアンゼルスなどへも參りました。排日思想といふものは幾ら

か變つては居りませうが、サクラメントでは日本人が行つても咖啡も飲ましてくれない家があります。其の家は豫て聞いて居つたから行きませんでした。サクラメントはカリフオルニヤの州廳の在る所で始終排日の決議をする所でありますから、さういふ事もあるのは無理ではないと思ひます。併し例の牛島のポテト王とか、或は長澤の葡萄王といふやうに、立派に成功した人々もあります。牛島の農園はえらいものです。これはスタツクトンまで行つて、あれからガソリンの船に乘つて川を下つて行くのですが、日本の天孫降臨時代に豐葦原の瑞穗國といつたのはあんなものではないかといふやうに、川の中へ蒲ばかり生えて居る。豐葦原の蒲穗國ですな。何處まで行つても蒲の生えた沼地です。それを牛島氏が悉皆開拓したのです。ロスアンゼルスは立派な所です。日本人の街の多い所で、非常に好い所であります。

其處で稻垣君と別れて、私は一人でシカゴへ參りました。シカゴへ行つて文學士の小林郁君に會ひました。又シカゴでは文學士の松本彥次郎君が居りまして、色々話をしました。母校出身の文學士は誠に尠いのでありまして、初めて其處で二人に會ひました。ちやうどこゝで、東京府立第三中學校長の文學士の八田三喜君に會つて、それからは八田君と同行して紐育へ參り、それから東方をあつちこつち步きまして、ワシントンへ參り、ボルチモーアへ參り、ボルチモーアで文學士の厨川白村君に會ひました。相變らず達者で勉强して居られます。

南の方を先に濟まして、北の方はエール大學からしてハーバードへ行きました。ハーバードで服部教授の御紹介を得まして色々な人に世話になりました。ハーバードには一番長く丁度半ケ月程居りました。服部教授の御紹

介を得ましたウードといふ教授は丁度佛蘭西に行つて居りませぬで都合が惡うござゐましたが、併し圖書館長クーリッヂ氏が大變よく世話をしてくれました。工學士の人がこゝには最も澤山ゐました。法文方面の留學生には文學士の中川芳太郎君と法科大學の高柳助教授が居りました。それからエール大學にはかの朝川貫一君が居られますが、彼所には文學士の大島君も居ります。文學に關係のある人を言へば、先づさういふ人々であります。それからコロンビヤ大學では文學士の成瀨君に會ひました位なことで、カリフオルニヤの大學とスタンフオード大學には日本人が大分居り、前者には久野、後者には市橋といふ人が教官として居りますが、我が文科大學に關係のある人は誰も居りませぬ。ハーバードで中川芳太郎君を訪ねました時、丁度夏目漱石君が死んだといふ報知を得ました。御存じの通り中川君は夏目君の「文學論」などを校正したり訂正した人でありました。私は前に留學をする時には、夏目君と一緒に參つたのでありますから、實に感慨に堪へなかつた次第であります。ワシントンではスイングルといふ人が居りまして、この人がワシントンのコングレス圖書館を觀せてくれました。中へはいつて二回ばかり見ましたが、洵に設備の完全したことに感心しました。とにかく亞米利加は如何にも金の國であつて、設備だけは、到る處完全して居るのに感心しました。大學教授などは、つまらぬ人でも立派な室をもつて、助手を使ひ、それから女のタイピストを使つて居るといふやうな譯で、誠に自由に出來て居ります。文部省から實は教科書の調査のことを囑託されましたので、小學教科書を集めまするので教育學の先生などには色々な人に會ひましたし、名の有る先生の講義は一二時間づつ聽講しました。

それから愈〻倫敦へ十二月の末に渡るつもりでありましたが、だん〳〵延びて一月の初めに渡りました。十二月の中頃はカイザルが平和の提議をした時でありますす。丁度ボストンに着いた日でありましたが、其の時は成程平和になるかも知れぬと思ひました。亞米利加に居ると、如何にも平和になりさうに思はれたのです。新聞も頻りに平和のことを書いて居ました。丁度亞米利加で遭遇しましたのは大統領の選擧であります。十一月の七日が選擧日でありまして、學校も休になつて大騷をして居る。其の景況を初めて見ました。別に變つたこともないのでありますが、如何にも選擧の區域が小さくしてあつて、諸方に澤山拵へてある。理髮屋でも何でも選擧の場所になつて居る。誠に靜肅なものです。夜になつてタイムスの高い塔の上に結果を出すのです。ヒユーズが勝てば赤い球を出す、ウイルソンが勝てば白い球を出す。それを見に出掛ける人が非常な群衆でありました。一週間も前から女のデモンストレーションなどもありまして、女が到る所で大道演説をして居ります。こつちにレパブリカンがやつて居ると、向ふではデモクラツトがやつて居るといふ具合で、中には質問する男がある。質問するとそれに答へて居ります。七日の晩に決定するだらうといふので、非常な人出がありましたので、四十三丁目あたりはニツチもサツチも行かない位でありました。初めのうちは赤い球が出て居る。之はヒユーズの勝かなと思つて、夜十一時頃まで見てゐますとやはり赤い。結局初めから終まで赤い。之はどうしてもヒユーズの勝だなと思つて歸つて來ました。其の時分氣の早い連中はヒユーズの勝だといふ電報を方々へ打つてしまつたさうです。結果は翌日になつても分らない。三四日たつて、初めてウイルソンの勝といふことが分りました。私ども遲くなつ

て歸つて來ますと、窓から首を出してゐる人が、「どつちが勝つたか分つたか」などと聞くから、「眞赤だからヒユーズだらう」と言ふと、大いに怒つたやうなことを言ふ人もありました。とにかく熱心なものです。これは唯押し合ひへしあひの騷を見たといふだけのお話であります。

それから愈〻一月六日の船で英吉利へ行かうといふことに決めました所が、獨逸と亞米利加と戰爭が始まるといふ流言が盛にあつた。それが爲に株が上つたり下つたりする。途中で開戰になつては困るがなどと言つて居ります中、ランシングといふ亞米利加の國務卿が、愈〻米國も戰爭の渦卷の中に捲き込まれさうだといふことを漏した。それが問題となつて、一時大騷をしました。併しまあ決めたもんですからと、船に乘りました。所が船の出るのが延びた。どうしても六日に立ちませぬ。船の中から遊びに出て見ると、夜遲く號外が出まして、大西洋の西岸、つまり亞米利加の東岸へ獨逸の潛航艇が現れた爲に、今日出る筈の亞米利加船は明日に延びる。それから佛蘭西船も和蘭船も延ばすといふ記事があります。私ども船に乘つて居りますと、態々號外を持つて來て、「危いから下りろ」と言つて來た友人もありました。併しこれは流言に相違ない、さうむやみに戰爭をする筈はないから、まあ行かうぢやないかと言つて默つて乘りましたのが仕合せで、其の儘船が出ました。所が何ともなく濟みましたので、後から考へますと、やはり其の時分卽ち十二月の末から一月の初めに掛けて、盛に獨逸が潛航艇戰の實行で亞米利加を脅かして居つたものと思はれます。潛航艇戰を始めて、中立國の船でも何でも構はずにやるといふことを頻りに言つて居つたものと思はれます。ウイルソンの平和提議といふものはそれから起つて來た

らしい。初めはカイザルが人道の爲に止めるといふ提議をやつた。獨逸があゝいふ暴惡な事をやつて居りながら、人道の爲といふことを言ひ出したのがをかしい、人道の爲といふことは餘程當にならぬと私は思ひました。船の中の無線電信で愈〻ウイルソンが平和提議をしたといふことが分つて、或は英吉利へ着いたら平和の曙光も見られようかなどと賴みにして行きましたが、英吉利に行くと案外な有樣で、誰一人として平和などと言ふ者はない。初めからウイルソンの提議などは馬鹿にしきつて居る。飽くまでも戰つて獨逸を服從させようではないかといふのです。亞米利加で豫想して居つたのとは非常に違つて、實は驚いたのであります。

紐育の明るい都から行きまして倫敦にはいつて來ると驚いた。眞暗で何も見えない。唯暗黑の中を馬車に乘せられて宿屋へ行つた。冬のことですから夜は遲く明け、日は早く暮れる。霧の爲に眞暗で何も出來ない。博物館へ行つても眞暗で見えない。幸ひにナショナル、ガラリーが一部分開けてある。ブリチツシ、ミュゼアムは圖書館が一部分開けてあるだけであつて、其の眞暗なのが滯在中だん〳〵少しづつ明るくなりましたが、最初は困りました。私が歸る時分には餘程明るくなりましたが、戰爭は平和どころか、だん〳〵むづかしくなりまして、二月一日になつて、獨逸が愈〻潛航艇戰を宣言しました。私は斯波博士と共に切符を買つて、其の日に佛蘭西へ行くつもりであつた。所が朝起きると、新聞に今日から獨逸が潛航艇戰をやるといふ譯です。こんな日に出掛けて、やられた日にはつまらぬから、もう少し樣子を見ようといふことになりまして、佛蘭西に行くのは止めました。そこで斯波君は內地を旅行しようといふので英國內地の旅行に出掛けられました。私は倫敦に留まつて居りまし

たが、二月一日から獨逸の宣言が利いたのでありませう、全く船が止りました。東の航路卽ちニューカッスルとベルゲンの間の航路は停止してしまつた。西の方の亞米利加船も悉皆止つて、東西共に交通が絕えました。唯僅かに通ずるのは郵船會社の船だけである。郵船會社の船が喜望峰を廻ると六十日間で日本へ行ける。やむを得なければそれで歸らうといふ考でありました。私は四月頃に歸るつもりでありましたから、まだ十分に時日がありますが、困つたのは二月に立たうといふ人々でした。旣に船の切符などを買つて、露國の貨幣なども替へて居る。もう一週間で立たうといふ人が皆行けなくなりました。井上先生の御婿さんの押田君は餘程都合がよく、一月の最後の船で諾威へ行かれましたが、其の後は全く止つてしまひました。陸軍の軍人が十人ばかり居りましたが、それも止められてしまつた。日本からの手紙も新聞も來ない。さうなつて來ると大分心細くなつた。私どもはまだ先があるから、好い時期が來るだらうといふ考で居りましたが、急いで居た人は、居れば居る程金も無くなるし、困つた人が澤山ありました。英吉利の新聞に、日本の人が、政府との交通が絕えて、金も無くなつて困つて居るなどと書いた事もあります。併し金はどうでもなるが、船が出ないのに困る。をり〳〵日本人會へ集ると、どうして歸らうといふ相談ばかりしてゐました。「今度歸つたら一つ倫敦籠城會といふのをやらうではないか。其の時若しボートに乘移つた人があつたら、そんな人は會費を免除することにしてやらう」などといふやうな話もして居りましたが、なか〳〵埒があかない。

三月になつて、私はエヂンバラ、グラスゴー邊りを旅行して來ました。さうすると三月の十九日でありました

か、私が眼が惡いといふことが新聞で傳はつて、文部省から電報が來て、何時でも歸れといふことを言つて參りました。私は佛蘭西へ行かずに歸らうかと思ひましたが、丁度斯波君が歸つて來て、「これから佛蘭西へ行かう」と言ひました。私は其の時實は三月二十八日にジャパン、ソサイテーに演說を賴まれて、其の草稿を書いて居る時でありました。斯波君も一人ではと言つて居りましたが、結局一人で行きました。私も四月初めに佛蘭西へ行かうとも思ひましたが、海軍の知人が「唯見物に行くのならお止しなさい」といふので止めました。今日から考へると、行つて來ればよかつたと思ひます。

其のうちに英吉利の方では例の食糧問題がだん〳〵やかましくなりました。大分潛航艇戰が烈しくて、一月間に五十萬噸位の船がやられる。日本ならば四ケ月位で船がすつかり無くなつてしまふのです。併しどん〳〵補充もするし、又外國から買入れる。それから新に急いで製造をして居る。けれども何しろ五十萬噸づつやられるのみならず、亞米利加の船、和蘭の船、諾威の船が皆止つてしまつたから大變困る。そこで食物の制限が益〻やかましくなつた。私が亞米利加から倫敦に着きましたのはロイド、ジョージが就職した後であつて、晝飯は二皿、晩餐は三皿といふ制限が已にありましたが、今度は肉が一人分五オンスと定まりました。五オンスといふと四十匁ばかりで、小さいビステキ一つ位であります。私は宿痾で肉食は成るべくしなければならぬ。それ故、一軒で足らないと又隣の家に行くのです。さうすれば二つでも三つでも食へる。結局旅客はそんなに困難はいたしませぬ。ミートレスデーといふのが出來まして、火曜日には一日肉が無い。魚と卵は食べさせるけれども、肉は全く

ない。日本人はそれも困らない。魚と卵があれば困りません。それから砂糖が缺乏して、赤砂糖です。私は殊に砂糖が少くても、ちつとも困りません。それからポテトが無くなりました。ポテトは滅多に食べないけれども、これも私は困りませんでした。

英吉利の目の敵は獨逸で、私が行きました時分、國債を募集して居まして、三百億圓も集つたのですが、あの國債募集の張紙が、ピカデリー邊りでは、大きな字で書いて貼出してありますが、それを見ると、「國債の募集に應じなければ獨逸に對して恥である」「獨逸が見て居るではないか」「獨逸人に笑はれる」といふやうなことが一杯書いてあります。すべて獨逸を相手にしてやつて居る。

教育社會から兵隊に出て居るものは非常に多い。これは戰爭が始まつてから直ぐに其の通りでありましたらうが、小學校の教員で從軍したものが一萬九千人あるさうです。諸處の大學からも行つて居る。オツクスフオードの卒業生が一萬一千人程行つて居つて、其の中で一千人は戰死して居る。イートンの學校からは五千人も戰爭に行つて居つて、其の中五百人は戰死して居るといふことであります。さういふことで貴族などが先んじて戰爭に行つて居るのでありますが、これが流石に英國の英國たる所です。此の大戰爭にあつて、三年目の今日もびくともしない。愈〻米獨戰爭が始まつて亞米利加が英吉利方に附いても、新聞の論調でも何でも平氣なものです。亞米利加は今頃附いて何をする氣かといふやうで、少しも驚かぬ。さうして其の澤山の金を募集しても非常に賑やかなものであつて、人々は相變らず澤山の買物をして歸る。少しも戰時といふやうな狀態でない。流石に底力の

ある英吉利の國は大きいといふことを感じたのであります。ロイド、ジョージは非常な人氣役者で、國民の信頼は極めて厚い。どんなことがあつても、ロイド、ジョージでなければならぬといふので、政府のすることは皆よく實行されて居るのであります。

酒は誠に不自由です。晝間は十二時から三時まで賣り、夜は六時から九時まで賣る。ちつとでも其の時間が過ぎると飲むことは出來ませぬ。私の爲には却つて仕合せでありましたけれども、九時がチン／＼と打つともう賣りませぬ。もう一杯飲みたいと思つても、チン／＼といへばもう飲めないので、殘念なことが隨分ありました。それ程に皆規則を正しく守つて居ります。それからミートレスデーには、日本人會でも牛肉の鋤燒も出來ない。實に規則正しくやつて居ります。到る處如何にも緊張した氣分で、此の戰爭に對して飽く迄も敵を屈服させなければやまぬといふ緊張した氣分の漲つて居る事は、非常に敬服に値すると思ひました。すべての方面にそれが見えて居ます。

愈〻四月になりまして、そろ／＼歸朝の用意をしなければならぬと思つて居りました。海軍へ行つて相談しましたら、西班牙から亞米利加へ通ふ船があつた。亞米利加の大使のゼラルドは其の船で歸つたので、其の船は非常によい。それで亞米利加へもう一遍歸らうか、然らずんば日本の郵船會社の船で歸らう。郵船會社の船なら萬一のことがあつても日本人だから大變都合がよいと思つて、それにしようと思つたりしました。御存じでありませうが、今度一番困つたのは英吉利內地を旅行すると、到る所に旅行者の帳簿が拵へてあつて、警察へ行かなけ

ればならぬ。又立つ時にも警察へ行かなければならぬ。それは面倒でありましたが、とにかく其の出國手續をやつてくれましたから、私は大變便利でありました。愈〻四月二十一日倫敦を立つて、アバディーンより乘船しましたが、諾威のベルゲンに行くまでといふものは茫漠たる海でありまして、船が一艘も見えませぬ。其處に潛航艇が働いて居るのです。潛航艇こそ御苦勞千萬な事と思ひました。

ベルゲンでは宿屋が一軒もない。皆滿員です。とても泊れない。「直ぐに汽車でクリスチヤニヤに御出でになるがよい」といふので、汽車に乘らうとしたが、汽車は三等だけしかない。座席劵があるから席を占めて乘りました。其の日の夜の十一時過にクリスチヤニヤに着きました。クリスチヤニヤでも宿屋がない。同行の稻垣少將の名で朝から電報を打つたが、少しも效がない。何でも二週間位前から打たなければだめだといふことです。ベンネット會社の案內者が一人出て居りまして、諸方へ電話で聞いてくれましたが、一つもない。此の頃は警察署の前へ野宿をするものが澤山あるといふ始末です。野宿は少し困るが、何とか出來まいかと困つて居ると、たつた一つナショナル、ホテルといふ宿に一間あるといふから、其處へ行かうといふので、馬車へ乘つて行きました。行つて見て驚きました。六疊の間位で、半分は上に梯子段の裏が出て居る。それは浴室で、其處に小さいベッドが一つ入れてある。下女か何かの寢る所です。其處へ吾々一行六人がはいつたのです。一間あるといふのはそれなのです。それから色々談判して、漸く一間持の客が今夜だけ例の風呂場へ寢てくれる事になり、稻垣少將と私だけベッドを貰つて、他の人は椅子を並べたりして漸く一晚を明かしたのです。併し都合の好いことには、夜が

早く明ける。もう四時頃になると明けてしまひました。所が其の宿屋が恐しく高いのです。一晩三十クローネでした。それから先ぱ陸軍のお蔭で、稲垣君が電報を打つて置くと、それ〳〵駐在武官が世話をして下さつたので、大いに樂でした。諸威は食糧問題はあまりやかましくない。瑞典の國境ではパンのカードを渡します。小さいカードです。「お前は何處に行くか」「露西亞に行く」「露西亞なら三日分のカードを渡す」と言つて、カードをくれる。それを貰つて來なければ朝飯も食へないのです。

それからストツクホルムに着いて宿屋に入りましたが、汽車の切符が買へない。四五日位は待たなければならないといふ事でしたが、幸に三日目にストツクホルムから露西亞まで行く切符が買へました。ストツクホルムから眞北にハパランダまで北緯六十六度まで進むのです。トルネオへ橇で渡つて、叉汽車に乘つてペトログラードへ行くのです。其の間が四日かゝりますが、其の間でうるさいことは、到る所に兵隊がしらべに來ることです。芬蘭へはいると一層やかましい。兵隊が夜も起しに來て、パスポートといふ。パスポートの外に英語を知らない。こちらも旅券を唯出すだけで、ちよつと見て、とにかく安心して敬禮して歸つて行きます。

ペトログラードに着いたのが五月一日で、勞働者大會のあつた日で、馬車も何もない。大使館附武官石坂少將等の御盡力でやう〳〵馬車を二臺無理に拵へたらしいが、停車場から宿屋まで十二三町しかありますまいが、其の馬車一臺が五十留(ルーブル)取られました。露西亞では西伯利亞鐵道を今は參謀本部の手で握つて居りますから、普通の人では三ケ月位前から申込まなければ通れない。何しろ一週間に一度しか出ませぬ。火曜日毎に出るのです。私

が着いたのは五月一日で火曜日であつたから、丁度此の八日に出る譯です。そこで八日として參謀本部に申込んだ。露西亞に居る間は文學士エリセーフ君が居まして、萬事世話をして大分案内もしてくれました。それから文學士の今井時郎君が居つて、色々世話になりました。もう一人の今井君には逢ひませんでした。露西亞では言葉が分りませぬから一番困りました。丁度行きました時が五月一日で、それから三日に騷動がありましたが、到る處兵隊ばかりで埋まつて居ります。巡査は一人も居らない。自治義勇兵のやうなものが劍付鐵砲を持つて角々を守つて居ります。聞く所によりますれば、隨分泥坊も橫行するやうでありますが、練兵はやつて居りました。此の間の革命によつて斃れた者の死骸を集めて練兵場の眞中に埋めて、其の上に赤い旗が立ててあります。それから例の冬宮ですが、日露戰爭を宣言した時のバルコニーの上には、やはり赤で「自由の爲」とか何とか書いてあります。大使館の紹介で冬宮を見に行きましたが、其の案內はエリセーフ君がしてくれました。此の間までの宮內省の役人が「これは昔ならば皇后樣のお通り道」といつたと言つて、エリセーフ君が笑つて居ました。全く無警察ですが、秩序は割合に保たれて居る。乞食なども澤山居るけれども、亂暴する奴はない。

唯私の驚きましたのは、立ちます時にペトログラードの停車場へ來ますと、其處に陸軍の少尉が居つて敬禮して居りますから、稻垣少將に敬禮して居ると思つたら、結局其の士官が「錢をくれ」と言ひ出しました。大いに驚きましたけれども、稻垣君がとう〳〵一留出してやつた。さうしたら、「メルシピアン」と言つて歸つて行きました。これには隨分驚きました。それから汽車で荷物がなくなるといふことを聞きました。現に此の間行かれま

した大河内子爵なども荷物を四つなくしたといふのです。エリセーフ君は色々露西亞の惡口を言つても大概承認する方ですけれども、「汽車の中で荷物がなくなる」といつたら、「そんな事は私はまだ經驗しません」と言ひましたが、併し實際頻繁になくなるさうです。それから乞食が到る處に居る。イルクツクまでは殊にひどいやうです。それから停車場でも、汽車が停りますと演說をやつて居る處が澤山あります。女も立つて演說をやつて居ります。男もやつて居ります。それからペトログラードから汽車が來たといふと、皆人々が寄つて來て、「ペトログラードの有樣はどうか」と云つて尋ねる。汽車が出るまで集つて聞いて居ります。それから兵隊が自由歸休を許されて居るから、澤山乘る。私どもの乘つた汽車は急行列車でありましたが、普通列車は一杯で、乘る處がなくて屋根の上にも乘る。連結所にも四人位は乘る。それから便所の中にも何人かはいつて居る。男は小便に行くが、女は行くことが出來ない。女は停車場に着いた時に窓から出して貰つて、叉窓からはいるといふやうな始末ださうです。私どもの列車も二十四時間遲れました。停車場へ着くと、其の急行列車の前に色々停つて居る車があつて、其の爲に遲れるのです。それから或處で兵隊が「自分の車を先へ出せ」といふ。所へ士官が出て演說をして、「此の列車には日本の外交團が乘つて居るし、露西亞の官憲も乘つて居る。そんな我儘を言つては困るから、此の列車の方を先に出せ。贊成の者は手を擧げろ」と言つたら、隨分手を擧げたさうです。さうして漸く出ました。其の事がないと、非常に遲れる所であつたのです。其の士官は大變皆に感謝されて居つたのです。それから汽車の火事がありました。汽車火事といふのは初めて見ました。向ふから來た奴が三貨車程燒けてしまつた。そ

れは吾々の列車とは離れて居つて、喞筒で頻りに消しました。それが爲に二時間許遲れました。イルクツクから此方は本當の急行になつて、大いに樂になりました。西伯利亞鐵道の旅行は、五月の上旬から六月の上旬頃までが最も好い時期であるといふことで、誠に氣候は好い氣候でありますが、如何にも埃が多いのと水が惡いのには困りました。

滿洲里まで來ますと、支那の官憲の檢査がありますが、これは非常にやかましいのです。日本の南滿洲鐵道へはいりますと、停車場は塵一つも無いほど綺麗になつて、非常なコントラストです。其の代りにバタとパンがまづくなる。南滿から朝鮮にはいると更にまづくなる。朝鮮から馬關へ着くと、叉更にまづくなる。此の前に歸朝した時は海からだん〳〵日本の山が見えて來るといふと非常に愉快に感じましたが、今度は大陸つゞきで、だんだん日本の勢力範圍にはいつて來る、卽ち南滿洲鐵道にはいつて、それから朝鮮にはいつて、日本の兵隊も居る、巡査も居る、更に馬關へ來ると純粹の日本へ來るので、其の時分の愉快といふものは一寸言へないやうな氣がいたしました。

先づこんなことが大體私の旅行の筋道であります。最も感じました事は、要するに非常に新しい活氣を以て進んで居る所の亞米利加から、稍老大國で、古い强い根をもつて居ります所の英吉利へ行きますと、それが今度覺醒したやうな有樣を呈して居る。さうして今度の革命で半分亡びかゝつたやうな露西亞へ來て、非常に色々な考が浮んだのでありますが、それに就いても、とにかく敎育といふものが根本であるといふことを感じました。民

を愚にして居つて國が立つものではない。支那にしても、露西亞にしても、人民を愚にしてゐたのが、今日の革命の源です。國民の自覺なしに唯武力を以て爭ふといふことは到底出來ないことである。英吉利が上から下まで擧國一致で戰つて居つて、酒を一つ賣るといふ一寸した規則でも、ちやんと行はれて行くのも、とにかく國民に徹底した自覺があるからであります。佛蘭西が誠に健氣な有様で戰つて居るのも、それから來て居ります。露西亞が民を愚にして置いたのが、今日の革命の根本であるといふことは、露西亞の狀態を見てつく〴〵感じた事であります。

擧國一致といふことは、今日一番大切な事であると思ひます。其の點に就いては布哇、カリフオルニヤから始めて、日本人には一體にまだ修養が足らぬと思ひますが、それには歷史上、社會上種々の原因がある筈です。どうしても益々教育の力に俟たなければならぬ事で、今後は一層其の點に注意しなければならぬと思ひます。

それに就きまして殊に慨歎に堪へないことは、文科大學の卒業生といふものが、まるで外國へ行つて居らぬことであります。行つて居る日本人で大學出といへば、大半工科の學生である。工科の學生は何十人か行つて居る。其の他は陸海軍の武官である。其の他は銀行家、商業家である。英文學研究の人は行つてゐますが、教育の視察に行つたのは私と一緒に步いた八田君位であります。單に物質的の事を調べに行く人ばかり多くあつて、戰爭がどうであるか、潛航艇はどうして造るか、飛行機はどうして造るかといふやうな事ばかり視に行く人が多い。機械の方とか、製造所の事業とかいふ方面は澤山行く人がありますが、さういふ事ばかり學んで來ただけでは、今

後の日本が立つて行くかどうか、此の點を深く感ずるのであります。殊に此の時機に際して、將來國民の思想界を指導するやうな階級即ち文科の卒業生といふ者が行つて、大いに研究して來なければならぬことと思ひます。哲學科の卒業生はもとより、歷史科あたりの人も行つて露西亞の歷史を研究するがよし、日本に居るよりは、向ふへ行つて實際を目擊して來なければ本當に分らない。幸に此の頃今井時郎君などが行かれたことは、時宜を得た次第でありますが、さういふ人をもう少し澤山出して、將來日本の國民を指導する所の人を造らなければ嘘であると思ふ。

つまり私の步いて來た所を總括して申しますれば、一言唯「邦家の前途容易ならず」といふことを深く感じたのでありまして、其の邦家の前途をよくしようといふには、學長を始め諸教授が御盡力下さつて、文部省などを動かして、もう少し文科の學生を出すことが必要であると思ひます。唯機械的の文明を學んで來たり、軍備擴張を學んで來るばかりではいけない。さういふ事を深く感じましたから一言其の事を添へて、あとは旅行談を申上げた次第であります。甚だ長うございまして、お睡うございましたらうと思ひます。

（文科大學歡迎會講演、大正六年七月「東亞之光」）

法科萬能主義を排す

學校教育の目的が國家有要の人物を養成するにあることはいふまでも無い。我が大學に就いて見ても、便宜上分れてゐる法醫工文理農の六分科大學、各分科大學の下に置かれてある幾十の專門學科、いづれも國家に必須な學術技藝の理論及び應用を敎授し、又は研究するのを目的とすることは、大學令の明言して居る所である。要するに國家は其の存立、發達に必要な各方面の人材を造つて、適材を適處に用ひようとするのである。各專門學科を修了した卒業生は各其の堪能な學術技藝を以て、飽くまでも國家に貢獻しなければならぬ。國家の目から見れば、各科堪能の士をして、十分に其の伎倆を悉させ、十分に其の活動を自由ならしめて、遺憾なきを期せねばならぬ。

語を換へて言へば、各科專門の人が各其の知識材能を應用して、出來るだけ廣汎な範圍に活動するのが、國家の利益である。各分科大學、各專門學科の間に輕重優劣のある譯は無い。

然るに現代の狀態は法科の卒業生を殊に偏重する傾向は無いか。これは官吏任用令に就いて言ふばかりでなく、民間の人材登用例に就いても、どうもさう思はれるのである。高等文官たるにも、外交官、領事官たるにも、法

律政治の學問を第一に見るから、此の方面は常に法科出身の向ふ所であるのはいふまでもない。隨つて政府の要路に立ち、外交の衝にあたるものは、今日も已にさうであるが、將來は悉皆法科出身者を以て充さるゝであらう。地方行政に與る人も、やはり同樣で、近頃は若い法學士連が、各府縣の郡長に任命せられるのも珍しくない。衆議院をはじめ、地方議會に於ても、其の多數を占めるのは法政の學を修めた人である。自治團體の機關もさういふ人の手によつて動かされて居るのである。民間の有力な會社銀行、銀行と言つてもつまりは會社であるが、一切の商工業會社にも、人物を採れば、必ず法科出身者を採る。今は公立學校長等には理科、文科出身の人も多くなつたが、近い頃までは、法科出身者で官吏又は民間に地位を得なかつた人が、やむを得ず敎育界に身を投ずるといふやうな形勢もあつた。近年著しい事は、貴族院勅選議員の缺員ある場合には、必ず官吏の古手などを任命することで、かういふ事は、決して貴族院令の精神に合してゐまいと思ふ。要するに上は輔弼の大臣から、下は刀筆の吏に至るまで、一切の國務政務の施行者、商事會社の事務擔當者までも、法科出身者ならでは、其の地位を與へられぬといふ有樣、專門の技術を要する官衙でも會社でも、之を經營し、之を指揮し、之を監督する役目は法科出身者に委ねられて居る。一言で言へば、法科萬能といふ譯で、法科出身者の要求は、社會の各方面に盛である。隨つて、帝國大學を始め、各私立大學も皆多數の法科生を有して居る。有名な私立大學中には、法科だけの單科大學が多いのである。

かゝる狀態は必要から來たものであらうか。一切の事務にそれ程法科の知識が必要なものであらうか。學校で

學んだだけの法科知識で、萬般の事業に當るだけの素養が得られるのであらうか。他の學科を修了したものは、それ程融通の利かぬもので、法科の學問だけが、それ程廣く融通の利くものであらうか。法律學者が司法官となり、辯護士となり、經濟學を修めた者が、商事會社の顧問となるのに不思議はないが、官衙と言はず、商店と言はず、學校と言はず、中心人物は常に法科出身者で、法科以外の各專門科出身者は皆唯技師の樣な位置に坐らねばならぬものであらうか。これ余が常に疑問とする處であるが、更に一層大きな疑問は、かゝる狀態が、國家の發達進步の爲に、最善の組織であるかといふことである。

平安朝の昔支那の文明を容れた頃には明經道、紀傳道、明法道などと言つて、支那の哲學や歷史や文學を主として人物を採つた。其の中で、明法道といふのは、日本固有の法制を研究するのであつたが、それが一番輕く視られた。これは支那文明を尊重した結果で、此の頃の支那崇拜には決して感心が出來ぬし、此の時代の政治がもとより理想的では無く、此の時代の制度が、今日に實行せられようとも思はぬ。かの明法道の輕んぜられたといふことも、日本の法律制度が簡單で、明經、紀傳ほどむづかしくなかつた事が原因であるらしい。今日の歐米對等の日本國で、法律や政治の知識の大切な事、又其の學問のむづかしい事も、もとより同日の談では無いが、唯歷史上の事實として、平安朝の時代は法科萬能主義で無かつたといふことは認め得られる。それは政治の根本が違つて居ると言へば、それまでであるが、日本の國家は過去からの接續であるから、過去の事も考へて見ねばならぬ。之と同時に、歐洲諸國の今日の狀態が、果して法科萬能であるか否かといふ事も考へて見るがよからうと

思ふ。

德川時代の各藩の政治は多く儒學者の手から出たのであつた。古來の政教一致の國民はこれで導かれて行つたのであつた。法理を知らない常識の判斷でも、不文法の簡易時代には、差支がなかつたので、今日の立憲國民の政治家として、昔の儒學者が役に立たうとは思はれぬが、政治の根本を理窟づめ、規則づめで行かなかつた處に、無限の面白味があつた。儒學者が立派に經濟の事を論じ、土木の功を擧げた類は、もとより枚擧に暇がない。法學通論も財政通論も知らなかつた儒學者の政治的手腕は、今の法科出身者の企て及ばぬものが澤山ある。今の世は昔とは全く別であるが、「法科出身者でなければ、何等の事務にも携はれない。其の他の者は技術者で甘んじて居れ」といふのは、僻した考ではあるまいか。寧ろ誤つた考ではあるまいか。

維新の後、政治の根本を西洋に則とるやうになつて、第一に困つたのは、西洋の事情の分らぬ事であつた。洋學者といふ廣い名の下に、少しでも西洋の知識をもつてゐるものは、どし〱採用せられたが、法律を制定實施する上に於ても、條約改正を始め、あらゆる政治上の革新を成就する上に於ても、又議院制度の地方及び中央に行はれるといふ時に際しても、大拂底大必要を感じたのは、法律政治に關した心得のある人物であつた。それ等の急場に應ずる爲に、各種の法律專門學校が東京に起された。これ等が皆今日の私立大學の前身で、之に學んだ人達が、或は朝に、或は野に、或は帝都に、或は地方に、政治家としても、實業家としても、それ〲適當な職務に配置せられて、立憲制の準備をしたのであつた。法科萬能主義の基礎は恐くは此の時に置かれたのである。

其の後にあつて、いはゆる電信の貪緣によつて、何の能力も無い故舊知人を官吏に推擧した弊害を矯める考も一因であつたらうし、官學出身の者を登用して、私學校の卒業生を排斥しようといふ考も一因であつたらうし、例の高等官任用令といふものがあらはれた。此の時代の大學の文科、政治科は甚だ接近したものであつたので、最初の任用令には文學士も高等官になれる特典を與へられたのである。任用令の改正とともに、法學士も私立學校の卒業生も文官試驗を受けなければならぬ事になつたが、文學士はいつの間にか其の特權を奪はれてしまつた。文科出身者は學校教員か、特別任用令による文部省の官吏より外には、全く排斥せられてしまつたのである。

文科出身者で貴族院勅選議員になつて居るのは、現今澤柳政太郎氏及び現文相岡田良平氏の二人、現時の文部省を見渡すと、大臣岡田良平氏が文學士で、局長以下大抵法學士揃ひ。まして其の外の省には誰も居らぬ。衆議院には樋口秀雄氏や小山東助氏等が居るが、文學士で實業界に身を投じて居る人は殊に少い。文學士の大多數は學校教員で、其の他は文筆を以て立つて居る純文學者である。これは帝國大學ばかりでなく、他の私立の文科出身者を見ても、さうである。文科出身者の多數が教育者となり、文筆家となることは、もとより當然なことである。けれども文科に屬する十數の專門學科、いづれも國家に須要な學術技藝であるべき專門學科を修了したものが、教育者、文筆家たる以外には排斥せらるべきものであらうか。文科に屬する學科の應用はさまでに狹隘なものので、文科の出身者はさまでに無能なものであらうか。其の學術技藝は單に技術的に活用せらるべきもので、經營畫策といふやうな方面には全く役に立たぬものであらうか。文科出身者の社會に雄飛する範圍の狹いのは、文

科の學科や教授法に悪い點もあらう、出身者に活動力の無い原因もあらう。併し社會が其の活動する範圍を狹めて一向に活動させぬといふ原因もあるのである。明治初年からの法科萬能主義が先入主となつて、文科出身者が活動し得る地位、活動させてよい地位をも、與へぬといふ事も考慮しなければならぬ。これが國家の人物經濟から言つて、利か害かといふことを考へなければならぬ。

鐵道院總裁の事業は政治家でなければ出來ぬか。理化學研究所の總裁は名望家でなければ出來ぬか。或はそれぞれ專門の技能に卓越した人が若しあつたとすれば、其の方がよいか。病院長の經營が醫者で出來るならば、苟くも常識のある限り、それ〴〵の專門家は、單純に技師たるのみならず、その專門の學術技藝に關する經營に當る方が國家としての利益ではあるまいか。其の方が事業の進捗の上に效益が多いのではなからうか。それとも專門家はあくまで專門技師として、其の上に法科出身の人が居なければ嘘であるか。どちらが徹底するかといふことを考へて、歐米の有様を觀察し、日本の現狀を顧みると、日本の社會には學問の價値がまだ十分に知了せられず、進歩の途中にあるやうな氣がしてならぬ。

他の專門學科に就いても同樣であるが、殊に文科の學問の性質から言つて、文科出身者が社會へ額を出されぬといふのは、國家の爲甚だ憂ふべき事と思はれるのである。國家將來の爲に大いに寒心すべき事と思はれるのである。文科の學術はすべて國民の思想界に關係のあるものである。古來我が國民の思想を支配して來た東洋哲學の思想、現今盛に輸入せられつゝある西洋思想、哲學心理の研究を基礎として、倫理學科、宗教學科、社會學科、

教育學科等、いづれも國家の現今及び將來に非常な影響をもつて居るものである。史學科に於ける西洋史、東洋史、國史の研究を餘所にしてどうして今日の政治が談ぜられよう、どうして將來の國是が定められよう。文學科の各國文學及び國文學の研究、これが無くして、古來各國民の民衆の嗜好も傾向も、乃至は哲學も歷史も了解せられるものでは無い。理工農等の各專門學科其の必要に於てもとより輕重はないが、直接に文明の過去を取扱つて、將來の指導を與へるのは文科に屬する學問である。其の應用の廣汎にして、且重大な事は言を待たない。世界の大戰亂、大變動の時世に際して、法科萬能主義で濟まして行かれようか。

學者としても、敎育者としても、文筆家としても、文科出身者が其の思想を鼓吹して、後進を誘掖し、社會を指導することはもとより出來る。これは現に公私文科出身者の已に勉めつゝある處で、今後は一層の努力奮勵を以てやらねばならぬことである。此の事に關しては、大いに公私文科出身者の自重を望むのである。併し國家全體の機關といふ上から見て、文科出身者を全く技師扱にして置くことが、どうしても不利益、不經濟であらうと思ふのである。文科に屬する學問の素養の無い人だけで國家を鹽梅調理して行くことが、如何にも危險に感ぜられるのである。今日の狀態は法科出身者で、他科方面の局に當る人は、職務を承つてから始めてそれを研究するので、現にさういふ風に進んで、專門的の知識をもつて居る人もある。之と反對に、專門家をして最初から其の局に當らしめて、さてそれに必要な法制的知識を後から學ばせてもよいのでは無からうか。明治の初年ならばいざ知らず、今日では其の方が有效では無いかと思ふのである。政府の企てる事業が、いはゆる技師の忠言に聽い

て起り、豫算難に逢つて忽ち削去せられる樣な例の比々あるのを見ると、其の責任者たる人が、其の事業を果してよく理解して居るか、或は一知半解では無からうかといふ樣な疑問も起るのである。從來の政治家にはまだ文科に屬する學科の素養のある人もあつた。今後の新進の人々で郡長から始めて、地方官も、地方中央の議員も、自治團體の役員も、一切萬事法制一點張で進むことは、歷史ある國家を運轉する上に於て、如何なるものかと心配になるのである。近來の我利我利的政爭や歐洲の大戰亂を見て、殊に其の懸念を深うするのである。

要するに、現今は法科萬能の世の中である。日本が急に法治國となる爲に、此の形勢を馴致したのである。他學科は姑く置き、國家の思想界を指導すべき文科は、今日全く度外視せられて居る。換言すれば、虐待せられて居る。これは文科大學並びに公私文科卒業者の爲にいふのでは無い。我が國家將來の事は、國家を憂へる人の言はねばならぬ事である。今日の狀勢で行くと、全國の秀才は文科には最も緣が遠い。論より證據、多少の優秀者を別として、今日高等學校の入學者で、文科に入るものは、法科を第一志望としたものが、假にはいるといふ形跡がある。これが果して國家の健全な狀態であらうか。今日はまだよい。國家の大勢を考へる人は、將來の日本國を考へなければならぬ。人情は或點に向つては、水の卑きに就くと同樣であることを思はなければならぬ。今日の有樣で行つて、將來第二流第三流の人のみが文科に入ることが、國家敎育の方針に叶つてゐるのであるか。法科萬能を夢みる者は、須く歐米各國の情勢を察すべしである。米國大統領ウイルソンがかつては小學敎員の經驗あつたことも、恐らくは現代の日本人には了解が出來まい。

文科出身者は自重すべし。社會の待遇の如何に拘らず、其の責任の重大な事を自信、自重して、飽くまで其の所信を以て、天下を導かなければならぬ。それと同時に、國家及び社會が、文科に屬する學科の修了生を重要視して、其の驥足を伸ばさしめなければならぬ。官吏の任用令、大學の學科目も、或は改正しなければなるまい。法科以外に人物なしと思ふ民間の商工會社が若し覺醒すれば、それは明日からでも、文科出身者を用ひ得るのである。

（大正六年十月「帝國文學」）

萬葉集を經典とせよ

我が國の古典として萬葉集を有するのは、我が國民の誇である。世界文明史の上に於ける一大光明としての誇である。此の光明を餘所にして、支那の詩經に渇仰し、其の一言一句に精力を竭した古人の事業、今から思へば、何とした馬鹿げた事であつたらう。詩經ばかりでは無い。書經やら、易經やら、春秋やら、禮記やら、人間のすべての知識道德が、此の中にのみ存在したと考へて崇拜した時代のあさはかさ、背に汗するやうな心持がする。が、今でも其の考で頻りに有難がつてゐるものもある。論語の一言一句を萬世不磨の眞理とあがめて、之を失へば國民が亡びるやうに考へて居る人も多い。日本民族は、支那のお蔭で發達した國民では無い。支那の文明を採

用して發達した國民である。支那の文明が東洋一般（その中には日本も含まれて居る）に影響し利益した事は多いが、それが爲に特殊の發達を妨げられた事も多い。日本語そのものの發達なども、實は支那文學の輸入の爲に得をしたこともあるし、損をしたことも多い。その中で强大な支那文明の影響を受けながら日本特殊の文明を發達させ進歩させた處に、偉大な日本民族の精神が認められる。古事記や、萬葉集や、源氏物語や、其處に日本語の發揮があり、日本國民性の氣焔が擧げられて居るのである。東洋の他の諸國に之に比肩すべき國があるであらうか。

孔子が詩書春秋を筆删して經典を作つたやうに、日本の古典を基として國民の經典を作ることが、今日の自覺した國民、始めて支那文明の壓迫から離れ得た國民の成すべき事業であると考へる。余は古人の事業を非議するものでは無い。人は皆時代の中に生きるのであるから、時代の精神は時代の事業を成さしめたのである。併し今の世に於て、尙支那の經典を日本のものと崇めて、自己の眞の經典を忘れてはならぬ。日本には日本自身の經典がなければならぬ。孔子の春秋時代のやうにむちやくちやにならなかつたのが、日本に孔子の出なかつた所以かも知れぬ。とにかく今後の日本は、我が國の古典を基礎として治敎の根本を立てねばならぬ。

萬葉集の文獻的研究は着々歩を進めつゝある。此の度の「心の花」の萬葉號の如きも、斯の研究の上に光明を與へるものである。余は國家の爲に大いに之を喜ぶとともに、之を經典として筆删し唱導する人が出て來なければならぬと思ふ。萬葉集四千餘首の歌の中から選出すれば、日本の詩經は優に出來るのである。さうして支那の

に比べると、もつと國家的の傾向も多いし、民族的の色彩も鮮であるから、餘程面白いのである。さうして國民教育の材料としたいとおもふのである。畫家や彫刻家が、從來日本の神話を一つも顧みなかつたと同樣に、經世家や教育家が古歌を重要視しなかつたのは、これまでの缺點である。日本の書經とともに、日本の詩經の成立を希望してやまぬのである。

（大正六年十一月「心の花」）

The Spirit of Japan

Much has been spoken of the Spirit of Japan by Europeans as well as by our countrymen. But nothing interested me more than the words of an English gentleman, who had happened to meet with Prof. Takakusu, one of my colleagues, at the British Museum, and had told him that the Spirit of Japan was recognizable on looking at "Tsuba," the sword-guards. The Spirit of Japan found in the sword-guards——what did he mean? Japanese swords so artistically adorned, was it not a proof of the high esteem of the weapon by the wearers, and did it not also show how refined the wearer's aesthetic taste was? Japanese warriors known for courage and intrepidity, but full of sympathy and generosity, ought not their temper to be

suggested by the swords they wore? Such was perhaps what the gentleman meant. Being told that an interesting paper on "Tsuba" was read by Mr. Joly at the last meeting of this Society, and recollecting what I had heard from my friend some twenty years ago, it came to my mind to speak something about the Spirit of Japan as revealed in our literature. I must confess, however, that I can add hardly anything to that assertion of the English gentleman, who was intelligent enough to perceive the spirit at a glance of the sword-guards, and not from the pages of old books.

The history of Japanese literature divides itself into several periods. The first period——from the contest of the history to the end of the sixth century,——during which little was felt of Chinese and Buddhistic influences. As the relics of the earliest epoch, we have mythical legends, archaic songs, and Shintō rituals, which had been handed down from generation to generation in oral tradition, and in later days been written down. The second period, which covers about two hundred years of the 7th and 8th centuries, was the age when the political and social reforms, after the Chinese schemes, were introduced, so that the foreign influence on Japanese mind became gradually discernible. "Manyōshiu" or the "Myriad-leaves," known as the oldest collection of Japanese poems, commemorating this period, was written in Chinese characters used phonetically, but the most of the poems, more than 4,500 in number, were the outbursts

of the original Japanese belief under the stimulation of the newly imported civilization. The third period, which commences at the year of the settlement of Kyōto as the Imperial Capital (782), and ends with the foundation of the military government in Kamakura (1192), was the time of the greatest magnificence of the Imperial sovereignty, during which Chinese-Buddhistic culture was entirely amalgamated with that of Japan. The literary products of this time were mainly done by the female writers, with the newly invented Japanese letters, ' Kana," while the male sex was engaged in learning and imitating the Chinese style. Poems, diaries, and especially romances of this period constitute what we call our classical literature. The fourth period under the military government (1193—1603), which may be fairly compared with the dark ages in European history, was not an era favourable for learning and literature. Still, we see the development of the Nō-dance; and "Utai" or "Yōkyoku," the lyrical drama, accompanying the dance, remains one of our literary treasures. Renaissance came about with the establishment of the Tokugawa Shōgunate, and through its long reign of 250 years, which forms the fifth period, Japanese literature made a more rapid progress both in quantity and quality, than ever before. Popular romance, novels, dramas etc. found their wide circulations even among the lower classes of society. Next comes the present age, the era under the Western influence introducing Shakespeare, Goethe, Hugo, Ibsen, Maeter-

linck, etc., etc.

Now, what is the most significant characteristic of Japanese literature? Casting a glance over our literary history, we find at least two distinguishing features, which predominate in every form of literature appearing in every period. The first is "loyalty to the Emperor," and the second, "love of nature."

Let us, first of all, take the oldest Shintō rituals, and see how therein the idea of loyalty is represented. The Shintō rituals, which have come down to our days, are not many in number, nor of any great length. So I am of opinion, that the old ones, which must have been longer and in more detail, were probably either lost, or taken in as materials into the annals and histories, such as "Kojiki" and "Nihongi," when these works began to be prepared. Compelled to content ourselves with the scarce remnants, we can deduce from them the idea and faith of old Japan, and see what the pure original Shintoism meant. Shintoism, which is essentially an ancestor-worship, was the national cult, Emperor, followed by the people, reciting prayers to the ancestral deities. The prayers may be divided into two classes, one prayers for the welfare of the people and the nation, and the other, prayers for the prosperity of the Emperor and the throne. The Emperor, the living deity, prayed the ancestral deities for the protection and promotion of the happiness of his people and of his land. The people's wish, on the other hand,

was expressed in praying for the continuation of the healthy conditions of his august body, and the prolongation of his reign. What distinguished Shintoism as a religion——if it may be called so——from other religions, lies in the point, that in Shintoism there existed no prayers offered for the private or selfish interests of individual. The whole nation, the Emperor and the people, partaking in one and the same ceremony, prayed for each other's good, in order to raise the felicity of the whole country. It was entirely altruistic in nature, not a bit of egoism. Love and benevolence was the Mikado's earnest desire to be bestowed upon the people; the people's gratitude leading them to do their best for their beloved sovereign. The ground idea was the spirit of self-abnegation for the sake of others, which gave rise to the spirit of self-sacrifice. And is not the spirit of self-sacrifice the other name for loyalty?

In those days of primitive culture, however, there was no word to express loyalty. Only the phrase, which we pick up from the rituals, is "Akaki Kiyoki Kokoro," pure and clean heart, i. e., cleanliness of heart; a heart clear, dainty, without a tint of dirtiness, the contrary of which is "Kitanaki Kokoro" a soiled heart, was the only source of all virtues, and the sole controller of all conduct. A clean heart may be considered to mean something like the conscience itself. To behave oneself in accord with the conscience, where one's own interests had no part to play, was the ideal of our morality. It was dis-

played at the love of the people on the side of the sovereign, it was displayed as the loyalty to the Emperor on the side of his subjects. One who kept heart clean and pure, was a man of perfect morality, such virtues as filial piety, conjugal fidelity, brotherly order, friendly faithfulness, etc. being all emanations from the pure, clean heart. There were no distinct designations for various virtues, until Confucianism introduced them to the ethical system of Japan. Imagine the Shintō ceremony of ancient days, where the whole people, the Mikado, at its head, assembled, all present perhaps taking seats according to their ranks and ages. One may easily conceive, how the occasion was solemn and sincere enough to maintain and teach order, etiquette, or everything necessary to the social and national life.

Some Japanese words, etymologically explained, may enable you to understand the Japanese idea concerning the relation of the Emperor and the people. "Kami," Deity or God, used in the sense of the "Above" is with its honorific prefix "O" even now applied to the Mikado; hence, the identification of God and Emperor. Another word, "Oho-yake" which stands for "Imperial Court," as well as for "public" means etymologically "the major house." This denotes how the Imperial household was looked upon as the principal family of the nation, while all other families were thought "minor houses" or branch families, thus making the whole nation a large house or family. Another testimony of this nation is the

word "Ya-tsu-ko," meaning "subjects" on one side, "the sons of the house" on the other. Consequently, loyalty coincides with filial piety, and patriotism is the same as gratitude to one's ancestors. Such was the ancestor-worship of pure Shintoism, and such was the national constitution.

The ideas represented in the Shintō rituals occasionally recited as the common property of the nation, began to be sung in lyric poems by the ardent poets of the "Myriad leaves." Ohotomo-no-Yakamochi, for instance, a general and poet, writing several long songs, confessed his "pure and clean heart," and declared his loyalty to the Emperor as the family tradition handed down from his venerable forefathers. Such phrases as "Never die, unless for the sake of the Emperor," "Go straight forward, enemy's arrow, never on the back," "Don't disgrace the name of our ancesters, the name is noble and venerable——" were his exaltations to his sons and servants. Kakino-moto-no-Hitomaro, the greatest poet of the time, announced the sun, the moon, the stars, all as subjects of the Mikado, and praised the mountains for offering the tributes of flowers, and the rivers those of fish. Similar ideas are to be found in the poems of his contemporaries.

In the romances of the third period, which followed the lyric of the "Myriad leaves," you may be interested to see the love adventures of every description among the Court ladies and nobles. At first

sight, it seems nothing to do with loyalty. When we think, however, of the motives of the writers, and
the appreciation of their works by the public, both of which came from respect and reverence towards
the Imperial House, the idea of loyalty is seen to be cardinal. We take for example, "Genji-Monogatari,"
the greatest and the best romance, written about 1,000 A. D., by a learned lady. The authoress was a
widow of an official, invited to the Court as a tutor to the Empress, to whom she taught Chinese literature.
There she got the opportunity of observing the Court life, the life "above the clouds," as it was then
called. Her depiction of the noble class, especially that of female characters, is excellent. Putting aside
the skill of the plot, and the beauty of the style, most admirable and wonderful is the minute description
of the occasional events in the Court. Ceremonies, banquets, concerts, sports, etc. are described with great
detail and exactness. The pride of the authoress, who felt it a great honour to be acquainted with the
affairs of the Imperial Court, which was inaccessible to the common people, was the chief motive, which
led her to attempt the work. Her readers, most of them ladies not noble enough to have access "above
the clouds," were very curious as to what was going on in the daily life of the Palace, and read with
great eagerness and enthusiasm what the learned lady had laid before their eyes. This was one of the
reasons why the work acquired its great reputation. The same is to be said of "Makura-no-Sōshi."

"Makura-no-Sōshi," "pillow-book," also written by an intelligent Court lady, is a kind of miscellanies, beautiful in style and full of wit. In several passages of the work, after writing her memories of affairs in the Palace, she is so proud of her lucky position as a Court lady, that deserved the envy of all ladies of lower rank. Nothing was a greater honour, in the loyalistic mind of Japanese people, than to stand in a certain relation to the Imperial Court, for the Imperial House was the source of all morals and manners, and the very centre of all honours and glories.

Coming to the fourth period, when the military men grasped the real powers of the Empire, the Mikado was all the same the centre of honours and glories. Respect and reverence towards the Imperial Palace underwent little change. People under the simple and competent administration of the Shōgunate, cherished the memory of the golden time of the past centuries. The military rulers, who had succeeded in lowering the power and prestige of the Emperor, could do nothing to shake the idea of the supremacy of the Royal Sovereign, the living Deity. In everybody's bosom stood the heavenly Court, higher than the military government, the Shōgun occupying the intermediate position between the Mikado and the people. I quote the following passages from "Tsure-zure-gusa" the work of a secluded monk Kenkō,

"The Imperial Throne of the Mikado

inspires us with the greatest awe; even the uttermost leaf of the Imperial Family Tree is worthy of

honour and very different from the rest of mankind."

"The word is declining to its end,

as I have just said, but there is cause for satisfaction in the fact that the venerable Palace is still

uncontaminated by the outer world."

"Whatever we have of the life of old

is worthy of admiration; for there is nothing more vulgar than modern conception."

How the enlightened days of the past were yearned for and how the Imperial Court was looked upon
with deep reverence is therein to be seen. It is a notorious fact that "Utai," the lyrical drama, which
was solely developed under the patronage of the Shōguns, contributes no words of praise to the military
rulers. Of more than 600 dramas, preserved until now, there is hardly any single drama which extols the
flourishing reign of the Shōguns. The deities in the temples through the country, and Buddhas too, are
always the guards and protectors of the Imperial throne. The joy and satisfaction of the people, living
peacefully and cheerfully in the beautiful land of Japan, are always closely associated with the feeling
of gratitude towards the holy virtue of the Mikado. It often says, that grasses, trees, insects and ani-

mals are enjoying their lives under the Imperial venevolence. Also in "Kyōgen," the mediaeval comedies, which came into existence and were played side by side with the Nō-dance, it is not uncommon that the lords and the vassals of the feudal times are taken as objects of ridicule, and in many cases they are jeered at as ignorant, cowardly, cunning, even stupid. Although even Buddhas were not free from derision, the pen of the satirists never touched upon the Imperial household, nor upon the ancestor-deities.

Although loyalty and patriotism were too deeply rooted in the minds of the people to be pulled up by the removal of the seat of the actual power, the new régime of the social organization caused a change in the scope of loyalty. The stress being laid on the relation between the lords and the vassals, loyalty to the lords must be much urged and encouraged. The Samurai were to fight and die under the banners of their respective lords, instead of that of the Emperor, to whom alone their ancestors' loyalty was devoted. Loyalty to the living Deity, the head of the "major house" was now changed into loyalty to the lords, the heads of the minor houses or clans. Such is what we call loyalty in the morals of Bushido, actual instances of which are teeming in the epics and dramas of the later periods. The spirit of devotion and self-sacrifice being the same, both loyalties, old and new, were equally esteemed and appreciated.

You have often been told, I suppose, that the Bushido was the manifestation of the highest form of

morality of Japan, and that the Bushido owed its origin and development to the mediaeval and feudal systems. It is true that the Bushido is worthy of admiration, and it is also true that it became by degrees complicated with smaller regulations or conventions through generations of the military age. It is, however, far from the truth, to assume that it was a new form of morality produced among feudal men, the ground idea of loyalty being nothing but the continuation of the old loyalty to the Emperor. As a matter of fact, it was merely a metamorphosis of what had already existed. The protype of Japanese warriors, brave and modest, fearing nothing but the Emperor and the deities, is not first met with since the Kamakura period, but may be traced back to far earlier days. Without these precedents, the development of Bushido would have never been possible, and such an ardent adherence to the lords could have never come into existence. Those who read only the epics and dramas of the later days, and were ignorant of older literature, might have erroneously concluded that the Bushido originated in the mediaeval mind. Moreover the military class could not lay any special claim to the monopoly of the Bushido; the fact that the rest of the four classes into which the people were divided, farmers, artisans and tradesmen, were all possessed of the same spirit as the Samurai, and were controlling themselves by ways similar to the Bushido, may testify against such a claim; people of these classes not having the honour to wear the

swords, had the motto: "We wear two swords in our bosom." They were low in rank but high in heart. They had no lords, who fed them and ordered them to fight in case of emergency. But they had their superiors in their professions, whatever they might be, who were their lords. To a farm-servant his master, to an apprentice his teacher, to an errand-boy his employer, stood in the position of a lord to his Samurai. The relation between superiors and inferiors was as strictly and rigidly held as that in the military class. Services done by inferiors came from the idea of loyalty out of "the clean heart," inherited from their ancestors, just as loyalty of the Samurai was. It was not oppression of superiors that kept the society of Japan so tranquil and orderly. Hōkō, the service, meant in its original sense, the public service, i. e., the service to the Emperor. The use was gradually extended to all other services, so that the same word is now applied to a servant's or a maidservant's household service. However, large or small as the service might be, it would be done with the same idea of duty. If one could say the Bushido was the high morals among the military class, it should be said that the same form of high morals was prevailing among the classes not wearing the swords. In short, I should like to deny the statement that the Bushido, "the ways of the warriors," was the highest form of development of Japanese morality. On the contrary, I should call it an irregular, rather abnormal form of development viewed from the national conception

of loyalty.

The Renaissance in Tokugawa time, which was initiated by the Vice-Shōgun Mitsukuni of Mito, was
the first step towards the recovery of the Imperial sovereignty. The investigation of the ancient history
and literature showed the Shōgun to be nothing but the usurper of the Imperial rights. The idea of
loyalty and patriotism, stimulated by the arrival of foreign ships, spread throughout the Empire, which
led to the resignation of the Shōgun, and the downfall of the mititary government. It was first after the
restoration of the Imperial administration and the abdication of the four castes, that loyalty came to be
understood in the true sense of antiquity. The sons of the nation, equally educated in schools and colleges,
equally conscribed in the army and navy, equally granted all rights and privileges, regained their liberty
to do their service for the sake of the Emperor and for the sake of the nation. It is needless to say that
this unification of the nation, and the restoration of the old belief of loyalty, which reflects itself in every
period of our literature, was the ground and basis of the rapid progress and development of the new
Japan.

So far about loyalty. As for the second significant feature of our literature, love of nature, I need not
say much. All of you know quite well, that Japan is the land of flowers and landscapes. Our arts of

painting and sculpture, and decoration of all kinds, have taken their materials from our beautiful environment. Flower arrangements, pot-plants and miniature gardens are known as the special arts of the Japanese. The playing-card prevalent in Japan, which I believe to be a little modification of the Western one, consists of 48 cards, allotted to the 12 months of the year, each set of 4 bearing the figure of the flower of the month. There is no wonder that literature is so much concerned with the beauty of nature. "Uta," the lyrical poem, the most archaic in its origin, has been the most favoured sort of literature through a long courses of centuries, and is still at present so popular among us that more than 30,000, sung on the theme given by the Emperor, arrive at the Imperial Court at the beginning of every year. It was in the second period of our literary history, that this form of the lyric attained a high development, as seen in the "Miriad-leaves." The romances of the Court ladies of the next period were nothing but the direct offspring of the lyric. Not only many "Uta," which were in the form of communication between heroes and heroines, and charming to the readers, but the picturesque description which makes the background of the event so attractive, was entirely derived from the technique of the poem. The authors of the love-stories made use of what prevailed and found success in prose, and succeeded in appealing to the sentiments of their readers. The same attempt is repeated in the war-stories of the following period too,

In "Utai," the Nō-drama, the lyrical element plays the most prominent parts, as the name lyrical drama betrays. Also in the popular dramas of the Tokugawa time, which are in one respect the popularization or the modernization of the mediaeval "Utai," i. e., Nō-drama, the influence of the lyric poem is conspicuous. In fact, it forms a peculiar characteristic of Japanese literature, that many expressions regarding psychological conditions are made of metaphors drawn from nature. For example: "To be in tears," expressed as "grasses wet in dew;" "to be uneasy as flowers blown by wind", and the like. As the later sprouts of "Uta" we may count the "Hokku" the shortest form of poem of 17 syllables, which found its prevalence among the plebeians. It is to be said, therefore, that the Japanese, from the Court nobles, "above the clouds," down to the fishmongers or greengrocers, not excepting the military class of course, have been given to the beauties of Great Nature, and have taken a fancy to sing about spring flowers and autumnal insects all the time.

A Poem in the "Myriad Leaves"

"When winter turns to spring
Birds that were songless make their songs resound,

Flowers that were flow'rless cover all the ground;

Yet 'tis no perfect thing——: ——

I cannot walk, so tangled in each hill,

So thick the herbs, I cannot pluck my fill.

But in the autumn-tide

I cull the scarlet leaves and love them dear,

And let the green leaves stay, with many a tear,

All on the fair hill-side:

No time, so sweet as that away! away!

Autumn's the time I fain would keep away."

(Translated by Chamberlain)

is known as the first proposal of the question: Which is better, Spring or Autumn? The question continued to be disputed among the poets of the succeeding ages, and of course remained unsolved. When you see that the salutations of Japanese letters of communication, even those of business matters, are begun with the description of the beauty of the season, you may be convinced, that there would be no

other people in the world who love more the beauty of nature, than the sons of Japan. What Kenkō, the secluded monk, said:

"As the seasons change from time to time our emotions
are touched by each one of them."

confesses what every Japanese harbours in his bosom. This intense love of nature, that we call "Miyabi-gokoro," "the refined mind", has immensely influenced our arts, morals, customs and all other affairs.

Let me now come to my conclusion in stating that these two important features of our literature, "loyalty to the Emperor," and "love of nature" constitute the two essential elements of the Spirit of Japan, or "Yamato-Damashii." As no one is about to account for the spirit of a nation with mathema-accuracy, interpretations of the Japanese Spirit differ very much, according to the views of the elucidators. The most of them however, seem to agree to accept loyalty and patriotism as the display of the spirit. Some have gone so far as to assume the Bushido as the second name of the Japanese Spirit. I may admit that loyalty and patriotism show one side of the spirit, but I can not agree to overlook love of nature, the "refined mind" on the other. Yamato-Soul is in my conception, the combination of the two, one "clean heart" being ethical, and the other "refined mind" being aesthetical. "Cleanliness of heart" to

do their duty without self-interest, and "elegance of mind" to enjoy the beautiful at ease both make up what we call the Yamato-Spirit. The former teaches us what justice and righteousness is, and leads us straight forward to the work to do. Bravery, faithfulness, self-sacrifice, contempt of death etc., loyalty itself, come out as its manifestation. The latter indicates which the beautiful and the desirable is, and modifies and softens much of our behaviour. Appealing to the emotions, there arise humanity, sympathy, magnanimity, generosity, etc. Hence the man endowed with the true Spirit of Yamato, would never do what contradicts the ideal of "clean heart," and the taste of "refined mind," even in case it results to his own disadvantage. This spirit coming down from far antiquity, was highly esteemed among the military men of Bushido. Their education was especially designed to foster the aesthetic taste, so as to be able to restrain thereby their behaviour. The Samurai, however valiant, and skilful in military accomplishments, if destitute of the refined taste, was by no means true warrior. First of all, the poem-making was much prized as the high accomplishment. The Tea-ceremony, where simplicity, sobriety, and quietness prevailed, and where every utensil used in the process was to be appreciated with aesthetic eyes, proved to be the best opportunity for mental cultivation. It is said, that the chief subject in the curriculum of the school for the warriors founded by Hideyoshi, was the Tea-ceremony. The Nō-dance,

and singing of the lyrical drama, were much encouraged for the same purpose.

It is no wonder, that the Samurai, generally remote from literary matters, so educated to understand the beautiful, would have decorated their weapons, especially the swords, the soul of Samurai, with the utmost of their power, if their means could afford them. While I cannot help expressing my admiration for the gentleman who noticed this point on the "Tsuba" collection, as a true connoisseur of the arts, I may say the same will be remarked everywhere and anywhere in' Japanese object of art, as well as in Japanese customs and manners, if a little attention be paid to them. The existence of the Japanese Spirit was never restricted to the Samurai class, nor to the days of the past. It has penetrated through all classes of our society, and is still living in our daily life.

The pouring in of an immense number of the Uta poems into the Imperial Court every January. Is such a phenomenon, not an instance of the existence of the Japanese Spirit, the combination of loyalty on one side, and "love of nature" on the other? The "Hinamatsuri", the lovely dolls'-festival, for the girls, known as the most charming and beautiful sight in Japanese homes, in which dolls representing the Emperor and the Empress on the throne are arranged with other figures of ministers, generals, Court ladies etc. Is this festival not a manifestation of the same spirit, denoting the "clean heart" and the

"refined mind" put together?

The famous poem by Motoori-Norinaga, comparing the Japanese Spirit with the cherry-blossom under the morning sun, may sound too symbolic and too metaphoric to European ears. It is indeed difficult to understand, when one defines the Yamato-Spirit as the nickname of loyalty and patriotism, or as an incarnation of Jingoism or Chauvinism; it is easily nodded when the "clean heart" and the "refined mind" are thereby implied. Cherry-blossom in its simplicity, purity and daintiness reminds us of the "clean heart," while its charm and beauty is worthy of admiration for the "refined mind." The Japanese proverb, "Among men the warrior, among flowers the cherry," should be interpreted similarly.

The word "Sakura," "Cherry," has its common root——sak——in such words as "sakihahi" (happiness), "saki" (glory) "sakari" (prosperity) and "sake" (rice-wine). The ideal of the Japanese Spirit, symbolised by cherry-blossom, is glory and prosperity. But the glory and the prosperity should be obtained by means of the good and the beautiful. It is an optimistic and progressive aspiration, always fresh and lively, like cherry-blossoms in morning-sun. As long as the spirit survives among us, Japan will flourish and prosper, and the Japanese will never lose their fair name bequeathed by their worthy ancestors.

(ロンドンの Japan Society に於ける講演、大正六年十一月—十二月「東亞之光」)

三上博士在職二十五年祝賀會祝辭

今日の三上博士在職二十五年の祝典に際して、私が友人總代として祝賀の辭を述べますのは、私にとつては名譽の至に存じます。私が博士の知を辱うした初は文科大學の國文學科、當時の和文學科に入學した時で、博士がちやうどその和文學科を卒業して、大學院學生となられた際でございました。併し私の方では、それよりもつと前に博士を知つて居ました。といふのは、大學や豫備門がまだ一橋にあつた時分、或日私が圖書館の今から考へれば誠に狹い閱覽室で、本を讀んでゐますと、當時豫備門の上級生であつた三上君が、或友人と話をして居られました。その友人某氏が三上君に尋ねて「君は大學で何の專門をやる積か」「僕は和文學をやるよ」「そんなつまらないものをやるのか」「いやこれ程大切な學問はない」といふやうな問答を、私は脇で聞いて居たのでございました。私もかねてから、國學を修めようといふ考があつたので、此の時自分と同志の人のあるのに氣附いて非常に心強く感じたのであります。それは明治十七八年頃の事でございましたらう。三十年以上も昔の事で、三上君の記憶には或は殘つて居らぬかも知れませぬが、私は昨今の事のやうに、はつきりおぼえてゐます。

さて私どもが在學した頃の文科大學は、學生全體の數が三十名內外であつたので、大學院學生の三上君が發起

せられて、文學談話會といふものを組織し、毎月一回神田あたりの貸席か何かで、會合を開いたのであります。尾崎紅葉や正岡子規や夏目漱石なども、その會の會員であつたのであります。その中に君は高津鍬三郎と合著で、日本文學史を出されました。これは御承知の通り日本文學史の纒つたものとしては最初のものでございました。國史學の教授としてこゝに二十五年、博士は國史學界の泰斗として仰がれて居られますが、國文學興隆の氣運を促した人としても忘れてはならぬのであります。私どもは常に我が國文學界の先達として尊敬して居るのであります。今はとくになくなつた「國文學」といふ雜誌又は「帝國文學」の創刊の際などにも君は種々の盡力をせられたのであります。國學院の經營及び授業に就いても、君の努力は尋常ではなかつたかと思ひます。ふりかへつて、此等の事を考へると、今日の祝賀會は大學講座擔任二十五年の記念會といふよりも、もつと廣い意味に解したいやうに思はれるのであります。多くの國史專門家を養成して、國史界をして今日あらしめた功勞を考へると同時に、大學の講座以外に於て、直接間接に、君が國家の爲に盡された事の多いことも、この機會に於て感謝しなければならぬと思ふのであります。

久しく君の令名を知つて居つて、ふと今度の祝典の催しを聞く人は、三上博士とは大宅世繼か、夏山繁樹のやうな老人と推測するであらうと思ひますが、それ處でなく、君は全く壯年の人で、始終お目に懸つて居る我々どもには、學生時代と何等の變りはないとまで思はれます。御覽の通り、君の頭には一筋の白髪さへ見えません。其の頭の中には若々しい頭腦の力のこもつて居ることも疑が無いのであります。

君の長男勝君は數年前我が文科大學を卒業せられました。文科大學の宣誓名簿に、父子二代が署名したのは實に我が三上君を最初といたします。君の五人のお子様の中で、三人はそれ〴〵家を成され、お孫様が已に七人までであるといふ清福は、我々友人の中で誰も追付くものはないのであります。今日の祝賀會は君が學界に於ける功績を表彰する爲でありませうが、我々友人としては家庭に於ける君の境遇までも思ひ浮べて、本當におめでたい事と考へずには居られぬのであります。

君の今日のお若さでは學界に於ける今後の事業も多々益々見るべきものがありませうし、榮え行く御家門の有様も、末永く御覽になる事が出來ると信じます。私は公私の兩面にわたつて、三上博士の過去を祝し、且又その將來を祝したいと思ふのであります。友人總代として、大正六年十一月十一日。（大正六年十二月「帝國文學」）

佐々醒雪博士

月日のたつのは早いもので、もう佐々醒雪博士の五十日祭も過ぎた。思ひ出しても、同君の逝去は國文學界の爲に悲しむべきことである。今より八年前藤岡作太郎博士のなくなつた時、佐佐木信綱博士が僕に向つて、悄然として「何といふ惜しいことでせう」といはれたのを記憶して居るが、今回再び同君が同じ言葉を繰返されたの

で、僕は實に答へる言葉を知らなかつた。佐々博士を始めて識つたのは、僕には記憶が無い。「帝國文學」の發會式の頃であらうと思ふ。佐々博士が其の後「連俳小史」を「帝國文學」に連載せられるのを見て、始めて佐々君を知つたのである。君が山口の高等學校や仙臺の第二高等學校等に在職せられた間の事は僕は少しも知らぬ。

僕が留學から歸朝した時分、君は既に金港堂「文藝界」の主筆となつて活動して居られた。それから數年間は金港堂の佐々君であつたが、此の間君が大いに發展しようと試みたにも拘らず、恐らくは事意の如くに進まなかつた時代であらうと思ふ。「文藝界」も間もなく廢刊して、それから色々の私立學校の講師として盡瘁せられた。君が結婚せられたのは、此の間の事で、それは僕の親友たる得能文氏が橋わたしをしたのである。隨分晩婚の方で、君がなくなつてから見ると、長男政雄君が僅かに十歳、全家の責任を未亡人の手に委ねゝばならぬのを聞いて、僕はつく〴〵と、晩婚主義の非を悟つた。君の親友たる大町桂月君の長子が已に大學に入つたと聞いて、いよいよ晩婚の特に日本の社會には不都合なのを感じて、君の晩婚を今更悔しく思ふのである。

僕は獨逸留學中、始めて君が故水野幸吉氏（故支那公使館參事官）と莫逆の友であることを知つた。水野氏が號を醉香といひ、君が號を醒雪といつたのは、醉香醒雪の語を二つに分けたのだといふことを、水野君から聞いた。今や水野君も歿し、君も亦逝いた。水野君は僕等が獨逸留學中、獨逸公使館の書記官であつた。佐々君が俳諧に趣味をもつて居られたのはいふまでもなく、深く研究を俗謠に進められて、種々の著作のあつた事も世人の知つて居る所である。謠曲にも堪能であつたのである。

今からいへば、一昨年、僕が海外視察を命ぜられたので、僕の講座の補充として、佐々博士に一年間、俳諧史の講義をやる事を頼んで出發した。それは此の方面が、殊に分りにくく、君が此の方面に於て造詣の深いことを知つて居つたからである。僕が出立するその日、君は「ヒルといふ米國ハーバード大學の教授の修辭作文書に感心して居るが、そのヒル氏は姉崎に聞いてもそんな人は居なかつたといふから、一つ調べて來て下さい」と言はれた。向ふへ行つて調べると、とくに死んだ人である。併しなか〳〵えらい人であつたらしい。その弟子が、今のハーバードの文科大學長を務めて居る。こんなことを見ても、要するに君が一箇の國文學者として、單に國文國語に沒頭して居るばかりでなく、廣く世界の文學研究法に注意したことを知り得るであらうと思ふ。

國文學出身の有數な人の死んだのは、心持のせゐか外の科よりも多い樣に思ふ。卒業年度からいへば藤岡、臨井についで佐々君である。横地清次郎氏や、坂本四方太氏や、森治藏氏なども皆有爲な材を抱いて死んでしまつた。誠に殘念なことである。

（大正七年二月「帝國文學」）

文科大學論

今日の我が文科大學があまり細かな各學科に分れて居つて、最初から間口の狹い、奥行の深い學者を造るやう

に出來て居るのは、或點から見れば、あまり多くを大學在學の三年間に望んだわけで、大學教育の重要な目的は其處にあるにしても、もう少し基礎となり、根柢となる學科を在學中に博く學ばせて、間口を今一層廣くさせる必要があると思ふ。

それに加へて、卒業論文といふものがあつて、それで採點せられるといふ結果、誰しもよい評點を欲するが爲、入學當時から只管論文に骨折つて、論文は可なりに出來ても、論文以外の事には一向不案內であるといふ傾向が生ずる。

文科出身者が世間へ出ての使はれ途の少いといふことも、一つはあまりに偏して居るといふ事が原因である。學問を硏究するのは硏究するとして、其の趣味をあくまでもたせると同時に、もう少し融通が利いて、いはゆるパンを得る方法をも得させなければならぬ。

もし純粹に學問を硏究する人ばかりを拵へるならば、今の學生の數は少し多過ぎる。第一志望は法科であるが、法科へははいれぬから、まづ文科へはいらうといふものの多數な今日の情勢では、文科に優秀な人を得るのは極めてむづかしい。國家の思想界を指導すべき文科として、この有樣は實に國家將來の爲に寒心すべきことである。

文科大學には大凡五通りの人が集つてよろしいとおもふ。(一)學者となる人、(二)敎育者となる人、(三)創作家となる人、(四)新聞記者となる人、(五)行政官となる人。これらを主な分別として、尙其の他何の仕事にても從事することが出來なければならぬ。苟くも人文に屬する學科の高等な敎育を受けた以上、理化學のやうな

特殊な知識を要する職務で無い限り、何でも出來る筈である。それを出來ぬとおもふのは自ら疎んじ、自ら輕んずるのである。

それ故文科大學の學科はすべて隨意科として、國史なり、國文學なり、外國文學なり、美學なり、哲學なり、社會學なり、宗教學なり、外國史學なり、多くの講義を開いて、勝手に聽講させるがよい。又法科でも醫科でも理科でも、勝手に聽講させるがよい。さうして前條の目的、それ〳〵自分の好きな立場に立たうといふものに向つて、好きなやうに修業させるがよい。それには今よりも講義の數は殖やさなければならぬ。學科制の制限も廢止しなければならぬ。

學者とならうといふ人は最初から、その方に志すがよい。一と通りの基礎學科を學んだ以上は、大學在學中から研究に從事してもよい。さうしてつゞいて大學院で研究すればよい。其の他の人は相當の間口を得るまでは、大學で學んで、さて其の後はその學識と常識を以て、世間に活動するがよい。

文科大學が學者のみを拵へる處とおもふのは、文科大學と大學院を混同して考へて居るのである。自ら文科の學問を狹くして居るのである。

大學を單に實用の人物を造る爲の練習處としようと論ずるのは、大學は最新研究の結果を教授する所であつて、研究者と教授が分離すべからざるものであるといふことを忘れた論である。自ら最高學府たることを沒却した論である。

何にしても、今の儘では文科には俊才の集ることが極めて少い。中には非常な俊才もあるが、おしなべて言へばよい人は來ない。これは實に國家將來の爲に由々しい、恐るべき事である。併し物は窮すれば又通ずとやら、いよ／＼其の弊の極に達すれば、政府の當路者なり、社會なりが、又目を覺まして來る。永い間には平衡を保たうが、私どもとしては一日も早く其の弊を救ひたいとおもふのである。姑息な策でもよいから、應急策でも講じたいのである。

國學者、漢學者の滅亡を恐れて古典講習科を置かれたのは、明治の初年、國民が擧つて外國の學問に奔つた時代であつた。その卒業生で爾來斯學の上に功勞の多かつたことは世人の熟知する所である。今日の文科にはちやうどこんなやうな形勢があるのではあるまいか。新進の學士にも鋭才なものはあるが、其の才を展す途は殆ど鎖されてゐる。これでは誰も踵を接して文科の門には集らないといふ形勢である。世の富豪、新富豪等に於ても、我が文科の發展は卽ち我が國家の發展であることに留意せられて、何等かの貢獻を致されたいといふことを序に希望しておくのである。

（大正七年六月「東亞之光」）

賀茂眞淵翁に就いて

今年は贈從三位縣居大人賀茂眞淵翁が歿せられた明和六年からちやうど百五十年目に當りますので、この皇典講究所及び國學院に於て記念の祭典を施行せられ、私に一場の講話をするやうにとのお話を承りました。これは同じ學びの末の流を酌む私にとつては誠に名譽な事と考へますが、併し此の方面の學問に於て造詣の深い諸先輩を前に据ゑて、私が講演を敢へてするといふ事は、僣越のやうにも思ひ、又私が翁に就いて特に新しい研究がある譯でも無いのですから、一時は御引受を躊躇しましたが、たつてとの仰もありましたので、唯私を今日の演壇にお立たせ下さる御好意を思ひ、その光榮に感じて、翁の學問及び事業に就いての私の感想を簡單に申上げたいと思ひます。

翁の家系、傳記等に就いては、平田翁の玉襷を始として、高田與淸の家傳、村田春海の家譜考證、其の他色々あつて、皆樣が十分御承知の事であります。遠州濱松の西外れ、敷智郡伊場村で、岡部新宮禰宜定信の第二子と生れられた事、眞淵といふ名は其の郡名から採られた事、其の祖先の成助といふ人が賀茂の神主で、後拾遺集、金葉集、詞花集などに歌の載つて居る事、賀茂氏の遠祖に遡れば、八咫烏として皇軍を導かれた鴨武津身命(かもたけつのみ)である事等、其の家系から考へ、家庭から見ても、翁の師たる荷田春滿翁が稻荷山の神官であつたと同樣に、我が國學には深い因緣のある事と首肯かれる次第であります。併し京都とか伊勢とかでなく、遠州濱松からかういふ學者が起つた事は珍しいのであります。その頃、濱松に於ける翁の友に、諏訪社の神官杉浦國頭(くにあきら)と五社の神主森暉(てる)昌(まさ)があり、この國頭の妻眞崎(まさき)は卽ち春滿翁の姪であつたので、春滿翁が其の家に宿泊の際に感化を受けられ、こ

れが國學の傳統を形造つた事を考へますと、學問勃興の機緣といふものも不思議なものであります。

さて享保十八年、三十七歲の時、遂に意を決して上京して弟子となられましたが、元文元年には荷田大人が歿せられたので、つまり四年間の弟子であつた事、元文三年、四十二歲で江戸へ出られた事などは、年譜の上に明らかな事であります。こゝに於て、我等が第一に思はなければならぬ事は、翁はかなり晚學の人であつたといふ事であります。本居大人が百人一首改觀抄を讀んで、國學に志されたのも二十八歲、眞淵翁に逢はれたのは三十四歲で、これも隨分遲いのですが、眞淵翁はそれよりもまだ少し遲いのです。流石に一代の學者として立つ程の人は、たとひ晚學でも、一旦志を立てたからは、遂にその志を貫き通すといふ處に、後進の者の學ばなければならぬ點があります。加之眞淵翁にしても、宣長翁にしても、まだ全く開拓してない學問を開かれたのでありますから、この年輩になつて始めてその志も起り、その準備も整つたと見てよからうと思ひます。平田翁が言はれたやうに、國學はいはゆる「いつち廣い學問」で、儒學も明らめ、佛學も心得た上で、さてその眞僞を辨じ、眞の道をあらはさうといふのでありますから、それだけの用意をするには、三十歲近くまで漢學なり其の他の學問の素養を十分に積むことが必要であつたのであります。その根柢の力がありたればこそ、國學に於てもずん〳〵發明の說を立てられることが出來たので、其の晚學といふことは自然な事、且必然な事と思ひます。さて四十二歲で江戸へ出られてから、岡部日記や後岡部日記にも見える通り、二度一寸歸鄕せられましたが、それから明和六、年、七十三歲で歿せられるまで、約三十年間が江戸に於ての活動時代であつて、多くの著書をせられ、弟子を導

かれ、天下を風靡せられたのでありました。その間に田安家に仕へて優遇を受けられた事もありますが、晩年には仕を罷めて、専ら著述と子弟の敎育に從事せられました。その著述の多くが極めて晩年に出た事は大いに注意すべき事であります。冠辭考の出來たのが六十一歳の時、源氏物語新釋の完成が六十二歳の時、萬葉考別記が六十四歳の時、歌意考が六十八歳、國意考が六十九歳、祝詞考が七十二歳、七十三歳即ち歿せられる年に語意考が出來て居ります。もとより長い間の蘊蓄や研究が後になつて書下されたのでありますが、かくまで孜々として倦まれなかつた勤勉努力は尋常人の及び難い事であります。最早隱居をして引込むべき時代に於て、老いて益〻壯に、ひたすら道の爲にいそしまれた事は、我が國學の發達進歩の爲には非常に仕合の事であつたのであります。近頃大學教授にも停年を設けるといふ話がありまして、將來は六十歳に達すると職を退く事に極るさうでありますが、翁のやうな精力のある人には其の必要はありません。又職を退いてからも、翁のやうな勤勉と精力がありさへすれば、多年の研究を後世に遺すことが出來るだらうと思はれます。これも翁に敬服しなければならぬ事であります。

翁の學問は申すまでもなく、かの「ふみ分けよ大和にはあらぬ唐鳥の跡を見るのみ人の道かは」と詠まれた荷田春滿翁の精神に本づいて日本の古典を研究し、さうして日本の古道を明らめるといふのにあつたのであります。翁の一生の事業を考へて見ますと、其の功績影響は實に偉大であります。翁の三十年間の江戸の活動は、全く國學の基礎を確固にし、其の大進歩を促したのであります。これには翁の堅實な意志、高遠な目的が其の根柢にな

つて居るのであります。翁は當時滔々として世に漲つて居る儒教が、早くから日本固有の道の所在を失はしめて居るのに憤慨して、此の古道を闡明するのを終生の事業とせられたのであります。賢明な夫人のけなげな勸告によつて志を立ててから、其の歿年に至るまで確固たる精神は一貫して變りません。絶えず此の心を以て歌文を綴り、書物を著し、弟子に教へられました。翁は此の學の建設の容易でないことを知つて居られました。翁以前の研究の誤つた事を正し、前人未發の見を立てられた事が多々あり、學術上の事業としては隨分多くの偉功をたてられたるにも拘らず、斯學の建設は到底一人や二人、一代や二代で出來るものでない事を知つて居られました。卽ち自分はもとより一代を通してやるが、弟子から弟子へ永續して行くべき事業として、その方針を以て弟子を導かれました。この高遠な大目的の下に國學の基礎が据ゑられたのであります。かの松阪の一夜に宣長翁に諭された言を玉勝間で見ますと、

われももとより神の御典を說かむとおもふ志あるを、そはまづ唐心を淸く離れて、古へのまことの意を尋ね得ずはあるべからず。然るにその古への心を得むことは、古言を得たる上ならでは能はず。古言を得むことは、萬葉をよく明らむるにこそあれ。さる故に吾はまづもはら萬葉を明らめんとする程に、すでに年老いて、殘りの齡今いくばくもあらざれば、神の御典を說くまでに至ること得ざるを、いましは年さかりにて行さき長ければ、今より怠ることなくいそしみ學びなば、其の志遂ぐることあるべし。但し世の中の物學ぶともがらを見るに、皆低き所を經ずて、まだきに高き所に上らんとする程に、低き所をだに得ること能はず。まして高き所は

得べきやうなければ、皆ひがごとのみすめり。此の旨を忘れず、心にしめて、まづ低き所よりよく固めおきてこそ高き所に上るべき業なれ。わが未だ神の御典をえ說かざるは、もはら此の故ぞ。ゆめしなを越えて、まだきに高き所をな望みそ。

とあります。その諭を受けた宣長翁は此の時三十四歲、諭された眞淵翁は此の時六十七歲であつたのですが、この諭言で正しく翁の學問の仕方とその目的が窺はれます。卽ち神典を說く爲には、まづ古言を明らめなければならぬといふ考から、萬葉集の研究に力を盡されたのであります。つまり學問の根柢を立ててからでなければ本當の研究は出來ぬといふ考から、一生をそれに傾けて出來るだけやつた。併しもう年も取つたから今度はお前たちのやうなものが續いてやれとの諭言で、この諭言は取りも直さず我が國學の歷史を語つて居るものであります。それ故もし自分の說に誤つた事があれば、後の者はどん〳〵直して行くがよい。師の說だと言つて決して拘泥するには及ばぬ。それは學問の進步の爲ではないと常々敎へられたのであります。宣長翁はこの事を記して、

常に敎へられしは、後によき考の出來たらんには、必ずしも師の說に違ふとて、な憚りそとなむ敎へられし。こはいと貴き敎にて、我が師の、世にすぐれ給へる一つなり。(中略)師の說なりとて、必ずなづみ守るべきにもあらず。善き惡しきをいはず、ひたぶるに古きを守るは、學問の道にはいふかひなき業なり。又おのが師などの惡き事を言ひあらはすは、いともかしこくはあれど、それも言はざれば、世の學者の說にまどひて、長く善きを知る期なし。師の說なりとして惡きを知りながら、言はず包みかくして、よさまにつくろひ居らんは、

唯師をのみ貴みて、道をば思はざるなり。

目ざす所は學問の爲、道の爲にあるので、師の説でも誤つて居るものは正す。新しい開拓をして行く時には、どうしてもこの精神と實行がなければなりませぬ。この方針で弟子を導かれ、弟子も亦之を奉じてその弟子を導きましたから、國學の勃興進歩が見られたのであります。

さて、さきの宣長翁を諭された詞でも分ります通り、眞淵翁は最多の古語を含んで居る萬葉集の研究に最も力を盡されたのでありまして、それが御存じの通り後年萬葉考となつて現れました。翁の著述は最初は多く解といふ字を附けられたやうでしたが、後にはすべてこの考といふ字が附けてあります。この考といふ字を味はつて見ますに、翁の方から言ふと「これは自分だけの考である。他人には又別な考があるかも知れぬ」といふ、つねづね弟子に敎へられた例の學問本位、且自己の謙遜の態度が認められるやうに思ひます。又他人から見ると、如何にもまだかういふ方面の研究のない時代で、翁がすべての方面に新しい開拓を施して新意見を立てて行かれるといふ趣が見えるので、面白く感ずるのであります。その萬葉考のはしがきを見ますと、最初は萬葉集を唯古歌の集とばかり思つて、古今集や物語などの解釋を心掛けて居つたが、今考へて見れば、中古以後の歌は皆たをやめのやうに弱々しいので、ますらをの男らしい點の尠い事に氣附き、それは唯萬葉集だけにあると知つて、こゝにあまたの年月を經て六十の齢にして始めて之を解釋したとありますので、これで翁が一生を通じて萬葉集の研究に努力せられた事、又上代を旨として、いはゆる中世以後を排斥せられた翁の精神が認められるのであります。

萬葉考の卓見に就いては、篤胤翁も

しか學び得て已にわが物となれる大倭心の、思ふまに〳〵言ひ連ねられしものなれば、本文なる歌の解は、却りては此の大考の條々の引證に釋かれし如くなもありける。達人の學は多くさるものにしあるを、今の古學者など、さる謂をば、つゆもえ知らでぞありける。

といはれて居る通りで、多年の研究で萬葉集を達觀したものでありますが、その結果として萬葉集の卷々の順序を改められた事が最も面白いのであります。卽ち第一卷、第二卷を古撰とし、次いで十三、十一、十二、十四を同等の撰と考へられたのであります。一、二は宮風で作者も明瞭、十三は同じく宮風で時代作者不詳、十一、十二は時代作者不詳の短歌、十四は東歌、これだけが古撰の萬葉で、五卷は山上憶良の歌集、卷七と卷十とは集めぶりも他と異なつて居り、歌もいさゝか古いによつて、一人の撰であらう。十五卷は新羅へ遣はされた使人の歌と、中臣宅守と茅上娘子との贈和の歌、十六卷は前後に由緣ある歌を載せ、中間には戲咲歌を載せてあるが、河村王や大伴家持の歌もあるから、古い集ではあるまい。三卷から四、六、八、九、十七、十八、十九、二十は家持の歌集であつて、この混同は延喜以後であらうといはれて居るのであります。そこで古撰六卷に註釋して、尙別記を添へられたのであります。かくの如く萬葉集の卷々を時代的に內容から研究したのは非常に面白い事で、これは餘程よく萬葉集を研究し、體得した研究の結果であります。もとより翁の考の全部が正當であるといふわけには參りませんが、その順序の立て方に於ても、流石に翁の見識であると感服せずには居られません。尙七卷

以下の考もあつたので、それは全集には載せてあります。

翁が萬葉集の研究卽ち古言研究の副産物、見方によつてはその研究の一部として最も顯著なのは、冠辭考であります。その識見を窺ふに足るものとして、蓋しこれが翁の第一の著述と言つてもよからうと思ひます。これは枕詞の解釋ですが、枕詞の枕は夜のもので面白くない。且その名稱も古語ではないといふ處から「かうむりことば」と荷田翁のいはれたのを用ひられたのであります。これには、從來の枕詞の解釋を改められた卓見が澤山見えます。一二の例を擧げて申しますと「久方の」といふ枕詞の久方、久堅などは皆宛字で、これは

天の形はまろくてうつろなるを、匏(ひさご)の内のまろくむなしきに譬へて、匏形(ひさごがた)の天といふならむと覺ゆ。

などと書かれて居ります。又「みすゞかる信濃」といふのは、みすゞを刈る野とつゞけるので、みすゞは小さい竹であるとか、「神風のいせ」といふのは、神風から息のいだけにかゝるのであるとかいふ類の新意見が、すべて古事記や萬葉などの文獻的證據の上に說明せられてあります。宣長翁が一見して最初は疑つたが、後に敬服して遂に入門する考を起されたといふのも、無理のない事であります。

翁の著述は非常に澤山ありますから、一々說明する事も出來ませんが、翁の研究が上古中古の書物の殆ど全部にわたつてゐる事は、その精力と勤勉を思ふに餘りあるのであります。上古の祝詞を解釋したものは祝詞解で、後に祝詞考となつて出版せられました。本居翁が「世の限りもはら萬葉に力を盡されし程に、古事記、書紀に至りては、その考いまだあまねく深くは行きわたらず、委しからぬ事ども多し」と言はれた通りでありますが、古

事記頭書や日本紀訓考もあります。又神樂歌、催馬樂にも各々の考があります。神遊考は明和三年、七十の齢とありますから、更に後に補正せられたのでありませう。又風俗歌考もあります。これ等はいづれも古言研究の關係上、聯絡がありますから、一つとして見逃すわけには行かなかつたのであります。下つて中古文學以下の註釋はどうかといふに、古今集には續萬葉論があり、續萬葉集祕說があり、古今集序表考などがあり、又その講義の筆記を本として、天明五年野村遜志が上田秋成に乞うて訂正出版した古今和歌集打聽があります。これは野村の妻ともひ子(吉岡氏)が眞淵に學んだ時の筆記であります。百人一首に關しては、さきに百人一首古說を書かれましたが「童蒙の古學に入る導きよ」とて、後には初學と改題せられました。伊勢物語には伊勢物語古意、大和物語には大和物語直解があり、源氏物語には源氏物語新釋といふ大部の物があります。これ等文學上の註釋に於ては、契沖や春滿等の先輩說を參酌して用ひられたのは勿論で、又もとより自己の新說を加へてあります。文學の歷史的研究としては、其の書の著作の年代、作者等に就いて研究し、斷案を下してあるのが面白いと思ひます。よしその說は悉く中らずとも、さういふ研究法は必要なのであります。間違つて居れば、後の人が直せばよいのであります。伊勢物語古意にも、書名、作者、時代の論がありますし、大和物語直解にも作者、時代の論がありますす。祝詞考などにも祝詞各篇の製作年代を論じてあります。之を要するに、古書のあらゆる方面に向つて註釋を施し、解釋を與へようと絕えず勤勉せられたのであります。それが長い間積り積つて色々な著述が出來たのであります。さうしてその長い間には、研究の進步から、前の說が變つて來るので、絕えず補正を施して、それが

歿年までも續いて居つたといふ所に、學者としての眞摯な態度が見えるのであります。
翁は學問上かやうに研究を積まれたのでありますが、同時に又自ら歌文を創作する人でありました。卽ち古書を研究し、古語を明らめるといふのみでなく、其の古語を用ひて文を綴り、歌を作られたのでありました。翁の一代の和歌には變遷もありますが、最も萬葉集を貴んで、上代を重んぜられた所から、其の文も、其の歌も、常に模範を奈良時代以前に置かれたのであります。ますらをの男らしい風調は上代にあるといふので、その素朴な中に、誠の心があらはれて居るといふ事を採られたのであります。
後の綾は中つ世の錦に如かず、中つ世の錦は上つ世の倭文機(しづはた)に如かざる事は、下り立ちて知る人こそ知らめ。
といふので、上古の文は錦でない代りに、眞味がある。すべて後の世のものは漢意を交へて來るので、虛飾が生じたといふ論であり、それで歌を學ぶにも上古を學ばなければならぬ。
歌は其の時の姿によりてよむ事ぞなどいふものは、私の心の甚だしきにぞありける。
古へ人の直くして心高くみやびたるを萬葉に得て、後に古今歌集へ下りてまねぶべし。
物は末より上を見れば、雲霞隔りて明らかならず。其の上へ昇らむ階(はし)をだに得ば、いち早く高く昇りて上を明らめて後に末を見よ。既にいひし如く、高山より世間(よのなか)を見渡さん如く、一目に見ゆべし。物の心も、下なる人、上なる人の心ははかり難く、上なる人、下の人の心ははかり易きが如し。よりて學びは上より下すをよしとすること、唐國人もしかいへりき。

といふのであります。元祿以後になつては、一般に純文學が起つて來ましたので、漢學方面に於ても詩文家がだんだんと出て參りました。翁の友人であつた服部南郭は、當時芙渠社といふのを立てて、江戸の漢文壇の牛耳を執つて居つたのであります。かういふ時世ですから、國學の方に於ても和歌や古文を弄ぶといふ人もだん〲多くなつたのであります。この時、翁が古體の歌文を以て弟子に敎へられたのでありますから、其の門に集つて來るもの次第に多く、學問を研究する傍ら、むしろ文筆にたづさはる側の門弟も澤山出來ました。京都あたりには、堂上家の風を學んだ歌詠はありましたが、歌文に通じたものは尠かつた時代でありますし、江戸の文運がだんだん開ける時代でありましたから、おのづから天下の耳目を集められたのであります。さうして翁の文藻がつまり一世を風靡したのであります。これは一つは江戸といふ所であつた事にもより、又田安家に寵遇せられたといふ事なども幾分か原因ともなつて居りませうが、實際此の當時に於て、眞に古文學を研究し、又古歌古文を作り得る翁ほどの人は外に無かつたのであります。それで翁の門人の中からは、だん〲と文章家や歌詠が輩出しました。就中傑出したのが村田春海、橘千蔭等で、江戸の歌學はこれから盛になつて來たのであります。翁の門人中には、筑波子、倭文子、餘野子の三才女が居つたのみならず、その他にも紅子、榮子、久米子、さかり、ともひ、たまき、ゐや、ふみ、ゑん、などまだ〲多くの女の名前が見えます。これ等はもとより日本の古道を明らめるといふ方の弟子ではなく、文藝上の弟子であつたのであります。佐佐木博士の「賀茂眞淵と本居宣長」といふ書の中に、ふぶくろ抄といふものがあつて、女の弟子への往復の手紙などがあつて、歌の添削をしてやられた樣子

が分ります。

門人の中には、同鄕の人で栗田士滿とか內山眞龍とか、又、伊勢の人で荒木田久老とか、古典を硏究した人もあり、正直に眞淵の說を守つて、詠む歌にも少しも後世の語を交へなかつた楫取魚彥などは、師の硏究につゞいて古言梯や續冠辭考などを作つた人であります。又高橋秀倉といふ人、これは翁は律令の學をせよと敎へられたのですが、翁に先だつて歿しました。加藤宇萬伎といふ人は歌が上手でしたが、難波に勤番しました。上田秋成は此の人の弟子です。翁の文藻はかくして關西までも擴がつて行つたのです。翁が新しい學問の開拓者として多方面に力を持つて居られたが爲に、弟子は思ひ〳〵に其の一面を受繼いで發達して行つたのであります。こゝが翁の偉大な所であります。さうして又翁の事業の影響の大きい所以であります。かの奇才を抱いて戲文をものした平賀源內も、片歌を主唱した建部綾足もやはり翁の門人名簿中の人であります。建部綾足は西山物語、本朝水滸傳等を書いた人、村田春海にも竺志船物語がありますが、曲亭馬琴が幼時から私淑したのは秋成や綾足で、眞淵翁が文化文政の小說界に間接に大影響のあつたことも、顯著な事實であります。古言を究め、神道を明らめようといふ人の努力が純文藝の繁榮をも開いたのであります。

平田翁の玉襷に、或時、河津長夫といふ門人が、師の眞淵翁に尋ねて、

大人は上つ代の道の學問こそ專とある學なれと諭し給ふに、その方の學問する人とてはあることなく、歌のみ詠みならひ侍るを、大人の制し給はぬは如何なる由にか。

と問うた、その時の翁の答に、

歌よむ事は、我が本意にはあらねど、教子どもの皆歌詠となる事は、譬へば父母のいと愛しく思ふ女に、何くれと手業ども恥づかしからず習はせて、年頃になりなば、高くふさはしき夫を選びて嫁せむと思ひ設けてあるに、其の女年頃になりて、父母の思ふとは異に、さる高き人は物むづかしとて、拙く卑き男にちぎりて、親の心に違ふを、しかすがに捨てもやられず、許し嫁せたらむが如く、上つ代の道の尊きを嫌ひて、卑き歌作となる人のみ多きを何とせむ。若き徒の中には、歌よみつゝ遂にまことの學問に至る人の出來もやせむと、さてあるなり。

と言つて歎息せられたとあります。これで見ますと、翁は決して歌文を教へる事を本意とはして居られなかつたので、飽くまでも其の本領は古道を立てるにあつたのであります。

飛驒匠ほめてつくれる眞木柱たてし心は動かざらまし

の歌の如く確乎たる志は動かなかつたのであります。唯翁の文藝の才は、いつの間にかその方面に多くの弟子を作る事になつたのですが、これは見方によつては決して歎息するには當りません。文壇に於てさばかりの盛名が出、又歌文を作る人も大いに殖した事が、つまり國學の興隆といふ事には偉大な勢力となつたのであります。もし翁の學問があつても、翁の文藻がなかつたならば、あれ程に天下を風靡する程の國學の勢力は出來なかつたらうと思ひます。これはこの祭壇に在す翁の靈も、多分私の申す事に贊成して下さる事と思ひます。況や翁の門人

中には、律令、古典、語學其の他の研究で斯學に貢獻した人々も多いのみならず、最も大きな弟子として、むしろ出藍ともいふべき本居翁が「人代を盡して後神代に及ばう」といふ志を繼がれて、國學を大成せられた事を思へば、翁は大いに滿足せられてよいと思ひます。私は翁が一面には學者であり、一面には歌人であられた事が、國學興隆の爲には大いに幸福であつたと考へます。それであつたが爲に、學者としての翁の事業が、非常に大きな影響を與へ得たと思ふのであります。

翁の學風や主張は、どの著述にも窺はれますが、それを簡單に明瞭に言ひあらはされたもの、その學問の精粹とも見るべきものは、國意考、文意考、歌意考、書意考、語意考等でありまして、こゝに漢心を排斥して日本の古道を押立てようといふ立場が明白に述べられてあります。各異つた方面、書物は書物、歌は歌、文は文、語は語といふ風に、別々な方面から論ぜられたのですが、結局は一つに歸着します。つまり荷田翁の唱へられた儒佛の道を交へた學問を排斥するのが根柢になつて、まづ唐心を去らねばならぬといひ、日本は元來貴い國で、支那は賤しい國である。日本は日出づる國、支那は夕日の國、日本人はすべて心が直いのに、支那人は心が惡い。日本の道は天地自然の儘の道であるから、圓く平らかであるのに、支那の道は聖人の天地の道も小さく人の作つたもので、理窟つぽく佶屈急促である。日本は萬世一系の國であるのに、支那は簒奪の國、平常は夷などといつて居る共の夷どもにしば〳〵征服せられる國である。語學上の見地から言つても、日本は假名で聲をうつすが、支那では一字々々之を拵へるから、煩瑣極まりがないのである。日本では何でもない藥でもよく利くが、支那の藥

は利かない。日本も支那の文明がはいつて來てからだん／＼惡くなつたのであるから、まづ唐心を去つて、その混合物を取捨てなければならぬ。それ故唐心のある日本紀よりも、古事記がよい。すべて支那の影響の無い上代程よろしい。それであるから、歌も文も古代に則とらなければならぬ。さうして古語を知つて、その古語を通して古代の道を知らなければならぬ、とかういふ主張であります。翁の此の主張は卽ち宣長翁に傳はり、篤胤翁に傳はつて行つたので、國學といふものの立場、國學者の態度は、こゝに定まつたのであります。其の信念はまことに堅く、その議論は誠に徹底して居るのであります。千蔭の書いた賀茂翁家集の序に、

千蔭いと若かりしより、大人に從ひて、常のみありさま、宣へりし事を親しく見もし、聞きもしつるに、大人は今の世の人とは異にして、うち見にはさかしき事はおくれして、心おそきやうに思はれしかど、たまさかにいひいで給へる言に、敷島の大和心をあらはし、一言としてみやびならざることなかりき。筆とりて物書き給ふと見るに、五百年も經にけむ筆の跡の如くになむありける。こはあまた年、夜晝と無く古言をのみ心にしめて、家居より調度に至るまで古によりて、いさゝめにも後の世の事を耳にふれ、心にとめ給はざりしかば、自らいにしへ人の心になりもて行きて、其の心より言ひ出でもし、物書きもし給ひしによりてこそしかありけるならめ。

と言つてゐますが、かやうに性癖的になるまで、昔にこりかたまることが、實はその學說から出て來たのでありますか。學說が全く人格化されて居るのであります。それですから、かの梅を貶して、唐から移つて來た花だから

つまらぬといつて、梅の詞には、

枝もかたくなにかゞまり、花も苦しげにかじけたり。

といはれて居ますが、之に反して櫻の詞には、

こを思ふに、春に如く時もなく、櫻にまさる花もなく、やまとに比ぶる國もなく、神の道に及ぶ道もなきものを。

と述べられて居るのであります。此の飽くまで徹底的な所に翁の所信が認められると同時に、翁の著書には、幕府全盛の時代に於て、鬱勃として燃えるやうな愛國心、勤王論が閃いて居ることが認められるのであります。

翁の所説は、今日から見れば、もとより偏狹を免れない所もあります。又矛盾や誤謬も少くはありません。一例を申せば、支那を罵る詞の中の、支那は元來惡い國であるといふ論と、支那は周の武王以來惡くなつたといふ論とは、矛盾して居るやうに思ひます。又眞淵翁の語釋に於て常に危險に思はれるのは、かの通言、約言、略言、延言等を自在に使つて、卽ち五十音の音韻の相通じたり、約つたり、延びたりする事で語源を論ぜられて居るのですが、これは今日の音韻學上から見て、如何はしいと思ふ事が多いのであります。創業開拓の時代として、かういふ語學の原理方面の事まで論ぜられた苦心を察して、誠に無理のない事と思ふ外ありませんが、本居翁の所說の中にも、今日から見て首肯の出來ない語釋上の所說は隨分見受けられるのであります。眞淵翁の冠辭考に就いては、さきにも述べましたが、一々うべなふ事の出來ない例を擧げますと、「たらちねの」といふ枕詞は、日足

の日を省いてしをちと通はせ、ねといふ褒詞を添へていふと說いてありますが、如何でせう。「いなのめのあけゆく」といふ、あの「いなのめ」を說いて、「あした」のしの反しがいである。それからたは橫になに通ふから、「いなのめ」といふのは「あしたのめ」といふのと同じだとありますが、これ等は隨分無理であらうと存じます。語意考に月の名を說いて、「むつき」はもとつ月、「きさらぎ」は草木張り月などと說かれたのも、首肯は出來難いと思ひます。

以上私は縣居翁の學說、事業の大體を述べたのでありますが、要するに翁の老いて益〻壯に、學術に倦まれなかつた事、學問本位で己を空しうして後進を奬勵せられ、數代かゝつても斯業を大成しようといふ氣概、學術研究と同時に文藝的手腕を有せられた爲に、殊にその感化力が大きかつたといふ事、其の學說と人格とが全く一致融合して自ら上古の人であられた事、幕府の盛な時代に於て熱烈な勤王心を抱かれて居つた事等は、いづれも敬服欽仰すべき事であります。その一つがあつても立派であるのに、翁がそれを兼備せられた處に翁の偉大な人格があるのであります。

全體國學といふものを考へますと、これは德川期文明史に於ける一大偉觀であるといふ事には、誰も異存はありますまいと思ふ。今からざつと二百年も昔に、當時まだあまり開拓せられてなかつた我が國の古典を研究し、支那に心醉し、儒學のみを以て日本道德の標準として居つた時代に、我が國の古道を說いたといふ運動は、實に當時に於ける最も新しい業務であつて、確實な學術上の基礎に於て、しつかりと國民に國家的自覺を與へたもの

であります。しかも學問を研究すると同時に、道を說くといふことを忘れなかつた所に、實行が伴なひ、實行の效果を豫想して居ります。國學者の先覺者が說いた所は、卽ち今日世間でいふ所の國民道德の意味に外ならぬのであります。王政維新の上に國學が多大の貢獻をなし、時局促進の用をなした事は從來言はれて居る所ですが、維新後五十年の今日にいよ〳〵大切なものとなつて來たのではあるまいかと思ひます。今日は實に歐羅巴、亞米利加あたりから種々な新思想が入込みつゝあるのであります。國家的自覺のない人たちは、やゝもすればそれに思想を奪はれようとして居るのであります。日本古來の歷史も知らず、文學も知らず、風俗習慣も知らず、東西の異同も知らず、唯何でも新しいものに動かされるやうな傾向のあるのは、最も戒心すべき事であります。むかしの國學者は儒學全盛、支那思潮全盛の時に於て起つて、大いに支那思想を攻擊したのであります。この意氣、この氣概は直ちに今日の國學となつてあらはれなければならぬのであります。國學が今日に於て唯古い學問と思はれて居るのは、國學勃興當時の精神が失はれたのであります。新說は人の耳に入り難いとは本居翁もいはれたことで、とにかく國學といふものは德川時代に於て最も新しい學問であつたのであります。それは今日外來思想の頻繁な時代に於て、私どもの大いに考へなければならぬ所であります。平田翁が「いつち廣い學問」といはれた國學は、德川時代に於ては儒學、佛敎を相手にすればよかつたのですが、今日は世界の全體の思想を相手にして、我が國家の古道を徹底させて行かねばならぬので、新しい國學には最も大きな努力を要するのであります。殊に今回の大戰終結後の思想の潮流は、甚だ以て警戒すべき事であります。明和六年、卽ち眞淵翁の歿せられた

年は西暦一七六九年、ワットが始めて蒸氣機關を發明した年でありますが、その後百五十年間の進步、電氣各種の應用、應用化學の發達等、西洋の物質的文明は、遂にその應用を今回の大戰爭に提供したので、地上だけの平面的戰爭を、空中や海底の立體的戰爭と變化させたのでありますが、それも幸ひに休戰の事となりました。それで今後の平和戰爭はどうなりませうか。思想の變化が最も恐しいのでありますが、國學の精神は我が國の古道に基づいて我が國民の自覺を促がすにあります。民族主義が今後の方針と立ちます樣ですが、民族即ち我が國家である日本帝國に於ては、いよ〳〵以て民族主義で自己を固めねばならず、それには國學の精神をもう一層強く、廣く鼓吹しなければなりません。眞淵翁其の他先賢の說かれた所でも、狹い見識はどうしても棄てなければなりません。時勢に合はぬものはやめなければなりません。德川時代の鎖國時代に唯儒教を相手にした議論を以て、到底今日の世の中に立つては行かれません。併しその精神だけは今でも同樣であります。眞淵翁の精神は、即ちやはり永久に日本國民の精神であらなければなりません。眞淵翁をして今日に復活せしめたなら、必ず大いに西洋の種々の主義をも研究して、やはり新しい國學を起され、死ぬまでそれを絕叫されたのに違ひないと思ひます。古を研究して新しい道を唱へた所に國學の主張があつたので、此の皇典講究所及び國學院に於ても、故い事を溫ねる上に於て、最も新しい將來を主張せられなければならぬと思ひます。世界大戰の休戰報道を得たと同時に、縣居翁百五十年記念祭のあつた事も偶然ではありますまいと思ひます。今後の思想界に於て、我々後進者の努力せねばならぬ事は無限であります。然らざれば二百年以前の先進者の志を空しうする事になるのでありますし、

又今日の記念會の意味をも空しうするであらうと思ひます。終に臨みまして、私が彼是翁に就いて批評した事も、學問本位であるといふ事を翁の靈も御承知下さるであらうと信じます。謹んで來賓諸君及び學生諸君がこのつまらない講演に御辛抱下さつた事を謝し、尚私の申した事に誤謬があらば、御訂正下さる事をお願ひ申して置きます。

（賀茂眞淵翁記念講演會講演、大正七年十一月「國學院雜誌」）

漢字活字の改鑄を望む

漢字が我が國字となつて居ることは、今日の我が國家にとつては一つの禍である。これが爲に、どの位、我が國の教育に骨が折れ、世界的競爭の上に損をして居るかは、今更いふまでもないことである。併し上古から輸入して、久しい間用ひて居たものを、今急に棄てようとしてもなか／＼むづかしい。これには種々な方法が講ぜられなければならぬが、まづ當分の中は漢字を使用して居るものと覺悟しなければなるまい。就いては出來るだけこれを簡便にして、學ぶにも、使ふにも、容易にするやうな方法を考へなければならぬ。その一方法として、私は漢字を棒だけにしたいと思ふのである。棒だけといふのは、活字でいふゴシツク體のや

うにするのである。太い部分もなく、細い部分もなく、撥ねる部分もなく、縱横の點もなく、點は點、棒は棒で、字畫だけの形にしたいのである。木の字の縱の棒が撥ねてよいか、撥ねずに止めてよいかなどといふ問題のないやうにしたいのである。木を二つ合せて林、三つ合せた森の右の＼が撥ねてよいか、止めてよいかなどといふ問題が尠からず兒童の頭をいためるものである。さういふ例は數限りもなく多い。弟や兼といふ字の頭がソであるか、八であるかなどといふ類、漢字を學んだ人から見れば何でもないのであるが、新しく學ぶ人にはなか〳〵厄介な問題になり、小學讀本などではどちらにしてよいか、困る事が多いのである。もしゴシツク體のやうに、ぶつきらぼうな線だけであらはすこととすれば、そんな區別は一切不必要の事になり、字の形だけを見分ければよい事になるのである。漢字としての美しさや、趣味は失はれるが、漢字としての用向は辨ずるのである。

今の世に、毛筆を持たせて、漢字の永字八法を懸腕直筆で兒童に學ばしめることは、非常に時間潰しで、非常な徒勞である。鉛筆なり、萬年筆で、字畫を間違はないやうに、小字だけを敎へればよいとおもふ。それには右にいつたやうなゴシツク體で行けば、撥ねる、撥ねぬの面倒もなく、筆法を彼是いふ必要がなくなつて、隨つて多くの時間を節約し得られ、世界的競爭に於ての負擔が幾分かでも減じ得られる。

それには活字の改鑄が必要である。元來今の活字、即ち明朝體は縱の線が太く、橫の線が細く、何等筆法に顧慮せず、上手下手も無いところに、簡便さ、便利さがあるので、廣く印刷體として用ひられることになつたのである。美しさからいへば、淸朝體が美しいのである。併し今日では、支那でも日本でも明朝體が弘く行はれて居

る。之を更に一歩進めて縱横の線の太さを皆一様にしようといふのがゴシツク案、卽ち私がこゝにいふ案である。一切の活字がこれになり、教科書を始め、新聞雜誌等で皆これになれば、書く字と讀む字の區別もなくなり、大層樂になるのである。今日の明朝活字では書く字と違つた所が多いのである。

（大正八年一月「帝國文學」）

感ずるまに〳〵

一　皇太子殿下御成年式

五月七日の御成年式、これは我が國史始つて以來の珍しい慶典である。皇室典範に基せられた皇室令に據つての第一次の盛典として、或意味に於ては實に空前未曾有の御盛儀であつたのである。同日午後宮中に參賀して、殿下の颯爽たる御英姿を拜し奉つた時、皇室の繁榮、國家の隆昌を思つて、歡喜の情は漲つて、涙が自ら双頰に傳はつた。參列の諸員も皆さうであつたらうと思ふ。國民一般の至情も亦悉く殿下の御身に集つたのは、この月この日の御盛儀であつた。

二　賀　表

この御慶典を祝賀する爲、各方面からの賀表は宮中と東宮御所へ捧げられたが、私の知つて居る範圍では四つ

の帝國大學の賀表の中、二つまでは漢文で書かれてある。かくの如き神聖な國家の盛儀に際して、漢文を用ひることは適當であらうか。漢土の文明を採用して、我が國の文化に資せられたのは古い事であるが、現今の偉大な國家を成し、世界獨得の文明を樹立しようとする國民が、いつまでも支那の古典を遵奉して、國語尊重の念を忘れて居るのは矛盾ではあるまいか。國家最高の學府に於て尙舊習の漢文崇拜を脫し得ないのは遺憾な事のやうに思はれるのである。かういふ思想の存在する限り、國語を自ら卑しとして、外國文に據らうといふ間は、人種差別問題の主張も無意味であるかも知れぬ。支那人が頭から日本人を輕蔑するのは當然であるとも考へられる。

三　奠都五十年祭

御成年式の翌々日、東京の奠都五十年祝典が行はれて、市からは兩陛下、皇太子殿下の行幸啓を上野公園に仰ぎ奉つた。私も亦その式場へ參列するの榮譽を擔つた一人であるが、沿道民衆の歡呼は知らず、兩陛下が式場にお臨みになつたその刹那、かねての式の順序にもよらず、群集した六萬の市民が思はず一聲に萬歲を歡呼したのは、實に市民が抑へきれない歡喜の叫であつて、儀式的に形式的に發せられたもので無いだけ眞誠の赤心があらはれて居た。御成年式に續いての此の祝典、時は世界平和の第一年、滴る如き新綠が野山を埋める時節、何といふおめでたい事であらう。

四　市長の賀辭

式場に於て市長の朗讀した賀辭は少し離れた處では、もとより聽取ることが出來なかつた。歸途出口で受取つ

た印刷物で始めてその全文を讀得たのであるが、まことに堂々たる名文である。私たちをして言はしめれば、尙漢文に囚はれて居る文章であるが、これは今日としてはやむを得ない事であらう。但し一つ目についたのは、

輦路雨露ノ惠ニ潤ヒ寸草三春ノ暉ニ先ツニ於テオ゜ヤ

とあるそのオ゜である。これは明白な假名違である。しかも從來漢學者などは隨分多く使用し來つた誤謬である。私はこれが印刷上の誤植たることを信じて、まさか原文にはかうあつたとは思はぬ。現に翌日の新聞紙には皆ヲ゜と訂正してあつた。併し萬一原文にオ゜とあつたとすれば、こはやはり國語愛重の念の足りない事を證明するもので、事一假名の誤謬といへども、かゝる峻嚴な場合の賀辭として、甚だ其の當を得ないものと言はなければならぬ。東京市の一公民として私は抗議を申出でたいとおもふのである。

五　新　漢　字

漢字を本字と唱へ、假名を假字と考へたのは、昔の文化史から見れば當然な事であらう。その餘習が今日まで傳はつて、假名で書けば濟む所に、漢字を宛てなければ承知しないといふ風がある。弗や哩は通用が久しいからまづ許すとしても、心得難いのは粁、糎、瓸、瓩などの文字である。西洋の度量衡を敎へるために、かういふ文字を拵へて、さうしてそれが義務敎育として兒童に敎へられつゝあるのである。小學兒童に西洋度量衡を敎へるのも疑問であるが、これは別問題として、兒童は義務敎育中にかういふ文字を學習しなければならぬ義務があるであらうか。これは世間が漢字に拘泥する一例として擧げたのに過ぎないが、かういふやうなつまらぬ骨折でく

たびれ儲をして居ることは到る處にあるのである。外國の地名や人名でも皆一々漢字にあてるので、我が國の地名や人名の讀みにくい上に、西洋の地名、人名（漢字に宛てた）を訓むことは被教育者にとつては重大な負擔である。何故にこれ等はすべて假名で書いてはわるいのか。因襲の力といふものは實におそろしいものである。

六　新國語

新しい語が出來る時に、直ちに漢語からの出典をもち出して新しい語を造る。哲學や科學や又應用諸學科の上にもかくして年々新しく、むづかしく、素人にはとても分らぬ術語が增加してゆくのである。漢字をよく知つてゐるものには、多少の見當はつくが、義務教育を濟ませただけ位の學力では、外國語を覺えるのと同樣である。航空機はまだ分るかも知らぬが、格納庫とあつては、何の事やら分らぬ。飛行機の庫といつた方がどの位分り易いかも知れぬ。操縦するなどと言はないで、あやつるなり、取扱ふなり、乘りまはすなりと言つてはなぜわるいか。漢字本位、漢語本位をすてて、假名本位、國語本位にすることが、どの位すべてのあらゆる方面の學識習得を容易にするか分らぬ。それには思切つて、國語の所謂俗語を採用するがよい。又古語を復活するがよい。或は國語を活用させるなり、或は接頭語や接尾語を加へて新國語を造るなりするがよい。私は近年の純文藝の方面に於て、だん〳〵純國語の多く用ひられつゝ進歩するのを見て、非常に末たのもしく感ずるのである。漢字、漢語、漢文の覊絆からは一日も早く離れなければならぬ。それでなければ一般知識學習の上にも非常に損があるし、國語の發達、隨つて國文學の發達は到底望み得られぬのである。

（大正八年六月「帝國文學」）

國學普及の必要

近頃正義人道といふ言葉が盛に高唱されるのでありますが、此の正義人道といふ言葉は今に始つたのではないので、日本にも昔からある言葉であります。併し何だか正義人道といへば近頃新しく亞米利加から輸入されたやうに考へて居る人が澤山あるやうであります。さうして此の正義人道とか、或はデモクラシーといふことが頻りに謳はれ、世間が急に變つて來たかのやうに考へ、且又彼の飮酒禁止問題だとか、徵兵制度廢止問題などが唱へられると、直ぐに之を謳歌し、大學教授中にも之に贊成してゐる人々があるやうであります。亞米利加や歐羅巴で唱へられたことに就いて、其の根本を究めず、又日本の國體などを一向顧みずして、何でも彼でも亞米利加人の言つたことは新しい、英吉利人の言つたことはすべて良い、卽ち之が世界の大勢であると說いて居る。さうして亞米利加のウイルソン大統領は世界を一人で背負つて立つて居るやうに思つて、日本人の中にもウイルソン大統領の提唱した平和問題などに對しては、隨喜渇仰の涙をこぼして居る者も隨分多いやうに見受けられるのであります。凡そ一個人に就いて見ましても、自らの人格といふものを自分自らが知らねばならぬ。自分の缺點や弱所ばかりを知つて居て、自分の長所といふものを全く知らぬ人は何事も出來ない、誠に憫むべき人間である。國

家も之と同樣で、米國と日本との國體の異なる所、國家の長所を知らなければならぬ。人に人格があるが如く、國に國體があるのでありますから、此の點は深く考へねばなりませぬ。

日本は維新以來西洋文明を輸入するといふことが、非常に急遽であつたが爲、殆ど自國の事を忘れ、外國文明を吸入したのであります。そして如何にも物質文明ばかりを輸入したかのやうに思はれて居るのでありますが、物質文明ばかりでなく、精神文明をも無暗に輸入して來たので、それが爲、何でも彼でも西洋の物はすべて良い、舶來品は何でも良い、帽子一個買つても、靴を一つ買つても、舶來品でなければならぬといふ有樣で、すべて日本で出來たものはいかぬといふ考が、一般に彌漫して來たのであります。

併し日本人が西洋文明を入れるといふことに就いては、優柔不斷でなかつた爲、世界の文明に從ふことが出來たので、これは日本の長所でありますが、それが餘りに我を忘れて、西洋の物質並びに精神文明は無條件に受入れねばならぬやうに思つて、亞米利加から吹いて來る風は、何でも彼でもよいものであると考へて、之を輸入して居るのである。が、併し之は大いに警戒しなければならぬことと思ふのであります。過日私は或所へ旅行する汽車中で或有名な人に遇つたのであります。其の時「一體源實朝は賴朝の子か孫か」との質問がありました。其の人は經濟界に立つてゐる有名な人で、源實朝が賴朝の子か孫かといふことは何等經濟界に關係もないことであります。それを知らないでも、經濟界に立つて行くことが出來るのであります。併しながら左樣に全く歴史を知らぬ人々が經濟界に立ち、或は政治家として立つて居るといふのは不可思議なことで、其の國の歴史を少しも知

らないやうな人は、其の國家の緊要な業務に當り得る資格はないのであります。亞米利加人は亞米利加の歴史、英吉利人は英吉利の歴史、佛蘭西人は佛蘭西の歴史を知らなければ、國家の要路に立つべき資格がないのであります。然るに日本では日本の歴史を知らない、全く空虚な頭でそれ〴〵要路に立つて居るのは、實に情ないと感じた次第である。斯様に日本の歴史、日本の國の成立を知らない空虚な頭で國家の重要な地位に居るから、外國のことを聞くと、珍しい、新しいといつて直ちに之を歡迎するのであります。さうして英吉利の大學に留學した者は、歸朝後は日本のことを忘れて、英國のことを非常に謳歌する。亞米利加に留學した者は、亞米利加最負となつて、亞米利加を謳歌する。佛蘭西ならば佛蘭西最負、獨逸ならば獨逸最負といふやうになつて、全く自國の知識なく外國の知識だけを以て得々としてゐる者が多いのであります。そこで私は此の間かういふ歌を作つた。

私は歌は下手であるがお笑草迄に申上げます。

西の洋(うみ)のことよく知れる輩に皇國(すめくに)しらぬ人ぞ多かる

實際かういふ有様で政治家を始めとしまして、一寸も日本のことを知らない人が澤山あるのでありますが、それで自らは恥とも思はないのであります。

彼のウイルソン大統領は抑々何者であるか。彼はジョンス、ホプキンス大學を卒業して後、同大學に敎鞭を執り、憲法の講座を受持つて居た。それから後プリンストン大學總長となつた人で、亞米利加の憲法を最もよく知り、さうして亞米利加の歴史を最もよく知り、亞米利加人の心理を最もよく理解して居る政治家である。亞米利加が

世界大戰の當初に於て隱忍自重、中立國としてよく平和を保つて居たのも、全く彼ウイルソンが亞米利加人の心理を解して居た爲である。亞米利加國民の激昂が其の極に達し、彼が獨逸に向つて宣戰を布告する迄、自國民の心理の鍵を握つて居たのである。つまり彼が自國の憲法、自國の歷史に深く通じて居た爲、よく亞米利加を指導することが出來、理想國民である亞米利加人をして、擧國一致戰爭に參加せしめたのである。卽ち彼は亞米利加の國學者であることに於て亞米利加の大政治家たり得て居るのであります。然るに悲しい哉、日本の政治家には斯の如く日本の憲法を理解した政治家は一人もないと私は信ずるのであります。一體高等文官の試驗に就いて見ましても、日本の歷史は一つもはいつて居ない。憲法を解釋するのも法理上から解釋する。敎育勅語の解釋も單に哲學や倫理學からのみ解釋する。抑々帝國憲法と敎育勅語とは其の背景として日本の歷史が含まれてゐるのであります。卽ち帝國憲法には我が國體を闡明してあり、敎育勅語には明らかに我が國の國敎卽ち我が國民の道德を示してあるので、帝國憲法と敎育勅語とは決して引離して考へることは出來ない。又之を法理學者や倫理學者の研究に委ぬべきものでないので、之は二つにして一つで離れないものであるから、どうしても國體の方面、國史の方面から十分其の意味を闡明しなければならぬ。

明治二十二年紀元節の佳辰を以て帝國憲法を御發布になり、其の翌年敎育勅語を下し賜はつたのであります。卽ち前年國體を闡明して國家の大憲法を制定し、不磨の大典を宣布せられ、其の翌年國敎卽ち國民道德を宣させられた敎育勅語を下し賜はつたのであります。畏れ多くも先帝の御胸中を推測し奉るに、そこには非常な意味が

あると私は考へるのであります。又國民たる者は深く此の點に鑑みなければならぬことであります。

彼のウイルソン大統領の所謂正義人道も、彼は亞米利加の爲に叫んで居るのである。彼は世界の爲に叫んで居るやうにいふけれども、其の內心に立入つて見れば、全く亞米利加の爲に叫んで居るのであります。彼は耶蘇教國民でありますから、耶蘇教國の政治道德を解して居るので、彼が叫んで居る正義人道といふものは、決して新しいものでなく、昔から唱へられたもので、世人が今更の如く驚く必要はないのであります。私は一昨々年亞米利加に渡航しました。其の時分は丁度亞米利加は中立國であつたのであります。時恰も大統領の改選期であつて、ウイルソン氏は例のヒューズ氏と爭つてゐたのでありますが、ヒューズ氏の方が非常に優勢で、或はウイルソン氏が落選するかも知れぬ有樣であつて、其の二三日前既にヒューズ氏の勝であらうといふので、日本の通信員は逸早く最早ヒューズ氏の勝であると打電したのでありますが、其の後遂にウイルソン氏が當選したのであります。元來ウイルソン氏は平和論者で之を看板とし、一方ヒューズ、ルーズベルト氏一派は開戰論を唱へて居たが、遂にウイルソン氏の平和論が勝を占めて、大統領になつたのであります。其の後私が亞米利加から倫敦に渡らうとする時、突然國務卿ランシング氏が一寸した事から口を辷らし「亞米利加も何時大戰亂の渦卷の中にはいるかも知れない」と洩したので、それが非常な騷となつて紐育の株式は一時非常に下落し、大恐慌を來したのであります。其の後例の獨逸カイザルが人道の爲に平和提議をしたといふことがあつたのであります。其の時私は獨逸も大分弱つて居ると見える、英吉利や佛蘭西にカイザルが平和提議を申し込むに於ては、講和が成立つかも

知れない、さうなれば獨逸國内にもはいつて視察することが出來るかも知れないと思つて居たのであります。所が今度は船に乘つて倫敦へ渡る途中、無線電信で亞米利加の大統領ウイルソン氏が平和提議をした事を知りました。

中立國として最も有力な亞米利加が平和提議を申出たのであるから、英吉利も佛蘭西も大分疲れては居るし、或は講和が成立つかも知れないと思ひつゝ倫敦に着いたのであります。所が倫敦ではウイルソン氏を馬鹿者扱にし、ウイルソンは吾々國民の心理を解して居ないから、かゝる提議を爲すのだと、一様に之を一書生論として一向顧みなかつた。私は其の頃或寄席を覗いて見ましたが、その中にウイルソン氏を諷刺した劇を演つて居ました。上に大きな栗の木があつて、其の下で爺さんと婆さんが昔話をする。爺さんが「私はお前を初めから非常に愛して居る。お前より外に女はないのだ」といふと、上から栗のいがが落ちて來る。それから「近頃亞米利加の大統領ウイルソン氏が平和の提議をしたといふ。誠に結構なことである」といふと、今度は二十ばかりの栗のいがが一度に頭の上に落ちて來る。かういふことを演つて、平和提議拒絶の意味を現して居たのであります。さうして亞米利加の提議はもとより英吉利が受入れなかつた。其の時私は之ではなか〳〵容易に平和は成立たないと感じたのであります。それは一昨年の正月でありました。其の後二月になつて、獨逸は飽く迄潛航艇戰を敢行することとし、亞米利加の船舶であらうが、何處の國の船であらうが、手當り次第に撃沈するといふ、隨分亞米利加を馬鹿にした宣言を發し、中立國船舶の航海を止めてしまはうとした。さうして獨逸が此の宣言を發すると、諸威

から發する定期航海並びに亞米利加から發する定期航海は一箇月ばかりも杜絶してしまつた。是が爲、滯英中の日本人なども大いに困つたのであります。其の時私はランシング氏が口を辷らして、「亞米利加も何時戰爭の渦中に投ずるかも知れん」といつた事に思ひ當り、初めて其の了解が出來たのであります。私の推測によれば、亞米利加は獨逸の潛航艇戰を豫期して居たのではあるまいかと思ふ。さうして獨逸が潛航艇戰を宣言して、亞米利加の船舶が脅かさるゝに至つて、彼ウイルソン大統領は殊勝らしくも正義人道を唱へ出したのである。何故自國の船が潛航艇の攻擊を受ける事になつて、正義人道を唱へ出したか。此の邊は大いに考ふべき事であると思ひます。

彼のウイルソン大統領は、其の初め中立國の和蘭船や、英吉利のルシタニヤといふ大きな船が擊沈されても一向平氣で、亞米利加人民の激昂に對して、乘組死者は加奈陀の人間であるとか、又は亞米利加人ではあるが、唯一代者ぢやとか、種々誤魔化して居たが、愈〻獨逸が潛航艇戰を宣言するに至り、亞米利加も戰爭に捲き込まれるやうになつて、彼は初めて聲を大にし、「奮然起つて世界人道の爲、獨逸の軍國主義を破壞しなければならぬ」と叫び出したのであります。其の時、彼は「目指す敵はカイザルである、獨逸の軍國主義である。獨逸國民には罪はない、獨逸國民は實に立派な民族であるから、獨逸民族を亡ぼさんとするのではない、獨逸の軍國主義を亡ぼさんとするにあるのだ」と絕叫したのである。然るに其の後、獨逸國民はなか〳〵忠君の念に厚く、愛國心が強く、容易にカイザルを倒すことが出來ないと知るや、彼は「獨逸國民に對しても決して容赦する所ではない」と、斯樣に前後矛盾したことを聲明するに至つたのであります。世の中にはウイルソン大統領を非常に理想の高

い人であるやうに思ひ、道徳の神様のやうに信じて居る者がありますが、斯の如く矛盾した神様はないのであります。畢竟ウイルソン大統領は、亞米利加人の爲に人道主義を唱へ、正義を唱へて居るので、決して世界人類の福祉を圖る爲に正義人道を唱へて居るのではないのであります。それを道徳の神様のやうに信ずるのは、全く自己を知る明がないからで、誠に憫むべきことであります。又日本の國體と亞米利加の國體とを差別せずして、ウイルソン大統領を謳歌したり、歐羅巴はデモクラシーの國であると讃美したりするのは、全く我が國體に關する知識がないからであります。それ故吾々は我が國民に國學を普及せしめねばならぬといふことを痛切に感ずるのであります。

此の頃の新聞を見ますると、亞米利加大統領ウイルソン氏の主唱によつて、平和人道の爲、國際聯盟が唱へられて居るのであります。然るに亞米利加に於ては國際聯盟だとか、正義人道だとか、口では非常に立派なことを唱へて居るが、其の裏面に於ては海軍の大擴張を企て居り、人種差別撤廢問題に對しては反對を唱へて鎖國主義を執つて居るのである。これで一體平和人道は何處にあるか。甚だ其の眞意が疑はしいのである。どうも日本の新聞なども西洋で使つた言葉を其の儘使つて、日本人のことを有色人種などと書いて居る。これは甚だ不都合なことで、色などによつて人間を區別する必要があるか。更に又正義人道の上からいつて、色の黄白によつて差別するの必要が何處にあるか。そんな必要は何處にもないのである。

此の間迄日本は講和會議の五大强國會議の一に加はつて居たのであるが、此の頃は四大國會議となつて、日本

は除外者にされて居るのであります。日本は此の大戰爭に對して遠く地中海、印度洋の方面に海軍を派遣し、近くは西伯利亞に迄出兵して、大いに聯合軍の軍事作戰を援け、其の功績は偉大なものであります。然るに自國を護る爲に參戰した伊太利よりも低く見做されるといふ事は甚だ不都合なことで、今や人種差別撤廢問題は此の四大國會議で葬られんとして居るので、日本國民は甚だ心細い譯であります。ウイルソン氏の唱へた民族自決問題は何であるか。これはつまり巴爾幹の小國を統一しようとした彼が主義政策であつたので、彼ウイルソン大統領は平和と自由とを驕して、ロイド、ジョージ、クレマンソー氏等が未だ平和を唱へざる時に當つて、亞米利加の爲に正義人道を叫び、デモクラシーを高唱したのであります。彼は一度口を開けば獨逸の軍國主義並びに帝國主義を飽く迄罵倒して居りますが、これは我が國民として大いに考へなければならぬことで、日本に當てつけていつて居るといふことを心得て居なければなりませぬ。我が國の或大學教授が、ウイルソン氏が大學の憲法講座を受持つて居た頃、亞米利加に留學してゐて、ウイルソン氏の話を聽いたが、其の時分丁度日本に初めて憲法が出來て、其の英譯が亞米利加に來た。日本に憲法が出來たのは珍しいといふので非常な評判になり、祝賀會が開かれたのであつた。其の時ウイルソン大統領は日本の憲法を評して「これは獨逸普魯西の憲法其の儘だ」といつたさうであります。ウイルソン氏は自分の國の憲法はよく知つて居る、自分の國の歷史はよく知つて居るけれども、日本の國は知らぬ。隨つて日本の國體、國史は知つて居ない。それだから日本は獨逸の憲法を眞似たのだ、こんな憲法は嫌ひだと思つたに相違ない。日本の憲法が如何に我が國の歷史的背景を含んで居るかを知らないのであ

ります。故に日本の憲法が獨逸の憲法と同一だといふウイルソン氏の觀念は、其の時分から今日に至る迄尙去つて居ないと思ふ。さうして彼ウイルソン大統領が獨逸に對して「軍國主義を破らなければならぬ、帝國主義を倒さねばならぬ」といつて居り、又露西亞帝國が瓦解してから、一層デモクラシーを絕叫して居ることは、實に日本に當てつけて居る言葉で、ウイルソン氏の胸中は或はさうだと思ふ。然るに其の事を知らずに、無暗にウイルソン氏のいつたことを有難がるといふことは、日本人の恥であらうと思ふのであります。

世界の大戰も漸く其の終局を告げ、今日巴里に於て平和會議が開かれて居るのであります。其の表面だけを見れば甚だ立派でありますが、其の內實に立入つて見ると各自それぞれ自國の利益を主張して、正義も人道もないのであります。戰爭中神樣に御祈禱をした言葉に、獨逸は「神は國民に幸ひし、必ず我が國は戰爭に勝つ」と頻りに言つて居た。聯合國殊に亞米利加は「世界平和の爲の戰は必ず我の勝利に歸する」と言つて居たのであります。獨逸の言葉は非常に武斷的で、國家の外に何物も眼中にない。亞米利加は「獨逸は平和の敵である、人道の敵である、自由の敵である」と言つて、世界の平和、人道の爲、正義を唱へ、人道を叫んで居たので、表面は甚だ立派であるが、これは亞米利加の標語であり、又亞米利加の武器に過ぎなかつたのである。それを近頃に至つて、かういふことが世界の大勢であるといひ、又亞米利加人の理想であり、道德であるかのやうに世間へ吹聽するに至つたのである。

さうして日本へも此の所謂世界風がはいつて來て、××敎徒の中などには日本の歷史を無視して、種々人心を

攪亂するものがあるのであります。固より宗教には國境がない。日本の憲法にも信教の自由を認めてありますけれども、國民は國家を超越することは出來ない。國家を離れて國民はないので、如何なる國民も國籍をもつて居る。日本人は何處までも日本人で、日本の國家を離れて日本人といふことは出來ない。如何なる宗教を信ずるのも、それは自由でありますが、吾々國民は國家を超越することは出來ないのである。我が憲法第二十八條に於て信教の自由を許してありますが、國家の行政を攪亂し、國家の治安を紊すが如き宗教に對して信教の自由を許されては居ないのであります。然るに××教徒の中には日本の國體、歴史を知らずして、徒に日本を惡口するものがあるのであります。さうして我が國民の中にも亞米利加あたりから金を貰つて「我等の拜むべき神」などと平氣で唱へて居るのである。これ等は全く日本を知らない、日本の國體を知らない、日本の歴史を知らない結果で、國家の安寧秩序を紊る處があるのであります。恰も道が固まつて居ない處へ自動車を輸入して來て「どうも日本の道が惡い」といふ。東京などの道は自動車の爲非常に壞れて居るのでありますが、それは日本では自動車の通るやうに道が固めてないから惡いのに極まつて居る。そこで私は

玉鉾の道固めずば自動車の動くまに〳〵崩れゆくべし

かう歌つたのであります。實際此の譬の通りで、我が國のことを顧みないで、何でも西洋のものを輸入しようとして居るのであります。是に於てか國民一般に國學を普及して、我が國民の執るべき途を明らかにするのが、今日の最大急務であります。

然らばどうして國學の普及を圖るか。それは小學校を始め中學、大學に至るまで、修身、倫理並びに歷史――殊に歷史を其の根柢から徹底的に教授し、國民一般に日本の歷史を知らしめ、日本の國體を理解せしめ、國民精神の振興を圖るといふことが最も適切であると考へます。先づ小學教育からして我が國史並びに國民道德、國家精神を國學の上から明確に徹底的に教育しなければならぬと思ふのでありますが、どうも今日の小學教育は、其の教授法に於て甚だ不十分である。第一歷史の教科書からしてよくない。餘り水戸派の學風に傾いて居て、佛敎を惡くいひ過ぎて居る。聖德太子が日本へ佛敎をお入れになつたといふことは、國家の文明を進め、國民の精神的修養を目的とせられたのであります。又聖武天皇が奈良に東大寺をお建てになり、諸國に國分寺を置かせられたのも、佛敎の信仰によつて國家を開き、國民を安んじ給はんとの大御心より出でさせられたのであります。然るに小學校の教科書では單に聖德太子は佛法を信じ、聖武天皇は自ら三寶の奴と稱せられて諸國に國分寺を置かせられたとのみ說いて、何の爲に佛法をお弘めになつたかといふことに就いては少しも徹底して居ないのでありますます。今少し歷史を徹底的に教へなければならぬのであります。

御歷代天皇の御仁政に就いても、唯仁德天皇が高殿に登らせられたとか、醍醐天皇が寒夜に御衣を脫がせられたとかいふやうに極めて斷片的であります。これは甚だ不徹底であると思ふ。我が國は建國の其の昔より歷代の天皇は何れも臣民の上に御心を注がせられ、臣民を基礎として御仁政を施させられざるはなく、其の大御心は御歷代連綿として今日迄少しも變らないのでありまして、此の御仁政が萬世に連綿として續いて居る所が國體の精

華であります。さうして國民は御歴代の天皇を神と仰ぎ、父と敬ひ奉る所以であつて、義は君臣、情は父子といふことになつて居るのであります。

又國史全體に就いても、唯權臣の興亡を說いて、皇室と臣民との關係は說いてない。卽ち蘇我氏が亡びて藤原氏が興り、その藤原氏の末に攝政關白が出來て權力を擅にし、それから武家が出來、源氏が權力を得て幕府を建て、北條氏が出て承久の亂が起る。それから南北朝、それから足利氏が驕奢を極めるなどといふやうに、恰も權臣が我が皇室に反逆し奉つたかの如くに說いて居る。日本は昔から權臣が皇室と臣民との間を疎隔したことはあつたかも知れないが、皇室と臣民と爭つたことは一度もないのであります。日本の歷史は皇室國民親和の歷史、西洋の歷史は王室人民爭奪の歷史であります。然るに權臣の橫暴のみを力說することは間違つて居るのであります。故に歷史の敎授法を改正して、我が皇室の尊き所以、我が歷史、國體を徹底的に子供の時から頭に滲み込ませねばならないのであります。さうして前に述べた通り、帝國憲法と我が敎育勅語とを十分に解釋して、帝國憲法によつて我が國體を闡明し、敎育勅語によつて我が國民道德の基準を明らかにして、之を十分に徹底せしめねばならぬのであります。

日本は過去に於て二大危機があつたのであります。其の一つは佛敎が非常に盛であつた時、彼の道鏡が現れて、我が金甌無缺の國體を傷つけようとした。もう一つは所謂戰國時代に於て、我が國に耶蘇敎がはいつて來て、九州全部に弘まり、京都迄も傳播し南蠻寺を建て、羅馬の法王を唯一無二の神樣のやうに尊崇した時であつたので

あります。然れども吾等の祖先に潛んでゐた或力によつて遂に其の危機を免れたのであります。今日迄日本國民は新文明を採用するといふことに就いては、非常な決斷力があつたのでありますが、又一面に於て我が國體、我が歷史に顧みて自覺することが出來て、かゝる危機を脫して居たのであります。それでありますから、どうしても我が一般國民に對して徹底的に國學を普及しなければならぬと思ふのであります。

昔本居宣長翁は我が國民が國體を忘れて支那に心醉した者が多かつたので、葛花といふ書物を著して當時の人を醒したのであるが、丁度現今の有樣は此の葛花が必要な時ではあるまいかと思ふ。世間では國學といへば古い學問、古學のやうに解釋して居る人が多いのでありますが、これは全く其の精神を知らないので、國學は單に古道を研究する學問ではないので、我が國の歷史を研究し、そして我が國體を知り、我が國民の執るべき途を明らかにし、國民の覺醒を促す古い新しい學問であつて、眞に國家の危機に際し國家を救ひ、國家を泰山の安きに置くには國學を措いて他にないのであります。本居翁、平田翁の如き、其の當時の人々をよび醒したのは、全く國學者その人であつたのであります。彼の山崎闇齋が門人に對して「若し孔子を大將とし、孟子を副將として日本に攻寄するに於ては、汝等は如何にするや」と問ひたるに、門人等は何等答へ得なかつたといふ。今日の眼から見れば、闇齋の門人は餘程馬鹿であつたと思ふ。又儒教が非常に盛な時代、儒學の徒は皇室に對し奉つては敬語を用ひずして、「子曰く(のたま)」などと平氣でいつてゐた。これ等は徒に學問に囚はれた誠に憫むべきことである。今日我が國に於ける風潮が、恰も之と同一ではないかと思ふ。故に我が國の現狀に鑑み、此の國學を普及して國民の

覺醒を促し、我が國體を明らかにし、國民の執るべき途を知らしめねばならぬと信ずるのであります。之は教育の力によるより外に途はないのでありますから、此の點を深くお考へになることを切望する次第であります。

（國學院大學講演會講演、大正八年七月「國學院雜誌」）

殿樣祭之碑

殿樣祭の一語人をして古の淳風良俗を想はしむ。其の由來は記して後の世にも傳ふべきなり。明治三年の春福井藩枥原村の庄屋藤四郎、同村が元文五年、寛政元年兩度の水害の後、田地の荒廢甚しく村民の窮乏其の極に達せるを以て、年貢免除の儀を願出でたり。此の訴願を取次ぎしは藩士三岡八郎、後の由利子爵にして、藩主松平茂昭公備に事の趣を聽かれ、四月七日を以て年貢米、貢銀等一切取捨の公狀を下されたり。村民の喜察するに餘あり。爾後年々其の日を以て村民一同相會し、會場に茂昭公及び先代慶永公の墨蹟を掲げ、酒酌交して舊恩を語合ふ。之を殿樣祭とす。藩公が名臣の言を納れて直に仁慈の特典を施したると、村民が賢君の德を憶ひて永く感謝の私祭を絕たざると、眞に一雙の美談にして、其の祭の誠意ありて虛式なきも、一箇の好敎訓ならずや。そもそも列聖の政は常に民意を本とし、億兆の心は偏に忠君に專なる是我が國體の萬國に超絕せる所以なり。是を以

て武人執政の世に於ても治者被治者共に此の精神を失はず、權利義務の主張なき處自ら恩愛情誼の疏通あり。四民業を樂しみ、上下親和せるは、君民の爭鬪、貴賤の軋轢を以て終始せる外國の歴史と日を同じうして語るべからず。殿様祭の舊事を談ずるもの亦誰か共の淵源の遠きを覺りて、生れて皇國民たるの幸福を思はざらんや。

（大正八年十二月）

塙檢校之碑

贈正四位塙保己一先生は東西に例なき偉人なり。この村よりかくの如き偉人を出ししは眞にこの村又この郡の名譽ともいふべし。大正十年はこの偉人の歿後一百年に當れるを以て郡の有志相謀りて遺蹟保存會を組織し、記念祭典を行ひ、尙あまねく全國の贊同を仰ぎて記念館を建設し、又この碑をも立つることとなせり。今より後學生は教師に引率せられて次々に見學に來るなるべく、遊覽者は遺物の展覽を樂みとして遠近より尋ねよるなるべし。さても始めてこの地に遊ぶ人の感想や如何。偉人の出生地としては餘りに平凡なりと失望する人もあらん。この片田舍の目無子がよくも學問に心を寄せしよと不思議に思ふ人もあらん。目明人も讀得ぬ千萬卷の古書を讀みもし、版にもして世を益せられしは、人間業とも覺えずとて今更にその偉業に舌を卷くもあり。飛驒工ほめて

造れる眞木柱の一たび立てし志は動かず撓まず、神明に誓ひし初一念を晩年に成遂げられし意志の强さを、これぞ成切の祕訣なるべきとて譽めたゝふるもあり。常人の堪ふべくもあらぬ困難辛苦に打克ちて、世に不可能といふ語なきことを示されたるぞその一生なりける。非凡といひ超人間といふは當らずとて、ひたすらその努力に感じ入るもあり。今の世にいふ學齡にも達せぬ齡にて早くも兩眼を失ひながら、かくも前代未聞の大業を成就せられしは、これすべて心眼の力にあらずや。心眼の光は齡と共にや加りけむと專ら頭腦の威力を歎美するもあり。或はその逸話を談じ、或はその著述をかぞふるなど、十人十色、音に聞きつる偉人の舊蹟を今まのあたりに蹈み見ては、古き記憶も新しく呼覺さるべく、新しき印象は更に新しき感想をも生むなるべし。こゝに一つの忘るべからざるものこそあれ。そは當時の一盲少年を動かして他日の大學者たらしめし原動力なり。この原動力が萌芽のごとく少年の胸に萠えそめしは何時の事とも知らざれども、その成長は極めて速かにして、忽ち心の全部を占め、はては炎とも燃上らむとせり。少年を江戸へ誘ひ去りて國學の門に導き入れしも、この力なり。身の不具者たるをも忘れて叢書刊行の大願を思立たしめしも、この力なり。古史を研究し、古典を整理し、わが古代文化の闡明に努めたる一盲書生は終始一貫この力に刺激せられ激勵せられて、五十餘年一日も倦まず、つひに一世の大家となりて不朽の功績を遺したるなり。かの一心不亂や、堅忍不拔や、勢力絕倫や、みなこの力の發現活動に外ならざりしなり。この力、そは何ぞ。尊皇愛國の精神すなはちこれなり。この精神の一念凝つて文獻學の方面に具體化せられたるは、すなはち先生の事業なり。若しこの精神にして先生の心靈に觸るゝ事なかりせば、先生は

唯僻村の一盲人にて終りしなるべく、世界人を驚かせる群書類從の編纂も印行も、もとより行はれざりしなるべく、百年後の今日の日本も現狀の日本とは異りしなるべし。今は昔この郡この村に盲目の少年ありけり。その心眼の光は今もなほ學界をてらし世界をてらせりといはば、人或は謎かとも思はむ。されどこは謎にもあらず空想にもあらずして、疑ふべからざる史實なり。この史實が未來永劫にわたりて國民に與ふる教訓と感化とは至大至高なるものあらむ。來りてこの碑の下に立たむものは、偉人の學德を追懷するとともに、この偉人をはぐくみ出でたる國家的精神の更に偉大なることをも認むべきなり。

（大正十一年九月十二日）

鄉土性

北陸道は大昔の高志國で、「さかし女をありと聞かして、くはし女をありときこして」と大國主命のお歌ひになつたのは、大國主命の國造り卽ち國土經營が十分にこの地方に行はれたことを意味するのであらう。出雲から高志までの交通は、無論崎々を廻つて船で航行したのであらう。その御遺蹟として見るべきのは、能登國羽咋郡一ノ宮村に鎭座あらせられる國幣大社氣多神社がそれであらう。神事祭典などの模樣を聞いても、大分神代を思はせるものがある。かう考へて來ると、我々裏日本人の祖先は表日本の人よりも早く文化に浴したのである。

それから幾千年の今は、いはゆる物換り星移るで、昔住んでゐた人の子孫がどの位今住んで居るか、到底見當の附かぬことである。併し面白いことには昔の人の書いた書物を見ても、何となくその批評が今の世にも當つて居る所があるやうに思ふ。卽ち人國記の批評に就いていふのである。我等は各之を見て、今でも殘つて居ると思ふ惡い風、缺點は、互に戒めなければならぬと思ふ。

若狹國は最も甚だしい惡評を受けて、

人の氣の相和せぬ國……下として上を欺き、己が科を正されて、人の不法のやうにいひなせり。取廻利發なる故、相當の辯舌、一花の氣勢はあれども、根の遂ぐる所なし。

と言はれて居る。

越前國は「日本に双なき智惠國なり」と褒められてゐるが、

之に依つて高慢にして底意地あし。輕薄にして、つまる所つれなし。

と言つて、船賃を爭つて渡舟を出さぬとか、修行者が宿を求めても、貸してやらぬとか、おもひやりのない人ばかりで「邪氣多きとぞいひつべき」と斷定せられてゐる。

加賀國人に對しては、

當國の風俗は爪を隱して、身を密に持つ風なり。……武士の風、おとなしやかにて、尖なる所なく、武勇の功にて秀づる事を好まず、唯身の上の調儀を以て、身を立てんと思ふなり。たとへば他國に合戰ありても、自國

を完うして出づる事を好まず。まして我が持の外を望みて切取などする事は盜賊なりとて嫌へり。皆人この覺悟にて賢人の風なり。

とて、その消極的な事をいひ、「物事懈怠がちになる風」ありとて、幾分かのんきな所があると見てゐるやうである。

能登は、

當國の風俗は人の心別して狹くして、たとへば一足蹈出せば渇命に及ぶべしと思へり。之によつて主人よりつれなく使ふといへども、外に行くことを得ずして、是非なく勤むるなり。然れども武勇の覺悟はよしとぞ。

越中國は、

陰氣の中に智あり、勇あり、佞なる氣多し。親子の間にても、一言に言葉質をとり巧に佞をなすなり。人の交も底意は佞にして唯卒忽の交のやうにする意地なり。然れども、事に臨みて死を厭はざる風もありとぞ。

越後人は北陸會に居らぬのださうで、その批評は省く。さてこれ等の批評が、どこまで當つてゐるか。人國記の著者は氣候風土等を重な原因と見て居るやうであるが、そんな單純なものではあるまい。政治、經濟、風教各般の影響もあり、變化も加はつて、一國の風俗が永久不變のものでもあるまい。無論大體から言つた批評で、個人としては多くの取除を見るに相違ないが、又その幾分は何の人にも當つてゐるやうに思はれる點もある。これは國民性よりももつと小さい鄕土性とでもいふべきものであらう。

（大正十二年六月「北光」）

「マス」ことばを奬勵せよ

この頃の新聞に或女流の意見として、國語の敬語を廢したいといふやうな論があつた。さうしてそれには又、他の女流の贊成もあつたやうである。これは一寸聞くと御尤もな點もあるが、途中で逢つても、面倒臭いからお辭儀をするのもよさうといふのと同論で、默つては居られないことかと思ふ。民衆平等の思想が盛な今日、普通選擧が高く叫ばれる時であるから、捨てておけば、だん〳〵實行されるかも知れぬ。

建國の昔から、君臣の別が定まつてゐる我が國、又家長が家族の中心となつて居る我が家庭では、昔から敬語が存在したのである。上下貴賤の階級が愈〻繁くなつて來てから、敬語の種類も愈〻多くなつたのであつた。今日の時勢になつては、固よりあまり繁多な敬語はだん〳〵廢するもよからうが、普通語と敬語との二筋は、國體上から見ても、社會上から見ても、是非とも保存發達されねばならぬものであらうと思ふ。日本語の一大特色を失ふことは國體の上にも影響を及すものと考へなければならぬ。

私は先日國學院の近所を通つたが、そこは水道鐵管の据附工事で、非常に道が惡かつた。働いてゐた土工等が聲をかけて、「そこはあぶないぞ」「もつと右へ行け」「そちらへ行くと鐵管があるぞ」などと口々に注意してくれ

た。私はその親切を喜んだと同時に、土工のことばの全く敬語を用ひぬのに驚いた。さうして數年前までは、かういふ言葉遣は聞かなかつたと思つた。私は固より、私に對しての敬語を期待したのではない。併し、從前ならば土工等が紳士體の者に對しては、「右へおいでなさい」「そつちへ行くと鐵管がありますよ」位のことは言つたものである。近來はそれが全く反對になつて、洋服でも一つ着て居るやうな者に向つては、わざと敬語を使はないことになつたらしい。これは力で働いて居つても同等な人間だといふ考、又寧ろ神聖な勞働者だといふ誇、それ等から起つた現象だらうと思ふ。こんな事で敬語の失はれて行くことは殘念なことである。國民の品位からいつても、これはなるべく本に復したいと思ふ。

無論これは一般におしなべての事で、勞働者をして獨り敬語を使はしめようといふのではない。國民一般何れの階級の人も、他人と談話する時には、マスことばを用ひるやうにしたいと思ふ。文章體の口語としては、敬語がなくてもよいが、談話體の口語には、一般にマスことばで應對するやうにしたいのである。今日では店先で買物をする人が、店員に向つてさう横柄な言葉遣をすることは少くなつたが、小使や給仕などには、まだ少しも敬語を使はないのが普通である。私もまだ恥かしながら、車夫等に話をする時には、マスを用ひないことが多い。これらはすべて改正して、目上から目下へもマスで話しかけるやうしなければならぬと思ふ。目下から目上へ對しては無論の事である。敬語なしの談話と敬語のついた談話とでは、その親しみの上からも、禮儀の上からも、大變な心持の相違がある。私はこれからは小使であらうが、車夫であらうが、又は友人であらうが、なるべくマ

スことばで話したいと思ふ。さうして勞働者などのことばにも、マスを復活させたいと思ふのである。

それが爲には、第一に小學校において、このマスことばを奬勵しなければならぬ。このマスの談話體口語（敬語といふよりも寧ろ謙語）の練習等を盛に行はせなければならぬ。さうなると、教師が生徒を呼びつけにしたり、マスなしの談話で教授することなども改めなければならぬかも知れぬ。社會の實際の上において種々改めなければならぬ場合が生じようと思ふ。それは徐々としておのづから變つてゆかう。この美しいマスことばで、いかなる場合にも國民がお互ひに話し合ふことに一致すれば、これまでの階級制度に對する不平や嫉妬も、幾分かは減退されるであらうし、一方からは尊大倨傲と思はれることもなくなるだらう。國民思想の統一も、かういふ所から成り立ち、國體の尊嚴もおのづから保たれるのである。

私は靴の底でマッチをすつたり、途中で知人に會つても帽子も取らないやうな禮儀作法の乏しいアメリカ人などは學びたくない。我が國語の特點、美所を保存する上において、あくまでこのマスの談話體を整理し、且つ大いにこれを發達させなければならぬと思ふ。

（大正十三年一月「國學院雜誌」）

むすび

古事記の卷頭第一に、天御中主神とともに、高御產巢日神、神產巢日神がお現れになります。このむすびの思想が神代の卷を通じて、我が建國及び發展の根柢となつて居るのであります。伊邪那岐神、伊邪那美神に、このたゞよへる國を修理固成せよと、天つ神からの仰せは卽ちむすびの精神の發露であります。むすびはいふまでもなく、物が集り、固まり、生成し、發達し、成熟し、結果を得るのであります。二神はまづ國土を產んで、次に種々の神を產み、最後にこの國を治める爲の三貴子を產まれました。第二に大國主神の國土經營に就いても、このむすびの力が十分に活いて居ます。これは大國主神を助けて盡力せられた少彥名神は、神產巢日神の手俣から漏落ちた神だといふので明瞭であります。第三に高天原に於ける經綸では、天照大神の御意志は常に高御產巢日神と御相談の上實行されます。高御產巢日神一名を高木神と申して、出雲の方へ天菩比神を差遣される時、つゞいて天若日子、さては雉名鳴女、最後に建御雷神を御下しになるまでの計畫經營は、すべて天照大神と高木神との御相談によつて進んで行つたので、その狀ちやうど大國主神の事業を少彥名神がお助けになつたのと同じであります。神武天皇の御軍が熊野に惱んだ時も、天照大神、高木神のお助があつて再び勢づいて賊を征伐されました。これらを見ると徹頭徹尾むすびの力の發動が伴なつて建國創業の大事が成されたのであります。我が上代の日本人は農業の民であります。春種を蒔いて秋に收穫を得るのであります。これが取りも直さずむすびの精神に外ならぬのであります。むすびの思想は國民の日常生活と相離れなかつたのであります。須佐之男神が大宜都比賣を斬らせられた時、その目、耳、鼻などから五穀が生えた、それを神產巢日神が取つて種となし給うたとある。

むすびと農業との一致は明白にこゝに語られてあります。
この度のおめでたい御成婚を仰ぎ奉るにつけても私は遠く伊邪那岐、伊邪那美二神のむすびに遡つて、我が國の建國創業をおもひ、それからこの同じ精神が永い國史を通じて、國家の發展進運を促して居つたことを考へずには居られません。さうして又この御成婚が將來に於て如何に多大な御事業を生成するのであらうかと思はずには居られません。皇室卽國家である我が國に於ては、いふまでもなく皇室の御慶事は卽ち國家の大慶典であるのであります。

（大正十三年二月「國學院雜誌」）

日本趣味十種序

古代人類も美しい曲玉を造つて身の飾とした。眞澄の鏡を造つて自分の姿を映した。銳利な刀劍を造つて武者振ひした。情熱燃えるが如き歌も詠んだ。優婉にして花の如き文章も綴つた。山水の間に逍遙しては、その幽邃を探り、その淸楚をたづねて、或は美想を吐き、或は雅趣を抒べた。花の散るのにも涙を濺ぎ、鳥の啼くのにも心を傷めた。かくして自ら慰めたばかりでなく、時には之を以て人と人との愛着を告げ、時には之を以て人と神との交渉に用ひた。これ趣味が高かれ低かれ、人間生活の一大要素たるを示すものである。

趣味生活は知識の進歩につれて向上すべきである。かの知識の點からは批評するに足らぬほど蒙昧な時代に於ても、趣味性の自由に發育した民族には、後世から見て驚かれるほどゆかしい趣味生活を營んで居たものもある。たゞ古代に於ける趣味の種類と範圍と程度とは、單純で、狹少で、かつ低級であつた。

理知の進歩につれて、趣味性よりする文化生活も廣汎になり複雜になり、かつ高尙になる傾向のあるのは、勿論であるけれども、情操の涵養を放漫にしておく時は、理知の進歩が必ずしも趣味生活を高尙に導くとは斷言されるものでない。

我が國史の上にあらはれた趣味も、また同じく此の經路を辿つて、今日に及んでゐる。趣味史の上から民族や國民の特性を觀察するのは、頗る興味あることである。我が日本國民の文化生活は、その由來する所が甚だ久しいもので、夙に外國から輸入した文化を能く同化して、我が國民自身の文化生活を向上させて來たのは、我が理知性と趣味性との偉大なことを物語るものであらう。

素戔嗚尊の詠歌、天鈿女命の舞踊の如きは、邈たる神代の傳說であるにしても、神武天皇の御製が幾首も傳はつて居るのを見れば、天皇の御性格が優雅にましました程も察し奉られるのである。爾來我が國に文學趣味が普及して、萬葉集をはじめとし、勅撰二十一代集や諸家の集を讀めば、人麿や、赤人とか、六歌仙とか、三十六歌仙とかの歌そのものの文學的價値よりも、菅原道眞が配所の月に吟じたのや、阿倍仲麿が唐土の月に詠じたのや、八幡太郎義家が遠征の途上に落花を惜しんだのや、後鳥羽上皇が隱岐の島守とならせられながら歌の御會を催さ

れたことなどに、同巧異曲な趣味の發揮をなつかしませるのである。

文學趣味のみに耽溺すれば、人間の性行が優柔不斷に流れ易い。我が國民は本來尙武の氣象にも富んで居る。隨つて甲冑刀劍弓矢など武具の製法にも大いに意匠を凝らしたものがある。中にも刀劍の製法には熱誠を捧げたものが多く、名工としては、正宗を第一として、義弘、吉光、宗近、安綱、友成、則宗など、日本刀の威名を恣にして居る。畏くも天皇の御身で鍛刀の術に長けさせられた御方もあつた。幾百回の鍛冶研磨を經た名刀は、秋水滴るばかりで、明玉の上に一點の塵も止めないやうな崇高さである。刀の鍔や目貫などに美しい意匠を凝らしたのも澤山あつて、それが多數大英博物館などに陳列してある。英人などが之を見て、この殺人の道具に美術の技巧を加へた日本人の優美な心もちに感心してゐる。

建築の方面を觀るのに、伊勢の皇大神宮、出雲の大社、奈良の東大寺、平安時代の古社寺を始として、金閣、銀閣、日光の東照宮、舊幕時代の各城郭より、一般都鄙の民屋の構造、庭園の風致に至るまで、その目的と位置とによりて、規模樣式は千差萬別であるけれども、何れも皆我が國民の頭腦中に描かれた意匠と趣向との反映であるのは一である。

室內生活に就いて考へて見るのに、間取の具合、床の間、欄間の掛物、額にも、陶磁器、漆器の繪畫模樣にも、彫刻物などにも、我が國民の精神が發露されてゐる。殊に富裕にもあらぬ家庭にさへ、茶、生花、琴、三味線を玩んで居るのは、多年修練して來た風雅な生活ぶりではないか。茶道が我が國民の生活に韻致を加味したことは

爭はれない事實である。茶味と禪味と俳味とは三にして一、一にして三。この三味は渾融溶化されて、我が國民の腦裡に深く浸潤し、生活の各方面に流れ出て居る。江戸時代は正に其の渾成期であつた。

銀閣に往つて觀ると、今日でも四疊半の瀟洒な茶室で抹茶の接待を受ける。それで遊覽者はおのづから義政將軍の風韻を想像するのである。豐太閤に至つて、茶の湯は更に盛となつた。紹鷗だの利休だのといふ名人が頭を擡げて、一代の宗匠ぶりを示した。茶の湯には清寂簡素を尙ぶけれども、目に見えぬところに一種の凝があつて、言ひしらぬ風韻を喚び起すものである。そこでこれに幾つも流派が出來て、普く茶道が傳播して來た。

禪味の傳播は宗敎的ではなく、武士たるものの一種の精神修養上から味はれて、その深沈靜慮の工夫が武士的修練に適するとされたからである。武士で參禪するものは少くはなかつた。茶の淸寂と禪の沈靜とは共通の點がある。俳諧もまた、歌の優雅に似ず、婉麗に流れず、嬌態に走らず、卑俗と見えて脫俗したるところ、民衆的であつて閑寂の一體を成したるところは、茶味、禪味と合致し易い點がある。

また紫式部、淸少納言以下の才媛が、平安時代を飾つて居るやうに、西鶴や門左衞門は、江戸時代の町人趣味を物語つてゐる。江戸時代の三絃樂及び演劇の發達もまた著しい偉觀である。

江戸時代に起つて大いに時好に投じたものに浮世繪といふものもある。從來の繪畫は、多くは支那の畫風に模倣し、その山水人物など主として支那の形態を描寫したやうであつたが、岩佐又兵衞といふ人が出て、當時の風俗を描きはじめてから、菱川派、歌麿派、歌川派、北齋派などの諸流が續出して、それ〴〵旗幟を樹てた。殊に

元祿年間には風俗が華奢を極めて、一時代を劃するほどの情態であるのを、浮世繪師の巧に寫實したのなどは、平民文學の發達と共に最も目ざましい事であつた。

着物の紋所は先祖を崇び、系圖を重んじた我が國風から出たので、世界に無比なものである。しかも其の意匠にあらはれた嗜好にも日本人の國民性がほの見えるのである。

本書は題して「日本趣味十種」といふ。これ我が國學院大學叢書の第一篇として編纂刊行するものである。本書の內容は

江戶趣味の話　古錢の話
淨瑠璃の話　茶器の話
浮世繪の話　刀劍の話
系圖の話　殿堂建築の話
紋章の話　古墳の話

の十種に分たれ、何れも造詣深い專門家が熱心に講述されたのを筆記したものである。中には自ら執筆されたのもある。之を一種づつに分ければ、詳細を極めて居るとは言はれないが、各大家が得意の研究を發表されたのであるから、斯界未發の卓說も少くあるまい。とにかくに此の十種を纏めて公にし得たことは喜ばなければならぬ。

今や外國思想の輸入は底止する所を知らず、我が國民の之に對する態度は、たゞ好奇心に驅られるばかりで、

咀嚼玩味と選擇取捨とに意を用ひる暇がなく、外國趣味の歡迎せられてゐるものの中には、輕浮で醜穢なものもあつて、從來の國民性を傷ける憂がある。民族心理學や歷史哲學の研究上から品評すれば、低級な趣味生活に甘んじて居る國民は賞揚しようとしても賞揚することは出來ない。我が國民たる者も一時の迷夢から覺めて、眞に日本趣味の向上を計らなければならぬ。この時に當つて、本書の世に公にされるのは、溫故知新の趣旨から見て、眞に時機を得て居ると思ふ。本書は之を繙く者に對して、側面觀的に我が國の文化生活史を說き、興味津々たる間に我が國民性の淵源する所を悟らしめるであらう。

國學院大學叢書は更に次を逐うて精神的文化の研究を發表し、思想界に貢獻せんことを期するものである。

（大正十三年十月しるす）

平瀨儀作翁碑

明治五年に學制を頒布せしめ給ひ、邑に不學の戶なく家に不學の人無からしめんことを期すと仰せられしは、今日の文運の由つて來る所なり。當時小學校の創立に功勞ありし人各地に少からざりしが、中に我が旭小學校の開設につきては平瀨儀作翁の獻身的努力に負ふ所最も多し。翁は明治七年まづ區內の有志數名と圖り、藩の舊米

倉を借入れて校舍に充てんとし、敦賀縣廳に出願せしが、縣吏も亦翁等の誠意を認めて、無償借入の儀は幾ばくもなくして許可せられぬ。翁はその志の緒に就けるを喜び、隱居の身なるを幸ひ專らその修繕の事に當り、舊宅地に作事場を設けて大工車力の勞作何一つとして之を親らせざるなく、自邸庭園の杉の木を切來りて校門の柱となししが如き、その熱誠思ふべし。かくて酷暑嚴寒一日も休まず、工事漸く成りて開校の日に至るや、敎職を擔任して修身の要目を授け、叉自ら拍子木を鳴らして校僕の任務をさへ辭せず、一言一行赤誠の吐露ならざるなかりしかば、人皆翁の人格に服し、その功程の進歩も亦甚だ速なりき。翁は常に勤儉を守り子弟の敎養に懇切を極めしを以て、一門子息たちの打揃ひたる榮達は亦世の羨む所、所謂積善の家に餘慶あるものか。翁の人と事とは眞に國民の模範として後世に傳ふべく、旭小學校の舊時を談ぜんものは必ずこの積善翁の名を忘れざるべきなり。

（大正十四年七月）

奉悼辭

八隅シシ我ガ
大君天皇ヲ今ハ大行天皇ト申シ奉ルゾイトモ畏キ

大行天皇天資英明萬世一系ノ大統ヲ繼承シテ明治聖世ノ偉業ヲ紹述シ給ヒ庶政内ニ整ヒ修交外ニ張リ歐洲ノ大亂起ルヤ列强ノ義ニ與シテ靑島ノ堅壘ヲ拔キ以テ東洋ノ禍根ヲ絶タシメ給ヒ尚遠ク水師ヲ印度洋地中海ニ派シテ敵國ノ暴威ヲ挫カシメ給ヘリ又露國ノ國難ヲ鎭メ民衆ヲ塗炭ノ苦ミヨリ救ヒ給フ等國武日ニ揚リ國運月ニ盛ニ世界萬邦ノ民ヲシテ一齊ニ其ノ盛德大業ヲ欽瞻セシメ給ヒ又外ニ在リテハ國際聯盟内ニ在リテハ普通選擧皆庶民ノ幸福ト人類ノ繁榮トヲ希ヒ給フ聖慮ニ出デ時代ノ移變ヲ認メテ以テ時勢ノ宜シキニ從ヒ給ヘルナリ何ゾ圖ラン今年六月カリソメノ御違例ヲ傳ヘテ節秋ニ入リテモ癒エサセ給ハズ葉山御用邸ニ入ラセ給ヒテ專ラ攝養ニ努メ給ヒシカドモ病勢益募リテ遂ニ神去リマシマサントハ日出ヅル國日忽チ落チ皇御國常夜往クニ異ナラズ千秋萬歳ト壽ギ奉リシ聖壽未ダ五十ニモ達シ給ハズ御治績ノ多大ナルニモ拘ラズ御在位ハ僅ニ十五年ト數フ嗚呼哀イカナ天皇皇太子ニオハセシ日ヨリ年々東京帝國大學ノ卒業式ニ成ラセ給ヒ登極ノ後モ數回ノ行幸ヲ辱クス聖恩優渥臣等學徒ノ感激シテ已ム能ハザルトコロ未ダ聖恩ノ萬一ニ報イ奉ラズシテ茲ニ崩御ノ國難ニ遭フ恐懼極リナク悲泣哀號言ニ序次アラズ誠恐誠惶謹ンデ哀悼ノ微衷ヲ表シ奉ル

(昭和元年十二月)

この奉悼文は大正天皇の崩御に當り、故芳賀博士が學士會の爲に謹作し、學士會月報に掲載せられたものであつて、故博士の公にされた文章の最後のものであるといふ。當時予學士會編輯理事として故博士を煩はせしことを追懷して感慨に堪へないものがある。

友枝高彦記

漢詩

小金井に遊ぶ　明治十八年四月

風點落花夾水飛　異香尙覺滿春衣　閑行十里觀櫻興　踏月而行踏月歸

遊鎌倉　明治十八年十二月

稻田秋熟十里黄　舊都茫茫古鎌倉　寒村歸鴉天欲暮　源氏山頭掛夕陽
嘗是干戈鼓鼙地　水空碧兮山空翠　俯仰寧堪感懷多　秋風蕭蕭亂涕涙
將家宅廢纔遺井　公邸園荒草壓籬　興敗可憐幾世夢　萬骨堪傷一片碑
慘殺親王彼何虜　土窟黯憺帶餘怒　美人香魂歸何處　墓柳尙爲細腰舞
嗚呼養牝鷄兮煮同根　肥豺狼兮食犬豚　贏仆劉起事皆非　如今都歸一荒原
狐鳴梟叫日全沒　疎鐘撞上一輪月　霜影依然古都光　照來十丈巨銅佛

題寫眞背　明治十九年六月

功名未得畫麒麟　形影自憐五尺身　却恨撮眞技尙淺　胸肝難寫此精神

丁亥元旦　明治二十年一月［日記のはじめに］

一夢茫茫二十年　飄零身事又誰憐　功名未得登青史　却倩中書獨自傳

無　題　明治二十年一月一日

鷄鳴報曉歳維新　即是明治二十春　國幟千門揭紅日　祥霞滿市散金鱗
僻陬皆沐堯天澤　陋巷未違顏子貧　有酒滿瓢歌且飲　自云聖世一遊民

早　梅　明治二十年一月二日

北籟未吹六出花　東風先破早梅花　誰云秋菊百花殿　又殿又魁是此花

無　題　明治二十年一月三日

孤客經年尙未還　沈淪寄跡大都間　無端昨夜三更夢　不見福神見故山

初　雪　明治二十年一月六日

朔風曉見飛銀屑　頃刻庭園瓊玉綴　數點早梅香乃知　幾竿疎竹長先折
豈無灞上小驢驅　正想香爐玉簾揭　寒士却傚袁子臥　啜茗南牖烹新雪

龍口の信あり　明日歸國する旨を報ず　因て散校後之を訪ふ　同氏病あり　醫師の勸に因り歸鄕するなり　詩を賦して之を送る　明治二十年一月十一日

玉屑滿天糝糝來　須臾白屋變銀臺　征蹄朝蹈京師雪　旅袖夕薰故地梅
容易醫方驅病鬼　自然佛力活明才　櫻花更約春風節　墨陀堤頭共擧杯

二軒茶屋に遊ぶ　明治二十年八月七日

綠田十里望悠悠　浴羅風冷氣似秋　木下晚煙飜暮鳥　城原斜日認歸牛
一樽詩酒閑人樂　數局圍棊君子遊　咄咄痴漢彼何者　弄來絲竹噪高樓

偶成　二首　明治二十五年十二月二十四日（ベルリン滯留中の上田萬年氏宛書翰の中に

是非曲直那邊求　笑殺彈丸小地球　身生福里不希福　家在牛門懶似牛
財產唯餘書滿架　功名遂莫記千秋　囘頭往事渾如夢　間過二十五葛裘

歎息時風日日非　寧悲宿志廿年違　會心友向書中覓　趨利客從門外歸
自古大儒甘貧賤　于今達道厭塵機　秋堂垂白老親在　半夜燈前涙滿衣

元旦口占　明治三十三年一月一日

千門旭幟映朝陽　雨霽滿城草木光　天外芙蓉峰雪白　机邊福壽草花黄
國文十講新鐫梓　兒女六齡初上黌　轉覺皇恩似春暖　詔風吹入讀書堂

庚子七月。余受外國留學之命。無名會先進諸君。爲余開送別會於函山。會者十三人。豪遊二日。於余爲斷膀緒以來之快事。恭賦無名行一篇。以供他日記念云。　明治三十三年七月

塔澤名山麓　無名萃群賢　盛宴亙二日　會費醵五圓
麒麟傾美酒　天狗喫香煙　按摩片眼凸　遊戲五目連
五目誰得意　萩野敵無前　佐球碁數局　直文歌幾篇
笑罵徹夜半　喧嗷不能眠　溪流鳴河鹿　山上聽杜鵑
電燈光煌曜　反射畠山顚　今泉殺間物　委蛇似老饕

諧謔衝口出　岡倉急處穿　聲色擬博士　關根喝釆專
高津骨稜稜　上田腹便便　松本如山賊　恨不熊皮纒
松井黒大工　眞是鑛夫然　箇治卽幹事　輔之有和田
茶代被返却　鹽辛不買還　歸路到寶亭　滿腹息以肩
野生無一藝　追隨喜奇緣　歡樂眞無比　噫噫熟麥天
不知隣邦患　警電日夜傳

謝恩會に臨む　明治三十三年七月八日〔烏森湖月にて〕

諸君研鑚業新成　官命余爲留學生　今夜勿辭三斗酒　賀筵却帶別離情

冨山房の送別宴に臨む　明治三十三年八月二十七日〔入谷松源支店にて〕

催宴清池畔　燈光入水長　空雷不成雨　殘藕自生香
座上三絃響　人間百事忘　夜遲歡莫盡　唯道酒無量

プロイセン號に搭じて　明治三十三年九月八日

蒼波萬里接天隅　回首富峰雲外孤　忽有長風吹急雨　豆南七島瞬時無

壇浦の故蹟を弔ふ　明治三十三年九月十日

福原舊趾已成空　壇浦那邊海底宮　一部源平盛衰記　浮來半夜月明中

揚子江の濁流滔天の勢を見る　明治三十三年九月十四日

滾滾大江注海東　滔天濁浪勢何雄　中華久矣無人傑　不似水流今古同

上海にて　同前

歴代文華跡已荒　忍看白皙甚跳梁　花園奏樂歡聲湧　不許華人來入場

新嘉坡所見　明治三十三年九月二十五日

亭亭椰子矗參天　荷葉蓋池大似船　熱國一分有秋意　蟲聲唧唧草間傳

立花氏に寄す　明治三十四年二月十一日（ベルリンにて）

漠漠雲程三萬里　綿綿皇統四千年　仰看晴日思神祖　天外微臣涙若泉

倉知氏の日本食會に赴く　明治三十四年四月二十七日（ベルリンにて）

主客九星會　斗米肉十斤　甘味最鼓舌　筍子及刺身
醬油砂糖混　牛豚葱根塡　火酒數度點　玉觥幾回巡
耳熱十分醉　腹充如妊娠　諧謔衝口發　笑罵外頷頻
佳句題端書　發送頒友人　興酣不知歸　更深寂四隣
一時始退散　歩到須水濱　美景城門高　朧朧月一輪

塔街を歩す　明治三十四年五月四日（ベルリンにて）

塔街夜歩獸園西　行見胡人携牝鷄　麥酒頻傾不成醉　三千里外憶山妻

チーヤガルテンを歩す　同前

禽獸園頭春色加　衣香帽影路參差　客愁一片飛鄕國　不爲墨陀堤上花

ウエルダーに遊ぶ　明治三十四年五月五日（ベルリンにて）

櫻雲靉靆包乾坤　一目千株不足言　遺憾澹澹唯如雪　斯花恐莫大倭魂

元日口占　明治三十五年一月一日（ベルリンにて）

幾觥蠻酒代屠蘇　遙拜東天萬歲呼　日自旭旗輝世界　霞從捷塔滿全都
佳辰遺憾無梅柳　賀牋風流有畫圖　自笑迎新存舊態　依然不剃去年鬚

ベルサイユ宮殿　明治三十五年六月（パリにて）

燕語畫廊日欲斜　茫茫一夢舊榮華　斷頭臺上王妃血　染得水晶宮外花

無題　三首（教員檢定委員會に際して）

甚矣不景氣　委員多病人　小柳大熱發　芳賀小便頻
已費三箇日　未買一杯春　空憶往年事　醉談驚四隣

不似例年試毫遊　悄然歸家百事休　兒女或訝無醉色　細君却喜有實收

天金樓上油空煎　神田川上水徒流　獨喜隨軒飽粱肉　氣餤萬丈米堅洲

文展已終文檢始　正是霜葉凋落時　曉起離床水洗面　晩歸出門月如眉
質問反復不可數　答辯正確遂無幾　數片卷煙全吸盡　仰天茫然如白痴

泮水會和松井君韻

泮水會多賀羅亭　啖肉飲酒又談經　然後一同撮影處　慕涅（マグネ）爆發閃光青

舟中　大正三年八月二日（別府より永井環氏宛書翰の中に）

甲板無人夜欲央　船頭獨領海風涼　訝看天角流星落　何處燈臺明滅光

石橋尙賓氏の詩に次韻して贈る　大正五年十二月九日（ニューヨークにて）

議堂閑坐雪隱中　自嗤他呼做老翁　三月延髯塵垢滿　半歳廢酒元氣空
人情時或障肝癪　旅費唯僅免困窮　遮莫鵬程六萬里　夢魂夜夜飛日東

無題　大正六年五月（シベリヤ鐵道の車中にて）

露都夕去戰塵間　旬日輪車載醉還　斗酒盡時平野盡　翠巒始見滿洲山

高野辰之君に　二首　大正七年八月十九日（輕井澤より東京帝國大學附屬醫院入院中の高野氏宛書翰の中に）

東都炎熱過前年　喜聽吟兄病半痊　豫約中秋明月夜　相携香炙醉神川

晩坐篠床詩未成　涼風滿腋客衣輕　碓山吐月昇三寸　早聽吟蛩第一聲

和歌

外國(とつくに)のふみみて知りぬ日の本の國にまされるくにはあらじと

皇神(すめかみ)の貴き故をしらまくはまづ外國の史(ふみ)よみて見よ

こにきしと民との絶えぬあらそひに血にけがれたる外國の史

外國の事よく知れる輩(ともがら)に皇國(すめくに)しらぬ人ぞ多かる

西*の洋(うみ)の事よく知れる輩に皇國しれる人ぞすくなき

いそのかみ古事記(ふることぶみ)をよまずしてあげつらふなよゆめ皇國のこと

國つ文くにつ言葉を究めてぞ國つこゝろは知るべかりける

神つみち知らずば人と生れ來て狛犬にだもしかずといふべし

曇りなき國の姿はさきらめく今のかゞみにてらしてもみよ

横はしる蟹ゆく文字をまなぶともふみなまよひそ葦原の道

横*はしる蟹のあゆみの文字見てもふみはたがへじ葦原の道

横*さらふ蟹ゆく文字は學ぶとも鳥の跡はた忘るべしやは

横*さらふ蟹の文字讀む人もなほ鳥の跡をば忘るべしやは

國つ文學ばん人は外國の書もあはせて讀むべかりけり

敷島の大和心を栞にてよみもてゆかん外國の史

我が國は神の國なり國の仇はらひし風を神風といふ

谷蟇のさわたるきはみ天つ日の惠あまねき國はこのくに

そのみさをそのにほひこそたふとけれ松生ふる國さくら咲くくに

千早ぶる神のみくにに生れ出でて聖の御代にあふぞかしこき

敷島のやまとの國に生れ出でて聖の御代にあへるうれしさ

武士道の名ぞむくつけき神代よりつたへ來しみち國民の道

玉鉾の道固めずば自動車の動くまに／＼くづれゆくべし

須佐之男の神にちかひて今の世のをろちのたぐひほふりつくさん

まがごとのおほくなりゆく世のさまを直日の大神見なほしたまへ

敬神卽忠君の心をよめる

現つ神すめ大君に仕ふるぞ神を敬ふ道にはありける

*すめらぎに盡す誠の心こそ神を敬ふ道にはありけれ

忠孝

父母の子と生れたり皇國の子にやはあらぬ國民われは

耶蘇教徒を

皇神のをしへわすれて百たらずやそてふ神に媚びつくものか

富士 三首

日の本の國のすがたを人とはばさして答へん富士の神山(かみやま)

*たぐひなき國のすがたを人とはば富士の神山さして答へん

世の中に二つなき山をいにしへは國のうちの山とおもひけるかな

千早ぶる神の御代より日の本の國のしづめと立てるこの山

櫻 九首

日の本のさくらの花をありとある國のはてまで植ゑつゞけばや

*日の本のさくらの花を外國のくにのあらんかぎり植ゑつゞけばや

花ぐはし櫻のかげに植ゑてこそ牡丹さうびもめづべかりけれ

さ*くら木のその下かげに植ゑてこそ牡丹さうびもめづべかりけれ

よき人のよしとよく見てよしといひし吉野の花をけふ見つるかな

いにしへにありと聞きつる墨染のさくらは咲けり荒川堤

同じ花と人や見るらん向島若木のさくらいやまさりゆく

いとまなき身にうれしきは江戸川の花見てすぐる電車なりけり

外濠の電車にのりてひとめぐり都大路の花をみるかな

目白より目黒へかけて山の手のみゆるかぎりは櫻なりけり

目*白より目黒にかけて山の手のみゆるかぎりは花のしらくも

目*白目赤目黒をかけて山の手はみわたすかぎり櫻なりけり

淺　草

かしましき笛に太鼓に長閑なる春ともいはず散るさくらかな

留學に臨みて　二首　明治三十三年九月八日

ふたとせの別をわびてなく妻をあはれむ心なきにしもあらず

ふ*たとせの別ながしとうちなげく妻をあはれと思ふ夜もあり

おほやけのみちのためぞとおもはずばけふの別もものうからまし

南方スマタラの島を見る　明治三十三年九月二十八日〔渡歐船中にて〕

名にしおふ印度荒海波たちてみえがくれするスマタラの山

ウエルダーに遊ぶ　明治三十四年五月五日〔ドイツにて〕

ウエルダーは櫻の雲に包まれて夕日まばゆきハーフエルの川

歐米へ出張を命ぜられける時　大正五年六月

西東めぐりめぐりて國々のことなる姿みてかへりこん

船は正東に向つて進む　大正五年八月一日〔渡米船中にて〕

東の日出づる國を茜さす入る日の空におもひこそやれ

食堂に日本人會を催す　四首　大正五年八月七日〔同前〕

千萬の浪路隔てて大君の千代よろづ代をよばふうれしさ

皇國人皇國の酒をくみ合ひて皇國の歌をうたひてあそぶ

皇國ぶり舞の姿に手をうちてゐらぐもろごゑ海をとよもす

船のへのとゞまるきはみ日の本の國はひろくもなりにけるかな

在米國兒童の教育をおもひて　大正五年九月三十日［アメリカにて］

立寄らん大木の蔭もなかりけりアメリカの野のやまとなでしこ

今立氏に　同前

アメリカの荒野をひとり行く旅に五嶽の夕おもひいづるかな

旅情を　同前

草枕まきし日數は重なれど夢路はちかし故郷の山

ロンドンにて　大正六年二月

ロンドンに霧立ちこめぬ日はあれど皇國おもはぬ時なかりけり

同　前　大正六年二月十七日

日の本をおもひこそやれ梅咲きて鶯の聲しきるこの頃

歌　日　記　五十六首　大正六年四月二十一日より五月十五日まで〔ロンドンよりイルクツクまで〕

夕やみにまぎれていづる友六人タキシはしらすセントパンクラス

朝ぼらけフォース大橋渡る時波間に浮ぶいくさ船あまた

ダンデーと聞きて涎も流るめりこゝウイスキーに名高き所

アバデーン日曜の町靜かなり波止場に人の群はあれども

出帆をいつかと問へば船の長たゞほゝゑみて煙草くゆらす

浮嚢かたへにおきてしかすがにシャツもズボンもそのまゝに寢つ

北の海波靜かにて行く船の右と左に驅逐艦あり

如何ばかり樂しかるらん二年(ふたとせ)のとりこのがれてかへる人々

ドイツ人食ふべきもののありやといへば鐵(くろがね)の板さして答へつ

ベルゲンの港に着きておそろしき龍(たつ)のあぎとを逃れし心地

外套も透(とほ)るばかりの大雨を侵していそぐ停車場の道

食堂にいたりてうれし白きパンわけてうれしき大形のバタ

三等の室臭けれど友六人一間に居りて語らふがよし

北の空永き春日を汽車の窓カルタ遊びにたはれくらしつ

都なるクリスチャニヤは廣けれど宿貸すべきホテルなしといふ

ベンネツトしるべの人のいざなひにいたりつきしはホテル、ナショナル

階子下狹き湯殿にベツド一つベネツト男あきれて笑ふ

年若き客のなさけに一間得てまどろむ夢の明け易きかな

折もよし今日は少佐の誕生日ぬくもいさましシヤンパンの酒

宮城の廣場めぐりて大通り繪葉書タバコとりどりに買ふ

少将は求めてかへる二尺餘りノルウエー式の長きパイプを

パンと酒バタ腸詰も積入れて夜汽車にいそぐ瑞典の國

夜一夜を寢で明しけり苦しきは車の中の熱さなりけり

朝寒きストツクホーム出迎へし人の心ぞうれしかりける

日數經し旅のつかれをゆあみして流しすてけりホテル、セントラル

風呂流すスウエデン式の大女腕は二王にまけじとぞ思ふ

瑞典の體操見ては我が國の巴板額ものならぬかな

北の國公使館には男子等に舌を捲かする女丈夫います

一瓶の酒携へて千里行く酒なき國の永き旅路を

入齒一つ折れしもあはれビステキの肉の堅さに爭ひかねて

ハパランダ北緯六十六度風寒し氷の河を橇もてわたる

トルネオの關所いかめし髯長きロシヤつはもの犇き合ひて

底拔の雪隱廣く寒帶の風吹入りぬ尻の穴まで

眞夜中の夢驚かしパスポルト見せよとせまるいくさ人かな

稅關に荷物運びしチツプさへ二十五ルーブルとぬかす小わらは

勞働の祭日の夜革命の後の都に馬車一つなし

氷厚きネバの大河音もなし電燈白く夜は更けにけり

家々に赤きしるしの旗立てて王家の門堅く鎖せり

國の內民愚かなり國の外強き敵あり露西亜國あはれ

金玉(こがねたま)つくりみがきし冬の宮民の怨のつもりし所

いきどほる民の心は古も血しほに染めつ國王の床

復活の御寺の鐘は響くともロマノフの家再び起たじ

家も國も傾けつべき割目をばつくり添へたる技人の業

おもひきや酒なき國に旅寢して夜毎にうまき酒のまんとは

外國の遠き都の宿にして我が教へ子にあふがうれしさ

十日あまり旅寢せし友中尉二人さきだちかへる別路悲し

かゞなべて夜には九夜日は十日永き旅路にいでたつ今日は

急行車急ぐとすれどをり／＼はそろ／＼まゐる時もありけり

松檜白樺生ふる荒野原行けども盡きず露西亞大陸

をちこちの木は若葉して芝生には黄なる小草の花も匂へり

ウラル山夜の間に越えて柳吹く風暖しエカテリンブル

オムスクの町は若葉に包まれて堂塔二三空に聳ゆる

赤裳（あかも）青裳（あをも）おのも／＼によそほひて廣野に遊ぶシベリヤをとめ

行けど／＼みゆる限りは廣野原眠れる小牛いさむ春駒

黑パンにマスロをそへてヤイツア二つけふもすましぬあさげのカフエー

窮屈な部屋に退屈しのびつゝ今日はやうやくイルクツクに着く

朝鮮にて　三首　明治四十四年七月

から國の虎臥す野べにひゞくなりすめらぎいはふ君が代の歌

京城なる山形中佐のもとにて

唐にしきたゝまくをしきまどゐして千里のいへぢとほしともなし

花ぐはし櫻の色にくらべてはすもゝの花ははなとしもなし

本居大人の奥城に詣でて　二首　明治四十四年十月

櫻木にゑりし百千の巻々ぞ風に知られぬ花にはありける

百年の世は隔つれど敎へ子に數まへませとをがみ額づく

輕井澤にて　三首

離山萩咲きそめぬ穗に出でて尾花も人を招くころなり

西ざまに淺間のけぶり靡く日は嵐かならず吹くといふなり

淺*間山けぶりの西へ靡く日は嵐かならず吹くといふなり

海のほとり草さのがれしおろかさをひやかして吹く山の秋風

信濃にて　三首　明治四十二年十一月

高山はいたゞき白し低山は大木も小木も皆紅葉して

遠*山は白雪ふれり近山は大木も小木も皆紅葉して

稲は皆かり盡したる小山田のあぜ道紅き草もみぢかな

さむるともいぬるともなくて汽車の窓ゆられ〳〵てゆく旅路かな

月瀬にて

この里を見ずやありけんこの花をこちたきものといひし翁は

筥崎八幡宮に詣でて

いにしへも今もかはらず敵(あだ)し國ことむけまししすめらみいつは

大正三年七月二十四日〔永井環氏宛書翰の中に〕

岐阜にて

おのが業とり得し魚もおのが腹こやさで鳥のうとやいふらん

大正三年八月八日〔長谷川福平氏宛書翰の中に〕

鹽原なる有賀長雄氏の別邸にて

山あり瀧あり湧泉(わきいづみ)あり酒もありがのもみぢ葉の宿

みたるまゝを

猪苗代湖(うみ)のなかばは晴れてみゆ磐はし山は雲にかくれて

九十九橋の改造を惜しみて

石と木とをつなぎ合せし九十九橋(つくもばし)いまことやうになりにけるかな

亡き父の御靈にこの書〔國民性十論〕を捧げて　二首　明治四十年十二月

刷巻を手に取りもちてまづぞおもふ庭のをしへのとほきむかしを

天翔りみそなはすらん年月をあだに過さぬこゝろばかりは

大嘗祭に參列せんと行く道すがら　大正四年十一月

いかし穂の足りほにみのる千町田をみそなはしつゝみゆきましけん

*八束穂の垂穂にみのる千町田をみそなはしつゝみゆきましけん

大嘗祭　三首　同前

新しき御世をしろすと天皇は神代ながらの大嘗きこす

天の下のおほみたからに幸あれと神まつります皇大君

いそのかみ古りしかみ代の神わざををろがみまつる今日のかしこさ

御講書始に召されける時

よきことのあるをりごとに喜のうたよみたびし父はいまさず

霞關離宮賜餐の日

なき父のいまさましかばと思ふとき雨ひとしきり涙とともに

大正十一年七月（東京帝國大學名譽教授の名稱を授けられた時）

いちじるきいさをもなくていまさらにたばるもかしこたかきたゝへ名

たづ子に　二首

大正三年三月

今よりは夫(つま)に從へ子をうみて子にしたがへとおもふばかりぞ

家の神と夫につかへよ國の子と子等をそだてよいけらんかぎり

としに　大正三年十一月

新枕またの朝（あした）のつゝしみを生ける限りは忘れざらめや

みつ子に　大正九年四月

をみなまづ言擧（ことあげ）せぬぞこの國の上つ代よりのをしへなりける

子

淸らなるこゝろを持ちてますぐなるみちをふみねと子等にをしふる

つくぐし　二首　大正五年四月二日（池永田鶴子宛書翰の中に）

つくしよりおくり越したるつくぐしつくぐうれし心づくしは

（芳賀梓宛書翰の中に）

松本の野邊にか摘みしつくぐし心づくしをうれしみおもふ

寫眞に　三首

明治四十二年二月

しろがねもこがねも玉もしかずとふ七つの子等もすくやかにして

大正四年一月

よめいりし二人をよそに數へてもなほ七くさの寶子の家

大正二年二月

たのしきは書齋の夕べ人も來ずシガーの煙空にふく時

妻をうしなひて　四首

大正十三年八月

鶯の鳴く聲しきる花の野の朝(あした)の露と吾妹(わぎも)は消えし

輕井澤花野をわたる秋風もことしはわきて身にぞしみぬる

ならびゐてながめしものを離山(はなれやま)今はその名もうらめしきかな

ともに見てめでにしものを離山今はその名もうらめしきかな*

もろともにめでにしものを離山今はその名もうらみなりけり*

せの病うれへうれへてありし身のせにさきだちていにしあはれさ

〔宮内省より忝き御沙汰を拜して〕

父母も今はいまさず妻もなしこのよろこびを誰と語らん

酒 四首

なのみそと子等にをしへて夕な／＼とる杯ぞくるしかりける

なのみそと子等にをしへて夕毎にひとりくむ酒心はづかし*

*なのみそと子等にをしへて夕な〳〵ひとりくむ酒心はづかし

酒なくば何のおのれが櫻ぞとうたひし人ぞかしこかりける

西東酒の名にこそ品はあれ醉へる心地ぞひとしかりける

維奇(ウイスキー)に麥酒(ビール)にあきてすしくひぬ唯三圓の會費のみして

泮水會席上にて　五首　明治四十二年十二月十七日〔多賀羅亭にて〕

飯島君に

年を經て積みし螢の光こそ君が頭にあらはれにけれ

高成田君に奉る

今の世に少かりけりその人もその名はわけて高成田忠衞門

多賀羅亭短册をかくこれぞこの明治の御代の姿なりける

君等皆酒のまずけりわれひとり維奇（ウイスキー）のみて醉ひて醉ひにけり

歸らなんあが妻待てり妻よりも九人の子待てりいざ歸らなん

樂燒に

大正十四年四月二十八日

春の庭めぐり〳〵て鮨しるこ蕎麥の店ありこのめでんがく

さくら餅

梅に鳴く鶯餅もうまけれどさくらもちにはなほしかずけり

歌

海軍大捷をきゝて

明治三十八年頃

うたはみなよむべかりけり年毎に國中の歌を召すとおもへば

伊豆の海磯もとゆすり黒船のよせしも近き昔なりしを

朝顔

うつりゆく世のさまみせていろ〳〵に咲くまほどなくしぼむ朝顔

蓮上月

露しげき蓮のうき葉に風こえてやどれる月もしづごころなし

大震災 二首　大正十二年九月

千早ぶる神代もかつてきかざりきかばかり强き神のあらびは

これよりし人のこゝろもしまるべく人の力もいよゝわくべし

第一皇女御生誕の夜　大正十四年十二月六日

つゝのおとそらにひゞきて國民(くにたみ)の待ちにまちたるみこあれましぬ

海上風靜

みそなはす相模の海ものどかにてとよさかのぼる初日かげかな

源義貞朝臣

み吉野の花を見すててきし雁のあはれ越路の雪と消えにし

新村出君の外遊に際して　明治四十年二月〔橋本亭にて〕

橋本のはしき妻をも鯉こくのこひしき子をも二とせは見ず

佐佐木信綱君に　明治四十五年七月十一日〔明治天皇の東京帝國大學卒業式に臨幸あらせられた際、萬葉集の古寫本に就いて御說明申し上げた光榮を祝して〕

敷島のみちのほまれと宇治川をさきがけするといづれまされる

同　前　二首　明治四十四年九月三日〔佐佐木氏の「天の原ふみとゞろかす雷の如き汽車のおとしらにひるねしませり」に對する返歌。大磯にて〕

うま酒にゑひふす姿あかずをせさゝ木のをぢに見られつるかな

おどろかす人なき夢ぞ圓かなる枕にひゞく汽車は物かは

萩野由之君に

うめといふ名のみと君はのたまへど實(じつ)のあるこそうれしかりけれ

〔萩野氏の「我が園に生れるこの實を奉るうめ」といふは名のみなれども」に對する返歌〕

水野錬太郎君の内相就任を祝して

我が友はおとゞとなりぬなかにづくせひくき水野大臣となりぬ

大正七年六月二十九日

賀言(ほぎごと)をのぶる翁等もろ聲にハハハハ萩野ハハハハ濱尾

〔濱尾新、萩野由之兩氏の叟祝賀會に〕

石橋君の母君の天杯をたまはりしよろこびに

菊の香を酒に浮べてはゝそはの紅葉のかげもてりまさるらん

山内ぬしの父母の君の金婚の賀に

むかしより名も高砂のあひおひの松こそ人とうまれいでけめ

杉浦氏の父母の君を祝ひて　大正六年三月三十一日〔ロンドンにて〕

榮えゆく家のしるしと君が門神さびたてる二本の杉

浦山氏が七十七の賀に

七十(なゝそぢ)になゝつそひたるよはひをばなほなゝたびもかぞへませ君

熊懐氏の還暦のよろこびに

安らかに六十(むそぢ)の坂をのぼり來て道の長手はいよゝ遙けし

橋本市會議員に　大正五年〔橋本博氏は當時福井市會議員であつた〕

この縣の誇とすなる橋本の同じ氏(うぢ)の名君も努めよ

寄松祝

千年ふる松の老木にくらぶれば八十（やそ）あまり八つは二葉なりけり

寄道祝

奥山のおどろの下もふみわけて眞金路つくる世となりにけり

土方伯の一周年祭に

見る人もなくて今年は紅葉のちるも散らぬもおのがまに〳〵

里見師の戰死をいたみて

法（のり）のため世を捨てし身の更にまたみくにのためにすてしいのちか

南部廣矛翁の傳記の末に　大正三年二月

福祿はえこそ望まね壽（ことぶき）の齡（よはひ）ばかりは君にあえなん

書賛（宇治大納言隆國らしき王朝貴族の畫に）

今は昔世にありとあることぐさを書きあつめたる人やこの人

同前（芙蓉と菊の畫に）

我が園にいまさかりなる花の名の唐めきたるぞうらみなりける

同前　大正七年六月二十九日（伊東忠太氏筆、峰の頂に家ある畫に）

このあたりにすまじとぞおもふ旨酒を買ひ得ん家もとほしとおもへば

同前　大正七年六月二十九日（伊東忠太氏筆、遠山の畫に）

工業者にいで言問はんこの山に黄金はありや鐵はありやと

白幡橋を渡る　二首　明治十八年七月二十四日

國のどむ源なれや路のりの開けにけりな白はたの橋

千萬の道は開けてみちのくの遠き里まで及びけるかも

青根にて　三首　同前

ふるさとの夢驚きぬ夜もすがら谷間の月にたゝく水鶏に

二十六日

足引の山窓近く雷鳴りて照る日ながらに夕立ぞする

夕立の晴れたる庭の松蔭に入日涼しき蜩の聲

日記のはじめに　明治二十年一月

水莖のあとをとゞめておのが身のむかしをしのぶしるべとやせん

龍口了信の病をえて歸郷するを送りて　明治二十年一月十一日

雪みぞれふるさとさしてゆく君の今日の別の惜しまるゝかな

俳句

明治三十四年八月三日　四句〔ベルリン白人會にて〕

稲妻の影や落ちゆく武者四五騎

屋根低く銀河流れて秋近し

瓜の番晝寢して瓜を盗まれぬ

葉がくれの葡萄酸くして小粒なる

明治三十四年九月二十九日　三句〔同前〕

千草より野は白露の盛かな

夕嵐古城の上を鳥渡る

石ぶみの下に聲ありきり〴〵す

明治三十四年十月十二日　五句〔同前〕

笹栗の笠にこぼるゝ山路かな

紅葉の山門高き夕日かた
雁落つる花野の末や小松原
茸狩のわらぢ松葉の匂かな
古き井の草に埋れて蟲の聲

明治三十四年十月二十日　二句〔ベルリンにて〕

ホーフェルの塔を掠めて旅雁かな
オムニブスのテラスに寒し秋の風

明治三十四年十一月十日　四句〔ベルリン白人會にて〕

おしろいの匂ねられぬ蒲團かな
小座敷に菊のかをりや御眞影
初霜や庭の飛石石燈籠

悼津田大佐

秋のわかれ人の別や木の葉ちる

明治三十四年十二月三十日　七句〔同前〕

朝日さす小川に鴨のきら〳〵し

福引や一度々々のわらひ聲

庭下駄の歩み重たし霜柱

元旦のまづ誦んじけり神代紀

一年の日記檢すや年の夜

水仙の鉢を筆洗に醉畫かな

水野氏父を喪ふ悼句

木枯しに風樹の歎の夕かな

明治三十五年一月一日〔ベルリンにて〕

床の間に應擧の幅やとらの春

明治三十五年一月二十二日　五句〔ベルリン白人會にて〕

祝桂亭卒業

十年の螢雪こゝに花の宴
書初や墨の香匂ふ銀屛風
若草や榎古りたる一里塚
枯蓮も氷りて寒し寺の池
猿曳を黑犬吠ゆる長屋門

明治三十五年二月二十三日　十句〔同前〕

おとなへば亭守留守なり花の宿
馬逸す柳の馬場や月おぼろ
麥酒賣る假の亭あり花見會
青柳にうたれて怒る葦の角
菜の花やかげろふもゆる石地藏
蕨煮る山や蕨を鍋のつる
桃源を霞こめたり石の門

流れ來て水車にからむ落花かな

蔓みれば醜かりけり藤の花

籃に滿つ蕨に蘭も交りけり

明治三十六年五月「卯杖」二句〔白人會にて〕

我が軒に垂るゝ隣の柳かな

蹴鞠の果てて月ある柳かな

明治三十六年七月「卯杖」〔同前〕

門を出でてわれに二頃の青田かな

明治三十六年九月「卯杖」二句〔同前〕

一村を黄なる鴨脚(いてふ)の嵐かな

＊一村は黄なる銀杏の落葉かな

桔梗(きちかう)や亡き戀人の紋所

明治三十六年十月「卯杖」四句（同前）

名月や坐りかへたる汽車の窓

大川の筏小さし秋の雨

赤門を入れば鵯鳴く椿山

爲岡村氏嚴君金婚式字結

一村は金木犀の匂かな

明治三十七年二月「卯杖」（同前）

大雪やアイヌの村の熊祭

富山房の新築落成を祝して　大正二年十二月六日

新築の堂に新酒のかをりかな

大正五年八月二日（渡米船中にて）

飛魚の翅もかろし夏の海

夕立のしぶき冷き船の中

雲ちぎれ／＼に飛んで風涼し

船の窓舞蹈の夜の明け易き

大正五年八月四日　三句〔同前〕

甲板に人無し風涼し屁を放つ

大正五年八月六日〔同前〕

孫の誕生を祝して

アメリカで鶯の初音聞く日かな

大正六年一月〔ニューヨークにて〕

陽炎や千尺高き記念塔

大正六年四月七日〔エヂンバラにて〕

大正六年十月二十八日　三句〔柴又にて〕

秋の雨桂月の酒量減じたり

秋雨蕭々江戸川に客四人

桂月と鵙(もず)と吟じて日は暮れんとす

大正七年八月七日　〔輕井澤より高野辰之氏宛書翰の中に〕

雷も遠くになりぬ晩酌す

大正十一年五月　三句〔福井にて〕

冠をかけて故郷の卯月かな

新緑の山に躑躅かな蕨かな

でんがくや新緑の山つゝじさく

大正十一年六月十八日〔水野錬太郎氏の再び内相に就任せられた際、同窓祝賀會席上にて〕

新綠や白頭禿頭の友の會

大正十一年八月六日〔輕井澤より堀江秀雄氏宛書翰の中に〕

豆腐屋も酒屋も近しほとゝぎす

大正十二年八月二十三日　三句〔攝政宮殿下の輕井澤行啓の際、永井環氏宛書翰の中に〕

喜び合ひて靡き合ひたる千草かな

帽白く花野の中を皇子(みこ)はゆく

秋晴や國旗ひるがへる山の町

大正十四年七月三十一日〔輕井澤より長谷川福平氏宛書翰の中に〕

山の窓昔を語る霧深し

輕井澤にて　二句

瓊音去り蘿月の來る桔梗かな

花野ひろく山のあなたは甲斐の國

仙臺にて

四聯隊に少し殘れる萩の花

畫贊　　大正十年五月

春の水つゝみに滿ちて鳶なく

ウイスキー

ウイスキーの氣焰萬丈雲の峰
ウイスキーに季はなかりける俳句かな

唱歌

報徳唱歌

一

天津日嗣の御光の　輝きわたる四方の海、
波も靜けき大御代に、　仰げや高き君の恩。

二

我が家（いへ）の神たらちねの　めぐみあふるゝ家の内、
匂ふ春風朝夕に、　おもへや深き親の恩。

三

苗代小田の水足りて、　收むる刈穗空清し。
世のなりはひをいそしみて、　平和の秋をたのしまん。

四

あら浪騷ぐ折もあれ、　はやて吹きまく時もあれ、
義勇の心一すぢに　國に捧ぐる命あり。

五

現御神の大勅語　かしこみもちて人のみち
ふみな忘れそ我が友よ、　德に報ゆる誠もて。

（明治三十九年九月頃）

日本唱歌

一

我が日本の國體は、　世界萬國無きところ。
遠き神代の昔より　君臣分は定まれり。

二

子として民をみそなはし、　父とぞ君を仰ぎ見る。
上下隔てぬ親は、　一家のさまに異ならず。

三

天朗に氣は澄みて、　百鳥歌ふ花の中。

四時の氣候おだやかに、
人の心もすなほなり。

四

山川すべてうつくしく、
津々浦々の砂白し。
清き景色に感けてぞ、
人の心もいさぎよき。

五

桃の節供の遊にも、
まづかしづくは內裏雛。
あやめ刀の戯に
早くも磨く武勇の技。

六

神敬ひて里每に
產土神祭賑しく、
祖先崇むる國風は、
家の紋にも知られたり。

七

古來の美風經として、
外國文明緯に、
大和心の綾錦
織出したる世々の跡。

八

過來し二千五百年、
幸と榮との歷史あり。

明治の御世の大稜威、仰ぐもうれし面り。

九

新文明を採入れて、日に日に進む國運は、
古今に比ひなく、世界の見る目驚けり。

一〇

前に臺灣、澎湖島、後は樺太、朝鮮と、
二大戰役事果てて、いつも加はる新領土。

一一

五萬方里の野に山に、國旗かざさぬ所なく、
六千萬の民草ぞ、君を八千代と歌ふなる。

一二

郵便、電信、通信の便利はいふも愚にて、
今は全國都會の地、長距離電話自在なり。

一三

谷越え野越え行通ふ汽車の線路はいくそばく、

六千哩とく過ぎて、　なほ年々に延長す。

一四

五百重の潮路はる〴〵と　我が浮寶行く先は、
支那に、印度に、濠洲に、　さては亞米利加、歐羅巴。

一五

生絲、羽二重、茶をはじめ　水產物は類多く、
漆器、陶器の數々も、　皆國產の主要品。

一六

國の進步に伴なひて、　貿易年々發展し、
輸入輸出の總額は、　八億圓にも上りけり。

一七

農これ民の本にして、　商工業は國の富。
博覽、共進、種々の會、　勸業常に怠らず。

一八

國の守の軍港は　橫須賀、舞鶴、吳、佐世保、

外に遼東旅順港、　尙朝鮮の鎭海灣。

一九

近衞師團を加ふれば、　陸軍師團十有九。
義勇奉公一すぢに　精鋭無比の聞あり。

二〇

山村僻地行くところ、　小學校の設あり、
生れて六歳、六年の　教育受けぬ子等もなし。

二一

尙その上に學校は、　普通專門數あまた。
教育勅語身にしめて、　朝夕磨く智と德と。

二二

業務に暇なき人も、　靑年會に夜學會、
戊申詔書を體してぞ、　勤儉の風、競ふなる。

二三

自治の精神盛にて、　地方の事業日に擧り、

東洋唯一立憲の　國の譽は世に高し。

二四

東洋平和の天職を　負へるは我等日本人。
東西文化の精粋を　集むる抱負大にして。

二五

此の帝國に生れ出で、　此の大御世に遭ひし身を
おもへば嬉し御民われ、　おもへば嬉し御民われ。

（明治四十四年六月）

明治聖帝

一

文明古く匂ひし印度、　西の女王の權威に屈し、
疲れ果てたる老帝國は、　鴉片の夢の尚醒めやらず。
世界はすべて我が世界ぞと　白色人種、氣驕りし時、

太平洋上島帝國に、　古今の聖帝世に出でませり。

二

三百年來流れながれし　徳川の末浪逆巻きて、
黒船いく度磯もとゆすり、　警報鐘は頻りに鳴りつ。
征夷の二字は虚しき名ぞと　國民擧りて身悶えし時、
萬世一系寶祚を踐みて、　明治の聖帝御世をしろせり。

三

輝き出づる朝日の影に、　叢雲一時に霽れこそわたれ。
大政奉還終るや否や、　廢藩置縣も直ちに成りぬ。
內治外交すべて皆張り、　軍備敎育日に整ひて、
大憲煥發、內外齊しく　稱へぬ、聖帝御世萬歳と。

四

支那をきためし火砲の響、　東洋諸國の眠を覺し、
露西亞の野心挫く勝鬨、　白色人種の膽を冷せり。
南臺灣、北は樺太、　朝鮮八道新附の民を

併せて同胞六千萬人、歌ひぬ、聖帝御世萬歳と。

五

畏し俄に御惱重りて、神去りまししは夢かあらぬか。
暗澹の色國を包みて、民皆慟哭闇行く心地。
松明の光は霧にうすれて、青山の原秋風白し。
世界の新紙斉しく悼みぬ、日本の聖帝崩れましぬと。

六

盛德大業語れど盡きず、追慕の涙は乾く日あらんや。
遺業失墜するなからんと今上陛下の御言畏し。
六千萬人心を協せ、國の光をいよ／＼揚げて、
千年萬年語りも繼げや、明治天皇聖の御代を。

（大正元年十一月）

乃木大將

一

明治大帝下し給ひし　軍人勅諭に、萬づの德は
誠一つとのたまはしし　それをさながら實行せし人、
嗚呼乃木大將其の人ならずや。

二

明治大帝下し給ひし　戊申詔書に、勤儉の道
これ務めよとのたまはしし　それをさながら實行せし人、
嗚呼乃木大將其の人ならずや。

三

明治大帝下し給ひし　教育勅語に、祖先の遺風
彰（あらは）すべしとのたまはしし　それをさながら實行せし人、
嗚呼乃木大將其の人ならずや。

四

明治大帝重き御惱（ごなう）に、　土にひれふし神に祈りし
六千萬の民の心、　それをさながら代表せし人、

嗚呼乃木大将其の人ならずや。

五

明治大帝崩御のあした、　露にぬれふし起きも上らぬ
六千萬の民の心、　それをさながら代表せし人、
嗚呼乃木大将其の人ならずや。

六

明治大帝御葬（みはふり）の夜半（よは）、　同じ道にと御あと慕ひし
六千萬の民の心、　それをさながら代表せし人、
嗚呼乃木大将其の人ならずや。

（大正元年十一月）

皇太子殿下御成年式奉祝唱歌

一

日嗣の皇子（みこ）に御冠（みかうぶり）　さづけますなるこのあした、
大内山の松が枝も　緑一しほまさるらん。

二

さしそふ光あふぎつゝ　行末とほき御榮(みさかえ)を、
千代田の宮の千代かけて　祈り奉(まつ)らんもろともに。

（大正八年四月）

皇太子殿下御成婚奉祝唱歌

一

今日しも擧げます畏き御典(みのり)、　喜びことほぐ我等の聲は、
野山を動かしみそらに滿ちて、　世界の果まで響きぞわたる。
祝へ祝へ今日のよき日。

二

國民こぞりて仰ぎまつる　千代田の大宮御榮(みさかえ)增して、
御國のいしずゑ萬代(よろづよ)かたく、　我等が幸こそきはまりなけれ。
祝へ祝へ今日のよき日。

（大正十三年一月）

皇太子殿下奉迎歌

一

尊き光、野山に滿ちて、　日嗣の皇子は今畏くも

福井縣に入らせ給ひぬ。

二

縣の內にしづまりいます　神々たちもこのいでましを、

みなうれしみてむかへますらん。

三

六十萬の縣の御民、　こよなき幸をことほぎあへり、

喜の色おもにたゝへて。

四

秋風寒き越路の空に、　仰ぐ錦の御旗まばゆし。

榮ある今日よ譽の今日よ。

（大正十三年十月）

大日本國

一

御祖(みおや)の神の産ませし國に、皇孫(すめみま)降りて君とし知らす。
寶祚は天地と窮りあらず。この國、この君、世に類ひなし。

二

大君、民を子のごとおぼし、國民、君をば親とし慕ふ。
さながら一家の睦みはとはに、この國、この民、世に類ひなし。

三

大和の國の鎭めの山と富士の嶺(ね)み空に神さび立てり。
尊き皇國(みくに)の姿を見せて、高きはこの山、世に類ひなし。

四

日出づる國のしるしの花と櫻は霞にまがひて咲けり。
けだかく雄々しき國ぶり見せて、匂ふはこの花、世に類ひなし。

國學院大學校歌

（大正十年頃）

一

見はるかすもの皆清らなる　澁谷の丘に大學立てり。
いにしへ今の文(ふみ)明らめて、　國の基(もとゐ)を究むるところ。

二

外(と)つ國々の長きを採りて、　我が短きを補ふ世にも、
いかで忘れんもとつ教は、　いよゝ磨かんもとつ心は。

三

學びの巷そのやちまたに、　國學院の宣言高く、
祖先の道は見よこゝにあり、　子孫の道は見よこゝにあり。

獨逸學協會學校中學校歌

一

綠は深し城西の　塵をよそなる目白臺、
學びの花の香も高く、　我が校樹てり巍々として。

二

右手（めて）にはかざす敷島の　大和島根のさくら花、
左手（ゆんで）にかざす西歐の　ロールベールの花の枝。

三

學藝至り極まれる　獨逸の森の玉かつら、
世に先んじて移したる　先人の功を仰ぎつゝ。

四

あやに畏き天皇（すめらぎ）の　勅語（みこと）の旨を櫓櫂にて、
學びの海を漕ぎ渡る　我等が行手賴もしや。

五

あゝ九百の健男子、　仰げ双手の花二枝、
あゝ九百の健男子、　仰げ理想の花二枝。

明石中學校校歌

一

明石の瀬戸を西へ東へ　風の力に行く百船も、
あやつるかぢの正しからずば、　いかでかめざす港に着かん。
我等が自治の精神これぞ。

二

淡路島山、海を隔てて、　そゝり立ちたる姿氣高く、
この山この海相親しみて、　こゝの景色ぞ全くめでたき。
我が協同の精神これぞ。

三

神の御代より開けしところ、　史よむ人のあくがるゝ郷、
こゝに生ひ立つ人の心に　清き新しきものも生れん。
我が創造の精神これぞ。

東京府立織染學校校歌

一

錦の色の匂はしき　高尾の山の蔦葛、
織り出る綾か目もあやに　多摩の川邊の絲柳。

二

自然の匠及ばじな、　凝す意匠の樣々に、
造化の工や奪ふらん、　染むる色合いろ〳〵は。

三

とび交ふ筬とゆく月日、　染まり易きは人心、
時の間をしみつゝしみて、　學びの業にいそしまん。

高知縣宿毛小學校校歌

一

琴平山の松の嵐は、朝な夕なに窓に通ひて、
樂しく廣き我等の校舍、宿毛の郷の我等の校舍。

二

水音きほふ松田の川に、ひたり遊びし名もなき子等の
高きいさをを國に遺して、郷の誇となれるも多し。

三

ときはの園の花のかをりは、ちとせをかけていよ／＼増すを、
我等もわざにつとめはげみて、祖先にまさるほまれをあげん。

東京高等工業學校校友歌

一

春の陽氣の竈に蒸されて、
閃く電光一雨過ぐれば、
花野の錦促織しきりて、
神の御代より序を違へぬ
自然の工業吾等は學ばん、
自然は誠實巧に誇らず、

千種萬様咲く花めでたく、
夏の夕空染めなす七色、
雪に現ずる玉樓銀臺。
四季の運行、自然の工業、
自然は勤勉一日も休まず、
自然は質樸譽を求めず。

二

黑木の柱綱根に堅めて、
素燒の瓶に薄酒盛りたる
人智の進み世を經てたゆまず、
自然をさながら機械に捉へて、
自然の征服吾等の手に在り、
墨田堤に咲き散る花にも、

うなゐ少女の袂は花ずり、
單純簡易のそのかみ思へば、
學びの應用限りはあらじな。
工業何ぞ自然の征服、
藏前河岸にさしひく汐にも、
吾等迷はず亂れず動かず。

入學の春

一

時は今春、一年の春、　春の光は野山に滿ちて、
日に見ゆるものすべてうるはし。

二

時は今春、少年の春、　春の喜、胸にあふれて、
心ざすこと、つねに新し。

三

花見る毎に學は進む、　健(たけ)き體(からだ)のいよ〳〵健く、
早も重ねん、五つの春を。

（昭和二年一月）

奉悼歌

唱歌

一

地にひれふしてあめつちに、　いのりしまこといれられず、
日出づる國のくにたみは、　あやめもわかぬ闇路ゆく。

二

大御葬(おほみはふり)の今日の日に、　流るゝ涙はてもなし。
きさらぎの空春淺み、　寒風いとゞ身にはしむ。

（昭和二年一月）

日記

日記（明治二十年）

一夢茫々二十年　飄零身事誰又憐　功名未得登青史　却倩中書獨自傳
丁亥元旦題　　龍　江　生

水茎のあとをとゞめておのが身のむかしをしのぶしるべとやせん
いめのや主人題

一月一日　鷄鳴數聲曉を報じてはやくも亥の年とはなりぬ　さすがに新玉の春立つ日と思へば四方の氣色も何となく麗かにめでたし　千門に飄へる國旗は旭日に映じて紅く萬衢に並べ植たる標松は後凋の色を顯はして緑なり　轔々たる馬車公侯を載せて去り揚々たる華騮將軍を上せて來る　相逢相遭旭日の中皆な聖明の德を唱へ太平の春を歌はざるなし　龍江子も舊に依て又た齡を大都の寓に重ねぬ　有作

鷄鳴報曉歲維新　即是明治二十春　國幟千門掲紅日　祥霞萬市散金鱗　僻陬皆沐堯天澤　陋巷未違顏子貧
有酒滿瓢歌且飲　自云聖世一遊民

東京諸友を巡賀し其遠くして不便なる者は端書にてごまかせり

一月二日　快晴　立花、和達、福原、近藤、太田諸氏と學寮に試毫す　戯に早梅の詩を作る

北嶺未吹六出花　東風先破早梅花　誰云秋菊百花殿　又殿又魁是此花

夜川橋、貞吉二子とわら店寄席に赴く　家に來す

一月三日　快晴　元日の朝は賀客の縦横に行きかふのみにて市街の商店も多くは戸を閉ざして何となく寥々たる有様なりしが昨日今日は滿都おのづから賑は敷なりゆきて賣初の呼聲は初荷のかけ聲と相應じ紙鳶の空中にてうなるは羽子板の街頭に響くと相合せり　乙女子の今日を晴れぞと氣飾りてはね抔付きたるは如何にも珍らかに目新しく僅々一夜を隔てゝかく迄に變りけるかと怪むも無理ならざる可し

孤客經年尚未還　沈淪寄跡大都間　無端昨夜三更夢　不見福神見故山

午後和達、太田、近藤、福原、香村、山田、只野、永井、荒川、平岡、稲波、馬淵、平野、中山、正木の十五氏來り圖牌を弄し尋で小宴を開く　暮みな去る　川橋、加藤、山下三子踵で至り又飮む　夜神樂坂を步す

一月四日　快晴　川橋子來りシーキスピア全書を携へ歸る　貞吉子と步して小日向に至り又腕車を傭ひて神保街に至る　近藤より一圓五十錢を受取る　眼鏡を修理せしむ　金十三錢　午後近藤、加藤等來る　共に川橋の宅に赴きカルタを弄して遊ぶ　座上知る知らぬ七八人あり

一月五日　快晴　午後福井諸生親睦會に臨む　會するもの大凡四十餘名　會場は江東中村樓なり　歸宅すれば則ち佐野氏よりカルタ會を催ほすに付來車あれと云ふはがきあり　因て又之に赴く　歸寓十時

一月六日　初雪　玉屑霏々として終日已まず　雀のさんりまでと詠ぜしも今日の雪はさんりにも越たる可しと思はれぬ　九時山階宮邸内熊谷子の宅に至り牛肉にて酒を馳走になり其より雪景を賞し乍ら近藤子の宅に至り又

共に上野に遊び雪景を賞し尋で牛込に歸り鷄一羽を割き川橋子の宅に於て一酌す　快甚々々　此夜積雪皚々新月照之皎然眞有不夜城之觀　川橋子出所藏梁星巖常磐雪行之詩幅掛之於壁間　衆同聲誦之朗々之聲徹四隣　九時近藤子去る　二子亦歸る

初雪詩

朔風曉見飛銀屑　頃刻庭園瓊玉綴　數點早梅香乃知　幾竿疎竹長先折　豈無灞上小驢驅　正想香爐玉簾揭

寒士却傚袁子臥　啜茗南牖烹新雪

一月七日　終日在寓　伊藤氏來る　共に小酌　歩してわら店に至り寄席に入る　加藤子來り嘗て貸す所のリヴイングストーン氏紀行を返す

家信を得たり　直に復す

一月八日　晴　學校授業始るを以て學校に赴きしに課目悉く休みなりき　因て近藤子の宅に至り閑談數時辭して歸る　時に十二時三十分なり　歸途一島未來記を購ふ　値五錢　此日丙戌會ありたれども感冒の氣味あるを以て行かず

一月九日　日曜日　晴　有風　此朝寒威頗嚴　九時家を出でゝ山田子三郎子を訪ふ　蕎麥の馳走あり　其れより中西屋に至る　川橋子の托に從り懷中日記を得んと欲するなり　正午歸宅　此夜明月皎々殘雪を照す　景色絶奇

一月十日 晴 學校退散後近藤、馬淵二子と芝に遊び新橋にて馬淵子に別れ銀座を經て還る 途今金に至り一酌す 夜渡邊子來る

一月十一日 雪 午後雨に變ず 龍口の信あり 明日歸國する旨を報ず 因て散校後之を訪ふ 同子病あり醫師の勸に因り歸鄕するなり 詩を賦して之を送る

玉屑滿天糝々來 須臾白屋變銀臺 征蹄朝蹈京師雪 旅袖夕薰故地梅 容易醫方驅病鬼 自然佛力活明才 櫻花更約春風節 墨陀堤頭共擧杯

雪みぞれふるさとさしてゆく君の今日の別の惜まるゝかな

一月十二日 風あり 晴曇不定 內藤運平に返信す 暮歸宅す 此夜細雨蕭然庭樹に滴りあたかも春雨の如し

一月十三日 曇 學校にて放課の間に將來之日本を讀む 議論痛快文字活動頗る面白かりし 夜三上益來 共に神樂坂を步す 此日毘沙門の緣日に當り往來甚だ雜沓す

一月十四日 雨 歸途近藤子の宅に至り話す 福原子亦た至る

一月十五日 晴 有風 學校步兵操練授業のとき二級生と合し九段坂まで駈足行軍をなす 頗る壯快なりし 歸校後仁泉亭に赴く 英語會に臨むなり 近藤宅に至り談ず 暮歸る 夜七時頃地震あり頗る猛烈なり 近年稀にあるところ 作文あり題は三十而有室論

一月十六日　晴　有風　朝家を出で貞吉子と近藤子を訪ひ共に日本橋區茅場町に赴き越路太夫の淨瑠璃を聞く外題は中將姫雪責之段　流石は名人だけありて音吐明瞭頓挫あり波瀾あり怨むが如く訴ふるが如く老爺媼涙を流すものあり

一月十七日　晴　滿知倭文より年賀狀あり　近藤子來り直に去る　此日始めて器械體操を行ふ　輕震二回あり

一月十八日　雪　朝起窓を推せば積雪已に寸許　霏々尙休まず　散校の頃には尺餘に及べり　近來になき大雪なり　貞吉の爲に對馬砲臺碑序を作る

一月十九日　晴　此日滿市雪融に際し泥濘甚し　近藤の宅にて福引を爲す　會するもの和達、立花、福原、稻波、香村、太田等倂せて八人なり　余れ香村子の出品せる錦繪を得たり　歸て之を晟子に與ふ　夜火あり　すり半鐘を打ちし故大に驚きしが同人社外塾なりと云ふ（小日向臺第六天町）

一月二十日　雨　貞吉の爲に稻波より佛英字典を買ふ　値金一圓　山形紀行の稿を起す　道路泥濘汁粉を流せるが如し

一月二十一日　雨　吉岡の書あり明日來る可き旨を報ず

一月二十二日　晴　散校後正木、中川、山座、伊藤、近藤、不破等と松下氏に赴く　其病を訪ふ也　各々金若干を投じて鷄卵箱一箇を贈る　別れて近藤の宅に至り尋で谷島に至る　永井、比企、魚住、岡本等七八人あり歌カルタを弄す　晩七時辭し去る

一月二十三日 雨 終日不出門 Nicholas Nickleby を讀む 快絶

一月二十四日 晴 英作文題 On the Winter Amusements なり 天皇皇后今日御出輦京都へ行幸啓遊ばさる丶筈の處海上風波悪しき由にて御延引被仰出 樋口健一郎氏の訃あり 天我が校の一奇才を奪ふ 嗚呼悲哉

歸途治集館に至り筆紙及平家物語を購ふ

一月二十五日 雨 天皇皇后京都行幸啓御發輦 三十而有室論九十六點 又貞吉子の爲に作りし對馬砲臺碑序百點を得たり 作文宿題二月五日まで 政教新論序

一月二十六日 雨 秋月氏修身學休み

一月二十七日 晴 正午稲垣の爲めに共に歩して萬世橋に至る 歸途牛乳二杯を馳走せらる 熊澤氏の課休み

一月二十八日 快晴 連日の陰雨漸く晴を放ち道路亦た乾く 遠近始めて春色あり 午後馬淵、藤瀨二子來る 夜近藤子來る 共に歩して神樂坂に至り草鞋を購ふ 明日近藤子と遠足の約あればなり

一月二十九日 快晴 本日入校式施行に付き臨時休業 午前八時近藤子來る 一瓢を腰にし一團飯を懷にしてゆく 戸山學校前より大久保村に出で新井藥師に詣し近郊を何處をあてと定めなく跋渉し遂に堀の内の傍に出で四谷を經て歸宅す 途林子を訪ふ 夜川橋、貞吉二子と藤本亭に赴き圓朝の人情話を聞く 歸る比ひ雨頻に降り出しみな濡鼠の如くなつて去る

一月三十日 雨 暮に至て天晴る 夜貞吉子と神田に赴く 貞吉子靴&cを買ふ 歸途近藤を訪ふ 不在

一月三十一日　晴　通路始めて乾く　連日の陰雨漸く晴れしと思ひしまもなく復た降り出せし昨日の雨も僅かに一日にて降り已み全く春景色となり又紙鳶のうなる音などいとやかまし

二月一日　晴　有風　此日風甚しく塵埃を飛ばし路上を行く者其眼を開く能はざる程なり　然れども其風自ら暖にして何となく春めきたり

二月二日　晴　近藤界と正木政を本郷に訪ふ　晩餐を饗せらる　夫れより伊藤幸を訪ひ須臾にして去る　歸途稲垣に逢ふ　因て其寓に至り餅を食ひ談話數刻にして歸る　此夜月色淸冷

二月三日　晴　稲垣子に饗せられて桃の舍に赴く　此日學校より體操場鑑札を受取る

二月四日　晴　有風　此日立體幾何學平常試業あり　歸宅後某女の爲に裁縫學校祝文を添削す　馬淵氏の需に應ずる也

二月五日　晴　平野氏と桃の舍に赴く　同子の饗に與かるなり　其れより直に丙戌會に仁泉亭に臨む　演說者堤、水野、中川の諸氏なり　余三十六歌仙をよむ

二月六日　晴　朝政敎新論序を作る　川橋子來る　後白石子來る　共に小石川に至り岩田子を訪ふ　雜煮餅の馳走あり　夜月を踏で歸る

二月七日　曇　近藤、白濱二子と萬世橋靴屋に赴く

二月八日　曇　歸途平野氏と小川町に至り西洋ノーヴェル二冊を購ふ　Fortunes of Nigel Catherin なり

二月九日　晴　風あり　福原子の饗を受け桃の舍に赴く　歸途平岡の處に至り談ず　哲學會雜誌第一號を購ふ

二月十日　晴　有風　此日佐々木先生生物學授業休み　夜只野、和達二子來る　只野に貸すに平家物語を以てす　只野在米石川器藏よりの書狀をもち來る

二月十一日　晴　午後近藤界を訪ふ　福原在り　閑談數刻暮歸る　晩餐の饗あり　近藤子余が家に至る　夜九時頃去る　此日いろは文庫を購ふ

二月十二日　晴　英語會に臨む　束髮會の趣意を述べたる和詩を作らんと欲し夜十二時に至る

二月十三日　快晴　午前在宅　西山省吾子來訪　同子と相見ざること半年に過ぐ　今日の一逢眞に喜ぶ可し　午後貞吉子と歩して神田より上野に赴き暮歸宅す　此日天氣快晴春光駘蕩　上野邊遊歩の人も隨分見受たり

二月十四日　晴　物理學小試驗あり　歸宅の途次俎橋を過ぐ　書肆に鶉衣疎狀の老人あり　曰く鎌倉より來り未だ家あらず俳句を以て天下を漫遊する者と　其句二あり

　　白梅や北條どのゝやしき跡

　　汲だ茶の冷るも知らず梅林

二月十五日　晴　風烈し　塵埃を捲くこと甚しく行人太だ艱む　此日佐々木氏授業やすみ　政教新論序九十九點を得たり　宿題　論祖宗聖德萬國所无　卽席　讀神代紀　夜貞吉氏と佐野氏を訪ひ畫手本をかり歸る

二月十六日　晴　散校後平岡、近藤と萬世橋に至り靴を得步して向島に至り團子、雜煮抔を喫し上野を經て歸

る　家信あり曰く家嚴廿四五日を以て發仙上京すと

二月十七日　晴　夜山座來る　饗せられて島金に至る

二月十八日　快晴　馬淵に囑して買ひたるズボンを受取る　近藤來り一圓を返却す

二月十九日　晴　此日臨時休業　朝歩して近藤の宅に至る　途に木曾路名所圖會、河内名所圖會を購ふ　値一圓二錢なり　下宿屋を捜して遂に板垣善五郎の二室を借るを約し手附金五十錢を與へて去る　午後馬淵、山本來訪

二月二十日　晴　荒川昇來る　春木座に至らんと欲し行く　大入にて札留なり　因て稲垣の宅に至り遊び共に歩して上野に至り教育博物館を覽、歸途豐國屋に至り又た稲垣を訪ふ　四時歸宅　女學雜誌二册を購ふ　山本自由の太刀を持ち去る

二月二十一日　晴　伊藤に饗せられて松本に赴く　歸りに近藤の宅に至り車に乘じて歸寓す

二月二十二日　晴　近藤と佐野を訪ふ　不在

二月二十三日　晴　近藤の宅に至り遊ぶ　福原、和達等踵で至る　暮歸る　西山省吾氏を訪ふ　不在なり　東髪會の歌成る　之を馬淵に贈る

二月二十四日　晴　風あり寒し　聖上皇后宮還幸啓遊ばさる　右に付き學校二時間休業　其他の諸時間も亦みな休みとなる　寄宿舍にて遊ぶ　晩に歸る　此日地久庵に至る　福原子饗す

二月二十五日　晴　佐野氏に至り通學をかきて貰ふ

二月二十六日　晴　午後上野停車場に赴く　此日知友十有九名杉田觀梅に赴く　余家嚴の至るあるを以て行かず

二月二十七日　曇　雨ボツ〳〵降る　朝上野停車場に赴き家嚴の至るを待つ　來まさず　因て歸宅す　午後貞吉と神田に赴く　又西山を訪ふ　家嚴廿六日發程の旨報知あり

二月二十八日　晴　歸宅の途板垣に至る　家嚴今午を以て着京し給へり　談ずること數時　同車して牛込に歸る

三月一日　晴　風あり塵を捲く事甚し　遠近の梅花大抵笑はざるなし　家嚴に聞くに仙臺などは未だ一點の芳を破らずと　此日東海道名所圖會、伊勢參宮名所圖會を購ふ　値合せて一圓

三月二日　晴

三月三日　晴　此日佐々木敎諭缺席　午後和達と板垣に赴く　家嚴を訪ふ　在らず　暫らくして歸る　因て共に靑陽樓に晩餐を喫して歸る　此日古今集遠鏡一部、三好監物忠節錄一部を貰ふ

三月四日　晴　讀神代紀の文九十八點を得たり　學校より證明書を受取る

寫

證明書

福井縣足羽郡佐佳枝上町三十二番地

士族芳賀眞咲長男　芳　賀　矢　一

右ハ本校第三年學級修業中ノ生徒ニシテ既ニ二ケ年ノ課程ヲ卒リタル者ナリ依テ之ヲ證明ス

月　　日

校　長　印

三月五日　晴　歸校して直に旅装を整へ杉田觀梅に赴く　同遊林、持地、白濱三子なり　此夜杉田に宿す　明月林に滿ち清絕冷絕　記事觀梅紀行に詳かなり

三月六日　晴　杉田を縱覽し歸京す　途に白濱子の宅に至り又一酌す　此夜月明昨夜に劣らず

三月七日　晴　歸途板垣に至る　暫くして貞吉子亦た至る　家嚴に拉せられて靑陽樓に至る　此日笠井氏畫學休業なりし

三月八日　晴　夜伯父君の命あり家尊に板垣に謁す　歸途近藤の宅に至る　新論二冊、卵の箱一つを貰ふ

三月九日　雨　風あり　雪少し降る

三月十日　晴　米人カクラン氏の演說を講義室に聞く　耶蘇教に關するを以て事甚だ面白からず拍手の聲少しも起らず

三月十一日　晴　山座來訪　共に松下丈吉氏の宅に至る　ハムレツトの講義を聞くなり　十時歸宅す　此夜月

明晝の如し

三月十二日　曇　風あり砂を捲くこと甚し　英語會に臨む　余れ奏者の傳を飜譯し之をよむ　馬淵氏來る　晩餐を喫して去る　平野氏と桃の舍に赴く

三月十三日　晴　午後板垣に至り家尊を訪ふ　家尊明日發程歸仙せらるゝなり　歸途近藤に寄り共に脚半一つ宛を購ひ伴うて牛込に至る　夜十時頃近藤子去る

三月十四日　晴　列聖盛德萬國無比論九十八點を得たり

三月十五日　朝岡本を訪ふ　獨乙文法書一冊を贈らる　同氏は來月上旬出發歐洲へ赴くよし

三月十六日　晴　獨乙學の試驗あり

三月十七日　晴　此日イビー氏の演說あれども又た先日のカクラン氏の如くならんと思ひて聞かず　夜雨ふること甚し

三月十八日　曉起　雨尙ほ霽れず　外套をかぶりてゆく　學校に至る頃漸く晴る　體操あり大に困る　此日英文學試驗あり　歸途近藤の家に至る　夜松下に至りハムレツトを聞く

三月十九日　晴

三月二十日　快晴　加藤淺二郎來る　午後貞吉子と靑山に赴き馬淵を訪ふ　暮歸宅す

三月二十一日　快晴　午後獨り出でゝ上野に步す　士女群集觀花の候の如し　梅花は已に散りかゝりたれ共櫻

は一向に未開なり

三月二十二日 晴　歸宅の途雨降り出したり　動物學試驗あり　題北賓斬獅子圖　九十五點

三月二十三日 雨　雪を交ふ

三月二十四日 晴　植物學の試驗あり and 體操の試驗も

三月二十五日 晴　三角法の試驗、英文學飜譯の試驗あり　夜松下に赴きハムレットの講義を聞く

三月二十六日 晴　30 s from Asai 倫理學の試驗あり　斯波祖父君より半紙數帖を贈らる　米野信實の信あり　曰く頃日上京、麹町山下町一丁目二番地池田方に寓すと

三月二十七日 快晴　午後家を出で湯島切通に至る　岡本氏の歐洲行大久保氏歸鄕の途に上らるゝの送別宴に臨むなり　歸途三上、比企と歩して上野に至る　三上を伴うて寓に歸る　福原蘇州と Merchant of Venice, & Vicar of Wakefield の交換をなす

三月二十八日 快晴　物理學の試驗あり　第二學期試業全く終る　夜近藤と松木を訪ふ

三月二十九日 晴　風吹く　暮松木を訪ひ明日彌〻發足するや否やを問ふ　蓋し甲州に遊ぶの約あればなり　田邊のはがきありて行かぬよしに付き遂に甲州行の事廢案となる

三月三十日 晴　風あり　午後近藤を訪ふ　不在なり　立花を訪ひ共に淺井の寓に至り閑談數刻にして歸る

三月三十一日 晴　朝近藤を訪ふ　又寄宿舍に赴き數子と上野に遊ばんとす　故あり果さず

四月一日　近藤を訪ひ歩して上野に至り共進會に至る　途にマコーレーエッセーを購ふ　値一圓四十錢　家に來す　又龍口に信す

四月二日　雨　夜川橋、貞吉等と牛を煮て酒を飲む

四月三日　曇　風あり　午前近藤及立花來り訪ふ　終日家に在り　Plays を讀む　快甚し　此日二人ツンボ、小春日和、吸物鉢等の筋書を日々新聞より切りぬく

四月四日　晴　風あり　家信あり　朝七時家を出でゝ齋藤を訪ふ　二階に梯子をかけて上れり　頗る可笑し　共に上野に至り共進會場に入る　西山に逢ふ　拉せられて淺草の富士山に登る　又歩して向島に至りさくら餅を食ひ歸途又上野を經て歸る

四月五日　晴(快晴)　朝牛込郵便局にて爲替を受取り歩して神田に至り書籍二三冊を購へり　ロングフエロー詩集、ゴールドスミス詩萃、カオパー詩鈔及李頓のリユークレチア一册を購へり　午後學校に赴く　點數を見んと欲してなり

四月六日　晴　午前學校に赴く　點數未だ出でず　不破來る　午後又學校に赴き晩餐を食ひに歸り夜又伊藤を訪ふ　此度は八十一點、五を得たり　概言之二ノ組は點の多きもの多かりし故に番號は一番下れり(余が組にて)全體にては少し上れり　夜貞吉と寄席に赴けり

四月七日　晴　此日御殿山に遊ぶの約ありしが故あり果さず　此日終日在寓ロングフエロー詩集をよむ　中々

面白かりし　夜喜多村桂一郎を訪ひハムレツトを借り還る

四月八日　曇　學校始め（三學期）午後久米幹文氏を訪ひ大八洲史及增鏡を借り還る　山本に拉せられて蓮玉に至る　斯波叔父六日福井を發するの報あり

四月九日　晴　英語會に臨む　歸途徒然草を購ふ　十錢なり　山田に逢ひ共に靖國祠に歩し櫻花を見る　龜の年等をおごらる　此日丸善に赴く　書籍を買はんと欲してなり　然れどもなし　夜淺井を訪ふ

四月十日　快晴　朝コツクリ樣をやる　頗る甘し　午後平野、貞吉と上野に歩し叉墨陀に赴く　士女群集塵埃蓊勃殆んど櫻花の淸を汚す　然し凡以て太平の象を見る可きあり　有記　購哲學會雜誌三號　歸途稻垣を訪ふ

四月十一日　曇　夜雨ふる　歸途新橋に赴く　叔父君を迎へんと欲するなり　待て十時に至る　因て歸宅す　歸宅すれば已に着京せられたりき

四月十二日　雨　佐々木忠次郎氏の授業休みなりし

四月十三日　晴　井上氏授業休み　歸途白濱子の宅に至り柴田中竹等と墨陀に遊び上野を經て歸る

四月十四日　晴　風あり　散校後近藤を訪ひ談話數刻共に歩して牛込に歸る　龍口の書を得たり

四月十五日　晴　歸宅すれば西山の端書あり　本日四時頃に御來訪を乞ふと云ふ　因て之に赴く　觀覽券を貰ふなり　共に歩して牛込に至り叉喜多村桂一郎を訪ふ　談話數時にして之を辭し去て近藤を訪ふ　夜十時歸宅す

四月十六日　快晴　朝八時頃平野と共に墨堤に赴く　帝國大學運動會に赴くなり　十時進水式あり　十一時頃

より競漕始まる　五時頃に至り來客競漕あり　高等中學大に勝つ　歡呼天を動かす　Champion race にては法科大學勝を得たり　此日天氣快晴落花霏々　明宮殿下を始とし參らせ各皇族諸大臣貴女紳士來會せらるゝ者無慮數百人　寔に盛大なる運動會なりき　歸途只野と稲垣を訪ふ

四月十七日　快晴　九時林來る　共に八洲園に赴く　番町學校故友親睦會に臨まんが爲なり　十時八洲園に至る　已に十人餘來集せり　互にむかしを語り樂しき事かぎりなし　十二時頃に至りて柳谷、後藤、有馬等の演説あり　女子の方にては野村ひさ子が祝文あり　中々見事なり　已にして校長丹所啓行氏來會せらる　氏職を教育に奉ずること茲に十有餘年、鬚眉漸く白し　其勞思ふ可し　此日女子も打ち交りて居りしかば酒は飲まぬがよしさりとて其にては祝の心にならずとてベルモットを三本ばかり飲みしが校長氏は更に數本のビール等を贈られたり　二時頃宴を終へ或は競走を試むるものあり　此日風あり　園裡落花紛霏景色尤も奇なり　已にして復た座にかへり幹事を選擧し一年兩度開會に決す　幹事は柳谷、有馬、木村及び神田くま千代、野村ひさ、齋藤ゆりの六人なり　六時散會せり　余は林と車に乘じて歸宅す　時に晩七時頃なり　此日男子の出席者は十六人あまりあり女子は大凡十五人程なり　殊に可笑しきは相別れにし日には十二三の乙女なりける人の今は皆な人の母となりて二人三人の小兒を携へ來るなどよろづに付きて昔をしのぶ種となりぬ

四月十九日　晴

四月二十日　曇

四月二十一日　晴　歸途山座を訪ひ正木氏の Rienzi を借り來る
四月二十二日　曇　井上氏授業休みなり　歸途白濱を訪ひ牛を煮て小宴す　福原與にす
四月二十三日　雨
四月二十四日　晴　朝久米幹文氏を訪ふ　不在なり　歸途稻垣を訪ひ正午歸宅す　已にして午餐を終へ叔父及貞吉と歩して目白臺別莊に赴き櫻花を觀、筍を掘りて歸る　此日 Vicar of Wakefield を購ふ
四月二十五日　晴　工科二年生市來吉太郎子墨水に於て測量中溺死せる由の報を得　可悼　立花來訪
四月二十六日　晴　市來吉太郎葬送に付午後の課業休みとなる　西山省吾來訪す
四月二十七日　快晴　朝四時頃寮を出で餐し直ちに家を出でゝ學校に至る　行軍あればなり　五時半頃校門を出で本所五百羅漢に至り少憩し進んで辨天（洲崎）に至り辨當を開き一時頃歸宅す
四月二十八日　晴　松平正道來る
四月二十九日　晴　久米幹文氏を訪ひ增鏡五冊を返却し更に二冊を借る
四月三十日　雨　攻書會に當籤す　乃ち山座、正木、中川と松本に至る
五月一日　朝西山、福原等來る　平山及貞吉と上野に遊び歸途西山に饗せられて豐國に上り又車に乘じて西山の宅に至り夜九時頃歸宅す
五月二日　晴　稻垣と牛乳を飲む　此日鐵砲を貸附せらる

五月三日 午前曇 午後雨 平野と車に乘じて歸宅す Rienzi を太田より受取る 夜淺井の詩集を評す 龍口に東す

五月四日 午前曇 午後晴 及川の信を得たり

五月五日 晴 午前曇 山田子三郎來訪

五月六日 晴 夜雨 井上氏休業 立花、中村（竹）と歩して地久庵に至る 作間に貸すに Lady of the Lake を以てす 此日横濱より書物來る ネルソン傳、ハムレットの二册を購ふ

五月七日 雨 學校散じて後相模屋に赴く 丙戌會第一周年祝賀會あり 余は祝文をよむ 四時之を去りて衆と靑陽樓に至る 又近藤、堤、伊藤等數子と松幸に至る 九時歸宅す

五月八日 晴 伊藤、堤二子來訪 乃ち貞吉を拉して共に大久保村に遊び躑躅をみる 紅氈を布くが如く錦繡を曝らすが如し 壯觀々々 又新宿に至り牡丹を見十二時歸宅す 平野氏も共にす

五月九日 晴 此日臨時休業 昨日運動會ありしが爲なり 午後和達來訪 共に島金に至る 又平野を訪ひ新文詩を借り還る 和達より眼鏡一つを貰ふ

五月十日 雨 此日馬淵より束髮會の爲に作れる詩の報酬として束髮案內一册、ハンカチーフ一ダースを貰ふ 歸途福原に饗せられて馬淵と共に松本に至る

五月十一日 晴

五月十二日　晴　此日中村竹と散歩しビールを饗せらる　講義室にウイツトマン氏の演說あり　宗教と理學の爭は果してある可きか否かの題なり　此日靴一足、眼鏡一つを購ふ

五月十三日　雨　此日三角法試驗あり　夜松下に赴きハムレツトの講義を聽く　歸途山座、喜多村を拉して得信社をみ尋で酒屋に入りビールをのむ　十時頃歸宅

五月十四日　雨　此日英語會あれども行かず

五月十五日　晴　午後貞吉と歩して神田に至り伊藤を訪ふ　喜多村あり　暫くにして辭して去り貞吉と共に松本に至る　伊藤、喜多村踵で至る　伊藤は頻に酒を飮む　余等は喜多村とさきに歸宅す　歸途山座を訪ふ　夜西山來訪

五月十六日　晴　夜近藤、平岡二人來訪す　福原、和達、山上と小川町を歩し福原氷水を饗す

五月十七日　晴

五月十八日　晴　夜叔父及貞吉と共に神田に赴き十時頃歸寓　午後近藤を訪ふ　福原在り　共に歩して俎橋に至り今某に至る

五月十九日　晴　此日オドーラン氏の演說を講義室に聽く　井上氏は山本よりの囑托を受けし植物品標鑑識を依頼す　先生諾せらる

五月二十日　晴

五月二十一日　晴

五月二十二日　晴　朝三浦屋きたる　洋服を誂へる　値五圓たり

五月二十三日　晴　午後雷鳴驟雨來ること二三回　歸宅の途次雨に逢ひ歸れば則ち霽れたり　因て久米氏に赴く　不在なり　中川氏を訪はんと欲して求むるうち雨復た來る　因て走りて加藤氏の源覺寺に入り少憩　須臾天晴る　乃ち辭し去る　久米氏にハンカチーフを贈る

五月二十四日　晴　午後洋服假縫ひ出來たり

五月二十五日　晴　午後疎雨來り忽にして復た霽る　此日午後三時より體操場に於て大演習の豫習あり　倫理學の試驗あり　立花來り訪ふ

五月二十六日　晴　暮山座來る　薄暮家を出で喜多村を誘ひ松下氏の許に至る　不破、正木、中川と三人のみにて余等を合せて五人に過ぎず　仍て今夜は講義を止め共に伊藤を訪ふ　十時歸宅す

五月二十七日　晴　午後曇　今日又々體操場にて大演習の豫習あり　三角法の試驗あり

五月二十八日　曇　午後雨　平野猷太郎來訪す

五月二十九日　雨　午後山田子三郎を訪ひ閑話數時辭し歸る

五月三十日　雨

五月三十一日　雨　洋服出來す　夜齋藤、米野及佐野來る

六月一日　雨　微雨時にはれ時に來る　午後學校に殘り居りて物理學をよむ
六月二日　晴　物理學試驗あり　夜松下に赴く　歸りに山座に饗せられて島金に至る
六月三日　晴　午後稲垣と中川を訪ふ　種々馳走に與かり暮歸宅す　又久米に赴き增鏡の質問をなし續世繼六冊を借て還る　此日井上、大槻兩氏の授業やすみ
六月四日　晴　午後風あり　此日學校にて觀兵式あり滋野士官校長、森文部大臣等臨視す　十一時頃終る　乃ち歸宅す　午後和達來り訪ふ　夜喜多村を訪ひ閑話數刻共に寄宿舍に至り須臾にして辭し還る　喜多村にビールを饗せらる
六月五日　日曜日　雨　疾風雨を吹き戸を開く能はず　午前醫師牧内それがしに至り診察を乞ふ　脚氣の氣味あればなり　藥を乞うて還る　近藤來る
六月六日　晴　頗るあつし　午後山座、中川來る　山座とケニルヲルスを譯するの約をなす　夜喜多村來る
談話十時に至る　共に毘沙門の緣日に散步す　此夜月明晝の如し　家及久米に柬す
六月七日　雨　夜大に雨ふる　此日分科の屆を學校に差出す
六月八日　快晴　此日學校臨時休業となる　法科一年生詮議の筋あるが故なり　久米の書を得
六月九日　雨　此日講義室にて新校長の閱見式あり　學校臨時休業となる　動物學の試驗有之筈の處臨時休業に成たるに付き延引

六月十日　晴　此日亦體操一時間あるのみ　馬淵と共に中川小十郎を訪ふ　正木尋で至る　暮歸宅す

六月十一日　晴　午後丙戌會に臨む　又三時半より野村舊校長の送別會に學校練兵場に會す　會する者無慮六百有餘人　數子の演說等ありて中々の盛會なりき　夜平野、山座來る

六月十二日　快晴　午後學寮に至り二階に假寢す　涼風窓に滿ち快爽無比　已にして和達と眞水を訪ふ　歸宅すれば斯波祖父大病の電報あり

六月十三日　晴　伯父、叔父兩君福井に向つて發せらる　午後馬淵來訪す

六月十四日　晴　此日動物學、和漢學の試驗あり　前第一高等中學校長野村彥四郎氏任所に向ひ出發す　生徒新橋に送る者多し　暮山座を訪ふ

六月十五日　午前曇　午後雨　井上、秋月兩氏授業休み　此日日枝神社祭典に當る　伯父君の電報あり　曰く本日午前長濱に着すと

六月十六日　晴　夜雨ふる

六月十七日　晴　午後曇　此日三角法の試驗あり　大槻氏作文試驗あり　平野、白濱來る

六月十八日　晴　頗あつし　午後山座と櫻田を訪ふ　又英語會に相模屋に臨む　余は We are completing the Prep. Course と云ふを演說す　五時頃歸宅すれば斯波祖父病死の電報あり

六月十九日　晴　斯波伯父の許に弔狀を發す　午後齋藤、中村、柴田來る　踵で只野、近藤來る　近藤と秋吉

の宅に至り又山座を訪ふ　十時歸宅
六月二十日　晴　午後大雨となる　午後山座、中川と井上氏を訪ふ　種々の話を聞き五時頃に歸る　歸途大雨傘なし　車を傭ひて歸る
六月二十一日　晴　少しく風あり　此日朝一時間あるのみ　因て立花と白濱を訪ふ
六月二十二日　晴　此日學校課業なし
六月二十三日　午前晴　午後大雨　朝物理學一時間あるのみ　是にて今學年の授業は終れり　正午より親睦會に神保園に臨む　大槻文彥氏の演說あり　祝、淺井、立花の演說、祝詞等あり　余亦祝詞を朗讀す　已にして相撲、腕おし等種々の戲をなす　此日諸敎員出席の筈なりしも入學試驗ありしが爲に多忙なりとて井上、熊澤、福島氏等早く還れり　難波、秋月、佐藤、秋山、岡本氏等は終まで出席せり　此日は豫てより申合せて各福引の品を持參したれば其數百あまりありて中々面白かりし　已にして宴始まる　是よりさき松木鼎三郎氏生徒總代として敎員に謝辭を述ぶ　是に至て難波、秋月氏交々起て此會を祝さる　已にして杯觴飛交衆皆醉ふ　難波氏、秋月氏等交々詩を吟じ劍舞をなす　晚六時頃衆皆歡を盡して還る　實に近來の一大盛會なりき
六月二十四日　學寮に赴き福原及近藤と淺井を訪ふ　正午歸宅
六月二十五日　晴　午後山座來る
六月二十六日　晴

六月二十七日 晴 暮西山省吾來る 學業修業の爲め生野銀山に赴く由

六月二十八日 晴 生物學の試驗あり 夜和達來る 午後太田、近藤を訪ふ

六月二十九日 晴 夜平野來る

六月三十日 晴 平野を訪ふ 近藤と共に又山座を訪ふ

七月一日 晴 獨乙語の試驗あり

七月二日 雨 體操及三角法の學年試驗あり

七月三日 雨 午後家を出でゝ寄宿舍に至る 薄暮白石、比企來る

七月四日 晴 井上氏英語飜譯及 paraphrase の試驗あり

七月五日 晴 物理學の試驗あり 午後平野、山座來る 夜山座及貞吉と寄席に至る 只野の書あり 曰く明日を以て發途歸省すと

七月六日 雨 和文の試驗あり 立花、喜多村、稻垣三子來る 福原に英語、獨乙語の字引を貸す 家信を得たり

七月七日 晴 朝家を出でゝ牛込郵便局に至り爲替を受取り學寮に至る 二階に寢て修身書を讀む 五時頃歸宅す 暫ありて伯父君歸着せらる 加藤輔之、山下清一を以て余がリヴイングストーン紀行を借らん事を乞ふ 因て之を貸す 家に來す

七月八日 晴　此日漢文書學及倫理學の試驗あり　學年試業是に於て全く終る　山座、和達、近藤、馬淵來る

七月九日 晴　夜平野來る　午後家を出でゝ勸工場に赴く　歸途近藤、平岡に逢ふ　因て近藤の宅に至る　行李を借りて歸る

七月十日 晴　山内、山田來る　午後新富座の劇場に赴き十時頃歸宅す　此不在中に山座、馬淵來りしとぞ

七月十一日 晴　朝立花來る　共に中川小十郎を訪ひ又久米に赴く　それより岩田を訪ふ　不在なり　因て車に乘じて歸宅す　此日又喜多村を訪ふ

七月十二日 晴　五時發足上野停車場に至る　佐野、中川、山田の諸子來り送る　中川氏よりいらつめ三冊を受取る　黑磯に午餐し四時頃白河に着し泊す　此日須賀川迄至る積なりしかど路程の思の外に多かりしと且太しく泥濘なるとに依り白河にて平野氏を待受くる事となせり　夜大に雨ふる

七月十三日 陰晴不常　午後は大方晴る　道路の泥濘なる事甚し　車行大に遲る　郡山に午餐し福島に泊す

七月十四日 晴　五時福島を發し一時頃大河原に着午餐を喫す　夜六時頃家に歸る　立花、中川に柬す　夜九時頃になりて平野氏着せり

七月十五日 雨　貞吉と松平知事の宅に至る　西山に柬す

七月十六日 晴　只野、稻垣及松平來る　吉谷氏の細君來り枇杷を贈らる　馬淵に柬す

七月十七日 午前晴　午後雨　貞吉と雨宮に至り又只野を訪ふ　只野の宅にて午餐の饗に與かる　又倶に永井

徳壽を訪ふ　近藤、福原、喜多村に柬す
七月十八日　雨　午後晴　薄暮家を出でゝ和達に至る　つね子にいらつめ第一號を贈る　和達より日光よりの手紙を得たり
七月十九日　晴　永井徳壽の宅に至り獨乙語を習ふ　山座に信す　午後松平、吉谷來訪す　吉谷より葡萄酒一本を贈らる　夜トランプ等をなし十時に至る
七月二十日　晴　松平、稻垣來る　共に歩して榴岡に遊ぶ　午後雨宮正來り小宴あり
七月二十一日　晴　朝只野來る　貞吉、松平と向山に遊ぶ　歸途公園を過ぎて歸る　喜多村、近藤の信を得たり
七月二十二日　晴　雨宮より全國の寫眞を借り來る　福原の柬を領す
七月二十三日　晴　平野、白濱、伊藤、太田、不破、香村等に柬す　內藤運平來訪
七月二十四日　晴　午後貞吉と共に國分町に歩し散髮をなす　歸れば和達、吉谷在り　共にトランプ等をなし夜十一時に至る
七月二十五日　晴
七月二十六日　晴　午後二時家を出で車を僦し和達を訪ひ共に鹽釜に赴く　家尊、阿孃、祖母、幼妹亦た共にす　四時鹽釜に着し勝畫樓に宿す　涼風滿座意氣爽快

七月二十七日　晴　扁舟一隻を艤して松灣に棹し代ケ崎に至り鯛の生洲を一覧し其れより松島に遊び午餐し瑞巖寺及び觀瀾亭に至り又舟に乘り籬島邊にて釣をなし晩八時頃歸着す

七月二十八日　晴　朝八時頃神社に詣り寶物を一覧　已にして社務所に於て饗應に與かり正午辭し還り少憩切符を買て石巻に赴く　六時頃同港に着　阿部新に投ず　食後散歩す　月明涼氣多し

七月二十九日　晴　貞吉子は一ノ關に向て發し余及和達子は鹽釜に歸る　十一時着　直に社務所に至り家尊に面し又た勝畫樓に至る　同樓にて午餐ひる寢をなす　五時頃家尊至る　因て復た共に社務所に至り晩餐を喫し人車に乘じて歸仙す　時に八時頃なり　歸れば立花、平野、大幸よりの書信あり　試驗點平均八十四點ばかりを得たり

七月三十日　晴　午後水野金六來る　共に和達を訪ふ

七月三十一日　晴　午後貞吉歸仙す

八月一日　晴　貞吉と家を出でゝ和達を訪はんと欲し二番町に至る　途に之と逢ふ　因て共に余が家に至る　只野も與にす　夕六時頃より松平知事の招請に與かり挹翠館に至る　來客二十餘名あり松平知事、夫人、令孃、和達令孃、小笠原夫婦、牧野夫婦、松平正道兄妹、水野夫妻、小笠原令孃、宇都宮老人夫婦及子息貫一氏、土岐令孃、和達陽太郎氏、但木氏、貞吉氏なり　水野氏は頭痛ありしを以て出席せず　宴終りて若圓の講釋あり　十時半頃歸宅す

八月二日 曇 立花に束す
八月三日 晴 晩雨ふる 午前戸澤、只野等來る 只野午餐を喫して晩方去る 已にして吉谷來る 此日和達の招請に與かり挹翠館に至る 歸途和達の宅に至り歌カルタ、トランプ等を弄し墨附などなす 十時半歸宅
八月四日 晴 午後岡元輔來訪す 平野に返信す 午前松平、稻垣來る
八月五日 雨 此日貞吉東京に向て發す 送て名取川橋に至る 午後大風雨夜に至て已まず 淺井の書あり
八月六日 風雨 昨夜より未だ已まず
八月七日 晴 朝吉谷來る 共に和達を訪ふ トランプ等を弄し十二時にいたる 午餐を饗せらる 午後內田、吉野等を伴ひて二軒茶屋に遊ぶ 此日琴音樂の會ありしが爲に同樓殊の外雜閙して居るべき所なし 下の一室を借りて居るに上にてどたばたやる音やかまし 併し仕方なきにより或はひる寢し或は圍碁し或はトランプす 暮歸る 席上賦一律

綠田十里望悠々　浴羅風冷氣似秋　木下晩煙霾暮鳥　城原斜日認歸牛　一樽詩酒閑人樂　數局圍碁君子遊
咄々痴漢彼何者　弄來絲竹噪高樓

八月八日 晴 只野と永井に赴き獨語を習ふ 歸途永野を訪ふ 稻垣の書至る 夜志津と共に三番町に赴く
八月九日 晴 風あり左程あつからず 朝只野と共に東京庵にいたる 此より先き永井の宅を訪ひ獨語を習ふ 共に戸澤を訪ふ 門馬、遠藤等亦至る 四時頃辭し去る 歸宅すれば和達の書あり 留守に熊谷の友人河谷と云

ふ者を伴うて來れりとぞ　山本、平岡の書あり
八月十日　晴　和達來訪し午餐を喫して去る　晩五時頃薗田氏着仙せり　因て晩餐後與に和達を訪ひドミノなどなし十時頃歸宅す　比企、正木の信あり
八月十一日　晴　和達、只野來りトランプをなす　晩餐後薗田とムーア氏ローンテニス場に至る　和達在り與に難波正氏を訪ふ　九時頃歸宅す　平野の書いたる　おまち來る
八月十二日　晴　永井に赴く　夜薗田と共に近衛を散歩し氷店に入る　小笠原老人の數多の娘子を携へて至るに逢ふ　不破より來信
八月十三日　晴　朝五時頃薗田金華山に向て發す　夜和達來訪　貞吉の信あり　太田の信あり
八月十四日　晴　午後和達を訪ふ　吉谷在り與に三番町に赴き晩餐を喫し夜一番町邊を散歩す　朝永井に赴く
八月十五日　晴　書を曝す　午後驟雨來る　貞吉の信あり　直に之に復す
八月十六日　晴　朝和達を訪ひ與に內藤に至らんとす　途に內藤の老母に逢ひ本日は皆々不在なりとの事に付之をやめて永井を訪ふ　談じて十一時頃に至り辭し還る　午後薗田歸仙す　夜與に近衛を散歩す
八月十七日　晴　和達前後二回來る　只野に來す
八月十八日　晴　午後驟雨來る　午後淺井と和達を訪ふ　下婢誤つて不在と稱す　因て秋保を訪ふ　途大雷雨に逢ふ　歸途又和達に寄る　明朝出發の事を談ず　福原の信を得たり

八月十九日　晴　淺井と和達を訪ひ共に停車場に至り七時發車　白石に至り日蝕を觀んと欲し一旅店に入り少憩　二時頃に至りて街道並木松の傍に在りて觀る　四時頃に皆缺了りたれば歸途に就く　直に車を僦して大河原に向ふ　晩六時頃着　山元を訪ふ　生憎不在にて細君一人あり　一泊せよと勸めたれど辭して高山に投ず

八月二十日　晴　朝車を僦して岩沼を經仙臺に歸る　十一時なり　午後和達、淺井等着仙　和達を訪ひ共に對橋樓に赴く　親睦會日を誤りしが爲なり

八月二十一日　晴　朝相原、松平、稻垣來る　午後淺井と和達を訪ふ　已にして余と和達とは對橋樓に赴き親睦會に出席す　三十有餘名會せり　十文字區長、秋山校長、松本校長等亦來會せらる　新月愛宕山頭に上りて廣瀨の急湍金蛇を掣す　壯絕快絕　夜十時頃歸宅す

八月二十二日　晴　午後淺井と向山に赴き歸途相原を訪ひ薄暮歸る　和達、吉谷至りトランプを弄す　不在中秋山校長來訪せらる

八月二十三日　晴　午後和達を訪ひ共に只野に至る　只野は明後日を以て發仙上京すればなり　酒を馳走になり歸る　此朝只野來り書物を返す　國分町に赴き又松平に赴く　秋山、松本に赴く　立花、福原に來す

八月二十四日　晴　雷雨來る　夜阿母、二妹等と近街を歩す　此夜七夕に當り家々燈を點ず　美觀無双　十時頃歸る　此行家犬隨ふ　榴岡にて之を失す（榴岡ではない芭蕉辻）中川に來す

八月二十五日　曇　午後放晴　朝和達來る　共に相原を訪ふ　其途にて松平の來るに逢ふ　本鄉の番地を報じ

越せしなり　夜散歩す

八月二十六日　晴　午後迷犬の所在を易に問ふ　和達より本日難波氏の饗宴明日に延びたる旨の報あり　仍て之を相原に報ず　薄暮和達來る　直に去る　夜半雨來る

八月二十七日　雨　晩晴る　六時和達來る　薗田を伴ない共に挹翠館にいたる　難波氏の宴に赴くなり　客は上遠野、門馬、遠藤、秋保、相原等なりき　宴終りて後ち種々談話のすゑ歸宅す　歸途寺小路を歩す　觀音の緣日なればなり

八月二十八日　朝薗田東京に向て發程す　午前十時頃吉谷來る　午餐を喫し四時頃去る　雨頻に降り寒さ堪へがたし　秋氣頓に乾坤を襲ふを覺ゆ　貞吉の信あり　いらつめ着す

八月二十九日　晴曇不一　朝和達を訪ふ　いらつめ第二冊を贈り併せて一二の二冊を知事の令孃に贈らん事を托す　十一時頃歸宅す　薗田の信あり

八月三十日　晴　和達來談　踵で秋保も亦來る　十一時半頃去る

八月三十一日　晴　和達を訪ひ共に內藤に赴く　運平子不在　因て釣魚などして遊ぶ　十一時頃歸宅す　此日和達へ大八洲學會雜誌數冊を持ち行く　又永井、水野による　水野よりかつて貸せし書物を受取る　相原、松平に束して明日午後より來訪せん事を求む　晩薗田の信あり　直に復す　此夜月色玲瓏　緣端に賞觀して殆んどぬるを忘れんとす

九月一日　晴　午後和達、相原、松平、稻垣、吉谷等來り小宴をなし又トランプ等を弄し夜十時頃去る　衆と明月に步し十一時歸宅す　斯波に束す

九月二日　晴　頗る熱し　午後山元着仙　和達來り訪ふ　夜散步せんとして門を出づ　會〻伯父の來書にあふ因て直に針久に赴き面會す　十時歸宅　此夜陰暦十五夜盂蘭盆なるを以て街市頗る賑し　鈴蟲を購うて軒頭におく

九月三日　晴　午後和達を訪ふ　又雨宮に赴き告別す　晚伯父、雨宮、山元等來り宴あり

九月四日　晴　和達來る　共に松平、小笠原、秋山、松本、難波等に告別す　暮吉谷來る　夜雨宮に赴き共に東一番町西洋料理店に上り飮宴縱談　夜十一時頃歸寓

九月五日　晴　相原、和達、遠藤、鹿野、村上、伊藤、秋保、岩重等と馬車に搭じて白石に午餐し午後三時頃福島に着泊す

九月六日　晴　曉五時馬車にて福島を發し郡山に着す　一時頃より停車場に赴き午後の汽車に乘ず　同行鹿野赤羽根にて小便を垂る　爲に中途より下ろさる　氣の毒なり

九月七日　晴　暮薗田來訪す　家に信す

九月八日　晴　朝和達來る　暮散步す　山田を訪ふ　板倉に逢ふ　共に新井源六に至る　紐鏡を購ふ　又大和物語を購ふ

九月九日　雨　夜貞吉と寄席に遊ぶ

九月十日　晴　朝貞吉と能勢に至り尋で加藤を訪ふ　不在なり　因て歸宅す　暮馬淵來る　夜荒川、前田來る

九月十一日　晴　暮より貞吉と共に神田に赴き狹衣忍草を購ひ近藤を訪ふ　福原、香村、稻波亦來る　共に緣日に步し島金に上る

九月十二日　晴　始めて學校に赴く　午後貞吉と神田に赴く　詞の八千種を購ふ　夜車に乘じて上野停車場にいたる　伯父の歸京を迎ふるなり

九月十三日　雨

九月十四日　雨　午後曇

九月十五日　晴　學生雜誌三十一號を受取る　夜平野來訪す

九月十六日　晴　風あり　此朝甚だ寒し　月謝を納む　學生雜誌第三十二號を受取る

九月十七日　晴　貞吉と寄席に赴く　伯母あり　財布金四十錢在中を落す

九月十八日　雨　山田、近藤等來る　貞吉と共に島金に至る　伯父より金一圓を貰ふ

九月十九日　晴

九月二十日　晴　此日より佃氏每日來る　伯父に英學を敎ふる爲なり

九月二十一日　晴

九月二十二日 晴 夜平野猷太郎來り十時頃去る

九月二十三日 晴 午後立花、只野來る 此日前農商務大臣谷子及び板垣氏の上書をよむ 夜馬淵來訪す

九月二十四日 晴 午後アトラスを買はんと欲して神田に赴く 歸途近藤による 夜平野來る 只野より學生雜誌一號より二十九號までを貰ふ

九月二十五日 晴 椅子を買はんが爲に神田に赴く 午後和達陽太郎來訪す

九月二十六日 晴 歸宅すれば家より電報ありて祖父樣病死の旨報じ越せり 驚愕の外なし 直に狀を發す 此夜萬感胸に集まり眠る能はず 夜山田來る

九月二十七日 晴 學校にいでず 和達來る 淺井の紀行を評す

九月二十八日 晴 家信あり

九月二十九日 晴 此日軍歌の授業あり

九月三十日 晴

十月一日 雨

十月二日 雨 貞吉と山田を訪ひ午後福井青年會に臨まんとす 會場分らず 因て稻垣を訪ふ 蘇批孟子を贈らる 家信あり

十月三日 雨

十月四日 雨 福島氏休業

十月五日 雨 酒井氏、福島氏休業

十月六日 雨

日記（明治三十三年）

一月一日　曇　七時家を出で師範學校祝賀式に臨む　尋で斯波、外山、能勢、松平、荒川、潮田、小林、狩野、井上、嘉納、高津、關根、竹村等を巡賀し夜九時歸宅す　留守中親戚知友來賀者多し　賀狀數十通來る　國文學史十講數十部を先輩知友に頒布す

元旦口占

家々旭幟映朝陽　雨霽滿城草木光　富嶽窓含千古雪　寒梅瓶挿一枝香　國文十講新鐫梓　兒女六齡初上黌　偏覺升平天澤遍　韶風吹入讀書堂

一月二日　曇　斯波伯父來賀　ともに一盞を擧ぐ　十時家をいで三上、元良、落合、上田、多喜等を巡賀し午富山房にいたる　平出氏在り　遠藤氏と杉浦を訪ふ　不在　遠藤氏の寓に飲む　ついで開花樓に赴き富山房の賀宴に臨む　來會者十數名　來賀者昨日の如し　賀狀百餘通來る

一月三日　曇　林並木氏來る　遠藤國次郎氏同斷　遠藤氏と岡倉氏宅にいたり福井の蟹を馳走せらる　午後三時より岡倉氏と若溪會の新年宴會に臨む　賀狀數十通來る

一月四日　晴　午家をいで藤代、島田、中島等を巡賀し冨山房に立寄り金清樓にいたる　本日冨山房坂本以下十數名を同樓に招請したればなり　上田、岡倉二氏亦來會　夜十時散會の後隣家藪蕎麥にて蕎麥を喫し去る　内村兄弟來る　賀狀五十餘通來る

一月五日　晴　午前岡倉氏より廻狀あり　午後かるた會を催すに付き來るべしといふ　二時同氏宅にゆく　高津、關根、和田、諸友已に在り　萩野氏後れていたる　かるた數番の後種々馳走に逢ひ雜話歡を盡して十時歸宅　賀狀三十通來る

一月六日　晴　朝織田、畑、黑川、今立等を巡賀し午坂本を訪ふ　國文學史十講十部を携へ歸る　能勢老人來賀　大野洒竹亦來る　潮田氏來り羽織地をおくらる　賀狀二十餘通來る　晩景より學士會内紀元會に臨む　立花政樹氏東上の爲めに開くところなり　藤代、藤井、狩野、小川、菅五友の外立花氏と余とを併せて七名なり

一月七日　雪　午土井氏來り午後仙臺に出立の由いふ　二時岡倉、和田二氏來談　小酌の後上田氏を訪ひかるた數番を弄す　土井氏の出立を見送らんと欲して果さず

一月八日　晴　大學始業につき出席　事務室より新年宴會酒饌料を受取る　十一時より高等師範學校にて入學式あり　式濟みてのち岡倉氏とともに越智勝に牛肉を喫し杉浦氏を訪ひ德江の事を談ず　又畠山氏を訪ひ十講一部を贈る　不在中德江來訪の由

一月九日　快晴　午前冨山房にゆき印税の紙八百枚を渡す　理科讀本訂正の分も渡す　併せて十講の廣告を催

促す　夜學士會委員會に出席　十時半歸宅

一月十日　雪　後雨となる　本年はじめての教授會あり　上田氏に逢ひともに高津氏を訪ふ約束をなし同君宅にいたる　不在にて引かへす　午前富山房より鴻池銀行預金通帳を受取る

一月十一日　晴　路あし　午後三時岡倉來訪　ともに學士會なる親睦會にのぞむ　晩餐の後かるた十數番を弄し十時歸宅

一月十二日　晴　午後上野紀士來る　徒然草諸抄大成一冊を貸す　この日富山房より金十圓受取

英照皇太后三周年御祭

一月十三日　晴　學校の歸途本田、岡倉と牛肉を喫して別る　新保寅次來談　十講一冊をおくる　この日高等師範學校圖書館へ十講一部寄附す　午後四時とし子をつれて石原を訪ひ晩食の馳走になりて歸る　立花銑三郎氏母堂死去の通知あり

一月十四日　快晴　終日在寓　午前金井來り國語答案訂正の事を乞ふ　古郡禮に來り最中一重をおくる　午後斯波伯母、同安子年始に來る　夜藤井宣正氏中學校教員の件にて來談　平野は年始に來り夜九時歸る

一月十五日　晴　風あり　かう子年始禮として斯波、能勢、石原、荒川、松平等に赴く　午後飯田町より汽車に搭じて青山にいたり立花母の葬儀に會す　汽車中にて杉浦、大村等に逢ふ　夜今立裕、潮田方藏來訪　小酌

一月十六日　晴　午前富山房にゆき午餐の馳走になる　夜渡邊閑、井上仁吉氏來訪

一月十七日　晴　かう子年禮のため油比、多喜等にいたる　夜飯島廣三郎來る

一月十八日　晴　夜織田得能來訪　一酌す　淺倉屋より書籍數部を購ふ

一月十九日　晴　歸校後上田氏の病を訪ひ又冨山房にいたる　今泉に逢ふ　夜内田鐵三郞、山本駒藏來る　佐村八郎來り國書解題八冊をおくる　學校より大學一覽一部を受領す

一月二十日　晴　師範の歸途岡倉、本田二氏と牛肉を越智勝に喫す

一月二十一日　雪　飛雪紛々終日やまず　午後瀨田氏來訪　岡崎遠光亦到る　下石政之進尋で來る

一月二十二日　晴　午前高等師範學校にゆき吉田を訪ひ女子師範にゆき關根に逢ひ師範學校學科課程の事打合せ　午後一時より高等師範にて第一回の會議を開く　來週金曜日迄に吉田氏草案を立つる約束にて散ず　不在中桐生來訪の由にて昨夢紀事等の書籍數部を返却し來る　竹村氏病氣見舞のためつぐみ少々贈る　夜に入り關如來來る　近傍狸の話にてさわがし　道路泥濘甚し

一月二十四日　晴　今夜上野紀士來訪

一月二十五日　晴　今夜帝國文學の原稿を認めて夜二時に至る　寒甚しきを以て正宗一瓶を傾け盡す

一月二十六日　晴　烈風寒威甚し　午後二時上田氏を訪ふ　高楠亦在り　留學の事を談じて晩景歸宅す

一月二十七日　晴　夜坂本の手紙あり　潮田氏の件に關す　よりて直に之に赴き十時半歸宅　今夜今泉氏宅にかるた會の催あり　招待ありたれども差支のため行かず　午後醫科大學展覽會に付伊澤校長と同道同所に赴き四

時歸宅　歸宅後間もなく杉浦氏の來訪に逢ふ　杉浦氏猫一匹を贈らる　家人忽ち之を逸す

一月二十八日　晴　夜雪降る　積む事數寸　朝井上學長を小石川の宅に訪ふ　十時向島にいたる　谷村、山口、吉川三氏と外史會を催さんためなり　中の植半にて午餐を喫す　食後向島を散策し梅屋敷に遊び再び植半にいたり晩食　十時歸宅　この日から子麹町方面へ年始にゆく　朝佐村、村上二人來訪

一月二十九日　晴　路惡し　午後一時より關根氏宅に會し檢定試驗の相談をなす　夜潮田來訪　不逢

一月三十日　曇　朝來寒氣甚し　夕方岡倉、萩野二氏來訪　鳥叉に赴く　歸路二氏立寄り快談　十一時頃歸宅

一月三十一日　晴　夜織田、今立、潮田三氏來る　上野紀士亦來る　今日文科大學の方にて留學生候補者に選定せらる

二月一日　晴　午後富山房にゆく　坂本不在　五時頃斯波に赴く　祖母三回忌法事のため也　竹村來訪　不逢

二月二日　曇　夜雨　風邪の氣味にて學校を缺勤す　夜關如來、飯島廣三郎來る

二月三日　雨　學校の歸途岡倉と越智勝にて牛肉を喫し車を列ねて上田氏を訪ふ　不在　夜富山房にゆく　坂本居らず　吉川を訪うて谷村の事を談ず　早朝立田、酒井來る

二月四日　曇　八時國語傳習所にゆき講義をなすこと二時間　國語漢文會に立寄り芝能樂堂にいたる　松風、須磨源氏、猩々等數番を見物　歸途壺屋に立寄り晩食を喫してかへる　同行者は國文科三年生なり

二月五日　曇　夜谷村、吉川、今立、佐村來る　谷村、吉川の緣談やゝまとまる

二月六日　晴　風あり　寒甚し　フロレンツ午餐の約あり小石川原町なる同氏の寓を訪ふ　英文學史一册を借り得てかへる　晩景關如來、島忠太郎を拉して來る　島に添書を遣して三浦に至らしむ　萩野に狐の草子を返却す

二月七日　快晴　教授會にて帝國大學第五番目の留學生候補者に選定せられたる旨の報告あり　本日師範學校學科課程調査會を開く筈にて吉田氏來訪　關根氏遂に來らず　使を以て問へば病氣等の差支にて不參といふ　吉田氏晩餐を喫して去る　留守中宮崎力次郎來る　竹村同斷　竹村に歌學全書二册を返却す

二月八日　晴　歸途竹村に立寄る　不在　關根氏に立寄り師範學校の事を談じて去る　夜友田宜剛來訪

二月九日　晴　午後赤堀、保科二氏來訪　保科氏晩餐を喫して去る　夜上田氏を訪ふ　岡倉氏在り　用談十一時に及びて辭しかへる　朝竹內楠三氏來談

二月十日　晴　午岡倉、本多と越智勝に牛肉を喫す　午後國漢文會あり上田氏の演說あり　散會後上田、畠山二氏と神田川に鰻を喫ひ歸途冨山房に立寄り十講十部を取りてかへる

二月十一日　快晴　終日在寓　來客多し

佐村八郎、東敬治、村上治郎、桑原隲藏、石橋尙賓、金井保三、桐生政次、吉川孝秀、谷村一佐、石原健三、松島剛、吉田六之助、篠野道明、關巖次郎、瀨田方藏、只野重次郎

例によりて酒瓶一本、多賀羅亭の洋食一折に紀元節を祝す

この日東宮殿下立妃の御發表あり

二月十二日　晴　冨山房にゆき理科讀本一册を返却す　午後山內智道死去の報に接し麻布なる同氏寓にいたり香奠一圓をおくる　谷村を築地に訪ふ　吉川氏尋で到る　婚姻見合のためなり

二月十八日　晴　能勢曾祖母の十七年忌にて能勢に呼ばる

二月十九日　晴　夕方大久保介壽來訪　大久保氏辭し去りて後斯波にいたり利根川の鯉及福井の蟹を馳走せらる

二月二十日　晴　檢定試驗用にて午後萩野を訪ふ　歸宅後梅川樓に赴く　上田氏の招請なり　歸途織田氏を訪ひ十一時辭し歸る

二月二十一日　晴　錦町學士會事務所にて檢定の相談會を開く　大學にて賀表起草委員第一會あり　檢定相談大學より皇太子殿下御慶事賀表起草委員を命ぜらる

二月二十二日　晴　師範學校課程細目調査用のため吉田彌平、關根正直二氏來訪　夜十一時迄相談をつゞく終りて常盤屋に牛肉を喫す

二月二十三日　晴　檢定試驗のため終日文部省にあり　歸途多賀羅亭に洋食を喫す　上田氏も同行す

二月二十四日　晴　檢定試驗のため終日文部省に在る事昨日の如し　歸途神田川に立寄る　右畢て富士見町なる八田氏の寓を訪ふ　夜十一時歸宅

二月二十五日 晴 終日在寓 來客二十人の多きに及ぶ
村上治郎、佐村八郎、木村儀市、山本駒藏、石橋尙賓、瀧澤又市、高津鍬三郎、岡倉由三郎、桑原隲藏、石川榮司、赤堀又次郎、只野成重、中村熊男、斯波伯父、同晟、山井景建、石場健夫、友田宜剛

二月二十六日 晴 潮田氏學校に訪はる ともに牛肉を上野に喫し三橋に別れ吉田彌平氏の宅にいたる 師範學校課程の相談のためなり

二月二十七日 晴 午後岡倉を訪ひともに萩野を訪ひ三人相拉いて鳥又にいたり鳥を喫す 二氏歸途余が寓に立寄り放談して去る

二月二十八日 晴 午前關根を訪ひ師範學校細目を相談し正午岡倉と文部省にゆき細目を差出す 上田氏を専門學務局に訪ひ歸途冨山房に立寄る 上田氏亦いたりともに神田川にいたり鰻を食ふ

三月一日 晴 本日大學記念式なり 式後萩野と歩して師範校にいたり臨時授業をなす 萩野より溫知叢書二册を借る 夜から子と歩して神田にいたり冨山房に立寄り金子六十圓を渡す

三月二日 晴 夜竹村氏を訪ひ又今立氏を訪ふ 友田と作文書の相談をなさんが爲めなり 甯康太郎福島よりいたる

三月三日 晴 歸校後光融館にいたり讀賣新聞原稿を認む 午後織田得能氏を訪ひ蕎麥の馳走になる 晷食す椀を傾く 歸途今立氏と歩して家にいたる

三月四日　曇　朝國語傳習所にゆき講釋をなす　午後友田宜剛、上野紀士、下石政之進、石原健三來訪　石原とともに上田を訪ふ　岡崎遠光適ゝ來る　ともに神田川に飮む　帘康太郎出立す　佐村八郞、東敬治來訪

三月五日　晴　朝とし子を伴ひて淺草に遊び午後歸宅

三月六日　晴　大學にいたりついで師範に赴き兼官辭任し度由校長に申し出づ　それより岡倉氏を訪ふ

三月七日　晴　富山房にいたる　大學晝餐會の時外山博士危篤の由を聞く

三月八日　晴　外山博士訃音いたる

三月九日　晴　夜學士會委員會にのぞみ種々議定の後十時散會　かう子法事のため里にゆく　朝外山家にいたり弔辭をのぶ

三月十日　晴

三月十一日　晴　外山博士の祭文を草す　午竹村氏を訪ひ相談をし午餐の馳走になる　一時車を驅つて牛込にいたれば已に出棺す　よりて其後に徒歩し齋場にいたる　三時式全く終る　歸途岡倉、萩野、藤岡三氏來談　夜に入りて去る

三月十二日　晴　午後萩野氏を訪ふ　賀表の相談をなさんため也

三月十三日　晴　富山房にいたる

三月十四日　晴　夜雨　夜竹村氏來談　岡田の文典を批評せんといふ

三月十五日　晴　この日洋食にて杉浦、織田、保科三氏を饗す
三月十六日　晴
三月十七日　雨　冨山房にいたる
三月十八日　雨　國語傳習所にゆき講義二時間　上田氏を訪ひ閑談少頃にして去り岡倉氏を訪ふ　不在　竹村氏を訪ふ　岡田氏の文典論盛なり　この日かう子、廣田、高山二女を饗す
三月十九日　晴　夜織田、今立來談　午前鹽湯にいたり讀本の相談を受く　歸途岡倉を訪ふ　不在　萩野を訪ふ
三月二十日　晴　午後岡倉を訪ふ　萩野氏亦いたる　晩餐の馳走になりて十時頃歸宅す
三月二十一日　晴　總長を私邸に訪ふ　不在　今立氏を訪ひ少頃辭し去る　夜岡倉、上田二氏來談　洋食を饗す　上田氏繪本合を携へ去る
三月二十二日　晴　文學史講義萬葉論終る　よりて文學史は今學期之を以て結講とす　得能のため京都に發電す　午後飯田町英語會にいたり原稿料を受取り冨山房に赴く　又竹村氏を訪ふ
三月二十三日　晴　午後保科氏余が寓に來り相拉いて學士會なる文科大學親睦會にのぞむ　會者二十五名　姉崎氏送別會を兼ねたる會なり　鹽谷氏會場にて卒倒　暫時にして快癒せり
三月二十四日　晴　夜雨　午後帝國文學會にのぞむ　歸途岡倉、萩野、竹村、關と高津氏の寓にいたり閑話刻

を移して歸寓

三月二十五日 晴 午後岡倉氏、萩野氏來談 ともに上野精養軒なる茗溪會にのぞむ 歸途本田氏と併せて四人長酡亭に晩餐を喫す

三月二十六日 午後萩野氏を訪ひ賀表の相談をなす

三月二十七日 小雨 冨山房にいたり午餐後松井氏を訪ふ 關根氏在り 洋食の馳走になりてかへる 六時より梅川樓にいたる 高楠氏の馳走なり 上田氏亦在り

三月二十八日 晴 後雨 會議のため高等師範學校にいたる 薄暮散會 本田氏の馳走にて岡倉、萩野、本田三氏と神田川に鰻を食ふ

三月二十九日 晴 午前十時右尙館なる送別會にのぞみ歸途冨山房、松井氏、赤堀氏、竹村氏を訪ひ晩又高師内の國語研究會にのぞむ 藤岡氏在り 十時歸宅

三月三十日 晴 大學に赴き歸途女子師範學校卒業式に臨む 夜上田氏を訪ひ閑話數刻辭しかへる 重野博士に面會賀表を確定し大學に郵送す

三月三十一日 晴 高等師範卒業式に付九時より同校へ赴く 式十二時に終り撮影 二時歸宅 歸宅後杉浦鋼太郎來訪 夜遠藤、種村二氏來談 學校より依願免兼官の辭令を送付し來る

四月一日 曇 午雨ふる 午前永井直好、竹村鍛來る 竹村喫飯して去る 午後桑原來談 四時頃織田氏を訪

ふ　不在　歩してかへる　東臺花唇尙固し

四月二日　晴　冨山房にいたり又赤堀氏を訪ふ　留守中岡倉氏來訪の由　夜上野氏來る

四月三日　晴　この日同志十一人と江の島に遊ぶ　八時新橋に集まり十時藤澤下車　小舟にて片瀨川を下り正午江の島に着　金龜樓に泊す　放談夜十時にいたりて寢す

四月四日　晴　八時江の島を出で藤澤にいたり十二時新橋着　多賀羅亭に午餐を喫し四時歸宅す　夜得能氏京都より來る　佐藤順次郎氏亦到る

四月五日　晴　竹村、斯波、佐藤、關、得能氏來る　關氏より額面一葉を貰ひ受く　得能氏來り泊す　午後竹村、得能二氏と眞砂町に洋食を喫し斯波を訪ひ十時辭しかへる　關根細君の訃音いたる

四月六日　晴　紅塵萬丈　岡倉氏來訪　蟹江氏亦得能を尋ねて來る　岡倉氏と同道文部省にいたり金を受取る師範學校學科課程の報酬金也　歸途上田敏氏に邂逅　多賀羅亭に洋食を喫して別る　關根に立寄り香奠一圓をおくり弔辭をのぶ　大學生數名來る　國文懇話會相談のためなり

四月七日　午後關根妻葬式に付染井墓地に會葬　四時半今立氏を訪ふ　織田、赤堀二氏亦在り　佛教辭典の相談あり晩餐の馳走になる　八時上田氏を訪ふ　高津、岡倉二氏已に在り　蕎麥の饗應あり

四月八日　晴　午後得能と竹村を訪ひうちつれて桐生を訪ふ　暫時にして其寓を辭し眞砂町に洋食を喫し關を訪ふ　不在

四月九日　晴　夜雨　夜から子、得能とともに寄席に遊ぶ　佐藤順次郎、桐生悠々來訪　得能と歩して岡倉氏を訪ふ　不在

四月十日　雨　得能氏と大學圖書館にいたる　又共に冨山房を訪ひ得能氏は井上學長を訪はんとて別れ余は直に歸宅す　朝友田宜剛來る　晩岡倉、萩野二氏來訪　ともに多賀羅亭に洋食を喫し歸途宇治の里に茶漬を喫す

四月十一日　雨　得能氏午後辭し去る　夜鳥居忱氏來談　この日大學教授會あり

四月十二日　雨　朝萩野氏を訪ふ　石橋氏、岡倉氏尋でいたる　午餐の馳走になり一睡して醒むれば四時半なり　丸山新町に林吾一氏を訪ふ　不在　一ツ橋教育會にいたり同氏に面會　能勢をおとづれます子入學の事を相談す　田樂の馳走になりて歸宅す

四月十三日　雨　細雨蕭々昨日の如し　學校にいづ　學生なほ多く出校せず　來週より授業の事を約して歸る　歸途冨山房にいたり十講再版の事を催促す　藤井健次郎氏結婚の披露狀到る

四月十四日　晴　九時向島にいたる　大學端艇會施行あればなり　平山信氏とともに入口掛をつとむ　歸途貞吉坊主を拉いて家にいたる　闕如來亦來る

四月十五日　晴　午富士見軒にいたる　藤井氏新婚披露會にのぞむなり　松村博士をはじめとして十餘人あり　歸途冨山房に立寄り讀本の金を得神田川にいたる　赤堀、岡倉、上田、和田、菊池亦至る　十時歸宅

四月十六日　晴　午後妻子を伴ひて上野に遊ぶ　この花園に晩餐を喫してかへる

四月十七日 晴　學校にゆき蒟蒻版のインキをかり來る　謠曲の分類表を作らんがためなり

四月十八日 晴　歸宅後大學より觀櫻會の招待狀をもち來る

四月十九日 曇　夜雨　この日文學倶樂部あり　一中節、河東節の演奏あるを以て聞きにゆく　至れば已に酣なり　大江山衣洗の段、源氏十二段を聽く　十時歸宅

四月二十日 晴　正午歸宅　入浴の後濱離宮なる觀櫻會にいたる　三時頃兩陛下臨御せらる　内外の貴賓頗る多し　御苑の八重櫻は今を眞盛と唉揃へり　四時頃賜宴　シャンパンの美酒に醉ひて歸る　歸途油比、富山房を歷訪す

四月二十一日 曇　午後學士會春季懇親會にいたる　講釋數番あり　天ぷらの立喰頗る甘し　學士會にゆく途中にて今立に逢ふ　不在中岡倉來訪の由

四月二十二日 雨　午前國語傳習所にゆき一時間の講釋をなす　落合氏と談じて十一時にいたる　午後岡倉、桑原、新村氏等來談　松島剛氏講義錄の事につきて來る　桑原氏を紹介す　四時より梅川樓の國文科親睦會にのぞむ　萩野氏地理歷史會にて亦同樓に在り　同伴して歸る

四月二十三日 晴　夜岡倉を訪ふ　不在　去つて萩野を訪ふ　岡倉亦座に在り　猿似富久呂五册を貰ひ歸る

四月二十四日 雨　正午赤堀氏と牛肉を喫し歸宅すれば高楠氏來談　それより富山房にいたる　上田氏在り　五時富山房を辭して高砂町福井樓なる松平氏送別會にのぞむ　歸途貞吉坊主、織田とともに中華亭に金ぷらを喫

し十時歸宅

四月二十五日　雨　この日井上學長不在にて教授會なし　夜菊池謙二郎氏のために紀元會開會　狩野、藤代以下十人會合す

四月二十六日　雨　夜今立、織田二氏來談　佛教辭典の相談あり

四月二十七日　雨　後晴　午後作文教範凡例を直し朱絃會に久保氏宅に會す　之よりさき岡倉氏を訪ふ

四月二十八日　晴　冨山房にいたる　十講再版の刷本を見る　午後鈴木を遣して岡倉氏より倭訓栞、古事類苑を借る　午後石原來り晩餐を喫して去る

四月二十九日　晴　朝斯波貞吉來る　午後萩野を訪ふ　不在　岡倉を訪ひ又久保氏にいたりて帝國文學の原稿を渡す　夜闕如來、平田禿木來訪

四月三十日　晴　朝萩野來訪　學校にゆきて遠足會の事を相談す　午後英語會に赴く　飯島不在なり　冨山房にいたり飯島に逢ふ　歸途桐生氏を訪ひ金を渡し又闕を訪ふ　謡本を見んがためなり

五月一日　晴　竹村學校に來訪す　ともに家にかへり午餐を倶にす　竹村伊豫かすり一反をおくる　石原臺灣に出發に付午後六時新橋に見送りそれより富士見軒にいたる　永井、瀬田、柴田氏等相會す　かう子も同行　十時歸宅

五月二日　晴　後曇　學校にて遠足會の相談あり　中島先生より英國小說史を借る　飯島來訪

五月三日 雨 朝學生を集めて明日大森行の相談をなす

五月四日 晴 七時家をいで新橋にいたり九時半發車大森に向ふ 學長以下學生百十餘人なり それより歩して羽田にいたり要館にて懇親會を開く 席上詩吟、唱歌等あり 三時歡を盡して同所を去り舟にて大森に歸る 海上輕風あり 愉快比なし 六時新橋に着 磯田、三宅、萩野三氏と富士見軒にいたる 高師職員余が同校を去りし爲惜別の會を開きたるなり 岡倉、萩野二氏と歩して歸宅

五月五日 晴 朝斯波を訪ひ大禮服を借り來る 又萬世橋村上にて禮服靴を購ふ 値八圓五十錢 冨山房にゆきて閑談 正午歸宅

五月六日 晴 寒し 朝志賀氏母徳江女來る 國語傳習所にゆき講義す 午後岡倉、三土、佐村來訪 晩上田氏を訪ふ 冨山房にゆく 坂本不在 歸途今立氏に立寄り十時歸宅

五月七日 曇 終日在寓

五月八日 晴 朝上田氏を訪ふ 午後赤堀氏を訪ひ少時にして共に松井氏の宅にいたる 萩野氏尋で至る 晩食の馳走になり好春目一册を得てかへる 不在中斯波來訪の由

五月九日 晴 學校會議例の如し 朝友田宜剛來り作文教範第二册をもち來る

五月十日 晴 夜月色玲瓏 九時二重橋外にいたり東宮殿下御還啓を拜す 大學生一同拜觀せしなり 十一時

御出門あり御馬車儀仗等前年憲法發布式の時の如し　歸路非常の人込に揉まれて歸宅す　午後四時宮城に拜賀す
五時二十分兩陛下兩殿下出御あり　尋で東溜間に於て立食の御宴を賜ふ　八時歸宅　記念品として折敷形の銀製
菓子器を賜ふ　今夜大學生一同球燈行列を行ふ　御宴に陪せしため時間の都合あしく行かず
五月十一日　晴　風あり　松下、本田兩氏來る　佐村八郎、桑原隲藏二氏同斷　岡倉、萩野兩氏來談　午餐を
喫して去る　學校は昨日と同樣臨時休業
五月十二日　晴　學校にゆき午後會の事を相談し斯波を訪ふ　午餐の馳走になり歸宅　午後國文談話會第一會
を開く　松井簡治氏の書籍數部をかりて學生に示す　關根、松本二氏會〻同所に來る　よりて杉、高津、和田、
坂本、松井、岡田、赤堀氏等一行十人牛肉を豐國に喫してかへる
五月十三日　雨　早朝上田を訪ひともに富山房にいたる　竹村氏亦いたる　夜中村春治論文をもち來る
五月十四日　晴　朝斯波貞吉來る　書籍を松井氏にかへす　夜友田宜剛來談　作文教範序文を認む　午後山根
勇藏臺灣より歸來れりとて尋ね來る　夕方木村義則來る　論文をもち來るなり
五月十五日　快晴　朝古郡幸介來る　今立裕氏に紹介す　夜佐村八郎來談　河合鏻三氏の許いたる
五月十六日　快晴　學校の歸途富山房にゆかんとして途に竹村に逢ふ　よりて其家にいたり麥酒の馳走になり
群書類從、國史大系をかりてかへる　本多淺次郎氏より自著の西洋歷史を贈り來る
五月十七日　晴　午後日下部生來る　國語會へ十講一部寄附す　織田より來信　明日かう子招待し度旨申來る

五月十八日 晴 かう子、とし子と織田氏の饗宴にゆく 歸校後日本童話の淵源を草す 夜二時半就寢 夜笹川臨風及高等師範學生櫻井時太郎來る

五月十九日 晴 朝富山房にゆき三士の事を相談す 又錦町に川島氏を訪ひ原稿を渡す 午後尙殘部を草し十時書畢る 讀賣社員横矢重道、福島中學敎員秋山角彌來る

五月二十日 晴 竹村來る 會の相談をなさんため學士會事務所にいたる 高楠、藤代、上田、保科、磯田等あり ローンテニスを爲せる最中なり 正午高楠、保科、竹村、藤代四人と豐國屋に牛肉を喫して歸宅す 午後福井久藏來談 四時頃去る

五月二十一日 晴 今日今立妻、織田妻、かう子に西洋料理を習はんとて來る 今立より作文敎範十部をおくり來る 午後岡倉を訪ふ 不在 萩野氏を訪ふ 兩氏に作文敎範各一册をおくる 大久保介壽來訪 逢はず 夜加藤博士敍爵祝賀會相談のため學士會臨時委員會あり 十時歸宅

五月二十二日 晴 學校にゆき廿五日無名會の端書を印刷し發送す 保科に作文敎範一册をおくる 大久保を關根屋に訪ひ歸途今立を女子師範に訪ふ 今朝古郡幸介來談

五月二十三日 晴 大久保の依賴により來月二日頃岐阜へ出張せられたき旨學長に依賴す 承諾を得たり

五月二十四日 午前雨 午後霽 夜今立來談 十一時半去る

五月二十五日 晴 朝學校に授業し午後二時富山房にゆく 又偕樂園なる無名會にのぞむ 會者十五人 上田

氏急用生じて西下を命ぜられたる由にて不參　會者今泉、松本、和田英、佐藤、黑川、高津、三上、岡倉、竹村、丸山、關根、松井、菊池、今井、余を倂せて十五名也　歸途車より落ちて負傷す

五月二十六日　晴　負傷のため就蓐　八木田氏にゆきて齒の治療を乞ひ午後坂田氏を請じて負傷の部分を治療して貰ふ　織田、古郡、三土、窪田、遠藤、沼波等來る

五月二十七日　晴　上野、佐藤、藤堂諸氏來る　夜負傷部疼痛甚しく終夜眠る能はず

五月二十八日　曇　朝八木田にいたり施術を乞ひ又大學醫院にゆき面部の負傷を治せんことを乞ふ　善く洗ひて繃帶を施す　疼痛拭ふが如し　坂本四方太より見舞狀を受く　石州濱田中村彈男より鯛乾物一枚送致

五月二十九日　雨　午後晴　貞吉坊主來り談話　午餐を喫して去る　午後大學にゆき治療を受く　大施術ありとて暫時待たされ淸水氏の室に在り　三時治療を受け繃帶を解く　大學中村恭平氏より加藤博士祝賀會の件に關し急使到る事二囘　井上、種村二氏より見舞を受く　和田氏より同見舞狀來る　竹村より覆盆子を贈り來る

五月三十日　雨　午前八木田にゆき大學にゆき治療を乞ふ　膏藥少許を得てかへる　午後竹村、坂本見舞として來る　おしづ亦至る　珍本全集をよむ

五月三十一日　雨　午晴　古郡、佐藤來る　關根亦來り覆盆子一籃を贈らる　午前中就蓐　珍本全集をよむ　夜友田、今立二人來談　母上より田鶴子同寫の寫眞一葉おくり來る

六月一日　晴　夕方雨　忽又晴　朝八木田氏にゆく　沼波生の俳諧調論をよむ　高等師範生徒日下部生外一名

來る

六月二日 晴 早朝沼波武夫來る 九時八木田氏にゆき前齒一本を拔去る 食事はじめて易し 午後古郡來る 夜菊池壽人、友田宜剛、桐生悠々等來訪

六月三日 晴 村上治郎、佐村八郎、上田代治、三上參次、萩野由之等數人前後見舞のため來訪 帘豐三郎は海軍水兵志願者に附添ひ來りし由にて夕方來訪 ビールを出し饗す 夜湯島火あり一戸燒失

六月四日 晴 鈴木を遣して學校より博物新篇譯解を借る 學校より檢定試驗委員報酬受取のため文部省に出頭すべき旨通知を受く 午後岡倉由三郎氏來る 古郡氏同斷 藤堂忠次郎氏亦至る 夜杉浦鋼太郎、山根勇藏、竹村鍛三氏來談 午前大學にゆき治療を乞ふ 大半治癒せりと聞く

六月五日 晴 鈴木を文部省に遣して檢定委員報酬五十圓を受取る 古郡來る 市村瓚次郎見舞のため來る 會〻寫眞器械を所持し來れるを以て余が書齋を撮影して去る 晩かう子買物のため神田にゆく 留守中井上氏夫妻來る

六月六日 雨 本日大學教授會にて學科課目改正の相談ありとの事に付意見書一通差出しおく 今日朱絃會開會の旨登張より申來れども行かず 古郡來る 三土に紹介す

六月七日 朝雨 午晴 古郡來る 午後日下部、高橋二人來談 藤井義秀論文をもち來る 渡邊龍聖來談 少しのぼせの氣味にて齒ぐきはる よりて按摩を呼びて療治せしむ 夜上田氏より內報あり留學生確定の旨報じ來

る

六月八日　晴　神戸家嚴へ留學生確定の件通知す　かう子、とし子をつれて上野にゆき寫眞を撮る　古郡又來る　午後岡倉由三郎、松永武雄、内田銀藏、山川信次郎來談　夜十時に至る迄大に大學高等學校の學制を論談す

六月九日　晴　長連恒論文を持して來る　佐藤範雄明日歸鄕の由にて暇乞に來る　午後村上治郎、古郡幸介等來る　菊池壽人、桐生政次、渡邊龍聖同斷　とし子熱あり大學小兒科病院にゆきて治療を乞はしむ

六月十日　晴　今日渡邊龍聖隣家に引越す　鈴木を手傳に遣す　渡邊閑、杉敏介、福井久藏來談　午後に至り吉田彌平、酒井眞、渡邊龍聖、松井簡治等來訪　仙臺土井林吉より鯛一尾おくり來る　萩野より蠶豆、するめ等を贈らる

六月十一日　雨　藥盡きたるを以て鈴木を遣して大學醫局より處方を得來らしむ　市村平論文をもち來る　岡田正美見舞に來る

六月十二日　晴　薄暮岡倉氏來訪　ともに上田氏を訪ひ夜十一時歸宅　月明晝の如し

六月十三日　晴　今日官報にて留學の件いよ／＼發表あり　午前坂本を訪ひ留學の事につき談じ午大學教授會にのぞむ　學科改正の相談等ありて四時にいたる　歸宅すれば赤堀、杉浦、今立等來訪　杉浦、今立晩餐を喫して去る　夜萩野、岡倉、登張、渡邊四氏來談　山本駒藏神奈川中學に赴任の由にて暇乞に來る　岩田僊太郎、岡田正美二氏より賀狀來る

六月十四日　晴　黒川眞道留學任命の件を賀せんとて來る　朝歯科醫にゆき入歯の調製を依賴す　それより斯波に至る　貞吉不在　伯父に面會留學の事を談じてかへる　大學生長、香村、能三人來訪　午後三土忠造來る　坂本四方太の妻夫の代理として禮に來る　薄暮貞吉來る　熊谷綱介亦久振にて來訪　二人に鰻めしを饗す　山根勇藏、桑原隲藏亦來る　今日學校より留學の辭令書を受く

六月十五日　晴　朝八木田にゆき散髮鋪にゆき歸途岡倉氏を訪ふ　午餐の馳走になり歸宅　那珂通世、坂本の娘、關根正直、友田宜剛、伊東元四郎等來訪　夜佐村八郎來る　漢書解題集成の事に付き談ず

六月十六日　曇　學校にゆき試驗す　歸途八木田氏にゆく　入歯出來たり　午後一時高等師範にゆき課外講義をなす　午後上田氏、岡倉氏來る　洋食を饗す　晩吉川孝秀、武島又次郎二氏來談　吉川氏澤の鶴酒券をもたらす　上田氏は八時頃歸宅　岡倉氏は十時歸る　池田生の論文を受取る　和田英松來訪　平野より賀狀來る

六月十七日　村上治郎、小池民次二氏來る　渡邊龍聖氏を訪ひ暫時談話　上田敏氏來訪につき歸宅　午後佐藤範雄、竹村鍛、松本愛重諸氏來る　共濟生命保險會社員安田壽哉氏亦到る　かう子はとし子をつれて四谷潮田に赴く　午後二時家を出で赤堀氏を訪ふ　晩餐の馳走になり歸途富山房に立寄る　平出氏在り久能の事につき相談す　家嚴より手紙あり　土井林吉、山本信吉の賀狀到る

六月十八日　晴　沼波武夫來る　終日在寓　沼波の俳諧調論を訂正す　午後斯波安子來る　山本駒藏平塚より來訪　煙草一函をもたらしおくる　晩友田宜剛來る　作文教範第二卷訂正終る

六月十九日　晴　午前フロレンツ氏を訪ふ　不在　豐國屋に牛肉を喫してかへる　午後フロレンツ氏來訪　支那人より得たるチョウ〳〵一瓶をおくる　山根勇藏、岩田僊太郎來る　午前佐藤範雄同斷　晩冨山房にいたり立田に逢ひ久能の事を談ず　平出氏の依賴によるなり　冨山房にいたるに先ちて井上學長の寓にいたる　井上圓了氏も同座　加藤博士敍爵祝文の事に付相談す

六月二十日　晴　朝冨山房にゆき久能の事を談じ正午學士會にゆく　學校敎授會なればなり　學士會にて藤代氏に面會九月八日出發の旨約束す　關巖次郞、眞水英夫二人來訪　夜渡邊氏を訪ひ岡倉氏をおとづる　不在　よりて萩野氏にいたる　麥酒の馳走になり十時歸寓　午前平出鏗二郞來談

六月二十一日　晴　加藤博士敍爵祝賀會申込人の名を取調べ祝文とともに中村氏におくる　午前今井彥三郞、午後赤堀又次郞氏來談　久能來る　夜藤井義秀等來る　渡邊龍聖來談　ともに上野邊を散步せんといふ　よりて不忍池畔を步し廣小路のビーアホールにいたり數杯を傾けて歸る　渡邊氏歸途余が寓に立寄る　文部省より留學旅費額の通達書を受く　田川君三郞、杉谷泰山の賀狀いたる　谷村より同斷

六月二十二日　晴　千秋季隆、加藤直久相踵いで來る　午後高山林次郞氏來談　九月洋行の事に付相談す　佐藤球氏加藤博士敍爵祝賀會の事に付來談　文部省より師範學校細目をおくり來る　夜佐村八郞來談　渡邊龍聖氏亦踵いで至る　渡邊氏に麥酒を饗す

六月二十三日　晴　午後一時植物園にいたる　加藤博士敍爵祝賀會也　石原に逢ひ歸途其家に立寄り臺灣の士

産數品を貰ひてかへる　岡倉氏を訪ひともに萩野氏宅にいたる　松井氏亦在り　放談十時にいたり辭しかへる
六月二十四日　晴　朝冨山房にゆく　石原亦到る　午餐の馳走になりてかへる　不在中磯田良來訪の由　山口三郎同斷　午後不忍池長酡亭に國文科一年生三年生余が爲めに送別會を開く　二年生は別に催ありて今夕來らず　歸途三年生九人余が寓に來る　蕎麥を饗す　又各人に十講一部をおくる　不在中竹村氏來訪の由
六月二十五日　雨　朝冨山房にゆき十講十部を受取り來る　佐々木正太郎來り麥酒一打をおくる　午後かう子等前田侯爵葬儀をみんとていでゆく　松下、藤井、岩城、木村來訪　ビール、桑酒を饗す　五時より三景亭の送別會にのぞむ　大學一年生中第一高等學校出身者藤代氏と余とを饗するなり　十一時半歸宅　山田子三郎より來東留學の事を賀し來る　午後山根勇藏來談
六月二十六日　晴　朝斯波を訪ひ午餐を喫し文部省にゆき留學の事を相談す　留學生心得及會計規則等を貰ひ來る　局長室にて上田氏に面會種々の事を相談　四時歸宅　不在中赤堀、佐村來訪の由　夕方關根來り吉田彌平踵いで到る　三人にて國語細目の事を相談す　織田得能、斯波貞吉も來る
六月二十七日　朝高山林次郎、武島又次郎二氏來談　冨山房にゆく　午大學教授會あり後任の事につきて學長の談あり　××氏免職の言渡を受け歸途余が寓に來る　一酌して同氏を慰む　夜一時去る
六月二十八日　晴　朝學校にゆき松永氏に逢はんと欲す　不在　師範學校にゆき岡倉氏に逢ふ　同氏と多賀羅亭にゆき午餐し歸宅　四時岡倉氏來訪　ともに神田川に赴く　和田氏亦至り××氏の事を相談す　明夜同道上田

氏を訪ふ事を約してわかる　萩野、松井二氏亦同處に在り相携へてかへる　此日學校より外國旅行免狀を受領す

六月二十九日　曇　朝學校へゆき松永に逢ひ××の事を談じ××氏を訪ふ　不在　直に歸宅す　午後四時坪井博士を訪ひ旅行準備に付相談　藤代氏も在り馳走になりてかへる　それより學士會委員會にのぞむ　加藤博士祝賀會の報告悉皆中村氏に渡す　夜上田氏を訪ふ　和田、岡倉氏已に在り　××氏の事に付相談

六月三十日　晴　學校にゆき點數を報告し一時半新橋にゆき一時四十分發車函山塔澤鈴木樓に泊す　會者十三人　例によりて笑語夜半に至る　無名會也

七月一日　曇　午後二時環翠樓を辭し六時新橋着　多賀羅亭に入り洋餐を喫して退散す　十時歸宅　一浴眠に就く　不在中書狀十數通到る

無名行

塔澤名山麓　無名萃群賢　盛宴互兩日　會費醵五圓　麒麟傾美酒　天狗喫香煙　按摩片眼凸　遊戲五目連
五目誰得意　萩野敵無前　佐球碁數局　直文歌幾篇　笑罵徹夜半　喧嗷不能眠　溪流鳴河鹿　山上聽杜鵑
電燈光煌曜　反射畠山巔　今泉股間物　委陀似老鱣　諸謔衝口發　岡倉急處穿　聲色學博士　關根喝采專
高津骨稜々　上田腹便々　松本如山賊　恨不熊皮纏　松井黑大工　眞是鑛夫然　簡治郎幹事　輔之有和田
茶代被返却　鹽辛不買還　歸路到寶亭　滿腹息在肩　野生無一藝　追隨喜奇緣　歡樂眞無比　嘻々樂堯天
不知隣邦患　警電日夜傳

七月二日　晴　友田宜剛早朝來訪　午後長酡亭なる高等師範國漢卒業生の送別會にのぞむ　歸途今立氏を訪ふ不在　富山房にゆく　上田氏あり　今夜今立氏來訪

七月三日　晴　古郡來る　竹村、斯波、桑原、八杉來る　桑原午餐を喫して去る　午後高等師範へゆき國語略史を講ず　歸途今立に立寄麥酒をのみ豐國屋に牛肉を喫し竹村氏を訪ふ　談じて十時にいたり歸宅

七月四日　曇　長、香村、高木三學生來談　吉丸の論文を新村氏に郵送す　師範に講ずる昨日の如し　午後四時植物園なる送別會にのぞむ　大學教授の發企にかゝる留學生送別宴なり　歸途岡倉氏に立寄る　萩野氏亦至り閑話十時に至りて歸宅す

七月五日　晴　朝大學の成績會議に出席　午後二時退散　萩野、上田、高楠、那珂氏等と豐國屋に牛肉を喫してかへる　午後四時頃より今立氏の招待により光融館にゆく　かう子、とし子を同道　夜九時歸宅

七月六日　晴　小雨　朝古郡、種村來る　古郡の招待によりかう子、とし子とともに明治座に觀劇す　不在中井上博士、佐村八郎等四五來訪

七月七日　晴　早朝井上學長を訪ふ　九時歸宅　巖谷漣山人來談　午後八波、尾上、山内三學生來る　高橋儀市同斷　午後三時かう子と音樂學校卒業式にゆく　四時半演奏會終りし後直に小石川植物園なる文科大學親睦會にゆく　中々の盛會なりき　八時半歸宅

七月八日　午前強雨　午後晴　藤岡より返事あり　朝國語傳習所にゆき二時間講ず　高等師範生木村來る　つ

いで日下部等三人來りシャツ三枚をおくる　渡邊龍聖來談　內海弘藏同斷　友田宜剛亦到る　五時より烏森湖月の謝恩會にのぞむ　席上一詩を賦して示す

諸君研鑽業新成　官命余爲留學生　今夜勿辭三斗酒　賀筵却帶別離情

七月九日　晴　加藤直久來訪　織田得能妻來る　晩友田宜剛、市村平、日下部生等來る

七月十日　晴　八時大學に赴く　卒業式に臨むなり　式後運動場に撮影　午上田氏と精養軒にいたり國文學科新學士九人を饗す　謝恩會の返禮なり　午後四時より學士會內なる朱紘會にのぞむ　會者七人　放談十時にいたりて散ず　今夜地震あり蒸熱眠りがたし

七月十一日　曇　國文科新學士昨日の禮に來る　高山林次郎氏も來談　杉谷證書を郵送す　午後一時大學教授會に赴く　大學院入學生の議事あり　四時より小石川植物園學士會に臨む　歸途竹村氏に立寄る

七月十二日　晴

七月十三日　晴　午後塀和爲昌氏、池田貞雄緣談の件にて來談　夜佐村八郎來談　渡邊龍聖氏亦至る　同氏と上野を步しビーアホールに飲む　三上、高津二氏亦來る　ともに步してかへる　月明あり

七月十四日　晴　午後靜子、斯波安子來る　能勢伯母同斷　かう子同道音樂會にゆかんとてなり　菊池壽人來る　ともに上野を步し動物園に入る　とし子も同伴す　夜富山房にゆく　坂本歸京　今日杉敏介來談　夜本田弘、戶澤、淺野等來る　學校より借用の書數十部を返納す

七月十五日　晴　夜雨　朝富山房にゆき金を受取る　正午家をいで赤堀、指原、潮田を歷訪し赤堀にて馳走になる　歸途指原を訪ひ一酌す　今日西田氏來る

七月十六日　雨　後晴　離蓐直に結束し新橋に向ふ　一番汽車に乘り午後五時岐阜に着　大久保氏の寓に投ず　大久保氏余を拉いて萬松館に飲む　尋で船を艤して鵜飼を看んとす　長良の清流、金華の翠色、風光如畫涼味不可言　一妓あり舟中に侍す　酒盡きて鵜飼來らず　乃舟を棄て再萬松館に對酌す　歸途月光晝の如し

七月十七日　晴　七時師範學校にいたる　原田、松平、津川、荻野等の諸生に逢ふ　九時四十五分西行の汽車に搭ず　大久保氏停車場に送る　五時神戶停車場に着　たづ子直に來る　手を携へて嚴君の宅に入る　眞吾亦在り　夜たづ子と社內を逍遙す

七月十八日　雨　午後得能來談　西洋料理を喫して縱談す　雨天なるを以て終日在宅　神社に詣し初穗を納む　神社より神饌をおくらる　岩田氏を訪ふ

七月十九日　晴　北堂、眞吾、たづ子を拉して舞子に遊ぶ　車中にて金港堂の岩田氏に邂逅　舞子松菊樓に午餐を喫し午後三時歸宅　神戶停車場前にて遠藤氏に逢ひ其奇遇を喜び拉いて家に至り麥酒を傾けて談ずること一時間餘　同氏去る後得能を敏馬濱に訪ふ　細君酒を侑むること切なり　今夜山田子三郎氏來訪　不在にて逢はず

七月二十日　晴　午後得能來談　ともに山田氏を訪ふ　不在　三宮停車場前のビーアホールに入り麥酒を傾け洋餐をなしてかへる　山本夫婦子供等岡本より來着　一族團欒賑しきこと比なし

七月二十一日　快晴　正午一同市田寫眞舗にゆき撮影　それより和田岬なる水族館をみる　歸途淸盛墓等を見四時歸宅　一浴して山田氏を訪ふ　同氏中常盤に招飮の約あればなり　諏訪溫泉に一浴し常盤に一酌す　得能氏中學校親睦會にて同處にあり　上野可然、阿部德太郎等にも初對面す　十時歸宅　榊亮三郎氏來談　十一時去る

七月二十二日　快晴　朝得能を訪ふ　榊、藤岡在り　山田亦尋で到る　午餐の馳走になり三時辭しかへる　四時より結束し晩六時の夜汽車に搭ず　たづ子等皆送り來る　山田同斷　名古屋邊迄は人少く安眠す

七月二十三日　晴　車中衆議院議員田邊爲三郎、藤澤幾之輔二氏に逢ふ　大里猪熊は靜岡より同車　藤岡勝二は沼津にて下車せんとするに逢ふ　談話數分にして別る　十二時歸宅　午後金井保三來談　夜竹村來談　竹村去りて後岡倉氏を訪ひ十時歸宅

七月二十四日　晴　朝富山房を訪ふ　午後上田氏にいたる　石原亦來る　歸途再び富山房に立寄り袴を借りて學士會なる第一高等學校職員の送別會にのぞむ　歸途斯波に立寄る

七月二十五日　晴　午後富山房にゆく　又學士會なる送別會にのぞむ　一は廿五年卒業生、一は國文科出身學士の會なり　十一時歸宅　午前岡田正美來る

七月二十六日　晴　夜熱蒸すが如し　幸田成友、尾上八郎、山內素行三人來る　午後熊谷綱介同斷　午後杉浦鋼太郎氏を訪ひ竹村の事を談じ偕樂園に赴く　上田、岡倉、萩野、本田四氏あり　本田氏の馳走なり　朝竹村來訪　書籍數十部を貸與の事とし午後車にのせて遣す　古郡來る　午餐を饗す

七月二十七日 晴 暑熱昨日の如し 午前岡倉由三郎來談 書籍數部を貸す 山根勇藏來訪 午後能勢にいたり神戶よりの贈物を致す 歸途竹村に立寄る 不在 歸宅後渡邊を訪ひ麥酒をのむ 杉浦來訪の由にて歸宅 松永、竹村亦尋で至る

七月二十八日 曇 尾村丈太郎、櫻田辰吉、斯波貞吉、萩野由之、荻野重吉、丹野幸次郎來談 午後井上學長を訪ひ赤堀、藤岡の事を談じ富山房にゆく 持地氏在り 坂本、上田氏と併せて四人柳橋深川亭に飲む

七月二十九日 曇 斯波貞吉、香村茂富、武島又次郎、佐村八郎、原榮、高瀨武修、能與作來訪 能大學卒業の寫眞をもち來る 其他に九谷燒の茶道具を携へ來る 原は置物一箇をおくる 晚關如來、井上仁吉、渡邊龍聖來談

七月三十日 曇 八時尾村丈太郎、長連恒來る 尾村を拉いて富士見町小學校にいたり渡邊氏の馳走になる 午後富山房に立寄る 平出氏在り 歸宅すれば赤堀氏及福井久藏、四宮憲章の二人來る 赤堀に晚餐を饗す 湖田老母病氣の報あり かう子見舞にゆく

七月三十一日 大學にゆき書籍數部を返却し富山房にゆく 歸途多賀羅亭に立寄る 佐村八郎、竹村鍛來談

八月一日 晴 文部省にゆき上田氏に面會 斯波の事、赤堀の事を談じ歸途眼科醫院に立寄る 午前は來診にて忙しき由に付歸宅 午後再びゆく 檢鏡の結果凹四十一番なりとの事にて下谷池端に眼鏡二箇を購ふ 今日國語傳習所夏期講習會開會に付出講 右了りて星岡茶寮に赴く 佐村氏招宴に與かる也 錦小路も同席 十時歸宅

今日午後德江女來る

八月二日　晴　友田宜剛、佐藤範雄、那波光雄、岡倉秋水、黑川眞道來訪　五時より傳習所に講義す

八月三日　晴　午後四時より一ツ橋學士會紀元會に赴く　大塚氏に面會久濶の情を敍す　藤代氏余が寓にいたり一泊す

八月四日　晴　朝藤代氏とともに大塚氏を訪ふ　午餐の馳走になりて歸宅　藤代氏午後四時本所發の汽車にて千葉にかへる　四時より六時迄傳習所に講義しそれよりとし子とともに兩國花火を看る　坂本氏の招請なり　今日渡邊宣三郎、下村芡、能與作、佐藤範雄等來訪

八月五日　晴　大宮兵馬、斯波貞吉、山本信吉來談　十時より國語傳習所に講義す　十二時歸宅　熊代彥太郎、高木尙介、福井久藏等來談

八月六日　晴　朝高等師範にゆく　朝夷氏不在　冨山房にゆき午餐を遠藤氏に饗せらる　午後傳習所にゆく　講習今日にて結了　杉浦氏の宅にて一浴し麥酒洋餐を饗せらる　竹村氏俱にす　月明晝の如し　今日石橋尙寶、濱野知三郎來訪

八月七日　晴　伊藤小五郎、中山再次郎來談　十時去る　高等師範にゆき朝夷氏に面會　斯波の事を依賴し斯波を訪ひ其旨を話す　午餐を饗せられ午後三時歸宅　尾村丈太郎、佐村八郎、屋代熊太郎來訪　夜かう子、とし子と森川町を步し土井氏を訪ふ　今日佐藤範雄來り餞別として四十圓をおくる

八月八日　晴　書籍を斯波に預く　新倉錠次郎來談　山本信吉同斷　夜かう子と梅川樓にいたり土井氏夫妻を饗す

八月九日　晴　朝田中敬一を訪ひ佐村、渡邊の事を談ず　それより能勢にゆき十四日招待の旨を話し冨山房に立寄り明日荷物片附方に付小僧一人遣はされ度旨依頼す

八月十日　晴　冨山房の小僧來り荷物の取片附をなす　大塚保治來談　午餐を喫して去る　午後原榮來り晩餐を喫して去る　夜山根勇藏來談

八月十一日　晴　朝文部省にゆき旅費の事を依頼す　歸途江木寫眞鋪にいたり撮影　今夜松永武雄來談　午後畑德三郎同斷

八月十二日　晴　小雨　夜上田萬年、能與作來訪　十時去る　夕方佐藤範雄來る

八月十三日　晴　小雨　朝九時より帝國敎育會に課外講演をなして十一時にいたる　歸途文部省に立寄り旅費千四十五圓七十二錢を受取り冨山房にいたり午餐　同金を鴻池銀行に預けて歸宅　午後千秋季隆來る　今夜渡邊龍聖、同閑二人を招じ洋餐を饗す　下村茨來る　本田弘同斷

八月十四日　晴　小雨あり　朝九時より敎育會課外講義をなすこと昨日の如し　午後梅川樓に親戚十數名を饗す　朝織田得能來訪

八月十五日　晴　朝井上學長を訪ひ××、〇〇の事を談じ菊池總長を訪ふ　不在　江木寫眞鋪にいたり燒增を

依賴し鞆繪屋にゆき鞄一箇を購ひ來る　午後佐村八郎來談
八月十六日　晴　中村萬吉來訪　斯波、伊藤二人同斷　夜岡崎を訪ふ　不在　傳習所講義一回分を訂正す
八月十七日　晴　朝荒川百合子來る　石原を訪ひ病氣を見舞ひそれより赤堀を訪ふ　不在　保科氏の寓にいたる　岡田正美亦至り午餐の馳走になり回生病院に潮田老母の病氣を見舞ふ　歸途再び赤堀に立寄る　尙不在　歸宅後渡邊氏來訪　同氏今夜山形に發足の由
八月十八日　暴風雨の氣味あり　今日潮田と芝浦に赴く約あり暴雨のため不果　市村平來談　三年生の論文を一讀し評語を附す
八月十九日　陰晴不定　午後潮田氏來談　餞別として白シャツ、襟飾等をおくらる　黑川先生を訪ふ　先生熟睡中との事故面せず　眞道氏に逢ひて歸宅　とし子同道人形を貰ひて歸る　歸途膝掛一枚を購ふ　靴一足出來たりとてもち來る　少し小きを以て返却す　夜本田弘、高橋儀市來る　作文敎範第三卷一閱終る
八月二十日　晴　風あり　赤堀又次郎來る　茨木某、鳥居忱の紹介狀をもちて來る　午後赤堀再び來り上野精養軒に行かんといふ　よりて同行し馳走になる　信州名勝詞林序文成る　直に村松氏に郵送す
八月二十一日　晴　朝竹村にゆく　關根氏在り　昨日大磯より歸京すといふ　十時竹村氏を辭し富山房にいたる　天野氏在り　午餐を喫し歸宅　途に關根氏を訪ふ　夜友田宜剛來り作文敎範の事を談ず　赤堀氏より餞別として雁皮紙をおくらる

八月二十二日　晴　朝三土忠造來る　洋服屋に古服數領を賣却す　午後佐村より麥酒一打、國書解題一部を餞別としておくり來る　夜上田氏を訪ふ　竹村、關根、高楠あり　談笑十時にいたりてかへる

八月二十三日　晴　朝山根勇藏、瀨戸平吉來る　學校にゆき俸給を受取り冨山房にゆく　又歸途杉浦鋼太郎を訪ひ馳走になり更に佐村八郎を訪ふ

八月二十四日　晴　風あり　朝かう子、とし子と大森に遊び伊勢源に到る　高楠氏に逢ふ　五時の汽車にて歸京　大森停車場にて藏原惟郭に邂逅す　萩野修善寺より歸京飴其他をおくらる　岡倉より林檎數個をおくり來る

八月二十五日　晴　風あり　朝佐村八郎、高木尙介、稻垣乙丙來訪　上田、關根、竹村三人來談　ともに根津紫明館にいたる　束して萩野氏を招く　晝餐を喫し午睡　晩餐を了へて歸宅　貞吉坊主來り斯波よりの餞別としてかばん一箇をもち來る　今朝眞吾上京

八月二十六日　晴　暑氣頗はげし　高木尙介、今立裕、石橋尙賓來る　山内老人志賀を伴ひて來る　上野紀士も來談　西村手代荷物の事につき來り談ず　夕方遠藤國次郎、久能の事を相談せんとて來る

八月二十七日　晴　暑はげし　晩空雷あり　朝富士谷老人、岩田僊太郎、高木尙介、楢原嘉一郎、山内冬彥等來談　午後一時より入谷松源支店に赴く　冨山房の送別宴にのぞむなり　上田氏亦臻る

　催宴淸池畔　燈光入水長　空雷不成雨　殘藕自生香　座上三絃響　人間百事忘　夜遲歡莫盡　唯道酒無量

飯田武卿氏逝去の報あり

八月二十八日　曇　山本駒藏、今立裕、山内素行、小日向定次郎來訪　洋服屋瀨戸來る　常豊三郎頓死の報知に接す　小爲替にて香奠をおくる　午後上田、坂本と梅川樓に會し小飮　歸宅せんとする頃岡倉、萩野、本田三人尋ねいたる　よりて再び開宴　夜九時同樓を辭し三氏余が寓にいたり放談　十時半去る

八月二十九日　晴　朝六時家をいで飯田町停車場にいたり青山墓地に飯田武卿氏葬儀に會す　九時の汽車にて歸る　歸途杉浦氏の宅にて鰻めしの馳走になり午後一時辭しかへる　不在中澤柳氏の紹介にて前波仲尾氏來訪の由　吉田六之助、内海弘藏、小池民次三氏來談　小池氏よりは餞別をおくらる　晩三上參次來り精養軒に晩餐を倶にせんといふ　よりて同行上野の山を歩してかへる　初月如弓　不在中桐生來訪の由

八月三十日　晴　涼し　斯波貞吉、渡邊龍聖、德江、ゆきえ來る　杉浦鋼太郎は送別會の事につき來談　午餐を喫して去る　午後大橋次郎來り教育會課外講義の報酬をもたらす　小萱、松内來る　駿河臺佐々木病院に高山林次郎の病を訪ふ　それより冨山房にゆき少憩　正文舍にいたり告別のはがき百枚の印刷を依賴す　夜上野紀士來る

八月三十一日　午前晴　午後雨ふる　島田鈞一、畑德三郎、法貴慶次郎、古郡幸介來る　寫眞師江木にゆき燒増十八枚を小林におくるやう依賴し塚谷にゆき種々の買物をなす　歸途斯波に立寄る　貞吉坊主より札入一箇を餞別として貰ひ受く　島田氏よりはフラネル一反同斷

九月一日　晴　夏目金之助、藤代禎輔來る　ともに横濱にゆかんと約し先づ鴻池銀行に立寄金を引出し十時半

の汽車に搭じて横濱にいたりロイドに就きて船の事を問合せ切符を買ひ停車樓の洋餐を喫し三時半歸宅　五時より上野精養軒福井人送別會にのぞむ　八時同所を辭し見晴にいたる　潮田の宴にあづかる也　石原も同席　十一時歸宅　不在中山根勇藏、鹽井敦二人來り餞別をもちきたる

九月二日　高木尙介、長連恒、岡崎遠光、小林一郎、關如來等來る　岡崎氏は絹はんけち半打、關如來はカフス釦及扇子一對の餞あり　午後五時より開花樓なる送別會にのぞむ　會者五十人餘　落合氏の送別の辭あり　余答辭をのべ九時半歸宅

九月三日　晴　斯波貞吉、高津鍬三郞來る　高津氏は餞別として香水一瓶をもち來る　潮田妻來訪　古河妻同斷　午前十一時半八木田にゆき齒療を受け菊池總長を訪ふ　不在　今立にゆき啓發錄を貰ひ受け多賀羅亭に入り午餐　上田氏を訪ふ　萩野、岡倉、本田、竹村等あり　水瓜の馳走になり歸途正文舍に寄りはがきを取り石原を訪ふ　磯谷、潮田同席　夜十一時歸宅

友田送別の歌

　八重の荒波たつのあぎとの珠とると八重の荒波君わくるはや
　ゆきゆけどいづこをはてとしらくものそきたつきはみ君きはむらん
　するひろに君がほまれはかゞやかん日の入る西の國のはてまで

九月四日　晴　上田敏、金井保三來る　富士谷老人離別のため來る　口占に曰く

別るとは名のみなりけりまぼろしにいつもあひみん君がおもかげ

木村正辭氏より送別の歌をおくり來る

よくゆきてよくみてきませこと國の書の林のみちのくま〳〵

八木田にゆき齒療を乞ひ大學にいたり總長に面會　それより冨山房にゆき坂本と相談歸宅　晩岡倉、竹村、佐村、渡邊を歷訪す

村松今朝太郎送別の歌

波風はあらくな立ちそ異國に船路たどりてゆく人のため

こと國のことばの花をつみためてかへらん君を今日よりぞまつ

高橋五圓の切符をもち來る

九月五日　晴　藤代氏來る　ともに正金銀行にゆき金子の兩替を依賴す　支店にて埒明かず送金手形を依賴して歸宅す　不在中中村秋香、藤岡作太郎各餞別をもちて來る　岡倉同斷　藤代來る前神保町にゆき買物をす　午後熊代彥太郎、藤岡作太郎、市村平、高楠順次郎、沼波武夫、木村義則、岩田僊太郎、竹村鍛等來訪　不在中能與作、千秋季隆來訪の由　晩遠藤國次郎、立田義元を饗し久能の事を依賴す　和田信二郎に伴信友建碑金を渡す

九月六日　晴　午後車を儦ひて親戚等を告別す　晩茗溪會の送別會にのぞみ七時歸宅　告別のために來れる知人等極めて多し

九月七日　雨　朝萩野、岡倉、山根、佐村等陸續來訪す　午前十一時二人引を雇ひて駒込より小石川、麹町、芝、本所、淺草等へかけ親戚知友先輩の許に告別す　午後七時歸宅　眞吾告別のため來る　夜高橋儀市、潮田氏等來る

留學日誌（明治三十三年）

明治三十三年六月十三日文部大臣より獨國留學の命を受け九月八日を以て出發と定む　同行を約するもの藤代禎輔、夏目金之助、稻垣乙丙皆年來の知友たり　出發に先ち知友學弟等送別の會を開くもの頗多し　就中國學者の同友は箱根塔澤に會して余が行を送る事六月三十日に在り　大學國文科の學生は六月廿四日長酡亭に、越えて七月二日高等師範學校國語漢文專修科卒業生も亦同處に別宴を開けり　富山房の招宴は八月廿七日上野松源支店に國語傳習所の主張したる知友一般の送別は九月二日神田開花摟に開かれたり　大學國文科卒業生の學士及大學同年卒業生の舊友會は七月廿五日を以て學士會事務所に開會　福井會の中心となれる同鄕人の會合は九月一日を以て精養軒に催したり　其他親戚知友の少數を以て惜別の會を開きたるもの枚擧に暇あらず　六月以後出發にいたる迄概ね虛日なし　餞別の物品を寄贈し來れるもの亦甚だ多し　交情の懇篤なる感激何ぞ堪へむ　其他留學生一般のために大學教授の催されたる會合の如きも亦一にして足らず　淺學菲才を以て留學の榮を受けたるだにあるに更に重ぬるにこの厚遇を以てす　いよ〳〵責任の大なるをおもひては奮勵以て國文學前途の爲に盡さんとする念は一層あつし　九月八日出發にいたり醫學士戶塚機知君の同行せらるゝ事と成りたるは更に喜ぶべき事たり

高山林次郎氏が不慮の病痾に侵されて同行を果さゞりしは同君の爲めに悲むべきは勿論一行の最遺憾とするところなりき

九月八日(土曜)　昧爽結束して家をいづ　之よりさき古郡幸介、高橋儀市、山根勇藏、佐村八郎の諸氏早く余が寓に來り余が旅裝の成るを待つ　家をいづる時殘月天に在り　車を連ねて新橋にいたる　同行の諸氏亦踵いで到る　知友等の停車場に送るもの百人を超ゆ　更に汽車に搭じて横濱に見送りたるもの亦三四十人あり　六時四十分横濱に着　直に波止場にいたりプロイセン號に搭ず　船室は百三號にして藤代、稻垣兩氏同室なり　夏目、戸塚の二氏は隣室とす　八時奏樂とともに發船す　たゞしばしの別にも涙脆き婦女の常、ハンケチをしぼる妹背の別は余も人も同じかるべし　海上微風動きて空餘波なく霽れ渡りたる航海心地よき事いはん方なく瞬く中に本牧の岬を過ぎて觀音崎の砲臺を見る　甲板に立ちて故鄕を望めば坐に暗涙の湧かざるにもあらず　同船の外客英人あり米人あり佛獨の人もあり各其國語を操るに早くも外國にいたりたらん心地す　午後三時頃にやありけん驟雨俄にいたりて甲板を一洗す　浮雲往來して富嶽は僅に其頂を認めたるのみ　船遠州灘に入る頃より波浪頗る高く船體やゝ動揺す　同行の諸氏多少の船暈あり　夏目氏最甚しく晩餐に與からず　余幸に毫末の異感なし　夜十時浴衣に着換へて寢に就く　鄕夢眠を攪することしば〳〵なり

ふたとせの別をわびてなく妻をあはれむ心なきにしもあらず

おほやけのみちのためぞとおもはずばけふのわかれもものうからまし

蒼波萬里接天隅　回首富峰雲外孤　忽有長風吹急雨　豆南七島瞬時無

九月九日（日曜）　蓬窓夢さむれば紅暾海波を射る　船正に紀州沖に在り　七時頃にいたり左に淡路島を見る　紀州泉州の海岸危岬參差風光極めて美なり　左盼右顧九時半頃神戸灣に入る　十時半投錨　小汽艇に下れば山田子三郎氏迎へに來る　埠頭には山本豐、たづ子を伴ひて余を迎ふ　同行諸氏は午餐を喫せんとして中常盤に向ひ余はたづ子と同車嚴君の官舍に入る　時正に午なり　午餐の後山本氏の助を得て見送の禮狀凡そ百通を認め投函ついでたづ子を拉いて勸工場に遊ぶ　嚴慈兩尊と談話數刻　薄暮同行の諸氏余を尋ねて到る　山本、岩田兩氏も同席晩餐を喫す　本船は十時拔錨の定なるを以て八時半人力に乘じて出づ　一同埠頭に送らる　十時にいたり豫定の如く出帆す　今夜八月既望天片雲なく金波搖曳美觀いひ難し　淡路島の邊を過ぎて寢に就く

九月十日（月曜）　瀨戸内海の最美なる部分は昨夜中に航過したりけん曉起五時船は備藝の海を通過す　兩岸の山陵一迎一送島嶼其間に點綴し美景尙見るべきもの多し　波穩に風涼しく小艇無數船の前後を往來す　午後三時頃門司海峽を通過す　兩岸の山勢いよ〳〵相迫りて九州の地本國と相距る眞箇に一葦帶水なり　右に馬關あり左に門司あり相對して呼べば應へんとす　馬關測候所のあるところ古壇浦の遺蹟なりと聞く　昨神戸を發して一谷須磨の遺勝を見、今壇浦の故蹟を弔ふ　この間の航路世界航海中絕佳の景を以て名あり　啻に絕好の風色あるのみならず俯仰感慨亦幾多の詩感を動かし來る　源平爭衡の跡歷々として視るべし　船玄海洋に入れば波の穗の上

遙に壹岐對馬を望み觀望頗に廣濶なり　今夜月明昨夜の如く十一時にいたりて寢室に下る

福原舊趾已成空　壇浦那邊海底宮　一部源平盛衰記　浮來半夜月明中

九月十一日(火曜)　四時眠醒むれば船已に長崎に在り　八時朝餐を終へて直に上陸し一行車を聯ねて馬淵鋭太郎氏を縣廳に訪ふ　參事官鈴木兼太郎氏亦大學の出身なり　談話半時許一行は向陽亭に入り湯沐し午餐を喫す　和洋折衷の料理にして甘味口に適す　三時同亭を辭し大波止場にいたる　馬淵、鈴木氏亦送り來り縣廳の小汽艇を艤して本船にいたる　本船は午後五時出帆の筈なりしが水先案內來らざりしを以て九時やう〳〵出帆す　獨乙船ハンブルグ上海より入り來るを以てプロイセンは奏樂して之を迎ふ　プロイセンの出帆せんとするやハンブルグ亦奏樂して之を送る　Wacht am Rhein 終りて君が代を奏す　月明昨夜の如く長崎山上のピンヘツドの白字歷々讀むべし　今夜いよ〳〵日本を離るとおもへば轉旅袖の濡ふを覺ゆ

九月十二日(水曜)　曉起　四面茫々海波際なくして山影を見ず　波間時に飛魚の潑剌たるを見る　甲板上外人等種々の遊戲を試む　やゝ逆上の氣味なるを以て頻に下劑を用ふ

九月十三日(木曜)　五時眠覺む　蓬窓より海面を覗へば濁浪瀰漫船は早く揚子河口にあるなりけり　九時前小蒸氣ブレーメンに搭じて大江の支流黃浦江に遡る　兩岸の楊柳翠色滴るが如し　處々に支那流の樓門を見る　農家亦其間に點綴す　航行二時間十一時の頃上海に達す　我軍艦の碇泊するもの河口に嚴島ありやゝ上りて豐橋、摩耶、八重山あり　八重山には將旗を飜せり　日章旗を異域に認む意氣自ら揚るを覺ゆ　上陸の後步して江北海

關にいたり立花政樹氏を訪ふ　氏驚喜一行を迎ふ　ついで車を僦して鐵馬路東和洋行に投ず　同旅館は長崎人某氏の設立するところなり　日本旅館は同館と他に立花氏の止宿する旭館との二屋あるのみといふ　日本旅館と稱すれども家屋の構造、寢室の體裁全く洋風なり　唯だ食膳に日本飯、香物ある處日本旅館たる所以なり　同宿に朝鮮人三名あり　嚴島の水夫數名亦階下に來りて球戯をなす　一浴椅子に踞して街上を見れば支那人の往來頻繁なる風俗言語頓に異るを以て興味自ら多し　四時半立花氏至る　よりて同行して同氏の寓旭旅館にいたる　ラムネ、ウイスキーを傾けて談話數時　已にして日本食を饗せらる　階下三絃の聲を聞く　亦水夫等の宴を開くなりといふ　九時一同同市の公園にいたる　公園は河畔に在り　毎夜九時音樂隊の演奏ありといふ　外人の兩々相携へて入り來るもの引きも切らず　同園は支那人の入園を禁ずといふ　椅子に踞し一二曲を聞きたる後南京路を歩し左折して四馬路にいたる　同路は夜店のあるところにして戯場、寄席、酒樓等櫛比し京都京極通の趣あり　一酒樓に藝妓の盛粧して客を待つを見る　又轎に乘りて街上を往復するもの多し　轎は二人にて之を肩舁し一人提灯を持ちて前に立つ　提灯の大さ吉原遊廓の古圖を見るが如し　一書肆に就きて試に梨園叢書の有無を問ふに無しといふ　歸寓夜十一時　立花氏亦來りラムネを飮みて別る

九月十四日(金曜)　起床窓外より街路を見渡せば種々の物賣呼聲高く通り行く　其節は我國のと大差なし　野菜を賣るを見るに賣手の權衡を所有するは勿論買手も亦秤を手にして一應之を檢査す　流石にこの國の氣風もおもはる　天秤棒は多く孟宗竹の太きものを唐竹割にしたるものを用ふるが如し　車には一輪車甚だ多し　兩側に

人を載せ又は荷物を載せて押しゆく　一車に五六人を載せたるも見ゆ　人力車は東洋車と唱へて車夫の衣服に番號を附けたること我國に同じ　但し其服裝の如き一樣に淺黃を用ふれども概して汚き事いふべからず　車體は極めて岩乘に出來て我人車の如き美觀なし　辻待の車に乘らんとすれば爭うて客を引かんとし汚れたる手を以て衣を引く　我國の如く鬮を以て後先を定むる事全くこれ無きにや　相互に話す聲を聞けば恰も喧嘩の如し　馬車は半日の雇賃二圓にして割合人車よりも廉なりといふ　街路の上自轉車を驅るものあり人車を驅るものあり馬車に乘ずるものあり轎によるものあり千態萬狀といふべし　九時一行車を聯ねて張園、愚園の二園を見んとす　南京路を西に行く事半里許左側に在るを張園とす　宏壯なる西洋料理店あり　又喫茶臺等もあり　園中頗る廣濶にして蓮池あり芝生あり　雜草等を見るに狐の鎗、野菊など皆我國のものに同じ　唯我國の庭園として缺くべからざるは松なれどもこゝには一向に見當らず　張園を出でゝ尙行く事十町餘愚園にいたる　愚園は觀覽料として各人十錢を徵す　樓榭相錯綜して全然支那の古畫を見るが如し　樓榭の中間には小池あり小橋を架す　室に入れば所所名人の書畫を揭げ喫茶臺、喫煙臺等を置く　皆紫檀の立派なる机なり　一亭には演劇の舞臺もあり番附等も見えたり　支那人の亭長しきりに茶を勸む　阿片を喫して眠れるもありき　廊下壁間等に畫ける畫の幼稚なる淺草奧山の看板の如し　岩の魁奇なるものを喜ぶこと甚しく人工を以て殊更に穴を穿ちたるもの多し　恰も芝居の巖石の如きものなり　其側に芭焦の葉の高く聳えたる如何に考へても支那的なり　愚園を一覽して歸途につく　この間の道柳楊槐樹路を夾んで日光を遮り淸涼人に快なり　樹上に蜩聲を聞く　我國のに比すれば聲甚だ弱し　眠

るが如き聲なり　歸路戸塚氏と寫眞鋪にいたりて寫眞を見る　又一書肆をひやかして一見哈々笑を購ふ　上海の街路は整齊にして二層若くは三層大厦相列りて我横濱神戸の比にあらず　支那人の鋪は金看板をいくつとも無く下げて金色燦爛目を奪ふ　誠に美觀なり　唯だ支那人元來の不潔なる故にや街上何となく一種の臭氣あるは堪へ難し　恐くは豚脂の臭なるべし　支那人の商店にある多くは袒裼せり　但し腰以上丸裸にして我國人の車力等が褌をあらはせるものとは全く上下を異にす　こはむしろ支那人をよしとせんか　例の金看板いかめしき老鋪にもこの半裸多きは不體裁なり　東和洋行に歸り午餐す　立花氏今日も來りて食事をともにす　食卓の上は常にパンタを動かして涼を取る　之を立花氏に聞く税關に於てパンタを動かす人を雇ふ一日の賃金十五錢也と　應といふべし　食卓に集る蠅を見るに太りて頭赤し　食後清人來りて筆墨を購はんことを勸む　夏目氏余と少許を購ふ　懸直の多き驚くに堪へたり　午後三時一同波止場にいたりブレーメンに投じ本船にかへる　沿岸漁翁の四ツ手網を以て魚を捕ふるを見る　我國のと少しも異ることなし　今夜新旅客本船に入るもの頗多く談話室食堂大に賑ふ　別を送りて來りし人々七時頃かへりゆくとて接吻處々におこる　余に取りては一奇觀たり　晩食後甲板に上れば籐の寢椅子俄に增加して二十有餘となれり　夜風大に起る

滾々大江注海東　滔天濁浪勢何雄　蜀吳豪傑今何在　不似水流今古同

歷代文華跡已荒　忍看白皙甚跳梁　花園奏樂歡聲湧　不許華人來入場

九月十五日（土曜）　天色暗澹風威未だ衰へずバロメーター次第に下降す　大風の惧あり　船午後二時にいたるまで出帆せず　二時拔錨して航行すること二時間許又進行を止む　大風を避くる爲といふ　今夜二時頃風やゝ和ぎて進行をはじむ

九月十六日（日曜）　風威やゝ衰へたれども波浪尚高し　船客大半船暈にて甲板に上るもの寥々たり　同行の諸氏皆船室に平臥し食堂にいでず　無聊甚し　驟雨時々來りて甲板を洗ふ　船客に英獨宣教師の一隊十數名あり今日日曜日なれども祈禱せず

九月十七日（月曜）　波浪やゝ治まり同行の諸氏元氣回復す　宣教師の一行拜神の儀をつとめ讃美歌をうたふ洋客三四喫煙室に在りて賭博を行ふこと盛なり　微雨時々來る　午後五時福州灣に入る　峰巒重疊として島嶼碁布し風景畫の如し　恰も瀨戸内海に入る觀あり　兩岸砲臺のある處を通過すれば風光益佳なり　群松の叢生せる山相連り茂林の下時に支那風の村落を見る　山骨露るゝ處飛瀑蜿蜒として下る　一幅南宗畫を見る想あり　六時投錨　茶の積荷を爲すためといふ　陶器、漆器、絹布等各種の雜貨を賣らんとて支那の商人多く船中に入り來る喧嗷比なく船中頓に賑ふ　竹の寢臺を賣り來るものあり試に一椅子を問へば一圓といふ　三十錢に直切れば直にまけたり　殆ど勞力を値せず　支那人の生活も亦憐むべきかな　船室の傍支那小艇の來るもの多し　舷窓より煎餠、ビスケツト等を投下するに爭うて之を拾ふ　老若男女さながら餓鬼の如し　日本の民如何に貧困下等のものといへども恐くはこの態をなさゞるべしと坐に淸國を悲む心あり　十一時就寢

九月十八日（火曜）　終日細雨濛々として鬱陶しき事いふべからず　甲板の上斜雨時に來りて坐すべからず　喫煙室に在りて國學史を校訂す　この日船庫に入りカバンを開き日本服袴羽織を取出し着用す　バロメーター平常に復す

九月十九日（水曜）　曉起舷窓より覗へば旭光曈々として全空拭ふが如し　快適何ぞ堪へむ　午後二時香港に入るべしといふ　衆皆喜色あり　四時香港の岬角を認む　雙眼鏡をとりて甲板に上る　景色福州に劣らず　群嶼の間をゆいて四時半香港に入り九龍の埠頭に着す　直に上陸す　會〻一日本人あり頻に談話をしかく　之を問ふに日本旅店鶴屋の若者なりといふ　因て同道して之に赴く　同店は海岸通五層樓に在り外觀甚だ美なり　然れども其入口たる急にして狹き長階を攀ぢざるべからず　人をしてまづ一驚を喫せしむ　室內に入るに及びて其陋猥亦豫想に反せり　日本婦人二三宿泊せり　器物皆穢くして心地よからず　樓上よりみれば隣屋亦日本旅館の榜あり一行皆隣屋に入らざりしを憾む　入湯を勸むれども入らず　食膳は鯛の刺身、燒肴等あり味噌汁あり　割合に喰へたり　番茶の茶漬數碗を傾けて腹滿つ　乃ち同樓を辭し街上を散步す　戶塚君寫眞師梅屋にいたり香港全景の寫眞を購ふ　同店をいでゝ一煙草店につき葉巻一箱を購ひ又繪はがき數葉を買ふ　暑熱堪ふべからず　船室にかへりて冷水を以て全身を拂拭し浴衣を穿つ　快いふべからず　船中に支那商人の雜貨を賣らんとて群集すること福州に於けるが如し

九月二十日（木曜）　朝餐を終へたる後再び九龍より渡船朝星に乘じて香港にいたる　九龍と香港とは相對して

其間海上四五町許　朝星、晩星の二舟ありて往復す　賃金上等十錢なり　香港にいたり tramway によりて香港の高峰に上る　鋼條鐵道にして傾斜四十五度許の山路を上る　峰上 peak-hotel あり　更に進むこと少許兵營あり　四望快濶長風髮を吹いて快いふべからず　戸塚君曰く景色大連灣の如しと　元來香港は海上の一島にして全島花崗石なり　樹木の繁茂するもの少けれども雜草矮木全山を掩ふ　處々丘陵を開きて高樓大厦を架す　皆英人の家にして多くは兵營に關する士官の住居たり　羊腸九廻して頂上に至る迄は十八町もあるべし　道路極めて立派なれども暑熱堪へ難く喘ぎ〳〵頂上に達す　最頂上には亘礮を備ふ　其下一支那屋ありラムネ、氷等を賣る　少憩してラムネ二瓶を傾く　甘味忘れ難し　十一時再び停車場にいたり待つこと半時餘　十一時半發車　香港市に下る　余と戸塚君とは郵便局にいたる　はがき數葉及國學史の原稿を投入せんがためなり　香港の市街たる繁榮は上海に及ばざるが如しといへども巍然たる層樓相連りて昇降にはエレヴエーターを用ふ　全屋悉く大理石なるが如きは歐米の大都といへども及び難かるべし　住民二十三萬餘　其内二十萬は支那人なりといふ　支那人の富裕なるもの甚だ多く大厦高樓多くは支那人の所有なりと聞く　公園の邊目馴れぬ草木多く早くも熱帶に入りたることを知る　山上の雜草は日本のに同じきも多くあり　晝顏の咲きたる多くは紫色にして我國の朝顏に異ならず　十二時船にかへる　午後四時にいたり拔錨す　宣教師の一群廣東より來るもの尚二三人を加ふ　横濱より同乘し來りし葡萄牙人こゝに下船す　上海より搭乘せる一美人妙齡十八九船中の矚目するところ亦こゝに上陸す　晩宣教師等と語る　皆支那に布教の行はれ難きを慨く　支那の騷亂を惹起せしものは自己の所爲たるを知るや否

や

九月二十一日(金曜)　四面茫々山影を見ず　終日讀書と睡眠とにふける　飛魚群を爲して飛ぶ　恰も千鳥のむら立つが如し　炎陽赫々として堪へ難し　五時入浴　夜にいたりて甲板の上大に涼し　下りて船室に入れば熱汗淋漓眠に就くこと難し　舟中奏樂しきりなり

九月二十二日(土曜)　終日山を見ざる事昨日の如し　午後三時頃驟雨沛然として甲板の上頓に凊涼を覺ゆ　夜に入りても涼し　熱帶に在らざるが如し　然れども下りて船室に入れば蒸熱堪へがたし

九月二十三日(日曜)　正午の榜示に曰く香港を距ること九百四十四浬なりと　午後家信を認む　夕方にいたり驟雨來ること昨日の如し

九月二十四日(月曜)　朝餐を終へて甲板に上れば遙に一抹の青黛を認む　正午の頃左舷に四五の島嶼を見る　今夜新嘉坡に着すべしといふ　信書數葉を認む

九月二十五日(火曜)　午前六時離蓐甲板にいづれば前面に新嘉坡の市街をみる　左右前後幾多の小嶼あり遠く之を望めば松樹の叢生せる小山の如し　雙眼鏡をとりて見るに皆椰子類の樹木なり　市街の遠景は品川灣より高輪邊を望むが如し　商船の碇泊せるものあまたあり　日本三井の劍山丸亦こゝに在り　忽ち見る二箇の小艇あり波を越えて射るが如く來る　小艇はいはゆる獨木舟なり　これ旅客より錢を乞はんとするものにて旅客若し錢を海中に投入すれば舟人は直に水中に飛入りて之を拾ひ來るなり　其巧妙なること亦一種の藝術といふべし　八時

にいたりて船いよ〳〵埠頭に近づき埠頭に投錨せしは朝餐を終へたる頃なりき　よりて一行は直に上陸す　會〻一土人あり日本旅館の名刺を持して來りよく日本語を操る　乃そのいふが儘に馬車二輛を雇ひ先づ植物園にいたる　沿道の樹木蓊鬱たる樣流石に熱帶の樹林とおもはれたり、支那人の住民甚だ多きを認む　途中兵營あり學校あり太守の邸宅あり士官の官舎ありいづれも美麗なり　案内の土人頻に講釋をなせり　十時植物園に達す　園內頗る廣濶にして手入亦よく行屆けり　我大學の植物園に似たり　但し其異木花卉の多きは他に類なきところなりといふ　花壇の傍蟲吟を聞く　鈴蟲の類にや美音未だかつて聞かざるところなり　園內池ある事亦我大學植物園に同じ　池中に珍しき水鳥泳げり　沼には蓮花の類黃白の花を匂はせたり　又園中のやゝ小高き處動物を畜ふ我上野の動物園よりは規模小し　猿猴の類、虎、孔雀等十四五種を畜ふのみ　大蛇、鱷魚亦在り　同園を一巡して歸途博物館にいたる　同館と植物園とはいづれも植民政廳の設立するところにして觀覽料を徵せず　館中にはこの地方の動物の剝製、土人の用ふる船舶の雛形、武器の類等を集む　人類學者にとりて恰好の材料たるべし日本の蟹の剝製ありたり　福井邊の產なるべし　同館をいでゝ旅館にいたる　旅館は松尾兼松といふ　さきの土人は其雇人にて名を舟兵衞といふとぞ　旅館の宿帳には鹽田眞、福地復一等の名も見えたり　晝飯を命ずるに鯛のてり燒、さしみ等あり　米は印度米なれども非常に甘かりき　午後三時再び馬車にて同所を辭し海岸通を經て船にかへる　市街の美もとより上海、香港には及ばざれども倘大厦の空に聳ゆるもの多し　全市の幅大は遙に兩港に超えたるべし　上海には支那人の青衣大に目立ちたるが印度人の衣服は赤色を尊ぶこと甚しきが如し　男子

皆赤色の下衣を纒ふ　遠く之を望めば全く女子の如し　帽の代りに亦赤布を纒ふ　赤色の目立つ事頗る著し　馬來人にや銅色のもの多く光澤ありて古佛像を見るが如きものあり　紫金色もさながらにおもはれたり　船五時半にいたりて抜錨す　こゝより新に乘込みたるもの亦四五名あり　甲板の上籐の寢椅子縱横して非常に狹隘を感ず　夜十時頃驟雨來る

九月二十六日(水曜)　天曇りて細雨時々來る　午前十一時頃龍卷を見る　船長曰くかく近く見ゆるは珍しき事なりと　正午の榜示を見れば新嘉坡を距る事已に二百二十六浬に在り　今日甚だ熱からず　喫煙室に坐するに足れり　夜風雨大に起る

九月二十七日(木曜)　曉起　船はペナンに在り　上陸せんと欲すれば午前九時發船との事におもひ止る　ペナンの遠望は新嘉坡に似たり　椰子の茂林時に印度風の家屋を其間にみる　背後に高山あり飛瀑の下るあり景色恐くは新嘉坡より佳ならん　ペナンは亦一島嶼なり　午前十時半にいたり船やう〳〵抜錨す　今日微雨時に來り清涼甚し　夜風大に起り波浪非常に高まる

九月二十八日(金曜)　旭日曈々として海波を射る　快いひがたし　南方スマタラの島を見る

名にしおふ印度荒海波たちてみえがくれするすまたらの山

十一時頃より風雨又いたり波浪大に高し

九月二十九日(土曜)　今朝始めて放晴　夜に入りて弦月を檣頭に見る　探偵小説を讀む

九月三十日（日曜） 今日も晴天風強し　日曜日なるを以て宣教師等の禮拜あり　午後荷物庫に入り日本文學全書を取出し大和物語をよむ　夜一大軍艦の東に航するを見る

十月一日（月曜） 六時甲板に上れば右方に一帶の陸地を見る　これセイロン島なり　十二時頃遙にコロンボの市街を見る　午餐を終ふる頃投錨　數多の印度人入り來りて案內せんと乞ふ　其中二人は日本人の證明書を有す一は坪井氏以下五六人の署名あり　コロンボ在住の者なり　一は姉崎氏以下七八人の署名ありてカンデイの男なり　船の出發は明日午前十時なりといふを以てカンデイに行くこと能はざるを恐る　よりてコロンボ人に案內を依賴し端舟に乘り波止場にいたる　波止場の內部にはあまたの印度人ありて兩替せんと呼ぶ　此地の通貨はルーピーにて他に通用せず不便甚し　植民政廳の前を過ぎて行くこと二町餘案內者一行を導きて British India Hotel に入る　同館は海岸に在り　あまり上等の宿舍に非ず　同館に少憩の後馬車二輛を雇ひてコロンボの南佛寺にいたる　沿道椰子樹を以て圍める庭園相連り風致尠からず　英人の家最も多く土人の家亦共間に點綴す　クラブあり寺院あり旅館あり荷車は牛を以て引く　其牛新嘉坡に見たるものよりも小し　案內者曰く小けれども力最強しと　黑奴車に添うて走り花を投じて錢を乞ふ　甚だうるさし　女子のやゝ富裕なるものは皆耳環を垂る　佛像を見る想あり　草木繁茂して雜花亂發せる中幾多の黑奴の往來するを見る　古代の印度をおもうて無限の感慨あり　案內者指點して彼は佛徒なり彼は回敎徒なりなどいふ　行く事七哩小路を左折して佛寺に入る　寺院の構造平家にして奈良あたりの金堂の如し　戸を排して入れば壁畫は盡く地獄極樂の畫なり　花を捧げたるを見るに

花輪をもぎとりたるもの多し　賽錢箱の形我國のと全く同じきは一興あり　釋迦の像大小いくつもあり半身を欹てゝ臥せる像あり坐像もあり　この寺古寺なりと聞けども丹彩すべて新しきは近き頃修覆を加へたるにや　石階を攀づること少許舍利堂あり其形獨逸の帽子の如くかつて硝子製の舍利を藏めたるものを見たると同じ　右に下れば尙一小堂あり佛像數體を安ず　同處を出でゝ又別に一堂あり　同處を一覽して觀覽全く終る　觀覽料として一人二十五仙を徵す　又來觀者の名簿を備へて記入せしむ　夏目氏日本字を以て一行の名を署す　同堂に貝葉を賣る　各一葉を購ふ　價二十仙　同寺を辭して舊路に出で行く事半里餘小雨いたる　右折して肉桂園にいたる頃雨又晴る　途に競馬場あり　案內者肉桂の枝を折りて車上に挿む　この邊肉桂の枝を賣るものあり　進んで博物館にいたる　修覆中にて閉館せり　Victoria Park には音樂所其他の設ありて廣濶なり　遙に近傍の丘陵を望む樹林蓊鬱たる處赤色の樓屋を認め牧場には羊豚群遊す　天然の美いひ難きものあり　竹叢をみるに我國の如く矗立せず多くは屈曲せり　此君の節も印度にてはあまり尊からぬにや　バンヤン樹を見る　樹枝垂れて又上る其奇驚くべし　猫は三毛猫にして小きもの多し　土犬我國のと異ならず　狂犬多しといふ　行いて湖畔にいたれば風景不忍池の如く池畔汽車の駛走するを見る　又印度兵の兵營あり　左右曲折して停車場の前を過ぎ市街にいたり又青物市場を見、印度の寺を見る　今尙建築中なり　市街の繁盛は上海に同じ　然れども家屋の宏壯なるもの尠し　地勢廣濶なるを以て香港の如き高樓を築く必要はなきなるべし　大體の樣子は新嘉坡に似たりといふべし然れども其整頓せるは新嘉坡に過ぎたり　又最著しき差別は支那商店の一軒もなき事なり　人口は十八萬　英人

は三千人ありといふ　日本人は僅に一戸ありといへり　旅館にかへりて後再び戸塚氏と寫眞鋪にいたる　六時半晩食成ると告ぐるを以て食卓に就き大にライスカレーを食ふ　七時同處を出で海岸に入り端艇を雇ひて船にかへる　聞く昨夜東行せし軍艦は日本新造艦朝日なりと　ビール數杯を傾けて甲板に臥す　涼風嫋々として身の熱帶に在るを忘る

十月二日(火曜)　印度人多く甲板に來りて土産を賣る　寶石、象牙細工等なり　船の周圍には例の錢拾ひ舟集まりて頻に喋々す　其舟平たき板を二三枚つなぎたるものにして櫂は竹を二つに割りたるものなり　其簡單なる事比類すべきもの無し　端艇をこぐ櫂は飯の箆の如きものなり　これ亦一奇とすべし　裸體なる兒童の七八人同聲にて唱歌をうたひつゝ右の手を脇腹にうち當てゝ拍子をとる眞に噴飯すべし　印度人の物を賣る共ひつこき事支那人にも超えたり　又多く日本人の證明狀を携ふ　中にはこの野郎の物は僞物にして氣を附けて買ふべしなど書きたるものあり　得々として余等に示す　十時半にいたり解纜す　昨夜獨乙の船兵卒二千五百を載せて入港す本船出發に臨みて互に呼應する聲は海若を驚かすべし　夜雨あり　謠曲をよむ

十月三日(水曜)　晴天にして風あり　幾多の汽船に逢ふ　晩餐の頃右にラクレテンの群島を見る　夜風雨大にいたる　謠曲をよむ　夜氷を取寄せて朝日ビールを傾く　朝日ビールこゝにつく

十月四日(木曜)　晴天　風あり　終日船を見ず　無聊甚し　夜月色玲瓏海波を照し好景寢に就き難し　藤代氏とウイスキー、アポリナリスを飲む

十月五日（金曜） 晴天 海波全く無し 名にしおふ大洋も平坦疉の上を行くが如し 肩大にこるを以て下劑を用ふ

新嘉坡所見

亭々椰子直參天 荷葉蓋池大似船 熱國一分有秋意 蟲聲唧々草間傳

コロンボにて印度人の手品師船上に來りて種々の技を爲せり 瓢箪を以て作りたる笛を吹く 其音我國の飴屋の如し コブラといふ蛇を使ふ 數番を爲し終へて見物人より錢を乞ひかへりゆけり

十月六日（土曜） 午後船の動搖やゝ甚し 四時頃大魚の波間に飛躍するを見る イルカなるべしといふ 此日正午の榜示にコロンボを距る事一千三百四十一浬なりとあり ソコトラの島近くにありといへどもみえず 藤代氏

はるぐ＼もきぬるものかな見渡せばすぐそことらの島もみえけり

十月七日（日曜） 藤代、戸塚二氏と試に耶蘇教の獨語說教を聞く 夜月色玲瓏金波搖曳正に十五夜に當れり 夜藤代、夏目二氏と甲板に談じて十一時にいたる

十月八日（月曜） 朝陸地を認む 午後にいたり遙にアデンの山を見る 夜十時頃アデンに入る 土人早く短艇に乘りて駝鳥の卵、羽毛、籠等を賣りに來る 明朝出發すべしといふを以て上陸せず 十二時過はじめて船室に

下る　今夜月明昨日の如し

十月九日（火曜）　暁起　蓬窓下に幾多の小舟ありて土人の産物を賣るあり　紙巻一箱を購ふ　價一シルリング六ペンスなり　船客中駝鳥の卵、水牛の角等を買ふもの多し　土人毛髪縮れて赤く印度人に似て稍醜なり　アデンは全く赭山にして一樹蔭なし　すべてこの邊の島嶼皆巖石兀立して狀貌奇怪なれども寸綠なし　午前九時半拔錨　午後五時頃紅海に入る　其入口はいはゆるバベルマンデブの海峽にして涙の岬の義なりといふ　この處左右に岩山突兀として暗礁亦尠からず　往古帆前船にてモンスーンに遭遇すれば進退谷まる處なるを以てこの名ありといふ　左右共に英國の砲臺あり　夜月明眠るを忘れしむ　スツツトガルト東行す

十月十日（水曜）　暁起　左方に幾多の小嶼を見る　しばらくしてみえず　今日汽船に逢ふこと四五艘に及ぶ　暑熱頓に加はる　はじめて熱帶の暑熱を感ず　ラムネをのむこと頻なり　夜に入り上等船客の催にて舞踏會あり　この暑熱に數番の舞蹈とは醉興の至なりと笑ふ　月色昨夜の如し

十月十一日（木曜）　朝夏目君と英語說教を聞く　炎威昨日に比してやゝ衰ふ　午餐にライスカレーあり豪啖衆を驚かす　薄暮左右に四五の島嶼を見る　夜氷を喫す　甲板の上同行諸氏と談じて十一時寢室に下る　今日冷水浴をなす

十月十二日（金曜）　暁起　右方に一燈臺を見る　榜示に曰く今夜十時郵便締切なりと　夏目氏耶蘇宣教師と語り大に其鼻を挫く　愉快なり　戸塚氏船醫を訪ひて衞生上の事を注意す　夜八時頃右にシナイの山を見る　九時

月出づ　紅海いよ〳〵狹うして燈臺前後應接に遑あらず　冷浴昨日の如し

十月十三日（土曜）　六時離䑺　甲板にいづれば左方一帶に赭山を見る　右方亦陸を見れども稍遠し　すべてこのあたりの山寸綠なくして赤色の禿山のみ　これ紅海の名ある所以なり　朝餐後間もなく蘇士に着す　遠望家屋と不毛の野のみにして草木を見ず　檢疫醫來りて一同を檢査し去る　土人來りて種々の物を賣ること例の如し紙卷煙草、腕飾、寫眞等なり　ジェルサレムの草花を以て押繪を製したるもあり　寫眞及郵便はがき數葉を購ふ午後二時出發す　運河の兩岸は茫漠たる曠野にして全く不毛なり　運河の長さ八十哩といふ　其幅は甚だ狹し我がプロイセン號は吃水二十三尺にして運河には二十四尺以上の船舶をして通ぜしめずといふ　岸上遙に見渡せば例の赭山連亙無際處々駱駝の相連りて行くを見る　河畔合圖の爲めに設けたる屋舍所々に在り　其近傍には多少の草木あり　薄暮　Bitter　湖を過ぐ　すべて運河の中湖水ある事四つ　之を利用してこの大工事をなせるなり　湖中三四の漁舟の魚を捕ふるを見る　曳網にておしつめゆけば魚の飛ぶ事さながら落葉の散るが如し　誠に壯觀とす　夜十時月出づ

十月十四日（日曜）　三時頃喧嘩の甚しきを以て目覺む　船は早くポートサイドに在り　殘月天に在り冷風膚を襲ひ自ら秋意の乾坤に滿つるを覺ゆ　再び一睡して六時甲板に出づ　土人の產物を賣るもの已に甲板に集まる　輕業師ありて技を演ぜんことを乞ふものあり　又一扁舟三四の男女ありギターを彈じつゝ錢を乞ふ　淸楚愛すべし　其音調はいたく淸樂に似たり　郵便はがき數葉を購ひ直に之を認め投函せしむ　八時出港　港口運河工事の

設計者デオシー氏の銅像あり北歐洲に面して立てり　十時頃左方に一市街を見る　其名を知らず　午後荷物室にいたり黒服を取出して之を穿つ

十月十五日（月曜）　朝喫煙室に在りてアルベルト號乘組乘客表を見る　之によりて松本亦太郎氏十月十六日ネープルスより乘船歸國の途に就くを知る　北風寒くして堪へ難し　船中ビール盡きてシエンケの戸閉づ　荷物をベルリン停車場に送る樣荷物掛に依賴す

十月十六日（火曜）　午後荷物藏に入り荷物の入替を爲す　この日食卓給仕其他に手當を與ふ　食卓給仕二十五馬克、船室給仕二十馬克、湯番十五馬克なり　明朝メツシナの海峽を過ぐべきを以て今夜早寢せんとて一同十時頃就寢す

十月十七日（水曜）　朝五時頃藤代氏の呼覺すに驚きて甲板に上れば兩岸に陸地を見る　其間甚だ狹し　然れども尙未だ海峽に至らず　下りて船室に入り六時再び甲板に出づ　この時は船已に海峽を通過せり　五分時を後れしを悔ゆ　風呂番のおやぢ戸塚氏に向つて手當の少きを訴へたりと聞く　歐洲人の面の厚きことこれにて知られたり　朝餐の頃左方にストロンボリーの火山を見る　形少しく富士山に似たり　山麓に白壁の相連るを見る　郵便締切午後五時の掲示あり　地圖を見るに緯度は已に靑森に同じ　北風の寒きもげにもと首肯す　五時頃カプリの島を見る　斷巖絶壁洞門もありて奇勝多きが如し　獨乙人の多く遊覽するところなりといふ　同島を過ぎて右の一岬角を曲ればヴエスヴイアス山雲際に聳ゆ　其麓一帶白屋相連りて風光畫の如し　北方遙にナポリの市街を

見るやう〳〵近づくに隨ひて船舶にあふ事いよ〳〵多し　六時ナポリの港に入る　街燈煌燿一種の美觀たり
港上ケミニツヒアルベルト號亦碇泊す　相距る事僅に數十間なれども今夜は檢疫濟まざるを以て上陸を許さず
松本氏等の一行に逢はざりしは遺憾なりき　九時半アルベルト號拔錨して去る　細雨霏々として來る　姉崎氏の
書を得

十月十八日(木曜)　曉六時喇叭の聲に目覺むれば檢疫醫來れりといふを以て起く　朝餐の時刻檢疫醫去る　船
の周圍已に幾多の案內者、旅館の手代等群がり來り喧嗷なること他の諸國に同じ　賣物には菓物、花束、腕飾等
あり　繪はがき數葉を購ふ　案內者の一人林學博士河合氏の證明狀を有するものあり之を雇ひて一同小蒸氣に下
る　埠頭を出でゝ一馬車に搭乘す　コロンボに上陸せしより陸を蹈まざること十八日今始めて歐洲の地を蹈む
快何ぞ極まらむ　案內者は余を導きて先づ同所のジエスウイツト寺院に至る　大理石を以て裝飾の美を爲し壁畫
天井畫等大作多し　金色燦爛人をして其莊嚴なるに驚かしむ　僧侶あり經を誦す　圓頂にして赤色の衣を穿つ
宛然佛僧の如し　大體の有樣寺院に似たるもの多し　次で又他の二寺を見る　第二のは古寺なるが如し　案內者
一々其由來を說き壁畫をはじめ種々說明したれども今皆忘れたり　多くのチヤペルありて所々に聽聞の信男信女
多く群集せり　神壇の左側細き入口あり案內者曰くこれ懺悔場なりと　聞くこの處尼寺にして懺悔場はたま〳〵
以て密賣の場なりと　果して然るや否や　いづこも結構の壯大なる裝飾の莊嚴なるは我國佛寺の及ぶところに非
ず　多くの善男女の殊勝氣に念佛するも流石にむかしの樣思はれたり　寺院の入口には多くの乞食ありて錢を乞

ふ　甚しきは稱名に餘念なき善女の手を出して錢を乞へるあり　この國の風俗もおしはかられたり　船上に來る案内者、物賣の如きも誰に向つても卷煙草をねだるなり　寺院を出でゝ博物館にいたる　同館には種々の彫刻物等珍奇貴重なるもの多し　就中ポンペイの遺蹟より發掘せし壁畫、器具等多く陳列せられたり　彫刻物には大理石のも金銅のも皆美術史上に有名なるもの也　かつて書籍の上にはお目にかゝりしもの多けれども專門ならぬ身の一つも記憶に存せぬぞ殘念なる　ポンペイの遺物多きが中に金環に指の骨のその儘附着せる如何に當時の天災の猛烈なりしかを想はしめ千歲の下人をして寒心せしむるに足れり　硝子器等種々あり　又婦人裝飾等の具等を見るに其贅澤なる實に驕奢の極點に達して天譴を蒙りしには非ずやと疑はしむ　戲場の切手として使用せられたる瀨戶物の鳩、頭蓋骨等色々あり　その階級によりて切手に種類あるなり　ポンペイ全體の模型もあり　この日十二時出帆に付ポンペイに遊ぶ暇なかりしかどもこの博物館に遊びて已に其大要を知り得たる心地せり　十時半こゝを出で王宮に至る　王宮は三百年前の建築に成るといふ　裝飾美麗にして燦爛目を奪ふ　舞蹈室、芝居舞臺等もあり　宮中のチヤペル亦美麗なり　宮中には諸官員皆喪章をつけたり　皇帝崩御後の宮中喪なるべし　案内者の擧動を見るに握手する眞似して常に一兩片の貨幣を官吏に握らしむ　これにて何事にも默々たるが如し　案内者は往々繪畫、器具等に手を附けて見る事あり　これにても官吏は一言も咎めざるなり　之をおもへば又彼國の腐敗せる樣もおもはれて坐に我宮中の森嚴なるに感淚も湧くべし　總じて此國の風は賄賂公行と聞くはさもあるべし　王宮を辭して船にかへる時已に午なり　午餐を終へて船發す　幾多の危岬前後出沒して景色頗る見るべ

し海上より遙にネープルスを見れば古來史上に幾多の事蹟を殘したる古港眼前に在り感慨無量なり　今夜晩餐には特別の馳走あり　明日ゼノアに上陸する人多き故なるべし　クナルボン／＼と唱へて辻占の如きものいづ其中には各一つの紙帽子あり　海軍形ありナポレオン形あり種々雜多なり　余一つを摘むに偶然日本人と記せるものを得たり　開けば日本流の笠なりしも一興なり　食後皆この紙笠を被りて笑ひ興ずる聲船中に滿つ　奏樂唱歌盛に起る　我國歌のなきは實に殘念なる心地す　十時寢室に下りぬ

十月十九日（金曜）　午後一時ゼノアに着す　ゼノアは丘陵によりて層々街衢を爲し遠望頗る美なり　港内巨艦多く碇泊せり　檢疫醫來り上陸者を一見して去る　午後五時頃にいたりてはじめて上陸　端艇によりて稅關にいたる　ゼノア、グラント、ホテルの若者に案内を依賴す　萬事都合よし　稅關にては何等の檢査も無かりき　ここにて明朝巴里迄の直行汽車切符を購ふ　同處を出でゝホテルの馬車に乘じ旅館にいたる　途中夜に入りたればよく分らず　グラント、ホテル、ド、ゼネはオペラの直ぐ前に在り中央繁華の處たり　三階の三室を借りて入る　裝飾善美を盡せり　獨乙のミユンヘンビーアを傾く　甘味いひ難し　リフトにて上りゆく心地まことに快し　晩餐後若者の案内にて公園にいたる　音樂會あれども聞かず　市街を散策しはがき等を買ひてかへる　歸宿の後更に戸塚、藤代、稻垣三氏と市中を散歩し無暗に目的もなく步行し裏店の如き處をいくつともなく通り來る　市街の立派なる建物の大なるはネープルスにも越えたり　歸れば已に十時なり　諸處へ安着の報知を出さんとて頻にはがきを認め夜十時にいたる

十月二十日(土曜) 鷄聲遙に聞えて曉鐘近く鳴る 驚起して旅裝を整へ旅館の馬車にて停車場にいたる 途中青物市場を過ぐ 我國の朝市と大差なし 停車場前にはコロンブスの銅像あり 停車場に入ればクツクの案內者あり之に依賴して乘車の事を世話せしむ ポーターの如きすべて佛語、以語にあらざれば通ぜず 一行中佛以の語に通ずるもの無く一時大にまごつけり 八時四五十分にいたりて汽車發す 中等車は一室八人詰なり 我等五人にて一室を占領す 速力我國のよりは稍や早きを覺ゆ 沿道の風色我國に似たる事多し たゞ處々牧場に羊牛の徘徊する白屋の點々たるを異りとなすのみ 幾多の停車場を通過してアレツサンドリアに達す こゝにては昇降やゝ盛なり 再び發車してトリノに到着せしは十二時半頃なりき 停車場前の Hotel de Suisse-Français と いふ一旅館に投じ午餐す 午餐の後戶塚、藤代、稻垣三氏と市中を散步す トリノ市は街衢整然として大通りの如き頗る立派なり エマニユエル二世の銅像あり 四時四十分再び停車場にいたり巴里行急行汽車に搭ず 乘客多くして五人一室に入る能はず 余と稻垣氏と一室に入り他の三氏は別室に入る 八時頃モダンに着す筈なりしが一時間ばかり後れたり 食事車に入りて麥酒、葡萄酒、パン等を喰ひ室にかへればモダンに着す この地已にアルプス山中に在りて以佛兩國の境界にあたれば佛の檢稅吏來りて荷物を檢査す 但し我等が車に入りしものは夫婦連の男の荷物を一寸檢査せしのみにてあとは少しもみず すべて儀式的のものなり このあたりアルプス山中にて晝ならば面白かるべけれども夜故分らず 汽車の速力非常に早きを以て動搖もはげしく頭を出して車窓外を見るも危險なる心地す 車室內轟々として半眠半醒の中に多くの停車場を通過しゆく 同乘の佛人夫婦あり頻

に接吻す　已にして天やうやく明く　黄葉の樹林平野に相連る　著き喬木は少し　九時頃巴里里昂停車場に着す　巡査に問ひ馬車二輛を雇ひまづ正木氏の寓を Rue de Belles Feuilles に訪ふ　正木氏は不在、渡邊氏一人あり　一同少憩朝餐を饗せらる　已にして同氏とともに Rue de Gustave Courbet 22 なる Mme Naudin の家にいたり空室ありやと問ふ　幸にして空室數箇あり　よりて午後引越の契約をなし同氏とともに市街を散歩し凱旋門にいたる　それより日本公使館にいたる　公使栗野氏に面會　たま〳〵驟雨いたる　雨やどりして出づ　夕方夏目氏、渡邊氏とともに停車場にいたり預けおきたる荷物を取りにゆく　余は藤代氏とともにマラコフ街なる池邊氏の寓を訪ふ　同氏亦魯西亞旅行中にて不在なり　夜一行の諸氏とヴイクトル街に晩餐を喫してかへる（以上十月二十一日）

十月二十二日（月曜）　午一行とヴイクトル街に午餐し渡邊氏を訪ふ　同氏の案内にて博覧會にいたる　まづトロカデロよりエッフエル塔に上る　塔上にて故郷の知友等へ手紙を出し塔上に氏名を署して下る　それより Champs de Mars の教育館等を巡覽し其規模の廣大なるに驚く　又 platform mobile に乘りて Ville de Paris 館の前に下り日本茶店の前を過ぎて出づ　歸途渡邊氏の寓に午餐し晩餐後同氏の案内にて地下鐵道に搭じ Grand Boulevard に遊ぶ　燦爛たる夜色眞に不夜城の如し　一咖啡店に麥酒を傾け再び地下鐵道にてトロカデロにかへり歸寓夜一時

十月二十三日（火曜）　朝九時樋口勘次郎氏來訪　同氏とともにトロカデロ附近にて午餐を喫し余と藤代氏とは

寓にかへる　谷本氏來訪の約あるを以てなり　三時同氏いたる　同行の諸氏亦歸寓　相共にヴイクトル街の日本料理店にいたり蕎麥、天ぷら、味噌汁を食ひ久しぶりにて日本酒、米飯をくふ　同店にて大島氏、細井氏等に逢ふ　木原氏の訃を聞く　實に氣の毒の至也　九時同處をいで谷本氏に伴はれてグランブールヴアールにゆき　Casino de Paris, Tavern Olympia 等に遊ぶ　いづれも巴里不夜城にして消金窩なり　其繁華人目を眩し驚駭に堪へざらしむ

十月二十四日（水曜）　朝谷本氏來る　藤代、戸塚二氏とともに博覽會前の一店に午餐を喫し美術館に遊び繪畫彫刻の陳列を見る　日本の畫如何にも見苦し　歸途しばしばビーアを飲みてかへる　今夜は寓居にて主婦と倶に晩餐を喫す　建部氏來訪

十月二十五日（木曜）　一同渡邊氏を訪ふ　正木氏已に歸宅せり　久濶の情を慰す　それより稻垣、夏目、藤代三氏と博覽會にいたる　platform mobile に乘りて美術館にいたらんとし余獨り早く下り衆を待てども來らずひとり諸處を散歩し買物をなして歸寓　晩餐を渡邊氏の寓に喫す　岡田氏亦いたる　笑談大に賑し

十月二十六日（金曜）　夏目、藤代二氏と博覽會にいたらんとし路雨降りいでしかば Place de la Concord の近傍にて午餐を喫し歸宅　午後樋口氏來訪　夜渡邊氏の寓に晩餐す

十月二十七日（土曜）　今朝はよく晴れたり　朝藤代、夏目兩氏と博覽會に入り工藝館及機械館等を巡覽　午後四時頃歸宅　晩餐は渡邊氏宅にて喫す　歸途 Étoile の邊を散歩してかへる

十月二十八日(日曜) 夏目氏八時頃ロンドンに向つて出發し去る 余等も亦九時結束十時馬車二臺をあつらへて(Gare du Nord)に向ふ 十一時着 荷物を預け同停車場前の一屋にて午餐 其高價なるに驚く 一時五十分發車平原の間を過ぎて夜十時頃 Herbesthal に着す こゝにて稅關の檢査あり 同じく儀式的なりき 同停車場內に料理店あり麥酒數杯を喫し葡萄酒一瓶を購ひて汽車に入る 十二時ケルンに着 同所にて車を乘り換ふ ここにいたりて余と戶塚氏とは一車に在り藤代、稻垣氏とは別の車に入る 夜に入りて雨降る 汽車 Dortmund にいたる頃停車場內に多數の人あり余等を認めて支那人なりとし頻に譏謗を極む 腹立てども詮方なし 曉ブランデンブルクを過ぎてワイデルの池を眺めつゝ九時頃伯林ポツダムの停車場に入る 藤代氏と同道まづ福原氏の寓を訪ふ 不在なり よつて荷物をそこにあづけ立花氏の寓にいたる 同氏、吉田靜致氏とあり 同道して午餐を喫し再び福原を訪ふ 不在 立花氏の寓にかへれば近角常觀氏もいたる 晚方福原來る 立花氏に依賴して同氏の寓に湯沐を爲す 爽快比なし 今夜立花氏の寓に宿す(以上十月二十九日月曜)

十月三十日(火曜) 立花氏に拉せられて藤代と二人諸處の貸間を搜索す 余はゲルハルト街の一屋に空室を認め來る 一日引移るべき旨を約してかへる それより同道公使館にいたり井上公使に面會 又書記官倉知氏其他にも面晤す 戶塚氏もついで來る それより午餐を喫して歸寓 藤代氏は立花氏の筋向ひの一室を借りたるを以て今夜は同氏の寓に一泊する事に決す

十月三十一日(水曜) 立花、吉田、藤代三氏とライプチツヒ街よりウンテル、デン、リンデン街を散步しライ

プチツヒ街に午餐し洋服店にいたり外套一領をあつらへ獨乙銀行にゆき爲替四百馬克を受取る　歸途立花氏に晩餐し十時かへる

十一月一日(木曜)　立花、吉田、藤代三氏とチーヤガルテンを散歩し晩秋の風光を賞す　落葉繽紛として雨の如し　獅子橋を過ぎて運河に傍ひ橋畔の一屋に午餐す　林海軍中佐、林博太郎等の諸氏に會す　それより歩して寓にかへり馬車を僦ひてゲルハルト街に引越す　薄暮福原を訪ひともに祝辰巳氏を訪ふ　同氏は來る四日倫敦に出發すべしといふ　ついで立花を訪ひ藤代等五人にて晩餐を喫せんとて Kringer にいたる　諸氏余が寓に至りて談じて十一時にいたる

十一月二日(金曜)　藤代氏、吳氏とともに來る　よりて共に伯林大學にいたる　藤代氏入學の手續をすます　余は旅行劵をわすれたるを以て其手續をなす能はず　來る五日に來るべき旨を約してかへる　歸途大學圖書館等を一見し某店に午餐す　立花、吉田二氏亦來る　それよりオムニバスにて吳氏の寓を訪ひ閑話少頃街上にいでライプチツヒ街にいたり有名なる Tietz の勸工場に入りて萬年筆其他の買物をなし吳氏と別れ鐵路馬車クリミナルゲリヒトにいたりクリユーゲルに午餐す　福原氏亦いたる　同店をいでゝ一同藤代氏の寓にいたり十時歸宅

十一月三日(土曜)　我が國の天長節日　ことに麗なり　朝ライプチツヒ大幸勇吉氏の書狀と和田萬吉氏九月十四日投函の一書とを領收す　今日より毎朝牛乳半リツトルを飮む事に決す　午前立花氏來訪　ともに公園内を歩してルイゼン記念碑の邊より戰勝路にいたり戰勝塔に上る　夜日本公使館にて夜會あり　晩景より之に赴く　來

會者百餘名　半ばゝ大學出身の留學生、半ばゝ軍人なり　シヤンパンの美酒に醉ひて十時過迄談笑　身の萬里異郷に在るを忘る

十一月四日　曇　朝福原來る　ともにリユベカ街のケツトナーを訪ひ語學を習ふ事を約束し明日より來る事に決定す　歸途クリユーゲルに午餐

十一月五日　晴　午後ケツトナーにゆき歸途クリユーゲルに晩餐　この日午前大學にゆき入學式を濟ます　學生劵二四三〇を受領す

十一月六日　晴　午前藤代を訪ふ　戸塚亦いたる　立花も同斷　ともに歩して稻垣を訪ひそれより戸塚と歩してレールテル停車場にいたる　荷物を受取らん爲なり　場所違ひて目的を達せず空しくかへる　ケツトナーは斷りて行かず

十一月七日　晴　朝立花來る　ともにインヴアリーデン街なる自然科學博物館を見る　動植鑛物等の陳列品あり　歸途クリユーゲルに午餐

十一月八日　晴

十一月九日　曇　朝チーヤガルテン近傍を散策す　途倉知及巖谷二氏に邂逅す

十一月十日　小雨　立花氏とチーヤガルテンを逍遙しクリユーゲルに午餐　余が寓にいたり少時談話の後立花氏の寓にいたり藤代氏と同道倉知氏の寓にいたる　福原已に在り　松本亦いたり日本酒、日本食の馳走になり談

話十二時にいたりて歸宅す

十一月十一日　雨　午クリューゲルに午餐　福原と雨を衝いてポツダムにいたり汽車にてクリーデナウに赴きランゲ氏を訪ふ　半時間餘談話　日本童話の研究一冊を得てかへる　歸途淸水澄氏を訪ふ　松本氏亦在り　少頃にして去る　歸途亦汽車にてベルヴューにかへる　夜福原、立花二氏余が寓に晩餐す

十一月十二日　朝戸塚氏を訪ふ　不在　近傍を散策してかへり夜再び之を訪ふ　宮本氏亦在り　日本の新聞を見てかへる　歸途平井氏に逢ふ

十一月十三日　曇　今日頗る寒し　朝立花來る　戸塚氏亦いたる　立花氏とトルム街の近傍を散策しカフエ（原文缺字）に午餐　英字新聞をよみ二三獨字雜誌を購ひ歸宅　三時再びケツトナー氏に赴く　夜立花氏の寓に入浴葡萄酒一杯を傾けて歸宅す　上田氏に柬す

十一月十四日　曇　朝藤代來る　ともに近隣のワイン、ストワーベに午餐し山口を訪ふ　不在　少頃森氏の許に談話　歸途立花を訪ひ四時辭しかへりケツトナー氏の許にゆく

十一月十五日　雨　九時起きて畑氏の手紙を認む　立花來訪　ともにクリューゲルに午餐し一書肆につきてアルバム一冊を購ふ　それより小公園を散歩し福原を訪ふ　三時半同處をいづる時井上友一、淸水澄二氏の來るに逢ふ　晩餐後近傍を逍遙し藤代氏を訪ふ　不在　立花氏を訪ひ少頃去る　歸宅すれば藤代、山口二氏來談　十時を過ぎて去る

十一月十六日　曇　朝立花氏と歩して書肆マヤーにいたる　それよりパツセージにて郵券、寫眞等を購ひ午餐汽車にてベルヴユーにかへりケツトナー氏にゆく

十一月十七日　曇　朝立花とともに再びマヤー、ミユラーに行き書物を注文す　たま〳〵山口と逢ふ　三人にてワルデンダムに午餐し歩してかへる　二人歸途我が寓に立寄る　福原亦至る　夕方理髪鋪にいたり散髪し晩餐後立花を訪ひ十時歸寓

十一月十八日　雨　十一時藤代を訪ひともに立花にいたり同道してクリユーゲルに午餐　午後山口を訪ひ同處の娘二人とベルヴユーより汽車にてヤノウイツ停車場にいたり體操場にいたり女子體操の演技を見る　四十八人ばかりの演技にて別に變りたる事も無し　歸途ベルヴユーの近處にて晩餐してかへる

十一月十九日　雨　クリユーゲルに午餐　山口に逢ふ　ケツトナーにゆき歸りて後立花を訪ふ　福原、藤代、渡邊董之介氏を伴ひて來る　談じて十時にいたる

十一月二十日　雨　クリユーゲルに午餐　山口、藤代、福原亦いたる　美濃部俊吉氏に邂逅す　歸途藤代余が寓にいたる　同道してリユベカ街にいたり余はケツトナー氏に赴く　歸宅すれば福原在り　立花亦至る　談論夜十二時にいたる　ランゲの許より二十五日招待の報あり

十一月二十一日　快晴　この日はブスタツハなり　朝立花、藤代を訪ふ　皆不在　福原を訪ひ談話少頃クリユーゲルにいたる　藤代、山口等あり　去つて山口の寓にいたり菓子の馳走になる　會〻山口の語學教師ザイヤー

來る　相俱にベルヴューの停車場よりグルネワルトにいたり松林の間を歩す　已にして日暮る　一洋酒店に入り麥酒數杯を傾け歩して（原文缺字）停車場にいたり再びベルヴューにかへり晩餐を喫す　歸途藤代を訪ひ山口及宿の娘二人とかるたを弄し十一時辭しかへる

十一月二十二日　快晴　午後曇　朝宿をいでウンテル、デン、リンデンを散歩し十二時過歸宅　立花氏いたる　晩食後ともに近傍を散策す

十一月二十三日　晴　朝近傍を散歩しクリューゲルに午餐　午後ケツトナーにゆく　晩立花氏いたる　晩食の後近傍を散歩しツルム、ストラーセにて若干の郵券を購ひ來る　歸途立花氏寓を訪ひ少頃辭しかへる

十一月二十四日　曇　朝藤代を訪ひともに大學にいたりヘルマン氏の文學批評法を聽講す　それよりウンテル、デン、リンデンを歩してかへる　立花亦來訪す　夜單身近傍を散歩し齒磨一つを購ひてかへる　夜新年賀狀三十通を認む

十一月二十五日　曇　夜小雨　朝立花を訪ふ　藤代亦いたる　ともにノルレンドルフ、プラツツにいたる　余はそれより電氣鐵道に乘じてランゲ氏を訪ふ　門前にて淸水、井上二氏に逢ふ　二氏亦同氏の饗應に與かるなり　四時半頃同氏を辭しヅオーロジカル、ガーデンよりベルヴューにいでゝかへる　今日はトーテン、フエストなりといふ　士女花環を持して墓參を爲すもの多し

十一月二十六日　曇　朝大學にゆく　ウンテル、デン、リンデン街を散歩して十時歸宅　午後藤代、山口來訪

ケツトナーにゆき歸途立花を訪ふ　正木、岡田の一行明日來着の報を得　晚書肆來り四五の書を購ふ

十一月二十七日　曇　今朝はじめて家信あり　又佐村氏の書を得たり　家信は十月十六日認むる所なり　午後ケツトナーにゆき歸途福原を訪ふ　同氏の晚餐するを待ちて同道して立花を訪ひ今夜十時岡田、正木兩氏をフリードリツヒ停車場に迎へんことを相談　福原、立花二氏余が寓にいたり九時半迄談話　それより停車場にいたる　十時半正木氏等到着　余は立花氏と歩して寓に歸る　新聞紙九月十五日より十月十五日に至るマヽ到着す

十一月二十八日　晴　九時起くれば立花、福原二氏至る　同道してポツダメル、プラツツなる正木氏等の宿を訪ひ少憩の後ライプチツヒ街より歩してミツテル街にいたり午餐　ウンテル、デン、リンデン街を歩しジーゲス、ゾオンの邊にいたる　余は別れて歸宅　ケツトナー氏にゆき六時歸宅す　ネツトー氏の Japanischer Humor 至る

十一月二十九日　曇　朝立花を訪ふ　不在なり　夜再び訪ふ　又不在　藤代同斷　夜福原來訪

十一月三十日　曇　夜雨　朝立花氏を訪ふ　しばらくして福原亦來る　よりてともに歩してクリミナル、ゲリヒトにいたり兩氏は岡田氏等を訪はんとて出で行く　余はウンテル、デン、リンデン街にいたりスパイヤー、マヤー等の書肆にいたり代價を拂ひフアルケンベルヒに午餐　春木一郎氏に邂逅す　歸宅後ケツトナーに行く　晚山口氏來訪　夜九時其寓にいたりザンデルの獨語自修書をかり來る

十二月一日　曇　朝微雨　朝歩してフリードリツヒ街にいたり以太利料理店に午餐　歸宅の後立花來訪　ともに正木、岡田の寓にいたる　已にして歸宅　立花、福原は明後日出發に付切符購求の爲めフリードリツヒ街に赴

くなり　夜立花再び來訪す　友田の信あり

十二月二日　晴　朝立花を訪ひ少頃の後ともに正木、岡田の寓にいたる　渡邊氏亦在り　六人同道にて Sorrent に午餐　ベルヴューより汽車にてグルネワルトにいたり近傍の池畔を散歩す　ヤーグトシュロスの近傍にてビーアを傾け月明に歩してかへる　本日の天氣は當地稀に見るところなり

十二月三日　快晴昨日の如し　朝立花氏を訪ひそれより動物園に遊ぶ　園內頗る廣濶にて奇獸少からず獅子の吼ゆるを聞く　如何にも物凄きものなり　十二時同處を出で丶停車場前の一料理店に午餐し汽車に搭じてかへる　晩近傍を散步して山本、山元、福井、谷本等へはがきを認む　今夜立花、正木、岡田三氏墺國に向つて出發す

十二月四日　雪　雨　午前雪あり　今年の初雪なり　午後ケツトナーにゆき晩藤代を訪ふ　不在　道路すべりて步行に難し

十二月五日　雨　曇　朝近隣を散步し稻垣氏を訪ふ　麥酒の馳走になりてかへる　午後ケツトナーに赴く　井上、菊池兩先生に柬す　ドレスデンより立花、福原、正木の便あり

十二月六日　雨　朝藤代を訪ふ　渡邊氏亦在り　少頃談話の後辭してパウル街なる浴場にいたり一浴　クリユーゲルに午餐　夜再び藤代氏を訪ひかるたを弄してかへる

十二月七日　雨　朝步してフリードリツヒ、ストラーセにいたりワイテンダム料理店に午餐　午後ケツトナーに行き晩藤代氏を訪ふ　今日貨幣入（六七馬克在中）を失ふ　多分はケツトナーの家にて失ひしならん

十二月八日　快晴　朝藤代氏を訪ひそれよりチーヤガルテン近傍を散歩しクリユーゲルに午餐　午後藤代氏來訪　同氏より三十馬克を借る　金未だ着せざればなり　夜藤代氏とともに晩餐を喫す　會〻稻垣氏亦來訪　ともに步して同氏の宅にいたる　同氏の宿の主人ビルンバウムとかるたを弄してかへる

十二月九日　快晴　朝步してポツダメル、プラツツにいたりライプチーゲル、ホーフに午餐　人類學博物館にいたり見物す　館は三層造にして最下層は重に獨乙諸邦　二層三層に外國のを集む　日本の部も可なりに集まりたり　然れども極めて近代の錦繪、子供のおもちやの類にして古代の物なし　能の面少しくあるのみ　フロレンツ氏の神祭の道具もみゆ　同案内一册を買ひ馬車にて歸宅　不在中藤代氏二回來訪の由　谷本の信あり

十二月十日　雨　曇　朝近傍を散步し富籤屋にいたり午餐はゼルヴスに於てす　午後ケツトナーにゆき歸途藤代氏を訪ふ

十二月十一日　曇　朝インヴアリーデン街よりフリードリツヒ街にいたり露店にてゲーテ全集の零本十五册を四馬克にて買取り電車にてかへりクリユーゲルに午餐　午後ケツトナーにゆく　今日家信あり　直に返事を認む　竹村病氣の由を聞き見舞狀を出す　石原にも手紙を出す　マヤー書店より喜劇論をもち來る

十二月十二日　雨　坂本、佐村、中村へ手紙を出す　朝藤代氏を訪ひともに近傍を散步しクリユーゲルに午餐　同氏余が寓に立寄り晩景去る　余はケツトナーに行く　夜アストン日本文學史の批評を認めて夜二時にいたる

十二月十三日　曇　朝チーヤガルテンの中を散步しパウル街の浴場にいたる　途中倉知氏に逢ふ　午後再び散

歩してチーヤガルテンにいたる　歸宅すれば松原榮氏の手紙あり　一兩日滯在の由記したり　よりて晩餐後マルハイネツク、プラッツ迄馬車鐵道にてゆき同氏に逢ふ　同縣人長谷川吉太郎及惠美といふ人に逢ふ　十時辭しかへる　惠美氏余におくるに日本茶を以てす　今日家鄕より十月十五日――三十日の新聞來る　閲讀二時にいたる

十二月十四日　晴　朝藤代を訪ひともに歩してウンテル、デン、リンデンにいたりフリードリツヒ街よりライプチツヒ街にいたり一馬克店にて人形二箇及兵隊のおもちや等を購ふ　松原氏に托して家鄕におくらんが爲なり　午後ケツトナーにゆく　歸途リユベカ街にて尙玩具數品を購ふ　夜藤代氏を訪ひ少頃辭しかへる　渡邊氏ライプチツヒよりの信あり　フロレンツ氏へアストン文學史批評を郵送す

十二月十五日　曇　朝松原、長谷川二氏來り談じて一時にいたる　兩氏辭し去る後クリユーゲルに午餐歸宅す　午後五昨頃藤代氏來談　少頃去る　大西祝氏の訃音を聞く　夜近傍を散歩す　斯波貞吉に束す

十二月十六日　雨　後晴　風あり　朝文部省より三月十五日卅一日に至る學資送附の通知書を受く　十時藤代を訪ふ　ともに歩してリツツオー、プラッツにいたりアルブレヒト、ホーフに午餐　長岡外史、林博太郎二氏に逢ふ　それより松本文三郎氏を訪ひ談話少頃辭し歸る　歸途藤代氏寓にいたり咖啡を喫す　夜作文敎範を校閲す

十二月十七日　朝イングアリーデンよりウンテル、デン、リンデンを歩しチーヤガルテンを通りてクリユーゲルに午餐す　午後藤代氏來訪　夕方去る　ケツトナーにゆき歸りて晩餐の後藤代氏を其寓に訪ひともに森孝三氏を訪ふ　十時半歸る

十二月十八日　快晴　朝藤代氏を訪ひ公使館にいたり官報、新聞等を閲覧す　それより歩してクリユーゲルにいたり午餐　藤代氏余が寓に來りて談話　三時ケツトナーにゆく　今朝立花、福原ブダペストよりの便あり　薗田にカルテをおくる　下宿の婆にハンケチ一打をワイナーツ、ゲセンクとして遣はす　大に喜色あり　夜作文教範、口語式等を校閲す

十二月十九日　快晴　夜雨　朝藤代氏を訪ひ二十五馬克を借る　共に歩してウンテル、デン、リンデンにいたりスパイヤーにてフロレンツ氏の詩集二冊及び子供の本一冊を買ひ來る　午餐はクルツワネツクに於てす　歸途ノイ、ウイルヘルム街にて印判一箇を誂ふ　藤代氏余が寓に立寄レツシング一冊を持ちゆく　午後ケツトナーに行き扇一本及ハンケチ一箱、詩集二册を歲暮としておくる　夜宿の婆に尙扇子二本をおくる

十二月二十日　晴　朝藤代氏を訪ひ少頃の後パウル街の浴場に一浴　クリユーゲルに午餐　午後少しく風氣を覺えたるを以てベツドに寢て近松等をよむ　夜九時頃藤代氏來訪十一時迄談じて去る　友田の作文教範五、加部の口語式校正濟の上日本へ郵送す

十二月二十一日　雨　朝歩してジーゲス、アレーよりウンテル、デン、リンデン街にいたりライプチーゲル、ストラーセにゆく　それより引返してジーゲス、アレーを通りクリユーゲルに午餐　午後ケツトナーにゆく　夜近松戲曲をよむ　立花ザルツブルグより便あり

十二月二十二日　晴　朝藤代氏を訪ひともにジーゲス、アレーにいたる　同處に石像の除幕式あればなり　始

めて獨乙皇帝及皇后の同車して行かるゝを見る　儀式極めて簡單なり　正午クリユーゲルに午餐　森、美濃部二氏に逢ふ　午後藤代來訪　藤代去る後ケツトナー、內山二人來談　日本茶を饗す　稻垣氏グレテーを伴ひて來訪少頃にして去る

十二月二十三日　曇　福原ミユンヘンよりの信あり　朝藤代を訪ひそれよりノルレンドルフ、プラツツにいたり電車に乘じてクリーデナウにいたりランゲ氏を訪ふ　在宅　ワイナーツ、ゲセンクとして書籍一冊及扇子一本をおくる　少頃の後辭して再び電車にてノルレンドルフに戾りフオーゲスにて午餐　チーヤガルテンを步してかへる　夜藤代氏を訪ひ同氏寓にて晚餐　會〻森氏も來る　縱談ビーアを傾け九時にいたる　それより再びクリユーゲルにゆき尙數杯を傾け十一時歸寓

十二月二十四日　曇　寒威頗る强し　立花ミユンヘンよりの信あり　朝藤代を訪ひ同道して森を訪ふ　不在帽子をかりてかへる　それよりフイリツプ街なる吳氏を訪ひ同行して(原文缺字)街の一料理店に午餐　三時歸宅不在中山口小太郎氏來訪　五時頃戶塚氏來る　五時半ケツトナーに至る　已にキルへへ行きたる後にて不在　內山及支那人金太敘と談話　六時半頃稻垣氏を訪ふ　藤代氏亦在り　少頃辭して再びケツトナーに行く　晚餐を俱にしたる後ワイナート贈物の披露あり　醉後君が代一曲を奏す　夜十一時半歸宅　福原ミユンヘンよりの便あり其狂詩に次韻を試む

十二月二十五日　曇　朝中央銀行より金子入の書狀を受領す　森氏を訪ひ帽子を返却し藤代を訪ひ同道してフ

オーゲスに午餐　巖谷氏外二三の軍人に逢ふ　食後歩して動物園停車場にいたりそこより鐡路ベルヴューにかへり歸宅　夜藤代氏來り麥酒を飲みて去る

十二月二十六日　晴　服部氏の書を得　瑞西チューリツヒより立花、福原の信あり　大幸、ゴールトアンメル、山口、福原に信す　今日珍しき晴天なり　歩してウンテル、デン、リンデンより宮城のあたり博物館の近傍を散策しクルツワネツクに午餐してかへる　夜近傍を散歩し戯曲論等をよむ

十二月二十七日　雨　朝藤代氏を訪ひともに銀行にゆき文部省の金を受取り尙藤代氏より百馬克を借る　美濃部氏に逢ひクルツワネツクにて午餐を倶にす　歸宅の後藤代氏とともに再び森氏を訪ふ　歸途グレーヴェに立寄書物四五冊を購ひ尙先月來の勘定を濟ます　夜ズボン下、ボタン其他色々の買物をなしてかへる　一月分乏今少許の金子を得て頓に蘇色あり　上田、岩谷に束す　又家嚴に信書を認む　福原、立花より信あり

十二月二十八日　雨　朝ブツセに送る手紙を認む　又パウル街に入浴す　午クリューゲルに午餐　森氏に逢ふ　森氏余が家に來る　朋黨論をもちゆく　ケツトナーにゆき歸途藤代氏を訪ふ　福原、立花ストラスブルグよりの手紙あり　渡邊氏ミュンヘンよりの便あり　福原の一行今日歸寓の由報じ來る　晩餐後マヤーにゆき立花氏の事をしらせ再び藤代氏を訪ふ　森氏亦臻る　九時歸寓

十二月二十九日　雨　朝立花、福原來る　午ともにプリンツに午餐　鐡馬にてライプチツヒ街にいたりウエルトハイム勸工場に入り又レツクスにいたる　灰おとし一箇を購ひ來る　歸途レハケに立寄岡田、正木二氏に逢ふ

七時歸宅　夜宿の婆より Egyptische Humoreske を借りて讀む

十二月三十日　曇　佐藤金造の書到る　十一月一日――十五日の萬朝同斷　坂本にはがきを出す　文部省及中央金庫に受領書をおくる　十一時立花を訪ふ　長岡大佐在り　同氏去る後立花とプリンツに午餐　近傍を散歩しズボン一つを買ふ　ゴム靴も買ふ　歸途山口氏至るに逢ふ　同行して立花氏の寓にいたる　近角氏亦來る　七時辭しかへる　夜萬朝及高靑邱詩集をよむ

十二月三十一日　寒氣頗る强し　風亦はげし　零點下十度といふ　稻垣氏の新年賀狀いたる　午前稻垣氏を訪ふ　不在　クリユーゲルに午餐　午後立花至る　其寓にゆきて帽子を借りケツトナーの饗宴に赴く　其途にて稻垣を訪ふ　夜久振にて大醉一失策あり

留學日誌（明治三十四年）

一月一日　元旦天氣快晴　日本に在るが如し　八時起く　數杯の咖啡に新年を迎へて藤代氏を訪ふ　岡田、正木、福原、立花諸氏と先づ公使館にいたり兩陛下、皇太子殿下の御影を拜しシャンパン一杯を傾く　尋でかるた數番を弄す　和氣靄々家に歸るが如し　立花、藤代、福原諸氏とクリューゲルに午餐　午後諸氏余が寓に來り談ず　晩森氏を訪ふ　不在

一月二日　快晴昨日に同じ　朝藤代氏、森氏を拉いて到る　福原氏亦踵いで至る　ともにクリューゲルに午餐午後一時警察署にいたる　余が盜難の爲なり　四時再び出頭すべき命を受けて其間藤代氏の寓に在り　同刻再びゆきて時計、紙入其他を取返す　夜森氏を訪ふ　不在

一月三日　快晴　朝坂本より電信爲替にて六百二十馬克來る　立花氏を訪ひともに銀行にゆき金子を受領すそれよりベーレン街なる大學閲覽室にいたり書籍雜誌等を見、クルツワネツクに午餐　歸途印形を取り岡田氏等を訪ふ　不在にて歸宅す　寒氣頗る甚し　零點下十四度といふ

一月四日　快晴　藤代氏を訪ふ　立花氏亦至る　岡田、正木二氏を併せて五人ウンテル、デン、リンデンにい

たる　余はクルツワネツクに午餐の後書肆マヤーにいたり代價を拂ひ尙二三の書を注文し汽車にてベルヴユーにいたり歸途直にケツトナーに赴く　福原より新年失策行のはがき六片到る

一月五日　快晴　朝立花を訪ふ　不在　藤代を訪ひともに步してリンデンにいたりクルツワネツクに午餐　書肆レーマンにいたり希臘女格論一册を買ひ來る　歸途立花に逢ふ　ともに步して余が寓にいたる　福原氏亦つい で到る　三人余が寓にて晚食　森氏も來訪　薗田氏不日來着の報を聞き同氏に柬す

一月六日　快晴　朝立花を訪ひともに岡田氏を訪ふ　岡田、正木、福原を併せて五人鐵馬にてスピツテル、マルクトにいたり學校博物館といふものを見る　小學校の上に在るものにて規模甚だ少　然れどもよく整頓せるを見る　それより再び鐵馬にてクロスター街にいたり大學附屬の衞生博物館を見る　三層の建物なり　二時半ライトハウス下の料理店に入り午餐　汽車にてベルヴユーにかへり歸途岡田氏に立寄りビーア一杯を傾けて歸る

一月七日　雪　朝來飛雪紛々　去年の今日を想起し上田に柬す　其外木村、大槻、井上の三氏、潮田、岡倉、坂本にも同斷　パウル街に入浴　クリユーゲルに午餐　午後四時頃福原來り今日岡田氏寓にて日本食會の催ありといふ　因て五時ケツトナーの歸途福神漬を携へて之に赴く　鯉こく、牛肉等を調理し正宗を傾けて一同新年宴をなす　岡田、正木、福原、藤代、立花、余の外吉田彥六郞氏を併せて七人なり　醉後水野、平岡、平野、馬淵等に端書を認む　夜十時過歸宅

一月八日　快晴　朝步してリンデン街にいたり鍵及ゼツツアンゲル等を購ふ　又リンデン街に郵便葉書を買は

んとて一商店に入る　其商店は日本品を賣る處にて主人種々の日本品を示す　それよりクルツワネツクにいたり午餐　山口、森二氏に逢ふ　歸りは汽車なり　ケツトナーにゆく　夜立花を訪ふ　不在　今日山本豐より手紙あり

一月九日　快晴　朝藤代を訪ひともにリンデン街にいたり古代博物館に遊ぶ　彫刻、繪畫等を見て一時同館を出でクルツワネツクに午餐　歩してかへる　藤代氏余が寓に入り少頃去る　四時半ケツトナーにゆき歸途立花を訪ふ

一月十日　快晴　朝岡田、正木、福原、立花四氏余が寓にいたる　ともにウエルフト街より鐵馬にてシエーネベルグなる幼稚園にいたる　書記の案内にて四層なる建物を充分に參觀す　諸事整頓して見るべきもの多し　歸途フオーゲスに午餐　福原咖啡を二重に誂へて失策す　それより獸園を歩し氷スベリを見て歸宅　岡田氏の寓に立寄七時歸る

一月十一日　快晴　立花氏、薗田氏を拉いて來る　薗田氏昨夜着の由　同氏とともに歩してリンデン街よりフリードリツヒ街の停車場にいたる　同氏の荷物を受取らんが爲なり　それより馬車にて同氏の寓にいたりクリユーゲルに午餐　立花氏等に逢ふ　午後稻垣來訪の由に付稻垣を尋ねケツトナーに行く　福原氏ケツトナーを尋ねて來り同じく歸る　今夜再び日本料理を調へて岡田、正木、薗田、立花、藤代、福原等と七人放談夜十一時にいたる

一月十二日　晴　朝藤代氏を訪ひ大學にいたりヘルマンの講義二時間を聽きクルツワネツクに午餐　岡田氏等の一行亦至る　ともにフリードリツヒ街より汽車にてかへる　歸途薗田氏を訪ひ晩辭してかへる

一月十三日　曇　曉霧甚しく樹木に氷りつきて桂樹玉林の觀を爲す　朝立花氏を訪ふ　薗田氏亦在り　正木氏も來訪　福原も同斷　クリューゲルに午餐　午後諸氏余が寓に來り談ず　藤代、近角、森、池山等の諸氏亦來る　夜岡田氏の寓にて正木氏の料理にて鷄めしの馳走あり　食後議論喧しく十二時歸宅

一月十四日　曇　朝パウル街に入浴　薗田氏を訪ひ公使館にいたる　倉知氏に逢ひて當國文部省よりの參觀許可狀其他を得岡田氏寓に屆けクリューゲルに午餐　薗田氏とともにケツトナーに赴く　同氏入門の手續を爲さんがためなり　夕方立花氏を訪ひ又岡田氏を訪ひて許可狀を渡す　立花氏風邪の氣味にて不出門　夜正木氏來訪談じて十二時にいたる

一月十五日　曇　小雪あり　朝立花氏病を見舞ふ　薗田氏、福原氏とともにプリンツに午餐　書肆にいたり薗田氏一書を購ふ　午後ケツトナーにゆく　夜再び立花、薗田兩氏を訪ふ　森氏いたる　ともに藤代氏を訪ひ正木氏と談ず　十一時にいたり歸寓

一月十六日　朝微雪　午後快晴　朝九時藤代氏寓にいたり同氏及岡田、正木、福原四氏とフリードリツヒ街なる師範學校を參觀す　校長叮嚀に案內す　參事官ウエツオルト氏及書籍館長フエツヘル氏に逢ふ　それよりライプチツヒ街ケンピンスキーに午餐　一同步してかへる　歸途立花氏に立寄病氣を見舞ふ　正木、福原二氏亦いた

る　少頃辭しかへる

一月十七日　快晴　朝九時岡田氏の寓にいたり正木、福原三氏とフリードリツヒ街なる體操學校を參觀す　たまたま一米國人もあり　鐵棒の演習を一見し校内講堂等を一見してかへる　午餐クルツワネツク　午後立花の病を訪ふ　福原、近角、吉田等亦至る

一月十八日　快晴　朝立花の病を訪ひ薗田氏と同伴クルツワネツクに午餐　岡本氏に逢ふ　それより歩してウンテル、デン、リンデンにいたりライプチツヒ街よりチーヤガルテンを歩してかへる　夜再び汽車にてウンテル、デン、リンデン街にいたりイルミナチオンを見る　今日王國二百年祭にて市中大に賑ふ　夜は電燈を點じて美觀を呈す　織田、萩野、關根、高津等に來す

一月十九日　曇　朝岡田氏の寓にいたり正木、福原三氏と汽車にてヤノウイツ橋停車場にいたりインゼル街なるギムナジウムにいたる　高等教員養成所を見んがためなり　同處には目下其設なき由にて空しく引返し陶器製造所を見る　技師の案内にて竈より製造の模樣を一見す　頗る興味あり　午チーヤガルテン街の料理店に午餐　歩してシヤロツテンブルグの工業高等學校を一覽　宏壯なること比なし　歩して動物園停車場にいたり汽車にて歸宅　夜戸塚、藤代二氏と稻垣氏の寓に送別會を開く　夜十一時歸寓

一月二十日　雨　朝立花氏寓を訪ひ福原、薗田とクリユーゲルに午餐　午後岡田氏寓にいたり四時頃より薗田、福原二氏とチーヤガルテンを歩して小獸園に薗田氏と別れ福原氏とケツトナーを訪ふ　咖啡の馳走になりて歸寓

一月二十一日　朝蘭田を訪ひともにパウル街に入浴　クリューゲルにビーアを傾けビルンバウムにて午餐を喫す　服部氏今夕着の由を聞き立花氏宅にいたる　福原在り　同行してポツダメル、プラッツにいたり咖啡亭に入り咖啡一杯を傾く　五時五十四分汽車着す　服部氏とドロシケに同乘一先ビルンバウムに着す　それより福原と三人クリューゲルに晩餐　岡田、立花等を訪ひ服部氏を其寓に送りてかへる

一月二十二日　曇　朝服部氏を訪ひともに馬車にてフリードリツヒ街停車場にいたる　荷物未着の由なるを以て電報を依賴しリンデンより歩して公使館にいたり水野氏に面晤　クリューゲルに午餐　午後服部氏余が寓に在りて談ず　夜岡田氏を訪ふ　服部氏の支那談を聞き十一時歸寓

一月二十三日　快晴　服部氏を訪ひ汽車にて停車場にいたる　荷物已に來れり　よりて馬車にてビルンバウムにかへり同處に午餐　午後二時岡田氏宅にいたり三時半アンハルテル、バーンホーフにゆく　同氏ライプチツヒ行を送らんが爲めなり　岡田、正木、福原三氏も同車にて出發す　服部氏よりかう子書狀幷にかき餠一箱、佐村氏よりの味附海苔を受領す　今日鄉信あり女子出生の由（十二月四日）を報じ來る　新聞二束亦至る　今日の新聞に英國女皇崩殂の記事を見る

一月二十四日　曇　昨日より風邪の氣味あり終日在宅　ほとゝぎす二冊來る　萬朝及ほとゝぎすを讀む　正木其他連名のはがき來る　内に束す　佐村同斷

一月二十五日　晴　本日も終日不出　得能及斯波の信あり　朝宿の婆を使として新聞を立花より借らしむ　午

前蘭田見舞に來る　午後戸塚氏來診處方を認めてかへる　午後山口小太郎來談　書肆カルヴアリーよりステルン文學史及扶桑茶話を屆け來る　立花より女子出生の祝賀至る

一月二十六日　曇　朝立花を訪ひともに岡田の寓にいたりクリューゲルに午餐　午後再び立花を訪ふ　宮本氏來訪の由を聞きて歸宅　同氏已に去りて在らず　晩食後岡田、正木兩氏の出發を見送らんため同氏寓にいたる七時二氏の出發を見送り立花氏の寓にて談じ夜十一時歸る　歸途雪あり　嚴慈兩尊の書を得

一月二十七日　雪　後雨に變ず　本日は獨乙帝の誕辰なり　午蘭田氏來訪　ともにクリューゲルに午餐　立花氏を訪ひ又藤代氏の病を訪ふ　又立花氏幷に自用の爲藥鋪にいたる　立花氏の寓に吉田、近角、池山等の諸氏あり談じて七時歸寓　夜郵券を張る　夜ケツトナー氏來訪

一月二十八日　晴曇一ならず　朝ヤパン及ヤパーネルを讀む　午クリューゲルに午餐　福原に逢ふ　後立花、藤代の病を訪ひケツトナーにゆく　歸途雪ふる　夜パウル街に入浴　神田氏を其寓に訪ふ　不在

一月二十九日　曇　午後雪　姉崎、服部、正木の書到る　岡倉にヤパン及ヤパーネル一册を郵送す　立花を訪ふ　福原亦到る　福原より二百馬克を借る　ともにクリューゲルに午餐　午後藤代を訪ひケツトナーにゆき歸途神田氏を其寓に訪ふ　夜再び立花を訪ひ葡萄酒を傾け十時辭しかへる　飛雪紛々

一月三十日　雪　午後曇　夜又雪　中村、渡邊、赤堀にはがきを贈る　午クリューゲルに午餐　福原に逢ふ　午後立花寓にて諸所へ禮狀をおくる手傳をなす　長岡大佐、立花を訪うていたる　四時半ケツトナーにいたる

夜藤代を訪ふ　九時辭しかへる　雪花繽紛昨日の如し

一月三十一日　快晴　雪解にて路汚し　朝ドロシケを雇ひて王立圖書館に至り館長に面會　國書解題一部を寄附す　それより大學にいたり午クルツワネツクに午餐　書肆カルヴアリーにいたり代價を拂ひ尙ブラウンスの日本童話一册を求め馬車にて歸寓　立花氏を訪ひて談ずること少頃

二月一日　快晴　午クリユーゲルに餐し立花を訪ふ　福原亦至る　二時半ケツトナーにゆきホノラルを拂ひ五時再び立花を訪ふ　藤代亦在り　七時歸寓　夜郵便局にいたり佐村、斯波、竹村、山口へ信書をおくる　歸宅すれば惠美氏在り　談じて十時半にいたり歸り去る

二月二日　晴　杉浦氏の信あり　朝汽車にてフリードリツヒ街にゆき大學にいたりヘルマンの講義を聽き尙署名を乞ふ　歸途藤代氏と以太利料理店に午餐　坂田、長野等の醫學士に逢ふ　又大谷光瑞氏の一行、日野某、薗田、近角、池山等の諸氏に會す　歸途藤代氏余が寓に入り少頃去る　晩頃立花を訪ふ　今立、山田、杉浦に柬す

二月三日　曇　クリユーゲルにゆき午餐　福原に逢ふ　午後立花を訪ふ　松石氏亦至る　談じて四時にいたり歸寓　夜藤代氏を訪ふ

二月四日　曇　朝薗田氏來る　午後立花を訪ひ尋でケツトナーにゆく　不在中神田乃武氏來訪　晩藤代來談　岡倉、萩野、瀧澤、烟、鈴木の信あり　夜返書を認む　萩野氏送別の詩をおくり來る

馳譽萬里志堪酬　不羨黃金撐斗牛　晴旭瞳々壯行色　雄心落々上征舟　北歐文學尋名匠　東海煙波別故儔

他日相逢應刮目　詞源三峽倒江流

送芳賀文學士之獨逸次竹村君韻

辱交由之初稿

二月五日　朝雪紛々　午後雪融け路悪し　書肆グレーヴエにゆき鈴木に贈らんため露獨字書一册を購ひ郵送す　萩野、松井等に柬す　午後ケツトナーにゆく　倫敦より渡邊氏の信あり　返事す　夜パウル街に入浴

二月六日　曇　微雪　朝九時神田氏の寓にいたる　福原在り　藤代、山口亦踵いで至る　一同トルム街のギムナジウムにいたり校長ケルン氏に面會　獨語、羅甸語、佛語の授業を見る　十二時辭しかへりてクリユーゲルに午餐相別る　午後ケツトナーにゆく　夜立花を訪ふ　本堂氏あり　佐村氏に圖書館の禮狀を郵送す　瀧澤にはがきをおくる

二月七日　快晴　神田氏を訪ひ藤代、山口を併せて四人鐵馬にてポツダメル、プラツツにいたりコツハ街のカイゼル、ウイルヘルム、レアルギムナジウムにいたる　校長代理レーヴエの案内にて佛語、英語、體操、唱歌、博物等の授業を見る　シルラーの鐘の歌を唱ひ居りたる處最も感服す　それよりフリードリツヒ街のシユールタイズに午餐　藤代氏と汽車にてモアビトにかへる　立花氏に立寄り歸寓　關如來に柬す

二月八日　快晴　朝藤代氏を訪ひともにベルヴユー停車場にいたる　神田、山口二氏亦いたる　汽車にて動物園停車場に赴きヨハイムスタール、ギムナジウムを見る　校長に面會して佛語、歴史等の授業を見、浴室、寄宿

舍、圖書館等を一覽す　規模頗る大なり　ギムナジウム中有數のものたるべし　歴史最も古き校舍なりと聞く
二時同處を出で一料理店に午餐し汽車にて直にケツトナーに赴く　夜藤代氏來訪　ブラントの宅へ轉居の相談あり　冨山房より爲替金五百三十五馬克電信爲替にて到着　夜立花を訪ふ

二月九日　曇　朝菊池、高木、杉浦、中澤、藤岡等の年始狀いたる　朝銀行にゆき金を取り洋服屋に金を拂ひライプチツヒ街に午餐　鐵馬にて歸寓　藤代、薗田二氏來訪　薗田氏明朝巴里に發足の由　晩立花を訪ふ　藤代氏もいたる　中澤、菊池、藤岡、高木に束す　藤代に五十馬克を返濟す　菊池氏元旦の歌に

今日といへばまづ起きいでゝ朝日さすふじの高根の雪をみるかな

二月十日　午前晴　午後曇　小雪あり　朝立花を訪ひチーヤガルテンより歩して動物園にいたり動物園前の一料理店に午餐　歩してかへる　それより前福原を訪ひ金子二百馬克を返濟す　友田の年賀狀いたる　午後四時藤代氏來る　ともにブラント氏の咖啡に赴く　歸途立花氏に立寄り議論してかへる　不在中內山、惠美、森等來訪

二月十一日　快晴　一詩を賦して立花氏に寄す

漠々雲程三萬里　綿々皇統四千年　仰看晴日思神祖　天外微臣涙若泉

朝立花來る　ともに公使館にいたり書狀來着の有無を問ふ　かう子、桐生の書狀、畑、佐藤金造、中山、山川、白鳥等のはがきを領收す　中山、山川、佐村、友田、今立等に信す　午後ケツトナーにゆく　桐生の發句に曰く

紀を更めて初日影倘あかきらし

夜藤代を訪ふ

二月十二日　晴　朝近傍を散歩しクリユーゲルに午餐　午後ケツトナーにゆき歸途バンデル街の惠美を訪ふ　內山亦在り　六時迄談じかへる　晩食の後立花を訪ふ

二月十三日　朝雪　午後晴　正午ケツトナーにゆく　今日胡妻誕生日の由に付立花氏より貰ひたる紙入一箇を遣はす　歸途クリユーゲルに午餐　午後立花氏を訪ひそれよりケツトナーの招待に赴く　來客十人ばかりの會にて中々面白かりき　十二時半歸寓

二月十四日　快晴　朝パウル街に入浴　午クリユーゲルに午餐　午後ラツヘンデ、ウエルトを讀む　晩立花を訪ふ　歸宅すれば藤代來談　明後日神田氏招請の約をなす　午後ウイツワルケル街の書肆にいたり書籍數部を購ふ　神田氏を訪ふ　不在

二月十五日　曇　微雪　朝立花を訪ひ同氏の許に來れる讀賣新聞を讀む　午はクリユーゲルに午餐　午後ケツトナーにゆく　歸途神田氏を訪ふ　ビルンバウムより日本の醬油瓶を受取り來る　途中に落してこはす

二月十六日　快晴　昨夜雪あり　大久保介壽氏の書あり　朝立花を訪ひ午後の會の相談をなし十一時より大學にヘルマンを聽く　午後レツクスにいたり買物をなし午後四時頃より日本料理を支度して神田氏を饗す　牛肉煮えたる時之をひつくりかへす　大滑稽なり　食後放談　夜一時歸寓　飛雪紛々

二月十七日　晴　午クリユーゲルに餐し立花を訪ふ　それより公使館にいたり書狀の來否を問ふ　無しといふ

を以て引返す　夜福原來訪　シルラーのマリア、スチユアートを讀みて夜二時にいたる　午後不在中森氏來訪の由

二月十八日　晴　クリユーゲルに午餐　ベルヴユーの近傍を散歩し立花を訪ふ　歸宅すれば國學史概論到着す　今立、斯波、松永の書狀同斷　小林義夫の賀狀もいたる　ケツトナーにゆき歸途立花に立寄り雜炊を煮て食ふ

二月十九日　晴　寒し　クリユーゲルに午餐　近傍に買物をし立花を訪ふ　三時ケツトナーにゆく　能、長、和田の書信あり　夜森を訪ひ十時迄談じて歸宅　山本の信あり　ほとゝぎす第四卷三號來る

二月二十日　晴　朝小雪　午薗田氏來る　クリユーゲルに午餐の後同氏の寓を訪ふ　午後ケツトナーにゆきマリア、スチユアートの質問をなす　夜薗田とクリユーゲルに晩餐　神田、森の二氏に逢ふ　大に日本酒を傾け十一時歸寓　今立、畑、萩野、杉浦等に信す

二月二十一日　快晴　朝獸園を歩しクリユーゲルに午餐　立花を訪ふ　三時歸宅　藤代氏來訪　薄暮去る　晩食の後近傍を散歩す　夜ユングフラウ、フオン、オレアンを讀み了る

二月二十二日　快晴　クリユーゲルに午餐　立花を訪ひ三時ケツトナーにゆく　晩食後藤代氏を訪ひ少頃の後かへる　來月引越の旨宿の婆に告ぐ　婆大に悲む色あり

二月二十三日　雪　朝藤代氏と大學にゆく　ヘルマン休講に付ヴイクトリア咖啡店にて麥酒一杯を傾け相別れ余はテルミヌスにて午餐　一馬克店にて種々の品を買ひてかへる　歸途立花に立寄　藤代氏亦いたる　晩食後惠

美を訪ふ　不在　ウイルスナツケル街の襟飾店にて同店の主人と種々の話をなし九時頃歸宅

二月二十四日　雪　朝薗田氏とチーヤガルテンを歩してノイエルゼイの氷スベリを見る　それよりヘルキュルス橋畔のアルブレヒト、ホーフに午餐　池山、近角二氏に逢ふ　又共に湖畔を歩してグローセ、ステルンにて別る　歸途立花を訪ふ　晩食の後藤代の寓をおとづる　不在　蜂谷貞興の信あり　竹村に信す　關根、山本同斷

二月二十五日　晴　路あし　朝薗田を訪ひクリューゲルに午餐　惠美を訪ふ　太陽一册、文藝倶樂部一册をかりてかへる　福原來訪　午後ケツトナーにゆく　夜藤代を訪ふ　關根、渡邊（龍）、能勢、石原、松原等の信あり

二月二十六日　晴　朝立花を訪ひ自分及同氏の金を取らんため銀行にゆく　午クルツワネツク、福原、惠美に逢ふ　歸途はドロシケにてケツトナーにいたる　立花氏を訪ひて談話數刻かへる　夜藤代氏來談十一時去る　萬文部省より旅費追給二十七圓五十錢の通牒及び中央銀行の送金手形を領收す

二月二十七日　晴　朝藤代氏とチーヤガルテンを歩しクリューゲルに午餐　午後ケツトナーにゆく　ホノラル四十馬克を拂ふ　歸途立花に立寄る　夜立花の爲めに洋服屋にいたる　途に森に逢ひ其寓に入りて談じ十一時かへる

朝十二月十五日より一月十五日迄の分來る

二月二十八日　曇　小雨　朝歩してフリードリツヒ街にいたりケーニツヒの文學史を購ひ電車にて歸りクリューゲルに午餐　午後山口、惠美二氏來談　惠美と同道にて家を出で神田氏を訪ふ　不在　夜藤代を訪ふ　森在り

荷物片付を爲し居る處なり　宿の娘等と麥酒を飲みて十一時歸寓　關根に東す
三月一日　曇　小雨　朝神田氏を訪ふ　山口在り　山口にブリンクリーの字書をかす　尋でともに藤代氏の新寓を訪ふ　小川、森二氏に逢ふ　それより薗田と二人鐵馬にてアンハルテル、バーンホーフにいたり神田氏の出立を見送る　午餐は停車場に食ふ　歸途ビルンバウムに立寄り神田氏委托の金百馬克餘を渡す　尋でケツトナーにゆく　本堂、神田、服部等に信す
三月二日　曇　夕方雹あり　朝大學に聽講　クルツワネツクに午餐　森氏と同道ジーゲス、アレーの邊を逍遙し歸宅　立花の病を訪ふ　夜パウル街に入浴　本堂氏を訪ひ立花の事に付相談　平井、戸塚二氏と談じて十一時歸寓　中央金庫、井上學長に公信をおくる
三月三日　午前快晴　午後曇　雨となる　朝薗田と同道橋本屋に午餐　ルイドポルド街なる長岡大佐を訪ふ　立花の件について相談せんが爲なり　それより松本文三郎氏を訪ふ　強雨來るを以てドロシケにて歸寓　途藤代氏を訪ひ少頃歸る
三月四日　晴　朝藤代を訪ひ萬朝を渡しクリューゲルに午餐　午後福原來る　ケツトナーにゆく　夜近傍を散策す　薗田九時頃來談
三月五日　快晴　暖し　朝福原を訪ひ立花の事に就いて相談し藤代の病を訪ひクリューゲルに午餐　薗田、本堂二氏に逢ふ　午後ケツトナーにゆき歸途再び立花を訪ふ　福原亦來る　夜マハト、デル、フインステルニスを

讀む

三月六日　朝晴　午後曇　朝獸園を歩しゲルハルト、ハウプトマンの沈鐘一册を購求し藤代、立花を訪ひ福原とプリンツに午餐　午後ケツトナーにゆく　清水澄來訪　夜ヘルマン、ウント、ドロテアを讀む　家尊及び家內に信す

三月七日　晴　薗田と藤代を訪ひクリユーゲルに午餐　午後戶塚を訪ふ　晚再び之を訪ふ　咽喉に魚骨のさゝりたるを以てなり　平井氏鏡に照して見るに已に無きが如し　午後藤代、森を訪ふ　病氣見舞の爲なり　大久保介壽に信す

三月八日　朝曇　午後雨　薗田來り福原病氣の由をいふ　よりて同氏を見舞ひそれよりライプチツヒ街レツクスに至り鑵詰等數品を購ふ　歸途直にケツトナーにゆく　ケツトナー課業後フローベン街吉田氏の寓にいたる池山、近角二人あり　日本食を喫し放談　十時歸寓

三月九日　曇　朝立花、藤代を訪ひクリユーゲルに午餐　森、美濃部二氏に逢ふ　森氏余が寓にいたり少頃の後ともにパウル街に入浴　晚餐の後クリユーゲルにビーアを傾く　田代氏に逢ひ放談　十時歸寓　テアテル、レキシコンを購ふ

三月十日　晴　朝立花を訪ふ　倉知氏在り　ともに福原を訪ひ十二時クリユーゲルに午餐　平井、岡本二氏に逢ふ　午後再び立花を訪ふ　薗田氏余が寓に來り晚餐をともにす　明日引越に付荷物の片付をなす　夜森氏來談

クリューゲルにいたりブラント氏を訪ふ　ウイダー氏在り　談じて十時にいたり歸寓

三月十一日　曇　朝森氏來り引越の手傳をなす　九時ブラント氏に引移る　午後一睡の後ケツトナーにゆく　歸途福原に立寄る　同氏大によし　晩食後藤代氏とビーアを傾け談笑す

三月十二日　曇　朝藤代氏と立花を訪ふ　同氏いよ〳〵廿日に出發の由　午後ケツトナーにゆく　歸途福原を訪ふ　大幸氏十四日着の報あり　潮田老母、竹村鍛死去の報を得　斯波、友田、谷村、杉浦の信あり　谷村、友田のはリオ、デ、ジヤネロに搭載せしため全部水中に入りたる痕跡あり

三月十三日　晴　薗田氏と立花氏の爲めに種々の買物をし午後も再びライプチツヒ街にゆく　ケツトナーを休む　萩野、岡倉兩氏に送るものも同氏に托す　晩再び之を訪ふ　夜十時歸寓　藤代氏と談じて十二時半にいたる　かう子の手紙いたる

三月十四日　雨　朝藤代氏とアンハルテル停車場にいたり大幸氏を迎へ福原氏の寓に入る　同氏不在　ともにクリユーゲルに麥酒を傾け午後立花氏を訪ふ　大幸氏在り　晩辭しかへる　夜藤代氏と惠美を訪ふ　中村春二の書いたる

三月十五日　晴　朝大幸を訪ひ福原と三人ウンテル、デン、リンデンよりツオイグハウス及びナショナル、ガラリーを見物し午後一時兩人に別れて鐵馬にて歸寓　午後ケツトナーにゆく　夜フアミリー、フエストのコンチエルトに赴く　音樂、舞蹈、獨吟等あり　夜一時歸る

三月十六日 晴　朝ローエングリンを讀む　午後立花を訪ふ　森氏（ペテルブルグより）在り　晩大幸、藤代二氏と鐵馬にてオペルンハウスにいたる　十一時半ドロシケにて歸寓

三月十七日 快晴　大幸氏いたる　テートハウスを見んがためなり　藤代氏と三人同行　十二時半ケラーにて麥酒を傾け坂本、服部二氏に信す　午後動物園に遊び歸途立花氏に立寄かへる

三月十八日 雨　藤代、大幸二氏とオペルン、プラッツにいたり宮城を一覽す　午後二時立花氏に至りドロテン街の寫眞鋪に撮影す　同行者九人　午後ケツトナーにゆく　夜パウル街に入浴　ローゼン、モンタツハをよみて夜三時に至る

三月十九日 曇　七時頃薗田、大幸二氏來る　同道してポツダムに遊ぶ　藤代氏と同行八時の急行にてポツダムにいたりシユールタイズにてビーアを傾けスタツト、シユロス、ノイエスパレー、オランロゼリー、サンスシーを見一料理店に午餐　バベルスベルグにいたり風光を賞し四時の汽車にてかへる　萩野、斯波等に束す　十二月十五日――卅一日の萬朝報いたる

三月二十日 曇　寒し　朝立花氏にゆき同氏のためにポツダム停車場にいたり乘車券を購ふ　午後立花を訪ひケツトナーにゆき晩食後藤代氏と同道福原を訪ひ談話　十二時歸寓　內君に信す

三月二十一日 曇　微雪　風寒し　大幸、藤代二氏と人類學博物場に遊びシユールタイズにて麥酒を傾けウエルトハイムに入り歸途立花氏に立寄かへる　夜大幸氏とブツシの曲馬場を見る　十一時歸宅

三月二十二日　曇　寒し　朝立花を訪ひ午後ケツトナーにゆく　午後再び立花を訪ふ　夜藤代氏等とポツダム停車場にいたり立花氏の出立を見送る　歸途福原、近角、吉田、大幸、坂本、森の諸氏と咖啡亭に入り笑談　十一時散ず

三月二十三日　晴　斯波より太陽一冊、遠藤、中村同封の書いたる　午後大幸氏來訪　ともに公使館にいたる　夜藤代、大幸、福原三人とタウベン街のウラニヤにいたる　ライン河の話なりき

三月二十四日　晴　大幸氏を訪ひ福原より金子三百馬克を借り大幸氏と同道ホーヘンツォルレルン博物場にいたり種々の古物を見る　我國旭日綬章にキクケンとあるを見て正誤ありたしと係員に告ぐ　午後大幸氏來談　夜福原、大幸、藤代三氏とウインテル、ガルテンにいたり種々の嬉戯を見る　歸途森氏に逢ひ麥酒を傾けて別る　十二時歸寓

三月二十五日　雪　朝大幸を訪ふ　森、薗田、藤代等皆いたる　一同アンハルテル停車場に赴く　大幸氏歸萊を送らんが爲めなり　ブフエにて麥酒を傾けて別る　午後ケツトナーにゆく　夜薗田氏を訪ふ　飛雪紛々　不在中姉崎來訪の由

三月二十六日　晴　薗田氏來る　藤代氏と三人姉崎氏を訪ふ　座に銀行員なりとて吉井秀三郎といふ人あり同道してチーヤガルテンを散歩しブランデンブルグ門にいたりドロシケにて歸寓　午後山口小太郎氏來訪　三十馬克をかす　同氏より群書類從一冊をかる　夜パウル街に入浴　グレーヴエよりロビンソン、クルーソーの獨譯

を購ふ　寫眞到着

三月二十七日　晴　小雪　書肆カルヴアリーにいたり二三の書を購ふ　午後ケツトナーにゆく　夜森氏來訪談じて十一時にいたり歸り去る

三月二十八日　晴　小雪　朝雪を冒して吉田氏をフローベン街に訪ふ　午後藤代氏と薗田氏を訪ふ　不在中山口氏來訪　大幸のはがきいたる　神田氏同斷

三月二十九日　午前晴　午後雪　藤代氏とチーヤガルテンを歩しブリユツケン、アレーの近所にて麥酒一杯を傾け歸寓　午後ケツトナーにゆく　福原、立花、森岡のはがきいたる　寫眞を諸處に郵送す

三月三十日　晴　朝巖谷氏をアウグスブルグ街に訪ひ小說著述目錄一冊を借りてかへる　午後薗田來訪　夜藤代と同行クリユーゲルにいたる　福原に逢ふ

三月三十一日　晴　立花及大幸、服部其他連名の葉書いたる　東京、神戶に信す　飯島廣三郎同斷　午前薗田を訪ふ　不在　午後惠美、內山二人來訪　ともにハンザ、プラツツのハーゼ、ブロイライにいたる　ケツトナーの一族在り　惠美と談じて十時にいたり歸宅

四月一日　晴　風暖し　トルム街を歩し書肆にいたり英語練習書一冊を購ふ　午後ケツトナーにゆき又ザイヤーにゆく　福原、薗田來訪　午前清人、金太敏來談　平岡の手紙いたる

四月二日　晴　暖し　朝ザイヤーにいたる　福原氏亦到る　午後ケツトナーにゆく　歸途薗田氏と同道ジヨス

テイに赴く　灌佛會相談の爲なり　夜ブラント氏夫人二三の知人を饗應せしためボーレを飲みて談じて十二時にいたる

四月三日　晴　パウル街に入浴　午後池山、近角、森、薗田等いたる　灌佛會相談のためなり　夜發熱甚しく煩悶曉にいたる

四月四日　晴　藤代氏に依頼してザイヤー當分休む旨を傳ふ　午後內山及清人、吳至る　今夜熱亦發す　藤代氏來して戶塚氏を招く　大塚、戶塚二氏午後來診　熱三十九度

四月五日　晴　薗田、福原等見舞として來る　午後平井、戶塚二氏來診　熱三十九度

四月六日　晴　午前姉崎氏來訪　ケツトナー來り日本諸謠一册を返して去る　午後戶塚氏來診　本日はじめて食慾あり　三十七度五分　夜神戶よりの信あり

四月七日　曇　福原（二回）、薗田、森等見舞に來る　午食堂にいでゝ食ふ　夜寛氏饗せられてブラント氏にいたる　ケツトナー見舞に來る

四月八日　曇　姉崎、福原、森御蔭等いたる　戶塚氏來診　熱度大に下る　本日在伯日本人釋尊降誕會を行ふほとゝぎす四卷四號いたる

四月九日　晴　薗田、ザイヤー、森等見舞に來る　戶塚氏來診

四月十日　晴　池山、惠美、福原、森（御蔭）等來談　惠美余に贈るに躑躅花一鉢を以てす

四月十一日 晴 森、薗田等いたる 戸塚氏來診 晩福原來談 十時半去る 大學より一覽邦文一冊送附し來る 岡倉より繪本二冊到着

四月十二日 晴 や丶寒し 山口小太郎、森御蔭、蜂谷貞興、坪井玄道の諸氏來談 福原同斷 文部省より學費四五六三月分八百九十一馬克電信爲替にて領收

四月十三日 晴 惠美、福原、森（孝三）等來る 戸塚氏來診 冨山房より十講三部郵送し來る かう子、桐生、斯波、岡倉等の信あり

四月十四日 晴 福原、內山等來談 夜ウイダー來ること常の如し 岡倉に座上連署のはがきをおくる 斯波、今立、中村、桐生、竹村未亡人等へ郵書をおくる

四月十五日 曇 家內に信す

四月十七日 朝微雨 午後放晴 山口より三十馬克返却し來る 福原來訪三百五十馬克を返濟す 午後姉崎、福原、巖谷來談 三氏去る後惠美亦來る 夜戸塚氏來談 正金銀行倫敦支店に領收書をおくる 山口、谷本二氏へはがきを發す

四月十八日 晴 ゲオルグ、ヘツケルのタンホイゼルを讀む 坪井、小泉、森の諸氏來訪 神田、大幸二氏のはがきを領收す

四月十九日 曇 午後パウル街に入浴 夜福原來談 十時去る 谷本、大幸の信あり

四月二十日　晴　藤代、森二氏とチーヤガルテンを歩しチエルトに立寄歸宅　午後惠美來訪　ともに近傍を散歩しパルテルスの文學史一冊を購求してかへる　夜森氏來訪　談じて十時にいたる　惠美朝日新聞をもち來る　谷本、大幸、服部に信す　織田得能同斷

四月二十一日　晴　薗田氏をグロートに訪ふ　不在　歸宅すれば薗田氏來訪　少頃の後ともに惠美を訪ひ朝日新聞三束を返却す　晩頃福原來訪

四月二十二日　晴　ほとゝぎす一册きたる　中に竹村の文章あり一讀嗚咽に堪へず　谷本に信す　小獸園を歩し新聞をあつらへ種々の買物をなして歸宅

四月二十三日　晴　藤代氏とチーヤガルテンを歩しハーゼに少憩　麥酒一杯を傾けてかへる　午後巖谷、坪井等を訪ふ　皆不在　坪井氏の寓は日本婆なり　婆と話する內盧、那波等に逢ふ　夜森を訪ふ　不在　美濃部を訪ひてほとゝぎす二册を渡す　巖谷氏より文藝俱樂部一册郵送しきたる

四月二十四日　晴　チーヤガルテンを歩し床に踞してフラツクスマン、アルス、エルチーヘルを讀む　午後福原來訪　夜レツシング、テアテルにいたりフラツクスマンの演劇を見る　十時歸宅　藤代氏風邪にて外出せず

四月二十五日　晴　朝チーヤガルテンを歩して歸寓　午後惠美來る　ともに近傍を歩して菓子鋪に菓子を食ふ　夜グレーヴエにいたり書籍一二部を購ふ

四月二十六日　晴　朝大學にゆく　講義一もなし　空しく歸宅　午後森氏來る　ともに森氏を訪ふ（マヽ）　坂本在り

夜薗田來訪　十時去る

四月二十七日　晴　朝大學にゆきハルスレーの英國近世詩人の講義を聽く　午後福原來る　ともに倉知氏の日本食會に赴く　美濃部、清水、松本、杉山、筧等數名なり　醉後諸友人にはがきを認む　夜一時半歸寓　有詩

主客九星會　斗米肉十斤　甘味最鼓舌　筍子及刺身　醬油砂糖混　牛豚葱根塡　火酒數度點　玉觥幾回巡　耳熱十分醉　腹充如妊娠　諸謔衝口發　笑罵外領頻　佳句題端書　發送頒友人　興酣不知歸　更深寂四隣　一時始退散　步到須水濱　美景城門高　朧々月一輪

四月二十八日　晴　夜雨　朝小獸園を步しパッチエン、ホーフに少憩　ビーア一杯をのみて歸寓　午後森氏來る　藤代氏と三人クリューゲルに少飮　森氏と薗田を訪ひ十時半歸宅　雨に逢ひて閉口す

四月二十九日　晴　朝大學にゆきマヤーの小說史を聽く　午後森（御蔭）來る　二百馬克を貸す　午後再び大學にゆき比較文學研究法を聽く　姉崎に逢ひ咖啡ヴイクトリアに立寄歸宅

四月三十日　雨　朝藤代氏と大學にゆきマヤーの小說史を聽く　午後パウル街に入浴　惠美、內山、戶塚諸氏來る　惠美に百馬克をかす　坪井氏來り羽織を屆けらる

五月一日　朝雹あり　午後小雨　朝福原を訪ふ　不在　美濃部を訪ひて談ずること少頃　歸途福原に逢ふ　よりて其寓に入りて談ず　同氏政府の電報を得て近日歸國すべしといふ　午後福原來る　夜森、藤代二氏とアルヒテクテン、ハウスに音樂を聽く　シュールタイズにて麥酒を傾けて歸寓　ケットナーにゆく　今日新聞に皇太子

妃殿下御分娩皇子御出生の報を見る　家内に信す

五月二日　晴　大學にゆく　午後ケツトナーにゆく　又ザイヤーを訪ひ談ずること少頃　夜内山とフリードリツヒ、ウイルヘルムステデイツシエス、テアテルに佛國女優の滑稽劇を見る　歸途山林學校脇の料理店に麥酒を傾けて歸る

五月三日　晴　大學にゆく　午後ケツトナー、ザイヤーに赴く　晩近傍を散歩す　不在中森氏來訪　夜森を訪ふ　不在

五月四日　晴　朝チーヤガルテンを步し歸途森を訪ふ　午後森及井上來訪　夜藤代氏と塔街を步しパツチエンホーフに飲む　杉浦、佐村、福井、斯波、島田等の信あり

塔街夜步獸園西　行見胡人携牝鷄　麥酒頻傾不成醉　三千里外憶山妻

禽獸園頭春色加　衣香帽影路參差　客愁一片飛鄉國　不爲墨陀堤上花

五月五日　晴　八時離孛　藤代、森、井上と四人にてポツダム停車場より九時五分ウエルダーに遊ぶ　十時同處着　ホーへに上りて下瞰す　風色頗る佳なり　金澤と杉田とを併せたる趣あり　ヨハニスベールワイン、エルドベーレワイン等同處の名物の由にて一酌午餐し尙諸處を散策す　快比なし　諸友人に東す　山を下りて渡船場に至り汽船に乘じてポツダムにいたる　船上のながめ亦絕佳なり　船中にて筒井、坂田、上田等醫學士連十餘名

に逢ふ　五時歸寓　夜ウイダー來ること例の如し

ウエルダーはさくらの雲に包まれて夕日まばゆきハーフエルの川

櫻雲靉靆包乾坤　一日千株不足言　遺憾澹々唯如雪　斯花恐莫大倭魂

五月六日　晴　朝惠美來る　ともに大學にいたり同氏入學の用を辨ず　一時よりマヤー聽講　ホノラルを納め歸途テルミヌスにビーアを傾く　午後再び大學にマヤーを聽講　夜福原を訪ふ　不在

五月七日　晴　大學に聽講　午後ケツトナー及ザイヤーにいたる　晩福原來る　明日巴里に向ふ由　金子若干を預る

五月八日　雨　午後ケツトナーにゆく　ザイヤー同斷　七時夕食の後ブラント氏一族とともにフイルハルモニーにいたり藝者の手踊を見る　歸途森、藤代二氏とクリユーゲルに飲む

五月九日　晴　大學にゆき聽講　午後ケツトナーにゆく　晩食後藤代氏と惠美を訪ふ　森氏在り　四人にてクリユーゲルにいたり麥酒一杯を傾く

五月十日　快晴　大學にゆく　午後ケツトナー、ザイヤーにいたる　上田、和田の信あり　惠美氏來訪

五月十一日　晴　朝チーヤガルテンを歩す　午後ケツトナーの子供來りてグルネワルトに遊ばんことを勸むよりて四時半同處にゆく　ケツトナー夫妻、支那人二人、內山等あり　八時頃迄散步　ウイルヘルム塔に上りハーフエルを望む　歸途シユールタイズに晚餐の後かへる　和田、上田等に信す　パウル街に入浴

五月十二日　晴　朝チーヤガルテンを歩す　午後クンスト、アウステルングを見る　逸作多し　夜ウイグー來ること例の如し　筒井氏招ぜられて晩餐を倶にす　斯波貞吉に柬す

五月十三日　晴　朝大學にゆく　午後も同斷　晩食後近傍散步　夜森氏を訪ひて葡萄酒の馳走になる

五月十四日　晴　朝大學にゆく　午後ケツトナー、ザイヤーにゆく　夜森氏來る　余が誕生日なるを以て藤代、森二氏とクリユーゲルにいたり麥酒數杯を饗す　來る十七日日本食に招待の旨井上公使の案内あり

五月十五日　晴　チーヤガルテンを歩す　午後ケツトナー、ザイヤーにゆく　森氏ザイヤーを訪うていたる同道して歸宅　昨日誕生日の祝としてブラント夫人、ケツトナー妻より花束をおくらる

五月十六日　晴　今日耶蘇昇天祭に付大學休業　ケツトナーも休む　午前藤代氏とチーヤガルテンを歩す　午後薗田、森來訪　ともにヴイクトリア、パークに遊ぶ　四望快濶にてながめよろし　某亭に麥酒をのみ闢根、油比等に信す　夕食の後テアテル、デス、ウエステンスにベートーヴエンのフイデリオを看る　十時散じスペーネル街の一旗亭にビステキを食つてかへる

五月十七日　晴　朝大學にゆく　ライプチツヒ、フオツクより書籍二部送りきたる　午後ザイヤー、ケツトナー斷りてゆかず　公使館にゆく　日本食の馳走あり　食後ビーアを傾けかるたを弄して十一時散ず

五月十八日　晴　午後ステーグリツツにランゲ氏を訪ふ　種々の質問ありたるを以て夕方になり歸寓　途ライプチーゲル、ホーフに晩餐　ランゲ氏に國文十講、國學史概論各一部をおくる　同氏より岡崎の日本文學史一冊

を貰ふ

五月十九日　晴　朝大村、白鳥二氏をベルヴュー、ホテルに訪ふ　午後森氏を訪ふ　夜森氏、惠美氏來り晩餐をともにす

五月二十日　晴　朝大學にゆく　歸途チーヤガルテンを歩してかへる　午後再び大學にゆく　今日洋服誂出來たり　福原の書狀あり返事す　森御蔭氏來談　明日より田舍にゆく由にて二百馬克返却し來る

五月二十一日　晴　大學にゆく　藤代氏風邪にてゆかず　歸途チーヤガルテンを歩すこと昨日の如し　福原に金子二百馬克を郵送す　午後ケツトナー、ザイヤーにゆく

五月二十二日　晴　チーヤガルテンを歩しシユロスガルテンを一覽す　午後ケツトナーにゆく　夜森氏來訪井上氏來談

五月二十三日　晴　大學にゆく　午後ケツトナー、ザイヤーにゆく　夜森氏來る　近傍を散歩し同氏の寓にいたり葡萄酒を傾けてかへる　新聞の夕刷に××氏發狂の報あり

五月二十四日　曇　朝森氏來る　藤代氏を併せて三人公使館にゆく　××氏の件を聞かんが爲なり　大村、高橋、白鳥三氏亦いたる　午後ザイヤーにゆく　夜薗田氏を訪ふ

五月二十五日　晴　午後雷雨あり　夜大に雨ふる　斯波より錦繪數葉をおくり來る　パウル街に入浴　夜惠美を訪ふ

五月二十六日　晴　暑甚し　午後雷雨あり　藤代氏とゲルハルトの婆さんの處にいたり繪紙六枚をおくり尋で獸園を歩しチエルトに少憩歸寓　夜大村、白鳥二氏ブラントに饗せられて來る　十一時ウエルフト街に見送る公使館にいたればかう子、文部省、赤堀、眞吾等の手紙あり　かう子、赤堀に返事す　本日よりフイングステンなり

五月二十七日　晴　暑甚し　朝獸園を歩す　惠美來訪　夜福原を訪ふ　不在　福原今朝巴里より歸林の由にて小林某を伴ひて來訪　友田宜剛、日下部重太郎、美濃部等の信あり

五月二十八日　晴　井上、坂本、薗田を訪ふ　午後藤代、森二氏とクルフユルデンタムなる防火博覽會にいたり七時歸寓　博覽會場にて石原に端書を認む　晩餐クリユーゲル　ライプチツヒ、フオツクよりデイセルタチオン五十册をおくり來る

五月二十九日　晴　福原、ザイヤーを訪ひそれよりレツクスにいたり種々の買物をなす　又ウエルトハイムにも入る　シユールタイズにて麥酒をのみ森氏に逢ふ　午後森氏來訪　ザイヤー、ケツトナー斷りてゆかず　得能の手紙いたる

五月三十日　晴　午後雷雨あり　ケツトナー斷りてゆかず　朝ウエルトハイム及びレツクスにいたり買物をなし午後日本料理を調へて福原の爲めに送別會を開く　森、長尾等亦いたる　戸塚氏來らず

五月三十一日　晴　斯波、坂本、佐村、木村、松井、畔柳、鈴木等日本よりの手紙あり　かう子の手紙同斷

今朝觀兵式ある由に付森、長尾、藤代三氏と練兵場にいたらんとす　ベルアリアンス、プラツツに至る頃已に還幸の由を聞き途上に拜觀　和蘭女皇、プリンツ、ハインリツヒ等をも見る　それよりプショルにて午餐　午後カフエ、ジヨステイにて××氏に關する相談あり　福原とリンデンにいたり夜諸氏とプリンツに福原の送別會を開く　斯波安子に束す

六月一日　晴　暑熱甚し　朝福原を訪ふ　藤代、薗田等いたる　午後六時福原の出發をレールテル停車場に見送る　內山亦來りプレンツエンゼーにゆかんことを勸む　ゆかず　小林、惠美等余が寓にいたりビーアをのみそれよりビーア、ライゼをなして天明にいたる　拂曉森の眠を驚かす

六月二日　晴　チーヤガルテンを步す　午後在宅　夜ウイダー來ること例の如し

六月三日　晴

六月四日　晴　マヤーを聽講　午後ケツトナー、ザイヤーにゆきおの〳〵ホノラルを拂ふ

六月五日　晴　マヤーを聽講　ケツトナー、ザイヤー例の如し

六月六日　晴　朝大學にゆく　午後ケツトナーにゆく　小林氏來訪　ケツトナーの歸途惠美を訪ひ雜誌を返却し更に新しきもの二三部をかりてかへる　今日はじめて夏の白服をきる

六月七日　晴　大學にゆかず　チーヤガルテンを步す　午後ケツトナー、ザイヤーにゆく　夜森氏を訪ふ　談じて十一時にいたり歸寓

六月八日　晴　やゝ涼し　朝チーヤガルテンを歩す　午後大村、白鳥二氏來訪　晩シューマン街の日本料理にいたる　長尾氏の饗にあづかるなり　十時歩してかへる　歸途クリューゲルに立寄る　保科の信あり

六月九日　晴　朝チーヤガルテンを歩しグロスの文學々をよむ　午後森、長尾二氏來訪　再びチーヤガルテンにいたり長尾氏余等を撮影す　それより橋本屋に晩食　ウイダー來る例の如し

六月十日　晴　午後雷雨　大學にゆくこと二回　本日トレプトウの天文臺にいたらんとする積の處六時頃より雷雨に付之をやめクルツワネツクに晩餐してかへる

六月十一日　晴　朝大學にゆき午後ケツトナーにゆく　ロイベル讀了につき勝手に讀みたる書を質問する事に改む　夜アイテルをよむ

六月十二日　晴　午後雨　午後ザイヤーにゆく　夜アイテルの文學々をよむ

六月十三日　雨　大學にゆき聽講　午後ケツトナーにゆく　ライデン、デス、ユンゲル、ウエルテルをよむ

六月十四日　晴　家嚴の信書あり　得能の手紙亦到着　斯波よりの太陽五月分着　家嚴に返事す　朝大學にゆき聽講　午後ザイヤー、ケツトナーにゆく　夜森氏を訪ふ　和辻、長野兩醫學士に逢ふ　藤代氏とクリューゲルにいたる

六月十五日　晴　微雨　銀行にゆき金を受取り種々の買物をなし王立圖書館にゆく　ザイヤーに逢ひ目錄を見

て日本に關する書籍を調査す　歸途カルヴアリーに立寄二三の書を買うてかへる　夜惠美來る　大谷、薗田同斷
畑、藤岡等の書を得　文部省より新留學生規則を領收す　中央金庫へ受領書をおくる　パウル街に入浴
六月十六日　晴　今日比公銅像除幕式あるに付き十時藤代氏と之を見る　又リンデン街にて皇帝の還幸を見る
午後大谷氏、薗田氏等來る　室內にて寫眞　相携へて動物園に遊び同園內にても撮影　ビーアを傾け歸途白鳥、
大村二氏を訪ふ　不在　ウイダー來ること例の如し　マヤー氏より廿日招待の案內あり　斯波、潮田、萩野には
がきをおくる
六月十七日　晴陰常なし　朝及午後大學にゆく　大學の歸途ポツダメル、プラツツに大谷氏を訪ひ一料理店に
晚餐　洋服一領を誂ふ　值三十二馬克　森のはがきいたる　スコプニツクにてマヤーの十九世紀獨乙文學史及ワ
イトブレヒトの小文學史二册を購ふ
六月十八日　晴　朝大學にゆき午後ケツトナー、ザイヤーにゆく　森の端書きたる　大村同斷
六月十九日　晴　朝チーヤガルテンを步し書を讀む　午後ザイヤーにゆく　夜シユールタイズにいたる　ケツ
トナーの一族あり　ビーアを傾けて十一時に及ぶ
六月二十日　晴　大學に聽講　午後ケツトナーにゆく　內山、惠美來る　午後マヤーの招待に赴く　庭園に導
かれて少話の後樓上にて晚餐あり　佛、英、魯、以、墺等各國の學生男女併せて十五六人あり　十一時散ず　本
日日本よりの手紙着　立花氏五月十二日船中にて死亡の報知あり　痛悼にたへず　桐生の信あり　夜保科、藤岡

二氏に東す

六月二十一日 晴 大幸、服部、吉田等のはがきあり 皆立花の死を悼むものなり 朝大學にゆく 午後惠美來る ケツトナー無届にてゆかず ザイヤー斷りてゆかず 夜藤代、惠美とショツセー街のコンチエルトにいたる ベツヒ、ウンド、ホルツといふポツセを見てかへる 曾我氏より立花氏の件に關し手紙あり 得能の手紙同斷 かう子の手紙も來る

六月二十二日 晴 朝大學にゆきチエールカルテを納めてかへる 午後藤代氏とパウル街に入浴 夜大村、白鳥二氏を訪ふ 白鳥氏微恙の由に付歸途本堂氏へ依賴の書を出す 立花舍兄、曾我、得能等へ手紙をしたゝむ

六月二十三日 晴 藤代氏と美濃部を訪ふ 午後マヤーを訪ひ過日招待の禮を述べ轉じて近角にいたる 姉崎をおとづれ晩景まで談話す 夜戸塚氏を訪ひて一診を乞ふ 腹部に疼痛あればなり 新渡戸氏の武士道をよみて三時にいたる

六月二十四日 晴 下劑を施し腹部の疼痛癒ゆ 大學ゆかず

六月二十五日 晴 朝大學にゆく 午後ケツトナーにゆく ザイヤー同斷

六月二十六日 晴 明日ブラント新寓に引越の由にて小僧手傳に來る よりて荷物を片附けしむ 午後ザイヤーにゆく 佐村、木村等に東す

六月二十七日 晴・本日引越なり 大學の講義を聽きて後以太利料理をくひ午後惠美を訪ひケツトナーにゆき

晩歸寓　惠美來訪し一泊して去る

六月二十八日　晴　惠美、藤代と新沼にボートをこぐ　それより巖谷氏をリユツツオー、ウーフエルに訪ひ橋本屋に午餐　大谷、近角に逢ふ　午後ザイヤーにゆく　夜近傍を歩しクリユーゲルに晩餐してかへる　斯波、佐村の信あり

六月二十九日　晴　藤代氏と惠美を訪ふ　午後パウル街に入浴　夜白鳥、大村二氏を訪問し十二時半歸る

六月三十日　快晴　朝ザイヤー來る　藤代氏と三人同道汽車にてグリユナハにいたり山を越えてトイフエルゼーよりフリードリツヒスハーゲンにいたり午餐　ボートをこぎ汽車にて午後七時頃歸林

七月一日　晴　大學にゆくこと二回　夜クリユーゲルにいたる　森、長尾亦いたる　醉後藤代、惠美二氏とチーヤガルテンを歩す　月明晝の如し　福原亞米利加より立花の死を傷む詩を送り來る

七月二日　晴　大學にゆく　午後ケツトナー、ザイヤーにゆきホノラルを拂ふ　福原の詩に次韻して郵送す　薗田氏旅行よりかへりて來訪

七月三日　晴　チーヤガルテンを歩し午後ザイヤーにゆく　夜惠美、森、長尾三氏來談　ザイヤースカートをやらんとて藤代氏を訪ふ

七月四日　晴　朝大學にゆく　午後ケツトナーにいたる

七月五日　晴　朝藤代氏とノイアルテヤコフ街にいたる　藝者の芝居を見んが爲なり　午後ケツトナーにゆく

ザイヤー同斷　晩森、長尾、藤代三氏、ケツトナー夫妻とチエントラル、テアテルに藝者の芝居を見る、

七月六日　晴　朝藤代氏とパウル街に入浴　午後惠美來る　夜森、長尾二氏亦いたる　長尾氏余等を撮影せし寫眞をもち來る

七月七日　晴　朝公使館にゆき手紙を求む　無し　大久保のはがき一通いたる　午後惠美來る　ともに禽獸園を歩しクリユーゲルに晩餐　夜薗田を訪ふ

七月八日　晴　笹倉のはがき、土井の曉鐘、得能よりの新聞等着す　公使館にゆき尙手紙の來着を問ふ　潮田妻、師岡須賀、大學よりの手紙あり　日本に關する書籍目錄亦いたる　午後萩野の手紙書留にていたる　午後森を訪ふ　不在

七月九日　晴　惠美來る　森氏亦いたる　藤代氏と森、長尾二氏を其寓に訪ふ　イチゴを馳走になり葡萄酒を傾く　今夜發熱下痢嘔吐を催す　神藥を服して寢ぬ

七月十日　晴　藤代氏余がために戸塚氏にいたる　午後戸塚氏來診　服藥を投ぜらる　下痢數回熱やうやく去る

七月十一日　晴　今日尙外出せず　夜建部氏、薗田氏來訪　十一時頃迄談じて去る　ランゲ氏來訪　東洋學校の雜誌にアストン文學史の批評を物すべしと勸めらる　何か別なものを書くべしと約束す

七月十二日　晴　午後五時汽車にてリンゼイ停車場よりシユラハテンゼイに遊ぶ　同行松本、姉崎、建部、筧、

薗田、池山、近角、吉田、市川等十人なり　ウンゼイ湖畔の一料理店に晩餐　夜十二時歸宅　鍵を忘れたるを以て酒鋪のおやぢにあけて貰ふ

七月十三日　晴　晩藤代氏とマーセン街窪田氏寓における白人會に出席　夜二時頃にいたる　美濃部、水野、藤代を併せて四人ドロシケにて歸寓　太陽いたる　遠藤の書狀同斷

七月十四日　晴　夕方雨ふる　午後惠美來る　ともにチーヤガルテンを歩しシヤロツテン、ホーフに晩餐す　今夜薗田、建部二氏饗せられてブラント氏にいたる

七月十五日　晴　近傍を歩しはがきを購ひ福原等に信す　夜惠美來る　森氏亦いたる　藤代氏と森氏の寓にいたりシーボルトの日本を見る

七月十六日　晴　チーヤガルテンを歩し午後ケツトナー、ザイヤーにゆく　森氏來る　夜藤代氏と三人クンストアウステルングス、パークにいたる

七月十七日　晴　森氏來る　ともにプリンツ、アルブレヒト街の美術品博物場に入る　藤代氏を待てども來らず　午後ザイヤーにゆく

七月十八日　晴　朝獸園を歩す　午後薗田、建部二氏來訪　ケツトナーゆかず

七月十九日　晴　驟雨雷鳴あり　午後ケツトナー、ザイヤーにゆく　武士道をケツトナーに貸す　石原、上田に柬す　惠美來り新聞一葉をもち來る

七月二十日　晴　朝獸園にいたりワールフエルワンドシヤフテンをよむ　杉浦、大久保に端書をおくる　保科、和田の信あり　森氏二回來訪　森御蔭氏亦矢野太郎といふ人を伴ひていたる　市川代治來訪　方丈記を貸す　午後パウル街に入浴

七月二十一日　晴　朝近傍を歩し惠美を訪ふ　午後惠美來訪　森、藤代と四人ハーゼに晩餐しウンテル、デン、リンデンよりライプチツヒ街を歩し咖啡ジヨステイに立寄る　玉井、蜂谷、小泉等に逢ふ　ブラントの娘にはがきを送る

七月二十二日　晴　午前惠美來訪　新聞をもち來る　午後同氏再び來訪　森氏亦いたる　ブラントの娘昨日のはがきにて立服す

七月二十三日　晴　午後雨　朝チーヤガルテンを歩し馬車にてマイネケ街の新寓に白鳥、大村二氏を訪ふ　午後ケツトナー、ザイヤーにゆく　晩森を訪ふ　不在

七月二十四日　午後雨　涼し　朝森を訪ひ近傍を散歩す　午後ザイヤーにゆく　夜藤代氏誕辰に付森と三人プリンツに白葡萄酒を傾く　歸途森氏余が寓に立寄りて談ず

七月二十五日　晴　朝カルヴアリーにゆき冨山房の爲めに書物を註文す　午後ケツトナーにゆき歸途惠美を訪ふ

七月二十六日　晴　チーヤガルテンを歩す　一兵卒日本に在りしものに逢ふ　伴ひて寓にいたる　林寛二郎と

いふ人を知り居る由話す　午後森、惠美氏來談　ザイヤーにゆく

七月二十七日　晴　朝パウル街に入浴　午後日本食を拵へてブラント氏夫妻を饗す　惠美、森、薗田與かる　惠美遂に一泊　詩を賦して夜二時半にいたり寢す　得能のはがき着す

七月二十八日　晴　午後一昨日逢ひし兵卒來り藤代氏とトレプトウにいたる　余は寓にとゞまる　三時惠美氏來る　夜ブラント夫妻、松平、惠美、森四氏を饗す

七月二十九日　午前强雨　午後晴　チーヤガルテンを步す　一外人頻に日本の事を談ず　强雨會〻到り樹下に佇立して談ずれば全身ズブ濡となる　雨やまざるを以てドロシケに乘りて歸寓　午後森氏來訪　倉知氏送別會の案內狀いたる

七月三十日　晴　朝チーヤガルテンを步し森氏を訪ふ　午後ザイヤー、ケツトナーにゆく　夜森氏來る　藤代氏とスパーテンの倉知氏留別會に赴く　歸途宮本、奧村、村山諸氏とカフエにいたる　大村、田中二氏亦いたる

七月三十一日　晴　朝カルヴアリーにゆき冨山房の書物をみる　午後ザイヤーにゆく　夜惠美氏來る　ほとゝぎす五月分及春夏秋冬おくり來る　保科より新聞きたる

八月一日　晴　朝薗田きたる　ともに惠美を訪ひ午後ザイヤーにゆく　ケツトナー母死去の報あり　夜惠美來る

八月二日　晴　朝カルヴアリーにゆく　午後先日の兵卒來る　冨山房に書籍數十部を發送す　大學の書物をカ

ルヴアリーに誂ふ　晩シュールタイズにいたる　倉知氏送別會の爲なり　歸途チーヤガルテンにいたり村山氏の尺八を聽く　同行者姉崎、藤代、池山、近角、宮本等數名なり

八月三日　晴　朝惠美を訪ふ　午後惠美來る　晩藤代氏と水野氏寓にいたる　白人會なり　シヤンパン、麥酒の馳走になり日本食を喰うて夜二時かへる

稻妻の影や落ちゆく武者四五騎

屋根低く銀河流れて秋近し

瓜の番晝寢して瓜を盜まれぬ

葉がくれの葡萄酸くして小粒なる

八月四日　晴　公使館にゆく　佐村、市村の手紙あり　午後森氏誕辰にて藤代、惠美、長尾、菊池氏等とプリンツに馳走になる　能勢重二にはがきす　惠美余が寓に一泊す　かう子、遠藤等に柬す

八月五日　曇　朝森、長尾兩氏を訪ふ　午後淸水氏來訪　文藝俱樂部をよむ　夜ザイヤー氏を訪ふ　買物をなしてかへる

八月六日　曇　朝七時ドロシケにてポツダム停車場にいたり十時半マグデブルグに着　同市を散歩しドームを見電車にてウイルヘルムスガルテンにいたる　福原、惠美、森、斯波、藤代、かう子等にはがきをおくる　四時半ランツマンに停車場にて逢ひ七時半頃ベーンドルフに着　主人等と晩餐を喫して寢ぬ　今日の新聞に獨國皇太

后崩殂の報あり

八月七日 曇 シエフラー、ランゲ、ブラントの葉書いたる 午後マックス、ランヅマンと森林を歩してヘルムステッド、バトにいたる 田舍芝居小屋などある處にて少憩 微雨きたる ランヅマン夫婦其他二三人の人後れて來る ともに麥酒を傾け晩歩してかへる

八月八日 晴 午後マックス風邪の氣味にて外出せず 獨近傍の森林に沿うて散歩す チョツケのローマンスをよむ

八月九日 晴 午後マックスと歩してヘルムステッドにいたり舊大學の建築物等を見買物をなし麥酒一杯を傾けてかへる 諸友に葉書をおくる

八月十日 晴 午前在宅 午後マックスとブルンネンにいたり入浴を試む

八月十一日 晴 藤代ワイマールよりの信あり 今日頗る熱きを以て外出せず 文學史をよむ から子に信す

八月十二日 晴 午後暴雨あり 朝マックスと森の近傍にゆき讀書す 午後家尊、貞吉坊主、關根、藤代等に信す 谷本、藤代其他の書あり 惠美より帝國文學一冊來る

八月十三日 晴 朝七時汽車にてマグデブルグにゆく 薗田氏を迎へんがためなり 時間尙早きを以てドームの內部を見物す 宏壯頗るみるべし 十二時過薗田着 ともに余が寓にいたる 午後ランヅマン父子と近傍の森林を散步し麥酒を傾けてかへる 晚小雨あり 惠美より朝日新聞送りきたる

八月十四日　晴　薗田と馬車にてヘルムステツド停車場にいたり同處よりブランシユワイヒにいたりレツシングの家、孤兒院、古寺院等殘る隈なく觀覽　料理店に午餐すればたま〳〵女子の奏樂あり　六時四十五分の汽車にて同處を發しハノーヴアーに着しライニツセル、ホーフに泊す　夜外出して市街を散歩す

八月十五日　晴　八時頃より諸處を見物す　寺院等みるべきもの多し　就中劇場及ライプニツツの家面白しウオーターロー、プラツツの傍にライプニツツの墓あり　その近傍の圖書館にはライプニツツの遺書等多くルーテル、メランヒトン、ピーターー大帝等の手書もあり　ケスネル博物館を經て歸途種々の買物をなし午餐　薗田氏に別れ四時頃歸寓

八月十六日　曇　午後ランヅマンの一族とともにバトにゆきマルキー、ド、コルネーユのオペレツテを見物八時歸寓　藤代ワイマールよりの信あり

八月十七日　晴　終日在寓　テアテルを讀む

八月十八日　晴　午後マリエンボルンにグスタフ、アドルフ、フエラインのフエストにのぞむ　ランヅマン父子同道　パークを散歩してかへる　ランヅマン妻足を傷めて食卓に列せず

八月十九日　晴　朝ランヅマンとパストル、ハンニツシを訪ひ明後日學校參觀の約をなしてかへる

八月二十日　晴　午後マツクスと森林に坐して讀本をよむ

八月二十一日　晴　朝パストル、ハンニツシを訪ひ同氏の案内にてグロース、バルテンスレーベン及クライン、

バルテンスレーベンなどの學校をみる　いづれも單級學校なり　教師の家にて葡萄酒を馳走になりて歸宅　午後マツクスとヘルムステツド、バトに遊び一浴してかへる　得能の書あり

八月二十二日　晴　終日在寓　得能に束す　演習ありとて軍馬の往來するをみる

八月二十三日　晴　午後二時半發マグデブルグに少憩　伯林に着六時一分なり　ヘルダーの母妹等同行　惠美氏に逢ふ　同氏余が寓に入りて一泊

八月二十四日　晴　惠美とともにカフエ店にいたりチーヤガルテンを歩し橋本屋に午餐

八月二十五日　晴　クリユーゲルに午餐　晩惠美宅にて牛肉を煮て日本食を喫す

八月二十六日　晴　八時ポツダム停車場よりライプチツヒに遊ぶ　十二時服部氏の寓に着　同氏とともにチユーリンゲル、ホーフに午餐　川合氏に逢ふ　午後山口氏を其寓に訪ひ同行して劇場茶屋にて晩餐　メツセの最中なるを以て活動寫眞、人魚等を見てかへる

八月二十七日　晴　小雨　書肆リービツシにいたり書庫を一覽　午後書肆博物館にいたり一覽の後マヤー印刷所に至り歸途山口氏を訪ふ

八月二十八日　雨　午後晴　朝雨を冒してコンセルヴアトリウム、ゲヴアンドハウス等を見、人類學博物館にいたる　日本物は伯林よりも多し　チユーリンゲル、ホーフに午餐　午後金子氏とシルラー、ハウスにいたり歸途ゴーゼンの酒店に憩ひゴーゼン一杯を傾く　四時山口、川合二氏とマヤーの書籍工場を見る　壯大驚くべし

八月二十九日　晴　小雨　十時山口氏來る　十時半の汽車にてハルレに赴き金玉と稱する店に麥酒を傾け案内書を手にしてライプチツヒ街よりマルクト、プラツツにいたりマリエン寺の塔上に上り又大學、劇場等を見てモリツ城の廢址を探り歸途フランキツセ、スチフトンゲンをみる　晩歸寓　服部氏と日本會に出席　金子、川合、山口、北里、氣賀、奧島等なり

八月三十日　晴　小雨　八時服部君の寓を辭し急行にて十一時伯林に入る　服部氏停車場に送らる　午後惠美を訪ひ同道して公使館にいたり書狀を領收す　家尊の手紙あり　かう子七月十日神戶に引越せし旨承知す　石橋より十訓抄の註一册來る　土井のはがきいたる　其他の葉書十數通　夜惠美の寓にいたる　內山に逢ふ

八月三十一日　雨　朝ブツセ等に書狀を認めクリユーゲル午餐　惠美踵いでいたる　ビルンバウムにあふ　和氣氏、谷氏同斷

九月一日　晴曇不定　風强し　クリユーゲルに午餐　午後言文一致論を認めて高等師範に郵送す

九月二日　雨　ブラント、ケツトナーのはがきあり　朝岩崎某、惠美を訪うて至る　ともにシユロスパークを步す　それよりクリユーゲルに午餐　午後食品を調へオムレツを拵へて食ふ　晚一カフエにビーアを傾く

九月三日　晴　午後惠美、中山氏を伴ひて來る　手製の西洋料理を饗して談ず

九月四日　晴　午後カルヴアリーにいたり歸途チーヤガルテンを步してかへる　五時頃ブラント一族歸宅　惠美氏尙一泊して去る

九月五日 晴 午後惠美を訪ひともに公使館にいたる 萩野の書狀及書籍數冊を領收す 晩餐の時ブツセよりはがきあり明日會見し度由申越す よりて松本を訪ひ明日同行の事を約してかへる 萩野、關根、坂本、かう子等に柬す

九月六日 晴 松本一時迄に來らず よりて外出す 途中にて吉田、近角、松本三氏に逢ふ よりてブツセの寓を訪ふ ケンピンスキーに午餐 レツクスにいたり同氏に贈るべき七寶燒の皿一枚を買ひ之を旅宿におきてかへる 夜惠美來談

九月七日 晴 午後ザイヤーを訪ひ十日より再び語學授業を受くることを約す 夜惠美氏來談

九月八日 晴 朝惠美を訪ふ 午後蜂谷來談 尙二十馬克を借る 夜清水氏送別會にて橋本屋にいたる 巖谷、水野、筧、池山、加藤、盧等十數名なり

九月九日 晴 午後パウル街に入浴 福原に柬す

九月十日 晴 朝惠美を訪ふ 朝日新聞等到る 惠美外出の後尙新聞をよむ 內山亦來訪 午後坂本、氣賀、惠美來る 惠美公使館よりかう子の書二通、佐村、桐生、まち子等の書狀を齎し來る 桐生に信す

九月十一日 晴 朝チーヤガルテンを步す 午後ザイヤーにゆく 惠美を訪ひともにクリユーゲルに午餐す

九月十二日 晴 午前チーヤガルテンを步す 午後ブラントの娘及び惠美とポツダム街のライナー及びケラーにいたり日本畫の陳列を見る

九月十三日　雨　朝「パテンタ」を購ふ　午後内山來り海苔とかき餅とをおくる　森御蔭來談　森孝よりはがき二葉あり　ザイヤー行かず

九月十四日　晴　ダス、コンクステ、ドイツチランドを讀む

九月十五日　陰晴不定　午後惠美來る　内山同斷　かき餅を燒きて食ふ

九月十六日　雨　午後ザイヤーにゆく　岡倉、山本の信あり　又高等師範學校卒業生一同よりの書狀あり　パウル街に入浴

九月十七日　雨　文部省より學費八月十五日附にて送る旨通牒あり　午後ザイヤーにゆく　午後惠美來る

九月十八日　雨　朝惠美を訪ふ　午後ザイヤーにゆく　不在中惠美來訪の由　藤代ボン市に在り　はがきを送る

九月十九日　雨　朝森を訪ふ　巴里小林よりルーヴル畫帖を送り來る　森氏とホーヘンツオルレルン街の日本食をくふ　午後内山、惠美來訪　岡倉、平野、斯波に柬す

九月二十日　晴　朝近傍を歩し午後ザイヤーにゆく　夜ブラント母子とアレキサンダー、プラッツのゼセツシヨンス、テアテルにいたる　落語、唱歌、音樂等ありて日本の寄席なり

九月二十一日　晴　朝獸園を歩す　午後森を訪ふ　再び日本料理店にいたる　玉井をはじめ七八名の人あり　十時歸寓　今立、白鳥、薗田に柬す

九月二十二日 晴 朝惠美を訪ふ 午後同人來る ともに獸園を歩す 夜ウイダー來る
九月二十三日 風つよし 朝チーヤガルテンを歩し午後ザイヤーにゆき佛語をはじむ 近角のはがきあり 返事す
九月二十四日 晴 午後ザイヤーにゆく 夕方惠美來る 今夜藤代歸林の報ありしを以て動物園停車場にいたる 十時二十五分着 ドロシケにて歸寓 談じて一時にいたり寢に就く
九月二十五日 晴 朝ザイヤーにゆく 午後森、藤代、惠美と四人日本食にいたる 野田、小出、田中三氏亦在り 塚本氏踵いで來る 歸途クリューゲルにいたる
九月二十六日 晴 朝ザイヤーにゆく 午後鶴卷、大森二氏藤代を尋ねて來る 近角、玉井二氏同斷 惠美も亦來る 夕方パウル街に入浴
九月二十七日 晴 文部省の金子到着 午後森氏を訪ふ ザイヤーにゆく
九月二十八日 晴 藤代、惠美等とバンクにいたり金子を受領しレツクスに立寄り買物をなしてかへる
九月二十九日 晴 藤代氏と白人會にのぞむ 夜二時退散 午前蜂谷を訪ひ金子五十馬克を返す

千草より野は白つゆの盛かな
夕嵐古城の上を鳥渡る
石ぶみの下に聲ありきり〲す

森に三百馬克をかす　森と日本ケラーに晩餐　ケツトナーを訪ひて花瓶をおくる

九月三十日　晴　晩藤代氏の爲に送別會を開く　戸塚、美濃部、森、坂本來會　歸途散歩　〇〇と暫時交を絕つ旨申送る

十月一日　晴　ザイヤーゆかず　坂本、森來談　朝ケツトナーを訪ひて內山の爲めに百五十馬克を拂ふ　惠美より書狀あり

十月二日　晴　朝レールテル、バーンホーフに谷本氏を迎ふ　午後ザイヤーにゆく　戸塚、森、美濃部等來談　遠藤、渡邊の信あり

十月三日　晴　午後藤代氏の萊府行を送りてアンハルテル、バーンホーフにいたり歸途ザイヤーにゆく　夜谷本氏と近傍を歩す　畑の書到る

十月四日　晴　午前谷本氏とノイエルゼーにいたる　午後森（ロシヤ）來り三百馬克を返却す　晩谷本氏と三人日本ケラーにいたる　大島、奧村其他あり　獸園を歩してかへる

十月五日　雨　パウル街に入浴　午後ザイヤーにゆく　森氏二度來訪　夕七時よりシユーマン街の美濃部氏送別會にいたる　一時歸宅

十月六日　雨　岡村氏谷本を尋ねて來る　午後ともに其寓にいたり小泉氏と四人サヴイニー、プラツツに晩餐　渡部、福原に柬す　內山來る

十月七日　雨　美濃部來訪　夜ザイヤー來る

十月八日　雨　午後ザイヤーにゆく

十月九日　雨　午後谷本と獸園にいたる　午後ザイヤーにゆく　歸途森氏を訪ふ

十月十日　曇　午前谷本を拉してチーヤガルテンを歩す　夜ザイヤー來る　森、內山來談　上田、佐村、石原、潮田に柬す

十月十一日　晴　藤代より宿所報じ來る

Lindenstr. 1[1] b/Franke

十月十二日　晴　夜谷本氏と白人會に水野氏宅にいたる　來會十四人

藤代に荷物をおくる　大村、白鳥二氏來訪

笹栗の笠にこぼるゝ山路かな

紅葉の山門高き夕日かな

雁落つる花野の末や小松原

茸狩のわらぢ松葉の匂かな

古き井の草に埋れて蟲の聲

十月十三日　雨　谷本氏病臥　岡村、小泉、坪井等來談　大久保に柬す

十月十四日 雨 朝谷本とパウル街に入浴 午後森を訪ふ 晩ザイヤー來る
十月十五日 晴 ザイヤーにゆく 午前チーヤガルテンを歩す
十月十六日 晴 午後ザイヤーにゆく 夜ブラント老婆とともにベートーヴェン、ザールに音樂を聞く 佛人ラマン氏なり 十時歸寓
十月十七日 晴 朝内山來る ともに獸園を歩す 晩ザイヤー來る 織田の信あり 今日谷本の誕辰を祝して葡萄酒をのむ
十月十八日 晴 午後松本文三郎來訪 ザイヤーにゆき内山を訪ふ 小林力藏巴里より來り談じて十時にいたる 坂本四方太より來信
十月十九日 晴 朝谷本と内山を訪ふ 午後森御蔭來談 森孝三を訪ふ 去年の今日ゼノアに上陸せし日なるを以て同遊諸氏にはがきをおくる
十月二十日 曇 森、池山來る 谷本と四人シュロスパークを歩す 美濃部に柬す

ホーフエルの塔を掠めて旅雁かな
オムニブスのテラスに寒し秋の風

午後谷本とシャロッテンブルグの王城庭園を見又マウソレウムを見物 ウエストエンド停車場より動物園停車場に下車 森を訪ふ 不在 歸途日本食を食ふ 近角、吉田、松本等にあふ

十月二十一日 晴 パウル街に入浴 午後ザイヤーにゆく 歸途ビルンバウムに立寄り藤井氏宿の事を相談してかへる かう子、德江女、山田子三郎の信あり ほとゝぎすいたる
十月二十二日 晴 獸園を步し午後ザイヤーにゆく 午後內山來り谷本とグルコーネワルトに赴く
十月二十三日 晴 午後雨 午後ザイヤー斷りてゆかず シユロスパークにいたる 近角に逢ふ 坂本を訪ひて太平洋二册を借る 夜藤井、薗田來訪 藤井をビルンバウムに送届けてシユールタイズに晚餐 十時辭しかへる 斯波、かう子、坂本四方太に信す
十月二十四日 晴 近角來る 藤井を訪ひ薗田と四人馬車にて大學にいたる 歸途カルヴアリーに立寄書物を注文 尙佛獨字書一部を購ひてかへる 午後ザイヤーにゆく
十月二十五日 晴 午後森(ロシヤ)來談 晚餐を喫して去る
十月二十六日 晴 公使館にいたり水野氏に面會 森氏をファザーネン街に訪ふ 日本食の馳走になりハレンゼーに遊ぶ グルネワルトの停車場より動物園停車場にいたる それより故津田氏の寓にいたり弔辭をのぶ
十月二十七日 晴 夜谷本とレールテル、バーンホーフにいたる 故津田海軍大佐の送葬にのぞむなり 一大隊の儀仗ありて禮砲を放ち中々嚴肅なりき 森氏歸途立寄葡萄酒をのみてかへる 谷本と談じて二時半にいたる
十月二十八日 晴 大學にいたりマヤー、シユミツトを聞く 大村氏に逢ふ 步してブランデンブルゲル、トールにいたり別れてかへる 午後ザイヤー休みてゆかず かう子、秋吉、藤岡の信あり 藤岡に返信 秋吉同斷

十月二十九日　晴　大學にゆきヘルマン、マヤー聽講　十二時半ポツダム停車場に集まりしもの松本、白鳥、大村、谷本、市川、林、近角、吉田、薗田、藤井、余を併せて十一人　ポツダムにゆきサンスシー料理店に午餐二手に分れ余は近角、吉田、林、松本とマルセル、バレーを觀覽　河邊の風光を賞しフイングストベルクにいたり二隊相合しシユールタイズに晩餐　十時歸林　留守中内山來訪の由

十月三十日　晴　谷本とパウル街に入浴　森氏來る　内山同斷　○○より三百馬克返濟の由内山より相談あり森氏の負債、内山の負債幾分を辨償せしむ　森君より百馬克返金あり　夜藤井氏を訪うて其金を藤代に返さんことを依賴す　字引同斷　夜十一時歸宅

十月三十一日　曇　惠美、足立に信す　森、池田、坂本三氏來談　夜ザイヤーにゆく

十一月一日　曇　午後ザイヤーにゆきホノラル四十二馬克を拂ふ　朝大學にゆきマヤー、ヘルマン聽講

十一月二日　曇　朝ウエルトハイムにゆく　坂本に逢ふ　ともにシユールタイズに一酌す　夜谷本と坂本を訪ふ　河原林在り　談じて十一時にいたり歸寓

十一月三日　曇　朝内山來る　ともに獸園を歩す　晩公使館夜會に赴く　家鍵を忘れたるを以て森氏の寓に寢ぬ

十一月四日　曇　内山來る　ともにポツダム街の寫眞鋪にいたる　獨乙協會關係者撮影の爲なり　薗田よりベーンドルフの寫眞を送り來る　大學、ザイヤー斷りてゆかず

十一月五日　曇　朝大學ゆかず　近傍を散歩し藤代、薗田等に束す　ハイネ集其他一二冊の書を購ふ

十一月六日　曇　ザイヤー斷りてゆかず　終日在宅　風氣あればなり　冨山房より書籍數部送り來る　關根の書いたる　斯波に束す　山本の子、神戸へ繪本をおくる

十一月七日　曇　木村義則の書いたる　午後ザイヤーにゆく　歸途森氏に立寄葡萄酒をのみてかへる

十一月八日　曇　小雨　午前大學にゆきマヤー聽講　大村氏と歩してジーゲス、アレーにいたりて別る　午後ザイヤーにゆき歸途津野氏を訪ふ　浴衣を神戸より同氏に托したればなり　森（ロシヤ）來る

十一月九日　晴　公使館に禮にゆく　足立氏に返事す

十一月十日　晴　夜雨　朝谷本と坂本を訪ふ　不在　午後森、坂本來る　夜窪田氏宅の白人會にのぞむ　來會九人

おしろいの匂ねられぬ布團かな
小座しきに菊のかをりや御眞影
初霜や庭の飛石石燈籠
秋のわかれ人の別や木の葉ちる（悼津田大佐）

歸途はドロシケなり

十一月十一日　雨　ザイヤー休みてゆかず

十一月十二日　雨　十九日より堀江といふ人ブラント氏宅に寓居の由報あり　谷本二階下へ移る事となる　共にゆいて其新屋を見分す　内山來り金子を借らんことを乞ふ　晩薗田氏を訪ひ百馬克を借りて渡す

十一月十三日　雨　午後ザイヤーを訪ふ　歸途森氏に立寄る　近角、伊東二氏あり　共に日本ケラーにゆく

十一月十四日　雨　ザイヤーにゆく　今日文部省より爲替着　一月至三月學資金なり　高田商會より井上氏のザイヤーへ報酬金四十馬克送附し來る　谷本とパウル街に入浴　内山來談　金子返却す　かう子の手紙あり　斯波、畔柳同斷

十一月十五日　曇　午後ザイヤーにゆきともに電車にてノルレンドルフ、プラッツの盧氏を訪ふ　不在　フォークスに麥酒を傾け日本ケラーにいたりザイヤーを饗す　井上氏の報酬をザイヤーに渡す　高田商會に返事す

十一月十六日　曇　朝薗田、松浦二氏來る　谷本と獸園を歩す　午後ザイヤー來る約ありて不參　近傍にてはがき等を購ふ

十一月十七日　快晴　谷本、森と公園を歩す　午後ザイヤー來る　森とともに玉井氏の寓に赴く　廿人ばかりの會合にてビール會あり　川上音二郎夫妻其他二三の女優いたる　管絃の合奏あり　夜十一時半辭しかへる　歸途シュールタイズに晩餐

十一月十八日　曇　午後ザイヤーにゆく

十一月十九日　雨　谷本下の一室に移轉す　午後ザイヤーにゆく
十一月二十日　雨、午前堀江氏英國より着す　午後薗田、森、ビルンバウム等を訪ふ　今日はブスタツハなり
山下啓次郎着の由報あり
十一月二十一日　雨　松本愛重の書いたる　午後ザイヤーにゆく　森氏、氣賀氏來る　森と山下を訪はんとして果さず
十一月二十二日　晴　連日の雨晴れて心地よし　萩野より洋學者年表外一二册の書到着　福井、保科、かう子等の書いたる　坂本よりカルヴアリーの拂として百馬克送り來る　午後ザイヤーにゆく　今日銀行に文部省の金子を受取りリンデン街にいたり書籍數部を購ふ
十一月二十三日　快晴　森氏とともに山下を訪ふ　不在　近角亦不在　吉田氏と三人日本ケラーに食す　歸途カルヴアリーに立寄書物の代を拂ふ　時計の修繕をなさしむ
十一月二十四日　微雪　薗田を訪ふ　不在　午後森來訪　晩ブラント母子とチエントラル、テアテルに川上一座の劇を見る　玉井、井上、松村と麥酒店にいたり一酌の後歸宅
十一月二十五日　曇　紀元會のはがき來る　土井及藤代に信書をおくる　ザイヤー休む　午後ザイヤーを訪ふ
森、巖谷二氏來談
十一月二十六日　晴　堀江とライプチツヒ街にいたりブロツクハウス及ウエーベル等を購ふ　午後ザイヤー來

る　薗田同斷　夜內山を訪ふ

十一月二十七日　晴　朝堀江と獸園を步す　午後ザイヤー來る　潮田妻、福原の書いたる　內山來訪

十一月二十八日　雨　夜雪　晚食後巖谷を訪ふ　不在　近角同斷

十一月二十九日　曇　夜雪　午前近傍を步す　午後谷本とパストルの饗宴に赴く　ケットナーの誕生日なればなり　ランツマン來訪

十一月三十日　晴　夜雨　堀江と近傍を步す　午後坂本を訪ふ　夜坂本至る　談じて午前一時半にいたる　日本に年始狀をおくる　ランゲ、ペルチンスキー二人來訪　ランゲ研究の日本女子人名錄をおくる

十二月一日　曇　近傍を步す　氣賀、津村來る　谷本、堀江と五人日本ケラーにいたる

十二月二日　雨　午前の晴に乘じて堀江と近傍を步す　午後ザイヤーにホノラル三十六馬克を拂ふ　夕方パウル街に入浴　宿料を拂ふ

十二月三日　雨　桐生の手紙あり　藤井、岩城同斷　夕方近傍を散步して穴アケ器械一つを購ふ　又散髮す

十一月四日寫の寫眞いたる　大谷光瑞氏より招待狀來る

十二月四日　晴　朝堀江とウンテル、デン、リンデン街より銀行にいたり金子二百六馬克を領收

十二月五日　晴　午後ペルチンスキーをレンネ街に訪ひ咖啡を飲みて談ずること二時間　歸宅後谷本と大谷氏の招宴にブリストルに赴く　來會者二十名許　非常なる馳走なり　十時散じてフリードリッヒ街に伊藤侯を迎ふ

十二月六日 晴　午後谷本と動物園停車場にいたる　ともに日本婆に久原、村岡兩氏を訪ひ日本茶の馳走になる　歸宅後堀江、谷本と牛肉を煮て食ふ　晩八時よりアルブレヒト、ホテルの伊藤侯歡迎會に臨席　十一時退散歸途シュールタイズにいたる　陸軍の佐々木、隈部其他數氏同席

十二月七日 雨　朝大學にいたる　歸途玉井を訪ひ人名辭書をかりてかへる　夜坂本來談　夜一時半に至り去る　玉井に武士道の代價を拂ふ

十二月八日 雨　堀江と公使館にいたる　午後薗田、松本兩人來談

十二月九日 晴曇不一　朝堀江とチーヤガルテンを歩す　午後ザイヤー來る　內山亦到る　グロース、バーテンレーベンのパストルに武士道一册をおくる

十二月十日 曇　大學にゆき聽講料を納めマヤーを聽講　午後パウル街に入浴

十二月十一日 雨時々來る　朝堀江とグルネワルトに遊ぶ　午後ペルチンスキーを訪ひ赤穗義士の事蹟を談話す　晩頃歸宅　佐村八郎の信あり

十二月十二日 曇　朝大學にゆきマヤー聽講　午後大谷氏を訪ひ禮をのべ大村、白鳥二氏を訪ひ談ずること二時間ばかり　歸途日本ケラーにいたり歸寓

十二月十三日 曇　森臥病の由を聞き見舞にゆく　夕方日本ケラーにいたり同氏の爲めに日本食を調理せしめて同氏宅に晩餐す

十二月十四日　晴　堀江とウェルトハイムにいたる　夜内山來談

十二月十五日　雪　午後坂本、森（御蔭）來訪　七時より日本ケラーにいたる　谷本の送別會の爲なり　飛雪霏々夜半にいたりて尙やまず　禽獸園を步してかへる

十二月十六日　晴　朝大學に聽講　午森氏來訪　谷本今日萊府に出發に付同乘してアンハルテル、バーンホーフにいたる　內山同行　夜グリーヒシエス、テアテルをよむ

十二月十七日　晴　朝大學にゆきマヤー聽講　堀江と近傍を步す

十二月十八日　晴　午後ザイヤー來る　今日よりタータラン、ド、タララスコンを讀む　夜森氏來訪　堀江と三人牛肉を煮て食ふ　八時より和獨會のワイナーテン、フエストにいたる　博士ウイルヒヨー氏亦來會余が隣席に在り　貞奴等一行も來りて舞蹈等あり　夜三四時頃散會

十二月十九日　曇　風あり寒し　午後森を訪ふ　不在　パウル街に入浴

十二月二十日　晴　朝大學に聽講　マヤー今年はこれにて休講の由　午後ザイヤー來る　夜坂本氏來談　十二時去る

十二月二十一日　曇　堀江とライプチツヒ街にゆきレツクスにて種々の買物をなし歸宅　午後ザイヤー來談　夜フリードリツヒ街停車場に中村是公を迎ふ　ともにベルヴユーにいたる　今泉海軍大佐、黑岩工學士等亦來着　森とドロシケにて歸寓　得能より日本新聞、斯波より太陽着す　カルヴアリーよりキヤラクタリスケンを送り來

る
十二月二十二日　曇　朝ザイヤーを訪ひワイナーテンの贈物をなし公使館にゆく　山本の手紙一通を受取る　午後坂本、內山を訪ふ　皆不在
十二月二十三日　曇　後雨　フオツクよりパウルのクリスントリス第二卷第二回分送り來る　廿五日夜ランツマンの招待狀あり　午後內山來る　ともにレツクスにいたり買物をなし歸途マヤーを訪ひて贈物をなす
十二月二十四日　曇　夜雨　カルヴアリーより書物二三冊いたる　今日ワイナーテンなるを以て贈物を宿の人人におくる　宿の婆の兄キールの工場の技師なる人到着　夜葡萄酒をのみ鯉を食ふこと例の如し　森氏いたりともに外出してカフエに飲む　堀江氏と同車して歸寓
十二月二十五日　晴　堀江とチーヤガルテンを步す　ケツトナーに逢ふ　午後四時ランツマンの咖啡に赴く　歸途パストルの饗宴にいたりともに其岳父たる大尉シユツ氏を訪ひ一時歸寓
十二月二十六日　晴　朝近傍を步す　午後近角、氣賀來談　夜森來る
十二月二十七日　晴　堀江と近傍を步す　午後ザイヤー來る　ともに其寓にいたる　ランヅマンより寄贈せしマンペを飮みて快談　夜坂本を訪ひ種々放談　夜半歸寓
十二月二十八日　晴　朝ランゲ氏をステーグリツツに訪ひ子供に贈物す　午後內山來る　ともにマンペを傾け盡す　夜ケツトナーが會長たるワイナーテン、フエストにゆく　薗田、グロートとともに在り　福引等あり　十

二時歸寓

十二月二十九日　曇　夜雨　堀江と公使館にゆく　かう子の手紙あり　高師より一覽いたる　晩森氏來り明日魯西亞に出發に付一酌せんといふ　近傍の一酒亭に葡萄酒を傾く　夜ウイダー來ること例の如し

十二月三十日　晴　夜雨　近傍を散歩す　夕六時より白人會あり　秋蔓亭に會す　會者十四五人

朝日さす小川に鴨のきら〱し

福引や一度々々のわらひ聲

庭下駄の歩み重たし霜柱

元旦のまづ誦んじけり神代紀

一年の日記檢すや年の夜

水仙の鉢を筆洗に醉畫かな

木枯しに風樹の歎の夕かな（水野氏父を喪ふ悼句）

十二月三十一日　晴　堀江と近傍を散歩し一時橋本屋にいたる　藤岡、中川、八杉等新に到着せし留學生に逢ふ　午後藤岡氏等と公使館にいたる　夜日本ケラーに集まり雜談の後十一時半歩してウンテル、デン、リンデンにいたる　歸途ドロシケにて午前二時歸寓

留學日誌（明治三十五年）

一月一日　曇　公使館にゆき歸途チエルテンにシエリー一瓶を傾く　午後坂本來る　ともに惠美を訪ふ　夕七時より日本人會にいたる　會者八十餘人　福引あり　シユールタイズに立寄歸寓

口　占

幾觥鬱酒代屠蘇　遙拜東天萬歲呼　日自旭旗輝世界　霞從捷塔滿全都　佳辰遺憾無梅柳　賀筵風流有畫圖　自笑迎新存舊態　依然不剃去年鬚

床の間に應擧の幅やとらの春

一月二日　雨　午前近傍を散步す　午後ザイヤー來る　かう子、今立に信す

一月三日　微雨　朝八杉を訪ひ森御蔭を訪問しシユールタイズに午餐　内山至る　薗田にゆく　不在　晚薗田來る　福原に信す

一月四日　微雨　午後八杉、坂本來る　夜惠美來談　十二時去る

一月五日　雨　風强し　午後松石、渡邊修來る　晚堀江と獸園を步す

一月六日　雨　朝近傍を歩す　午後ザイヤー、森御蔭來談

一月七日　雨　朝塔街に內山を訪ふ　午後ベークを讀む　晩坂本を訪ふ　津輕氏亦在り　談じて十二時にいたる

一月八日　曇　朝獸園を歩す　午後ザイヤー來る

一月九日　曇　朝近傍を散策　午後カルヴアリーに至り冨山房の書籍を注文す　鹽川三四郎氏ブラントを尋ねて至る　夜ベークを讀む

一月十日　曇　朝パウル街に入浴　午後ザイヤー來る　ペルチンスキーより雜誌一册及四十七士の話送り來る

一月十一日　曇　文藝俱樂部、新小說等をよむ　午後堀江とチーヤガルテンを歩す　ペルチンスキーに信し四斯波の信あり　太陽到る　晩堀江コニヤクを買ひ來る　夜堀江及內山と市中を散策す　夜半歸寓

一月十二日　晴　午後微雨　朝堀江と近傍を歩す　午後再び獸園を歩す　それより大村氏を訪ひ白鳥氏と談話十七士の話の校合を送りかへす　かう子の書あり

一月十三日　晴　風あり寒し　朝微雪　岩田にはがき、かう子、土肥、斯波、山田に信書を出す　午前薗田を歸寓

訪ひ金子三十馬克を受取る　內山來る　午後三時半より水野氏送別の事に付きジョステイに會合　それより坪井氏をホルン街に訪ふ　不在　フルーストルフエルの日記を讀む

一月十四日　快晴　午前獸園を步す　午後ペルチンスキー來る　宿の娘よりゴンクール及ホルムスの北齋傳を借りて讀む

一月十五日　雪　終日飛雪紛々　朝堀江と獸園を步し一旗亭に麥酒をのみ歸寓　ザイヤー來ること例の如し坂本來る

一月十六日　雨　朝獸園を步す　夜べークを讀む

一月十七日　曇　朝近傍を步し支那のノウエルレン其他一二の小册子を購ふ　午後之を讀む　ザイヤー來ること例の如し　パウル街に入浴

一月十八日　曇　午後雨　朝堀江と電車にてシヤロツテンパークに遊ぶ　午後ゴンヂトライにゆき歸途坂本を訪ひ談話す　不在中市川代治來訪の由　夜べークをよみ終る

一月十九日　曇　朝公使館にいたる　午後内山、白鳥二氏來談　白鳥氏は不日ブダペストに向ふを以て告別の爲なり　夜坂本を訪ふ　池田、山尾等あり　馬鐵にてアダミの法政會に臨む　水野、松井二氏よりシヤンパンの馳走ありて歡をつくして散會夜一時

一月二十日　雨　朝堀江と獸園を步す　午後ザイヤー來る　晚薗田來る　ともに橋本屋にいたる　白鳥氏送別の爲なり　會者十餘人　十一時半歸宅

一月二十一日　晴　朝獸園を步しカルヴアリーにいたりアンハルテル停車場に白鳥氏の出立を見送る　内山來

る

一月二十二日　細雨終日蕭々　朝塔街を歩す　午後ザイヤー來る　晩六時より白人會に田中桂亭宅に會す　會者十二人　日本料理の馳走あり　桂亭の料理にて非常の風味あり　夜半又饂飩を食ひ一時半退散

十年の螢雪こゝに花の宴（祝桂亭卒業）

書初や墨の香匂ふ銀屛風

若草や榎古りたる一里塚

枯蓮も氷りて寒し寺の池

猿曳を黑犬吠ゆる長屋門

一月二十三日　曇　微雨　朝獸園を歩す　午後入浴　散髮す

一月二十四日　曇　朝ウンテル、デン、リンデン街を歩しフリードリツヒ街より電車にてかへる　午後ザイヤー來ること例の如し　佛國文學史讀了　內山來る　坂本同斷

一月二十五日　雨　朝塔街を歩す　歸宅後發熱感冒の氣味あり　マノンレスコー、エ、シエウアリエー、デクリエーを讀む

一月二十六日　晴曇不定　薗田來談　終日在寓　ルザージのヒンケンデ、トイフエルを讀む

一月二十七日　晴　朝カルヴアリーにゆき書籍を注文しウンテル、デン、リンデン街を歩す　今日獨帝誕辰に

て市中多少の賑なり　午後大村、渡邊、薗田來る　薗田晩餐を喫して九時半去る　夜イワン、ミュラーを讀む
一月二十八日　雨　雪　得能、高津、渡邊、遠藤、只野等日本よりの書信あり　午後日本ケラーにゆく　藤岡、池山、巖谷等あり　夜水野より不如歸郵送ありしを以て之を讀んで夜半にいたる
一月二十九日　雨　朝獸園を歩す　午後内山來訪　ともに惠美を訪ふ　豚肉二斤を煮て食ふ
一月三十日　大學にゆきカルテを取替それより汽車にてシルラー、テアテルにゆき豫約切符を購求す　午後惠美、藤岡、晩坂本來る　マヤーより四日音樂會に招待の旨言ひ來る　カルヴアリーより書籍數部領收
一月三十一日　晴　午後ザイヤー來る　ホノラル二十馬克を拂ふ　朝内山を訪ひ芝居切符の事を談ず　杉浦鋼太郎の書いたる　森孝三のはがき同斷
二月一日　快晴　ほとゝぎす第五卷三號到る　朝近傍を歩し公使館にいたる　八杉の許へ手紙をおくる　午後ファルケンハイムのクノー、フイツシャーをよむ　晩松井茂氏の招宴に赴く　來客十四五人　歡を盡して散會夜一時
二月二日　曇　月あり寒し　朝坂本來る　堀江と三人和獨會のウイルヒョー、ムゼアム參觀に赴く　途中薗田に逢ふ　ドロシケにて同所にいたる　午後内山とシルラー、テアテルにいたりウイルヘルム、テルの演劇を看る　歸途内山余の寓に立寄りビーアをのみて去る
二月三日　雨　午後ザイヤー來る　パウル街に入浴　夜クノー、フイツシャーを讀む

二月四日　晴　午後巖谷來談　メルヘンの談をなす　晩八時よりマヤーの音樂會に赴く　女流十七八人あり中中の馳走もありき

二月五日　晴　朝近傍を歩す　午後服部、奥村等を訪ふ　又小泉氏の寓にいたり晩歸宅　夜坂本を訪ふ　今日ザイヤト斷る

二月六日　晴　朝薗田を訪ふ　午後ゲルマニツセス、ゼミナールにいたる　其研究室の書籍等を一覽す　書記たるデーレンド氏親切に案內し呉れたり　益を得たること多し　夜惠美來訪　クノー、フイツシャーの文學研究法讀了

二月七日　雨　朝內山を訪ふ　病氣の由傳聞したればなり　大方全快の容子にて安心　午後吉田來り近角、池山急に歸朝の由を聞く　吉田とともに日本ケラーにいたる　巖谷、近角、池山、藤岡等に逢ふ　九時ゼルヴスにいたる　パストル夫妻、清水金太郎とビーアを傾く

二月八日　曇　寒し　朝獸園より歩してマヤー氏にいたり禮をのべ歸途カルヴアリーに立寄る　午後ザイヤーにゆき晩シルラー、テアテルにいたりオーヂエーのフアミリエ、フールシヤンボーを看る

二月九日　雪　日本より新年狀十五六通着す　午前公使館にゆく　午後內山を訪ひ又池山を訪ふ　不在　藤岡を訪ふ　大谷、池山、近角、吉田等あり　歸途シュールタイズに晩餐　惠美を訪ふ　惠美ついで來り談じ十二時にいたり歸り去る

二月十日　快晴　寒し　午後ザイヤー來る　夜スパーテン、ブロイにて近角、池山二氏の送別會あり　會者二十二三人　薗田、坂本と同行歸寓

二月十一日　曇　午後內山を訪ふ　中山在り　魚を煮て日本食の馳走あり

二月十二日　曇　午後內山來る　ともにライプチツヒ街にゆき買物をなす　午後ザイヤー來る　日本より賀狀數通着す

二月十三日　晴　午後大村氏を訪ひ三百馬克を借る　それよりライプチツヒ街に午餐　レツクスにゆき買物をなす　晚七時ケツトナーの招宴にゆく　今日胡妻の誕生日なればなり

二月十四日　晴　朝森、中村二氏を訪ふ　朝比奈氏亦在り　長岡氏もついで臻る　五人橋本屋に午餐　四時歸宅　ザイヤー來る　晚八時和獨會に赴く　大村氏の獨語に關する演說あり　夜十二時鐵馬にて歸寓

二月十五日　晴　內山來る　ともに書肆にゆき日英條約祝賀のためとて一酒亭にビーアを傾く　惠美を訪ふ　中山來る　先日の禮の爲め牛肉を煮て食ふ　夜市街を散步す　日本より手紙數通いたる

二月十六日　快晴　午後惠美來談　上田、桐生、坂本に柬す　午前近傍を步す

二月十七日　曇　朝カルヴアリーにゆく　午後ザイヤー來る　晚近傍を散步す　藤井、土井等に信す

二月十八日　曇　午前ベルンベルク街のマヤーにいたり脚本一部を購ふ　午後服部、鹿、奥村、直木來訪　晚近傍散步

二月十九日　曇　パウル街に入浴　坪井、森二氏來る　坪井氏に午餐を饗す　午後ザイヤー來る　晩日本ケラーにいたる　森、中村、巖谷、藤岡等あり　十一時歸寓　只野、中山、山本、杉等の年賀狀あり

二月二十日　曇　眞吾に軍人必携一冊を郵送す　其他吉田、只野、中山等に信す　午後近傍を歩して內山の寓にいたる　內山又余が寓に來り晩餐を喫して去る

二月二十一日　快晴　ミュラー、マヤーにいたり書籍數部を誂へてかへる　午後ザイヤー休む　薗田を訪ひグスタフ、シュレーゲルの扶桑國考を讀む　夜森、中村二人來る　市街を散歩す　斯波伯父、高津、木村等の信あり　岡倉の新著發音學講話着す　かう子の便あり

二月二十二日　快晴　朝獸園を散歩す　晩シルラー、テアテルにゆく　ロタールのケーニツヒ、ハルレキンなり　關根より諸友合作の書狀いたる　佐村、黑川眞道の端書同斷

二月二十三日　曇　夜晴る　午前チーヤガルテンを歩す　午後內山を訪ふ　それより電車にて橋本屋に晩餐　田中氏寓の白人會にいたる　會者八九人

おとなへば亭主留守なり花の宿

馬逸す柳の馬場や月おぼろ

麥酒賣る假の亭あり花見會

靑柳にうたれて怒る葷の角

茱の花やかげろふもゆる石地藏
蕨煮る山や蕨を鍋のつる
桃源を霞こめたり石の門
流れ來て水車にからむ落花かな
蔓見れば醜かりけり藤の花
籃に滿つ蕨に蘭も交りけり

二月二十四日 快晴 朝シヤロツテンブルグに小泉を訪ふ 午後ザイヤー來る 惠美同斷

二月二十五日 快晴 獸園よりウンテル、デン、リンデンを歩す 朝森を訪ふ 夜麥酒をクリユーゲルに傾く

二月二十六日 快晴 ウエツデイング、プラツツよりシヨツセーを歩してかへる 午後ザイヤー來る パウル街に入浴 森氏とプリンツに晩餐 歸途又クリユーゲルに飲む

二月二十七日 快晴 夜雨 朝森氏を訪ふ 又はがき若干を贈る 同氏荷物拵の最中なり 午後フリードリツヒ街にゆき繪葉書を購ふ 歸途中村氏を訪ふ 朝比奈、森と四人日本ケラーに晩餐を喫してかへる

二月二十八日 晴 朝森を訪ふ 中村亦來る 金二百馬克を借る 午後內山來訪 フリードリツヒ街を歩し村山の出立を見送る それよりプシヨルにいたりヴアリエテを見、歸途ウアイデルタンメ橋畔に晩餐

三月一日 雨 內山來る ともに惠美を訪ふ ビユンゲル來訪 午後坂本氏來り談ず 夜大學一覽及斯波の書

狀着す

三月二日 雨 風邪の氣味にて外出せず 午後惠美來る 粥を煮て食ふ 夜坂本來訪

三月三日 曇 昨日と同じく外出せず 松本愛重の書狀着す 土井、森岡同斷 マヤーより書籍數部來る ザイヤー休む

三月四日 曇 外出せず

三月五日 晴 シャロッテンブルグに奥村を訪ふ 午後ザイヤー來る 休業 ビーアを傾けて談ず 内山亦來談 晩餐を喫して去る 夜坂本を訪ひ百馬克を渡す

三月六日 晴 朝薗田來訪 百馬克を受取る

三月七日 雨 午後ザイヤー來る 内山、惠美來り堀江と將棊を弄す 夜クロップストツク街のボシヤルト宅にて東京フェストに就ての相談會あり 會者フエン、ブレマン以下七八人、日本人には大村、松平、巖谷等なり

三月八日 晴 朝内山來り演劇脚本をもち來る 午後シルラー、テアテルにいたる 切符見えず エルザツ、ヒレツトにて入場す 歸途電車にてクリミナル、ゲリヒトよりす

三月九日 雪 朝バテデル街にいたる 午後坂本、惠美、内山三人來る 惠美晩餐を喫す 葡萄酒をのみて十時にいたる 坂本遂に余が寢床に泊す

三月十日 晴 朝獸園を步してケーニーギン、ルイゼのデンクマールにいたる 今日花飾あればなり 午後ザ

イヤー來る　晩薗田來訪　ともにチエントラル、ホテルのコメニウス、フエストにいたりラインの演説クンスト、ウント、シユーレを聞く　それよりノルレンドルフ、プラツツのフエンの宅にゆき東京フエストの相談あり　晩餐の馳走になる　種々の馳走あり

三月十一日　雪　朝惠美を訪ふ　不在　午後ザイヤー來り雜誌數部をもち來る　圖書館のものなり　六時惠美宅にて森御蔭と三人にて牛肉を煮て食ふ

三月十二日　雪　寒し　朝レーマンにいたり書籍目錄を得　繪葉書を購ひなどしてかへる　午後ザイヤー來る　坂本、岩崎、内山、惠美等來談　坂本氏より百馬克受取り内山に百馬克を返す　夜シエラーのポエチツクをよむ

三月十三日　晴　ウンテル、デン、リンデン街を歩し繪葉書を購ふ

三月十四日　晴　午後惠美、坂本、内山來る　午前不在中薗田來訪の由　坂本より五十馬克を領收す　夜ノイエス、オペルン、テアテルにユングフラウ、フオン、オルレアンを見る　歸途クリユーゲルにて葡萄酒を傾く　亭主非常に泥醉して滑稽なりき

三月十五日　晴　朝戸塚、森、中村、津村いたる　午後中村、森とレツクスよりリユツツオー街のマルクトバレにいたり種々の買物をなす　夜坂本を訪ふ　不在　鍛島某あり宿なくして困却の由に付き余が寓に來りて一宿せしむ　戸塚より立花の義捐金、平井の分と併せて二十馬克を領收す

三月十六日　快晴　夜雨　朝より森、中村等と日本料理を拵へる　晩七八人の客あり　菊池とドロシケに同乘

して歸る　福原、師岡、保科等の信あり

三月十七日　曇　朝マヤー及ミュラーにゆく　福原書籍の用務なり　午後ザイヤー斷る　夏目より金十馬克二十ペニヒ送り來る　立花文庫の寄金なり　鍜島再び來る　晩坂本を訪ひて談ず　かう子、石原、大久保、古川妻等の信あり

三月十八日　晴　午後藤岡來る　惠美同斷　堀江と四人牛肉を煮て食ふ

三月十九日　晴　福原に信す　午後ザイヤー來る

三月二十日　晴　晩惠美來る　堀江と三人チーヤガルテン、カフエにいたり又クリユーゲルにいたる　惠美余が寓に一泊す

三月二十一日　晴　朝禽獸園を歩し獨乙銀行にいたり金子百馬克餘を領收す　午後エルザとウエルトハイムにいたり日本服の相談に預る　四月三日の會の爲めなり　又レツクスにいたる

三月二十二日　晴　午前入浴　チーヤガルテン、カフエに少憩　惠美を訪ふ　午後同人及内山、薗田來訪　夜内山及エルザとシルラー、テアテルにいたる　外題はデル、ジョングラーなり　内山晩食前なりしを以て歸途クリユーゲルに至る　内山に六十馬克を渡す

三月二十三日　曇　夜雨　午後歩して森、中村をデルンベルグ街に訪ふ　朝比奈氏と四人ドロシケにてシーユルタイズにいたり晩食　森、中村兩氏のマグデブルグ行を見送る　午前菊池氏來訪

三月二十四日　晴　朝チーヤガルテンを歩しカルヴアリーにゆく　午後鹽澤氏來談　ザイヤー來る
三月二十五日　晴　朝チーヤガルテンを歩しバンクに書をよせ午後內山、森、坂本、薗田、惠美等來る　夜內山等とクリューゲルに一酌す　かう子に信す
三月二十六日　雨　朝岩崎、惠美の事に付來り談ず　午後內山を訪ひともに惠美を訪ひ相談す　夜九時ザイヤーにゆく　今夜風邪の氣味にて發熱あり　和獨會の相談會ゆかず
三月二十七日　晴　風邪の氣味故終日在寓
三月二十八日　午前晴　午後微雪　風あり寒し　惠美來談す　內山同斷
三月二十九日　午前晴　午後雨　坂本を訪ふ　不在　鹽澤を訪うて談ずること少頃　午前森を訪ひ送別會の事を談ず　中村氏不在
三月三十日　曇　午後雨　午後內山、惠美來る　余とともに晚餐　堀江は日本ケラーにゆく
三月三十一日　霰降る　朝大村氏を訪ふ　轉居にて分らず　巖谷氏を訪ひフインランドの傳說を讓受く　午後中村、朝比奈、森の三氏來訪　惠美同斷　夜花祭の相談にてカフエ、ジヨステイにゆく
四月一日　微雨　午前ウンテル、デン、リンデン街を歩す　午後內山來る　ともにアルブレヒト、ホーフにいたり明後日朝比奈、森、中村の爲めに送別會の相談をなす　それより朝比奈氏をベルヴユー、ホテルに訪ふ　夜フインランドの小話をよむ

四月二日　晴　午後鹽澤、內山來る　ともにビーアをのむ　ザイヤー休む

四月三日　晴　朝フイルハルモニーにいたる　午後內山を訪ひ羽織紐をかる　中村、娘に着物きせんとて來る　同乘してフイルハルモニーにいたる　東京フエストに酒店を管す　中々の盛會なりき　ベルタと馬車にてかへる

四月四日　陰晴不定　朝ベルヴューに朝比奈外二人を訪ひドロシケにて橋本屋にいたる　送別會の爲めなり　二十三人會食　鹽澤と歩してかへる　夜內山來る　談じて夜半にいたる　ザイヤー休む

四月五日　晴　マヤー、ミュラーにいたり玉井を訪ひ勘定をなす　午後內山來る　夜シルラー、テアテルにいたる　ナタンデル、ワイゼなり　一時半フリードリッヒ停車場にいたる　朝比奈氏を見送らんが爲めなり　同氏來らず　エルザ、內山と同車して歸る　坂本より六百三十二馬克着す

四月六日　晴　午後惠美來る　午前ステーグリッツのランゲ氏に饗せられて同氏の寓にいたる　大村、巖谷亦在り　午餐後近傍を散歩し咖啡をのんでかへる　歸途ドロシケ

四月七日　晴　獨乙銀行にいたり金を受取り種々の買物をなす　午後內山來る　エルザと寫眞鋪にいたる　東京フエスト委員の寫眞撮影のためなり　晩內山と日本めしの新宅にいたる　歸寓十時　坂本あり　今立より百三馬克來る

四月八日　陰晴不定　微雪時々いたる　朝岩崎來る　午後チーヤガルテンを歩す　夜花祭にのぞむ　公使夫人同道にて臨席　夜一時半散ず　會者凡五十人

四月九日　晴　朝文部省の學資領收　獨乙バンクにいたり金子を領收し歩して日本食にいたる　大村、松本、吉田等十一人會合　食後談話五時にいたりて散ず　夜ザイヤーにゆく　パウル街に入浴　鹽澤氏來談

四月十日　晴　午前ライプチツヒ街のポスト、ムゼアムに遊ぶ　中村に二百馬克郵便爲替にて送る

四月十一日　午後ザイヤー來る　夜ブラントの一族と和獨會にいたる　午前坂本を訪ふ　午餐を饗せらる　金時計一箇を購ふ

四月十二日　晴　夜雨　午前巖谷を訪ふ　ランゲ氏亦在り　午後内山來る　夜坂本、鹽澤等來訪　クリューゲルにいたる

四月十三日　晴　夜雨　午前チーヤガルテンを歩す　午ケツトナーに饗せられて其家にいたる　薗田亦在り　薗田、惠美來る　夜ウイダー、フールスター來ること例の如し

四月十四日　雨　曉大雷雨　伯林市中出水にて交通の止れるところ多し　午前近傍を歩す　午後ザイヤー來る　夜堀江とクリューゲルにいたり又鹽澤を訪ふ　鹽澤來談

四月十五日　快晴　朝ウエルトハイムにゆき買物をなす

四月十六日　晴　今日余が送別の爲とてブラント氏午餐會を催す　フールストルフエル、レーデをなす　大村、巖谷、松平、内山、玉井等十人　午後吉田、熊谷を拉いて來る　晩頃熊谷氏ブラントに引越すことに定む　夜以太利料理店に小西、塚原二氏を迎へて吉田、藤岡、薗田、熊谷と七人夕食

四月十七日　晴　午前公使館にゆき大學に赴く　午後エルザとウエルトハイムにゆき種々の買物をなす　金時計數點を購ふ　又カバン一箇を購ふ　夜日本ケラーにて和獨會の相談會あり　ブルンをはじめ會者十二三人

四月十八日　晴

四月十九日　晴　朝熊谷とウンテル、デン、リンデンの邊を歩す　午後市川、大村來談　市川に日本文學全書をおくる　夜シュルツの招宴に赴く　餞別としてファウスト一冊をおくらる

四月二十日　快晴　內山來る　ケツトナー、薗田と四人寫眞鋪に撮影　午後惠美來る

四月二十一日　雨　今朝荷物取片附をなす　午後荷物拵人來り書籍其他カバン三箇の荷物を拵へる　內山、惠美手傳に來る　夜クリユーゲルにいたりそれよりカフエにゆき荷物の發送を祝す

四月二十二日　晴　服部氏午前來訪　ドレスデンより昨夜來訪の由　夜同氏を訪ふ　午前ローテンシユタインにいたり荷物賃金を拂ふ　午後岩崎來る　惠美の宿屋へ四十馬克を拂ふ

四月二十三日　晴　午後ザイヤーにゆく　溝淵氏不在中來訪の由　朝エルザと同道帝國銀行を見る　歸途ウエルトハイムにいたり買物をなす

四月二十四日　晴　午後ザイヤーにゆく

四月二十五日　晴　朝大村氏を訪ふ　不在　午後再び訪ふ　獨文演說草稿の添削を請はんが爲めなり　晩八時より洋學史概觀について演說　宿の婆と同道歸宅　熊谷氏も同伴

四月二十六日　晴　夜熊谷とライプチツヒ街にいたり同氏の買物を整ふ　パウル街に入浴

四月二十七日　晴　朝寫眞鋪にいたる　寫眞の出來を問合さんが爲めなり　午後惠美、鹽澤等數人來る　パストル來訪　コンメルスブツフ一册を餞別として被贈　夕頃ハーゼにいたりそれより日本ケラーにゆく　熊谷氏と同道歸宅

四月二十八日　晴　朝ケツトナーを訪ひ寫眞を渡し同道にてハーゼにいたる　煙草入を忘れたればなり

四月二十九日　晴　朝東洋語學校にゆき書籍室を看る　歸途水族館を見物　午後惠美來る　明日堀江出立の由なるを以て夜牛肉を煮て送別會を開く　鹽澤來訪　夜一時歸る

四月三十日　晴　堀江出發に付アンハルテル停車場に見送る　午後惠美來る

五月一日　陰晴不定

五月二日　陰晴不定

五月三日　陰晴不定　霰ふる

五月四日　晴　時々雨あり　午前九時ポツダム停車場にいたり服部、溝淵、熊谷、筧、吉田、薗田、坂本、鹽澤、名取、岡村、市川と同行十二人ポツダムよりウエルダーに櫻花を看る　歸途シユールタイズに晩餐　十時歸寓

五月五日　晴　午前名取とチーヤガルテンを歩す　午後ザイヤーを訪ふ　それより内山の病を問ふ　惠美亦至

る　同人余が寓に至る　夜坂本來談　尋で名取と小泉を訪ふ　明日エーナに出發すればなり

五月六日　晴　朝名取と公使館にゆく　午後惠美、大村來る　キルヒホーフに束す

五月七日　晴　朝ウンテル、デン、リンデンを歩す　午後ザイヤー來る　名取ノスチツ街に移る　パウル街に入浴　夜熊谷氏とカフエに遊ぶ　坂本、キルヒホーフ來談

五月八日　晴　午後ステルペパーの子供二人を伴ひ熊谷、名取と美術展覽會に遊ぶ　ビーアをパークにて傾くる時渡邊修二郎氏來る　同氏尋で余が寓に來る　晩熊谷と服部氏、溝淵氏の寓を訪ふ　溝淵明日ハルレに發すればなり　エルザ瑞西に向つて出發す

五月九日　晴　朝大學圖書館にいたる　午後ザイヤー來る　ザイヤーの授業今日にて斷る　夕七時半より公使館の晩餐招待に赴く　會者十五名　筧、鹽澤、熊谷等とチーヤガルテンを歩す　內山來訪

五月十日　晴　午前公使館にゆく　午後鹽澤、筧兩人來る　筧氏の寓にいたり縱談　ビーアを傾けシンケンを食ふ　夜十一時にいたり歸寓

五月十一日　晴　午後小雨　飛雹　午後名取來る　薗田を訪ふ　不在　植物園を見てかへる　日本の木蓮等あり　夜鹽澤を訪ふ　坂本亦來る

五月十二日　晴　大學圖書館にゆく　午後服部來る　牛肉を煮て食ふ　鹽澤夜に入りて來る　十一時迄談じてかへる

五月十三日　晴　大學圖書館にゆく　夜薗田氏を訪ふ

五月十四日　晴　朝王立圖書館にゆく　午後熊谷と日本食をくふ　今日わが誕生日なればなり　有賀長雄氏に逢ふ　同氏余が誕生日と聞いて日本酒を振舞ふ

五月十五日　晴　午前熊谷と近傍を歩し惠美を訪ふ　午後大村氏を訪ひ六百馬克を借る　金港堂より教育界送り來る　不在中薗田來り明後日ドレスデン行の切符をもち來る　夜獸園を歩す

五月十六日　晴　午後雷雨　午前王立圖書館にゆく　エルザに東す　午後熊谷とゼルヴスに飮む　不在中惠美來訪の由

五月十七日　陰晴不定　朝パウル街に浴す　午後アンハルテル停車場にいたる　薗田、筧二氏亦踵いで至る　汽車にてシヤンダウにいたり旅亭スコタツト、ベルリンに投ず　山水明媚故國に入る感あり

五月十八日　陰晴不定　八時馬車一輛を雇ひてオーベルシユロイセにいたり山上の風光を行賞す　妙義の如く箱根の如く奇勝頗る多し　二氏は牛厩をみんとてゆき余は料理店に止る　カルヴアリーのおやぢに逢ひ葡萄酒を傾く　このオーベルシユロイセは墺獨兩國の堺に在り　午餐は墺國に於てなせるなり

五月十九日　晴　朝ベルリン館を辭し八時汽車にてドレスデンにいたる　余一人稍や風邪の氣味ありしを以てなり　十時ドライ、パルメンツワイゲに宿す　午後服藥して臥す　午後三時筧、薗田二氏來る

五月二十日　晴　朝筧、薗田二氏とドレスデン市街を散歩しガラリー、ムゼアム等を見る　午一料理店に午餐

午後パークに遊ぶ　晩七時汽車にて十時伯林に歸着す　書翰はがき十數通あり　中にかう子の手紙もあり　たづ子學校通學の由報じ來る

五月二十一日　晴　午後内山來る　惠美同斷　坂本、鹽澤亦來訪

五月二十二日　晴

五月二十三日　晴　公使館にゆき暇乞をなす

五月二十四日　晴　午後歩してブルンネン街にいたる　歸途戸塚、平井を訪ふ　不在　暇乞の爲めなり　又ザイヤーを訪ふ

五月二十五日　晴　午後雨　熊谷と馬車にて巖谷、大村、薗田を訪ふ　暇乞の爲なり　薗田在宅　其他は不在　不在中ケツトナー來訪

五月二十六日　晴　朝鹽澤來る　大村同斷　午後知友余がために送別會を橋本屋に開く　會するもの十數人　熊谷風邪にて來らず　夜鹽澤氏と獸園を歩す　大學より旅行券を受取る

五月二十七日　晴　惠美、内山、坂本等來る　午後伯林を發す　ブラント夫妻、ケツトナー、大村、巖谷、坂本、鹽澤、熊谷、名取、内山、森岡、平井、中川其他の諸氏送つて停車場に在り　夜八時ライプチツヒに着　藤岡氏迎へて停車場に在り　藤代氏の寓に入り夜谷本を其寓に訪ふ　塚原在り　談じて十一時にいたる

五月二十八日　ライプチツヒに在り　朝大學に聽講　午後ムゼアムを見パノラマに午餐　晩日本人會にバルマ

ンにいたる

五月二十九日　晴　暑甚し　朝藤岡氏來る　藤代氏と三人停車場にいたる　小西氏送りて來る　午ワイマールに着　諸處を見物　エレフアントに午餐　晩エーナに着　稻垣氏に迎へられてワイマール、ホーフに泊す　日本人諸氏に逢ふ　コンチエルトあり　賑やかなり

五月三十日　晴　朝市中を歩し植物園にいたり午後林、大谷、小泉等の諸氏とウインドミユーレにいたりブラート、ウルストを食ひ歸途山に上る

五月三十一日　晴　朝エーナを發しサルフエルドに午餐　晩ニユルンベルヒに着す　ニユルンベルゲル、ホーフに泊　入浴　夜市街を漫步す

六月一日　晴　早暁ニユルンベルヒを歩し城郭を見る　ソラートヴルスト、キユツヘに午餐　午後汽車にてミユンヘンにいたる　晩頃着　山口氏を訪ひて其寓に入る　文部省より英佛巡歴許可の電信を受取る

六月二日　晴　朝山口氏と大學にいたりアルテ、ピナコテークを見る　それより支那園に午餐　晩頃歩してホーフ、ブロイにいたる　盛況驚くべし　又レオポルド、カフエにいたり歸寓

六月三日　晴　ホーフガルテンにいたり少憩の後市街を歩しビユルケル、ブロイに午餐　停車場にいたり山口、中村二氏とウユルムゼーに遊ぶ　風光明媚可愛　晩歸宅

六月四日　晴　午後雷雨　ミユンヘンを發す　山口、中村二氏停車場に見送る　ウルムを經て午スツツトガル

トに着　一料理店に午餐　市街を歩し書籍數部を購ひ又ムゼアムを見る　晩五時再び乘車カールスルーへにいたりて蜂谷氏に投じ夜市街を歩し晩餐

六月五日　晴　朝カールスルーへを發してハイデルベルヒにいたり河津氏を訪ふ　不在　城墟を見て午餐　午後再び河津氏を訪ふ　對岸の山に上りフイロゾノヘン、ウエツヒを歩してかへる　晩餐の後後藤氏亦來る　晩同處を發す　二氏送つて停車場に在り　夜十一時半フランクフルトに着　ホテル、ナショナールに泊す

六月六日　晴　フランクフルトを見物　十時發車リューデスハイムにいたる　同處にて午餐　ラインの船に上る　風光の明媚なるのみならず各處の城墟大に面白し　ボンに着　藤井、高橋諸氏を訪ひガーテルにて右二氏及今井、吉平氏等に逢ふ　ホテル、ツームローテンハーンに泊す

六月七日　雨　朝ボンを發しケルンにいたりドーム其他を見物　午後一時四十五分汽車にて巴里にいたる　夜十一時着　松本氏迎へて停車場に在り　ホテル、スフローに入る

六月八日　晴　朝松本氏とパンテオンにいたりリユクサンブルヒの公園に遊ぶ　溝淵氏來訪　夜松本氏と歩してモーパサン街に晩餐

六月九日　晴　朝歩してセイヌ街よりルーヴルの近處ローヤル、バレーの邊を歩してかへる

六月十日　晴　小雨　午後白井、北村等と彫刻屋にいたる　松本氏一彫刻を買ひたるがためなり　それよりプチー、ホテル街のローテン、シュタインにいたる　荷物の事を問合す爲めなり　夜近傍を歩す　朝プラース、ド、

ラ、コンコルドよりブールスの邊にいたる　リユクサンブルヒの博物館にて岡村氏に邂逅す

六月十一日　晴　小雨　午前シエラーはじめて來る　午後松本氏とルーヴルにいたり繪畫室を見る　それより公使館にゆく　加藤正治氏に逢ふ　夜加藤、岡村二氏來訪　和田氏亦來り夜十二時にいたる　公使館にてかう子、保科の手紙を受取る　かう子の手紙に父上辭職の由報じ來る

六月十二日　晴　小雨　朝シエラー來る　午後松本氏とノートルダームよりサンシヤペルを見クリニーのミユゼーを見て歸寓　夜白井、松本二氏と河畔を歩し繪葉書を購ひて歸寓　かう子、石原、大村に束す　溝淵氏來る

六月十三日　晴　午前シエラー來る　斷る　午後松本とミユゼー、ガレリー、ギメー及トロカデロの三處を見物　ミユゼー、ギメーに日本のもの多し　馬車にて歸寓　ブラントの手紙あり

六月十四日　晴　午後松本とゴブランの製造所を見る　ジヤルダン、ド、プラントにゆかんと欲して果さず

六月十五日　晴　雨あり　溝淵、シエラーと美術展覽會の新派の方を見物　雨ふり出したるを以て馬車にて歸寓

六月十六日　晴　午後和田氏の札をかりてサロンに遊ぶ　ブールヴアールよりバレー、ロワイヤルの邊を歩してかへる

六月十七日　晴　朝シエラー來る　午後松本と古本屋をひやかしチユイルリーの公園にいたる　晩樋口及英人一人とモンマルトルに社會黨の演說を聞く　歸途カフエ、パンテオンに立寄る

六月十八日 晴 朝シエラー來る 午後松本と死體陳列場の邊よりノートルダームの近傍を歩してかへる 夜溝淵、山口來訪

六月十九日 晴 午前シエラー來る 午後松本とカルナヴアレーの博物館にいたる 晩岡村來る ともにフオリエ、ベルゼールにいたりそれよりブールヴアールを歩して歸る

六月二十日 晴 午後夕立あり 朝シエレー來る 午後松本とナポレオンの墳墓を見る それよりシヤンゼリゼーを歩す 夕立に逢ひ馬車にてかへる 散髮 夜和田、臼井、松本と山口、溝淵をレオポルド街に訪ふ 溝淵不在

六月二十一日 夜巴亭に會す 久保田、和田、藤村等來る 日本食を食ひ發句會を催す

六月二十二日 晴 朝公使館にゆく 文部省の爲替封入書狀を領收す

六月二十三日 晴 松本とクレヂ、リオン及びヂスコント、ナショナールにゆく 取替むづかしきを以て正金銀行に爲替劵を送る 夜近傍を歩す

六月二十四日 晴 郵船空室ある由通知あり 四日出發の事に決す

六月二十五日 晴 マガザン、ド、ルーヴルにいたり種々の買物をなしレオン料理店に午餐 夜テアテル、フランセーに觀劇 ユーゴーのブルグラーヴなり 午後馬車を驅りてボア、ド、ブーロンの公園に遊ぶ

六月二十六日 晴 正金の爲替來る 松本氏も同斷 よりてヂスコント、ナショナールにて之を受取りマガザ

ン、ド、ルーヴルにいたり種々の買物をなす　夜樋口氏とビュリエーの舞蹈場を見る　重野氏亦在り

六月二十七日　晴　晩グランドオペラを見る　歸途カフェ店に立寄る　午後ルーヴルにいたり彫刻其他の諸室を見る

六月二十八日　晴　朝ルーヴル勸工場にいたり種々の買物をなす　午後荷物拵をなす　松本文氏大に手傳ふ　午後七時半馬車にてサン、ラザールの停車場にいたる　淺井、藤村二氏同行　九時發車　十二時半デイプに着汽船に上る　月あり　翌曉目覺むれば英國の海岸を前頭にみる　午後重野氏と東洋語學校を見る

六月二十九日　晴　七時五十分ヴイクトリア停車場に着　岡倉氏停車場に在り　ともに其寓に入る　午後チューブに乘じてブリチツシ、ミューゼアム、ナショナル、ガラリー等を見トラフアルガー、スクエアーを歩す

六月三十日　晴　チューブにてバンクにいたり近傍の市街を歩し郵船會社、正金銀行等にいたり午餐　パーリアメントハウス、ウエストミンスター、アベー等を見物　藤井氏の寓を訪ふ　薗田亦在り　ともに大谷氏を訪ひ薗田とケンシントン博物館に遊ぶ

七月一日　晴　午後雨　朝チューブにてバンクにいたりセント、ポールス、カセドラルを見る　それより再びチューブにてクラブハムにいたり夏目氏を訪ふ　不在　プロンプト街に午餐　谷本氏を訪ふ　岡村亦在り　市中を歩して晩餐　谷本、末廣二氏同行

七月二日　晴　朝十時セフアードブツシよりケンブリツヂに遊ぶ　三土氏を訪ふ　不在　市中を歩しコレヂを

見物　書肆に入り書籍數部を購ひ再び三土氏を訪ふ　談笑數時　七時半の汽車にて歸倫　モニコに晩餐　ピカデリーよりハイドパークを步してかへる　不在中夏目、薗田至る
七月三日　晴　岡倉氏とチューブにてバンクの近傍にいたり種々の買物をなす　それより同氏に別れ午餐　リゼントパークにいたり動物園に遊ぶ　晩谷本いたりともにヒポドロムに遊びピカデリーを步しモニコにいたりて獨乙麥酒を傾く
七月四日　晴　朝土井、姉崎二人來訪　午後再びいたる　四時半馬車を僦ひてフエンチヤーチ、ステーションにいたる　同行の岡村氏已に在り　淺井氏尋でいたる　岡倉、土井、美濃部、夏目等の諸氏送り來る　六時五十四分の汽車にて郵船に至る　ドック畔の一旗亭に晩餐　船室に入り三鞭を酌みて前途を祝す　拔錨夜十時半
七月五日　晴　平穩　北緯五十度二十八分　西經二十分　航程百六十三浬
七月六日　晴　ビスケー灣を過ぐ　北緯四十七度四十九分　西經六度十二分　航程二百八十九浬
七月七日　曇　晚ビスケー灣を通過し終る　夜醫員山田次郎氏の室に遊び麥酒の馳走になる　北緯四十三度二十五分　西經九度十八分　航程二百九十五浬
七月八日　快晴　正午北緯三十八度三十四分　西經九度三十分　曉起右舷に二三の小嶼を見左方に葡萄牙の山を見る　淺井氏寫生圖を作る
七月九日　快晴　十時半ジブラルターを過ぐ　晚一行の日本人種々の戲をなして甲板に集る　北緯三十六度九

分　西經五度五分　三百二浬

七月十日　快晴　夕方右舷にアフリカの山を見る　北緯三十六度四十五分　東經五十八分　航程二百九十二浬

七月十一日　晴　アフリカに沿うて東行す　三十七度十三分　七度十一分　三百一浬

七月十二日　晴　午後マルタ島を見る　三十六度二十九分　十三度十分　二百九十九浬

七月十三日　晴　波浪稍高し　同行の諸子船暈の氣味にて甲板に出でず　午後粥を食ふ　余亦粥を食ひついで洋食を食ふ　三十五度十分　十八度四分　二百八十三浬

七月十四日　晴　夜鰻飯の馳走あり　三十三度五十一分　二十三度五十七分　二百六十九浬

七月十五日　晴　明日ポートサイドに着すべきを以て手紙を熊谷、エルザに認め其他諸友にはがきを認む　三十二度二十一分　二十九度十五分　二百八十浬

七月十六日　晴　午前三時頃ポートサイドに着く　朝餐の後上陸　種々の買物をなしビーアを傾けて正午歸船　午後四時解纜　カナルに入る　しばらくにして獨乙船ライヒスタツハに逢ひ待合はす　夜月色よし　ビツター湖を過る頃就蓐　川上一座の人々落語會を甲板に催す　百七十六浬

七月十七日　晴　スエズに着　三十分餘にして發す　晩シナイ山を見る　川上一座の落語連にビーア一打をおくる　百三十九浬

七月十八日　晴　船紅海を過ぐ　暑堪へがたし　頻に曹達水を傾く　デツーマンスロツクの小説をよむ　二十

五度一分　三十五度五十二分　二百九十八浬
七月十九日　晴　暑昨日の如し
七月二十日　晴　暑最も甚し　終夜甲板に在り　十六度二十分　四十一度八分　三百三浬
七月二十一日　晴　朝亜門關を過ぐ　右にピリム島あり　風吹きて涼し　十二度二十三分　四十四度八分　三百四浬
七月二十二日　晴　暑甚し　晩日本食、鳥めしの饗あり　夜甲板に坐して諸人と語る　十二度四十四分　四十九度十六分　三百二浬
七月二十三日　微曇　朝ソコトラの側を過ぐ　モンスーン吹きて波浪高し　夜ドクトル來り講談筆記をよむ　十二度四十三分　五十四度二分　二百七十九浬
七月二十四日　晴　風浪高し
七月二十五日　晴
七月二十六日　晴
七月二十七日　晴　晩ミニコイ島を見る　この日日曜にて赤飯あり
七月二十八日　晴　川上一座にて演劇茶番等の催あり　外人を接待し夜一時半寝に就く　先日の音樂會招待に酬ゆるため日本人旅客の催なり

七月二十九日 晴 朝コロンボに着 午餐後上陸 馬車にて市中を巡覧 マーケツトにいたり果實等を購ひて歸る 博物館もみる

七月三十日 晴 午後二時半解纜

七月三十一日 晴 酒代を拂ふ モーパツサンのラ、ヴイーをよむ

八月一日 晴 夜外人音樂會を催す

八月二日 晴

八月三日 晴 午餐にソーメンあり 船マラツカ瀬戸に入る

八月四日 晴 朝小島を見る 形冠の如し

八月五日 晴 午前新嘉坡に着 上陸して日新館にいたり日本食を食ふ 午後川上夫婦、今泉氏等いたる 晩洋食を食ふ 九時歸宅

八月六日 晴 終日船に在り上陸せず

八月七日 晴 岡村、淺井二氏と上陸 馬車にて日新館にいたり主人と同道更紗店にいたり更紗を購ふ 日新館の主人余等におくるに椰子樹一株を以てす 午後五時出帆

八月八日 晴

八月九日 晴

八月十日　晴　曉起　左に安南の山をみる　熱蒸すが如し　帷衣を着て甲板に在り　赤飯を食ふ

八月十一日　晴　暑昨日の如し　夜にいたりて大に涼し

八月十二日　雨　夜來大雨　午やうやく霽る

外遊日誌（大正五年）

七月三十一日　天洋丸定期出帆日の廿九日が今日に延期せられたるは非常なる幸福なりき　連日の霖雨は廿九日に至りて暴風雨となりしが昨日に至りて霽れ本日は朝來の快晴なり　大川、桑野、小中村、長谷川、山根諸氏陸續來訪　增村老人亦來る　長谷川氏は手荷物を携へ大川氏は子供等を引連れて停車場へ先發　十時半腕車に乘りて家を出づ　同行の岡田博士等皆相踵いで來る　見送の人非常に多し　富山房の人々等名刺受を出して應接す　十二時三十分の汽車にて横濱驛　それより一同電車にて櫻木驛にゆく　余は横濱驛より腕車にて水上警察署に至り旅行劵の裏書を求め天洋丸に搭ず　送りて船に來れるもの潮田、石原、長谷川、山根、立田、青木、保科、松井、岡田（正之、正美）、大壁、中村、生沼、藤村、八波、高野、友田、渡部、西川、內山、石井、石山、姑射、斯波、萩野、麻生、菊池、關、塘、植松、龍口、杉浦、高津等數十人　池永母、池永夫婦、敏子、檀以下子供等なり　船中雜沓甚だし　三時拔錨　四時港外に停船　七時半晩食の頃やう／＼出帆す　同室は斯波、稲垣二博士と村井銀行大阪支店長磯田法學士となり　鴻巢其他より三四祝電來る　鴻巢の歌

　君がゆく浪路陸路も安らかにさきくいましてはやかへりませ

八月一日　曉起　旭日曈々船首にあり　船は正東に向つて進むたり　正午の揭示に曰く北緯三十五度三分　東經百四十三度三十六分　昨日よりの航程二百二十五浬　夜外人等喫煙室に舞蹈會を催す　晩餐の時船客名簿の配付あり　一等船客小兒を除きて二百十四人　內日本人五十八人　會社開始以來の繁盛なりといふ

東の日出づる國を茜さす入る日の空におもひこそやれ

八月二日　浪稍高し　婦人等食堂に入らざるもの多し　正午の揭示北緯三十五度二分　東經百五十度　航程三百三十五浬・午後船上に水を湛へて游泳場を開く　夜活動寫眞の催あり一時に至る　無線電報新聞に曰く大隈伯永久に辭職せずと

飛魚の翅もかろし夏の海

八月三日　微曇　浪低し　食堂漸く賑ふ　正午北緯三十四度二十一分　東經百五十二度二十分　前日よりの航程三百四十三浬　無線電報は梨本宮女王殿下と李王世子との御婚約を報じ來る　夜外人の舞蹈會あり　布哇在住の和田喜傳氏より布哇の事情を聽くこと詳なり　夜小雨

八月四日　快晴　浪穩なり　無線電報にて田代博士令息の訃を報じ來る　同氏の心中察すべし　一句を贈る

夕立のしぶき冷き船の中

雲ちぎれ〳〵に飛んで風涼し

和田氏より日本人布哇發展史を借りて讀過す　外人のダンス例の如し

船の窓舞踏の夜の明け易き

正午の掲示北緯三十三度三十八分　東經百六十一度二十四分　航程三百五十四浬

八月五日　保科氏より無線電報あり

五博士に風薫れ浪靜かなれ

波最も靜なり　北緯三十二度十八分　東經百七十一度十二分　航程三百五十一浬　夜船員等の相撲あり　東京京都、上海香港、巴里華盛頓等取組二十番ばかり　中入には土俵入もあり撃劍、柔術もあり　內外人の喝采沸くが如し　十時終る　運動會費用として金五圓を寄附す

八月六日　快晴　平穩昨日の如し　日曜日なるを以て午前西人等は祈禱會を開く　但し之に臨まざるものも多く見受けたり　北緯三十度四十七分　東經百七十七度五十七分　航程三百五十七浬　晩食後船客等の發起にてサロンに講演會を催す　イロハ順にて稻垣氏は米の話、余は日本人の名に就いて、岡田氏は乘船と衞生、田代氏は日本人の體格、斯波氏は製鐵事業に就きて各談話す　最後にビリヤード界に有名なる山田浩二氏自己の經歷談を語り十時半散會す

八月六日　百八十度を越えて西經に入れるを以て此の日は昨日と重複にて再び八月六日なり　貿易風吹きて涼し　始めてかもめの如き水鳥の飛ぶを見る　西南にミッドウエー、アイランド近きが爲なるべし　北緯二十八度五十八分　西經百七十五度三十八分　航程三百五十四浬　サロンに桑重儀一氏の繪畫展覽會を開く　同氏は布哇

外人のボーイたりしが後加州美術學校を卒業し佛國に遊び日本に歸りて諸畫家と交を訂し今布哇に歸るなり　日本各地の風景畫多し　夜食後日本演劇及び手品の催あり　芝居は嬶天下及び化地藏也　道具立扮装の用意尋常ならず　手品師辨慶の奇術も玄人に近し　十一時散會　夜に入りて風殊に涼し

甲板に人無し風涼し屁を放つ

八月七日　快晴　風涼しきこと昨日の如し　正午の掲示北緯二十六度三十二分　西經百六十九度三十六分　航程三百四十九浬　夜八時三十分より食堂に日本人會を催し謠曲、詩吟、尺八、踊、洋琴其他種々の隱藝あり　多數の乘客中には色々の趣味ある人雜れゝば面白し　日本食のサシミ、吸物、日本酒等もあり　船員を合せて七十餘名出席　三等客中に浪花節の京山若丸あり　山内一豐の一席を演ず　之を最後として散會十一時

千萬の浪路隔てゝ大君の千代よろづ代をよばふうれしさ

皇國人皇國の酒をくみ合ひて皇國の歌を歌ひてあそぶ

皇國ぶり舞の姿に手をうちてゐらぐもろごゑ海をとよもす

船のへのとゞまるきはみ日の本の國はひろくもなりにけるかな

布哇金曜會石田氏より無線電報あり　水曜日夜講演會に出席を乞ひ來る

八月八日　晴　北緯二十三度五十六分　西經百六十三度三十四分　航程三百六十三浬　午後に至りて船は始めて熱帶圈に入れるなり　石田氏に返電す　午後三時日本人一同喫煙室の後部に記念のため撮影　それより一同船

長の招によりて船長室に茶話會あり　樂を奏して歡待を盡せり　五時右舷に始めて島を見る　鳥島といふ無人島なり　明日布哇に着すべしといふ

八月九日　四時半頃右舷にカワイ島を見る　隱見燈臺明滅す　風涼しくして熱帶地とも覺えず　六時半離床朝餐後オアフの島を雲煙縹渺の中に見る　次第に顯明になりて山野の面影歷々指點すべし　正午ホノルル港外に着水先案内、檢疫醫等のボート來る　午後一時檢疫終る　新聞記者等多數刺を通じて談話を求め撮影を乞ふ　稅關の受取書其他を得二時頃上陸　諸井總領事出迎へられ自動車にて領事館に至る　敎育會の幹部諸氏亦踵いで至る今村、伊藤、角田、奧村其の他十三四名にて日本料理の晩餐を饗せらる　タキスの荷物不明の爲黑川雲化生を煩して天洋丸に掛合やう〳〵分明す　九時領事館を辭して中央學院なる講演會に臨む　稻垣、斯波、余、田代、岡田の順序にて講演　十一時終りてヤング、ホテルに投宿　稻垣、斯波二氏亦投宿　余が室は四階第九十八號なり

八月十日　快晴　朝カワイ島の敎員宮崎氏等來訪　筧氏の案内によりて自動車に同乘まづビショップ博物館にいたる　ポリネシア、メラネシア等の人類學的、博物學的出品頗る豐富なり　歸途一小學校に立寄り夏期學校を見る　午後鵜澤氏來る　ともにワイキキの海濱にいたり水族館を見又マヌア谷にいたりて行く〳〵見物す　瀟洒風流なる家屋如何にも健康的に見ゆ　咲亂れたる夾竹桃、ゴールドンシヤワイ、九重かづら其他名も知らぬ花の美しさ、ローヤル椰子の亭々たる、アイオン樹の松の嵐を吹起すもなつかし　キヤベは垂柳の面影あり　歸途市

中を見物し又領事館に立寄りて穗積よりの屆物を渡し歸宿　住友銀行の川勝正之氏同宿なれば來談　此度當地に支店を設くる準備中の由　正金銀行にて百二十圓餘を米貨に變更す　夜近傍を散策す　雨降りて涼氣秋の如し

八月十一日　晴　朝檜山錦光氏、新井氏とともに來談　朝餐を饗せらる　九時中學校にゆき讀本編纂の經過及び國語教授に關する注意を演說す　各島代議員の爲也　日本敗負のスコツト氏も來聽　終りて一同撮影　午後二時再び同會に赴き讀本稿本を示し諸氏の意見を徵す　明日を約して歸寓　此の日の新聞に日本人の自動車運轉手夫妻の慘殺せられたる記事あり　加害者は無論日本人なるべしといふ　夜川勝氏來談　日本人會の幹事なりといふ根來氏亦來る

八月十二日　晴　午前在寓讀書　午後增田、大內二氏來訪　讀本に附箋したるものを持來る　三時半ともに電車にて總領事館にゆく　教育會員慰勞の爲に茶話會の催あればなり　領事館の後園頗る廣く自然に岩石の配置せられたる小流あり風致頗るよし　鳳凰樹の花盛なるも美し　四時若丸の浪花節あり　茶菓の饗ありて六時頃辭去歩して歸る　靴磨に靴を磨かしむ

八月十三日　晴　日曜日なるを以て店鋪皆戶を閉ぢて寂し　午餐後近傍を散歩す　日本各知友へはがきを出す夜小雨　霽れて後月色玲瓏　階下にて檜山、新井氏と談ず

八月十四日　快晴　朝德山省吾氏來る　福井人なり　かつて輔仁會の世話になりたる事もある由　仙臺高等學校を卒へ福岡大學の醫學士也　今こゝに開業す　患者も可なり多き由同氏談也　午後デーモン公園に案內すべし

とて歸る　讀本第一卷の訂正に取掛る　鵜澤孝氏來り長男生れたるを以て命名の指示を乞ふといふ　潔然るべしと答ふ　午後德山氏來る　自動車にて西數哩行く〳〵甘蔗畑の耕地を見て Pearl city にいたる　途中サボテンの大木多し　全山皆サボテンなる所もあり奇觀なり　此の灣米國の軍港なり　景色よし　德山氏の知人たる鈴木某の住宅を見る　女子四人あり　細君曰く甥なる人は去年文科大學英文科を卒業せり　名は戸水昇といふと　寫眞を出して示さる　これより歸途 Aiea の館府を見る　本願寺小學校あり　大井賢成氏案內せらる　本願寺の殿堂の下に小學校あり一は高等科用一は尋常科用なり　生徒二百五十人に及ぶといふ　近傍すべて館府なり　長屋建にして床を高くしつらへたり　高給者のは一戸構其他は棟割なり　夫婦暮にて二間位なり　豆腐屋あり浴場あり床屋あり　三々五々勞働者の歸來するに逢ふ　又汽車にて歸り行くもあり　日本人、葡萄牙人、魯西亞人、布哇人等雜多なり　小雨來り彩虹半天に懸る　德山氏の宅に少憩　橋を渡りて新柳亭にいたる　今村氏、近藤氏來り日本食を饗せらる　同鄕の人余が爲に一會を催せる也　デーモン公園は月曜日は開かずといふを以て立寄らず

八月十五日　快晴　八時半增田氏自動車を以て迎に來る　ワイパフの耕地を見んが爲なり　されど昨日已にアイエアを見たるを以て之を止めヌアスパリに赴く　總領事館に立寄り一直線に坦路を走る　風光例によりてよし　稍山路にかゝれば松樹多く夕顏の野生せるもあり　雜草も日本に於て見るが如く山容何となく日本に似たる心地す　何の花とも知らず異香の薰ずるも快し　最高地は卽ちパリなり　此の處カメハメハ王が全布哇を征伐せし古戰場なり　岩壁にその由を記せり　風強くして佇立し難し　これ卽ちオアフ島を一貫する脊骨山脈にして山のあ

なたは全く氣候を異にす　恰も裏日本と表日本との如し　港灣島嶼の出入點布畫の如く眼下に展開せる耕地は一面に鳳梨を植ゑたり　白色の館府處々に見えてこゝにも日本農夫の勞働を認むべし　展望數十分の後車を返して歸寓　時正に十時　階下に桑重氏と談ず　午後在寓讀本一巻の訂正に從事す　新聞電報欄に支那兵の暴動日本守備兵を襲ふの記事を見る　教育會撮影の寫眞を受取る

八月十六日　快晴　朝牧師堀氏來りブライアン氏ハワイ島に旅行したるを以て今日は來らずといふ　増田氏ついで來訪　讀本第一巻を渡す　淸書の爲也　午餐後諸井總領事來る　近衛を散歩しアトラス等一二の書を購ふ

ルーフにて讀本訂正中三澤泉外一氏來訪す　此の日一週間の勘定三十四弗餘を拂ふ　スタンフォード大學の淺見氏より同地に遊ばゝ日本人倶樂部に來るべき由申來る

八月十七日　快晴　終日在寓讀本を訂正す　朝鵜澤氏來り午前午後二回増田氏來る　明日午後二時領事館會合の事を約す

八月十八日　快晴　午前讀本一の漢字表其他を作製す　午後二時總領事館にゆき讀本巻一に就きて教育會諸氏の意見を徴す

八月十九日　晴　午前中讀本巻二を訂正す　鄕人にて當地美以美敎會なる矢島かね子來訪す　午後總領事館にゆく　教育課長キネー、視學官レーモンド、軍事學校教官ブラツクマン及びスター、ビュレツチン新聞主筆ファールリントン、筧、角田、大内諸氏來り日本料理の馳走あり　大内氏余を送りてホテルに到る　歸る時小雨來る

八月二十日　快晴　風涼し　午前中讀本第三卷を訂正す　高村鐵藏氏來り修身書第三卷を齎す　午後和田喜傳氏來りデーモン公園に案內せんといふ　よりて電車に乘りて行く　終點より步すること數町にして園に入る　門は朱の鳥居なり　扁して蓬萊園といふ　園內頗る廣濶なり　處々に日本流の亭榭を作れり　石の五重塔、燈籠などもあり　中に京都風の建築なる日本造の家あり　木材切組まで京都にて仕上げ持來りしものにて約四萬圓を要せりといふ　座敷、床の間の置物まで日本流にしつらへたり　布哇に日本人九萬以上あれども純粹の日本建築はこの家のみなるべし　戶を開きて人々の縱覽に供するのみ　但し米人は折々靴の儘にて上り込むには閉口すといふ　庭園も純日本式にて瀧あり池あり泉石の配置もよし　こは高野といふ人の設計の由　此の人山口縣の人にて繪を書く人なり　別に庭園術に精しきにはあらねど繪の手心よりこの園を設計せりといふ　築山稍や低きやの觀あるは庭木の生長あまりに迅速にして遂に其の權衡を失へるなりといふ　例の高野氏は和田氏の舊知の由にて出でゝ迎へられ其の家に至る　家は園內水のたぎつ處にあり　瀟洒愛すべし　ソーダ水など馳走になり和田氏の熊本談などありて四時辭去

八月二十一日　快晴　午前より午後にかけて讀本卷二卷三の整理をなす　午後增田氏、大社敎布哇敎會所長たる宮王勝良氏を拉して來る　ついで角田氏來訪　キネー氏見物する所あらば案內すべしとの言傳を齎し來る　謝してかへす　晚餐後市街を散步す　途に川勝氏に逢ふ　ともに附近を步してかへる

八月二十二日　快晴　朝讀本四卷の訂正に取掛る　正午正金銀行にいたり英貨三十磅米貨に換算して百四十八

弗若干を受取る　午後増田氏來る　電車にて總領事館にいたり讀本卷二卷三の第一讀會を終了し眞下氏と同じく電車にて歸宿　昨日布哇新報の記者來りし時萬年筆の赤インキ無きことを話しせしが其の事新聞にあらはれたりとて便利社の寺田安太郎といふ人よりわざ〳〵使にて赤インキ一瓶を贈り來る　德山氏來りて土曜日に學士會を開く由通じ來る　煙草アウル印二函を購ふ

八月二十三日　晴　朝讀本四を訂正す　午後増田氏來る　讀本一挿畫に就きて相談しそれより步してパラウの出雲大社教會支會に至る　宮王氏と先約あればなり　社殿に休憩種々談話　同氏の請により撮影　晚食の馳走になる　刺身、豚、鳥、ペーヤなどあり　欵待を盡さる　自動車にて送られて歸寓　夜尚第四卷を訂正して夜半にいたる　宿料を拂ふ

八月二十四日　晴　午後小雨　朝第四卷訂正を終る　午後二時領事館に行き第四卷の第一讀會を終了す　領事館の歸途便利社寺田氏に立寄り赤インキの禮を述ぶ　不在故狂歌一首を殘してかへる

自由國我が不自由を救ひしはやはり日本の便利商會

讀本に入るゝ爲に作れる京都の歌

（一）

一千年の昔より　　名も平安の都とて、

眠るに似たる東山、　　さゝやく如き賀茂の川。

（二）

朝御苑の露ふみて、　はるけき代々をなつかしみ、
夕御寺の鐘の音に、　過ぎにし人も思ひ出づ。

（三）

春はさくらの嵐山、　花に吹く風うらめしく、
秋の最中の月の影、　嵯峨野に蟲の聲高し。

（四）

一條二條三條と　都大路はしげけれど、
かしこの社こゝの森、　たゞいにしへのしのばれて。

布哇田舍の一日の歌

（朝）

朝の氣こもる森の中、　さへづるマイナ聲高く、
花の香を吹く涼風に、　枝をこぼるゝ露の玉。

（晝）

サボテンの木のはてもなく、　岡よりつゞく雲の峰、

緑おほへるバンヤンの　蔭にやすらふ人と牛。

（夜）

きびの畠に日は落ちて、夕立の雨一しきり、

晴るゝ雲間に月見えて、空にかゞやく夜の虹。

八月二十五日　晴　午前増田氏來り修身書三冊を持ち歸る　今日日本丸入港　領事館より書狀を一纒にして持來る　かう子、大川、坂本、輕込の手紙、青木、內山、坂井等のはがきあり　日本女子大學校の教則も送り來る　午後八時よりシカゴ大學神學科卒業のドクトル川口氏の演說ある由にて總領事館にゆく　進化論と神の概念といふ題なり　十時歸寓　桑重氏來り談ず　時計の紐切れたるを以て新に購ふ　一弗とは驚くべき高價なり　カフエ、マネージヤーのブライトに面會して入澤氏依賴の蝦蟇の事を談ず　今日午後七時より根來及び島田二氏の演說會あり　根來大に教科書問題を論ずといふ　其の廣告に曰く領事館員は勿論芳賀博士其の他の同胞諸君聽講すべしと　青木の葉書に添へたる歌

大船の行方見送り我が心君に通へと夕暮に立つ

八月二十六日　晴　朝領事館よりの書狀を屆け來る　讀本の原稿來らざるを以て領事館にゆきて尋ぬれども遂に無し　歸途便利社に立寄りて買物をなす　ハーンの「日本」一冊を得て之を讀む　午後四時より領事館の學士會に臨む　出席者は諸井（法）、渡邊（京、法）、子安（法）、德山（福岡醫）、飯島（同）、川勝（京、法）、藤井（副領

事、法）の七人にして布哇在留者の全部也　庭園の芝生に机を置き鳳凰木の木蔭に坐して牛肉鍋を煮る　葱も豆腐も澤山にて縦談時の過ぐるを覺えず　樹間に吊せる提灯は去年御大典の時のものなりといふ　牛肉盡る頃小雨來る　九時頃寫眞屋來る　マグネシヤにて撮影　夜十一時まで雜話して川勝氏とともに歸寓　今夜土曜日なるを以てルーフに西人の舞蹈會あり　少時行きて之を見十二時過就寢　今朝廊下にてモルガン會社の副社長バスチング氏と談ず　カリフオルニヤ唯一の日本會員なりといふ

八月二十七日　晴　午前ハーンの「日本」を讀む　午餐後ブライトに逢ひて蝦蟇の直段幾何なるかと問ふ　一ダース一弗位なるべしといふ　蛙までダースにて賣るもをかし　午後近傍を散歩してカメハメハ一世の銅像を見る　裸體に金色の王冠を戴き金色のガウンを着たり　舊王宮今は米國の縣廳たり　カピオラニ街にいたり樹蔭に少憩　電車に乘りて歸る　夜「日本」を讀む

八月二十八日　晴　午前「日本」讀了　午後四時近衛を散歩し理髮店に行き五時總領事館に行く　正金銀行の青木氏、毛利、内田二醫士、奥村、伊藤、高島の諸氏にて日本料理の馳走あり　奬學會評議員の會なりといふ　毛利、内田、奥村、伊藤の諸氏いづれも十年以上の在住者なれば布哇の過去に就いて種々の珍談あり　十時半歸寓　坂本其の他に束す

八月二十九日　晴　風あり非常に涼し　午後本願寺學校の教員田島氏、鵜澤氏とともに來る　文學講話の事に就いて相談　ついで耶蘇教會の松澤氏來り羅馬字の事を談ず　今村氏亦ついで來談　言泉あいうえおの項の解說

を草し了る　晩近街を歩す

八月三十日　朝雨　九時晴　オアフ、カレーヂの教授ブライアン氏來り學校を案内すべしといふ　同氏の招ぜる自動車にて桑重氏とともにオアフ校にゆく　眺望よき處にあり動植物、地質、物理化學其の他の實驗室、教員室、教場等十數あり　家事科もありて女子をも收容せり　農業及び工科を主とせる專門學校なり　ブライアン氏は地質專攻の教授にして昨日までハワイ島に火山探險をやりしこと新聞に見ゆ　日本贔負の人たり　同校の某女史も同乘してブライアンの宅に赴き同氏の母及び細君にも面會　少時にして歸る　午餐後村田龍一といふ人布哇の傳說の事にて來る　午後二時より領事館に赴き卷一卷二修正の相談を終ふ　晩食後近街を歩す　夜「學生」へ送る通信を草す

八月三十一日　快晴　今日は天皇陛下の御誕辰なるをおもひ異郷萬里感慨深し　午前桑重氏來り談ず　ついで筧氏、川口卯吉氏を拉して來る　川口氏に井上、中島兩教授宛の紹介をなす　午後丹生氏來り三日中學校に講話せんことを乞ふ　よりて之を諾す　松澤氏西人團體にローマ字運動の事を同日十時話せんことを乞ふ　これ亦承諾　午後郵便局にいたり冨山房、大倉其の他への郵書を發す　明日より桑重の展覽會ヤング、ホテルにあり行きて見る　日布時事の寫眞師あり撮影して去る　晩食後近街を散歩す

九月一日　快晴　朝山内、淺賀二氏來訪　天洋丸にて今朝桑港より到着せる也　十時領事館にゆき種々の事項を相談す　午後天洋丸にゆき蛙の送達方につき相談　入澤等に柬す　四時再び天洋丸にいたり山內、淺賀、川口

等を送る　今回桑港副領事より滿洲へ赴任する山崎平吉氏にも面會　夜桑重氏とともに藤井領事官補の官舍にいたり「皇室と國文學」に關する談話を試む　會者十餘人　渡邊、丹生、相賀、角田、田島氏等なり　十一時歸寓

今日得能、坂井等の信あり

九月二日　快晴　蛙の代金六弗七十五仙を支拂ふ　奧村氏自動車にて來り移民局へ案內す　同處にて證明を得東洋汽船會社に立寄り耶蘇會堂にいたり日本羅馬字社支社設立の事を相談す　それより政廳に立寄る　舊王朝の正殿等を一覽してかへる　移民局長のホルセーはかつて馬關商業學校の校長たりし人の由　とめどなく話して閉口せり　午後二時總領事館にいたり第三第四の兩卷第二讀會了　記念として金時計一箇を贈らる　晚增田、高村、筧、鵜澤の四氏を晚餐に招ず　田丸氏に羅馬字社の事をいひおくる　鵜澤氏、田島氏と來りコアの書物立を贈らる　夜桑重氏來り談ず　展覽會景氣よしといふ

九月三日　快晴　午前讀本再閱　午後エレヴエーター中にて相賀氏に逢ふ　ともに布哇中學校にゆく　國語普及と羅馬字に就きて三時半より講演約一時半　總領事始め來聽者四五十人なり　自動車を貰ひて增田氏とともに歸宿　鵜澤、角田、相賀氏等相踵いで到る　增田氏と讀本三四挿畫に就きて相談　增田氏に晚餐を饗す　夜荷物を仕舞ふ

九月四日　快晴　正午領事館にゆき午餐を饗せらる　三時頃まで諸井氏と談話　諸處へ繪葉書を送る　四時歸宿「洋島」の編輯者泉氏來る少時談話　增田氏來る　增田、桑重二氏と電車にて海岸ホテルに憩ふ　夕陽波に落

ちて景色よし　會者三十餘人　余が爲の送別會なり　記念として布哇の葉書帖を贈らる　食後庭園に出づ　半月海を照して頗る美なり　增田、川勝、若林三氏と電車にて歸りルーフにて西人の舞蹈を見る　學士會の寫眞出來

九月五日　快晴　今日早朝春洋丸入港　午前宮王氏來り出雲敎祠にてうつしたる寫眞を持來る　東洋汽船會社代理店にいたり船室の事を相談　荷物を送り出す　ユニオン、グリルに午餐　午後桑重氏來談　ついで德山氏、增田氏來る　增田氏に讀本三四の原稿を渡す　德山氏午後五時半再び來り望月に晩餐せんといふ　自動車に同乘して行き日本飯の馳走になる　夕陽波に落ちて景趣幾度か變ず　入日を以て有名なるホノルルの意義を知るべし　八時望月を出で總領事館にいたり告別　外出中眞下、大內二氏來る　角田、鵜澤、增田氏同斷　十時頃鵜澤、高村二氏來る

九月六日　快晴　七時半宿を出でゝ波止場にいたる　總領事、副領事は送りて船にいたり今村、奧村、增田、眞下、高村、川勝、若林、桑重、子安、伊藤、堀諸氏波止場に送らる　日本コレラの爲船との交通を禁じたればなり　相賀氏は布哇風俗のレーを贈らる　九時半出帆　船中に杉程二郞等日本人乘組可なり多し　船室は百七號同室は日本製絨會社松岡甲子彥、三井物產の土肥具三二氏なり　夜半月波を照して銀色玲瓏

九月七日　快晴　波なし　正午の揭示によれば昨日正午よりの航程三百五十浬　北緯二十四度五十分　西經百五十二度四十五分なり　船中森村組の村井保固氏あり大倉書店の紹介狀を渡して挨拶す　同氏は今回にて六十九回目の渡米なりといふ　夜甲板にて大倉文二、淵上仁三郞二氏に逢ふ　大倉文二氏は保五郞氏の甥なりといふ

淵上氏は其の經營せる大文洋行店員なり

九月八日　快晴　朝驟雨一過　甲板にて赤星鐵馬氏と知る　正午の揭示に北緯二十八度十三分　西經百四十六度三十九分　航程三百七十浬　晩餐後假裝舞蹈會あり　假裝せるもの二十餘人　支那人、日本人古武士其他おもひおもひの扮裝をなせり　中に日本の甲冑を帶せるもあり　日本人の高橋氏（三井物產）女裝して出でたり　舞蹈夜半に達せり

九月九日　微曇　風頗に涼し　朝餐時遙に二汽船の駛走するを見る　米國荷物船なりといふ　正午北緯三十一度十分　西經百四十度三十分　昨日よりの航程三百六十六浬　夜活動寫眞の催あり

九月十日　曇　風涼しく印度人は喫煙室の暖爐によれり　北緯三十四度　西經百三十四度十七分　夜義太夫會あり　船客中の女及び給仕等語る

九月十一日　曇　正午北緯三十六度十五分　西經百二十七度四十分　昨日よりの航程三百五十二浬　桑港まで二百六十九浬なり　夕刻高野山大師教會本部巡教師高田寶戒氏刺を通じて來る　ロスアンゼルスに行く筈なりといふ　晩餐時日米の國旗を以て食堂を飾り食膳も平常よりは饒なり　夜九時頃までは月明なりしが夜深霧次第に深く頻に汽笛を鳴らせり

九月十二日　晴　曉起　船は錨を下して進行せず　霧深きが爲也　陸地已に近き事知られて幾多水鳥の飛群するを見る　十一時頃霧少しく霽る　船徐々として金門岬に入る頃霧次第に薄らげり　やがて全面に桑港の市街を

見る　景色横濱に似たり　但し層屋の高き街衢の廣き遠望を異なりとす　三時小蒸氣にて上陸　船中已に日米新聞其他の人刺を通じて來るもの多し　仙臺の人千葉氏及び日本人會長神崎氏彼是周旋せらる　埴原總領事にも波止場にて逢ふ　自動車にてインピリアル、ホテルに入る　本田幸介氏在り　千葉、神崎氏等踵いで來る　森岡氏の義弟島村美彦氏（日米新聞社）亦來訪　稻垣博士尙滯在中にて來談　千葉氏と三人にて西班牙料理に赴き晩餐それより稻垣氏と小川亭にゆき田代博士に面會　十時迄談話してかへる　千頭淸臣氏の訃を聞く　悼むべし

九月十三日　快晴　朝神崎氏來り波止場にゆきて荷物を受取り來る　ともに歩して領事館にいたり總領事に面會　田代氏告別の爲に來るに逢ふ　神崎氏とシャスタ、グリルに午餐　近傍を散歩して繪葉書等を購ふ　午後福井人大谷氏來る　音樂を學べる人なり　ついで千崎といふ人タイプライターを賣らんとて來る　又佛教會幹事石川氏、桑港日本人會幹事齋藤氏來る　晩近街を歩して一カフェに晩餐　夜階下に大脇氏と談ず

九月十四日　快晴　大脇氏東方へ出發す　午前十時神崎、齋藤二氏來る　自動車にてまづ學務課にいたりクラウド氏の案内にて Hearst 小學校にいたり授業を見る　又教科書に就きて調査す　校長は Miss Franklin なり二年生三年生の英語教授あり　十二時パレス、ホテルの食堂に午餐　午後更に Emerson School にゆく　校長は Mrs. Spencer こゝには日本人の兒童五十餘名あり　四年級五年級を見る　日本人の成績惡しからずといふ　校長が一々日本兒童の名を覺えたるは感心なり　最後に日本兒童のみにて君が代の歌を歌へり　こゝには前田侯爵夫人も若干の寄附をなせりといふ　ついで Hamilton 高等女學校にゆき又 Intermediate School を見たり

其の實用的なるは感ずべし　日本にも參考すべき價値あり　それより金門學院及び日本學院の日本語學校を參觀日本學院は佐野氏夫妻の經營せる處　假名の教授等に苦心せるが如し　四時辭して金門公園を見、日本庭園に憩ひ荻原氏にも面會　クリフ、ハウスに赴く　霧立ちこめて遠望し難し　八分間の寫眞を撮影して記念とす　要塞の大砲の衆目にさらせるも米國式なるかな　歸寓六時　夜岐阜師範出身にて後慶應義塾を出で今コロンビヤ大學に向ふといふ松野氏に逢ふ　今日日本及び布哇の知友へ繪葉書を送る數十通　外出中埴原總領事來訪

九月十五日　快晴　朝九時神崎氏來る　フェリーに至りベルクリーに行く　キー、ルートの汽船に乘り二十分對岸につく　直に電車に入る　渡船の感なし　直ちにカリフオルニヤ大學にいたりアーネル氏の紹介狀にてバロース教授に面會　同氏の紹介にて大學附屬中學校を見るに決し學校構内を一周す　希臘劇場などあり構内頗る廣し　黄金の力畏るべき也　圖書館も頗る完備せるが如し　正門外の一旗亭に午餐　中學校にいたり校長リー氏に面會しミス、ストーンの案内にて歷史、英語、獨語の授業を參觀　それよりベルクリー日本語學校にいたる　日本人會幹事森氏、委員野村氏等に逢ふ　歸途は南太平洋汽車にて歸寓　夜七時より稻垣氏の送別會、余の歡迎會とにて小川亭に桑港日本人の重だちたる人々の會あり　日本料理なり　食後議論百出　夜十時散會す　佐藤信忠氏の信あり

九月十六日　快晴　午前七時稻垣氏とともにフェリーに至り南加鐵道にてリヴイングストーンに向ふ　大倉、川淵、松岡諸氏の同じくリヴイングストーンに至るに逢ふ　沿道の平野、牧場あり果園あり　叉日まはりを作れ

る畑あり　こは油を製し又鷄の餌の爲也といふ　ナイルスの近邊山あり日本の景色に似たり　平野水少きため灌漑せざる處は皆赤く枯れて日本の秋の野を見るが如し　トレーシーにて乘換　十二時廿五分リヴイングストーン着　佐藤信忠等出迎　田舍ホテルにて午餐　こゝは日本人の土着人十九軒あり多くは地面持也　葡萄を主とし無花果、桃、アルモンヅ等を作れり　少憩の後自動車にて各所の農園を見仲藝代一氏の家に憩ふ　同氏はもと日本の實科農學校長をなしゝ人の由　令嬢夫人等出でゝ接待　アルモンヅ、フイツグを作り白人數名を雇ひて使用せり　佐藤、稻垣、松岡氏等と晩餐を饗せらる　七時會堂にて講演會あり　聽者四五十名　歸途仲氏の馬車に送られて前のホテルに一泊す　雪隱の汚きには閉口せり　但し田舍ホテルの一夜は風流なり　佐藤氏と久濶を敍せしは喜ばしかりき　晝の溫度九十度　風あり空氣乾燥したればさまで熱からず　夜に至りて頓に六十度に下る

九月十七日　快晴　十一時仲、佐藤其他諸氏到る　ともに晝餐　十二時廿五分乘車フレスノに向ひ三時同處着　自動車にてフレスノ、ホテルに入り直に本願寺設立の學校内に於ける教育懇談會に臨む　夜有志者二十人餘ホテルに來り饗應す　日本人會長神川氏、幹事保阪氏なり　八時より講演會　十一時歸寓　一浴就寢

九月十八日　快晴　八時保阪氏迎に來る　神川氏等數人にてまづ乾葡萄製造所にいたる　機械にて蒸氣を通し種を拔き箱につめ更に木箱に詰めて送出すまで迅速なり　それより十哩自動車を驅りて Bowles 村に日本人の耕作地を見る　中島氏（鳥取縣四十エーカー）、楢原（廣島六十エーカー）等の葡萄耕作業を視る　皆赤手よくこの產をなしゝ也　其の勤勉勞力驚くべし　村の中央に會堂あることリヴイングストーンの如し　十一時歸宿　日本

人街を歩して書肆松本氏に立寄り又神川氏の商店にいたる　神川氏は廣島人なり　大體廣島人多し　もと多くは布哇より轉航し來りし也　米國が轉航を禁じ又ついで日本人の土地所有を禁じ移住を制限せしは日本人の勢力を恐れしなり　十二時一分發の汽車にて歸桑　神川、保阪、百濟等の諸氏送らる　食堂車にて午餐　リヴイングストーンに着せし時吾孫子歸桑にて搭乘　佐藤氏、津田氏等送り來るに逢ふ　吾孫子と談話して大に無聊を慰するを得たり　歸途はトレーシーよりの鐵路全く別にて灣頭に沿ひ景色頗る佳なり　渡船中にて吾孫子氏と晩餐を共にしインピリアル、ホテルに歸る　夜八時階下にて吾孫子氏の弟某に逢ふ

九月十九日　快晴　午前マーケツト街近傍を散歩し冬帽子を購ひ午餐　午後日米、新世界兩記者來談　午後七時より總領事私宅の饗應に赴く　川島、神崎、市川等數人あり　十時半歸寓　今日石原類似コレラの報を聞く　山根、諸井、增田等に信し田所宛の書狀を認む

九月二十日　快晴　朝領事館にゆき友田、田丸、長谷川の手紙を受取る　それより近街を歩しフエリー、カフエに午餐　午後日本文典二册を松澤氏に送る　日本人會の齋藤氏來る　午後七時半より日本人會にて讀本稿本批評を乞ふとの事に付西班牙料理店に晩食の後之に赴く　小倉、時枝、佐野、副島、廣田等の諸氏十餘人種々雜談もありて夜十二時散會

九月二十一日　曇　後雨　九時神崎氏來る　自動車にて停車場に向へば汽車正に發す　よりてマーケツト街なる書肆に赴き書籍を一覽し十時四十分の汽車にてパロアルトに行き直ちに市橋氏を訪ふ　名古屋人にてスタンフ

オード大學の助教授なり　種々學校の事に付談話あり午餐を饗せらる　同氏妹も同大學の植物學を專攻し昨年卒業せりといふ　午後二時醫科卒業の草間氏來る　信州松本の人也　此の人の案内にてスタンフォード大學に至るミツションスタイルの建築にて單層二層三層と三重に建てられて構内頗る濶し　九千エーカーといふ　圖書室もひろし　三十萬卷ありといふ　メモリアム、チヤーチあり　男女寄宿舍あり男五百人、女百五十人を容るといふ博物館には日本、支那等の美術品、階上に古名畫の摸寫其他印度土人の古器物等ありて大學附屬博物館としては頗る立派なり　四時四十分の汽車にて歸桑　學校に至りし頃より雨となる　三月以來の雨なりといへり　雷鳴を聞きしは十二年ぶりなりとぞ　八時桑港日本人會幹事齋藤氏に導かれて佐々倉氏とともに日本人會に赴きそれより Reform Church（日本人會堂にて立派なり）にゆき在留日本子弟の國語教育といふ題にて演說す　歸途再び桑港日本人倶樂部に立寄り歸寓す　日本人會長塚本氏は洗濯業にて五六十人の使用人ありといふ　一見人物のよささうな人なり　スタンフォード大學にてヒースといふ動物學者に逢ふ　飯島、箕作、五島等を知れり　それより導かれてジョルダン氏に面會す　平和論の小著數種を贈らる　今の總長はヂルベルト氏にしてジョルダンとは打つて變つて兵式體操などをやらせる由　但し勤儉主義にして驕奢に流るゝ時弊を矯めんと苦心するが如し

九月二十二日　曇　朝日本人會の五味氏來る　ともにオークランドにゆきまづ王府日本人會にいたる　幹事原氏あり　神崎氏ついで到る　自動車にて工業學校にいたる　新築の建築中々立派なり　校長フイツシヤー氏叮嚀なる人にて說明最も努む　鍛冶、木工、化學、物理、家政、數學、語學、商業等種々の科目あり一種の綜藝學校

なり　ハイスクール程度なり　其實際的なるは感ずべし　但し工業にて工藝の意味なし　これ米國式なる所なり
生徒總員一千八百餘名　建築に七十五萬弗を費せりといふ　去つて堂本花園にいたる　主人圓太郎案内し午餐を
饗せらる　尙一同溫室を巡覽す　大規模にて三十餘の溫室あり薔薇を主としピンク、菌朶類等何萬となく作れり
又日本流の植木も多し　箱庭もあり　夏より冬にかけては悉皆賣切るといふ　カリフオルニヤの花の十分の八九
まではこゝに仰ぐなり　弟たる人花店をブツシ、ストリートに營めり　一巡して自動車にのり日本人語學校二箇
處を參觀す　穗積眞六郎と同級なりしといふ菅沼廣介といふ法學士あり　自活の爲こゝに日本語を敎授せり　步
してレストランにいたり日本人會の晩餐會に臨む　會長はこゝも洗濯屋なり　牧師、醫師、記者、敎育者、雜貨
商等二三十人なり　それより Forester Hall に講演す　九時半散會　十一時歸寓　石原、巖谷、西村、佐々木等
にはがきをおくる

九月二十三日　晴　ロスアンゼルス島野氏より手紙あり　秋田氏、神崎氏來る　フエリー、カフエに午餐　書
肆に立寄り日本に關する著書三四部を購ふ　午後神崎氏再び來る　タシヤスタ、グリルに晩餐　夜七時半より佛
敎靑年會に佛敎と日本文明といふ題にて演說　佐々倉氏も同行

九月二十四日　快晴　朝法學士菅沼氏來る　ともに近街を步しオデオン、カフエに午餐　穗積眞六郎にはがき
を送る　午後荷物を整理す　夕六時千葉氏に迎へられて同氏の寓に赴く　晩餐の饗應あり　笠井氏、赤池氏夫妻、
大澤女史（女子大學卒業生）等同席　服部、姉崎、成瀨等に信す

九月二十五日　快晴　朝九時五味氏來る　ともにフエリーにゆく　スタツクトンまで同行すべき筈なりし神崎氏來らず　よりて單行す　汽車少し遲れて一時頃着　諸氏に迎へられて支那料理店に午餐　それより波止場にいたりガソリンボートにて河を進みてベイコン島にいたる　航程三十浬ばかり蒲の生茂れる島々幾つとなくはてしなし　之を開きて良田となせる牛島氏の忍耐と勞苦とは眞に偉大なりといふべし　ベイコン島の第五號キヤンプに立寄り其の樣子を一覽し第一號の本陣に到着す　井上氏及び牛島氏の參謀たる渡邊金藏氏に逢ふ　渡邊氏快濶よく語る　世故に長けたる人なり　それより再びボートにてオルウードにいたり上陸　汽車にてスタツクトンに歸り再び前の支那料理店にて晚餐　一同佛教會堂にいたりて講演　十時終り St. Joaquin ホテルに投ず　日本人の經營せる洋風ホテルなり　神崎氏は別途を取れる爲逢はざりしなりといふ

九月二十六日　快晴　朝八時近傍料理店に朝餐　九時五十分電車にてサクラメントに向ふ　十一時半着　日本人會長津田伊之吉、同書記田村氏、本願寺出張所工藤慧達氏等迎へらる　自動車にてトラヴエラー、ホテルに投じ諸氏とともに午餐　午後歩して州廳學務課にいたり課長ハイヤト氏に面會種々の報告書等を得　更に州廳本館にいたる　三百萬弗の建築の由にて頗る壯麗なり　樓上に州會の上下議院席あり上院は四十、下院は八十の議席あり　前者は紅、後者は綠の色彩を以て飾られ館の兩端にあり　それより廣き公園を通りて州定讀本印刷所を觀る　輪轉機八臺を運轉す　疊方、壓方、揃へ方等印刷一切の設備完全す　最も羨むべきは階上の植字室にてタイプライターにて押せば直ちに印刷の活字版の出來る事なり　それより製本室及び出來上りたる書物の倉庫等あり

使用人男五十、女四十　州定讀本の外一切の役所の印刷物を引受くといふ　今州定讀本は生徒に給するを以て割合に少部數にて足れりといへり　八巻を印刷製本し居たり　こゝを出て電車にて本願寺の日本語學校を見る　一二年、三四五年、六及び高等一二年の三級に分れ比較的整頓せるが如し　自動車にて歸寓　夜千よしといふ日本料理店にて有志の晩餐會あり　それより本願寺學校にて講演　夜十時就寢　渡部等にはがきを送る

九月二十七日　快晴　朝九時五分の汽車にて出發　途中ベネシアスの處にて有名なる渡しあり汽車直に渡船に乘りて向岸に達するなり　同時に四線の汽車を載すべしといふ　十一時半桑港着　宿にかへり正金銀行にいたり英貨四十磅を引出し領事館にゆきて領事に告別　午後六時千葉、神崎、笠井三氏とオデオン、カフェに晩餐　停車場に向ふ　大倉、松岡氏等の同じくロスアンゼルスに向ふに逢ふ　八時發車　プルマン寢臺車廣くて眠心地よし　目覺むればサンタ、バーバラなり　海邊の景色も波穩にてよし　九時四十五分ロスアンゼルス着　桑港にて山本の手紙を受取る

九月二十八日　快晴　停車場より日本人會の諸氏に迎へられてミカド、ホテルに投ず　稻垣氏尙在り　隣室に陣取る　午後一時田中氏等迎に來る　自動車にてまづ鰐魚養育場にいたる　場中幾百の鰐魚あり　二歳乃至三歳のものあり百何十歳といふもあり　アリゲートルよりもクロコダイルの方亂暴なり　馴れたるは人乘りても驚かず　それよりコートンの駝鳥園に至る　こゝは又駝鳥を飼ふこと夥し　雌雄の駝鳥にルーズベルト、タフト、ウイルソン夫妻など大統領の名を冠したるも米國式なり　それより諸處を見物す　ハソデナ郊外新開の地立派なる

別墅多し　概して丘陵起伏し谷あり川あり樹木多ければ風致よし　四方に山を望むを以て何となく日本らしき心地す　小學校に立寄り兒童とともに撮影　尙西方ハリウッドの方面を廻りて歸寓す　夜六時より日本料理店一富士に有志者歡迎會あり　出席者三十餘名　終りて國語教育に關する談話をなす　着と同時に醫士高木梅軒氏撮影せしが晩に至りて出來たりとて持參

九月二十九日　晴　朝吉田氏來る　自動車にて西方の日本人農園を見る　小規模のものもあり　田中長吉氏十エーカーしかも年收一萬二千弗　内半分は實益なりと語れり　加藤氏六年間に十五六萬弗を獲たりといふ　其家屋を見れば鳥小屋の如し　米人の排斥するも無理ならず　但し三年間の約束なれば之を棄てゝ他に移轉せざるべからざればかゝる假住居も止むを得ざる所なり　歸途領事館に立寄り大山氏に面會　ともに日本料理店川福に午餐　一旦歸宿　四時日本學園にゆき教育會に臨む　晩八時より大和ホールに於て講演　聽衆一千名　日本式羅馬字社の境澤氏講演場に來訪　ともにホテルに歸り十一時まで談じて去る　夜小雨　二月以來の雨なりといふ

九月三十日　朝微曇　午後二時二十五分の急行に搭じてロスアンゼルスを發す　サンベルナデイノ附近より空霽れたり　灌木の疎生せる丘陵、パーム屬の奇木叢生せる原野など目慣れぬ景色面白し　プルマンの代價を拂ふを忘れたるを以て電報にて稻垣氏に立替を依賴す　在米國兒童の教育をおもひて

今立氏に

　　立寄らん大木の蔭もなかりけりアメリカの野のやまとなでしこ

アメリカの荒野をひとり行く旅に五嶽の夕おもひいづるかな

旅情を

草枕まきし日數は重なれど夢路はちかし故鄕の山

十月一日 朝快晴　眼覺むれば汽車は雜草の外一物もなき平野を行くなり　行けども行けども盡きず　八時半ミルフオルドに着す　ロスアンゼルスを距ること六百七十餘哩にしてソートレーキ市までは二百六哩を餘すのみ正午頃より雨となる　一時十五分ユタ着　ユタ、ホテルに投ず　切符の用にて鐵道驛に赴き歸途自動車にて市中を見物す　人口十二萬五千といふ　ユタ、ホテルは九層　建築費四百萬圓也といふ　有名なるモルモン宗の寺と相對して立てり　ユタは高地の湖水に臨める一都市なるが山も禿げて景色よしといふにもあらず　市街小けれども立派なり　ホテルの食堂に午餐　四時頃より天霽る　夜英字新聞の一記者なりとて電話にて渡米の目的を問ふ宿帳にて調べしなるべし

十月二日 曇　朝モルモンの寺を見物し諸處にはがきを出し州廳に學務局長を訪ふ　ドクトル、ガウアンといふ人なり　親切に種々の事を話せり　午後二時ホテルを出でゝ二時半のシカゴ行に乘る　各英字新聞に余が渡米の目的に就きて記事あり　ソートレーキは四千二百四十五呎の高地なるがこれより尙次第に高地に上り最高驛は夜間通過せる Sherman にして水平上八千十呎なり　夜雨

十月三日 快晴　目覺むればやがて Cheyenne 驛なり　四望すべて雜草の外一木もなき荒野なり　かくの如

き景色幾百哩となく續くなり　十時半シドニー驛著　午後は多少の耕作地も見ゆれど尙槪して茫漠たる不毛地多し　次第に低地となり暑さも增加す

十月四日　快晴　朝餐の時食堂かはる　十一時半シカゴに入る　停車場食堂に午餐　ブラックストーン、ホテルに投ず　二十階餘の大旅館なり　室三二三號　午後近街を步す　家具、衣服、樂器、自動車、鐵器等の大商店多し　自動車、汽車等の運轉目まぐるしきばかり也　夜教科書目錄を調査し東京諸友に信す

十月五日　快晴　朝ミシガン、アヴエニユーの領事館を訪ふ　切符の事は姉齒書記官を煩す事に決す　それより途中にて午餐　キユルメート通りの日本基督教靑年會にいたる　田代博士不在　每日新聞の水野和一氏に逢ひ電車に同乘してかへる　八田、松本兩氏の電話あり　尙トリビユーンの一記者なりとて渡米の目的を聞きに來る

十月六日　快晴　朝ウオーバツシ街のマリクルガ書店にゆき初等教科書、兒童讀本等約百種を注文し文部省に送らしむ　それより領事館を訪ひ切符を受取り歸途美術館を見る　下階は彫刻を主とす　多くは倫敦、巴里、伯林其他の摸品なり　埃及のコンミー等もあり　上階は繪畫なり　日本美術品も少しはあり　途中ダルノー氏に逢ふ　デイリー、ニユースの記者にて日本好なり　日本浮世繪其他の美術に硏究の趣味ありといへり　レツグは自分の祖母の姓也といへり　大倉氏をオーヂトリウムに訪ふ　不在　夜近街を步しマンダリン、インに晩餐　入浴して就寢

十月七日　快晴　朝九時八田氏來る　ともに市學務課のローリー氏を訪ふ　好箇のおやぢ也　シカゴ市學校案

内一冊及び教科書目錄を貰ふ　それより諸處を見物してヒポドロムを見、和蘭料理店に午餐　午後佐藤大使一行着　ブラツクストーン、ホテルに入る　階下に大使及び水町少佐、後藤一藏（新平男長男）、醫學士長尾氏等に面會　三時より自動車にて公園廻りをなす　ワシントン像の入口にあるワシントン公園よりジヤクソン公園、それよりガルフイールド、フンボルト、最後にリンカーン公園等いづれも立木あり芝生あり花園あり池ありて廣濶にして心地よし　途中市街の概觀を得たり　ジヤクソン、リンカーンの二公園はミシガン湖に臨みて眺望よし　ジヤクソン公園はシカゴ博覽會の敷地たりし處　美術館今殘りて博物館に用ひらる　夜に入りて歸宿　マンダリン、ホテルに大倉氏等に逢ふ

十月八日　快晴　午前近街を歩す　昨夜繪葉書を買へる店の主人公に逢ふ　面白き男也　午後電車にてリンカーン公園に遊ぶ　動物園あり煉瓦造の建物に鐵柵を廻らし道を高く作りて四方より見られ得るやうに作れり　寒き國の獸には瀧などを落せり　いづれも金のかゝる事と感ず　マンダリン、インに晩餐　夜八田氏來談　十二日出發ニユーヨークへ同行の事を約す　長谷川よりの手紙を受取る　文部省讀本懸賞募集の事を知る

十月九日　快晴　風あり寒し　朝近街を歩し正午領事館にいたる　栗栖領事午餐の約束あればなり　田代博士踵いで至る　ともに大學俱樂部に午餐　北西大學文科長ホルゲートも同席　それより同俱樂部の各室を巡覽す　頂上湖水を望みて風景よし　水泳室、運動室、圖書室等頗る完備せり　終身會員は一時金二千弗を納むべしといふに至つては其規模の大知るべきなり　歸途田代氏少時來りて談話　ともに近街を歩しカフェ店に立寄り活動寫

眞を見、夜一旗亭に晩餐　トリビユーン記者たる某來る　大學倶樂部の規則を貰ふ

十月十日　快晴　朝松本氏迎へに來る　ともに電車にてシカゴ大學にゆきモールトン氏の敎場マクベスの講義を聽く　それより總長ジヤドソン氏に面會　書記の案内にて圖書館、研究室等を巡覽　學生食堂にいたり辨當を食ひ十二時四十五分まで授業せるグート氏の地理敎室にいたり同氏の地圖等を見る　松本氏、上條氏と電車にてストツク、ヤードにゆきスウイフトの屠殺場を見る　豚牛羊等一日に數萬頭を屠る光景地獄の如し　リツビーの鑵詰製造場まで案内せられてエレヴエーターを下る　それより松本、上條二氏に別れて一旦ブラツクストーンに歸りカルソート街の日本人基督敎會に催せる日本人歡迎會に臨む　會者三十有餘名　栗栖領事亦至る　近藤、水野、松本、上條、栗栖等の談話あり　最後に一場の談話を試み十一時半歸宿　シカゴ大學の一覽及び時間表等を貰ふ　此の日宿料二十四弗四十仙を拂ふ　內閣交迭、大隈伯辭任、寺內伯就任、岡田良平氏文部大臣となれりと聞く

十月十一日　快晴　朝マーシヤルフイールドのデパートメント、ストアを見物　ダツチ、レストランに午餐　午後日布時事記者不破及び領事館書記生姉歯氏來る

十月十二日　雨　午前領事館にゆき告別　姉歯氏より切符を受取りダツチ、レストランに午餐歸宿　午後旅裝を整へ五時ラツサル停車場に向ふ　上條、松本二氏送り來る　五時三十分發車　同行八田氏也　明朝バツフアロー着を夢みて寢ぬ　終夜雨聲絕えず

十月十三日 雨 七時半バッフアロー着 停車場の食堂にて朝餐 汽車にてナイヤガラに向ふ 一時間にして着 風雨を冒してベルトラインに乘る 橋側にて檢査あり 對岸カナダにて英領なればなり 橋の中途よりアメリカ及び馬のくつの二大瀑布見ゆ 壯觀なり カナダ領に入ればいかめしき英國兵士護衞す カナダ側より見れば更に偉觀なり ゴート島及び姉妹島の眺もよし 一停留場にて下車 ラフアエト、ホテルに午餐 瀑布の眺望を恣にす 三時再び上車 鐵道橋を右に見て急流及び大渦卷を瞰ながら進む 途中籠の渡しの如き仕掛ありて對岸に行く工夫をなせり 四方の紅葉眞に錦の中を行く如し 一周して再び橋を渡ればアメリカ領なり 更に低く川に沿うて進む 急流及び大渦卷の壯觀名狀し難し 停車場に着する頃雨やうやく霽る 五時の汽車にてバッフアローに歸り市中を散歩し時間潰しの爲活動寫眞を見晩餐 夜九時の急行寢臺車に搭ず

十月十四日 快晴 目覺むれば右にハドソンの河を見る 川に沿うて進み七時五十分中央停車場に着 タキシーにてブロードウエー角第九十三街のホテル、アスロルプに着 朝餐の後日本人倶樂部にいたりそれより地下鐵道にてウオール、ストリートの總領事館を訪ふ 家信二通及び山根、坂井、大久保等の郵書はがきあり 辭して再び急行地下鐵道にて九十六街にいたり歸宿 午後八田氏とともに岡田博士をマルセーュ、ホテルに訪ふ 六時岡田氏の一族とともに日本倶樂部に牛肉を食ふ 磯田、德大寺其の他に逢ふ 夜半八田氏ワンチエに喰はれたりとて眠らず

十月十五日 快晴 宿を變へんとの目的にてまづ日本倶樂部にいたり諸處を歩して後岡田氏を訪ひマルセーュ

に引越すことに決定　午後二時荷物一切を自動車に乘せて引移る　中村時雄氏に逢ふ　夜近傍に晩餐　斯波氏今日ニューヨークに歸れりといふ

十月十六日　晴　朝八田氏とともに斯波氏をベルクレール、ホテルに訪ひともに五十九街まで歩し支那料理店に午餐　それよりブロードウヱーを歩してスプリング街邊までゆき森村組の村井氏を訪ふ　店内各所を巡覽し歸宿　夜日本倶樂部に天洋會ありとの事にて同處にゆく

十月十七日　快晴　八田氏、佐藤氏とともにブロードウヱー第四十五街にいたりタイムス、スクエアーのペキンに午餐　更に南公園に遊ぶ　途に自由像を見る　波浪高くして渡船に適せず　水族館を覽る　上下の廻廊に數多のタンクあり大袈裟なる仕掛なり　地下電車にて佐藤氏とともに歸宿　夜七時半より高峰讓吉氏饗宴にロートス、クラブに赴く　會者二十四人　歸途は高峰氏、岡田氏と自動車也

十月十八日　快晴　八田氏と宿所を求めんが爲に日本倶樂部にゆきそれより百三十五街までＬに乘り下田氏を訪ふ　コウエント街の一家に室を見んが爲也　歸途ハドソン河畔の所謂リヴアーサイド、ドライブの邊を歩す　風光絶佳なり　グラントの墓あり　百十六街より電車にて九十六街にいたり午餐　午後八田氏再びコウエント街にゆく　宿を取極めんが爲也　月極ならねば貸さずとて空しく歸宿　夜ハンガリヤン、レストランに晩餐の後再び日本倶樂部にゆき明間の有無を聞き近傍を尋ね余は第九十三街百五十四 Kirk Patrick の家に、八田氏は第九十一街百 Ross の家に入ることに決定す　大倉文二氏一行ホテルに投宿　往きて談ず

十月十九日　雨　風あり　ハンガリヤン、レストランに午餐　午後三時自動車を雇ひて貸間に引越す　諸井、坂本、文部省及び銅子へ書狀を認む　夜四十三街にいたり一旗亭に晩餐　ヒポドロムを見る　數百人の舞臺面ただ賑かなるに驚く　觀客五千人以上を容るべしといふ　此の日の觀客三千四五百に超えたり

十月二十日　快晴　朝九時エキスプレスに賴みたる荷物到着　十時頃八田氏來る　ともにエクイタブル、ビルデイングの高峰氏事務所を訪ひ先日招待の禮を述べ領事館にゆきて轉居をしらせ正金銀行支店にて四十磅を引出し中央停車場の食堂にて午餐して歸宿　夜近街を歩す　家信あり　みつ子の歌に

　一年の旅路はるけき外國にすこやかにませと日每いのりぬ

十月二十一日　快晴　朝八田氏來る　午後「學生」原稿カリフオルニヤだよりを草す　夜八十六街に晩餐　夜留守宅より五級俸下賜の辭令九月二十日附にて有之たる由通知あり

岡田、斯波來談　シカゴのマリクルガより文部省へ送るべき書籍の目錄を郵送し來り可否を問ふ　よろしきに付直ちに日本へ送るべき旨申送る　諸友へ柬す　田所文部次官に就任の事を聞く

十月二十二日　快晴　日曜日なるを以て午前十時宿の子ジョージを伴なひて九十六街より第百八十街ブロンクス停車場まで地下鐵道にてゆき動物園公園を散歩す　林あり水あり滿目黃葉して秋晴言はん方なく心地よし　各種の鳥獸極めて多し　シカゴの比にあらず　それより植物園の方に步す　廣きもの也　園內にて八田、中川、平野氏等に逢ひ同道してかへる　途中園內の料理店に午餐　夜八田氏を訪ひ近街を步して晩餐

十月二十三日　快晴　第三十二街のアップルトン書店にいたる　マクルーフ氏シカゴに出立間際なりとの事にて他日を約して歸る　三十三街の高架鐵道停車場は直ちにギンベルのデパートメント、ストア第一階に通ず　觀覽の後繪本類種々を購ひ日本に送らしむ　關根其の他にはがきを送る　夜八田氏來る

十月二十四日　快晴　第二十三街までLにてゆきブレンタノ書店にいたり富山房へ送るべき書籍約八十九弗を購ひ郵送せしむ　午後六時より西百二十三街一三九若松に文部省留學生會あり　岡田、斯波及び京都大學よりの大藤、青柳氏等も臨席　總體にて二十八餘　食後種々談話あり十一時散會

十月二十五日　曇　朝八田氏來る　十時中央公園を歩し第五十九街にいたり種々の雜誌を購ひかへる　晩日本倶樂部にゆく　岡田、斯波氏等あり山根の手紙來る　中央公園は溜池あり動物園あり林池ありて頗る潤し　栗鼠多く出て戯る

十月二十六日　快晴　朝總領事館にゆき領事赤松氏に面會　それより七十七街にいたり午餐　中央公園を歩して美術館を觀る　埃及以下各時代の遺物多し　米國に在るを忘れしむ　二階繪畫室にも佛蘭西等の名畫も不尠セザンヌ、モネー、ヴアンダイク等あり　日本の甲冑、美術品等もあり　歸宿すれば日本語讀本原稿五卷六卷到着　夜日本倶樂部に行く

十月二十七日　快晴　朝ステツヘルトにゆき獨逸書數部を購ふ　午後讀本訂正に着手す　夜日本倶樂部にゆき晩餐

十月二十八日 快晴 讀本五卷訂正 午八十六街に午餐 午後八田氏來る 八十一街に晩餐 夜日本倶樂部にゆく 家信あり 靑木、內山のはがきも到着

十月二十九日 快晴 暖なり 午前八田、斯波、磯田三氏來る ともにホテル、アブソルプに午餐 サブにてブルクリンのプロスペクト公園に遊び逍遙の後ブルクリン博物館を觀る 三階及び一階に美術品あり 二階は博物標本なるを以て見ず 繪畫にはサルセントの水彩畫、チソーの宗教畫最も目につく ルイニーのマドンナあり 第一階に於ける支那の七寶及び玉頗る饒し ベースに日本品も不尠 五時同處を出で電車にてブルクリン橋を渡りシテイー、ホールの前を通りてチヤンバース街よりサブにて四十三街にいたり電光の夜景を見、一支那料理店に晩餐 歸途日本倶樂部に立寄る

十月三十日 微曇 暖なり 朝散髮 正午八田氏の誕辰なりとてホテル、ボンタに同氏の饗應に與かる 午後七時より第五十七街YMCAに於て天長節祝賀會あり 日本人會の催也 赤松領事、佐藤大使の祝文を朗讀し高松會長の發聲にて萬歲を三唱す それより第五十九街ホテル、サヴオイに於て宴會あり 司會者高見氏、赤松領事、高峰博士、家永博士、余、岡田博士、稻垣博士、斯波博士、一宮正金銀行支店長の順序にてスピーチをなし撮影 萬歲を唱ふ 音樂隊宴會中日本の越後獅子、六段、春雨等の曲を奏す 來會者二百人餘 盛會なり 歸寓夜一時 霧深し

十月三十一日 晴 朝讀本を訂正す 午後水谷、鎌田、八田氏等來る 日本倶樂部に晩餐 夜九時より第四十

三街ホテル、アストルの領事館天長節祝賀會に臨む　舞蹈あり　十一時立食の後退散　ニューヨーク市長も臨席
出席者約二百名

十一月一日　快晴　朝八田氏をペンシルヴアニヤ停車場に送る　歸れば稻垣氏あり　同氏の宿所を求むる爲に百五十七番にいたる　幸に空室あり　それよりアプソルプに午餐　ともに岡田氏を訪ふ　岡田、斯波二氏とともにコロンビヤ大學にいたり圖書館及び教場等を觀、工科教授のラルク氏に逢ふ　事務所にて一覽一部を得て去る　水曜日には總長バトラー氏出校せずといふ　リヴアーサイドを歩し岡田氏の寓に立寄り六時より日本倶樂部に赴く　磯田、橋本二氏の爲に天洋丸の同乘者送別會を開く也　食後雜談　十時散會

十一月二日　快晴　讀本の訂正に忙し　午アプソルプにて稻垣博士に逢ふ　夜稻垣氏來る　八田氏フイラデルフイヤよりのはがき來る

十一月三日　快晴　今日は立太子式の行はせらるゝ日なりと思ふ　讀本を訂正　午アプソルプに午餐　晩稻垣氏、八田氏來る　日本倶樂部にゆく　斯波氏等に逢ふ　八田氏日本倶樂部に轉宿

十一月四日　晴　朝八田氏とともに正金銀行にゆき一宮氏に逢ふ　金子四十磅米貨換算百九十弗十仙を受取りサウス、フエリー近傍を散策し市街電車にてかへる　遲き事牛歩の如し　亦一奇とすべし　夜讀本訂正十一時に至る

十一月五日　雨　讀本訂正　午晩ともに八田氏とともに近傍に食事す　夜八田氏來談　九時半去る　南部源哉

來る

十一月六日　快晴　讀本訂正　八田氏來る　馬淵冷佑より信書あり　梓の手紙を封入し來る　布哇増田より同斷　夜日本倶樂部にゆく

十一月七日　快晴　朝斯波氏來る　八田氏と三人九十一街のハンガリヤンに午餐　電車にてブロードウェーをハウストン街まで下りLにて歸寓　今日大統領選擧日なれば市中の景況を見んが爲なり　夜稲垣、八田二氏と斯波氏を七十七街のホテル、ベルクレールに訪ひ歩してコロンバス、サークルに至る　雜閙甚だし　ファーイーストに憩ひタイムス、スクエアーに至る　赤光ヒューズの勝利を示すものゝ如し　更にLにてウールウオースの塔附近にいたり歸寓

十一月八日　快晴　選擧結果尙不分明なり　八田氏と百二街に午餐　午後讀本訂正　七時より一宮氏の饗宴に赴く　岡田、稲垣、八田氏の外海軍の佐伯、日本銀行の濱岡氏等あり　主客十人　夜十一時辭し去る　厨川のはがきあり

十一月九日　快晴　終日讀本訂正　アプソルプに午餐　晩餐はウンテル、デン、リンデン也　大統領尙未定也

十一月十日　快晴　厨川辰夫氏來る　ついで稲垣博士も來る　ともにハンガリヤンに午餐　それより地下電車にて森村組にいたり村井氏に面會　森村氏事業に就き聞き讀本草稿を八十三街の郵便局より送出す　晩佛蘭西料理店に晩餐　月色玲瓏　大統領ウイルソンの勝利疑なきものゝ如し

十一月十一日　午前九時寓を出でLにてペンシルヴアニヤ停車場にいたり十時八分發車　八田氏とともにワシントンに向ふ　ボルチモーア以後沿道の景色入江ありて頗る可なり　紅葉もよし　三時二十分ワシントン着　自動車にてホテル、ニユー、ウイラードに入る　斯波氏在り　夜近街を歩して晩餐

十一月十二日　雨　斯波、八田二氏と外に出でゝ朝餐　歩してキヤピトールを見る　宏壯なる建物なり　案内者の導くまゝにセネートの會議場及び下院の會議場、大統領室等を巡覽す　大統領の石像及び各州の著名なる人の石像、歷史畫など皆おもしろし　ワシントンに入りて始めて歷史的感想を動かし來る　市街幅廣くして並木あり自動車も多からず何となく靜肅にして落付よきは心地よし　午後降雨頻りなるを以てホテルに雜談　六時頃岡田氏一行來着　雨霽れたれば斯波氏と一同セント、ゼームスの料理店に晩餐す

十一月十三日　曇　岡田氏一行とともに大使館に至る　N街マサチユセツツ通りに在り　外交官補岩手氏在りしばらくして佐藤大使亦出勤　少時談話の後辭して歸途白屋を見る　ベース及び第一階の舞蹈室の參觀を許す也　庭園花卉あり前面は公園にて風致よし　共和國の大統領の家として質素なる却つて面白し　オクシデンタル、ホテルに午餐　午後一時半岩手氏來る　一行十人ソールジヤ、レールウエー停車場より電車に乘りてヴエルノン山に向ふ　沿道川あり入江ありて風色佳なり　秋林紅葉亦愛すべし　三時ヴエルノンに着　ワシントンの家及び墳墓を見る　家は質素なれども中々廣し　ワシントン臨終の室を始め巡覽　其の器物等すべて舊時の愛玩品なること例の如し　屋後の庭園傾斜になり居りて入江を隔てゝメリーランドを望む　雄大なる眺望なり　しかも何とな

く和らか味あるを覺ゆ　紅葉を蹈んで墓に詣づ　四時半歸りの電車にて五時半頃歸着　夜オクシデンタル、ホテルに晩餐　近街を歩して記念品等を購ふ

十一月十四日　曇　風寒し　朝スウイングルをコネチカット街に訪ふ　不在　歸寓午餐の後再び農商務省に訪ひ面會　午後四時半同氏ホテルに來訪　伴なはれてコスモス倶樂部にゆく　同倶樂部は重に學者の集會所なりといふ　ワシントン氏にも逢ふ　快活なる老人なり　七時N街の大使館晩餐會に赴く　岡田氏一行等と與に日本食の饗あり　十一時歸宿

十一月十五日　曇　寒し　朝田中長三郎氏、本多幸介氏とともに來る　同行して再びスウイングルを訪ひ種々談話の後コスモスに午餐を饗せられ本多氏と別れスウイングル及び田中氏とコングレス、ライブラリーにゆき書庫に入り半日を費す　其の規模の大なる驚くべし　日本文學及び語學等に關するカードを購ふ約束をなす　四時半再びコスモス倶樂部にゆく　夜岡田清三郎氏來る

十一月十六日　快晴　八田氏まづアナポリスに向つて去る　九時コルコチャン美術館にいたり觀覽　午後スミソニヤン、インスチチューションの新博物館を見それより書肆に立寄り二三種を購ひ四時二十七分の汽車にてボルチモーアにいたる　五時三十一分より自動車にてホテル、ベルベデールに入る　八田氏ついで到着　岡田氏等一行も間もなく到着

十一月十七日　晴　八田氏とともにジャクソン、スクエアーの厨川氏を訪ふ　同行してジョンス、ホプキンス

大學の新校舍を見る　全く未成也　圖書館もあまり廣からず　グリーン氏のシエーキスピヤの講義（ヘンリー四世）を聽くこと一時間　一覽一部を請ひ得て歸途レキシントン街の同名のホテルに午餐　再び電車にてワシントン記念塔附近のピーボデー美術館にいたる　ウオータース、ガラリーは閉館中觀ることを得ず　厨川氏宿に來りて談ず　夜近街を歩して晩餐　市街は至りて靜謐なり

十一月十八日　晴　朝厨川氏來る　電車にてガウチヤーのウーマン、カレーヂに至る　前校長ガウチヤーの寓を訪ひて面會　同氏余等を引いて同校長に紹介しそれより一女生の案內にて教場、運動場、寄宿舍を見る　一寄宿舍のハイルト女史大得意にて案內しそれより講堂、圖書室等にも案內す　皆別箇の建物也　日本女子大學校の如し　十二時半辭して公園を散歩し歸途支那料理店北京に午餐　四時の汽車にて余はフイラデルフイヤに向ひ六時着　ホテル、ワルトンに入る

十一月十九日　快晴　曉起　電話にて田代博士の在否を伺ひ電車にて三十六街トレーシーの同博士を訪ふ　十二時同氏の饗應になりて同所に午餐　二時來訪の五斗、杉田、松波其他二三の留學生とともにフエーヤモンド、パークを逍遙し二王門附近其他にて撮影　再びトレーシーに歸り田代氏の晩餐會に列席す　同行諸氏の外畑井氏等あり　食後縱談十時半辭してかへる　五斗氏送りて余が宿にいたる　阿部貞夫氏ボルチモーアより來れるを以て少時談話

十一月二十日　快晴　田代氏來訪　十時宿を出でゝ市街を歩し獨立閣、ビュステーロッス、カーペンター、ハ

ウス等を觀覽す　獨立閣は獨立を宣言せる處、ビュステーロッスは米國最初の國旗を作れる處、カーペンターハウスは第一議會を開き米國憲法を起草せる所、米國にとりてはいづれも建國に由緒ある名所たり　フランクリンの墓所も附近にあり歷史的趣味多し　シティーホールの塔頂にあるペンの像も面白し　マーケット街の繁華シカゴに讓らず　チャイルドに午餐　二時宿を出でて停車場にいたり三時發車　五時ニューヨークに着　アプソルプに晩餐　夜稻垣、八田、斯波三氏來訪　不在中各所よりの信書あり　靑木、廣瀨、潮田、石原、八波、市河等なり　光融館より口譯御文章を送り來る　文部省より十月九日附にて「歐米各國に於ける敎科書の調査を囑托す」の辭令とともに金一千圓を送り來る

十一月二十一日　快晴　朝領事館にゆき赤松氏に面會　先日招待を受けたれども旅行中不參せし禮を述べそれよりブラウン、ブラザースにてチェツキを受取り正金銀行にて現金に引替へ歸途ケンネリーに午餐　夜八時半よりワシントン、スクエアーのコメデイー、ハウスにゆく　斯波、八田、岡田、稻垣等を饗する也　四幕の內一幕は武士道といふ外題にて寺子屋也　やゝ滑稽に近けれども松王のみはよし　José Ruben といふ佛人之を勤む　十一時半歸宅

十一月二十二日　快晴　朝八田、稻垣二氏來訪　午後ブレンタノにゆき書籍十數部を購ひ尙ブック、オブ、ノーレッジを購ひて冨山房へ送らしむ　歸途チャイルドに午餐　晚近街を步して稻垣氏に立寄る　シェーキスピヤ懷中本を購ふ　家信あり

十一月二十三日　雨　八田、稻垣、成瀨三氏來る　稻垣、八田二氏とウンテル、デン、リンデンに午餐　風雨

はげしきを以てジヤパニーズ、ガーデンの活動寫眞を見る　富士山の舞臺等あり裝飾幾分か日本畫を用ひたるのみ　夜日本倶樂部に晩餐　坂本、かう子等に信す

十一月二十四日　晴　朝八田氏とコロンビヤ大學にゆき教授エルスキンを尋ぬ　授業中なり　オフイスに火曜日面會の由掲示あり　よりて斷念　尙總長バルトン氏を總長室に訪ふ　これも火曜日十二時に來られたしとの事に付空しく歸寓　午後諸處へはがきを送る　郵便今夜〆切なれば也

十一月二十五日　快晴　午前四十一街にいたり市立圖書館にいたる　宏壯なる建物にて圖書閲覽室も完備せり貸出の方法も簡易也　巡回文庫も階下に在り　閲覽室は三階也　其外にスチアー、コレクション等ありて半ばゝ展覽會の如し　設備至れりといふべし　オツフアーに午餐　午後七時より日本倶樂部にて新舊領事の送迎會に臨む　來會者百數十名盛會なり　十時半退散

十一月二十六日　快晴　稻垣氏とともにサブにて中央停車場にいたりニユーヘーブン行十時の汽車に搭ず　十一時四十五分着　農科助教授堀田氏、山川總長子息、大島文學士等の出迎を受けてホテル、タフトに入る　昨日エール、プリンストンのフツトボールありし爲宿屋空室なし　今一時間の後には明間出來るべしといふにより荷物を預けて宿を出でオレンジ街のカンバーランドに午餐　それより山川氏の寓にいたる　唐澤、栗山諸氏あり一同散歩してウエブスターの舊宅を見其の墓を弔ひエール大學の校庭を歩し圖書館を一覽して歸る　エール大學は山川總長、田尻稻次郎子、中島力造氏等の母校なり

十一月二十七日　快晴　朝エール大學圖書館にいたり朝河氏を訪ひ圖書館を一覽す　日本書は同氏の蒐集せるものにて可なりあり　それより教授クセス氏を訪ひ中島氏の紹介狀を出し明日聽講すべき教授の紹介狀數通を得運動館にいたる　水泳場ひろし　トロフイーの室に常陸山の化粧廻しあり　去つてグラヂユエート、クラブにゆき朝河氏午餐の饗にあふ　大島氏も同席　それより大島氏と共にラツド博士を訪ふ　博士不在　夫人茶を饗せらる　少時ありて博士歸宅　談話一時間餘の後ギン書店への紹介狀を得歸途大島氏の寓に立寄り晚大學食堂に晚食食堂約一千人を容るべし　食品も頗る可なり　一大オルガンあり

十一月二十八日　快晴　エール大學にゆきクツク氏の教場を參觀す　十時半より十一時半オールド、イングリツシ練習なり　それより書肆にゆきエール出版物二冊を購ひ十二時よりネツトルトン氏のラムの講義を聽く　卒業前の學生也といふ　教授法高等學校程度なり　エルム街の一旗亭に午餐　二時歸宿　直ちに汽車にてニユーヨークへ歸る　大島、山川、栗山諸氏送つて停車場にいたる　歸宿すれば池永、埼子、渡部、靑木、坂井、大川、芝野等の信あり　アプソルプに晚餐

十一月二十九日　午前晴　午後雨　八十六街に午餐　晚ウンテル、デン、リンデンに食事　八時より日本倶樂部に於て倶樂部ナイトの催あり　山本雄次の獨唱、アルベルスのピアノ彈奏及び委員總出の忠臣藏五段目等あり十一時半散會

十一月三十日　朝雨　午後霽　今日は感謝祭にて米國の國祭日なり　八田氏と高架にてサウス、フエリーにい

たり再びサブにてグランド、セントラルまで上り同所食堂にてサンクスギヴイングの午餐をしたゝめ第四十四街のリツトル、セアターにいたり浪費者といふパントマイムを見る　佛國俳優なり　女優最後にマルセーユを歌へり　夜ベルグ、フエルドに晩餐　歸途日本倶樂部に立寄る　來る七日日本會佐藤大使歡迎會に招待の案內狀來る

十二月一日　晴　八田氏來る　午後七十七街の博物館を覽る　自然物及び人類學的博物館なり　一千四百年を經過せる巨木の木目を示せるも面白し　動物類例によりてその棲所の有樣を加へたるはよし　地下室にメキシコの舊墟ミトラの模造建築あり休憩所たり　少憩して歸る　歸途書肆に立寄り古本二三册を購ふ　晚稻垣氏ボストンより歸りたりとて訪問　八田氏と三人にてアプソルプに晚餐　歸途稻垣氏寓に立寄りて明後日イサカ行の事を相談す

十二月二日　快晴　書肆に赴き古書をひやかし一二を購ひてかへる　午後カバン箱書出來たる故書物を詰込む　晚アプソルプに食事　歸途日本倶樂部にて新着の日本新聞を讀む　大森金五郞氏休職の記事あり

十二月三日　快晴　稻垣、八田二氏と午前九時十三分發の汽車にてフエリーよりイサカに向ふ　午後四時四十五分同處着　札幌大學の助敎授にて文部省留學生たる大井上氏其他木村、山下等諸氏の出迎を受けてイサカ、ホテルに投宿　斯波氏バツフアローより來りてこゝに在り

十二月四日　曇　微雨　朝八時半二臺の自動車に同乘して一行八名イサカより九哩なるフリーヴイルに向ふ　同處のレパブリツク、ジユニオルを見んが爲也　設立者ジヨーン氏折惡しく不在　夫人に面會す　諸處に小さき

建物ありて各一家をなす　全體の組織一共和國の觀をなし大統領あり副大統領あり法廷あり監獄あり印刷所ありパン製造所あり　十四歳より廿一歳までの兒童を市民と稱する也　今稍や衰へたるが如し　兒童の人數も多からざるが如し　監獄は鐵窓ありいかめしきもの也　寺院もあり說法は各派の人來るといふ　ジョーンは監督者として何事にも干渉せず父としてあがめらるといふ　十一時辭してコルネル大學にゆく　校庭廣く眺望佳なり　カユガ湖の遠望頗る美し　大學に附屬するにステートの農科大學を以てす　文科に關するものはアーツ、エンド、サイエンスの科あり　圖書館、博物館等を一見す　圖書館にはグリフイス氏の寄附したる日本の書籍あり　一旦宿にかへり午後二時總長レエルマン氏を訪ふ　かつてフイリツピン總督たりし人の由にて菊池男と同じくケンブリツヂに學びしことありといふ　談話少時　アーツ、エンド、サイエンス科の教場を視る　階下に希臘彫刻の摸品あり　大學の藏品としては完備せりといふべし　四時一旦歸宿少憩　五時イーバツフアロー街のグリフイス氏を訪ふ　喜び迎へて茶を饗し種々日本人の舊事を談ず　年七十三矍鑠驚くべし　夜七時日本人在留生の會合あり　臨席在留生は總計にて九人　内一人は正田といふ女子大學卒業生なりといふ　正田のみ缺席　他は皆來訪　十時五十分一同停車場にいたる　余等は新約克行のプルマンに搭ず　稻垣氏のみ獨り留れり　天霽れて月色玲瓏

十二月五日　曉起　七時汽車已にニューヨークに近し　急ぎ顏を洗ひて車を下る　停車場にて朝餐　フェリーを渡りLにて宿に歸る　午後渡英の件にて岡田氏を訪ふ　不在　斯波氏を訪ひ談話少頃　五時頃歸來途にて岡田氏に逢ひ其の寓にいたり茶菓の饗應にあづかる　岡田氏は二月頃渡英に決せりといふ　ウンテル、デン、リンデ

ンに晩餐

十二月六日　快晴　午後風強し　斯波氏、八田氏とともにLにてブロードウエー第九番の汽船會社にいたり正月六日出帆のセント、ルイス號にて渡英の事に決し切符を購ひまづ手附として二十五弗を拂ふ　それより郵船會社にいたり日本へ發送すべき荷物の事を龜井氏に相談し又三菱にて池永の事を依頼しギンベルにて新カバン一箇を購ふ　代價十九弗也　歸途書肆にてシエーキスピヤ全集其他を購ひて歸寓　晩斯波氏等と晩餐　夜稻垣、八田氏等來る　石橋倘寶及び内山壽升のはがきあり　石橋の詩に曰く

薄遊身老宦途中　林下甘成白頭翁　隴樹棧雲魂易斷　鳩車竹馬夢将空　誰歟處世希三樂　我未向人歎五窮

呼酒誦君賡和句　陶然一醉臥墻東

十二月七日　快晴　朝指物屋に行き日本へ送還すべき荷物の箱を誂へ散髪してかへる　午後稻垣氏來り十二日以後余が宿に轉ずべきことを約す　晩コロンビヤ大學の富桝氏來る　六時よりジヤパン、ソサイテーの佐藤大使歡迎會にホテル、アストルに臨む　會長ロツセル氏についでラツトガー、カレーヂの校長デマレスト氏、パンアメリカン、ユニオンのバレツト氏等の演説　最後に佐藤大使の答辭あり　司會者はトムソン氏なり　會者五百餘名　十時より舞蹈にうつり盛會なり　十一時歸寓

十二月八日　曇　夜月明　朝八田、稻垣二氏とメーシーに至り種々買物をなす　後附近の街を歩して歸る　夜斯波氏等と九十六街のチヨツプ、スイに晩餐

十二月九日 雨 アプソルプに午餐 午後指物師箱を拵へて持歸る よりて日本へ送るべき荷物二個を作る 戲に石橋氏の詩に次韻して贈る

議堂閑坐雪隱中 自嗤他呼做老翁 三月延髯塵垢滿 半歳廢酒元氣空 人情時或障肝癪 旅費唯僅免困窮 遮莫鵬程六萬里 夢魂夜々飛日東

長谷川に信し荷物の事を依頼す

十二月十日 快晴 グランド、セントラルにいたり時間表を得午餐してかへる 午後八田氏來る ともに八十六街に晩餐 歸途日本倶樂部に立寄る 長沼氏、澁谷氏及び海軍の與倉中佐と談ず 八田氏ウイスキーを饗す 久しぶりにて杯を傾く

十二月十一日 朝晴 午後雪 ニユーヨークは雨なりしが如し 午前九時半の汽車にてグランド、セントラルよりポキプシーにゆく 十一時四十分着 市街を歩して一旗亭に午餐 電車にてウアツサー、カレーヂにゆきミス、フアルネスを訪ふ 同人の紹介にて種々の人に逢ひ同人及び助手の案内にてまづ本館の食堂より圖書館、美術館、寺院を見る 飛雪紛々として來る 物理實驗室、植物學教室、化學實驗室等を歴覽す 化學室最も大なり 天文學教室の望遠鏡も頗る大なり こゝにて少憩 茶菓を饗せられヒル氏と談話 それより廣き校庭を經て寄宿舍を見る 設備よし 娯樂館には劇場もあり この學校は大山夫人、瓜生夫人等の出身母校なりといふ 今日大山公薨去の報あり フアルネス孃もその事を語れり 五時辭して停車場にいたり五時二十六分發車 車中にて晩

餐　七時二十分歸る　かう子及び坂本よりの書あり　布哇讀本稿本落手の由諸井總領事より申來る

十二月十二日　雨　朝九時半宿を出でゝグランド、セントラルよりボストンに向ふ　八田、稻垣二氏送らる　十時三分發車　汽車中にて赤須といふ男に逢ふ　勞働して生活すること已に十五年なりと語る　細雨霏々車窓を撲ちてやまず　ボストンに近づく頃雪となる　南停車場に着せるは四時十分　直ちにエセツクス、ホテルに投ず　室は五百二十七號也　近衛を歩し晩餐

十二月十三日　快晴　宿を出でサブにてケンブリツヂのハーヴアード、スクエアーに行き大學本部にいたる　總長外出の由にて書記のハンネウエル氏に逢ひ來意を語り同氏の案內にてコロニアル、クラブに行き二週間滯在の事とす　それよりワイドナー圖書館にいたり館長クーリツヂ氏に面會　適々古辭書の展覽會あり　尙大學の建物を見て歸途中川氏を訪はんとす　途にて工科大學の淸水氏に逢ひ同氏とともに中川氏を訪ふ　不在　名刺を殘して歸宿　午餐後宿を引拂ひ自動車にてコロニアル、クラブに移る　四時頃中川氏來り談ず　昨日の夕刊にて獨帝講和を宣告せる由の記事を見る　今日の新聞論評盛なり

十二月十四日　快晴　朝地圖を手にして市中の概觀をなす　ロングフエローの家、ワシントンエルムよりコンモンスを經て神學路近邊を逍遙す　市街屈曲して分りにくき所多けれども趣味に富めり　樹木多きもよし　惜むらくは嚴冬落葉の候なることを　夏蔭、秋葉大に見るべきものあらん　午後中川氏來る　ともに電車にてボストンにゆきハンチング、アヴエニユーの美術博物館にいたる　こゝに平野女史、富田氏、木下氏等日本部に勤務せ

り　岡倉覺三氏の久しく居りし處にて日本美術品の蒐集に於ては日本以外世界一と稱す　日本になき珍品も不尠ことに日本の障子を廊下に張りつめ日本の座敷又は寺院の建築に造りたる陳列場は日本にも無し　平野女史と語り居る中ミス、サウヤーといふ女尋ね來り少頃去る　日本浮世繪の陳列最中なりしかばざつと一覽しロッヂ氏等と茶菓を喫し五時閉館後辭しかへる　只誠藏の芝居本多かりしも一興なり　岡倉氏の像前に花を供へ茶を薦めたるも日本人の志なるべし

十二月十五日　雪　圖書館にゆきクーリッヂ教授に面會　大典記念卷物を同圖書館に寄附す　同氏の案内によりブリッグス氏余を導いて圖書館の各室書庫等を一覽せしむ　事務室にハンネウエル氏を訪ふ　不在　午後二時半よりホルムス教授の教育學の教場にいたる　文法價値論の講義最中なりしかば一時間聽講　それより同氏の教室にいたり又教科書陳列室にいたりて種々の教科書を閲覽す　飛雪紛々やまず　歸途積雪膝に到る　夜文部省留學生高柳（大學）、高垣（高商）、及び移川三氏來談

十二月十六日　晴　ローレンスホールに行き教育研究室に入りて教科書を調査す　午餐後コオペレーションの店にいたりてキットレッヂ氏のシエーキスピヤを購ふ　歸寓後國枝元治氏來訪　ついで八田氏、中川氏、中山氏來る　八田氏はニューヘーブンより着せる也　國枝氏に晩餐を饗す　同氏談話十時去る　今日ミュンステルベルヒ死亡せりと聞く

十二月十七日　快晴　午後中川、八田二氏とともにサブにてパークストリートにいたりコンモンス及びパブリ

ツクガーデンを横ぎり公立圖書館を觀る　壁畫など例の如し　日曜日なれども來觀者堂に滿てり　それより基督サイエンスの本山を觀再び美術館にいたり埃及西洋等の部を觀る　四時同館を辭しウスター街の富士館といふ日本茶亭にゆき鯛のうしほ牛肉鍋を食ふ　日本商人若林氏夫妻に逢ふ　歩してトレメント街にいたりサブにて歸寓

十二月十八日　快晴　朝ブリッグス敎授を訪ひヒル氏の事を聽く　同氏に日本の繪畫を贈る　午八田氏來り食卓を共にす　午後ボストンにゆきギン商會にいたり文部省へ送るべき敎科書數十部を註文す　それより市街を歩し歸途八田氏寓に立寄る　生源寺、高木氏等に逢ふ　ともにカフヱ、テリヤに晩餐　諸氏クラブに來り談ず

十二月十九日　晴　朝ホルムス敎授の室にいたり米國敎育界に關する質問を試む　それよりラドクリフ女子大學を觀る　同學校はハーヴアード大學敎授の授業する所也　十二時歸寓　午餐の後カッスル、スクエアーのアブラハム、リンカーン小學校を參觀す　校長ランソム快潤なる老人なり　佛語敎授頗る可なり　四時歸寓　晩ハーヴアード、スクエアー近傍まで散歩　今日布哇讀本稿本到着す

十二月二十日　快晴　大學にゆきネルソン敎授のロマンチツク、ポヱツの講義を聽く　午後布哇讀本第五巻前半訂正了　晩八田氏來る　ついで移川、高島等來談　十時半去る　日本諸友へ年始狀約百五十通を投函す

十二月二十一日　曇　午後微雨　高橋、大島の信あり　朝大學にゆきベーカーの英戲曲の講義を聽く　マールの評論なり　午後讀本五年後半期訂正　晩學長ブリッグ氏來訪

十二月二十二日　終日微雨　夜霽　風大に起る　讀本第六の上半を訂正す　午後八田氏來る　福井人にて今ウ

スターにある横川氏亦來訪　晩富士館にて日本留學生の會あり招かれて行く　來會者二十餘人　幹事座席なき有樣也　談話十時半歸寓

十二月二十三日　快晴　讀本第六巻を訂正す　午後中川氏を訪ふ　夏目漱石の訃を聞く　悼むべし　夜八田氏來る　クーリツヂに記念品をおくる

十二月二十四日　快晴　新聞室にてラインハルトに逢ふ　姉崎の聽講者たりし由　讀本の原稿數章を草す　夜生源寺、田中二氏、八田氏と來りてクリスマス、イヴの市中の景況を見んといふ　よつて同行してパーク街にいたりジヤパニーズ、ガーデンといふ料理店にいたりそれより公園内のクリスマス、ツリーを見又一カフエに立寄り十時半歸寓

十二月二十五日　晴　今日クリスマスにてクラブの午餐晩餐にタ－キーあり　午後二時秦氏來る　ともにミユーゼアム、ロード第十番の石川春水氏宅にいたる　日本留學生等多數來會　日本食の饗應ありたる後各自の藝盡し等あり　夕景辭しかへる

十二月二十六日　晴　八田、移川、中川等來る　午後八田氏とホルムス助教授をヒルサイド、アヴエニユーに訪ひ電車にて美術館にいたり富田、平野氏に逢ひ日本美術品を觀る　光琳、雪舟の屛風をはじめ唐宋の名畫約五千點ありといふ　尙漆器、陶器等の庫を一覽晩景辭し去る　夜秦氏來る　西崎氏の饗應によりてフラー街の（原文缺字）氏の處にいたる　平岡、橋本、笹川、古川夫婦等あり　十一時散會

十二月二十七日　雨　午前十時南ステーションより急行汽車にてニューヨークへ歸る　中川、中西、中山、生源寺、移川、平岡、秦氏等停車場に送らる　四時過着　晩ウンテル、デン、リンデンに食事　井上匡四郎氏來米小會ありとの事にて百二十三街の若松にいたる　福田中將、岡田、斯波、山川、本多氏等あり　雜談夜十一時にいたる

十二月二十八日　晴　午前尙讀本を訂正す　午後領事館にいたり旅行劵の裏書を求めそれより英領事館に行く時刻遲しとの事故再び領事館に引きかへし同館より直接英領事の裏書を乞ふことに依賴し歸途圖書館に立寄りセシルローヅの事を研究　晩四十街の希臘料理店に食事　夜日本倶樂部に行きて談ず

十二月二十九日　快晴　午前讀本を訂正し校了　午後第八十三街の郵便局に行き投函　靑木の信あり　島津「東亞之光」を送り來る

十二月三十日　快晴　朝第二十六街第五大路のベーカー及びテーラー書店にゆき Hongh に逢ひ文部省へ送本の事を談ず　それより步して中央停車場にいたり午餐　東第五十九街の片桐商店に立寄街鐵にて歸寓　夜アプソルプに食事

十二月三十一日　快晴　文部省、西河等に信す　午後八田氏と田代をマルセーユ、ホテルに訪ふ　不在　斯波氏に逢ひともに岡田若夫婦の病氣を見舞ふ　晚日本倶樂部の除夜會に臨む　蕎麥あり　多くの知友に會す　十一時歸寓

外遊日誌（大正六年）

一月一日　微雪　領事館にゆき新年拜賀　御眞影の前に祝酒を擧ぐ　歸途四十二街の活動寫眞を見午後二時より日本倶樂部新年會に臨む　會者約百人

一月二日　曇　家信あり　布哇寺田氏より歲事記を送り來る　諸友に信す　九十六街に午餐　領事館より旅券裏書を送り來る　八田氏より煙草入寄贈せらる

一月三日　雨　Apthorp に午餐　斯波、八田二氏と家永氏の饗應にて Brooklyn の同氏宅にゆく　New York Shimpo へ寄書　水谷氏の依賴に應ずる也

一月四日　晴　日本より諸友の信あり　百十二街の郵便局にいたり日記其の他を日本へ投函す　富桝氏來るともに Columbia 大學にゆき B. Mathews, Thorndike の教授を見る　一旦歸宿晚餐後再び同大學にいたり同氏の日本語の級を見る　二時間也　歸途富桝氏來り談じ十二時にいたる

一月五日　雨　岡田氏一族告別の意にて來訪　八田氏と Equitable にゆき郵船會社に荷物賃を拂ひ三菱會社、領事館其の他に謝辭をのべ Canadian Bank に英貨を得て歸る

一月六日　快晴　十一時セント、ルイスに乘込む　船明朝まで出發延引の由なるを以て Guin & Bros. を訪ひ又 Macy, Gimbel にゆき movies を見、名刺を印刷せしめ八時船に歸る

一月七日　晴　七時半出帆　室の番號一一八　日本人は斯波、八田二氏の外新井、伊藤二氏あり　月光よし

一月八日　晴　470 miles Lat. 41° 04′ Lon. 63° 39′

一月九日　曇　410 miles N 42° 21′ W 54° 32′ 感冒の氣味にて早寢

一月十日　晴　408 miles N 44° 44′ W 45° 56′

一月十一日　曇　418 miles N 47° 21′ W 36° 38′ 暖なり　霧多し　汽笛を吹く

一月十二日　晴　421 miles N 49° 39′ W 29° 37′

一月十三日　曇　小雨　417 miles N 50° 49′ W 15° 54′ 海荒し

一月十四日　霰降る　正午　58° 2′ 14° 70′ 夜八時頃 Liverpool に着碇泊

一月十五日　雪　後霽　朝旅客の檢査あり　十一時半上陸　午後十二時半の汽車にて London Euston 停車場に入る　山羽、高橋二氏迎へらる　taxi にて Royal Palace Hotel に入る

一月十六日　曇　taxi にて Paddington 近傍の警察署にゆき來着を屆出づ　それより bus にて Oxford Circus にいたり日本俱樂部に午餐　tube にて領事館にゆき山崎氏に面會　三井、高田等にゆく

一月十七日　大使館にゆき珍田大使、本多參事官等に面會　Oxford St. に午餐　一寫眞店にて撮影　正金銀

行にゆき金を受取り custom house にいたる

一月十八日 曇 寫眞を受取り police station にいたる 晩南條氏の饗により Hampstead の同氏宅へ赴く

一月十九日 曇 George St. の洋服屋、Oxford St. の帽子屋より Slater に午餐して銀行へゆき三菱會社へ立寄る

一月二十日 霧多し South Kensington Museum にゆき Westminster Abbey を見日本倶樂部にいたる 益田、二見、河瀬氏等天洋丸同乘者の饗應にあづかる也

一月二十一日 曇 South Kensington Museum を見る Imperial Hotel に午餐

一月二十二日 曇 National Gallery を見る 半ば閉鎖したり それより Strand を歩し St. Paul's Cathedral にいたり夜大使館の晩餐の招待に赴く 船越少將等に逢ふ

一月二十三日 曇 Leicester Sq. の Macmillan 書肆にいたり又 post office にゆく 近傍の旗亭に晩餐

一月二十四日 曇 大使館にゆき謝禮 それより British Museum にゆく 晩 Monico に午餐 八田氏同行

一月二十五日 British Museum の圖書館にゆき Morice 書肆にて日本に關する書數部を購ふ £ 4.6

一月二十六日 High St. Kensington の buffet に午餐 Whiteley に買物をなす

一月二十七日 近傍に午餐 歩して日本人會にいたり Polytechnic の tank の活動寫眞を見る

一月二十八日 曇 High St. の buffet に午餐 晩高橋氏來る

一月二十九日 曇 Bank にゆき金を受取り Palmerston に午餐 晩菊池氏の饗によりて同氏の寓にいたる

一月三十日 曇 斯波氏と佛國領事館にゆき證明を求む

二月一日 曇 今日より獨艇跋扈の宣言あるを以て佛國行を中止し午後 Brooklyn Hotel に引移る 室一〇斯波氏同宿也 八田氏は Hampstead に引越す

二月二日 曇 Paddington にゆき證明を得大使館にゆき本多氏と談ず Oxford St. の Slater に午餐 不在中八田氏來る

二月三日 霧 曇 後晴 午後斯波、八田二氏と Kew Garden に遊ぶ 園內廣濶溫室の花美し 歸途 Oxford Circus まで tube 日本人會にゆく 池永明日の船にて來着の報を聞く

二月四日 雪 八田氏來る ともに午餐 午後池永を迎へんが爲 Euston 停車場にいたる 今日船未着の由にて空しく歸寓 歸途 High Street の buffet に晩餐

二月五日 雪 後霽 斯波氏と郵船會社にゆき Philadelphia の着否を糺す 今朝着の由 Holborn Restaurant に午餐歸寓 午後寺西氏より今夜着の報あり 八田氏來る ともに Euston St. にいたる 九時四十分池永到着珍らしく月明あり

二月六日 晴 Swiss Cottage に池永を訪ひともに Bank まで行き郵船會社にいたる Simpson に午餐 London Bridge 附近を步し St. Paul's Cathedral にゆき再び郵船にいたり Monument より歸寓 領事館よ

り紀元節賀宴の招待狀來る

二月七日 晴 午前 Westminster にゆく 今日英國議會開院式なり 近傍の一旗亭に午餐 夜斯波氏と日本人會へ行く 池永在り

二月八日 晴 Criterion に午餐 斯波氏ニューカッスルに旅行 午前 Leicester Sq. より King's Cross にゆき午後斯波氏の荷物を屆ける爲再び行く

二月九日 晴 八田氏來る ついで池永、針澤氏と來る ともに Charing Cross にいたり Piccadilly の Corner House に午餐 Globe の matinee を見る 夜喫煙室にて西人等にカキモチを饗す

二月十日 曇 Piccadilly にゆき午餐 臺灣喫茶店に立寄り歸寓 夜八田氏來る 文部省讀本を訂正して夜半にいたる かう子に信す

ろんどんを霧たちこめぬ日はあれど子等をおもふのやむ時はなし

二月十一日 曇 紀元節祝日也 生稻に八田氏と午餐 夜七時半よりトロカデロの紀元節祝賀會に臨席 澤田書記官送りて寓にいたる

二月十二日 曇 午後 Piccadilly にゆき James Park より Buckingham 王宮附近を歩し Victoria Station より歸る

二月十三日 晴 十一時 British Museum にいたり Waler 氏に逢ふ 尙管子を借覽して讀み歸途 Hampstead

の八田氏を訪ひ池永の寓にいたる　B & K Restaurant に晩餐　渡邊氏、飯田（大佐）氏等來宿

二月十四日　晴　大使館にゆく　本多氏の饗によりて日本人會にいたる　平野氏等と談話歸寓　午前 Grafton Galleries の Shakespean Exhibition を見る　十七日の案内狀を出す

二月十五日　曇　Porter の日本歷史を讀み文部省讀本を訂正　斯波氏 New Castle より歸寓　Victoria 近傍を歩して午餐　午後池永來る

二月十六日　八田氏來る　ともに Westminster にいたり書肆 King にいたり數部を購ひ Strand を歩し Philips にて地圖等を購ひて歸る　Victoria Mansion House に午餐

二月十七日　曇　池永のため三菱社員及び友人等其他斯波、八田兩氏を生稻に饗す　主客十七人也　夜十一時半歸寓

　　日の本をおもひこそやれ梅さきて鶯の聲しきる此の頃

二月十八日　曇　八田氏來る　ついで森田氏も來る　ともに日本倶樂部にゆき晩餐　文部省讀本を訂正す

二月十九日　曇　Porter の日本歷史を一讀　午後 Bank にゆき金を受取り日本倶樂部にゆき晩餐　斯波氏等と Philharmony に Scott 南極探險の寫眞を見る　Porting 說明　夜十一時半歸寓

二月二十日　雨　池永來る　ともに Bond St. にゆき撮影 Oxford St. を歩して Park St. に午餐　大使館にゆく　本多氏より Porter の日本歷史原稿を受取る　讀本原稿を外交文書として發送の件依賴す

二月二十一日 曇 斯波氏旅程に上る B & K に午餐 午後梅谷氏及び八田氏來る 晩も B & K に晩餐 森氏來談 Porter の日本歴史訂正

二月二十二日 曇 三菱社員一同よりの招待狀來る 午前書肆 Macmillan & Co. にゆく 歸途 Hippodrom Zigzag を見る 七時 Piccadilly の探花樓にて三菱社員の饗應にあづかる 十時歸寓

二月二十三日 八田氏來る Charing Cross にゆき Temple まで步し國王及皇后の Finsbury Circus へ行幸啓の鹵簿を見る 今日 Oriental School の開校式の爲也 探花樓に午餐 日本倶樂部にゆく 加藤氏在り ともに Hanover Sq. 20 の日本人會にゆき圖書を見、夜森氏とともに歸寓

二月二十四日 曇 朝磯田氏來る ともに日本倶樂部にゆき午餐す 大使館より Porter の續稿を受領す 日本よりの書信久しぶりにて來る 西河氏の賀狀なり アメリカ經由なるべし 夜斯波氏歸る

二月二十五日 曇 斯波氏再び出發 朝池永來る 午後澤田書記官及び八田氏來る 夜山下氏等と Piccadilly に晩餐

二月二十六日 快晴 石橋及び佐々の書狀到る Leicester Sq. の Macmillan にいたり書物を誂へ Piccadilly に午餐 午後再び行く Cupid の Kinema を見る

二月二十七日 晴 Porter 怪我したりとて今日の會食を斷り來れる旨本多氏より通知あり Piccadilly の Criterion に午餐 Macmillan に行く 夜八田氏來る 石原の書至る 池永旅程に上る

二月二十八日　晴　家信あり　Piccadilly より歩して日本倶樂部にゆく　平野氏の饗にあづかる也　晩餐も同處にて喫し夜十時頃歸宿　兒玉氏等に逢ふ

三月一日　曇　入浴　Temple までゆき　Paternsster Rd. にゆく　教科書を購ふ爲也　Slater に午餐　South Kensington にゆき Lamlay & Co. に書物を誂ふ　寫眞の proof 來る　Porter 死去の由可悼　Macmillan より書物到着

三月二日　晴　Macmillan にゆき書籍代金 6/3/5 を拂ふ　それより Piccadilly に午餐 (Criterion)

三月三日　晴　Holborn にいたり Chambers を訪ふ　一以太利料理店に午餐　歩して Strand にゆき Hachette 書肆にいたる

三月四日　八田氏來る　Dover St. にゆき London Museum を見んとす　無し　Hachette に午餐　日本人會へゆく　夜 Piccadilly に食事歸寓

三月五日　雨　日本魂論を草す　午 South Kensington の Imperial Hotel に食事再び Lamlay & Co. にゆく

三月六日　曇　日本魂論を草す　B & K に午餐

三月七日　晴　風あり　Piccadilly の支那料理店に午餐　八田氏とともに議會にゆく　滿員にて入場不可能也　movies を見、生稻にゆく　八田氏の饗應也　Twentyman 及び Allen 二氏に逢ふ

三月八日 晴 寒し 日本魂論草稿を作る B & K に午餐 夜大使館の晩餐に赴く 海軍の人多し 歸途月明あり 昨夜斯波氏歸る

三月九日 晴 午後 Japan Society にゆき日本に關する書籍を見二三部を借りて歸る

三月十日 曇 Piccadilly に午餐 夜日本倶樂部の陸軍記念日に赴く 會者六十餘人 大使も來る 福引あり 女の帽子を得たり

三月十一日 雨 八田氏來る 斯波氏の部屋にて大内氏等と談ず 斯波氏は九時グラスゴーへ出發 晩八田氏と High St. に夕食

三月十二日 雨 小雪 South Kensington の Lamlay & Company にゆき書物代金 3.5.6 を支拂ふ Imperial Hotel に午餐

三月十三日 雨 Oxford Press にゆき一二の書を購ひ Charles Taylor に立寄る Lamlay より書物來る 池永との寫眞出來 日本魂論脫稿 夜二見領事來訪 友田の信あり 山口小太郎氏の訃を聞く

三月十四日 曇 眞吾のはがき來る Piccadilly の支那料理店に八田氏と逢ひ日本魂論を同氏の英語教師に一閲せしむ それより Japan Society にゆき書籍を返却して歸る

三月十五日 曇 伊藤氏來る Holborn へゆき歩して Leicester Sq. にいたり Thomas Cook にゆき汽船の事を問ひ Strand を歩して日本人會へゆく Army & Navy Store にて書物入箱二箇を購ふ

三月十六日　曇　Bank にゆき金を受取り Char. Taylor に立寄り種々の書物を註文 Slater に午餐　夜 Piccadilly の Criterion に食事　ロシヤ革命の報あり

三月十七日　快晴　Hampstead にゆき八田氏の英語教師 Earle 氏に日本魂論の訂正を乞ひそれより八田氏と同道 Regent Park の zoological gardens に遊びトツテナムコートに午餐　日本人會にゆく　加藤氏にあひ同じく日本魂論に就きて同氏の訂正を求む　Char. Taylor より書物到着

三月十八日　快晴　Hyde Park を歩す　流石に春めきて散歩者多し　Victoria に午餐

三月十九日　晴　Criterion に午餐　大使館にゆき澤田氏に逢ひ日本魂論の typing を依賴し Porter の日本歴史を戻し日本人會にゆき十一時頃歸寓　文部省より何時にても歸朝すべしとの電報あり

三月二十日　驟雨時々　Char. Taylor にゆき書籍代金 6.10.10 を拂ふ　Hampstead に八田氏を訪ふ　不在日本人會にゆく　夜十時半歸寓　かう子及び渡部氏に信す　Piccadilly に午餐

三月二十一日　晴曇不定　霰あり　Mark Lane にゆき London Tower を見る　英國の歴史を想起せしむ斬首臺、牢獄、殘酷おもふに堪へたり　古代甲冑の蒐集多し　Great Tower St. に午餐歸寓　斯波氏歸る

三月二十二日　晴　午雪ふる　八田氏來る　ともに Navy にいたる　船越少將に面會　特別船に搭乘の便宜あるべしと聞く　喜甚だし　Scott に午餐　近傍を歩して歸寓　夜日本人會にゆく　池永より明日歸倫すべしとの報あり

三月二十三日 晴 雪ふる 午後三時頃池永着 少時談話の後日本人會にゆく 稲垣少將と歸朝の事を約す

三月二十四日 快晴 大使館にゆき本多、澤田、渡邊氏等に面會 澤田氏より typewriter にうつしたる日本魂論を受取る 一時 Piccadilly に武藤氏及池永と午餐 池永と八田氏を訪ふ 不在 夜斯波、池永と B & K に食事

三月二十五日 晴 池永マンチェスターに向つて去る 午後八田氏來る 斯波氏の佛國行を見送りて Waterloo St. にいたり歸途 Charing Cross に食事歸寓 The Illustrious Prince を讀む

三月二十六日 晴 雪霰時々來る 午後八田氏を Hamstead に訪ふ Baedeker を借る爲也 Regent St. の中國樓に晩餐

三月二十七日 風寒し 十二時ウインゾルに行きイートン College を巡覧し後ウインゾル城の外部を観覧し Park にいたる 景致よろし 文部省より讀本三、四の原稿到着 青木、西河の書到る

三月二十八日 晴 銀行にゆき金を受取り Finsbury Circus を歩し日本人會にゆき四時半より Japan Society にて日本魂論を讀む 聽衆約百名 種々の人にあふ それより再び日本人會にゆき晩餐 夜山下の室に談ず かう子の書到る

三月二十九日 晴 Dover St. より Japan Society にゆき入會金を支拂ひ書籍を返し Oxford St. の Flunings に午餐 Times 社の賣店にゆき書籍を購ふ 杉浦の書いたる 杉浦に返柬 夜高田商會の（原文缺字）氏來談

三月三十日　快晴　Glocester Rd. に稲垣少將訪問　それより Chambers にゆき書物を誂へ Paddington police station にゆき明日エヂンバラへゆく旨屆け Russel Square にて切符を買求めて歸る　Twentyman より諸處への紹介狀來る

三月三十一日　雪　朝 King's Cross より急行列車にて Edinburgh に向ふ　York, New Castle 等を通りて夜七時半着 Station Hotel に投宿

　榮えゆく家のしるしと君が門神さびたてる二本の杉（杉浦父母の祝賀の爲也）

四月一日　快晴　警察にいたり屆出で Princess St. より Glory St. 等を歩し歸宿　午餐の後 Calton Hill より Holyrood Palace を見る　感慨多し　子供等にゑはがきを認む

四月二日　晴　風寒し　午前 Castle を見物　大學に至り總長 Ewing 氏に面會　ついで Grierson 教授を訪ひ談ずること一時間ばかり　午後再び大學にゆき圖書館を見る　古文書等多し　Thin 書肆にいたり書物數部を購ふ　£2.6　夜雪ふる

四月三日　雪　雪を冒して汽車 Glasgow にいたり大學を見公園を歩して Cathedral にいたり St. Vincent St. の書肆に立寄り四時の汽車にて Edinburgh に歸り N. B. Station Hotel に晩餐　夜十時の寢臺列車にて歸倫

四月四日　晴　八田氏來る　B & K に午餐　汽車にて Richmond Park にゆく　Putney までバス　それより再びバスにて日本人會へゆく

三月二十三日 晴 雪ふる 午後三時頃池永着 少時談話の後日本人會にゆく 稻垣少將と歸朝の事を約す

三月二十四日 快晴 大使館にゆき本多、澤田、渡邊氏等に面會 澤田氏より typewriter にうつしたる日本魂論を受取る 一時 Piccadilly に武藤氏及池永と午餐 池永と八田氏を訪ふ 不在 夜斯波、池永と B & K に食事

三月二十五日 晴 池永マンチエスターに向つて去る 午後八田氏來る 斯波氏の佛國行を見送りて Waterloo St. にいたり歸途 Charing Cross に食事歸寓 The Illustrious Prince を讀む

三月二十六日 晴 雪霰時々來る 午後八田氏を Hamstead に訪ふ Baedeker を借る爲也 Regent St. の中國樓に晩餐

三月二十七日 風寒し 十二時ウインゾルに行きイートン College を巡覽し後ウインゾル城の外部を觀覽し Park にいたる 景致よろし 文部省より讀本三、四の原稿到着 青木、西河の書到る

三月二十八日 晴 銀行にゆき金を受取り Finsbury Circus を歩し日本人會にゆき四時半より Japan Society にて日本魂論を讀む 聽衆約百名 種々の人にあふ それより再び日本人會にゆき晩餐 夜山下の室に談ず かう子の書到る

三月二十九日 晴 Dover St. より Japan Society にゆき入會金を支拂ひ書籍を返し Oxford St. の Flumming に午餐 Times 社の賣店にゆき書籍を購ふ 杉浦の書いたる 杉浦に返束 夜高田商會の（原文缺字）氏來談

三月三十日　快晴　Glocester Rd. に稲垣少將訪問　それより Chambers にゆき書物を誂へ Paddington police station にゆき明日エヂンバラへゆく旨屆け Russel Square にて切符を買求めて歸る　Twentyman より諸處への紹介狀來る

三月三十一日　雪　朝 King's Cross より急行列車にて Edinburgh に向ふ　York, New Castle 等を通りて夜七時半着 Station Hotel に投宿

　榮えゆく家のしるしと君が門神さびたてる二本の杉（杉浦父母の祝賀の爲也）

四月一日　快晴　警察にいたり屆出で Princess St. より Glory St. 等を歩し歸宿　午餐の後 Calton Hill より Holyrood Palace を見る　感慨多し　子供等にゑはがきを認む

四月二日　晴　風寒し　午前 Castle を見物　大學に至り總長 Ewing 氏に面會　ついで Grierson 教授を訪ひ談ずること一時間ばかり　午後再び大學にゆき圖書館を見る　古文書等多し　Thin 書肆にいたり書物數部を購ふ　£2.6　夜雪ふる

四月三日　雪　雪を冒して汽車 Glasgow にいたり大學を見公園を歩して Cathedral にいたり St. Vincent St. の書肆に立寄り四時の汽車にて Edinburgh に歸り N. B. Station Hotel に晩餐　夜十時の寢臺列車にて歸倫

四月四日　晴　八田氏來る　B & K に午餐　汽車にて Richmond Park にゆく　Putney までバス　それより再びバスにて日本人會へゆく

四月五日 晴 Leicester Square にゆき書肆をひやかし數部を購ふ 加藤氏に逢ひ Piccadilly にて午餐 再び書肆にいたり歸寓 長谷川、芝野の信あり 森氏來り談ず

四月六日 晴 朝入浴 製鐵所參事小川藏次郎氏來る 夜日本人會へゆく Crewdson より十日に招待したき旨申來る Chambers より書物着

四月七日 晴 森氏等同宿の人六名及び澁谷氏米國船にて出發 送りて Euston St. にゆき Bank にゆく 休業なるを以て空しく歸宿 午後一時加藤氏の饗によりて National Liberal Club にいたる

陽炎や千尺高き記念塔（Edinburgh）

四月八日 曇 近傍を歩し午後日本人會にいたる 三好氏の饗によりて都亭にいたり鰻を食ふ

四月九日 晴 霰時々來る 八田氏來る ともに Victoria St. にいたり Charing Cross を歩し日本人會にいたる 三好、井上氏と Piccadilly に晩餐 植村少佐と出發の事を相談す

四月十日 晴 霰 植村少佐と Royal Palace Hotel に稻垣少將を訪ひ Bank にゆき領事館に旅券の裏書を求め郵船會社に荷物の事を問ひ露國領事館にゆき Harro St. に土產物を整ふ Horse Shoe Restaurant に午餐

四月十一日 晴雨不定 Crewdson の饗應によりて Oriental Club（Hanover Sq.）にゆき歸途買物をなしトランク一箇を購ひて歸る 晩 Piccadilly に食事

四月十二日 晴 Stratford に行かんとして Paddington にいたる 八田氏來らず よりて八田氏の寓にゆく

不在　行違になりしなり　それより Strand に出で買物をなし Lyon に午餐歸寓　Earle より詩集を贈らる　池永來る　晩七時半より日本人會委員會にて晩餐を饗せられ八時半より昔噺について講演　十時半歸寓

四月十三日　晴　九時 police station にゆき Oxford 行を屆出 Paddington より Stratford-on-Avon にゆき Shakespeare Hotel に午餐　諸處を見物　Shakespeare House にいたり二時廿五分の汽車にて晩景 Oxford 着 Randolph Hotel に投ず

四月十四日　午前晴　午後雨　雨を冒して諸處の College を見 Magdalen の Warren 氏を訪ひ University 及び University Gallery を見物し四時十五分の汽車にて歸倫　Piccadilly に晩食してかへる

四月十五日　快晴　生稻にゆき八田氏と午餐を倶にす　午後四時池永來る　ともに Victoria St. 前の Italian Restaurant に晩食　それより日本人會にゆく

四月十六日　晴雨不定　市川氏來り knife を持來る　South K. に菊池氏を見舞ひ三菱社にいたり龜山氏に面會　三時半 Oriental School, London Institute を訪ひ歸寓　晩加藤氏と Piccadilly に食事

四月十七日　晴　八田氏來る　ともに City にゆき三井へ暇乞にゆき Palmerston に午餐　日本人會へゆき Selfridge へゆき買物をなし再び日本人會にゆく　大内氏に面會す　此日 Meatless Day

四月十八日　雨　小川氏來る Criterion に午餐　A little of bluff を見る　夕方今村氏、辻氏來る　夜小學讀本を訂正す　家信あり　穗積平壤へ赴任の由申來る

四月十九日 曇 Cambridge へ赴かんとして Liverpool St. にいたる 時間後れて間に合はず歸宿す 午後荷物を整理 晩日本人會にゆき諸氏に別を告ぐ

四月二十日 晴 Hampstead に八田氏を訪ふ 梅谷氏在り Liverpool St. にゆき Bank にて金を引出し Palmerston に午餐 日本人會にゆき三好、八田二氏と Piccadilly に食事 大使館及び船越氏を訪ひて暇乞す

四月二十一日 晴 八田氏來る South Kensington に午餐 午後五時 Paddington police station にゆき六時日本人會にいたり一行と晩餐を倶にし九時 St. Pancras より汽車に搭ず 稻垣、植村、小川、江口、水野諸氏なり

四月二十二日 晴 朝 Dundee, Montrose を過ぎて十二時二十分 Aberdeen 着 Palace Hotel に午餐 歩して Vulture 號に乘込む 船床二一號 同室小川氏 船中各國の人あり露西亞捕虜の脫走者多し

四月二十三日 曇 五時半出帆 海上風波穩なり 驅逐艦二隻左右を護りて進む 快甚だし 午後八時半頃獨逸潛航艇あらはれたりとて船俄に方向を轉じ驅逐艦搜索を始む 人をして寒心せしむ 九時例の如く進行 夜半一時過ぎ船ベルゲン灣に入る

四月二十四日 晴 曉起 雨甚だし 八時ベルゲンに上陸 雨を冒して停車場にいたり九時十五分の汽車に搭ず 切符賣切にて一同三等汽車にのる 食堂車にて食事二回 午後十時半クリスチヤニヤ着 宿屋缺乏 Hotel National の一室に六人同宿す

四月二十五日　晴　Hotel de Boulvard に朝めし　市街を歩し王宮前の廣場、大學等にいたる　午後四時四十分の汽車にて出發　國境稅關の檢查無し　乘替一度　蒸氣通りて車室內非常に熱し

四月二十六日　晴　朝七時四十五分ストックホルム着　梅崎、渡邊兩少佐、永田大尉等あり　Continental Hotel に入る（二一一）　入浴快甚し　晝餐後公使館にいたり歸途買物をなす　九時過就寢

四月二十七日　晴　十一時より王宮、議事堂附近を歩し Museum を見 Kastenhof に午餐　department store を見物して歸宿　七時公使館の饗宴に赴く　縱談十時過歸る

四月二十八日　快晴　午前十一時頃梅崎少佐來る　ともに Seensen にゆき見物　午後四時歸寓　午後六時三十七分の汽車にて出發　內田公使停車場に送られウイスキー一びんを贈らる　夜九時途中の一驛にて汽車を下りて食事　入齒折る

四月二十九日　快晴　汽車雪白の廣野中を走る　景色千里一律にて變化なし　食堂車にて食事　車外寒氣酷し明朝國境 Haparanda に着すべしといふ

四月三十日　快晴　朝七時ハパランダ着　Damn より橇にてトルネオ着　檢查あり　十二時午餐　四時汽車發食事は列車中　車外の風景瑞典と大差なし　平野一層多く丘陵少し

五月一日　快晴　passport を檢查すること數回　Finland 國境ベロトロヴォにて九時頃檢查あり　十一時ペトログラード着　Hotel de France に入る（室九〇）　石坂少將、高柳大佐、橋本大尉等迎へらる　この日

demonstration

五月二日　快晴　露暦四月十九日　山脇、橋本二大尉來り種々世話をなす　午餐の後歩して大使館にいたり歸途大通りに出でて買物をなす　晩一浴就寢　石坂少將よりウオツカを贈らる

五月三日　晴　小雪　山脇氏來る　Alexander II の復活寺院及び同三世記念博物館等を見物　勸工場賣店より kafe に入り電車にて石坂少將の饗宴に赴く　夜十時歸寓　レーニンに對する運動なりとて市中騷擾甚だし

五月四日　快晴　朝 Eliseff 來訪　一同冬の宮及び博物館を見る　二時午餐　晩大使館の饗宴に赴く　歸途ネブスキーを歩して歸る　月色佳なり　日中の demonstration 夜に入りて止む　passport 裏書來る

五月五日　快晴　エリセフ弟と共に來る　人類博物館にいたり一巡　館長に面會目錄を贈らる　Pivato にて午餐を饗せられ Ithaka 寺院を見、中央電信局にいたり打電　夕一行にて石坂、高柳、橋本、山脇四氏をホテルの隣なる一旗亭に招請晩餐會を開く　今井氏來訪

五月六日　快晴　稻垣少將誕生日　江口、曳野二氏郵便列車にて歸東の途に上る　今井時郎來る　正午稻垣の爲に祝杯を擧ぐ　午後三時今井再び來る　河岸より公園を歩し赤十字社に立寄り今井の寓に晩餐の饗にあづかる　石川、福田等あり　夜雨ふる

五月七日　微雪　後晴　朝エリセフ來る　銀行にいたり金を引出し馬車にて Petrograd 大學にいたり東洋研究所を見アレキセフ氏にあふ　それよりソエロフにて午餐を共にし買物をなしてかへる　午後六時半エリセフ再

び來る　メジウエツト（熊）に晩餐　それより同人宅に赴く　アレキセフ、プレトナー等あり　サツパーの後歸る

五月八日　晴　朝荷物を取片付く　今井氏來る　午後七時五十分の汽車にて出發　風あり寒し　停車場にて志願兵の金を乞ふには驚く　寢臺 Wagon 3 の 13 なり　石坂少將等見送られウオツカを贈らる　沿道の風色ヒバ、白樺の雜生せる林にて荒茫際なし　村落貧しげに見ゆ

五月九日　曇　朝餐の頃 Wologda を過ぐ　停車場にパン、卵等を賣るものあり　汽車急行とはいへ諸處に停車す　長きは十數分、少きも五分、至りて遲々たり　稻垣氏感冒

五月十日　快晴　非常に暖なり　沿道の楊已に靑めるを見る　諸處に停車すること例の如し　單線なればなるべし　晩食後カマ川を渡りてペルム停車場につく　乘降客多し

五月十一日　快晴　曉起　汽車はウラル山中に在り　十時半頃エカテリンブルグに着く　下りて鑛石を購ふ　楊柳めぐみて春風駘蕩の感あり　小川氏感冒の氣味あり　午後溫暖いよ〳〵甚だし

五月十二日　快晴　正午頃イルチツシ川を渡りてオムスクに入る　全市綠葉に掩はれて風景よし　繪葉書を購ふ　沿道の景色昨日に比して單調一望平野也　汽車に損處ありしば〳〵停車して修繕を加ふ　車中塵埃多し

五月十三日　晴　朝九時ノヴオニコライスクに着　之より沿道の樹木綠葉を見ず　午後一時トム河、二時半タイガ、夜パノヴキに着　一時間半停車　女子の演說あり　土地分配及び女子階級打破を論ぜるなりといふ　夜襲

ウオツカを分捕る滑稽あり

五月十四日　快晴　余が誕生日　朝エニセー川を渡る　此のあたりよりしばらくの間丘陵あり地勢稍變ず　午後ウオツカの杯を擧げて余が誕生日を祝す

五月十五日　快晴　午前十時Zima, Oka川を渡る　午後五時頃イルクツク川を渡りてイルクツクにつく　イルクツクより約一時間バイカル驛あり　アンガラの川の發する所景色雄大なり　湖水のながめよし

五月十六日　快晴　警備兵士に目覺まさる　汽車の進行大に捗取る　山川の風光稍趣あり　夜十一時チタに着此の日Magzon附近にて汽車火事あり　消防に一時間半を費す

五月十七日　快晴　曉起　茫々平野の間を行く　一木なく處々支那人を見る　十一時半滿洲里に着く　始めて漢字を見るもうれし　東洋的氣分浮ぶ　ハルビン時にて午後三時出發　日本人會長安生準一氏酒食を贈らる　滿洲里の檢査鴉片のみに注意するが如し　夜遲くまで稻垣氏と談ず

五月十八日　曇　東清鐵道の驛に少許の樹木あり新葉茂れり　其他は例の茫々たる平野也　十一時半頃ハルビンに着　中山大尉等に迎へられて余と小川氏とは油屋ホテルに入る　入浴快甚し

五月十九日　朝大東館に稻垣氏を訪ふ　若尾氏尋ね來る　十二時五十分ハルビン發　若尾氏ウイスキー等を贈らる　九時過長春着　穗積眞六郎の電報を受取る　停車場に少憩南滿鐵道に乘る

五月二十日　晴　朝八時奉天着　行く〳〵古戰場を見て午後四時安東着　七時三十分朝鮮汽車發　石下にて穗

積夫婦迎に來る　一時二十七分平壤にて下車直ちに其の家にいたる

五月二十一日　晴　穗積夫婦の案内にて自動車にて牡丹臺附近を見物しお牧の茶屋にて午餐　今夜出發の積にて種々談話

五月二十二日　晴　頗るあつし　午前一時二十七分の汽車にて出發　京城にて八時稻垣少將等乘込む　夕七時釜山着　稅關長矢野氏の饗によりてホテルに少憩　八時連絡船高麗丸に乘込む　航海至つて平穩

五月二十三日　曇　朝七時下關に着　朝餐の後下船　山陽ホテルに少憩　九時五十分の急行車に搭ず　三田尻にて午餐　シャンパンの杯を擧げて一行の無事を祝す

五月二十四日　晴　靜岡にて山本榮來る　萬朝記者伊藤某乘込む　國府津にて斯波、三土來る　橫濱にて藤村、西河等入車　一時五十分東京驛着　出迎人多し　自動車にて自邸に入る　坂本、長谷川等尋で來る　山根等種々世話をなす

五月二十五日　晴　潮田來る　長谷川氏にはがきを依賴す　來客多し

五月二十六日　晴　來客多し　大學にゆき總長に面會

五月二十七日　晴　關根等來る　上田氏を訪ふ　饗せられる

五月二十八日　晴　大學より講座擔任の辭令あり　濱尾、菊池二男爵邸にゆき多賀羅亭に午餐　夜眞吾等來る　梓の爲に寫眞機械を買ふ

五月二十九日　晴　大學御殿にゆき又研究室にいたる　大矢透氏等來る　增村氏等來る

五月三十日　晴　佐々木、松井、赤堀等來る　正午大學教授會にゆき午後四時四谷に植村氏を尋ぬ　小川藏次郎氏來る　梅崎少佐撮影一葉文部省より轉送し來る

五月三十一日　雨　文部省にゆき午後大倉書店を訪ひ偕樂園の同窓會にゆく　會者二二人　今夜斯波等十七日露都着の報あり

六月一日　大學口述試驗　午後二時文部省教科書調査會にのぞむ　夜杉浦來る

六月二日　夜華壇にて稻垣少將、上田、高楠二博士と飲む

六月三日　晴　夕御殿にて大學歡迎會あり　食後旅行談をなす　植村氏其の他來る

六月六日　文部省にゆく　華壇にて無名會あり　薗田、横井兩氏の渡歐を東京停車場に見送る

六月七日　晴　文部省にゆき午後潮田を訪ふ　夕小まつにて杉浦の饗にあづかる　上田、松井、關根、萩野、三上等同席

六月八日　晴　夜雨　文部省調査會に臨席　五時より大臣官邸にて饗宴あり

六月九日　晴　朝古川を訪ひ午餐の饗になり石原を訪ふ

六月十日　雨　朝石原來る

六月十一日　晴　文部省にゆく　夜弘文堂の饗にて上野精養軒にいたる　樋口氏在り　エリセフに逢ふ　文部

省に講演

六月十二日　晴　朝文部省にゆく　午後三時三分の汽車にて坂本と箱根宮の下にいたり奈良屋に投宿す

六月十三日　晴　宮城野を歩し蕎麥を食つて歸る

六月十四日　晴　午後坂本歸京

六月十五日　晴　八田三郎氏午後三時頃着

六月十六日　晴　午前八田氏と強羅公園にゆく　午後三時八田氏出發

六月十七日　雨　布哇讀本を訂正す

六月十八日　晴　布哇讀本を訂正す　バタ送り來る

六月十九日　雨　布哇讀本一閲了　夜青山博士を訪ひて談話す

六月二十日　晴　午前青山博士來話

書翰

一

明治二十五年八月（推定）葉山より

本郷區臺町　得能文氏宛（封書）

拜讀　過日御歸京の節は美人を御覽の由貴兄が垂涎三尺慥に想像いたし候　竹村兄は彌今夕歸京の事に決定被成候　近況は同氏より御聞被下度　小生が游泳術の進步非常なり　海中のイラ段々繁殖大閉口なり　令弟氏は一日にてはあまり可哀想故二三日は滯在ありて可然　長きは厭はねど竹村兄の話によれば試驗前との事故あまり長くとめるも惡からん　冨山房へは段々御手數奉恐入候　斯波の弟共は明後日頃歸京致すならん　京城の炎熱は實に難堪由　當地に居れば其心配なし　冨山房は再遊は如何はし　石原は來るならん

小生等田中屋に腹を立て今一兩日ととめるも聞かず出掛けしに池田屋はやはり田中屋の親類の由　大失策無此上御一笑々々

池田屋は隨分不潔にて大閉口なり　然れども合宿人はなし　一人書生體のもの居たれども逃去れり　小生の屁風に恐れてならん　故に部屋（四五間）を盡く跋涉しをるなり　竹村氏出發の期迫るに付き玆にて擱筆餘日次信に

讓り申候　何卒御母堂にても御令閨にても御同伴の上御再遊切望なり　早々

芳賀矢一

秋虎兄

御許へ

二

明治二十五年八月（推定）二十日　葉山より
本郷區臺町　得能文氏宛（封書）

令弟歸京に付好便を以て一札捧呈致候　其後御無異東京の熱さも平氣の由奉賀候　生等益黒くなり健餐に御座候
御出立後彌池田屋へ移轉其後種々の辛き目をみたる段御令弟御話可有之候　昨日松村益太郎氏來訪　只今日蔭茶屋に居り候由　貴兄の御推擧によりて同茶屋へ赴き候事と一笑いたし候　富山房より金未だ到着せず大不平大閉口　若し石原氏來らずば富山房の金を持つて貴兄若くは竹村兄の御再遊を待つ（身勝手ながら）東京の諸友未だ誰も還らずや　野田氏より昨日來狀あり　富山房への紹介狀は近日相送可申候旨御話有之度候　菅氏宿所は御令弟へ御話申上たり　早々

夏豚子

三

明治二十五年十二月二十四日　牛込區東五軒町より
ベルリン　上田萬年氏宛（封書）

御書狀一通御惠與の書籍三册とともに本日落掌　小生の愚庸を棄てたまはずいつもながら懇々たる御教示謝するに辭無之候　御惠投の書籍は早速披閱可仕と樂居候　偖て本年も最早餘日無之色々面倒にて明日は拙宅などスヽハキをやる由に有之候　歲暮の景況御想像被成下度候　貴兄も又々異域に新年を迎へたまふこと如何の御感想これあり候や　老親の髮華は年々多くして小生が奉養の道未だ一も達する所なし　これのみ心掛りに御座候　小生の家狀の事已に御承知の事にて申上ぐるにも不及候へども彼是心配になること有之半夜書を舍てゝ歎聲を泄し候事も有之候　御憐察被成下度候

小生先般來元特約生にて松井簡治といふ人の世話にて同氏が受持居りし獨乙學協會學校の國語國文を受持つ事と相成候　一週十二時間にて俸給は二十五圓　隨分苦しく御座候へども經驗を增さん爲には好都合と存じ且つ家計上の事も有之勉强從事致居候　十二時間の時間は隨分多く御座候へども同じものを繰返す事多く御座候故只だ顏を出せば宜しく別段用意（プレパレーション）も入らず候故却りて外の人の五六時間よりも樂の事と存居候　扨同校は是迄獨乙文ば

かりやり居りて少しも國文國文などをやらざりし所故年齢廿三四のものにて驚くべき程無學（國文の方に）に有之先日も赤堀君とともに慨歎いたし候事に御座候　二十三四位の日本人にて多し、類といふ假名に「おゝし」あふし「おをし」「ほゝし」「ひたへ」「ふたひ」「ひたゐ」などを書く類唯だ／＼國語教育の普及せざるには驚歎の外無御座小生も實地に當りて始めて驚入候事に御座候　就中小生の喫驚せしは同校一級生にて天照大神宮とは如何書くやと尋ねたるもの有之候事に御座候　東京の學校にてすら此始末地方は思ひやられ候　小生先日富士谷理學士とともに白河驛の教育會へ臨席いたし國語に就いて意見陳述いたし候　勿論新奇なる論には無之候へども方言を改正すべきこと、小學校、作文、讀書科殊に普通の談話の際などにて注意すべき事など相話し候處教員共大抵賛成いたし候様子に御座候

小生金港堂の依頼により先日より教育史を引受け起稿中の處貴兄の御書状に接し懇々金まうけなどせぬ様御注意なし被下赧顔之至に御座候　別段金を無暗にとる考にても無之偶然引受け今に至りて後悔此事に御座候　此後はかゝる餘業はさしおき一心專攻の學問に從事致度と存居候　併し一旦引受候もの丈けはやり度と存候　又冨山房などにも從來の關係上是非日本歴史を書けとの約束も有之旁今に至りて後悔此事に御座候　又此頃大日本中學會と申す會を立てこれにも小生に何か書けとの話有之小生も一旦承諾致候へども御書状にて飜然悟る所ありかゝる餘業は斷然廢止候はんと決心いたし候　御來示の如く未だ識見も淺く經驗もなきものなれば今少し奮勵刻苦せずんば大學院にはいりたる甲斐もなきことゝ存候

大學には栗田先生近頃評判宜布御座候　田中助教授も同斷　三上、高津二君は近々又々文學史の著ある由　今度は教科書として出す由に御座候

先日冨山房の知人にて越後の方言を調べたるもの有之小生より赤堀君に依賴し十二圓にて博言室へ買上ぐる所に致し候

文學研究法に關し色々御指敎被下難有御座候　小生は只今までにいまだ何も讀まず唯だフロレンツが藤代氏に與へたる筆記を讀み候のみ

文學者年表先日一部御郵送申上候筈に御座候　已に御落手の事と奉存候　あまたの誤謬を發見いたし候には閉口之至に御座候

今年は國文學生二三人は可有之歟　小生未だ知己を得ず　二年生にて藤岡といふもの中々勉强家にて宜布由　金澤より來りし人に御座候　併し此人もあまり人と交際はせぬ男ゆゑ小生よくも存知不致候

フロレンツは不相變日本學勉强致居候　併しいつも他人の手を借りて飜譯をなすのみにて基礎を作らぬ故あの儘にては今二三年やりても日本の書物はよめまじと被存候　日本紀飜譯は御覽になりしや如何　未だ御覽に不相成ば小生の貰ひしものを御贈呈可申上候

小生と同じく大學に在りて理科生たりし竹村鍛は只今兵庫師範學校へ赴任致候　此人中々の勉强家に有之學事に熱心に御座候　將來御眷顧被成下度候

小生の近作二首御一粲被成下度候　平仄にも誤あるべし調も整はずほんとの御笑草までに供御覽候

偶　成

是非曲直那邊求　笑殺彈丸小地球　身生福里不希福　家在牛門懶似牛　財產唯餘書滿架　功名遂莫記千秋

回頭往事渾如夢　閒過二十五葛裘

歎息時風日々非　寧悲宿志廿年違　會心友向書中覓　趨利客從門外歸　自古大儒甘貧賤　于今達道厭塵機

秋堂垂白老親在　半夜燈前淚滿衣

文科大學遠足會は段々繁昌先日は妙義山へ參り候　同行者五十三人　小生の從弟にて斯波といふもの只今英文選科に在り此もの一行の寫眞を取り候

ブッセ氏彌々歸國の途に上り候　多分其中に御逢ひ被成機會もあるべき歟と存候　同氏は學生の好意は充分に喜び居しが學校の處置に就いては大分不滿の容子に御座候　後任は未定にや

ウードといふ英文學の敎師中々評判宜しく御座候　獨乙語も非常に達者の由フロ公申し候

先は右つまらぬ事のみ申上恐縮之至に御座候　早々

尙々御敎示相仰度候　拜具

十二月二十四日

芳　賀　矢　一

尙々時下御攝養專一に奉存候

侍史

上田萬年樣

四

明治二十六年一月九日　牛込區東五軒町より

大磯松林館　得能文氏宛（封書）

御內政の御病氣は如何　益御快癒に向ひ候事と欣喜奉存候　小生事無事只今歸宅明朝早々斯波を訪はんと存居候

御令閨御病氣は容易ならぬ事に付申上ぐる迄も無之候へども失費などを顧みず充分氣長に御保養あらんこと切望の至にたへず候　昨日は幸に加藤ドクトルの出遇せし爲め好都合なりしが今日尙御攝養のこと最も肝要なり　貴兄歸國の事などは如何なる事件かは知らねど御延引相成ても可然歟と存候　金井博士も汽車中頻に其事につき心配いたしをり候

御令閨も遠隔の地に來りて病に臥すは心細き限りなるべければ何分にも貴兄の御出立は最も不利益なるべしと相考候　尊意如何

明朝駒込へ罷出委細御話せんと存ぜしが柴君明日御歸京との事故見合せ可申候

明治二十六年

今夜も東京も非常に暖なり
松林館へも忠兵衛等へも可然御鶴聲被成下度候　早々

九日夜

矢一

文様

何分にも御攝養專一々々

五

明治二十六年（推定）牛込區東五軒町より
小石川區西江戸川町一番地　今泉定助氏宛（封書）

昨日は罷出御邪魔いたし候　扨例の英學教員の件富士谷に今夜面會話致候處同氏は可相成は受持度に付八時間丈は都合してやつても宜布旨申居候　就而は貴兄の御盡力を以て可相成は富士谷氏を御採用相成度奉懇願候　尤も同氏は月曜木曜水曜等の午後及び金土の八時至十時だけはひまに御座候に付其中にて御都合被成下度奉願候　尙それにても御不都合ならば他の學校の課程に變更を來しても差支無之兎に角富士谷氏を御用ひ被下候はゞ幸甚之至に御座候　同氏は英文學に於ては決して文學專門の士に讓らざることゝ小生保證いたし候　何卒可然松野氏等

へも御推薦被成下度奉願上候　依田氏は例の進徳館の方へ依頼いたし度と存居候　右本日にても御出校の節御相談被成下度伏而奉願候　早々拜具

二十一日夜十時

芳賀生

今泉賢兄

梧右

六

明治二十七年四月（推定）二十五日　牛込區東五軒町より
本郷區西片町　得能文氏宛（封書）

本日忠兵衞來訪彌移轉の事談ぜられ十五圓の處世話いたし呉れよと申越候　よりて小生は貴兄御災難のため昨日一昨日とも奔走そのため未だ片金も整はざる旨話候處忠兵衞は已に先方の大屋へも相談し明後日轉宅の心得の由就而はやむを得ず明日までに十五圓だけ調へやる事を約束いたし候間若し昨晩のうちに別途御調達相叶ひしならば二三日中の處いくらか御融通被成下度　又貴兄御災難の事は貴兄のある親友のこと判を捺せし樣話致置候間左樣御承知被成下度　柴氏の事は毫末にも話いたさず右御心得まで申上置候　早々

明治二十七年

二十五日

芳賀生

秋虎兄

七

明治三十二年一月十三日　本郷區彌生町三番地より
本郷區元町二丁目六十六番地　杉敏介氏宛（封書）

唯今貴宅に參上いたし候處獨逸協會へ御出の由に付同校へ出向候へども途中行違にて不得拜眉以書中申上候　實は高等學校の件に關し御相談申上度儀御座候　そは小生此度高等師範の方へ轉ずる事に相成候に付其後任者として大兄を推薦する事に略決定し高津君も是非貴君をと被申居候間御承諾相願度事に御座候　右に付萬々高津君より御話可有之筈に付何卒本日中に高津君宅迄御出向被成下度奉願候　同君は本日は午後在宅の由被申居候　右用事のみ　匆々不一

一月十三日

やいち

杉學兄

八

明治三十二年三月十日　本郷區彌生町三番地より
徳島縣脇町　濱野知三郎氏宛（封書）

拜讀　白氏文集御研究の由誠に結構の事に御座候　何卒一日も早く世に出る樣いたし度と存候　これは世の歡迎を受くる事疑無之事と存候　國文書中よりの索引御加へに相成候由最も妙に御座候　朗詠より謠曲に入り候事最も多く候へば謠曲は一わたり御一覽相成可然歟　その他割合に多かるべきは三代集以下の歌集と存候　奥儀抄や童蒙抄等の歌論の中によく引用せる大江千里の朧月夜の歌の如き白氏の句を以て歌を詠ぜしことなど珍しからずと存候　尚本朝文粹の邦人の漢文の書も一讀の必要可有之歟　其他源平盛衰記太平記等の軍書を御採り相成候はばそれにて十分ならんと愚考いたし候　御參考迄に申上候　右御返事旁如此に御座候　匆々不一

三月十日

やいち

濱野大兄

九

明治三十二年

明治三十二年（推定）五月十二日　文科大學より
牛込區左内町三十番地　松井簡治氏宛（封書）

拜啓　今朝電話にて學習院へ伺候處本日は祝賀式にて御取込の由　就而は多分御出向はむつかしかるべくと存候へども學生一同午後會合相催候事に相成居候に就而は御願申上候書籍此者へ御貸與被成下度　これは慥なるものに御座候間御安心の上御渡奉願候　右御願迄　匆々不一

五月十二日　　やいち

松井賢契

追伸　御光來相叶候はゞ無此上事に御座候

一〇

明治三十三年一月十六日　本郷區彌生町三番地より
牛込區新小川町三丁目十番地大日本協會　高橋龍雄氏宛（封書）

拜讀　文學史十講御一讀被下候由　御過賞にあづかり恐縮の至に御座候　實は忽卒の演説にておもひあやまりたる處もあり今更慚愧に堪へざる點多々有之再版の節改めたき考に御座候　さて明治文學の一節日本主義へ御掲載

云々の御來旨拜承いたし候　然る處右にも少々誤字等も有之花柳春話とあるべきを花柳餘情と記憶の誤等も有之候間御出し相成候節には一應原稿御示し被下度　大體はもとより改めず候へども一二活字の誤植等は改め度候間右乍御面倒御願申上候　御返事旁如此　餘拜眉にゆづり申候　匆々不一

一月十六日

やいち

高橋賢兄

二

明治三十三年九月十九日　香港より
四谷區本村町三十番地潮田内　芳賀鋼子宛（繪はがき）

十三日上海に上陸同地を見物し十五日出帆香港迄の途中にて大風あり　乗組の人々いづれも顔色なし　小生は平常の通りに御座候　御安心被成下度候　福州に寄り本日無事當地着いたし候　委しき事はいづれ又後より可申上候　匆々不一

十九日午後

明治三十三年

香港において

芳　賀　矢　一

石原へよろしく

一二

明治三十三年九月三十日　汽船プロイセン號より
本郷區西片町十番地イの九號　竹村鍛氏宛（封書）

其後は御無異御勉學の御事と奉恭賀候　小生等の一行も已に航海の半を經過して本日はコロンボ着の筈に付一書を呈し候　出立後の狀況も彼是申上度候へども船中にては何事も手に着かず　旅行日記の如きはゆるりと着の上相認め可入御覽候　唯だ船中生活の一斑左に申上候間同友諸友へも可然御吹聽被下度候　同行の諸君いづれも健全　夏目氏は船に最弱かりしが此頃にいたりては大に慣れ候　同氏は不相變無言にて船中を睥睨いたし居候故知合は出來ず船中にて朋友の多きは小生に御座候　隨分怪しき英語又は獨逸語にて誰彼の差別なくつかまへて談話いたし居候　船中の給仕人はいづれも多少の英語は心得居候　獨逸語は勿論の事　この位獨逸語が出來るなら給仕人等はやめたらよからうに抔と今更の樣に感じ候　乘込人の中には瀧澤菊太郎に似たる人あり大村仁太郎に似た人もあり夏目君に似た葡萄牙人もあり色々比べ合せて考へれば面白き事に御座候　余等の食卓へ來る給仕人は

吉田彌平君ソツクリにて小生吉田彌平と名づけ候處一行大に賛成いたし候　中等客は上海より俄に殖えて四五十人と相成候　多くは支那に居りし宣教師にて無學のやからに御座候　日本には阿片を飲むかなど聞き居り候　西洋人の女を大事にする事誠に妙に御座候　中等客の事故隨分下品なる人品のものも多く御座候　子供も十四五人は居り候　日本の事は褒めぬもの無御座候　船中にてはこれ迄あまり失策もいたさず候　唯だ最初の日にカビンの電氣燈をこはしたると雪隱に入りて蓋の上に埋く糞をやりたるとの二事件に御座候　いづれも初日の事故この鹽梅にては餘程澤山やる事と存居候處其後は札パリやらずまづ〳〵無事に御座候　湯は毎日入浴　料理も喰ひ慣れて船が何となく家のやうに相成候　熱帶に入りては嘸かし熱からんと存居候處意外にも毎日驟雨あり風ありて東京を出た時よりは涼しく御座候　一昨々日龍卷を一見いたし候　非常に近くみえ候　か程に近きは珍しと船長も申居候　印度洋とて別に變りたる景色も無之海のながめはいづこも同じくどこ迄いつてもはてし無く候故飽き飽きいたし候　海があまり廣すぎる故不經濟なりなど噂いたし居候　讀む書物を多く持參せざりしは今更不覺に存候　毎日退屈に日をくらし居候

上海にてまづ支那人の生活を一見し香港より新嘉坡いづれも風土人情の差多少の趣味を感じ申候　揚子江の濁流滔天の勢を見ては流石に大國の勢もおもはれ候へども支那人の汚き下等なる有樣をみてはあはれに感じ候

　滾々大江注海東　滔天濁浪勢何雄　中華久矣無人傑　不似水流今古同

などうなり候　上海にては愚園と申す庭園一見いたし候　全く支那流の庭園にてツクネ芋の如き岩石、芭蕉、畫

欄ある亭榭など宛然支那の畫を見る感有之候　其途中老槐路を夾んで淸涼人に可なり　樹上に蟬吟を聞き候處其聲日本の如く勢よからずあはれな弱き聲を出し居候　支那人の町は綺麗なれども非常に臭し　然し上海といひ香港といひ大厦高樓の多きは驚くの外無之候　日本は此點は誠にはづかしく御座候　香港にてはピークの上にのぼり候　これは鋼條鐵道にて上れば香港眼下に見え候　誠に好風景に御座候

新嘉坡にては植物園、博物館など一見いたし候　植物園は流石に熱帶の事とて珍奇なる植物多く御座候　園中の鈴蟲得もいはぬやさしき聲にて鳴き居候　鱷魚のすむ里とも覺えず候

亭々椰子矗參天　荷葉蓋池大似船　熱國一分有秋意　蟲聲唧々草間傳

新嘉坡には土人の皮膚の色如何にも紫金色なるもの多く全く古佛像を見る想あり　又面貌はさながら五百羅漢に御座候　一土人日本語をよくするものあり　これに案内致させ所々見物いたし候　こゝにも日本旅館一ケ處あり旅宿名薄に福地復一、鹽田眞、平尾贇平などの名前も見え候　香港にては雜草など尙日本のと同じものありここにいたりては全く相變り候　日本食は上海、香港、新嘉坡到る處にてたべ申候　あまり甘くは無之候へども茶漬七八碗は傾け申候　夏目君は蕎麥が喰ひたしといひ戸塚君は豆腐の味噌汁が喰ひたしと申居候

支那にて路傍に立てたる道案内（インデックス）は日本ならば☞とあるべきを☞の如く二本指に相成居候　これは餘程妙に御座候　岡倉君殊に本多君に御話置被下度候

家鄕を去つてより已に三週餘　九月も今日に盡き候　今頃は東京の最良時節など皆々噂いたし居候　併し船中に

入りしより少しも××的必要は感じ不申　これは不思議と一同話居候　詳しき紀行相送可申と存候へども熱さに面倒故（喫煙室は非常にあつし）これにてやめ候　福井氏へ御逢の節は例の文法一覽の上獨逸より送るべき旨御話奉願候

御一同様へよろしく　匆々

九月三十日

やいち

竹村盟兄

諸君へよろしく　今頃は又無名會のある時分となつかしく存候

斯波へも不沙汰よろしく願上候

一三

明治三十三年十月一日　コロンボより

神戸市神戸中學校　得能文氏宛（繪はがき）

小生豫定の如く八日出發九日神戸着　貴兄多分御來訪被下候事と存居候處不得拜眉殘念に存候　長崎、上海、香港、新嘉坡、ペナンを經て本日當地着　これより上陸の積に御座候　風土異る處趣味も少からず

明治三十三年

新嘉坡における一詩

亭々椰子矗參天　荷葉蓋池大似船　熱國一分有秋意　蟲聲喞々草間傳

十月一日

コロンボに於て

芳　賀　矢　一

一四

明治三十三年十月一日　コロンボより
四谷區本村町三十番地　潮田方藏氏宛（繪はがき）

本日正午コロンボに着馬車を驅りて佛寺を一見いたし候　抹香臭き處は相似たれども地獄極樂の繪など我國のとは大に異なり其他肉桂園、公園等を一見し明日當地出帆の筈に御座候　香港を出でし日一日は非常に熱かりしが其他は非常に涼し　熱帶とはおもはれず候　黑ン坊の黑き事は非常に御座候

十月一日

コロンボより

芳　賀　矢　一

一五

明治三十三年十月十九日　ゼノアより
神戸市神戸中學校　得能文氏宛（繪はがき）

四旬の航海無事本日當港着　明日汽車にて巴里に向ひ候

十月十九日

伊太利ゼノア港
芳賀矢一

一六

明治三十三年十月十九日　ゼノアより
ライプチッヒ　大幸勇吉氏宛（繪はがき）

小生藤代、夏目、稲垣、戸塚四氏と同船本日當港着　明日より巴里に出で本月末には伯林に參り可申と存候　小生は多分ライプチッヒへ可參と話置候に付或は大兄へ宛小生の手紙參るやも測りがたし　宿の人へもよろしく御話置被下度候

明治三十三年

十九日

やいち

一七

明治三十三年十月二十二日　パリより
四谷區本村町三十番地潮田内　芳賀鋼子宛（エッフェル塔の繪はがき）

十九日以太利に上陸ゼノアに一泊　二十日ゼノアよりトリノ市に到りそれより急行列車にて巴里に入り博覽會近傍の一下宿に投宿　文部省の渡邊氏種々親切に世話しくれ候　本日は博覽會の大勢だけ一覽　この高塔に上り候眞に宇内の壯觀なり　皆々樣へよろしく

十月二十二日

巴里市エッフェル塔上

芳賀矢一

一八

明治三十三年十月二十五日　パリより

本郷區森川町一番地　關根正直氏宛（繪はがき）

其後御無音に打過候　當地目下菊花滿開中々美しきもの多し　皇國の秋をおもひ出し候　このはがきランプの火にすかして見給へ

十月廿五日

巴里

芳賀矢一

當地にて川上の評判非常に高し　××は見せものになり居る也氣の毒の至り　いづれ又其中に詳報差出可申候

一九

明治三十三年十一月五日　ベルリンより

神戸市神戸中學校　得能文氏宛（繪はがき）

小生廿九日當地着　左の處に寄宿　本日大學入學の手續を濟ましまづ今冬はこゝに滯在の積に御座候　立花、福原、藤代皆附近に在り　かねて御依頼のバストいくらも有之候へども Marble がよきか Bronz がよきか分らず石膏のはやすけれどもこはれ易し　代價はとにかく何種のがよきかといふ事御申越被下度候

十一月五日

明治三十三年

Y. Haga. Gerhardstr. 1, Berlin, N. W.

二〇

明治三十三年十一月二十三日　ベルリンより
本郷區東竹町二十六番地　斯波貞吉氏宛（繪はがき）

其後皆々樣御變りも無之哉　小生本月五日當地大學に入學無異勤勉いたし居候間乍憚御安心被成下度候　數月故國の音信を聞かずなつかしく存候　何か面白き事も御座候はゞ御報道奉願候　文部省の一行岡田、正木なども近日來着の筈　渡邊氏は已に來伯いたし候　毎日曇天若くは雨降りにて四時位より點燈閉口のいたりに御座候　皆々樣へよろしく

十一月廿三日　新嘗祭の朝

やいち

二一

明治三十四年一月一日　ベルリンより
神戸市湊川神社官邸內　芳賀田鶴子宛（繪はがき）

新年おめでたう　おとなしくしておいで

卅四年正月元日

やいち

たづ子殿

二二

明治三十四年一月十五日　ベルリンより

四谷區本村町三十番地　芳賀鋼子宛（繪はがき）

この端書正月より十二月迄つゞきにて十二枚あり毎月一枚づゝ御送申上候也

今月十八日は當國王國建立二百年祭にて賑やかなる催有之由　廿七日は現皇帝の誕生日なり

今日も雪降りて寒し

一月十五日

やいち

二三

明治三十四年

明治三十四年二月九日　ベルリンより
東京帝國大學文科大學　大塚保治氏宛（繪はがき）

其後は御無沙汰にのみ打過申譯無之候　小生當地着以來已に三月に相成候へども碌々無爲慚愧の次第に御座候
立花君先月中旬よりインフルエンザにて昨日やう〳〵外出相叶ひ候　藤代君來月よりブラントの家へ寄宿の由
尚一室有之候由に付小生も或は四月頃より同家の厄介に相成らんかと存居候　薗田氏も過日來着立花氏と同宿に
御座候　服部氏は廿一日着廿三日には萊府へ行かれ候　神田乃武氏過日當地へ參られ昨今は同道にて學校參觀い
たし居候　當地に御用もあらば御申越被成下度候
大學には變りたる事も無之候哉

二月九日

芳賀矢一

二四

明治三十四年二月十八日　ベルリンより
神田區駿河臺西紅梅町十二番地　今立裕氏宛（封書）

烏兎匆々故國を辭して已に半歳に相成候　御全家御揃益御壯健之由奉恭賀候　小生事も幸に無異御安神被成下度

候　正月の御手紙は本日着　色々日本の狀況も御しらせ被下旅窓の下誠になつかしく拜讀いたし候　友田氏の作文教範今頃は第四卷も最早出版相成候事と存候　第五卷も印刷に着手せられしや如何　印稅の件色々御配慮奉謝候　××××にも首尾克く歸朝相成候由芽出度存候　當地の評判にては先生の樣に目に一歐字を知らぬものが來ても何の役にも立たぬなど噂いたし居候　鐵道馬車中にて少し美人らしいものを見ればあれは地獄では無いかと同行者に尋ねられ候とかにて當地の一笑話に相成居候　又十錢か二十錢か五十錢か金も分らなかつたのは恐くは××氏一人なるべしなどの評判も御座候　併しこれは極々內所々々に御座候　○○氏も巴里より當地に參られこれは當地にて面會いたし候　いつの間にやら片方の目を入目させたる故少しは體裁よく相成候　併しあの顏にて歐洲の中央へ押出して來た事は中々感服に御座候　これも祕密々々　福井會などにては氣焰萬丈なるべしと推察いたし候　當地には日本人中々多く御座候へども平常往復するものはやはり二三人位のものに御座候　森岡氏はエナに居られ候故未だ面會は不仕　いづれ今年夏期休業には少し近傍旅行仕度考故其節は面會いたす事と存候
中澤岩太氏には天長節の夜會にて逢ひ申候
日本品を賣る家當地に在り鰹節、味噌、醬油、正宗なども御座候　それを買つて時々下宿屋に日本食會を催し候併し豆腐が喰ひたい蕎麥が喰ひたいなど色々贅澤を言ひ出して果ては大笑に相成候　神田乃武氏先日來伯　同行にて諸處の學校見物いたし一兩日前小生料理方にて日本食を饗し候　然るに牛肉凡そ四五斤上等を買ひて煮上り今や喰はんとする時鍋を引くりかへしておぢやんに相成小生の一大失策　下宿屋の婦人には大に叱られ散々の體

に御座候　かやうの失策は時々有之候　織田氏、斯波氏などいづれも健全の由何よりの事に御座候　竹村氏の病氣のみは誠に氣の毒千萬の次第に御座候　關根氏親切に世話致され候由
光融館いよ／＼御盛大の由恭賀々々　佛教の氣焔いよ／＼盛なる由　小生も當地に參りて宗教といふもの丶大なる勢力ある事を悟り候　△△△の△△△過日來伯、料理屋にて午餐の時一寸逢ひ候　品のなき、いやな男に御座候　薗田宗恵氏隨行にて唯今巴里に參り候　藤井宣正氏も巴里にて待合する由　近角常觀氏は當地に居り候
今年御地は非常に暖き由　當地も餘程暖き由に御座候へども雪は隔日位に降り候　この雪を掃除する爲め人足を出すその人足賃四五萬圓は一度にかゝる由　その代り雪降りの翌日は忽ち雪駄ばきに御座候　金の無いといふ事がいつも話の決着點に御座候　松平氏の言の如く國は氣候といひ山水といひ日本程結構な處は無之候　人品、德義の點も日本は中々上等にて決して西洋人にはまけ不申　小生の考にては西洋人の方が遙に下等に御座候　然れども殖産、工業乃至金のある點に至つては何とも申樣無之候　とにかく一つの世界に住んで居る以上はこんな國と附合はねばならず我國の前途も益大切なる事と存候　旅宿の晩餐に一皿の肉をかじる時おもひ起すは家鄕の事にて、妻子の事より友人の身の上、果ては我國の將來の事など愛國の熱情は溢るゝばかりに被感候　小生は飽までも國文學を鼓吹してこの方面に盡さんと只管自重の念を生じ候
佐々木委托のもの其日々々に逐はれ未だに果さず　不日必ず相送可申候間よろしく御わびおき被下度　出立前出來上りし由いひたれば虛言を言つた樣に相成誠に申譯無し　あの時は大抵出來て居りしなり　少し加へる事を段

段おくれし次第に御座候
まづはこれにて擱筆　以下は次の便といたし候　匆々不一

二月十八日

やいち

今立裕様

それから大切なる事を忘れ候　留守宅より貴兄始終御親切なる御見舞被下度々頂戴物をいたし候由　よろしく御禮申上吳候樣申越候　御厚志の段千萬難有あつく御禮申上候
御令閨樣御子供樣へもよろしく／＼

二五

明治三十四年二月二十八日　ベルリンより
東京市本鄕區森川町一番地　關根正直氏宛（封書）

細々の御手紙拜誦　竹村君の病狀委しく御報知に預り奉拜謝候　同君病氣の事最初留守宅より報知あり　其後萩野、岡倉二兄の手紙、從弟斯波の通知等にて中々重態なる由聞及候へども肺患の事なれば一時の峠を越せば却つて長引く事と存じ左程急に危篤に陷る樣の事は無かるべしと幾分かは安心いたし居候處此度の御手紙にて最早望

の綱も切れ候事誠に愁傷の至に御座候　御手紙には日附無之候へども郵便局の消印廿五日とあり御文中に昨日の土曜とあるを以て考ふるに廿日の御認と存候　さすれば同君最早とくに鬼界に入られ候事と東方の天を望みて悵然たる外無御座候　如何なれば同君の如き誠實方正の君子に壽命なきか　今更ながら天道の是非疑はしく被存候實は廿五日當方よりの發信日につき貴兄及竹村君へあて同君の病狀につき問合の手紙差出候跡へ貴兄の御書狀に接しあまりの急激なる事にて驚愕不一方存候　萬が一にも尙同君の生存にてもあらば誠に再度の驚喜を惹起すべく候へどもそれは最早望無かるべしと只管落膽罷在候　異鄕萬里さらぬだに望鄕の念やみがたき時親友を失ふ心地御察被下度候　世には肺を病みても子規氏の如き急症にてすら十年も生存する人あり　竹村君の病氣は非常の惡症と被存候　同君が小生の出立を見送らんとておくればせに埠頭に走り來られたるあれが遂に幽明の別と相成候事おもひ出でゝも悲しく御座候　察するに次便には同君の訃音來るべしと存候が次便（三月九日當地着の筈）は米國リオ、デ、ジヤネロ號に搭載の事故途中にて沈沒し或は來ぬかも知れず　かゝる凶報はせめても遲く來る方が幾分かの望を長くする事と存居候

さて又同君罹病以來貴兄の御世話被成下候事は一通りでは無く公私ともに非常の御厄介御迷惑の事と奉存候　竹村君にとりては實に莫大の仕合といふべく同君不幸にして亡き人の數に入るとも貴兄の御厚恩は決して忘れざるべしと被存候　月給增俸の事等も種々御配慮何から何迄御世話の段誠に恐入りたる事に御座候　小生東京ならば不及ながら幾分の助力も可致處かく萬里を隔てゝはおもふに任せず　若し同君餘命尙あらば此上とも御配慮の程

奉懇願候　竹村君の細君も嘸々愁傷の事と氣の毒絶言語候次第に御座候　小生中學校在學の頃親友あり殆んど兄弟の如く往來いたし居候處東京へ遊學に出でし翌年の二月死去いたし候　竹村君の事情は誠に之によく似て此度海外に遊び候へば又々此凶報を耳にいたし坐に昔の亡き友の事までおもひ起し候

竹村君に預け置き候書物貴兄方へ御引取被下候由是亦御面倒の儀と奉存候　併しこれは碌なものは無之候故ドウナツてもよろしく御座候　決して〳〵御構ひなく若し御預被下候ならば緣側の隅にでも物置の蔭にでも御仕舞置被下度決して御心配無之樣くれ〴〵も奉願候　無くなつても決して惜しきものは無御座候

竹村君の跡片附等被成候節は同君の遺稿は可成御取纒の程奉願候　これは同君の舍弟等と御相談の上出版等の手筈に相成候はゞ如何と存候　神戸に在勤せられ候節の日本文典の草稿これは活版に成つて居り候樣被存候　其他女子師範あたりの講義草案等もあらば御取纒置奉願候　同君は漢文をよくせられたれば詩文もあるべく俳句もあるべく、隨筆の目錄樣のものも未定稿にてこれあり候樣記憶いたし居候　これらは碧梧桐君等と御相談の上御出版被成下候樣相運び候はゞ誠に好都合と存候　勿論知友に配布するだけにてもよろしかるべしと存候　冨山房などは前からの緣故もあり出版の義務位は引受けてもよろしかるべしと存候　其邊の事書中不悉意候へども何分にも御世話序に貴兄の御厚配相仰度奉懇願候

同君尙萬一存命ならば官等陞敍の事上田君位に御話の上御周旋被成下度　七等以下は年限なしに陞敍出來る事と存候　さすれば位階も自然に陞る事と存候

竹村君郷里の朋友の方は小生一向知らず候へども大學の側丼に學問上の方から附合はれし人々は大抵承知いたし居候　これは小生の從弟斯波貞吉（東竹町廿六住居）も大概は承知の筈に付何かにつきて必要の折は同人に御談合被成下度奉願候　東京中學の笹倉、瀧澤の二人は同學の選科生にてこれも同君と昵近にいたし候へば或は御相談奉願候
過般來種々御世話被成下候上又々かやうなる面倒の次第御願申上候事誠に恐縮の至に候へども學問上の友人として同僚として大兄に御願申上ぐるより外無之候間くれ〴〵も御願申上候也
其他諸友人間は誰も〳〵息災に御座候哉　赤堀君は近頃致され候哉　當地の立花銑三郎君インフルエンザより引續いて今以て平癒せず幾分か心配すべき徵候御座候　併しこの事あまり評判になりて同氏の留守宅にでも聞えては心配の種を增すわけに付き右御含置被下度候　同君の容態次第にて早く御地へかへる樣に取計度と存候
病氣といふ事を考へれば人間が實にいやになつて勉强も何も出來不申候
先は右御返事旁如此に御座候　當地の景況等も其中に又々可申上候　匆々不一

二月廿八日

やいち

關根尊兄

侍史

二六

明治三十四年二月二十八日　ベルリンより
四谷區本村町三十番地　芳賀鋼子宛（繪はがき）

旅中携へ來り候日本服は羽織の紐無くて困入候　此次誰か來る時羽織の紐一つ御托し被下度候　今立の子供は何が生れ候哉　土井の子供生れて直ぐ死にし由氣の毒の至なり

二月廿八日

やいち

二七

明治三十四年三月十三日　ベルリンより
神戸市神戸中學校　得能文氏宛（封書）

御手紙拜見　いよ〳〵御清健教育のために御盡瘁の由何よりの御事に御座候　當地に參りてより何人もその職務に忠實にして勤勉なるには大に感心いたし候　過日學校參觀いたし候節何處のギムナジウム、高等女學校等も校長はじめ教員いづれも四十年、三十年勤續するもの多きにはほと〳〵感服仕候　それ故母親の習つた先生にむす

めの習ふなどいふ事決して珍しき事に無之學校教育の神聖なる所以はこゝに在りと坐に我國の現狀に就いて浩歎を禁じかね候　中にコツハ街のレアル、ギムナジウムのプロフエツサー曰く余は四十五年來この學校に勤務せりと　日本新教育ありてより未だ三十年に滿たず　この點中々及び易からずと存候　中學校の教員も年限によりてはプロフエツサーと唱ふる事を得るわけにて金などは大學の先生よりも餘計に取れるなり　それにても尙大分敎員待遇論やかまし　今もその議論あり　この點も無論我國のは改良せざるべからず　職務に從事してより廿五年の祝、五十年の祝などいふ事毎日の樣に色々の人のする事なり　巡査、郵便脚夫などもする事なり　我國にて巡査や脚夫が廿五年勤續の祝などする事あり得べしや　之を以て見ても如何に社會の秩序ありて各其分に安んずるかを知り給へ　我國の如き秩序なき社會は又とあらざるべし　これはトランシションの時代なればやむを得ざる事とあきらむる外なし

さて本日着の手紙（貴兄をはじめ二三通）はリオ、デ、ジヤネロに搭載せしものにてメチヤクチヤになつて相着し候　難船の爲めダメージされたといふことわりの印あり　二百袋の中東京より獨乙宛の分一袋助かりし由　せめてもの仕合に御座候

さて其手紙は悲しき訃音をもたらし候　其一は竹村君の死去、其二は潮田老母の死去に御座候　いづれも意外の事にて一驚を喫し候　竹村君惡性の肺病とは傳聞せしかどさまでとは存ぜず實は二月一日にも同氏の許へ宛一通手紙差出し候處今日報を得て驚入候　誠に言語に絕したる氣の毒の次第にて異鄉萬里親友に離れたる心地御察被

下度候　同氏が小生の出立を見送らんとておくればせに（一汽車おくれて）横濱埠頭に來られマルセレーズの奏曲とともに帽子、ハンケチを振つて別れしは卽ち幽明の別とはなりぬ　悲しとはいふも愚なり　小生東京に在らば今少しは不及ながら慰めもすべきものと坐に悲歎にくれ候　同氏の遺稿樣のものあらばせめては出版にても致度これは關根、斯波の方へ申遣しおき候　貴兄も竹村君及同舍弟君とは親しき間柄なれば何分の御助力奉願候今一つ悲しむべきは立花君なり　同君先々月より肺部に故障ありいよ〳〵今月末歸朝の途に就き候　當人は知らざれども醫者に聞けば大分惡しき由　これも將來如何哉と案ぜられ候　か樣に幾多有爲の人の早世するは誠に歎くべき事なり　それにつけても身體の健康が第一なり　絕大の抱負があつても何があつても命が無くては何の役にも立たず　小生當地に參りてより唯々身體の健全をのみ祈りて他に何等の慾望も大望も無し

一昨日より左の處に引移り候　これは磯田、大塚君もかつて居りし家にて中々よきフアミリーなり　立派な娘もありて日本好きの家なり　フアミリーテイツシにてめしを食ふ故談話の上達にも大に便利あり　藤代氏も同宿いたし居候　當分伯林に居る積に御座候　ライプチツヒは氣候あしければなり

チエラーは老年故講義はせずウエーベルは年よりたれどもやり居るなり　松本文氏など聞居る由　パウルゼン中中盛にて聽講者多し　文學にてはシユミツト、ガイゲル　これは近世文學の方なり　小生來學期はこれ等二三人聽講の積に御座候　古い方は後にまはすなり　大學講義目錄一週間程前に賣出したり　之を見てあちこちの大學へ轉學入學をするなり　小生はどこに居ても同じ故まづ伯林に居る積なり　芝居等はついひまなきため今以てゆ

かず　いつでも見られると思つて安心して居る故なり　二三日中にそろ〳〵芝居見物もはじめんと存候　ハウプトマンの沈鐘（登張の帝國文學にて大意御存じの事と存候）大分はやる容子なり　ゲイシヤ、×××などいふ芝居大流行なれどもこれらは見ると嫌になる由　神田乃武氏は見たと話され候　同氏は一月ばかり當地滯在諸所同行いたし候　今月は以太利の方へゆかれる筈　姉崎は近日この地へくる由なり　山口小太郎來學期はライプチツヒへ移轉の由　イブセンの事先日御申越相成候へどもこれは狹義の獨逸文學者にては無之候（ゲルマニツクには相違なけれども）ズーデルマン小說一册立花氏に相托し差出候　五月中旬には御落手の事と存候　ビユステはこはれ易き故立花君に托すか托さゞるか未定に御座候　同氏の荷物次第なり　貞吉坊主近頃大分景氣よし　總理大臣祕書官になるかも知れぬと申越候　出來れば結構の事と存候　神戶兩親子供等も健全の由何よりの事とうれしく存候　山田氏は如何　久しく無沙汰いたし居候　御逢の節はよろしく　竹村氏の不幸かへす〴〵も悲しき事に御座候

三月十三日

Melanchtonstr. 12.

やいち

得能大兄

新聞御送り被下候由難有存候　何新聞にてもよろしく御座候に付御送被下候はゞ大に仕合に存候

二八

明治三十四年三月二十五日　ベルリンより
ライプチッヒ　大幸勇吉氏宛（繪はがき）

過日來お蔭様にておもしろく相暮し候　貴兄伯林の案內記は小生寓に御忘れ相成居候に付本日薗田氏へ相渡しおき候

三月廿五日

やいち

宿のお婆さんへよろしく

二九

明治三十四年四月十九日　ベルリンより
ライプチッヒ　大幸勇吉氏宛（繪はがき）

小生病氣につきわざ〳〵御見舞被下奉謝候　最早全快し本日は入浴して少々散歩いたし候間御安心被成下度候

服部兄へもよろしく

明治三十四年

毎々御面倒ながら谷本氏へ別送のはがき御渡し被下度　同氏の宿所不明に付願上候也

四月十九日　　やいち

三〇

明治三十四年四月二十五日　ベルリンより
四谷區本村町三十番地　芳賀鋼子宛（パウル街の繪はがき）

これは唯今の寓居の一町さきの町なり　△印の處を左に曲つて一町行つた角に居るなり　○印の處を右に曲つた處がもと居た下宿のある處なり

四月廿五日　　やいち

〔圖中、巡査の下に〕　巡査

〔同、辻馬車の下に〕　辻馬車の待つて居る有様かくの如し

三一

明治三十四年四月二十五日　ベルリンより
四谷區本村町三十番地　芳賀鋼子宛（ウェルフト街の繪はがき）

これも寓居の近處の景色なり　瓦斯燈のある處から左へ曲つた二軒目がもと居た下宿屋なり

四月廿五日

やいち

三二

明治三十四年五月二十一日　ベルリンより
四谷區本村町三十番地　芳賀鋼子宛（繪はがき）

これは當國の皇帝皇后皇子達の寫眞なり　前列の最も右なるが皇太子にて今學期よりボン大學に入學せられたる人なり

五月廿一日

やいち

三三

明治三十四年

明治三十四年五月二十四日　ベルリンより
神戸市神戸中學校　得能文氏宛（繪はがき）

其後は御無沙汰に打過申候　立花歸朝の時ズーデルマンの小説托す事相忘れ候に付福原來月初旬歸朝の節賴む積に御座候
當地今月は御承知の如く春にていづれのプラッツも花咲きうつくしく御座候　春氣の催すにつれて故鄕の妻こひしく御座候　御一笑被成下度候
×××××君は思鄕病の積り〳〵て發狂し寓居に火を放ち人を傷け候　大騷に御座候　氣の毒といふも愚なり
フィングステンにて學校は明日より十日ばかり休なれども金なくて旅行も出來ず面白きこともなし　講義はリヒヤードマヤーの比較文學研究法及獨逸小説史聽講いたし居候　繪畫共進會今開會中なり　中々見事に御座候

五月廿四日　　芳賀矢一

三四

明治三十四年六月十一日　ベルリンより
神戸市神戸中學校　得能文氏宛（繪はがき）

拜啓　福原歸朝に付 Sudermann の Es War 一冊及び Hauptmann の Versunkene Glocke 一冊御送申上候
後者は今年の冬も處々にて興行せられ大評判の童話的戯曲なり（登張の帝國文學の論文を參照したまへ）　新版ものはいづれも高價故この度はこれ丈け　匆々不一

龍　江　生

福原は七月下旬日本につくべし
書籍目錄あとからおくる

三五

明治三十四年六月二十日　ベルリンより
ライプチッヒ　大幸勇吉氏宛（繪はがき）

坂本嘉治馬過日ラーツケラーより連名の葉書に對して返事をよこし貴兄によろしくと申越候　其中に例の化學致科書今年も六七千部相捌け候由も書添居候　羨しく存候　高師校長は又々嘉納氏に內定の由聞及候　已に御承知に御座候哉　小生萊府行見合せ候　今月洋服を拵へて餘裕なければなり　諸君によろしく

六月十九日

やいち

立花君船中にて死亡の由誠に驚入候（廿日書添）

三六

明治三十四年七月七日　ベルリンより
兵庫縣武庫郡西灘村岩屋四十九番屋敷　得能文氏宛（繪はがき）

日本新聞五月分落手　久し振りで非常におもしろかりき　爾後續いて御送り被下候はゞ大幸不過之と存候
七月七日　やいち

三七

明治三十四年七月二十日　ベルリンより
ライプチツヒ　大幸勇吉氏宛（繪はがき）

暑いのに閉口なることは御同感々々　八月には宿の人々海水浴に出掛ける由に付小生等は是非ともどこかに行かざるべからず　先日服部君よりライプチツヒ近傍の避暑地御通知被下候へども遠方の事故直にそれとも取極かね居り候　いづれ五六日中にはどこかに取極め一ケ月を涼しくくらし度と存居候　大兄はいつ頃萊府を去らるゝか

藤代氏多分十月頃より御地に參るべし　小生は今暫く伯林に居る積なり

七月二十日

やいち

大幸兄

三八

明治三十四年八月十二日　ベーンドルフより

四谷區本村町三十番地　芳賀鋼子宛（ベーンドルフ村停車場の繪はがき）

先日手紙にて細々申入候通この夏小生の寓居としたる停車場はこれなり

八月十二日

やいち

〔圖中、建物の上に〕　この二つの窓ある部屋に住居いたし候

三九

明治三十四年八月十五日　ハンノーフエルより

明治三十四年

四谷區本村町三十番地　芳賀鋼子宛（繪はがき）

薗田氏來遊に付同行して二三の都府を觀候　歷史文學の上よりおもしろき事も尠からず

八月十五日

やいち

四〇

明治三十四年八月二十二日　ベーンドルフより

神戸市神戸中學校　得能文氏宛（封書）

細々と御認の御書狀本日ベーンドルフといふ片田舍にて落掌繰返し拜讀いたし候　去年神戸に於て手を携へて數日の歡を盡せしは早や一年を過ぎ候　年光流水の如しとは誠に尤の次第に御座候　貴兄近來健康舊の如くならずとあり心配いたし候　何卒折角御自愛被下度祈上候　小生爾後益頑健御安心被成下度候　伯林に居つて嘸學問が進むだらうとの御推察誠に御恥かしき次第に御座候　たゞ世界を見て幾分か見識が廣くなるといふだけにて獨乙語などはおもひの外進まぬものに御座候　これは小生ばかりかとおもへば皆同樣の容子なり　大村、藤代、山口などの專門家は別物として醫學士連などにても話の上手な人はとんと無之候　十年位居らねば話などは上手になり申すまじく候　併し見識を長ずる點に於ては將來日本の社會の中樞となる人は是非一度は來遊せざるべからず

と存候　かく申せば餘程見識が進んだ樣なれどもさういふわけでもなし　唯だ世界の中央に立つて居る以上は何事も歐米の事情を知るが第一と存候故なり　小生國文學の上に於て將來施設すべき事情に就いては多少其方針を得たる積にて大に文學上の教育を起し國文學研究の事業を容易ならしめ將來文學發達に資する樣いたし度考に御座候　今日の狀態美術古社寺の類をはじめとして古史の材料も收拾せらるゝにあたり文學の材料、其整頓等の事業全くやる人なきは文化の上の一大缺點と深く感じ候　この點が小生の將來に盡すべき事業と確信いたし居候

日本教育事業に就いてつまらぬとの御說御尤には相違なけれどもいづこも同じ樣なものなり　獨乙にて四十年も同職に居るといふ事結構は結構なれども之と同時に腐敗といふ事は伴ひ來るなり　當地の老教員の中には十年以後の新刊書は讀まぬなどいふ人まづギムナジエンあたりの先生には普通なるが如し　それからみれば日本の新陳代謝して始終新しき人の入込むといふ事一害に伴ふ一利は又ある事なり　福原かつて大氣焔を吐きて曰くドイツの老文部參事官と余とを比ぶれば余の方遙に事務に通曉せるならんと　これ强ち大言壯語にもあらず　學問の深淵なる知識を要するもの又は經驗を要するもの等は暫く措き普通誰にでも出來る仕事の如きはかへりて若手のやる方が元氣があつて面白いかも知れず　伊藤侯や山縣侯の如き人も二十年もむかしの方が遙に仕事をやりしに相違なし　日本人の早衰の點はとても西洋人と競爭出來ねばむしろ始終新陳交代して若手に仕事をやらせる方が國家の爲かとも被存候　日本は諸國の長を採りてどん〳〵新しい事を入れる故おもひ切つた事が出來て西洋よりも進む事が出來る便宜もあり　日本の學校衞生の如きはたとへ表面上には過ぎずとはいへ世界第一といふ評もあり

巴里で三島氏は金牌を得たり　日本新進國の學校衞生獨乙及ばずと當地の新聞に慷慨せるをみたり　電氣鐵道の前に網の樣なものをつけて人をすくひ取る仕組京都などには前からあつて別に不思議にもおもはざりし處伯林にてはやう〳〵この頃少しづゝ用ひ出せり　目下開會中の防火博覽會にてその雛形をみて驚き居る人多きも現に目撃せり　西洋にて驚くは唯だ富の多き事なり　國民の元氣、勢力等に於て又大體の國家組織に於て日本開化の先進者が今日迄に輸入せし事は誠に感じ入りたる事にて中には餘計な模倣とおもはるゝ事無きに非ざれども中々甘く行つて居るものなり　西洋とてそんなに驚くに足らず　敎育上よりみて又一般國家の上よりみて實業敎育の點は我國殘念ながら數十步を讓らざるべからず　之さへしつかりやつてどん〳〵國富をまし商工業上にて西洋と對立する樣にさへなれば日本は恐るべきもの天下に無し　富の足らぬ事が將來最も憂ふべき事なり　併し富の發達につれて精神力の衰へる樣な事があつてはゆゝしき大事なり　是亦大に敎育家の注意すべき事たるに相違なし宗敎等の御意見に於ても同意なり　西洋は古い基礎の上に立つて居る故シツカリとしたる處ある代りに融通のきかぬ事もあり　日本はこの機に乘じてどし〳〵と進んでゆくべき時代と存候

日本の開化は當地の有識者いよ〳〵之を知りて之を恐れて居るなり　無敎育のやつは不相變野蠻國とおもつて居る故日常交際の上にはつまらぬ問などを出して癪にさはる事多し　こんなやつには何を言つてきかせてもだめなりとおもつて其儘にして置くなり　併し皆この通りなればしめたものなれども具眼者にはチヤント分つて居つて少しも日本に氣をゆるさぬ故日本人も餘程しつかり褌をしめてかゝらねばならず　日常交際する人の如きものと

おもふと大なる間違なり
ニーマンとかノイマンとか不思議にも同じ様な英人と獨人とに御附合出來候由大慶の事に御座候　日本に居る外人は日本の御世辭ばかりをいひ居る事と存候　ワルデルゼーなどの評判は如何　過る十四日當地にかへり皇帝は喪中にかゝはらず大騒をして迎へたり　一體このワルデルゼーは今の皇帝の師傅たりし關係より非常に信任あるわけなり　この度はフュルストに進むといふ評判あり　又ビューローは總理大臣をワルデルに譲らねばならぬかもしれずと當地の一二新聞に噂いたし候　この爺さん佛人に向つては佛人をほめ、米人に向つては米人をほめて中中くへぬ奴と存候
小生この八月は田舎生活をみ度考にて過日よりこの片田舎に住居し廣々たる野原の空氣を吸收いたし居候　明日は最早大分涼しくもなつた故伯林にかへり度と存居候　この家の爺は無教育なれども息子は法科の學生なり　いつも親子にて北極にては日が長いとか短いとかルーテルの生れたのはどこかとかこゝだとか議論する頗る興味あり　田舎人は流石に質樸にて伯林に居る時よりも餘程おもしろしとおもふ事も不尠　日本の平野とは違つて馬鈴薯と砂糖大根の畠のみにて其他には牛や羊の牧場あるのみ　森は流石に獨乙の事とて到る處にある故晝間はケットを抱へてこの森蔭に書物をよみに行くなり　中々風雅に御座候　併し浴場の無きには閉口　息子曰く溫湯に入浴するは人間の體を弱くする故獨人は夏の中は溫湯に浴するもの無しと　たゞ水で拭いて置くのみ　汚しといふべし　女などが雪隱より出て來るをみても決して手を洗はず　誠に汚き感をおこし候　田舎の學校の視學は牧師

がやり居るなり　これは成程一擧兩得ともいふべし　伯林などにて見る立派な視學官は勿論こんな村の視學にても教員はいづれも尊敬して居るが如し　日本の如く教員と視學と喧嘩する樣な事は無し　こゝの牧師とも近附になり昨日村の學校を一見いたし候　單級學校にて別段感服する點もなかりしが牧師は熱心に村の學校なれども整頓して居ると自慢いたし居候　この教員は中々財産家にて馬車などを持つて居り一人息女には婿になる望手が非常に多しとか　財産家にして小學教員をやつて居るなど一寸日本には例無かるべし　學校見物濟みて後葡萄酒を飮ませ候が中々よき酒の樣におもひ候　これは珍客とて特別に奮發せしならんと宿の爺申候　木板に日本の字を書いて子供にみせてくれといふ依頼にて半時間ばかり日本の字、支那の字を書いたり地圖にて日本の島の名などを教へてやり候處子供ども大喜なりき　すべて視學の教場に臨むや大した見幕のものなり（伯林にてもしかり）教師が發言中であらうが何であらうが生徒をしかつたり生徒に質問したり教師に注文してどん〳〵色々の事をやらせてみるなど面白きものなり　教師を生徒の面前でしかるなどは感服出來ぬ事なれどもとにかくその勢力の盛なるは驚くべし

讀賣新聞御送被下星氏事件よく分り候　何卒向後引續き何新聞にてもよろしく候間御送被下度奉願候　貞吉坊主よりは每號太陽を送りくれ候　其外にホトヽギス來る　其外には新聞雜誌何もみぬわけにて御座候　この田舍に芝居あり物もためしと一覽いたし候　木造の粗末なる建物（日本の議事堂の如き外觀）なれども四五百人は容るべし　道具立も中々立派にておもつたよりは驚き候　觀料は僅に一マーク位なり　日本にて村の百姓が芝居をす

るのと比ぶれば富の懸隔も驚くべく社會の秩序あるも感心すべし　この芝居をするといふ事よりみても人間は實に貴兄のいはるゝ如くパンのみにては生活し難きなり　さりながら田舍の末迄文學美術の恩澤に浴する樣にする迄にはとても〳〵金がいる事なり

山田氏に御逢の節はよろしく御傳聲被下度いつも無沙汰のみいたし居候　御令閨は御達者にや　まだ赤ン坊は出來ませぬか

姉崎、藤代は來學期ライプチツヒに移るならん　小生は不相變伯林に居るなり　薗田もサンスクリツトをやつて苦んで居るが近頃は×××××こられて諸處御供の旅行殆ど全歐を見盡し候　西班牙、魯西亞のみはまだの樣なり　土耳古へもゆき候　羨ましき事なり　×××小生の宅へも尋ねられ候が一向威嚴のなき俗物と見受けたり　滑稽などしきりにやり居れり　薗田よりは餘程の才子なり　流石に××だけはありと存候　藤井宣正氏に風采の似たる處あり　併し地理學にかけては中々の知識ある由　白鳥氏と大に中央亞細亞の地理を談じ兩人ともにお互に益を得たりといひ居り候　妙な藝もあるものなり

あまり長くなる故これにてやめ候　又々次に可申上候　匆々不一

八月廿二日

やいち

文　君

明治三十四年

四一

明治三十四年八月二十八日　ライプチツヒより
神戸市神戸中學校　得能文氏宛（繪はがき）

シラーハウスにいたり其筆蹟等をみる　寫眞の方が遙に立派なり　實に憐れなる住居にて坐に懷舊の念に堪へざらしむ

八月廿八日　　はゝや

四二

明治三十四年八月二十九日　ハルレより
神戸市神戸中學校　得能文氏宛（繪はがき）

ライプチツヒよりハルレに入り殘る隈なく見物す　この町古色ありて面白し

八月廿九日　　龍江生

四三

明治三十四年九月五日　ベルリンより
東京市本郷區森川町一番地　關根正直氏宛（封書）

其後打絕御無音に打過候處益御無事奉慶賀候　小生も幸に無異御放慮奉願度候　さて先日一寸はがきにて御願申上候一件何卒よろしく御願申上度藤代氏健筆を揮つて獨逸有名の詩人と合譯と出掛ける譯故同氏の名譽たるのみならず又幾分かは國光を發揚する次第とも被存候間如何なる本にてもよろしく候間忠臣藏の一本御郵送の儀奉願上候　假名手本の方猥褻な點も有之不都合といふ御考ならば外の忠臣講釋などにてもよろしく何にても御考次第にて御送奉願候

萩野兄も益御健全にて時々書面を送られ候　何より喜ばしき事に御座候　小生この手紙と同時に同君へも一通差出候　過日萊府に遊びし時の事など通信いたしおき候　自然御逢の節は御話に上り候事と存候　同地の書肆博物館及びマヤーの工場（書籍出版）すばらしきものと感服いたし候　人類學博物場にも日本のものは可なりに澤山あり伯林よりも多く御座候　小生八月には過日はがきを差上候片田舍に引込みて讀書いたし居候　近傍には例の獨逸流の森多く涼蔭讀書とシヤレル事は容易に御座候へども蠅の多きには閉口いたし候　田舍芝居も一度見物いたし候　人口は二三百の村なれども芝居は中々立派にて隔日位に音樂會あり近傍の村々より集まり來候故中々盛

に御座候　爺さん婆さんなど澤山集まりビールを一杯のんで樂み居候有樣田舍には田舍にて面白き事も御座候　婆さんなどは毛絲を編みながら音樂を聞き居り候　すべて當地に入りて感ずる事は上王侯より下百姓にいたる迄同一の文學、同一の音樂を樂む事が出來る事に御座候　田舍街道には草木を植ゑつけてある事昔の日本をおもひ出され候　林檎、梅など澤山房々となつて居り候　併しこれは路ゆく人の渴を醫する爲では無く村の財產の一部に御座候　これを村の子供も盜んで食ふといふ樣な事は無之候　公德といふやかましき事は卽これなるべくと存候　村の牧師と知合になり學校なども一覽いたし候　單級學校にて至つて粗末なれども先生は金持にて馬車などを持つて居り物數寄に學校教員をやつて居るものと存候　これ等は日本に其例なき事と存候　同一學校に廿五年居ると申候　村の靑年子供皆この人の弟子に御座候　教授法等に感服する點も無之候へども何となくユツタリとしたる處ありて日本の小學教員の樣にコセ／＼シタ處無之樣被感候　併しこれはホンの一人の事故これにて全豹は知れ不申候　ブランシユワイヒ、ハノーヴアー、ハルレ等の町々に遊び候　ブランシユワイヒは古色ありて中中面白く御座候　すべて歷史のある處は面白く御座候　西洋に居て金を澤山持つて旅行したらばそれ程面白き事は天下に無之るべしと存候へども何分第一に困り候は金に御座候　西洋の歷史も西洋に來てはじめて分つた樣な心地がいたし候　學校などでやつたのは無我夢中に御座候　お寺見物、古像、古墳墓搜索、西洋は列國との關係あるだけに趣味も一層多く御座候　規模も大きく御座候　案內人がこれは十世紀、これは十四世紀の誰々などいふ處日本と變りは無之候　羅馬、希臘あたりに遊びたらば更に一層愉快なるべしと遊興勃々禁じかね候

當地最早秋風立ちて已に外套を纒ひ居り候　日月流水の如く故國を辭して已に一年に相成候　本年の留學生發表の遲きは如何なる故にやと一同不審におもひ居り候

何かおもしろき事も御座候はゞ御報道に預り度　杉浦には久しく無沙汰　近日手紙をかく積に御座候へども御逢の節はよろしく御鶴聲願上候　其他の友人諸君にもよろしく　先日萊府より畠山君に東して禿頭は當地にも中々多しと書送り候　多分怒つて居る事と存候　御詫被下度候

右願用旁近況御報迄

九月初五

やいち

關根大人

みもとに

四四

明治三十四年九月十日　ベルリンより

神戸市神戸中學校　得能文氏宛（繪はがき）

去る六日ブツセ伯林に來る　小生松本文氏と之を訪ひ晝めしの馳走になる　不相替元氣なり　日本の事を色々聞

いてシベリヤ鐵道完成の上は今一度日本にゆきたしと言へり　誰かケーニヒスベルヒへ來ないかと頻に聞き居たり

九月十日　やいち

四五

明治三十四年九月二十八日　ベルリンより
ゲッチンゲン　大幸勇吉氏宛（繪はがき）

ハンブルグの大會に御臨席にて精神上幷に身體上に幾分の滋養物を吸收せられ候趣御はがきにて拜承欽羨々々
藤代は來月一日頃萊府にゆく筈　伯林も段々寂しくなつて困入候　今年の留學生は九月に發表と聞及候　藤井も萊府にゆく由

九月廿八日　やいち

四六

明治三十四年十月二十八日　ベルリンより
神戸市神戸中學校　得能文氏宛（封書）

藤岡兄よりの通信によれば貴兄近頃引續き凶事あり祖母君に別れ給ひて後又々間もなく御尊父も遠逝相成候由驚入たる凶音に御座候　特に遠隔の地に御住居相成候事とて種々の御不自由は申すに不及御哀傷の段も一層と深く御察申上候　謹みて御弔詞申述候

先日福原に托し候二冊の書御落手相成候由　小生は未だ二冊とも讀みたる事無之候

藤代は莱府に去り谷本先日當地に參り藤代のあとに住み唯今は同寓いたし居候　同人と小生とは元來氣風合はず毎日議論を爲し居り候　藤代と住みし昔を戀しくおもひ居り候

藤井宣正倫敦より來遊に付明日は文學士連一同打揃うてポツダムの舊都に半日の秋光を弄する積に御座候　秋といひても最早純然たる冬なり　落葉繽紛雨の如し　明日は去年伯林に入りたる滿一周年に御座候

巖谷氏を宗匠として白人會といふ俳句會當地にあり小生も此兩三度出席いたし候　まだ御覽に入れる程の名句は出來不申候

天長節の夜會も近づき候

一事爲すなくして今年も空しく暮れんとす　慚愧の至に御座候　金が無いのが何よりもつらし　匆々不一

十月廿八日

秋虎君

やいち

四七

明治三十四年十一月三日　ベルリンより

神戸市湊川神社官邸内　芳賀鋼子宛（繪はがき）

無事在歐第二回の天長節を祝し申候

十一月三日

やいち

四八

明治三十四年十一月十一日　ベルリンより

ゲッチンゲン　大幸勇吉氏宛（繪はがき）

其後御無事何よりの御儀に候　小生も瓦全御安意賜はり度候　藤代已に去り先月より谷本其あとに來れり　來月迄居るとの事　藤井君の出發は多分來年二三月頃ならん

十一ノ十一　　　　　　　　　　やいち

四九

明治三十四年十一月十三日　ベルリンより
東京市本郷區森川町一番地　關根正直氏宛（繪はがき）

本日假名手本忠臣藏相着し候　不取敢御禮申上候　岡倉君何月頃出發にや　又來年の東洋學會には上田、三上二氏の內來らるゝ事と存候　當地寒氣中々強く相成申候

十一月十三日　　　　　　　　　　やいち

關根大兄

五〇

明治三十五年一月一日　ベルリンより
ゲッチンゲン　大幸勇吉氏宛（繪はがき）

明治三十五年

いよ／＼今年はかへる事になつた　このうれしい新年をつゝしんで御祝ひ申す

元　旦

は、や、

五一

明治三十五年一月二日　ベルリンより
神田區駿河臺袋町十四番地　今立裕氏宛（封書）

十一月十五日の御書狀舊年十二月廿九日落手　益御多祥の由拜承奉欣賀候　小生も幸に無異第二回の新年を海外に迎へ候　十二月廿五日の耶蘇祭に續いて正月にてこの十四五日は學校も休み故何やかやがや／＼として相暮し候　藤岡氏も十二月廿一二日頃マルセーユ着の由にて三十一日即大晦日の日はじめて伯林に面會いたし候　近角常觀氏も在伯の事故同氏一切世話いたし居られ候　本願寺に關係ある人は右の外池山榮吉、薗田宗惠など東西の派は異なれども澤山居り候　姉崎、松本文などの宗教哲學者も居り候故宗教上の研究は一二年の後大に日本社會の上を影響いたし候事と存候　此際織田氏の佛教辭典に益御勵精の趣は謹賀の至に御座候　佛語解釋、國文十二種も已に御出版の由喜ばしき次第に御座候　作文教範第五冊及佛教金言集一冊御惠投被成下奉萬謝候

さて小生當地滯在も既に一年二ケ月に相成この四月にて滿一年半に相成候　就而は四月に當地を切上げて佛國に

向ひ一二ケ月滯在の上英吉利に遊びそれより歸朝の途に就き度と心積いたし居候　然る處何がさて少き學資の上に會計の下手故あてもなしに書物などを買ひ候處金子いつも逼迫にて旅行も出來ず困入候　就而は甚だ恐縮なる御願ながら作文教範印税の前借として百圓ばかり御融通被成下間敷候哉　今年は再版其他にて御入用も多かるべしとは存候へども右御許容被成下候はゞ大幸の至に御座候　尤も×××の方へも已に二三百圓借用の儀申入置候へどもこれもいつ來るやら分らず　いよ／＼當地を引拂ふに就而はそれ／＼書物屋の借金も拂はねばならぬ故若し御許容の上は此手紙着次第正金銀行又は第百銀行の爲替券にて御送附被下度願上候　小生當地着以來未だ×の味を知らぬ位故その邊の無駄遣には無之此儀は御安心被成下度候

福井婦人會設立中々盛なる事の由　婦人は概して無教育のもの殊に日本の今日の社會にては男子の知識を日に吸收するに比していくらか後れてゆく有様故男子の福井會とは別にして有益な講談にてもやる事にしたらば宜からんと被存候

八田氏不相變御元氣の由　當地にも海軍陸軍の留學生數名居り候　海軍の人の方がいづれも開けて居つて物が分つて面白き樣に御座候

伊藤侯は去月來遊　日本人會を催して寫眞など取り候　折柄川上貞奴の一行も當地興行中にて伊侯は貞奴が十三四頃のナジミの由にて大滿悦の様聞及候　伊侯ロシヤも、獨乙も、英も非常の大歡迎にて勳章は貰ふ御馳走には成る欣々然として歸られ候由

獨乙人と日本人との和獨會といふ會合ありこの十八日に大會を催し候處たま〳〵醫學のウイルヒヨーといふ大家も臨席し中々の盛會を極め候
森岡常藏氏は十一月下旬より急性肺炎にて一時は危篤の模樣にて萊府在留のもの(姉崎、藤代、服部、溝淵など)いづれも非常に心配いたし候由の處幸に追々快方に向ひ候へども尙病院に在り　段々寒氣に向ふ事故非常に注意を要するとの事に御座候　音樂學校の瀧廉太郎氏は先日咯血　これは純粹なる肺結核の由　誠に氣の毒の至にて國家の爲にも痛歎すべき次第に御座候
併し當年は當地珍しき暖氣にて去年に比べれば大に樂に御座候　其中にこの暖氣の反動が來るだらうと皆々申居候
坪井玄道氏は今月末頃最早當地を發足してそろ〳〵英國から米國へ向ふ由　小泉又一氏は尙當地に居り候　岡倉氏にはいづれ英佛兩國の中にて面會出來る事と存候
福井會諸君には御序の節よろしく御鶴聲被下度候

卅五年一月二日夜　　やいち

今立君
侍史

御令閨様へもよろしく御傳聲奉願候

五二

明治三十五年一月十八日　ベルリンより
本郷區東竹町二十六番地　斯波貞吉氏宛（繪はがき）

本日當プロシヤ王國建國二百年祭あり市中大に賑ふ　千七百一年は我が元祿十四年赤穗義士復仇（マヽ）の年にあたる

一月十八日

伯林において

芳　賀　矢　一

五三

明治三十五年一月二十七日　ベルリンより
神戸市湊川神社官邸內　芳賀鋼子宛（繪はがき）

今日小包荷物相着し着物慥に領收いたし候　父上樣の御扇子も拜見　知合の獨逸人にも見せ候處いづれも扇子もうつくしく日本國民は優美なりなど褒め候

明治三十五年

一月廿七日

やいち

五四

明治三十五年一月二十九日　ベルリンより
神戸市神戸中學校　得能文氏宛（封書）

舊臘十八日附の御書狀やう〳〵一兩日前拜見　益御無事の由奉賀候　小生も瓦全いたし居候　回顧すれば故友竹村の一回忌辰にも相成候　實に年光の流水の如きに驚かれ候　小生も伯林にあること一年以上ビスマーク、ゲーテにもあき〳〵いたし候　もう少し快濶た規模の大きな處へ參り度と存じ四月にはいよ〳〵巴里に轉學いたし度と存居候　服部、松本文なども多分は同樣四月頃同處へ參るべくと存候　松本唯今は伯林に居り候　姉崎は萊府に居り候　いづれも手紙は公使館にて轉送いたしくれ候間公使館宛にてよろしく御座候　藤岡も舊臘着林いたし候　白鳥はブダペストに參り候　これも誠に面白かるべくと存候　ブダペストは同人種といふ考より非常に日本人を敬重いたし候由　言語の上などには日本と著しき類似ありこの研究は非常なる有望のものに御座候　山口小太郎氏も匈語研究中に御座候　伯林より汽車賃僅に三十マークにてゆける故小生も其中一遊いたし度と存居候　歐洲の中は四通八達誠に便利に御座候へども例の金が不自由なるは誠に詮方無之候　小生研究に於て國語界の爲

めに盡すべき事業は段々と方針も立ち候へども日本の書物も無く早く日本へ歸つて仕事が仕て見度き考のみ相起り候　併し歸つてみれば又何も出來ぬ事と存候
先日愚妻より大兄御夫婦に御面會長々閑話を得大に氣晴しいたし候由申來候　御禮申上候
今年は芝居の面白きものも一向無之大抵は去年の同樣題目に御座候　同じものをいつ迄もやつて居るには感心の外無之候
一月廿七日皇帝の誕辰にてやゝ賑ひ候　いづれの學校にも祝賀會ありこの祝賀會にては必ず一つの學術演説ある仕組は日本にも追々流行させ度ものに御座候　單に君が代を歌ひ萬歳を祝するのみでは無之工業學校なれば工業の事、獸醫學校なれば獸醫の事、美術學校、大學それ〴〵或る立派な教授が日頃研究して置いた事をこの機會を以て演說して聞かせるなり　誠に結構の事と存候
決鬪は不相變盛んなり　學生のメンズールはしばらくおき鐵砲で命のやりとり此間から五六回もありたり　中に尤も氣の毒なるは間男をされし男が決鬪にて姦夫に殺されて仕舞ひたる件なり　これ等にても決鬪の愚なる事は分り候　これは隨分人の同情を惹きビュロー伯の夫人よりも被害者の老父へ弔電を發せし由新聞に相見え候　姦婦は亭主の死後も姦夫と文通盛なる由あきれた事に御座候　しかもこれは立派なランドラートの細君に御座候
西洋の惡口をいへばいくらでも有之候　善い事も澤山に御座候
四月巴里へ參り候節書物等は冬着とともに荷物にて神戸へ廻し候積に御座候　獨逸にて御入用の書物其他は御申

越次第同時に購求差出可申候間御申越被成下度　大抵四月中旬迄に着候様御手紙被下候はゞ間に合ひ可申候　日本よりの手紙は三十一二日、早きは四週間にて着いたし候　匆々

一月廿九日　　　　やいち

秋虎君

五五

明治三十五年三月二十日　ベルリンより
ゲッチンゲン　大幸勇吉氏宛（繪はがき）

此度の休暇に乗じて又々御旅行の由羨しき次第に候　福原より返事あり六月出立の件とにかく願書を出せとの事故昨日願書差出候　許否は勿論分らず候　これは新設の高架及地下鐵道に候

三月二十日　　　　はが、やいち

五六

明治三十五年三月二十日　ベルリンより
神田區駿河臺袋町十四番地　今立裕氏宛（封書）

御手紙本日落掌　封中の爲替證も正に落手いたし候　御無理なる御願早速御聞屆被下誠に難有御厚情感佩の至に不堪候　貴兄の方は四月前にていろ／＼御物入多きに不拘殊に御盡力被下候件誠に難有存候　外國に在りては金が第一に御座候
晟氏病死の由誠に氣の毒の次第に御座候　荒川氏の病死といひ晟氏といひ本年は二人まで親戚を喪ひ候　とかく冬の内は病人にはわるき事に御座候
岡倉、舟岡など追々參る事と存候　奥村は唯今伯林に在り兩三度面會いたし候　森岡も遂に全快に向ひ先以一命を拾ひ候由　唯今ストラスブルヒと申す處に居り候　先々芽出度事に御座候
當地今年は非常に暖氣にて雪も少く日本の冬よりも樂に御座候　併し日本は今頃そろ／＼彼岸櫻の咲きいづる時候と存候が當地は中々それどころでは無し
友田氏の作文教範中學教程に大抵あひ候由可賀々々　生徒用の御編纂中と承り候　これも至極よろしからんと存候　織田氏の外遊不相變壯んな事なり　新聞には岐阜から選擧競爭に打つて出らるゝやに記しあり候　實際に御座候哉
本願寺の近角氏、池山氏急に本山の命を蒙り先月出發歸朝被致候　最早歸朝相成候事と存候

坪井、小泉の二氏ホームシックの噂有之候由　當地の事色々日本にての噂となりいつも見當違ひに傳はるはをかしき次第に御座候　誰人も故郷をおもはぬ人は無之候へども學問の事やら國家の事やらを考へれば無暗にホームシックを起すものには無之候　但し病氣などすれば此限にあらず　健全なればホームシックと申す程のものは起らず候　金の無い時が一番にホームシックが起り候　坪井氏は已に巴里に向はれ候　來月は英國、今夏迄には歸朝せらるべし

此冬は頻に芝居見物を致し居候　當地の芝居は夕方から二三時間見るもの故先づは寄席へゆく位のものにて至つて手輕なれば誠に都合よろしく候

先は金子受取の御返事旁御禮迄　匆々

三月二十日　　やいち

今立君

五七

明治三十五年四月十五日　ベルリンより

神戸市湊川神社官邸内　芳賀田鶴子、敏子、光子宛（繪はがき）

これは猫が唱歌をうたつて居るところです

四月十五日

伯林にて

父より

五八

明治三十五年四月二十九日　ベルリンより

神戸市湊川神社官邸内　芳賀田鶴子宛（繪はがき）

けふ當地の水族館を見物す　神戸の水族館よりも少し大きく色々珍しき魚貝あり　これはその中の一部なり

四の廿九日

やいち

五九

明治三十五年四月三十日　ベルリンより

神戸市湊川神社官邸内　芳賀鋼子宛（繪はがき）

明治三十五年

これは當地有名の勸工場なり　三階にて非常に大仕掛のものなり

四月三十日

やいち

六〇

明治三十五年五月一日　ベルリンより

ゲッチンゲン　大幸勇吉氏宛（繪はがき）

度々の御はがき御厚志拜謝々々　小生は今月出發の願文部省へ出しおき候へども今以て指令無之どうなる事やら相分り不申　福原の手紙にては大抵許可になりさうなれども上田局長も辭任の由にて後任には松井氏就任　これは小生の爲には稍不便に御座候へども松井氏も多分許可しくるゝ事と存候　さすれば英佛等の國語調査法研究といふ事にてアメリカを經て七月には歸朝致度考に御座候　いづれ其中又々御報可申上候　匆々

はが、やいち

六一

明治三十五年五月三十日　エーナより

神戸市湊川神社官邸内　芳賀鋼子宛（繪はがき）

昨日當地に入る　當地には稻垣、小泉、林、大谷等の諸氏あり　唯今この四氏と市外の風景よろしき處に遊び豚の腸詰の燒立てを食ふ　誠に風流にて詩趣尠からず

五月三十日　　やいち

六二

明治三十五年五月三十一日　ニユールンベルヒより

神戸市神戸中學校　得能文氏宛（繪はがき）

佛國にゆく途中獨逸內巡遊の目的にて本日はニユールンベルヒに向ふ　ワイマル、エーナ等に於てはみるべきもの少からず　歸朝の上ゆる〳〵御話致すべく候

五ノ卅一　　やいち

六三

明治三十五年

明治三十五年六月四日　スツツトガルトより
ゲツチンゲン　大幸勇吉氏宛（繪はがき）

エーナに二日、ニユールンベルヒに三泊の後けふこゝに來た　あつくて困る

六ノ四　　　やいち

六四

明治三十五年六月五日　ハイデルベルヒより
ゲツチンゲン　大幸勇吉氏宛（繪はがき）

昨夜蜂谷のところに一泊　今日この地にいたり古城を見る

六月五日　　　やいち

六五

明治三十五年六月八日　パリより

神戸市湊川神社官邸内　芳賀鋼子宛（繪はがき）

昨夜巴里に着　十二日の一人旅にて疲れ居り候故一兩日中に手紙認め候

六ノ八　　やいち

六六

明治三十五年七月一日　ロンドンより

ベルリン　平井、戸塚氏宛（繪はがき）

いよ〳〵四日に當地を出發歸途に上る　重ねて在伯中の御厚誼を拜謝す

七ノ一　　やいち

六七

明治三十五年七月二十九日　コロンボより

神戸市神戸中學校　得能文氏宛（繪はがき）

本日當地着　八月十九日には神戸着可致候　時刻は郵船會社支店にて分り可申候
七月二十九日　芳賀矢一

六八

明治三十六年六月十日　本郷區龍岡町より
神戸市熊内橋東　得能文氏宛（封書）

拜啓　其後は御無沙汰に打過候　小生先月末よりあまり急激に色々の仕事をいたし候たゝりにや少々肋膜に故障あり蟄居いたし居候　それ故今夏は西遊も不出來　藤岡氏は今頃御地に御出多分御面晤の事と存候　さて乍突然冨山房に於て今般百科辭典編纂の企あり滿三年を期してマヤーの三冊物位のものを拵へ右完成の上は又之を增訂して大冊とするといふ計畫相立て候　就而は英語も獨語も出來文章も書け氣のきいた人を一人總裁とし度これは俸給百圓とし（當分の內事業すゝめばます）助手には五十圓位の人二人、來年よりは助手を二三人ふやし明後年には更に力を添へて完成いたし度由申居候　就而は色々相談の末大兄に於て萬一右總裁たる事御承知被下候はゞ大幸との事如何にや實は先般藤岡氏には一寸其話いたし候事に御座候　まづ三年間休職の事にでも都合して一奮發被成ては如何　書肆の事業とはいふ條日本現社會の爲になる一事業にて決して人に對して恥かしき事には無之　尤も御承諾相成る

としても來年迄は右事業の性質は他の書肆のまねするを恐れて祕密になしおき被下度との事　たゞ忠實に興味をもつて從事被下候上は書肆の方に於ては全力を注いでもこの事業に向ひ度由申居候　右御熟慮の上御一報を賜はり度　折角多年教育界に御盡し被成候功業を打棄てゝ再民間に下る事は或は御殘念かとも被存候へども三年間休職の都合にでもゆけばそれにも障はあるまじきかとも被存候　若し御決心相付候はゞ來月からにても願度由懇々申來候に付不取敢御伺申上候　何分の御返事賜はり度　何卒無御腹藏小生迄應否の御返事奉願上候也　右用件のみ　匆々不一

六月十日　　　　　　　　　　　　やいち

得能大兄

小生今月男子を擧げ檀(マユミ)と命名いたし候　右一寸御吹聽まで

六九

明治三十七年三月二十五日　本郷區龍岡町より
大阪市北區西寺町法住寺　岩城準太郎氏宛（はがき）

其後は失禮　來月三四日頃大學國文科學生七八名とともに御地へ參候に付可然願上候　委細拜芝の上

三月二十五日

芳賀矢一

七〇

明治三十八年六月二十九日　京都より
小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀光子宛（繪はがき）

おとなしくしてゐるとおみやげをあげます

六月廿九日

父より

七一

明治三十九年十二月七日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より
神田區小川町一番地　佐佐木信綱氏宛（封書）

今春女子出生の節は御祝品御惠與被成下奉拜謝候　其後亡父の事あり心祝も延引いたし居候處本日心ばかりの祝いたし候に就而は此品御笑納被成下候はゞ大幸の至に御座候　匆々不一

十二月七日

佐々木大人

やいち

七二

明治三十九年十二月二十八日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より
本郷區森川町一番地　關根正直氏宛（はがき）

女房太忙師走天。亭主爲閑獨茫然。想起去年重箱會。催來明日散歩連。
飲宴不厭第二次。費用勿超金五圓。諸君若有贊成意。九點鐘時集上田。

十二月廿八日

上田
芳賀

七三

明治四十年十二月二十九日　大久保余丁町芳賀眞吾内より

牛込區若松町　市村瓚次郎氏宛（封書）

おしつまり御繁忙の御事と存候　扨愚弟眞吾御近所大久保余丁町に引越し今夜結婚式擧行の處新世帯にて火鉢の持合無之來客七八人に對する唯一箇にて困居候　唯今より拙宅迄取りに遣すも時刻遅延いたし候間甚だ御面倒御迷惑の至には存候へどもどんな粗末なものにても不苦候間二つ三つ今夜だけ拜借相願度折入而御願申上候　匆々不一

十二月廿九日　やいち

市村大兄

侍史

七四

明治四十一年三月二十四日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より

小石川區關口駒井町二番地　松井簡治氏宛（封書）

昨日は失敬　今日は難有奉存候　扨當須藤求馬君かねて御存知の通り第一期漢文古典科の卒業生にも有之嘗ては第五高等學校教授たりし經驗も有之御校漢書の教授としては適任と相考候間昨日御話の缺員を補ふには最も妙か

と存候　狩野亨吉君も熟知の人故嘉納校長へは狩野氏より願出候筈に付貴兄よりも何卒可然御取成奉願上度紹介旁右御願迄申上候也　匆々不一

三月廿四日　　やいち

松井大兄

侍史

七五

明治四十一年六月一日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より

三重縣津中學校　岩城準太郎氏宛（封書）

益御清祥奉恭賀候　先般高等學校に付御申越の當時は文部省に關係ある或文學士就任に決定の由承知し御返事申上候處其後第八へは藤井氏轉任の事に内定又藤井氏後任としては藤井氏より大兄を推擧し第四の方に御決定の由重疊御芽出度事と御祝申上候　就而は先般藤岡氏より話あり富山の商業學校とかへ御推薦相願候下郷寛二郎と申すもの右商業の方已に塞がり候に就而は大兄後任として御推擧相叶間布候哉　中學教員としては人物學力とも最も適任と保證いたし候　且同人は尾張の人にて殊に郷里にも近く候故熱望いたし居候事に御座候　最早後任者御

決定相成居候哉も難測候へども必ずしも俸給其他大兄通りに無之てもよろしきは勿論の事に御座候間可然御周旋被成下度願上候　乍唐突右御願迄　匆々不一

六月一日

やいち

岩城大兄

七六

明治四十一年七月七日　京都より

京都市外下鴨村百八十二番地　大幸勇吉氏宛（はがき）

昨夜は態々御出被下談笑誠に樂しく相暮し本日大學へ御尋申上度存居候處歸途岐阜に立寄鵜飼見物いたし度の議起り出發時刻相早め候爲不得其意殘念の至に御座候　久原先生はじめ諸君へ御序の節よろしく御傳聲被成下度候

匆々

七月七日

やいち

七七

明治四十一年（推定）十二月二十一日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より
小石川區雜司ヶ谷町　岡倉由三郎氏宛（封書）

京都の冬景色は如何　ふとん着て寢たる姿の御話承り度存居候處本日不在中御尋の由殘念々々　いづれ來週中日をトしどこかにてゆつくり承り度と存居候　此頃はもはや學校は休に相成候へども文部省明日迄あり明後日以後は全くフライに相成候　然れども文なしにておまけに此年末より方々から入船あるべき處一々いすかの嘴とくひちがひ火の車にて自分のからだが本當にフライに可相成歟と存候　匇々

十二月廿一日

やいち

岡倉學兄

七八

明治四十二年二月二十日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より
神田區臺所町八番地　泮水會宛（封書）

明治四十二年

松永君が轉任して東京は寂しくなつた。小生は去年十月教科書調査會の國語讀本編纂を引受けてから、全く其事に忙殺されて居る。隨て自分の編みかけた師範學校讀本は、とう〳〵今年は出來ずに仕舞つた。今昔物語の考註を出す積りであつたが、それも後れて仕舞つた。唯朝から晩迄小學讀本の材料や、仕組に注意して居る。大學の授業と小學讀本の起草だけで其外何もかも斷わつてをる。これが小生の近狀です。家内は一同達者、一昨年迄に子供は七人。一昨年以後は、暫く中止の姿。此間或人に乞はれ、

白金も黃金も玉もしかずとふ子等七人もすくよかにして

二月二十日　　　　芳賀矢一

七九

明治四十二年（推定）二月二十一日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より

神田區小川町一番地　佐佐木信綱氏宛（封書）

海事協會に於て唱歌を作り度由大兄の御面倒相願度由申來候間同會編纂者多田氏御紹介申上候　何卒御引見聽取被成下度願上候　匆々

二月二十一日

佐々木大人

やいち

八〇

明治四十二年四月三日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より

赤坂區青山原宿百五十九番地　彌富破摩雄氏宛（はがき）

例の文部の小學讀本非常に多忙にて今月中は寸歩も都門を出で難きかと懸念いたし居候　高崎大人御歸京の節拜眉を得度候　右一寸御返事まで　匆々不一

四月三日

八一

明治四十二年十一月十一日　長岡より

小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀鋼子宛（繪はがき）

昨夜上田に一泊今日長岡に來る　明日新潟に入るべし　四山の紅葉まことに美し

十一月十一日

やいち

明治四十二年

八二

明治四十三年二月二十八日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より
京都帝國大學　藤井乙男氏宛（封書）

拝啓　先日は種々御苦勞嘸かし御勞れの事と存候　其後藤岡氏遺族の件段々取調べ相付き此五六日中には又々一會相催しいよ／\義捐金募集の件も發表いたし度歟と存候　扨それとは事變り是非貴兄の御承諾を得度由願出候もの有之それは他に非ず此度貴兄多年の御苦辛の結果御上梓相成候俚諺辭典を英語に飜譯して外國に出し度しと申すもの有之福喜多靖之助といふ仁にて多年米國に在り米國大學の卒業生たり唯今は米國大使館の飜譯係を務め居候由　見本によりて高著の內容を拝見し是非飜譯して外國に出し度貴兄と合著にてもよろしくもし御迷惑ならば貴兄の許を得て飜譯したといふ事にしてもよろしとの事にてとにかく貴兄の御承諾を得候樣盡力致され度云々小生迄依賴越候儀に御座候　何卒右御許容被成度いづれ當人より不日自書を以て願出づべく候へども不取敢小生より書中御願迄如此に御座候　匆々不一

二月廿八日

やいち

藤井學兄

八三

明治四十三年三月十九日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より
金澤市第四高等學校　岩城準太郎氏宛（封書）

拜啓　益御清祥奉賀候　扨故藤岡博士後任として廣島高等師範の藤村作氏轉任の事に內定相成候に就而は其又後任として貴兄に內談相試みられ度北條同校長より依賴相受候　藤村氏に於ても貴兄を推薦致され居候由　北條氏は義理上第四より人を採る事は貴校長に對して出來難き事情あり小生よりの依賴として話を進行する事に願度との事　右御含置被下度　同校へ御轉任の御希望萬一有之候はゞ小生よりの依賴として一應校長に御相談の上否哉の御返事至急奉願上度候　右用事迄　匆々不一

三月十九日　　　　　　　　やいち

岩城様

八四

明治四十三年（推定）五月二十日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より

小石川區關口駒井町二番地　松井簡治氏宛（封書）

拜啓　先般來は頂戴物やら御見舞やら種々御厚情深く奉感佩候　小生本日出發にて一週間ばかり歸鄕いたす積に御座候　いづれ歸京の上改めて御禮に參上可致と存居候　例の讀本敎師用參考書の調査上必要に付もし八田知紀の藤川紀行御所持に候はゞ一寸此者に御貸與被成下度　又饕庭氏の戲文中

畫工の倪雲林竹を愛し手づから方竹數十竿を植ゑて一枝を切ることをも甚だ惜む　萊陽の薰椎居士ブラリと遊びに來りしに倪先生其人を高しとし一枝を折りて之を贈る　時の人名譽の話とせしとか

とあり　右の倪雲林は明史（二九八）に本傳ありて奇行ある人たることも承知いたし候が萊陽の薰椎居士誰の事やら分らず　もし御分りに相成候はゞ御しらせ願上候　參上御願可申上候處出發前多忙に付書中一寸御願申上候

匆々不一

五月二十日

やいち

松井老兄

侍史

八五

明治四十三年八月二十二日　大磯より
本郷區森川町一番地　關根正直氏宛（封書）

東奔西走過日より又々當地の講習會農學校にて開會毎朝高麗山の後まで車にて通ひ三時間づゝ勤め居候　これも明後日にて相濟それより全く自由の身と相成靜養致度と存候　此頃は連日の勞にや午後は三時間位晝寢を貪り居候　廿五日には上京いたし度廿六日午前もし御差支無之候はゞ御面晤女子大學の件色々御相談申上度と存候　實は下村氏に一寸當地へ來るやう申遣候處同氏は過日來發熱の由にて來られぬ由　廿六日に相成りてもまだ遲き事には可無之に付左樣いたし度存居候　いづれは拜芝の上　草々不一

八月廿二日　　やいち

關根老兄
侍史

八六

明治四十三年十二月二十八日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より
本郷區駒込林町二十三番地　山内素行氏宛（封書）

益御清穆奉謹賀候

いつぞや願上候萬葉集中の格言御調べに對し誠に輕微恥入候へども金拾圓也封中差出候間御落手被成下度願上候　草々

十二月廿八日　やいち

山內大兄

八七

明治四十四年一月十日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より

神田區小川町一番地　佐佐木信綱氏宛（はがき）

本日例の序文に着手いたし候處先日御示しの年來御骨折の結果御發見の書名表いづれへか紛失困入候間折返し重ねて御郵送被成下度候　此段至急御願申上候　草々

一月十日

八八

明治四十四年四月十日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より
京都市外下鴨村百八十二番地　大幸勇吉氏宛（封書）

先般は御上京の處拜芝を得ず殘念々々　實は過日の御手紙にて七八九三日御滯京の事と相心得七日八日（マヽ）なりとも小生差支の爲九日偕樂園に同窓會相催し待てど暮らせど御出無之電話を掛くること再三なれども生憎吉原大火の日にて不通のみ　やうやく掛りたる處昨日御歸りとの事一同大笑にて幹事は散々冷かされ散會いたし候　例の通りの失策御高恕被下度候　尤も春期休業其他旅行の人等多く又約束の人中にも斷りの人あり當日參會は小生の外左の四名のみ

正木　水野　綿貫　中村清

とにかく御一笑被下度候　草々

十日　　　　やいち

大幸大兄

八九

明治四十四年九月三日　大磯より

神田區小川町一番地　佐佐木信綱氏宛（はがき）

三十日歸京二日又當地へまゐり候　御はがき拜見

うま酒にゑひふす姿あかずをせさゝ木のをぢに見られつるかな

おどろかす人無き夢ぞ圓なる枕にひゞく汽車は物かは

この名歌より人は物かはの食人とぞいひける

三　日

やいち

九〇

明治四十四年十月五日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より

神田區裏神保町九番地富山房　樋口秀雄氏宛（封書）

拜啓　萩原蘿月氏附合の話御掲載被成下難有存候　右原稿料何卒同氏手へ渡るやう御願申上候　同氏不日地方へ赴任に付取急ぎ居候に付願上候　草々

十月五日

やいち

樋口賢兄

九一

明治四十四年（推定）小石川區音羽町三丁目二十三番地より
小石川區關口駒井町二番地　松井簡治氏宛（はがき）

檢定委員會合催。廿七土曜午前開。場所文部省一室。答案點數持參來。

九二

明治四十五年一月十一日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より
本鄉區森川町一番地　關根正直氏宛（はがき）

檢定試驗問題會。仍例一橋學士會。十六日（火）前九時。遲刻無之請來會。

一月十一日

芳賀矢一

九三

明治四十五年

明治四十五年二月十三日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より
本郷區西片町十四番地　得能文氏宛（封書）

先日來かけちがひ不得拜芝　例の藤岡氏義捐金一兩日中取纒め相渡度と存候に就而は貴兄の分百四十何圓かも御取纒め置被下度　決算書其の他も御相談いたし度　金曜日は今度は文部省の會議があることと相成候　木曜の夜分にても拜眉いたし度　右當用まで　御返事願上候

二月十三日　　　　やいち

得能文様

九四

明治四十五年七月十一日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より
神田區小川町一番地　佐佐木信綱氏宛（封書）

昨日は滯なく相濟芽出度存候　嘸々御つかれの御事と存候　かねて御熱望の萬葉集定本もいよ〳〵文藝委員會にて着手と決定いたし候矢先萬葉古寫本の天覽に入候事國文學の光榮慶福言語に絕し候　尊大人御靈もさぞかし御滿悅の御事と存候　小生も以お蔭大に面目を施し候次第に御座候　不取敢御禮旁御歡迄　草々不一

七月十一日　　やいち

佐々木博士

几下

敷島のみちのほまれと宇治川をさきがけするといづれまされる

九五

大正二年七月十七日　基隆より

小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀梓苑（信濃丸の繪はがき）

これはおとうさんがのつた舟です

十七日　　父より

九六

大正二年七月十八日　臺北より

大正二年

本郷區西片町十番地　長谷川福平氏宛（繪はがき）

臺灣はおもつたよりは暑く無之候　知友頗る多く愉快に御座候

十八日

やいち

九七

大正二年十月三日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より

赤坂區氷川町二十六番地　潮田方藏氏宛（封書）

拜啓　先般一寸入御耳置候田鶴子嫁入先の件いよ〳〵工學士××××に取極度歟と存候　同人は昨年工科大學機械科卒業目下福岡三菱炭礦會社に奉職致居ものにて現在の俸給は六〇、四月分位のボーナスを貰受候由　學業も優等の方　品行も方正　高等師範教授乙竹岩造氏の末弟にて母方叔父の養子と相成候者に御座候　就而は右に關し御異存も無之哉一應御伺申上候　御返事次第吉日をトし結納取かはせ相濟ませ度考に御座候　實は參堂御話可申上候處近來學期初にて殊に多忙又鋼子事兩三日風邪の氣味にて臥蓐罷在候間乍略儀書中得貴意候　不惡御諒恕願上候　右用件のみ　草々不一

十月三日

やいち

潮田老兄

九八

大正二年（推定）十二月十七日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より
牛込區天神町七十五番地　和田信二郎氏宛（封書）

先刻文部省にて御願申上候書物何卒此者へ御貸與被成下度懇願申上候　草々

十二月十七日

やいち

和田賢臺

九九

大正三年三月十二日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より
横須賀市不入斗百四十三番地　芳賀眞吾宛（封書）

拜啓　たづ子結婚式いよ〳〵來る廿六日擧行の事に相定め候に就而は當日十二時半迄に日比谷大神宮式場へ御參

列被下度　可相成御兩所とも願度候　式相濟候後丸木寫眞店にて親類一同撮影それよりホテルへ參度存候　右申上置候　草々不一

十二日

やいち

眞吾殿

一〇〇

大正三年三月三十一日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より
横須賀市不入斗百四十三番地　芳賀眞吾宛（封書）

拜啓　たづ子結婚式に御上京の都合つき兼候由にて殘念に存候　同式も無事結了新夫婦も至極睦じき容子に御座候間御安心被成下度　廿七日より廿九日迄本牧乙竹氏別莊に滯在明一日發足神宮參拜の上任地へ向ひ候筈に御座候　右不取敢御報知申上候　謹具

三月卅一日

鋼子

矢一

眞吾殿
鶴子殿

一〇一

大正三年七月二十四日　福岡より
門司市役所　永井環氏宛（繪はがき）

いにしへも今もかはらず敵し國ことむけましゝすめら御稜威は
一昨日來種々御騷待奉萬謝候　星君は始終親切に世話し與れられ榮屋一泊本日太宰府巡覽當地に着いたし候
七月廿四日　やいち
諸君によろしく

一〇二

大正三年八月二日　別府より
門司市淸瀧　永井環氏宛（繪はがき）

先日は又々御厄介奉謝候　海路は疊の上を行く如く涼しくそれで晩食附とは廉い物也　當地浴客未だ多からず一兩日中に御來遊奉待候

舟中

甲板無人夜欲央　船頭獨領海風涼　訝看天角流星落　何處燈臺明滅光

一〇三

大正三年八月八日　岐阜より
本鄕區西片町十番地　長谷川福平氏宛（繪はがき）

文章會の件に付御注意難有存候　不都合千萬の事に御座候　歸京の上何とか相談じ可申候

八日　やいち

おのが業とり得し魚もおのが腹こやさで鳥のうとやいふらん

一〇四

大正三年八月九日　岐阜より

神奈川縣大磯小學校前　芳賀檀宛（繪はがき）

廣島、高松を終へて豫定の如く一昨日當地に來る　十四日夜歸るつもり

九　日

やいち

一〇五

大正三年八月十八日　福島縣喜多方より
靜岡縣沼津在靜浦保養館　穗積陳重氏宛（封書）

拜啓　先般はとし子事永々御厄介に相成誠に難有奉存候　十五日箱根越にて私は乘りつけぬ馬に跨り候爲腰いたく一兩日は大磯にて休息いたし度存居候處當地よりの電報にて十六日夜行にてまた當地教育會へ參り候爲御禮も延引致候　不惡御諒察被成下度願上候　岐阜より御送申上候鮎御口に合ひたる由にて誠に本懷の至に奉存候　留守宅へも品々頂戴仕候由母よりもよろしく申上候樣申出候事に御座候　先は御禮申上度如此に御座候　草々不一

八月十八日

やいち

穗積先生

大正三年

侍史

一〇六

大正三年十二月十八日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より
金澤市第四高等學校　岩城準太郎氏宛（はがき）

北國新聞東圃全集の結集といふ文を拜讀して御丹誠のたゞならざるをおもひ故友の遺稿の世に出づるの近きを喜び候　先般御病氣とは承りしが御愛兒を失ひ給へりとは始めて承知驚入候　御禮かたがたママ、御見舞まで　草々

十二月十八日

やいち

一〇七

大正四年二月二十五日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より
金澤市第四高等學校　岩城準太郎氏宛（封書）

拜啓　其後は御無沙汰に打過申候　さて先般來野尻奈良女子高等師範學校長上京あり同校の國語主任として貴兄を招聘致度旨上田氏及び小生へ話有之　小生は先年廣島高師の話ありし時も御斷り相成りたれば多分むつかしか

るべしと返答致置き尚上京中の溝淵氏にも話したるに同校長ももとより貴兄を手放すに意なし　但し貴兄が行つて見ようとあれば強ひて止める譯にも參らずとの事に御座候　野尻氏よりはとにかく一應御聞被下との事に御座候間御伺申上候　溝淵氏は今夜歸鄕、野尻氏は今二三日滯京に御座候間御決心の次第溝淵氏とも御相談の上可相成は野尻校長在京中御返事を賜はり度願上候　野尻氏の話にては俸給等はもとより多少進める由申居候　これも附言致置候　右用件のみ　草々

二月二十五日

やいち

岩城賢臺

侍史

一〇八

大正四年八月二十日　京都より
門司市役所　永井環氏宛（繪はがき）

重ね／＼の御心添難有奉存候　今朝無事神戸着　正午より此地見物致させ候　明石、梶原兩君へよろしく

八月二十日

一〇九

大正四年八月二十六日　大磯より
門司市役所　永井環氏宛（封書）

拜啓　益御清適の御事と存候　先般御地通過の節は例により子供等まで御懇遇を蒙り一同大慶に御座候　廿一日大磯へ歸着の處東京へ殘しおき候三女光子面疔を患ひ切開すべき由にて愚妻は直ちに上京　小生は子供六人のお守をして本日まで大磯に靜養罷在り候　最早學校開始の期も迫り候間本日限り當地を引拂ひ歸京の筈に御座候本年は幸ひに低氣壓にも逢はず無事旅行を卒へ候　門司にて御世話相受候梶原氏へはいづれ挨拶可致候へども御序の節よろしく御鶴聲願上候　まづは御禮まで　草々不一

廿六日　　　　やいち

永井大兄
　侍史

一一〇

大正四年十一月十一日　京都より
小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀檀宛（繪はがき）

即位禮昨日相すみ本日は御神樂なり

十一月十一日

父より

一一一

大正四年十一月十一日　京都より
小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀梓宛（太平樂の繪はがき）

この大嘗祭後の舞樂は十六日に行はせらる

十一月十一日

父より

一一二

大正四年十一月十四日　京都より

本郷區西片町十番地　佐佐木信綱氏宛（繪はがき）

天の下のおほみたからに幸あれと神まつりますす皇大君

天氣よく市中の賑も一入に御座候

十　四　日　　　　やいち

一一三

大正四年十一月十四日　京都より

小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀梓宛（繪はがき）

日本晴のお天氣

十　四　日　　　　やいち

一一四

大正四年十一月十四日　京都より

小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀箕宛（繪はがき）

けふは大嘗祭　お天氣もよし

十　四　日

やいち

一一五

大正五年一月二十七日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より
牛込區拂方町九番地　穗積陳重氏宛（封書）

謹啓　今般樞密顧問官に御任命の由重ね／＼御芽出度御事に存候　多年の御勳勞もとより當然の事とは存候へども誠に慶賀不能措次第に御座候　早速拜趨御喜び可申上處御多用中却つて御迷惑と存じ乍略儀書中御祝申上候
御一同様へも可然御鳳聲奉願候　草々不一

一月二十七日

やいち

穗積先生

大正五年

一一六

大正五年二月十七日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より
豐橋市旭町一丁目一番地　三浦常彌氏宛（封書）

拜啓　先般來度々の御手紙拜誦　小生讀本中にある靜御前の事に付御迷惑相掛候由誠に御氣の毒に存候　さるにても今の教育家といはるゝ人のあまりに偏狹なるには浩歎の外無之候　さういふ校長の意見とは實に驚入候　僞善主義の教育といはうか何とも評する語も無之候　御序も有之候はゞ靜の事は國定讀本第十二卷鎌倉の歌にも入り居る事を御忠告被成下度候　尙御申越の御轉任の件は出來得るだけ盡瘁仕度存居候　不取敢御返事まで　草々不一

二月十七日　　やいち

三浦様

一一七

大正五年四月二日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より

福岡縣鯰田炭坑社宅　池永田鶴子宛（はがき）

つくしよりおくり越したるつく〴〵しつく〴〵うれし心づくしは

四月二日夜

敏子乳にでき物出來産科より外科にうつり二回手術やう〳〵兩三日前より平熱に相成まづ〳〵安心いたし候　もはや御案じ下さるまじく候　赤ン坊の名は重正（シゲマサ）と申候

一一八

大正五年五月二十九日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より

赤坂區青山南町六丁目百一番地　芳賀眞吾宛（はがき）

御手紙拜見　小生は七月二十九日横濱出帆の天洋丸にて渡米致す事に決定致候間左樣御承知被下度候　いづれ御面晤の上　草々不一

五月二十九日

一一九

大正五年六月二十日　小石川區音羽町三丁目二十三番地より

金澤市第四高等學校　八波則吉氏宛（封書）

拜啓　益御清適奉賀候　さて此度文部省にて讀本編纂擴張の結果圖書官任命可相成處貴兄を適任者として採用致度旨の希望有之候　小生は先年岡田良平君次官たりし頃依囑により其の任にあたりし以來已に十年に垂んとし現行の讀本を完了いたし候爲實は最早斷り度存居候（尤もこれは唯今の文部省に申出しても實は一寸許しさうもなき故まだ表立つては不申出候）　將來此の方面に於て御盡力被下候事出來候はゞ誠に結構の事と存候間御承諾被下間敷哉　貴兄を候補者と致し候事は實は小生の發案には無之小生はもつと若き人を養成する考にて××××を申出し候處文部省内にては××にはそれ程の信用無く貴兄をといふ發議あり小生もはじめて貴兄を思ひ出して大にそれに贊成致候次第隨つて××の方は囑托として本官に任用せぬ事と相成譯に御座候　岡田氏よりは〇〇〇氏との推薦も有之候へども歌はとにかく全體の讀本編纂者としては貴兄の方贊成なりとこれは小生が次官以下に言明いたし候所に御座候　それ等の事にて小生は發議者に非れども贊成者たり又省内にては貴兄を推薦するものも多き模樣故御就任の上何等顧慮する所は無之事と存候間溝淵校長に御話しの上御承諾被下候はゞ幸甚に御座候××も貴兄の御授業を受けし事もあるとの事故旁貴兄の御指導を受けさせ度貴兄なり××なりに於て段々此の方面を御擔當被下候はゞ小生の手を引くにも都合よき事と相成可申と存候　俸給其の他に於て御希望の點も有之候はゞ小生迄御申出被下てもよろしく御座候　本日文部省にて次官等と相談の結果田所よりは溝淵へ轉任依賴の手紙を出すに付小生より貴兄へ勸誘狀を出さうといふ相談に相成申出候儀に御座候　尙從來囑托たりし高野辰之も

圖書官に任命の筈　囑托としては幸田露伴これは小生今日面會してあら方承知いたさせ候事に御座候　其の外一二の人加り可申さうして新讀本を編製する筈に御座候　不取敢右御願申上候　何卒至急御返事願上候　草々不一

六月二十日

やいち

八波大兄

一二〇

大正五年八月十日　ホノルルより
東京市外代々木山谷百六十六番地　斯波貞吉氏宛（繪はがき）

昨日着布　三週間ばかり滯在の積に御座候　皆樣へよろしく

八月十日

やいち

一二一

大正五年八月十日　ホノルルより

小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀檀宛（繪はがき）

十日の航海無事八月九日布哇着　こゝに來月五日頃まで滯在する

八月十日

父より

一一三

大正五年八月十一日　ホノルルより

小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀鋼子宛（封書）

御一同御無事と存候　出立後天氣具合は誠によろしく船中にては音樂會やら日本人會やらありて退屈もせず　經度百八十度を經過する故八月六日が二日ありて十一日目の八月九日午後にホノルル府に着いたし候　諸井總領事には種々世話に相成候　ホテル、ヤングといふこの家に滯在いたし居候　布哇讀本編纂の爲也　日々教育會等へ出席　此頃の新聞（日本字新聞）は毎日小生の話にて持切なり　當地は人口六萬　其中二萬は日本人なり　電車中の掲示も英語と日本語とにて記しあり　自動車の番號は三〇〇〇以上あり　熱帶地なれども貿易風そよ〳〵と吹きて秋よりも涼しく浴衣一枚にては夜は寒き程也　色々の美しき花咲亂れて極樂のやうな綺麗な景色なり　併し永く居れば變化なくて面白からぬ由　來月四五日頃春洋丸の來るまで滯在　其までに讀本を編了する見込に御

座候　桑港着は九月中旬に相成最早白服は不入用故春洋丸を去る時同船に托し横濱より小包にて送り返す積に候間左様御承知被下度候　お前の面疔も直り候事と存候　小生のしつのやうなものも船中にてすつかり直り候　不取敢右のみ　草々

八月十一日

やいち

かう子殿

一二三

大正五年九月一日　ホノルルより

小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀鋼子宛（繪はがき）

山内關西中學校長、淺賀香川師範學校長天洋丸にて歸朝に付繪本少々送り候　雅人が欲しいと田鶴子が申居候に付二三冊御遣し被下度候

九月一日

やいち

一二四

大正五年九月十日　春洋丸より
小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀鋼子宛（封書）

東京には惡疫流行の由時々新聞に見え候に付案じ居候　子供等一同無事に御座候哉　よく〳〵飲食物御注意被成下度候　小生布哇滯在四週間に相成今月六日春洋丸に搭乘桑港に向ひ候　明後日は同地着の筈に候　布哇教育會よりは記念として立派な金時計一箇贈られ候
布哇の繪葉書帖も記念として贈られ候　繪葉書帖は夏の白服とともに本船より直ちに小包郵便にて日本へ送り候
繪葉書帖は子供等共同の慰物として大事に保存するやう御話被下度候
航海中昨夜あたりより俄に冷氣加はり候　この具合にては桑港にては外套も入用の事と存候　手紙を下さる時はニューヨークの總領事館あてに願上候　草々

九月十日　　やいち

鋼子殿

一二五

大正五年九月二十六日　サクラメントより
小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀鋼子宛（繪はがき）

けふこの町へ來た　明日はロスアンゼルスといふ處へ行く

九月廿六日

やいち

一二六

大正五年九月二十八日　ロスアンゼルスより
小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀國子宛（繪はがき）

これは駝鳥を飼つてゐる所です

九月廿八日

父より

一二七

大正五年十月四日　シカゴより
小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀鋼子宛（封書）

家内中も親類中も皆々無事と念じ居候　惡疫も大分下火に相成候や　先日石原類似コレラの由桑港の新聞にて見て驚入候　併し領事等の話もあり一兩日容子を待居候處其後何のしらせも無き故ホンの腹下りと安心いたし候　千頭氏は誠に氣の毒の事をいたし候　これも新聞にて承知いたし候　桑港には日本新聞あり候故大事件だけは分り候　九月廿七日桑港を出發途中諸處よりはがき、繪本等を送り候如くロスアンゼルス、ユタ等を經て本日米國第二の大都會シカゴに到着いたし候　こゝには有名なる大學もあり二三の人に面談可致に付一週間ばかり滯在十四日頃ニューヨーク着の積に御座候　何しろ物價の高きには驚入候　歐洲とはちがひ米國人の贅澤は豫想外なり　當地には三越のやうな家は何百軒あるか分らず　家並それにて美しさは格別なれど電車やら自動車やら高架鐵道やらやかましくて且は危險容易に町の向側へは渡れず候　朝めしに咖啡、パン、ハムと卵二つにて一圓は取られ候　晝めしなどうかと食ふとすぐ三圓位、靴磨の一回二十錢はまだ安い分に候　最も安いものは郵便切手にてこれは日本と同様也　桑港よりこゝまで何千哩　急行汽車で四晝夜かゝり候　つれもなき故大分退屈いたし候　田代、斯波、岡田氏など皆已にニューヨークへ向ひ候　稻垣氏のみはまだカリフオルニヤに居り候　岡田氏は娘

づれ故憮金を費ひ候事と存候　池永、穂積の孫等も健全と存候　晴子さんは最早市河夫人となられ候事と存候
時々はがきは出しおき候へどもよろしく願上候　草々

十月四日

やいち

かう子　殿

一同からだを大切に願ひ候　檀などあまり勉強せぬやうに御話被下度　梓へも學校の成績などあまりやかまし
く言はぬやうなされ度候　小生も八月以來酒をやめて居り候　煙草は米國は非常に安き故のんで居り候　から
だはまづ〳〵異狀無之候　唯左の目はだん〳〵見えなくなり候

一二八

大正五年十月七日　シカゴより
門司市役所　永井環氏宛（繪はがき）

カリフオルニヤにて月餘いよ〳〵東方へ向ひ先日來當地に居り候　一兩日中ニユーヨークへ參り可申候　當市の
公園組織には感心いたし候

十月七日

大正五年

一二九

大正五年十月十八日　ニューヨークより
神田區裏神保町九番地冨山房　坂本嘉治馬氏宛（封書）

益御清祥の御事と存候　貴兄支那御漫遊中と存じ手紙も差控申候處此手紙の着の頃は最早御歸朝と存候　或は旅行御斷念にや　大隈內閣もいよ〳〵辭任新日本の景況如何　小生各地漫遊の上本月十四日いよ〳〵ニューヨークへ着　本日より三週間ばかり滯在の積にて下宿住居を始め候　書物の選擇はゆる〳〵いたし今月末に取揃へ百圓位のもの御送可申上候　あとはイギリス、フランスへ渡りての事と可致候　ホノルルへあての御手紙には文部省より何か都合よき話有之候模樣にて稍心樂みにいたし居候處其後何等の音沙汰も無之一時の糠喜びに有之候併し貰つた旅費だけにて足らぬ事は無之候へば御安心被成下度候　當地には同行の岡田、斯波二博士も來り居候稻垣、田代二君は未着　八田東京第三中學校長とシカゴより同行當地にも二三泊同宿いたし候　本日より別々の下宿にはいり候　大統領選擧以前にて市中何となく活氣立ち婦人の大道演說など日本にては見られぬ圖に御座候シカゴに比ぶれば何となく住心地よく御座候　「學生通信」は寸暇を偸みて本日第二信「カリフオルニヤだより」相認め候　次には「シカゴ及びニユーヨーク」を送り候間西村君に御話し置被下度候　唯今は何事も大仕掛なる

米國式に感心いたし居候　但し歴史的感興なきには物足らぬ感じのみいたし候　御子様達の欲しいといはるゝものあらば御土産に買求め可申御申越被下度候　草々

十月十八日

やいち

坂本賢兄

一三〇

大正五年十月十九日　ニューヨークより
小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀鋼子宛（封書）

母上様はじめ皆々御無事と存候　小生十四日途中ナイヤガラの瀑布を見てニューヨークへ着　二三日宿屋住居の上本日より三週間の積にて下宿へ引移り候　もと德大寺男爵の住んだあとにて一寸よろしき部屋に候　當地は米國第一の都會にて人口五百萬　世界第二の大市なれどもシカゴに比ぶれば何となく落付よく居心地あしからず往來の日本人も多く日々珍しき人に逢ひ候　來月七日大統領の一般選擧あるため市中は一方ならず活氣立ち路傍には諸處政談演說あり　自動車に立ちて婦人の熱心に演說するも數多見受け候　女子の活潑なることは豫想の外にて面白き見物に候　面疔再發の處程なく御全治の由安心いたし候　四郎氏外遊の由御めで度事に候　留守中は

田鶴子谷中へまゐる方至當と存候　谷中の意見に御まかせ可被成候　四郎氏出發の時日相分り旅行の豫定も略〻相分り候はゞ御しらせ被下度　小生は今年末まで米國滯在　十二月末には多分英國へまゐり可申　倫敦あたりにて四郎氏にも邂逅致し可得と考へ候　石原病氣は無根の由當地にて承知いたし候　能勢をば様も無事の事と存候　秀緣談の事は出來れば都合よろしかるべく候　手紙は今月末までに着の豫定ならば當地領事館にて願上候　大川氏へよろしく

十月十九日

ニューヨークにて

やいち

かう子殿

眞吾及び四郎氏の番地失念　御序の節御しらせ被下度候

一三一

大正五年十月二十一日　ニューヨークより

東京市外代々木山谷百六十六番地　斯波貞吉氏宛（繪はがき）

伯母上樣はじめ皆々樣御變りも無之候や　小生本月十四日此地着　唯今大統領選擧前にて市中活氣立ち居り候

十月廿一日

やいち

一三二

大正五年十月二十二日　ニューヨークより
本郷區森川町一番地　關根正直氏宛（繪はがき）

久々御無沙汰に打過申候　皆々樣御無事に御座候哉　東京は惡疫尙流行の由御用心專一に奉存候　小生諸處漫遊
今月十四日やう〳〵此の地に着仕候　二三週間の後ボストンへ參るべく今年末まで米國滯在の積に御座候

十月二十二日

やいち

一三三

大正五年十一月二十六日　ニューヘーブンより
小石川區關口駒井町二番地　松井簡治氏宛（繪はがき）

字書に名高きウエブスターの舊宅なり　今は他人住居いたし居候

十一月廿六日

やいち

一三四

大正五年十二月二日　ニューヨークより
小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀鋼子宛（繪はがき）

四郎さん三十日の船にて御立ちの由　もし間に合ひ候はゞタキススの薬三瓶御頼み被下度　小生は今月末か來年初早々英國へ參り候　多分ロンドンにてお目にかゝり候事と存候

十二月二日

やいち

一三五

大正五年十二月六日　ニューヨークより
小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀鋼子宛（封書）

年末にて色々御いそがしき事と存候　たづ子の產期も近づき殊更御多忙と存候　小生健全米國各地の大學巡察も

略片づき本月十日頃よりボストンへ參りそこにて二週間も居れば米國の用事は大抵相濟可申候　就而は來年正月六日出帆のセント、ルイスといふ船にて英國へ渡り度と存居候　獨逸潛航艇出沒に付他國の船にては危險なれば米國船を選び候也　英國にては日本の文字にて書きたるものなどは檢査大分やかましき由に付日記等もそれ以前に日本へかへす積に候　當地にて都合よきカバン一つ買求め候に付日本より持來り候大カバン二つは箱荷として當地出帆の際郵船會社の荷物船に托し日本へ返送可致と存居候　それは重に書物を入れおき候　又寢巻なども荷物になりあまり澤山は不用に付送りかへし候　荷物受取方は冨山房の長谷川氏へあて委細依頼いたしおき候間同氏より屆けらるゝ筈に候　御受取の上は其儘に物置の隅にてもお入れおき被下度候

池永氏本月三十日出發の由　米國着は來月十六七日に可相成小生出發の後にて米國にては面會出來がたく殘念に存候　多分二三月間は米國に滯在の事と存候へば小生が英國に居る中に英國へ來らるゝ事と存候　小生は英國へ渡航の上にてもし佛國へ渡れゝば參るべくあまり危險ならば英國滯在の上或は再びアメリカを經由して歸朝するやも難測　いづれ何處かにて逢ふ事と存候

多忙の爲冨山房等へも無沙汰いたし居候　其他親戚一同へもよろしく御傳へ被下度候　草々

十二月六日

やいち

かう子殿

大正五年

今後の手紙は英國大使館氣付にて御差出相成度候

一三六

大正五年十二月二十一日　ボストンより
小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀鋼子宛（封書）

御一同御變りも無之事と喜び居候　田鶴子の出產、敏子の出立等池永、穗積兩家の爲嘸御多忙なるべしと推察いたし候　小生本月十二日より當ハーヴアード大學へまゐり種々視察　大學內のコロニアル、クラブといふ倶樂部に止宿二週間滯在　今月二十七日一旦ニユーヨークへかへり來月六日英國へ渡航の積に候　當地は每日寒暖計零下十度位にて隨分寒く積雪一尺なれども室內暖なれば蒲團は無くても濟む程に候　先便にて申上置候通り荷物箱を拵へて二箇郵船便にて差出候　着の上は郵船會社より通知あるべしと存候間通知あり次第長谷川氏に御依賴相成度候　大箱の方は書物ばかり故其の儘に成し置き被下度　小箱の方は夏の浴衣一二枚入れおき候上子供のおもちや少々有之候間これはあけて子供等におやり被下度候　富山房より年末の金約束通り持參いたし候事と存候金に不自由の事あらば何時にても富山房へ御談じ相成度　坂本よりも其の事に就いては心配無き樣度々申越候間御遠慮なく御申付成されてよろしく候　右用事のみ申入候　草々

十二月廿一日

やいち

かう子殿

田鶴子の子供はどちらなりしか　多分女なりしならんと考へ居候

一三七

大正五年十二月二十九日　ニューヨークより

本郷區西片町十四番地　得能文氏宛（繪はがき）

これは近頃ボストンで通俗講話（說教）をやる有名な男です　これの流行るのが米國式です

十二月廿九日

やいち

一三八

大正六年一月二日　ニューヨークより

小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀鋼子宛（封書）

いよ〱御きげんよく御揃ひの事と存候　小生ニューヨークへ歸りて新年を迎へ來る六日の船にて英國へ渡り候

四郎さんには英國にて逢ひ可申　眞六郎さんは已に朝鮮へ行かれ候哉如何と存候　英國は戰時中すべての書物、書類等携帶面倒なる由故先日差出候荷物以外に洩れた雜誌書物等小包にて時々送り置候間一纏めにしてお置き被下度　手紙も日本文のは一々開封する由　又戰爭に關したる事あれはすべて沒收して屆かぬ事もある由に候
昨日は新年にて領事館へまゐり御影を拜しそれより日本倶樂部にて新年會を催し候　數の子、雜煮なども出來候併し外國の正月は誠につまらぬものにて日本の正月をおもひ出し候　尙々寒中一同御攝生是祈り候　草々

正月二日

やいち

かう子殿

一三九

大正六年一月五日　ニューヨークより
小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀鋼子宛（封書）

子供等一同の手紙小生旅行の爲旅行先へまはり遲くなりて昨日落手　繪本到着の由　一同無事何よりの事に候
英夫出生の事は二三日前承知これも何よりめで度候　梓高等科へ入り候由馬淵先生とよく相談何事も其の指圖によらるべく候　檀はあまり勉强せぬ樣成績などはどうでもよい樣に御話し下され度候　明日出發英國へまゐり候

英國は戰時中にて検査やかましく手紙なども一々開封して差支なきものゝみ配達する由　昨日昨年中の日記を郵便にて差出置候　當地より差出候カバン箱二箇荷積證本日郵便にて冨山房長谷川氏へおくりおき候　藤森信子も着帶の由　岡倉氏大喜びの事と存候　よろしく御傳へ被下度候　明日英國への同行者は斯波氏と八田氏とに候

草々

一月五日

やいち

かう子殿

一四〇

大正六年一月五日　ニューヨークより
文部省圖書課　高野辰之氏宛（封書）

皆様からの御手紙毎々難有う御座います　御一同御勵精の御模様目に見る様に覺えます　石橋さん御榮轉の事は平素の御願望故先以て御めで度存じます　此の手紙着の頃は已に御赴任かとも存じます　會の爲には殘念ですが致し方がありません　第一種第三種讀本の容子及び懸賞文御審査の模様等逐一承知御繁忙察し入ります　それを考へると小生の旅行などは勿體ない様な氣がします　米國の成金のすばらしい事は御話になりません　算盤の桁

が日本とはまるで違ひます　物價の騰貴はやはり著しく一番困るのは教師と坊主といふことです　勞動者などは何處でもすべて給金を增加しました　增さなければストライキで增させてゐます　讀本の文體を平易にして分量を多くしたいといふ考がこちらの學校を見て起りました　當地のコロンビヤ大學では去年の十月から日本語科を置いてコロンビヤ出身のマスター、オブ、アーツ富桝といふ男が擔任して國定讀本を教授してゐます　已に一二を終へて今は三の卷をやつて居ります　級は十二三人居ります　富桝の案內によつて先日參觀しました　富桝が小生を紹介してこれは日本の大學教授で今用ひてゐる教科書の編纂者であると話しますと一同は喜んで拍手しました　教授上に種々の注意を與へて歸りました　明日立つて英國へ歸ります　池永氏は何月間米國に居るか申して參りませんので當地に待つて居るわけにも行かずすぐにニユーヨークへ來るか途中で色々視察して來るか分らぬから英國へ行つて待つ積です　一兩日前第二の子供出生の由知らせを得て正月の事でもあり

アメリカで鶯の初音聞く日かな

英國では檢査がやかましく日本文のものは一切許さぬといふのでこれから日記も英語でつける積です　獨逸書などは一切携帶すれば怪しい奴と探偵をつけるといふ有樣ださうです　これから若し手紙を下さる場合には上書はやはり英語で願ひたう御座います　獨逸語であるととんだ疑を受けるかも知れません　ロンドンは眞暗で夜などはあぶなくて外出が出來ぬといふ事です　先日井上匡四郎氏がロシヤからまはつて來て面會いろ〳〵聞きました海陸軍人の人からも聞きました　尙向ふへ行つてからまた御便りをいたしませう　さやうなら

一月五日　　　　　　　　　　　　　　　　　やいち

第三部起草會諸君

御中

一四一

大正六年一月十八日　ロンドンより

東京市外代々木山谷百六十六番地　斯波貞吉氏宛（繪はがき）

御手紙大使館にて受領いたし候　軍國の緊張せる氣分感心の外無之候

一月十八日　　　　　　　　　　　　　　　　やいち

一四二

大正六年一月十八日　ロンドンより

小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀定宛（ピカデリー・サーカスの繪はがき）

こゝがロンドンの一ばんにぎやかなところです

十八日

父より

一四三

大正六年一月三十日　ロンドンより

小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀梓宛（鼓手の繪はがき）

イギリスの兵隊にはかういふ樂隊がゐます

一月三十日

父より

一四四

大正六年二月十日　ロンドンより

小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀鋼子宛（封書）

御一同御無事と存候　ロンドンは毎日鬱陶敷（マヽ）つゞき寒氣もきびしく御座候　四郎氏去る五日米國より來着　大に

安心いたし候　二月一日より獨逸潜航艇の跋扈甚だしく如何と案じ居候處無事にて先々安心いたし候　二月一日以後東西の交通しばらく斷絶　この儘にてはいつ日本へ歸れるやら分らぬ始末にて目も段々わるく成り心配いたし居候へども其の中には何とか道の開ける事と存居候　四郎氏は三菱の人何かと世話いたしロンドンの北方に下宿いたし居候　四郎氏より東京の様子承知大に喜び居候　二月一日佛國への出立は見合せ其後引續きロンドンに居り候　親類一同へは誠に無沙汰　よろしく御傳へ被下度候　菓子及び薬慥に四郎氏より受取候　草々

二月十日

やいち

かう子殿

一四五

大正六年三月二十三日　ロンドンより

神田區裏神保町九番地冨山房　坂本嘉治馬氏宛（封書）

久々御無沙汰に打過申候　御承知の如く二月一日より獨逸潜航艇の爲米國行及び諸威行汽船とも杜絶日本よりも郵便一向不來こちらから出しても見込なき故しばらく中止いたし居候　且當地にても郵便物の檢査嚴重故雜誌原稿も不差出候　米國船はいよ〱武裝して參る事に相成其の初航海は一兩日中に到着の筈に御座候　先日文部省

より眼疾療養の爲歸朝する樣電報有之多分小生の健康を案じて御一同の御配慮被下候事と御厚情身にしみてうれしく御座候　どの道も危險故如何かと存居候處大使館にても色々心配いたし呉候間比較的安全の道をとりて來月中旬には歸朝の途に上り度存居候　眼は惡く相成り候へども身體には變りたる事も無之候間必ず御心配無之樣祈上候　御地は此手紙の着する頃は最早葉櫻の時節と相成可申當國は目今稍春めきて日光を時々拜居候へども昨日も今日も雪霰交りにて尙寒氣酷敷御座候　婿池永四郎二月到着先日より英國內旅行いたし居り本日歸倫小生とし ばし同宿の筈に御座候　小生はこれより英國內巡遊に出掛る心算に御座候　日本歷史懸賞の結果は如何　小生も外遊の後つく〴〵と通俗的日本歷史の急要なるを感じ候　其他通俗的補助讀本の腹案も出來いたし候　これは今後最必要と存候　何卒其の御工夫あらまほしく候　オクスフオード大學出版部にて聯合國の簡易なる歷史出版の事に相成日本歷史はかつて日本にも來りたるポーター(タイムス記者)擔任原稿を一閱する樣依賴あり小生一讀の上多少の注意を與へ候處同氏自動車の怪我にて突然死去可悼の至に御座候　それ故同書の出版も多少可遲歟近代史を詳にして古代を略し現今の社會制度等をくはしく說き日本の美點を擧げ歷史と公民讀本を兼ねたる樣な性質のもの是非日本兒童の爲にも必要なりと同書を一讀して殊に感じ申候　出版界には御承知の時節故目ざましきもの無御座何事も見合せ居る有樣に御座候　日本は輸出超過にて大分景氣よろしき樣なれば出版界も今少し活動してもよろしきかと存候　當地ジヤパン、ソサイテーの依囑に應じ「日本魂論」を草し二三日中に大に氣焰を吐く積に御座候　この日本魂を敷衍して「やまとだましひ」といふ書物を書き度と歸朝を樂しみに致し居候

日の本をおもひこそやれ梅咲きて鶯の聲しきるこの頃

三月二十三日　　　　やいち　　草々

坂本大兄

社中一同及び文會堂主人へもよろしく御傳言被下度候

一四六

大正六年四月二十四日　クリスチヤニヤより

小石川區音羽町三丁目二十三番地　芳賀檀宛（繪はがき）

廿一日ロンドン出發ノルウェーに渡り今日首府クリスチヤニヤに着いた

四月廿四日　　　　父より

一四七

大正六年八月九日　輕井澤より
神田區裏神保町九番地富山房　長谷川福平氏宛（はがき）

こちらは不相變涼しく御座候　一昨夜より電燈裝置も出來候に付き夜分は讀本にとりかゝり候
女子の悠紀主基の事至極御同意に御座候　よろしく願上候　昨日志田氏來訪いたし候　草々

八月九日

一四八

大正七年四月一日　月瀨より
小石川區竹早町三十二番地　芳賀檀宛（繪はがき）

昨夜伊賀上野着　今朝こゝへまゐりました

四月一日　　やいち

一四九

大正七年四月四日　島根縣杵築町より

小石川區竹早町三十二番地　芳賀咲子宛（出雲大社の繪はがき）

出雲大社といふのはどういふお宮か知つてゐますか

四月四日　　　　父より

一五〇

大正七年四月四日　島根縣杵築町より
小石川區竹早町三十二番地　芳賀定宛（繪はがき）

ケフオホヤシロへ　サンケイシマシタ

四月四日　　　　父ヨリ

一五一

大正七年七月二十九日　輕井澤より
神田區裏神保町九番地富山房　長谷川福平氏宛（はがき）

この間は色々ありがたう御座いました　即日切符が貰へたのですぐに輕井澤へまゐりました　さて翌日國文會のため歸京即夜また當地へもどりました　いよ〳〵今日から勉强に着手しました　坂本氏がかへつたら來るやうに御話し下さい　又あなたも折を見て御來遊下さい　社中の皆々樣へもよろしく

七月二十九日

一五二

大正七年八月二日　輕井澤より
神田區裏神保町九番地富山房　長谷川福平氏宛（はがき）

段々書いて行く中に考へたのは處々へ古人訓話といふ課を挿んで（毎巻五六課づゝ）見たいとおもふのでありま す　尊德や益軒や乃木大將や進んでは宣長や篤胤や上級になつては漢文もよからうと思ひます　さういふ適當な材料を讀本の時のやうに國民道德叢書あたりから拔いておいて下されば結構です　これはたしかに一案とおもひます

八月二日

今日大隈侯にあひました

一五三

大正七年八月六日　輕井澤より
東京帝國大學附屬醫院入澤內科　高野辰之氏宛（はがき）

本日石橋氏の手紙によつてだん〳〵御快癒の由を伺つて安心しました　併し令夫人の御病氣と承つて一喜一憂です　おもふに御看病づかれとや丶御安心の結果かと思つて大した事ではあるまいと存じて居ります　あつい時分の候病養御苦勞察し入りますが御病氣はこれからが大切ですから何卒御攝養專一に願ひます

八月六日　　　　　　　　　　　　　　　やいち

雷も遠くになりぬ晩酌す

一五四

大正七年八月十九日　輕井澤より
東京帝國大學附屬醫院入澤內科　高野辰之氏宛（封書）

（一）

東都炎熱過前年　喜聽吟兄病半痊　豫約中秋明月夜　相携香炙醉神川

（二）

晩坐篠床詩未成　涼風滿腋客衣輕　碓山吐月昇三寸　早聽吟蛩第一聲

だん〳〵およろしき由何よりの御事です　奥さんが御感染とは驚きました　併し奥さんは酒もあがらぬから尙更御快癒は疑ないと存じます　尙今後が御大事ですから十分に御注意を願ひます

八月十九日　やいち

高野吟兄

一五五

大正七年八月二十六日　輕井澤より

神田區裏神保町九番地冨山房　長谷川福平氏宛（はがき）

この間は御出で下さいました處何の風情も無く誠に失禮いたしました　つい氣が附きませんであとから思付きましたのは風呂を差上げなかつた事です　こらちは涼しいものですから二日おきに風呂を立てます　その日に當つて居らぬから女中もその氣で居り小生もうか〳〵と別に命令もせず東京からお出になつて途中の汗もあつたらう

に誠に御氣の毒な事と昨日湯に入る時に思ひ出しました　何卒あしからず　さて小生はいよ〳〵三十日の朝歸京します

八月二十六日

やいち

一五六

大正八年二月十五日　小石川區竹早町三十二番地より
奈良市西包永　岩城準太郎氏宛（はがき）

いろ〳〵御心配御手紙被下難有存候　拙宅にては娘一人去年より肺炎にて打臥居候處これは次第に輕快　上田氏も新聞に大袈裟に書いた程には無之目下次第に快癒御安心被成下度候　小生の大阪へ出向かざりしは伯母の急病にて死去せし爲に有之殘念に存候　右御返事旁　草々不一

二月十五日

一五七

大正八年三月一日　小石川區竹早町三十二番地より

小石川區久堅町七十四番地　永井環氏宛（はがき）

このあひだは御馳走になつてありがたう御座います　いよ〳〵助役御就任の由新聞で承知　貴兄のためにも東京市のためにも祝福いたします　皆さまへよろしく

大正八年大學記念日の朝

やいち

一五八

大正八年十二月二十一日　小石川區竹早町三十二番地より
小石川區表町百九番地　蘆田伊人氏宛（封書）

かねての殿様祭の碑文認めて見ましたが拙文見るにたへません　とにかく御取捨は御自由として差出しますから
よろしく願ひます　字數はきりつめてこれ丈になりましたが假名交り故どうか納りがつくだらうとおもひます

十二月二十一日

やいち

蘆田様

侍史

一五九

大正九年一月二十二日　小石川區竹早町三十二番地より
神田區裏神保町九番地冨山房　長谷川福平氏宛（封書）

色々用事があつて御無沙汰致して居ります　封中葉書御一覽の上然るべく御取計を願上げます

一月二十二日　　　　やいち

長谷川様

大須賀君の逝去は誠に惜しいことです　松井君の心痛も察せられます　國文研究室の助手水野忠雄氏も同日になくなりました　いやになつてしまひます

一六〇

大正九年五月二十一日　小石川區竹早町三十二番地より
山梨縣北都留郡大月町都留中學校　彌富破摩雄氏宛（封書）

拜啓　先般は種々御厄介に相成りまして御禮の申様も御座いません　毎日の貧乏ひまなしでつい御手紙も差上げ

ませんでした　汽車中で御話の短册蚯蚓書の腰折相認め本日郵便で差出しましたから御受取を願ひます　右御禮かたく〳〵　草々

五月廿一日　　やいち

彌富大兄

一六一

大正九年七月二日　小石川區竹早町三十二番地より
愛媛縣松山市　高木武氏宛（封書）

益御清祥おめでたう存じます　扨此度荊妻の甥潮田秀と申すもの錦地へ罷出でますが始めての土地でもあり極めて世間知らずの無口者で何も分るまいと存じ貴兄へ萬事伺ふ様紹介狀を持たせて差出しました　參上いたしました節は何卒よろしく願上げます

七月二日　　やいち

高木大兄

一六二

大正十一年一月十五日　小石川區竹早町三十二番地より
東京府下立川府立第二中學校　野村八良氏宛（封書）

拜啓　湯原氏に面會しました　まだ人は極つて居らぬのです　色々候補者もあるが考案中との事です　とに角一度貴兄にも逢つて見たいとの事でしたからその中御都合の好い日例の一つ橋の事務所へ御尋ね下さいませ

一月十五日　　　　　　　　　　　　　　　　　やいち

野村賢兄

一六三

大正十一年三月十七日　小石川區竹早町三十二番地より
神田區裏神保町九番地富山房　長谷川福平氏宛（はがき）

いろ／＼御面倒でした　それでは十八日の夕方に致しませう　陶々亭の方へは已に註文致して置きました　貴店の方へは別に小生からは何とも申しませんから御連合五時半頃までに御出でを願ひます　草々

十七日

一六四

大正十一年三月二十四日　小石川區竹早町三十二番地より
福岡縣八幡市役所　永井環氏宛（封書）

御赴任後早數月色々お忙しい事と存じます　小生はかねて願つておいた辭職が本月十八日附で許可になつて重荷を卸したやうな感じが致します　今後は東宮の奉仕と國學院大學とに勤める積でございます
先日はお見事な果物澤山御贈り下さいまして家内一同大喜致しました　又香椎宮の美しい繪葉書も難有頂戴致しました　御存じの通り香椎宮は神功皇后御征韓の舊蹟で今回御參拜の御目的も天皇陛下御病氣御平癒の御祈願といふよりもやはり朝鮮がよく治るやうにといふ御祈願と小生は拜察して居ります　住吉の神が三韓征伐の時には船を護つて御先導したやうな次第　今度の住吉神社御參拜もその意味で御座いませう　天皇陛下の御病中皇后陛下が此の御苦心拜察して感激に堪へず恐懼に堪へぬ次第と存じます　まづは御禮かた〳〵　早々

三月二十四日

やいち拜

永井賢臺

一六五

大正十一年七月二十三日　輕井澤より
麹町區飯田町國學院大學　菊池武文氏宛（封書）

先日來文部省との交渉に就いては御熱心な御盡力でやう〳〵片がつきましたさうで誠にありがたく一安心致しました　實に私どもも大に責任のある事で恐縮致した事で御座いますが貴方の御盡力にまかせて當地へ參り午睡を貪つて居ますことは甚申譯が御座いません　まづは御禮まで

七月二十三日　やいち

菊池賢臺
侍史

一六六

大正十一年七月三十一日　輕井澤より

神田區裏神保町九番地富山房　長谷川福平氏宛（はがき）

御手紙ありがたう御座いました　ポツ〳〵始めてゐますが最初は色々考へるので進みがわるう御座います　これからが一瀉千里といふのです

さて甚だ申上兼ねますがいつぞやの久能木式竈を買つてこちらへもつて參りましたが芯を上下する口金がいたんで役に立ちません　どうか二號型の口金一つお求めの上御郵送下さいますやう御多忙中甚だ相濟みませぬがどうか願ひ上げます

七月三十一日

一六七

大正十一年八月六日　輕井澤より
麹町區飯田町國學院大學　堀江秀雄氏宛（封書）

東京からの通知はいづれも熱い〳〵と申して參ります　さぞおつらい事とお察し申します　こちらの涼しさは實に勿體ない程です　色々の事段々とお骨折ありがたう存じます　鈴木君の後任の件は姉崎とも相談してと思ひます　まだ急がぬでもよからうかとおもひます　上杉君へは小生も手紙を出しておきましたからお逢ひになつたら諒解しようとおもひます　鹿子木君にこちらで逢ひましたがこれも教授名稱に就いては困ると言ひました　併し

色々事情を話して承諾を得ましたからさやう御承知を願ひます　講習會の方は少人數であつたのは遺憾でしたが近年は餘り多く各處に開かれるのでやむを得ません

豆腐屋も酒屋も近しほとゝぎす

とでも言ひさうな住居一泊がけにお遊びにお出でになりませんか

八月六日

やいち

堀江賢兄

一六八

大正十一年九月二十一日　小石川區竹早町三十二番地より
東京市外代々木山谷百六十七番地　高野辰之氏宛（はがき）

長く御無沙汰いたしました　過日は近松集第一巻お送り下さいまして難有頂戴いたします　記念出版として永世に保存せらるべきもので誠に結構なものと存じます

十一年九月二十一日

一六九

大正十二年七月二十九日　輕井澤より
神田區通神保町九番地冨山房　長谷川福平氏宛（封書）

昨日はおあつくて御忙しい所をわざ〳〵御見送り下さいまして例により種々御世話成下されまことに有りがたう御座いました　一同無恙定刻に着きました　朝夕の涼しさこの儘に居るのも勿體ないやうな氣が致します　瀨古氏よりの爲替かへつて御迷惑相かけ濟みません　捺印御返送申上げますからよろしく願上げます

七月二十九日　　　　　　　　　　　　やいち

長谷川賢臺

一七〇

大正十二年七月三十日　小石川區竹早町三十二番地より
東京市外目白學習院　福井久藏氏宛（封書）

福井君の「大日本歌學史」が刊行せられることになつて、まことに喜ばしい。同君は家庭に一子も無く、朝夕

書籍にばかり親しんで、その研究を續けて行かれるので、積り積つて未定の草稿は堆いほどあるさうである。多くは日本の文化史の上の研究で、本書の如きも、多分その一部分であらうと思ふ。今や外國の文學その他の思想を傳へ、飜譯を公にすることが可なり盛であるに關らず、我が古代文化を闡明するといふ方面は割合に振はない。又その研究に沒頭する學者も少い。私は福井君の人格を尊重し、本書の出版を國家の爲に慶賀し、尙續々その稿本（以下原文缺）

大正十二年七月

芳賀矢一しるす

右の様なものを書きました　御取捨は御随意に願上げます

七月三十日

やいち

福井賢兄

一七一

大正十二年八月九日　輕井澤より

大正十二年

神田區通神保町九番地冨山房　長谷川福平氏宛（封書）

毎日の好天氣で御迷惑の事と存じます　こちらでは大助りで御座います　さて寺尾先生の突然の訃には驚かされました　色々何かと御世話の事いやが上に熱い事で御座いませう　先般來の校合中自修文を忘れて欄外の註釋を皆削りましたがこれは復活させて頂きたう存じます　さやうなら

八月九日　やいち

長谷川様

一七二

大正十二年八月二十日　輕井澤より

福岡縣八幡市役所　永井環氏宛（封書）

この炎天にもかゝはらず御無事御勵精誠に喜ばしく存じます　願出でました女中の事に關しては種々御配慮を下さいましてお蔭で大助かりで御座います　厚く御禮申上げます

當地は御存じの通りの涼しさ連日の晴天で心持がよろしう御座います　殊に十七日には攝政宮お着　毎日ゴルフやテニス又は散歩などをなさいますので始終私の家の横をお通りになります　昨日は生憎ひどい夕立がありまし

て殿下は馬上ずぶ濡になつてお歸りになりました　後に空の自動車がついて行つたのを見ると自動車をお迎へにあげたのにお召しにならず雨を衝いてお歸り遊ばされたと見えます　途中二三人の人が敬禮しましても必ず脱帽御挨拶をなさいますのでいづれも恐縮して居ます　巡査や憲兵などの護衛は物々しい有樣です　まづは御禮まで

八月二十日　　やいち

永井老臺

門司新報上の御歌大變面白く拜見致しました

一七三

大正十二年八月二十三日　輕井澤より
福岡縣八幡市役所　永井環氏宛（繪はがき）

喜び合ひて靡き合ひたる千草かな
帽白く花野の中を皇子はゆく
秋晴や國旗ひるがへる山の町

輕井澤はこんど町になりました　廿一日拜謁を賜はり色々御話を承りました　雨中の御馬上姿の事を申上げると

「いやあの時はビショヌレサ」などゝ仰せられました

廿　三　日

輕井澤

芳　賀　矢　一

一七四

大正十二年八月二十六日　輕井澤より
神田區通神保町九番地冨山房　長谷川福平氏宛（封書）

攝政宮殿下十七日以來當地に御滯在日々御元氣御馬に召して午前に午後に小生の家の横や前やをお通りになりました　廿一日には拜謁被仰付色々御話も承りました　昨日急にお歸りの後は非常にさびしいやうに思はれます
さて近頃は校合がさつぱり參りませんがどういふわけでせう　私の歸期は未定ですが事によつたら來月五日まで延ばしたいがとも考へてゐます　もしさうなれば子供半數をつれて一寸歸りますから其節御立寄り致します
志田君が歸りに一寸寄りました　その日は今立氏も娘をつれてまゐり丁度拜謁の日で大混雜でございました
皆樣お變りもありませんか　どうかよろしく

八月二十六日

やいち

長谷川様

一七五

大正十二年九月七日　輕井澤より

小石川區林町　坂本嘉治馬、長谷川福平兩氏宛（封書）

言語に絕した天災唯驚き入るばかりです。皆樣御無事ですか。富山房は燒けたとの話ですが、本當ですか。私は三十日に子供三人を連戾つて九月一日に又當地へ來ました。その途中正午十二時高崎であの地震に遇ひました。車中で何等の感じもなく、輕井澤へ着いて、その大地震たるのに驚きました。秩父山破裂とか何とか色々な噂があり、その夜は東南の方面炎焰の天を燒くのを見ました。翌朝信濃新聞の號外で、始めて東京の大變事を知り、すぐに引返さうとしましたが、川口町の橋も落ちたといふし、目が惡いから危いといふので、長男次男の二人が歸京しました。途中も非常に困難であつたさうですが、夜の九時過に着きましたさうです。併しその便りがありませんので、更に心配を重ねました。五日の晚になつて、竹早町の車夫が松本へ歸るといふ途で寄つてくれて、始めて子供一同も家も無事であることを知りました。何分この大變災に何事も無かつたのは非常に仕合です。今は汽車の上りも下りも一杯で、とても歸れませんから、しばらくこちらに居ります。郵便も電報も通ぜず、新聞

もなし、例の徴發令で、米も五升以上は賣らず、卵はもう一つもありません。東京行の切符も賣りませんので、まるで島流しになつたやうです。最も氣の毒なのは横濱あたりから來て居る外人で、外字新聞もなく、唯茫然として居ります。留守宅へは冨山房の方が毎晩泊りに來て下さるさうで、誠にありがたう御座います。長谷川さんの奥さんが千葉の海岸にいらしたさうですが、その方は如何かとお案じ申上げてゐます。

鎌倉も大地震に被害が多かつたやうですが、そちらの方でも御怪我は御座いませんでしたか。

大學の燒失、大學圖書館の損耗、私は實に國家の爲に泣きました。私自身の過去數十年を回顧しても泣かざるを得ませんでした。今も尚泣いて居ります。本當に何といふことでせう。

今數日もたつたら、郵便も通じませう。電報も或はきゝませう。一昨夜來た車夫が今夜東京へかへるので、この手紙を書いて托しました。私は十五六日頃までには歸りたいと思ひます。長男の手紙には成るべく歸るなと申して參りましたから或はもつと遲れるかも知れません。

もし冨山房が燒けたとすれば、一段の御苦心實にお察し申上げます。どうぞおからだを御大切に、皆様によろしく。

上田博士が歸朝の日が近づいたかと思ひます。或はこの震災に出逢つて、神戸へ上陸せられたのでは無いかとおもひます。それにしても、荷物は取扱はず、ギウ詰の汽車の困難に逢はれたのではないかと、案じて居ります。なるべくは歸朝のもう少し遲いことを希望して居ります。

東京もこゝも無事で子供等も無事、こんな有難いことはありません。

九月七日　　　　　　　　　　やいち

坂本嘉治馬様
長谷川福平様

一七六

大正十二年九月七日　輕井澤より
東京市外澁谷町若木國學院大學　堀江秀雄氏宛（封書）

天變といはうか、地異といはうか、眞に開闢以來の大變事、言語に絶した次第です。それにつけても、第一に仕合とおもふのは國學院大學が移轉した後であつた事です。もし舊建物が燒失したとすれば、醫專には非常に氣の毒な事です。

皆樣方如何ですか。教員方は多數の事故、中には災禍に罹られたお方もあるかも知れぬと思ひます。一番町が燒けたといふことで、桑原さんのお宅はどうかと心配してゐます。今日も江木さんをたづねて、その話をしたのです。

さて私は今は歸るにも歸れない有樣です。實は先月三十日學校が始るといふので、三男四男五女の三人をつれて東京へ戻りました。翌卅一日は滯在。もう四五日といふので、一日の朝十時の汽車で歸りました。途中高崎であの地震に遇ひましたが、汽車では何等の動搖を感ぜず、輕井澤へ着いて驚いたのは驛前のアプト式竣工の石碑が倒れて居たことでした。それからだん〳〵聞いて見ると、壁が落ちた家なども大分ありました。（私方は無事）それで色々な噂があつて、秩父山が爆發したのだといふ説が最も多かつたやうです。どうも變だなと思つて居ますと、その夜は東南の山側は炎焰が空をやいてゐます。さてはやはり爆發かなと訝りつゝ寢に就いたのですが、翌朝長野新聞の號外で東京の大地震大火災を報じて來ました。東京の方が心配になりますので、直ちに引返さうと致しましたが、川口町から先に渡舟があり、又非常の混雜で、眼が惡いからよすがよいと家人の申すまゝ、長男次男の二人を東京へ同日午前十時に立たせました。それが五日になつても歸らず、こんどは更に心配が重りましたが、五日の晩竹早町の乘りつけ車夫が松本へ歸るといふので、寄つてくれまして、長男の手紙を持つて、家も家族も皆無事であつたことを知りました。長男次男の上京も非常に困難で、十時に出發して、やう〳〵夜の九時に着いたさうで、途中は手拭で二人の手を縛つて歩いたと申します。當地通過の汽車を見ますと、下りも上りも一杯で、身動きもならぬ程、屋根の上にも澤山乘つて居ります。到底乘れるものではありません。私はパスがありますが、誰にも切符を賣りません。東京を逃れて出るもの、東京へ見舞にゆくもの、（九州あたりから出たものは、ちやうど此の頃ゆくのです。）東海道、中央線すべて不通とあつて、皆信越線にかゝります。乘換驛篠井驛

の混雜は非常なものださうです。長男からの通信にも東京へ歸らぬがよいと申しますので、どうしても今少しは殘らなければならぬと思ひます。例の徵發令によつて當地でも米は五升以上賣らず、卵はもう一つもありません。學校の方はとても十一日からは開校はむつかしからうと存じます。又この大災禍では、あとの資金募集にも差支がありませう。一方に慘禍を免れ得たと同時に、これは又心配です。學校の開校その他の件は何卒臨時御取計下さいませ。私には何も異議が御座いません。

大學の燒失、圖書館の損耗、私は國家の爲に泣きました。過去數十年の私の生活を考へましても、泣かずには居られませんでした。今でも泣いて居ります。恍然隔世の感が致します。

東京は電車もなく、電話も電燈もなく、水道もなく、さぞかし御不自由の事でせう。こちらからは電報も出せず、郵便も屆かず、汽車には乘れず、全く島流し同然です。今日例の車屋が歸京致しますので、この手紙を書きました。

この地には西洋人も日本人もまだ大分居ります。殊に氣の毒なのは橫濱在留の者です。歸るに家なしです。新聞も來ないし、信濃新聞は讀めないし、唯郵便局の貼出しなどを見て、ふさいで居る樣氣の毒の至です。日本人でも本宅を失つた人も大分あります。江木衷さんなどもその一人で、今年はこちらに冬籠といふので、大工を入れて爐を明けるといふ騷ぎです。この間に於て、私は東京の宅も、こちらの宅も、子供一同も無事、何といふ幸福の事でせう。どうか皆樣へくれぐれもよろしく。又弔慰金その他等私の出す可きものは相當の額を支出して置い

て戴きたう存じます。

十二年九月七日

やいち

堀江賢臺

一七七

大正十二年九月八日　輕井澤より
福岡縣八幡市役所　永井環氏宛（封書）

この度の大變災、驚いて物も言へません。そちらでもさぞ御心配であり、私どもの事までもお案じ下さつた事と存じますが、ついこちらの事にかまけて御無沙汰になりました。幸に小石川方面は倒壊家屋も少く、火災も僅かであつて、お互様に震災も火災も免れ、こんな喜ばしいことはありません。御家族一同は初から輕井澤で東京の震災は全く御存知がないのですが、輕井澤の震害も可なり大きう御座いました。お宅の壁も落ちて、今は御一同が山田氏別邸にお暮しになつて居ります。私方ではもう九月が近づいたといふので、私が八月三十日に三男四男五女の三人と女中一人をつれて上京しました。翌卅一日は滯在。九月一日の十時で、私は再び輕井澤へ引返しました。高崎驛で辨當を食べて居る時、あの大地震に遇ひましたが、車中の所爲か、格別のショツクも感ぜず、す

ぐ發車、豫定の時刻に輕井澤に着しました。驛前に集つてゐる人々が「今の汽車ですか」「トンネルは無事ですか」など問ふので、「そんな大地震ですか」と問ひますと、アブト式竣工記念碑を指して、「あれを御覽なさい」といふ。見るとそれが倒れて居る。そこで始めて尋常の地震では無いと知りました。色々な風説があつて秩父山の爆發だなどと言つて居ました。その夜東南の空が山越しに眞赤になつて居ましたが、翌朝の信濃新聞號外で、それが東京の大火事と分りました。早速歸らうとしましたら、川口町附近の荒川の鐵橋が落ち、渡舟やら徒歩聯絡やらで、目の惡いものには危險だと、長男次男が二人で、取るものも取りあへず東京へ向ひました。途中種々の困難を嘗めて、僅かに一本のサイダーと一片のバナナを分けてたべて、十一時間の後、夜の九時頃始めて家に着いたさうです。家の中は眞暗で誰も居ず、三男四男は護國寺へ、五女と女中は高等師範の庭内へ收容されて居たのです。××××が人を斬つたり、爆彈を投じたりするといふので、保護されてゐたのです。電報郵便は不通、汽車は避難者で充滿、幾度も試みたが、寄付くことも出來なかつたさうです。それでその事を報告する方法が無いので弱つて居つたさうです。こちらでは二人が行つて直ぐ復命する筈だのに、何の音沙汰もないので、今度は二人の身の上を案じ出しました。五日になつても何の通知もありません。いよ〳〵明日は自身で搜索に出掛けようと考へて居ますと、その夜半に竹早町の車宿の車夫が松本の者で歸鄉の途中、長男の手紙を持つてよつてくれました。そこで始めて人も家も無事で大安心を致しました。私どもにはもう少し居るやうに、食物もなく、危險もあるから、なるべく輕井澤に居る方がいゝと申して來ましたから、私どもはまだ輕井澤に留つて居ります。東

京の家には長男次男三男四男の四男子と五女が居り、こちらには四女だけが居ります。電燈も、電車も、水道もなく、さぞ不便だらうと察しますが、この大變災に一同無事であつたことを、何よりの幸福と喜ばねばなりません。

最も遺憾なのは大學圖書館の全燒で、私は實に國家の爲に泣きました。過去數十年の私の生活を回顧しても、泣かずには居られませんでした。何だか、恍然隔世の感が致して居ります。

東京への切符はまだ賣りません。東京を逃出した避難者、罹災者を見舞ひに行く旅客で上り列車も、下り列車もすべて屋根の上まで一杯です。下りは全く無賃で、驛々で握り飯などを食べさせるさうです。輕井澤で氣の毒なのは東京、横濱から來て居つた外人で、全く歸るに家なしといふ境遇です。それにも關らず、プラットフォームへ出て色々救護に骨折つて居ます。然るに日本の別莊からは餘りさういふ奇特の人が出て來ないやうです。

私も十五六日頃には一度歸つて見たいと思ひますが、糖尿病者が玄米だけでは實際困りますから、今思案中で御座います。

天譴か、はた天の試錬か、今後の國民の反省自覺は一層大切であると信じます。

まづは無事であつた喜を敍べて、御安心を願ひ奉るのである。

十二年九月八日

やいち

永井老兄

侍史

一七八

大正十二年九月八日　輕井澤より
福岡縣鞍手郡直方町御館山三菱社宅　池永田鶴子宛（封書）

東京は大變災、さぞそちらでも御心配下さつたらうと思ふが、こちらの事ばかり考へて居つたので、つい御無沙汰になりました。私方一家はまづ〳〵無事、家も倒れず、火事にも燒けず、誠に仕合で御座いました。實は九月が近づいたといふので、篁、國子、定の三人と女中一人をつれて、私が三十日に歸京しました。翌卅一日滯在、一日の朝再び私は輕井澤へ歸りました。その晩輕井澤の東南の空が一帶に赤いので、色々な噂がありましたが、翌朝になつて、それが東京の大火と分りました。すぐに支度をして歸京しようとしましたが、荒川の鐵橋が落ちて危いからといふので、檀、梓二人で行くことになりました。途中非常な困難を凌いで、やう〳〵夜の九時頃にうちへたどり着いたさうです。篁、定は護國寺へ、國子と女中は高等師範學校へ收容されて居つて眞暗であつたさうです。その儘で歸つて來ませんから向ふには檀以下五人、こちらには祖母樣と母樣と咲子が居る譯で、この大變の際に家も人も無事なのはどんなに喜んでもいゝかと思ひます。二日に檀、梓の兩人を立たせてやつて返事

を待つて居たが、何の音づれも無いので、今度は又その方が心配になりました。××××に斬られたり、爆彈を投げられたりした者も澤山あるといふので、心配してゐましたが、汽車の混雜でとても歸られなかつたのです。無論郵便はなし、電信はなし、何とも致し方が無かつたのです。仕合に、五日の夜に竹早町の人力宿の車夫が松本の者で、歸郷する途中、檀の手紙を持つて來てくれ、且色々の話をしたので始めて大安心をしたのです。それで今は汽車にも乘れず、食料もないから、決して上京せぬやうにと檀からの手紙にあり、唯今留守宅は檀が主として守つて居るのです。水道も電燈ももう回復したからよからうと思ひますが、一時はさぞ弱つたらうと思ひます。唯玄米などを給せられるだけで、食物には困つてゐようかとおもひます。もう一週間もたつたら、汽車にも乘れようと思ふから、私が歸つて見ようと思つて居ますが、糖尿病患者が玄米だけでは困りますから、唯今考案中です。徵發令の結果當地にももう卵一つもありません。

小石川、牛込、四谷、青山あたりは幸に無事ですから、私方の親類中には罹災者はありますまいと思ひます。乙竹さんももう本牧から歸られた後と信じますから無事でせう。御木本さん、中川さんが燒けたが、池田さんは無事で皆其處へ集つてゐると先日中川さんの御話でした。

まあ〳〵この前代未聞の大變災に、私方の無事であつた喜を申上げます。どうか御安心下さい。

九月八日

やいち

田鶴子殿

先日は檀が出て、色々御世話になりましたさうで、ありがたう存じます。

一七九

大正十二年九月二十四日　小石川區竹早町三十二番地より
小石川區林町富山房　長谷川福平氏宛（封書）

昨日はありがたう御座いました。もし毎日校合物が輻湊いたしますなら、唯今私はひまですから、毎日そちらへ出張して拜見してもよろしう御座います。殿下の方は來月の二日から始りますし、良子女王殿下の方も、そろそろ始るとおもひますが、その外には緊急の用事は御座いません。どう致してよいか、御返事を願ひます。

十二年九月二十四日

やいち

長谷川老兄

一八〇

大正十二年十二月十三日　小石川區竹早町三十二番地より

小石川區林町富山房　島村剛一氏宛（封書）

唯今歸りました。これから夜分へかけて、ずつと在宅いたして居りますから、お出でを願ひます。明日は用事があつて、九時前に外出いたします。

十三日午後三時

やいち

島村様

一八一

大正十三年八月二十一日　輕井澤より

小石川區竹早町三十二番地　石本光子宛（封書）

昨日は二十日祭で神主が來ましたさうですが實は二十日祭三十日祭を略してすぐと五十日祭に致すつもりで十日祭で一先打切つて御禮をしたのであります　國學院の方もそれで分つてゐた筈ですが神主の方にそれがよく通じなかつたのでせう　或は十日祭の御禮が少し餘計であつたので無論二十日祭もやることとおもつて來たのかも知れません　とんだ御迷惑をかけました　こちらでは正田さん永井さんなどが來て下さつてお父さんが祭文を讀み檀が弔文を讀んで靜粛なお祭を致しました　この次の三十日四十日祭はやめて歸京後五十日祭を致したいとおも

ひます　三十日祭四十日祭省略の事は萩原さんから國學院の方へ知らせるやう御話し下さい
うちの中色々整理下さるのは誠にありがたいのですが身重であまり多くの勞動をなさるのは却つて心配です　どうか皆の歸京までお待ち下さい　全體御同居を願つたのは精神上で色々の慰安を得る爲で勞動や經濟の方面で何等の御心配をかける考はありません　いづれ歸京の上御話致しますがその邊にはお構なく　先日一月五拾圓といふお話がありましたがそれで澤山　細かなことは決して御心配には及びません　うちのものは何でも遣つて下さい　又うちの爲にお立替になつたものは皆あとで拂ひます　經濟の方は決して御心配下さいますな
風呂のたき方などは梓から申上げるでせう

八月二十一日夜

父より

光子殿

寅三さんによろしく願上げます
大工でも左官でも植木やでも車夫でも必要なものは遠慮なくお使ひ下さい

一八二

大正十三年八月二十二日　輕井澤より

神田區通神保町九番地富山房　長谷川福平氏宛（はがき）

この間から引續き種々御配慮いつもながら感謝の至りに堪へません　讀本八の參考書は御渡しするやう荻原氏へ言つてやりました　十の卷は今一讀中ですからすぐにそちらへ御屆け申上げます　一昨二十日にはこちらで永井さんや正田さんに御出でを願ひ私が自ら齋主となつて祭文を讀み檀が弔文を讀んで心ばかりの二十日祭を營みました　折りしも新潟からの歸途桑野君が來て參列してくれました　社長はじめ皆樣へよろしく

一八三

大正十三年八月二十二日　輕井澤より

福岡縣直方町御館山三菱社宅　池永田鶴子宛（封書）

この度の不幸に就いて遠路御見舞下さいまして色々御世話に相成り亡き人の靈もさぞ喜んでゐる事だらうと信じます　十日の祭事を濟まして再びこちらへ來ましたが來客もなく誠にさびしい感じのみします　一昨日は二十日祭の日で私が自ら齋主となつて祭文をよみ檀が弔文を讀んで形ばかりのお祭を致しました　正田さん永井さんなどが參拜してくれました

葬儀の歸途藤村寫眞館でとつた寫眞が出來たさうで一枚そちらへ送るやう留守宅の方へ申付けて置きました

昨今の新聞によると九州は大分大荒の由　御障も御座いませんか　當方一同無事どうか御安心下さい

光子は十七日に引移つたさうで安心して居ります

八月二十二日

やいち

田鶴子殿

一八四

大正十三年八月二十二日　輕井澤より

日光湯元　尾高朝雄氏宛（封書）

この間中は一方ならぬ御世話に相成り亡き人の靈もさぞ喜んでゐることと存じます　その後またこちらへ來ましたが今年は客も少く誠に淋しく感じます　一昨日は二十日祭で永井さん正田さんなどを來てもらつて私が自ら齋主となつて祭文を讀み檀が弔文を讀んで心ばかりの二十日祭を行ひました

輕井澤花野をわたる秋風もことしはわきて身にぞしみぬる

などと祭文とともにうたひました　月日の流は早いもので今少しでまたお目にかゝれませう　篁以下は月末まで私と檀、梓は來月八日位迄はこちらに居りますから歸途御立寄り下さつては如何

この間藤村寫眞館でうつした寫眞が出來たさうで一枚留守宅から差上げましたはずです　下手な寫眞屋で思ふや

うには參りません
母の亡くなりました今日朝雄さんにはどうか咲子の足らぬ所を御遠慮なく御叱りの上萬事御宥し下さるやう又咲子さんには愛と敬との二つを捧げて十分に背の君に事へるやうそればかりを祈つて居ります

八月二十二日

やいち

尾高御兩人様

お母上様はじめ皆々様へよろしく

一八五

大正十三年八月二十四日　輕井澤より
東京市外澁谷町若木國學院大學　堀江秀雄氏宛（封書）

御手紙拜見致しました。二十日祭には移靈祭を泉田さんが御濟まし下さつたのですか。春田さんが復御出で下さつたのと思ひましたから、三十日、四十日祭の事も申上げたのです。泉田さんにはどうかよろしく。こちらは來客もなく、まことに淋しう御座います。あまり淋しいのも、却つて物が手に附かないものです。傳說の事、私方の近處一面雲場村と申します。そこにある池から蜘蛛の傳說が出來たのであります。旅人が池の

ほとりに憩んでゐると、何だか蜘蛛の絲が身に纏ふやうに思はれたので、そつとその絲を外して柳の木にかけた。見てゐる中に、蜘蛛の絲が盛に卷いて、遂にその柳の大木が池の中に引込まれたといふのです。この傳說は到る處に種々の形で傳つて居るので、餘程古いものと見えます。先年の帝展に飛田周山氏が之を畫題と致しました。それは旅人では無くて、小娃になつて居つたやうです。クモバの地名から蜘蛛の傳說を呼んだものと思ひます。學校には別に異狀も御座いませんか。例の川崎の稻毛神社に居る山見氏は名は何といつたのでせう。御手數ながら端書で一寸御知らせを願ひます。

ともに見てめでにしものを離山今はその名もうらめしきかな

八月二十四日

やいち

堀江賢兄

皆々樣へよろしく

一八六

大正十三年八月二十七日　輕井澤より
福岡縣八幡市役所　永井環氏宛（封書）

殘暑中々きびしう御座いますがお變りもありませんか　今夏は意外な凶變それが輕井澤で起りましたので折角御保養中の奧樣お孃樣等に種々御心配やら御面倒をかけまして何とも申譯が御座いません　病中又死後の御厚配や御親切はもとより言語に絕して居ります　貴兄からも度々の電報やら書信にて御弔問を辱うしいつもながら感激の涙にくれて居ります　三十年の過去の生活をおもへば眞に恍として夢の如き感があります　私は一昨年大學をやめた時已に自分の一生が終つたやうな氣がしましたが今度は更にその感を深うしました　併し子供等の前途は尙未知數であるので一層努力しなければならぬやうにも思はれますので又一奮發致さうと存じます　どうか此の上とも御援助を願ひます

鶯の鳴く聲しきる花の野の朝の露と吾妹は消えし

輕井澤花野をわたる秋風もことしはわきて身にぞしみぬる

ならびゐてながめしものを離山今はその名もうらめしきかな

せの病うれへ〳〵てありし身のせにさきだちていにしあはれさ

色々の御禮申し上げたく

八月二十七日　　　　やいち

今日が先月發病した日で御座います

一八七

大正十三年八月二十七日　輕井澤より
神田區通神保町九番地冨山房　長谷川福平氏宛（はがき）

十の卷の參考書本日小包で差出しました　三十日四十日祭もうちで致さうかとも存じましたがどうも子供等の精神を昂奮させるやうで就中檀などは不眠の容態になりますので之を略して五十日には神主を來てもらひ親しい人にも參列していたゞかうと思ひます　葬祭の事は他人にやつてもらつて少しがや〳〵する中に濟む方がまぎれてよいのだらうといふことを始めて悟りました　學校の始る子供は一兩日中に歸京させますが私は檀、梓と今一週間ばかりのこりたいとおもひます

八月廿七日

先月の今日が亡妻發病の日です

一八八

大正十三年八月二十八日　輕井澤より
神田區通神保町九番地冨山房　長谷川福平氏宛（封書）

月末の拂の事に付御申越ありがたう存じます　萩原氏の廿五日附の手紙に「冨山房から金を屆けました」これはいつもの通りの會計掛からの御送金と存じます　よつてその百圓を光子に渡し萩原の月給×拾圓を差引いてあとをこちらへ爲替でよこすやう言つてやりました　三十日が日曜、卅一日が天長節で二日續き郵便も銀行もきかぬのを忘れて居りました　この送金があればこちらの方は無論差支ないのですが葬儀費用の事は全く忘れてゐました　新聞廣告代、自動車代、通知書印刷費等これは來月に入つても差支なくば來月の二日以後に於て萩原の方で支拂ふやうに致させます　實は安田銀行の貯金帳も印形も萩原がもつてゐますので大體どの位といふお見込がつきましたらその額を萩原氏にお通じ下さいませ　それによつて萩原氏が銀行から金を引出してお待受けするやうに致させます　尤も私も八日には歸京の筈ですからそれまで待つてくれゝば歸京後私が直接拂つてもよろしいのです　色々の御面倒相かけ誠に相濟みません

東京も大雨後涼しくなつたさうですが當地は尾花が盛にのびて野の色も一變しました　隣の正田さんも裏の佐野さんも引上げてだん〳〵さびしくなります

十三年八月廿八日

やいち

長谷川賢兄

一八九

大正十三年九月三日　輕井澤より
福岡縣直方町御館山三菱社宅　池永田鶴子宛（はがき）

一昨日一寸東京へ歸りました　それは國學院大學に於ける震災記念會に臨んだ爲です　引伸し寫眞見事に出來ましてまことにありがたう存じます　光子は一枚御約束しておいたさうでその權利を主張しますので內に一枚それから一枚は尾高にやりたいと思ひます　それでどうかもう一枚お拵への上それをあなたの方から直接釜山へ送つて下さつたらさぞ喜ぶことゝ存じます　どうかお願ひ申上げます
田鶴子さんの歌色々身にしみて感じ入るのがあります　いづれその中批評を書いて上げませう
石本同居誠に安心して居ります
留守中輕井澤のうちへ盜賊がはいつて色々なものを取られました

一九〇

大正十三年十一月十七日　小石川區竹早町三十二番地より
福岡縣直方町御館山三菱社宅　池永田鶴子宛（はがき）

皆々様御變りもありませんか　當方一同無事ですから御安心を願ひます
栗を澤山お送り下さいましてまことにありがたう御座います　ちやうど今日が國子と定の誕生日に當りますので
皆々大喜いたしていたゞきます

十三年十一月十七日

一九一

大正十四年三月二十日　小石川區大塚坂下町百十四番地より
弘前市外清水村官舍　彌富破摩雄氏宛（封書）

久々御無音に打過ぎました　御地も段々に春がまゐることゝ存じます　こちらではもう大分暖かになりました
さておたづねの件官立高等學校の卒業生は無試驗で入學を許すことに成つてゐますから左樣御承知下さいますや
う願ひます

三月二十日　　芳賀矢一

彌富大兄

一九二

大正十四年七月三十一日　輕井澤より

神田區通神保町九番地冨山房　坂本嘉治馬氏宛（封書）

拜啓．中村君逝去その他にて御心勞御察し申上げます　小生は廿六日出發の事に定めて置きましたので子供等のせがみもだし難く遂に告別式にも缺禮いたしました　誠に失禮いたしました　當地は例によつて寒い位です　當分靜養のつもりで毎日午睡を貪つて居ります　いづれ又鹽原へでも御出掛になつたら是非御立寄を願ひます　昨年皆樣の御世話になつたことを子供等とともに談じ合つて色々の感に堪へません　當地の正田、永井等二三人を招いて明日は小祭を營むつもりで御座います

皆々樣へよろしく

七月三十一日

やいち

坂本大兄

一九三

大正十四年

大正十四年七月三十一日　輕井澤より
東京市外西大久保三十五番地　長谷川福平氏宛（封書）

東京の暑熱如何　こちらは例の寒い位です　小生は廿六日に出立中村兄の告別式にも參列致さず甚だ失禮致しました　何となく身體の疲勞を感じこゝ五六日全く外出せず午睡に耽つて居ります　もう大分回復した心持です　岡倉君夏期大學へ出講との事で昨日來澤面會致しました　明一日が亡妻の命日で子供等とも色々當時を語りあつて居ります　正田、永井、八田等を招いて形ばかりの一周年を營みたいと思つて居ります

山の窓昔を語る霧深し

七月三十一日　　やいち

長谷川賢兄

一九四

大正十四年八月五日　輕井澤より
小石川區大塚坂下町百十四番地芳賀矢一內　萩原賢次郎氏宛（封書）

拜啓　金八百圓也右住友から出して十日午後桑野氏へ御渡し下さいますやう同日午後同氏がうかゞふ事に申遣し

ておきました　右御願まで

十四年八月五日

やいち

萩原賢兄

一九五

大正十五年六月十八日　小石川區大塚坂下町百十四番地より
福岡縣直方町御館山三菱社宅　池永田鶴子宛（封書）

御無沙汰いたしました　先般は第五男御誕生の由　久といふ御命名も誠に結構で御座います　石本ではまだのやうですが女だらうといふ評判です　石本はいよ〳〵外國留學を命ぜられて秋には伯林へ行くらしう御座います　私はこの度意外の長煩をいたしましたがどうやら全快　本日から東宮御所へ勤めましたからまづ〳〵御安心下さるやう御願ひ申します
久へ何か御祝と思ひましたがどうも考へつきません　封中些少ながら何か買つてやつて下さいませ
その他一同無事で御座います

六月十八日

大正十五年

やいち

田鶴子殿

一九六

大正十五年七月五日　小石川區大塚坂下町百十四番地より
東京市外下戸塚町源兵衛二百番地芳文堂　芳賀鶴子宛（封書）

先月分参拾圓この小切手で御受取下さい　今立氏光融館出版の佛書類は店へ出しておいてもよいとの事　右要用のみ申上ます

十五年七月五日　やいち

お鶴殿

一九七

大正十五年七月十四日　小石川區大塚坂下町百十四番地より
東京市外瀧野川町田端八百番地　中島悦次氏宛（封書）

御母堂様わざ〳〵御越し被下御氣の毒に存じます　どうも可笑記の方が面白いかと存じます　原本は私所藏につき御貸し申上げてよろしいのですが唯今書生不在一寸分りかねますのであとから差上げます

七月十四日　　やいち

中島様

一九八

大正十五年七月二十八日　輕井澤より
神田區通神保町九番地冨山房　長谷川福平氏宛（封書）

廿四日安着以來誠に涼しいのを喜んで居ります　封筒は昨日、校合は本日着いたしました
尾高が子供づれで二三日參りました
色々勘定殘りの請求がまゐります　金百圓萩原氏へ御渡し下さいますやう願ひます　右御願まで

七月二十八日　　やいち

長谷川大兄

坂本氏へ先日の禮をお傳へ下さいませ

やいち

一九九

大正十五年十一月十二日　小石川區大塚坂下町百十四番地より
福井市役所　永井環氏宛（封書）

御無事御勵精の御容子は毎日の福井日報等にて承知安心致して居ります
圖書館宣傳ビラ二萬枚小生の名を入れて御配付の由　小生の名譽此上なき事で御座いますが右の文章は小生初對面　誠によく出來て居つて小生も感服致しました　謹んで御禮を申上げます
御留守宅先般少々御風をめしたやうですが最早御全快　先日一寸お尋ね申上げましたが皆樣御不在でおばあさまだけにお目にかゝりました
石本はいよ〳〵一昨日歐洲留學の途に上りました
福井日報十八社詣といふこと結構なよい思付と存じますが毘沙門や辨天さまが交つて居るのは變におもひました
まづは御無沙汰おわびかたく〳〵

十一月十二日

二〇〇

大正十五年十一月二十日　小石川區大塚坂下町百十四番地より
福井市役所　永井環氏宛（封書）

だん〳〵寒くなりますが御無事で何より結構　グリフイス翁來朝の由新聞紙で承知しました　ハワイからの電報だとすれば本月末には着京と存じます　それで來月五日には福井會總會を小石川植物園でやる事になつて居ますからまづそれへ招待のことは今立とも相談しておきました　大正五年米國へまゐりました時小生はわざ〳〵イサカに同氏の宅を尋ねその後ニユーヨークでも逢ひましたので同氏とは一面識ありその節いろ〳〵福井の事に就いて話をしたこともあります　同氏の今回日本來遊の目的の一は福井訪問にあることゝ信じます　それ故澁澤子爵に話するまでもなく小生から福井行を勸めますし勸めぬでも自分から必ず行くことゝ信じます　十年前の事ゆゑ小生のことは忘れて居るかも知らぬが逢へば必ず思ひ出しませう　今日日本新聞社から同氏のことに就いて小生の談話を聞きに參りましたから極く簡單に話してやりました
同氏福井在住中同氏と知合であつた人があるなら其人を尋ね出しておいて下さればさぞ喜ぶであらうとおもひま

す
尙分り次第申上ますがとりあへず右御返事申上ます

十一月二十日

やいち

永井盟兄

二〇一

昭和二年二月一日　小石川區大塚坂下町百十四番地より
福岡縣直方町御館山三菱社宅　池永田鶴子宛（封書）

諒闇の新年おさびしいことで御座いました　一同御無事御越歳の由おめで度存じます
親類一同まづ〳〵何事もなくこちらでも至極健全にくらして居りますから御安心下さいませ
もう御大葬の日も近づきました　紀元節も過ぎれば又だん〳〵暖かになる事と樂みにして居ります
石本は最早伯林へ安着の由にて先日便がありました
今年はどうかして國子の話を極めたいがと思ひます　相當の處もあつたら御しらせを願ひます
この間雅人以下手紙を下さつてありがたう御座いました　又寫眞はよくうつゝて居るので一同大喜でございまし

た

二月一日

やいち

田鶴子殿

二〇二

昭和二年二月一日　小石川區大塚坂下町百十四番地より
京城旭町三丁目四番地　穗積眞六郎氏宛（封書）

諒闇のお正月まことに恐多い事でした　それでも皆々無事越歳何よりの事でございます　もう御大葬もいよ〳〵近づいて來ましたがこちらは正月以來毎日の晴天つゞき　お天氣はよいが非常な寒さで零以下七八度まで下りました　御地は尙更の事と御察し申上げます
舊臘は一同へ御歳暮をたくさんに頂戴致しましたさうでまことにお氣の毒に存じます　御厚志は誠にありがたうございますが以來あんな御心配はおやめ下さるやうに願ひます
今年になつてからもはや一月が過ぎました　つい取紛れてどこへも御無沙汰　まだ拂方の方へも伺ひません　皆様御無事と喜んで居るだけです

尾高は先日京都へ轉任　石本はもう伯林へ着いていづれも無事でございます
あまり御無沙汰ゆゑ

二月一日

やいち

穗積御兩人樣

二〇三

昭和二年二月三日　小石川區大塚坂下町百十四番地より
麻布區霞町二十一番地　鳥居龍藏氏宛（封書）

御令息樣御病死しかも遠方にて客死の由何といふ悲報か眞に消魂の至で御座います　前途有望の御身御本人は申すに及ばず御兩親に於ても又知ると知らざるとに於ても將來に多大の期待をもつて居りましたのに誠に殘念の事を致しました　わけて御兩親樣の御歎眞に御察し申上げます　私の九人の子供碌なものは一人も御座いませんがそれでも家内がなくなつてからは一入不憫におもつて幸に無事を喜んで居りますが承ればあなた方の御一粒種これからといふ處での御不幸人事とは思はれません　昨夜も炬燵を圍んで夕刊をとりくに子供等と御子樣たちの御噂に耽りました　何卒此の上はよくく御折哀御氣を御丈夫にお持ち遊ばすやうくれぐも御願ひ申上げます

小生持病引籠中書中失禮いたします

昭和二年二月三日

やいち

鳥居博士殿

奥　　様

芳賀矢一年譜

慶應三年（一歳）

五月十四日　福井市佐佳枝上町に生る。父は眞咲、夙に古學に志し、平田鐵胤、橘曙覽に就いて學び、鹽竈、多賀、湊川神社の宮司に歴任せり。母は斯波迂僊の三女。

明治十二年（十三歳）

十一月四日　東京番町小學校一級後期卒業。

明治十三年（十四歳）

一月十日　宮城中學校入學。

明治十六年（十七歳）

二月十五日　宮城中學校初等中學科第五級卒業。この年上京し伯父斯波有造の家に入る。

明治十七年（十八歳）

九月十日　東京大學豫備門改正學科第四學級入學。

明治二十二年（二十三歳）

七月十一日　第一高等中學校文科卒業。文科大學國文學科入學。

明治二十三年（二十四歳）
七月十日　次學年の特待生に選定せらる。
　四月「國文學讀本」（立花銑三郎共編）を冨山房より刊行す。
明治二十四年（二十五歳）
七月十日　次學年の特待生に選定せらる。
明治二十五年（二十六歳）
七月十日　文科大學國文學科を卒業し、大學院に入る。（文學博士小中村淸矩の指導を受く）
九月二十一日　獨逸學協會學校教員を依囑せらる。
　十月「文學者年表」を冨山房より刊行す。
明治二十七年（二十八歳）
九月十四日　第一高等學校の國文の授業を囑託せらる。
明治二十八年（二十九歳）
一月二十八日　永井環の媒妁により潮田鋼子（方藏妹、靜岡縣女子師範學校卒業）を娶る。
三月二十八日　第八回尋常師範學校、尋常中學校、高等女學校教員檢定委員を囑託せらる。（以後第十三回まで每年同委員を囑託せらる）

三月三十一日　第一高等學校教授兼高等師範學校教授に任じ、高等官七等に敍せらる。
六月二十一日　從七位に敍せらる。
八月十四日　長女田鶴子生る。（大正三年三月、工學士池永四郎に嫁す）

明治二十九年（三十歲）

十二月十二日　次女敏子生る。（大正三年十一月、法學博士男爵穗積陳重四男法學士眞六郎に嫁す）
五月「新撰帝國史要」（上）を冨山房より刊行す。

明治三十年（三十一歲）

四月二十二日　高等官六等に陞敍せらる。
七月十日　正七位に敍せらる。
九月十六日　尋常中學校教科細目調査委員を命ぜらる。
三月「新撰帝國史要」（下）を冨山房より刊行す。

明治三十一年（三十二歲）

一月二十一日　兼官を免ぜらる。
一月二十二日　高等師範學校國語科講師を囑託せらる。
十二月十四日　東京帝國大學文科大學助教授に兼任し、博言學講座分擔を命ぜらる。

明治三十二年（三十三歳）

一月二十八日　高等師範學校教授に任じ、兼東京帝國大學文科大學助教授故の如し。

五月六日　東京帝國大學文科大學助教授に任じ、高等師範學校教授を兼ぬ。

博言學講座分擔を免じ、國語學國文學國史第四講座擔任を命ぜらる。

十二月七日　師範學校學科程度取調委員を命ぜらる。

十二月十九日　高等官五等に陞敍せらる。

十二月「國文學史十講」を冨山房より刊行す。

明治三十三年（三十四歳）

二月二十日　從六位に敍せらる。

三月三十一日　願により兼官を免ぜらる。

六月十二日　文學史攻究法研究のため、滿一箇年半ドイツへ留學を命ぜらる。

九月八日　國語學國文學國史第四講座擔任を免ぜらる。

横濱發ドイツへ向ふ。

十月十九日　ゼノアに上陸。

十月二十八日　ベルリン着。（パリを經て）

十二月四日　三女光子生る。（大正九年四月、男爵石本新六三男寅三に嫁す）

十一月「國學史概論」（國語傳習所講義第二）を國語傳習所より刊行す。

明治三十四年（三十五歳）

ドイツ滯在。

明治三十五年（三十六歳）

五月二十七日　ベルリン發。

六月二十九日　ロンドン着。（パリを經て）

七月四日　ロンドン發、歸朝の途に就く。

八月二十四日　横濱着。

九月十二日　第一臨時教員養成所國語漢文科講師を囑託せらる。

九月十九日　東京帝國大學文科大學教授に任じ、國語學國文學第二講座擔任を命ぜらる。

九月二十五日　國語調査委員會委員を仰付けらる。

九月二十九日　教員檢定委員會臨時委員を仰付けらる。（以後大正十四年まで毎年同委員を仰付けらる）

十月十日　高等官四等に陞敍せらる。

十二月二十七日　正六位に敍せらる。

明治三十六年（三十七歳）

二月十九日　文部省編纂教科書の校閲を囑託せらる。

四月二日　東京帝國大學總長の推薦に基づき、文學博士の學位を授けらる。

五月八日　國語調査委員會主査委員を命ぜらる。

六月七日　長男檀生る。

四月名著文庫第三篇「雨月物語」、七月同第七篇「狂言二十番」、十一月同第十四篇「謠曲二十番」をいづれも富山房より刊行す。

明治三十七年（三十八歳）

二月六日　文部省より師範學校中學校高等女學校國語科授業視察のため岡山、廣島二縣へ出張を命ぜらる。

三月　東京帝國大學より學術實地指導のため京都、大阪、奈良の府縣へ出張を命ぜらる。

十一月十二日　高等官三等に陞敍せらる。

十二月六日　次男梓生る。

一月名著文庫第十九篇「花月草紙」、五月「祝捷行進歌」、十一月「世界文學者年表」をいづれも富山房より刊行す。

「國語活用聯語一覽」を冨山房より刊行す。

明治三十八年（三十九歲）

一月三十一日　從五位に敍せらる。

六月　東京帝國大學より學術實地指導のため京都、大阪、奈良、三重の府縣へ出張を命ぜらる。

二月「內地旅行」を金港堂より刊行し、四月「中古文典」、十一月「明治讀本」十册）をいづれも冨山房より刊行す。

明治三十九年（四十歲）

二月七日　四女咲子生る。（大正十三年五月、法學士文學士尾高朝雄に嫁す）

三月三十一日　第一臨時教員養成所國語漢文科講師囑託を解かる。

五月八日　父眞咲歿す。（年六十一。福井縣今立郡鯖江在圓誠寺に葬る）

六月　東京帝國大學より學術實地指導のため京都、大阪、奈良、和歌山の府縣へ出張を命ぜらる。

六月名著文庫第二十五篇「慶長見聞集」、十月「日本家庭百科事彙」（下田次郎共編）をいづれも冨山房より刊行す。

明治四十年（四十一歲）

三月二十四日　三男篁生る。

八月二十一日　高等官二等に陞敍せらる。
十月三十日　正五位に敍せらる。
　十月「詞藻類纂」を啓成社より、十二月「國民性十論」を冨山房より刊行す。

明治四十一年（四十二歳）

五月二十五日　臨時假名遣調査委員會委員を仰付けらる。
六月二十五日　勳四等に敍し、瑞寶章を授けらる。
七月一日　東京帝國大學より學術上取調のため京都府下へ出張を命ぜらる。
九月二十六日　教科用圖書調査委員會委員を仰付けらる。
九月二十八日　教科用圖書調査第三部員、主査委員、起草擔任を命ぜらる。
　二月「國文學歴代選」（上・中古、近古、近世の三册）を文會堂より刊行し、七月「四流對照謠曲二百番」上卷、十二月同中卷を金港堂より刊行す。

明治四十二年（四十三歳）

三月十七日　教科用圖書檢定事務を囑託せらる。
十一月八日　文部省より新潟、長野兩縣へ出張を命ぜらる。
十一月十五日　文部省より明治四十二年度第三回師範學校中學校高等女學校教員講習會講師を囑託せらる。

十一月十八日　五女國子生る。（昭和三年五月、理學士和達清夫に嫁す）
四男定生る。
十二月一日　漢文教授に關する調査を囑託せらる。
一月名著文庫第三十一篇「和漢朗詠集」、三月「明治文典」（三册）をいづれも富山房より、六月「四流對照謠曲二百番」下卷を金港堂より、九月「月雪花」を文會堂より刊行す。

明治四十三年（四十四歲）
十二月名著文庫第四十篇「保元物語」を富山房より、同月唱歌「年中行事」を文昌閣より刊行す。

明治四十四年（四十五歲）
一月二十七日　東京高等商業學校講師を囑託せらる。
五月十七日　文藝委員會委員を仰付けらる。
六月二日　文部省より第十二回視學講習會講師を囑託せらる。（以後大正六年まで每年同講師を囑託せらる）
七月十七日　朝鮮總督府より小學校教員夏期講習會講師を囑託せられ朝鮮に旅行す。
十月十九日　文部省より京都府及奈良縣へ出張を命ぜらる。
二月一日本唱歌」を廣文堂より、三月名著文庫第四十一篇「平治物語」、十月同第四十五篇「神皇正統

記」、十二月同第四十六篇「殉難前後草」をいづれも冨山房より刊行す。

明治四十五年（四十六歳）

六月二十七日　勳三等に敍し、瑞寶章を授けらる。

一月「新定中學讀本」（十册）、二月「現代文典」（二册）、「國文典初歩」、三月「作文講話及文範」（杉谷代水共著、二册）をいづれも冨山房より、七月「日本人」を文會堂より刊行す。

大正元年（四十六歳）

十一月二十日　從四位に敍せらる。

一月名著文庫第五十篇「川柳選」を冨山房より、九月「新式辭典」を大倉書店より、十月「東海道五十三次」を冨山房より、同月唱歌「乃木大將」、十一月唱歌「明治聖帝」をいづれも松邑三松堂より、同月「萬葉集略解」上、下（佐佐木信綱共編、校註和歌叢書の第一、第二卷）を博文館より刊行す。

大正二年（四十七歳）

七月二十五日　國學院大學商議員を囑託せらる。

七月　臺灣に旅行す。

一月「新定女子讀本」（八册）、六月「攷證今昔物語集」（天竺震旦之部）を冨山房より、六月「八代集」上（佐佐木信綱共編、校註和歌叢書の第三卷）、九月同下（同第四卷）を博文館より、七月「國文學史概論」を文會堂より、十月「口語文典大要」を文昌閣より、十一月「書翰文講話及文範」（杉谷代水共

著、二册）を冨山房より刊行す。

大正三年（四十八歳）

三月「三十六人集」（佐佐木信綱共編、校註和歌叢書の第五卷）、四月「校註謠曲叢書」（佐佐木信綱共編）第一卷をいづれも博文館より刊行し、七月「南部廣矛翁」（傳記及紀行、歌集の二册）を南部球吾の依囑により編纂刊行す。八月「攷證今昔物語集」（本朝之部、上）を冨山房より、九月「日本人名辭典」を大倉書店より、十月「新式座右年表」を文會堂より、十一月「近代名家歌選」（佐佐木信綱共編、校註和歌叢書の第六卷）、十二月「校註謠曲叢書」（佐佐木信綱共編）第二卷をいづれも博文館より刊行す。

大正四年（四十九歳）

三月二十四日　帝國學士院規程第二條に依り、勅旨を以て帝國學士院會員を仰付けらる。

五月二十九日　大禮奉祝唱歌歌詞審査委員を囑託せらる。

十一月三十日　高等官一等に陞敍せらる。

五月「筆のまに〳〵」を冨山房より、八月「和歌作法集」（佐佐木信綱共編、校註和歌叢書の第七卷）、九月「校註謠曲叢書」（佐佐木信綱共編）第三卷をいづれも博文館より、十月「大禮と國民」を冨山房より刊行す。

大正五年（五十歳）

六月八日　歐米各國へ出張を仰付けらる。

七月三十一日　横濱發アメリカへ向ふ。
八月九日　ホノルル着。
九月六日　ホノルル發。
九月十二日　サンフランシスコ着。
その後サクラメント、ロスアンゼルス、シカゴ等アメリカ各地視察。
九月二十二日　國語學國文學第二講座擔任を免ぜらる。
十月九日　歐米各國に於ける教科書取調を囑託せらる。
十月十四日　ニユーヨーク着。
一月「格言大辭典」(安井小太郎、服部宇之吉共編) を文昌閣より、「戰爭と國民性」を富山房より、「學生の友」を廣文堂より、九月「口譯御文章」を光融舘より刊行す。

大正六年 (五十一歳)

一月七日　ニユーヨーク發、ロンドンへ向ふ。
一月十五日　ロンドン着。
四月二十一日　ロンドン發、ノルウエー、スウエーデンを經て、シベリヤ經由歸朝の途に就く。
五月二十四日　東京着。

五月二十六日　國語學國文學第二講座擔任を命ぜらる。
十二月十四日　小學校唱歌教科書編纂委員長を囑託せらる。
十二月二十八日　正四位に敍せらる。
十月「女子國文」(八册)を富山房より刊行す。

大正七年(五十二歳)

七月二十日　皇典講究所國學院大學擴張委員會委員を囑託せらる。
十二月二十二日　國學院大學長に就任す。
二月「帝國讀本」(十册)、九月「國民道德教科書」(五册)をいづれも富山房より、十月「假名遣送假名早わかり」を育英書院より、十二月「筆にまかせて」を日本書院より刊行す。

大正八年(五十三歳)

五月六日　皇典講究所協議員を囑託せらる。
十月二十一日　國學院大學學則改正調査委員を囑託せらる。
二月「女子補習國文」、三月「皇國文典」(二册)をいづれも富山房より、八月唱歌「世界一週」を富國出版社より刊行す。

大正九年(五十四歳)

二月二十四日　神社調査會委員を囑託せらる。
七月二十七日　勳二等に敍し、旭日章を授けらる。
教科用圖書調査委員會主査委員の職を奉じ盡力少からざるに依つて旭日重光章を授けらる。
十二月二十四日　皇典講究所調査委員長を囑託せらる。
十月「國文學歷代選」（現代篇）を文會堂より刊行す。

大正十年（五十五歲）

九月三十日　東宮職御用掛を仰付けらる。
四月「攷證今昔物語集」（本朝之部、下）、十二月「師範國文」（八册）をいづれも冨山房より、同月「言泉」（五册、落合直文著「ことばの泉」を改訂增補せしもの）を大倉書店より刊行す。なほこの年十一月「古典經緯」宮內省より刊行せらる。

大正十一年（五十六歲）

三月十八日　勅任官を以て待遇せらる。
三月十八日　願に依り本官を免ぜらる。
四月十日　特旨を以て位一級を進め從三位に敍せらる。
七月二十七日　帝國大學令第十三條に依り勅旨を以て東京帝國大學名譽教授の名稱を授けらる。

十二月「帝國新文典」(二册) を富山房より刊行す。

大正十二年(五十七歳)

七月三日　神社調査會委員を仰付けらる。

九月一日　關東大震災に輕井澤への車中高崎驛にて遭遇す。

十月　久邇宮良子女王(皇后陛下)へ日本文學史を御進講申し上ぐ。

一月「女子新文典」(二册) を育英書院より刊行す。

大正十三年(五十八歳)

四月二十二日　母秋子歿す。(年七十四。福井縣今立郡鯖江在圓誠寺に葬る)

八月一日　妻鋼子輕井澤別邸に歿す。(年五十。小石川護國寺墓地に葬る)

大正十四年(五十九歳)

六月九日　神社調査會委員を囑託せらる。

一月「女子現代文範」、「改訂現代文範」をいづれも育英書院より刊行す。

大正十五年(六十歳)

九月十五日　神職高等試驗臨時委員を命ぜらる。

十一月名著文庫(新型)「狂言五十番」及び「謠曲五十番」を富山房より刊行す。なほこの年「國文學

史文例類纂」上古篇宮内省より刊行せらる。

昭和元年（六十歳）

十二月二十五日　宮内省御用掛を仰付けらる。

昭和二年（六十一歳）

一月二十二日　願により宮内省御用掛を免ぜらる。

二月四日　心臓性喘息を病む。

二月六日　勳一等に敍し、瑞寶章を授けらる。

二月六日　午前四時四十分小石川區大塚坂下町百十四番地の自宅に歿す。

二月十二日　國學院大學葬にて神式により青山齋場に告別式を行ひ、小石川護國寺墓地に葬る。

一月「奉悼歌」文部省より刊行せらる。四月名著文庫（新型「寶物集」、九月同「撰集抄」冨山房より刊行せらる。

昭和三年

十月「日本文獻學文法論歷史物語」、「國語と國民性日本漢文學史」遺稿として冨山房より刊行せらる。

矢一の様式に就いて

芳賀檀

私は矢一のことを思ふ時、深い望鄉の思ひに堪へない氣がする。それは、どのやうな子供等もが、失はれた父に對して持つ、愛の悲しみであらうか。もしそれが私だけのものであつたら、私はひとり、埋れ半ば忘れられかけた父の、新にせられた悲しみの涙に浸つてゐればよいのである。今日誰か併し、そのやうな時代のノスタルヂュに打たれなかつたものがあらう。たゞその故に私は、來るべき時代への責任と熱意とを感ずるであらう。矢一の姿は、餘りに古典に、美しい故に、時に私は彼に最後の人を失つたと思はなければならない程である。不幸にして私は、自分の武裝の爲に忙しく、矢一の古典の歌謠をしみ〴〵と聽いてゐる暇を持たなかつた。何時私は、その美しい詩を、憚る所なく聽き得る心を持ち得るのであらう。私は、矢一が終つた所から出發すればよかつたのを或ひは出發點を

間違へたかも知れない。併しながら、この寂寥の世の中に在つて、彼の歌ひ、又歌はれなかつた多くの歌は、彼を追憶の光の中に清く保つてゐる。而も私達は、永く彼の體現的な近さの中に共に生き、多く語つたのであつた。

ノヴアリスはその斷章の中に「歷史は自らを創造する。たゞ過去と未來との結合によつてのみそれは發生し得る。」又「歷史は道德と宗教との轉形である。從つてそれは又人間學の變形でもある。」又「物語たり得るもののみが、歷史たり得るのである。」と言つてゐる。人間は、その人の人生の歷史を創造する以外に、何を創造し得るといふのであらう。又人間の意慾を除いて人は果して歷史といふものを考へ得られるであらうか。勿論私達が言ふ歷史とは、たゞ過去の出來事の羅列を言つてゐるのでもなく、年代記を指してゐるのでもない。私達の言ふ歷史とは、現在の最高の力と情熱とを以てする過去の創造であればよい。それは、量としての存在ではなく、高次の質に高められた新しい實在の展開であればよい。從つてもしそのやうな高次の平原への意志が個人の領域を超える時に、それはブルクハルトが考へたやうに、宗教となつてもよいのではないか。矢一はそのやうな歷史は、たゞ神話（ミトス）としてのみ考へた。過去と現在と、一切は彼にとつては神話であつ

た。又彼は未來を責任を以て築かうと意志するが故に、現在と過去の完成の爲に何物をも惜しまなかつたのである。彼の歌は古典の讃歌だけではない。それは又時代の病患に對する決意と怒とであつた。私達はこゝにも彼の悲劇を見なければならない。

　矢一を見たことのある者は何人も彼が最も純粹な典型の日本人であつたことを怪しまないであらう。吾々は再びあのやうな日本人を持ち得るであらうか。又再び彼程古典への強烈な愛と、古典を守る怒とを持ち得る者があるであらうか。私は歴史への良心を持することと彼程嚴(きび)しい者を知らない。彼は「進んで死をもかへりみぬ」精神の一個の武人であつたのである。

　彼は又汚れなき祖先の血を誇り、家鄕を愛し、家名を重んじた。どのやうな場合にも、彼を生んだ世襲の傳統を忘れず、又來るべき次代への良心を失つたことはなかつた。彼はあらゆる追憶と感謝との集約であつた。どの彼の著作も、祖先への誇と感動とに充ち滿ちてゐないものはない。例へば彼の「月雪花」又「國民性十論」。それ等は「より美しきものへの追憶」であつて、過去に對する所の裁斷であり、又古典への可能性として次代の爲に投げられたものである。ニイチエは「一切のよきものは世襲である。世襲でないものは不完

全である。」と言つた。矢一にとつて、世襲でなかつたものはない。又完成せられた傳統以外に彼は美といふものを見なかつたやうに思はれる。從つて彼は苛酷と思はれるまでに、一切の革命的なものを憎んだ。彼は其處に外面のみの變革による精神の破壞を見出すからであつた。精神の高貴とは、このやうな幾世紀かの世襲の後繼者にのみ對して言はれてよい。又彼はこの集約せられた精神の世襲より、より高く、より美しい人と時代とを期待したのである。彼は美しい多くの追憶によつて充電せられたが、決して彼はそれを次代への爲に惜しみはしなかつた。與ふることは彼の道德であつた。而して人は或ひはなほ記憶するであらう。與ふる時、彼は餘りにも無條件に大膽であつた。併し與へた程はどこにも感謝を見出さなかつた。寧ろ彼は次代を奪ふ爲にすべてを捧げればよかつたのである。すべてを與ふることは彼の幸福であつた故に。

祖先の血と傳統とを誇る矢一が、皇室に對する深い敬愛を抱いたことは寧ろ當然であつたと言つてよい。皇室と國家に對する彼の愛は、彼の信仰であり、宗教であつて、どのやうな愛よりも深かつたのである。「佛教信者の親房卿でも『日本は神國也』といふのである。佛教の說教を主としたやうな謡曲にも『日本は神國也』を繰返すのである。」と指摘

してゐる。(國民性十論四一―四二) 彼が自ら最も偉大なる宗教であると認め、少からず傾倒してゐた佛教すら、「血統」に對する彼の信頼を奪ふことは出來なかつた。彼の信仰に於ては、精神と肉體とは區別せられることはなかつた。彼の場合に在つては、ギリシアに於て左樣であつたやうに、人は又神であつた。少くとも人間は神にまで高められ完成せられねばならず、そのやうな人を神として祭らうと思つた。そのやうな神は、完成せられた人格の中に見出してはいけないのであらうか。彼の言ふ神は、俗流の神道に見る神とは多くの隔りを持つてゐた。「神といつても後世に發達した各派の神道をいふのではない。」と警告してゐる。(國民性十論四〇)

吾が國の國家は、神祇政治であり、家族政治である。この文明の危險の只中に、吾々がよくこの詩の神話の國家を守り得たといふことは、矢一にとつては無上の喜びであり、彼はあらゆる感謝を捧げることを禁ずることが出來なかつたのである。(國民性十論三六)彼はこの點に於ては忠誠無比、折ある每に、吾が神話の國體の外國のそれとは根本的に相違することを說いて倦まなかつた。昔、神皇正統記を書いた北畠親房の怒が、なほ烈々と彼の心に燃え盛るのを感ずるのである。「獨り我が日本では國土と皇室とは神話以來已

に離るべからざるものである。」（國民性十論三三―三四） 又彼は吾が國のすべての美しいエスト、例へば武士道、家族、主從等の關係を、皆皇室を中心とした忠君愛國の思想に還元した。（國民性十論二八） 從つて不忠の臣は彼の永遠の仇敵であつて、どのやうな過失をも許すことが出來なかつた。 例へば定家が新勅撰集の勅撰を承りながら、幕府を憚つて、平素御知遇を受けてゐたにも拘らず、承久の擧をおもひ立たれた後鳥羽、土御門、順德の三上皇の御歌は一首もとらなかつたことに對しては、「千歳までもその醜を示す」と言つて怒つてゐる。（月雪花四二） それに反して、將門、義朝、義仲等は寧ろ皇室の御知遇を得たい爲にのみ道を誤つた不幸な亂暴者に過ぎなかつたと言つてゐる。（國民性十論八） それだけに、「わが子には散れと教へておのれまづ嵐に向ふ櫻井の里」の正成の、行つてかへらぬ雄雄しい武人の姿に對しては感謝の涙を惜しまないのである。（月雪花一九二） 正義とは、矢一にとつては觀照でもなく、客觀でもなかつた。 信ずる所の情熱と意志とを持つて、積極的に作爲するのが彼の正義であつた。 啓蒙的に、例へば尊氏と正成と何れが正當であつたかを檢討するのは、彼の使命ではない。 行爲する道德、激烈なる意志、而して目前の不正への追擊が唯一の彼の正義である。 私はニイチェの言葉を思ふ。「現在の最高の力を

以てしてのみ君は過去を裁斷してよい。」――又ニイチエは「勇敢なるもののみよし。」と言つた。何故なれば、勇氣は死をも撃つからである。「私は生れながら戰鬪的だ。攻擊は私の本能である。」ニイチエがさう言つた時、彼は東洋的な諦觀をも、シユレーゲルの浪漫的イロニイをも、懷疑主義をも考へてゐるのではない。彼は古典の敢爲なるルーテルのパスカルの藝術を思つてゐるのである。諦觀的な幾百の者がゐても、宗教は改革せられはしない。私は矢一は武人であると言つた。彼は生れながらの武士である。彼は他のいかなる方法に於ても存在の樣式を發見し得ないのである。彼は卑劣なるあらゆるものを憎んだ。人はそのやうな武士的樣式の中に、悲劇をも辭せぬ強い意志を見出したであらう。それは寧ろ諦觀を排する所の非アジア的、西歐的な思想でさへもあつた。矢一はそのやうな文學と、そのやうな歷史の完成の爲に一生を捧げたのである。又吉野朝の人々を、弘安の役の勇士等を讃美した所以である。「大君の命かしこみ磯に觸り海原わたる父母をおきて」その容易に全部を與へ得る道德は、西歐の殉教の道德に相通ずる。これに優る美があり得るかと矢一は思つてゐるのである。

又彼の文學は、人間の學でもあつた。人はその中にあらゆる人間の基準と樣式とを見

出すであらう。又人間はその基準に從つて裁斷せられ、評價せられてゐる。從つてこゝには、近松とシエクスピーアとを混同して論ずる混雜はない。このやうな時代に生きる爲に、吾々は果してどのやうな人間的様式を選ぶべきであらうか。又どのやうな様式の文化を戰ひとるべきか。それ等の問題は、彼の文學と時代批評の中に提起せられてゐるのである。

吾々は彼の文學の底を貫いてゐる、たゞひたむきなる烈々たる意志を感ずる。それは將に敵に向つて長槍を投げんとするギリシア兵士の決意の姿である。今日の時代は、矢一の持つた時代よりも、精神の貧しさに於て、優るとも劣りはしない。このやうな時、人は異教者となるもよく、ロマン派となるもよい。又吾々は多くをハムレツトに、ドン・キホーテに學ばねばならない。併しハムレツトは狂人の假面を着けたが、道化者の眞似はしなかつた。ラマンチヤの騎士は、笑はれても頑としてその武士道を捨てなかつた。吾々を打つのは、彼等の悲慘なるまでの眞摯の姿である。それは悲劇であつてもイロニイではない。要は人間の强さに在り、男がその様式を守り得るか、又その運命に堪へ得るかに在る。ニイチエは「何よりも假面を憎む。」と言つた。人の世が暗く淋しければとて群衆を

迎へる爲に、「おどけた顏」をして見せる必要はないのである。例へばヘルデルリンは、假面よりは強く死を願つた者の一人であつた。吾々はどのやうな場合にも、決意に「直立する」男性的な態度を崩したくない。江戸時代の文人ならばいざ知らず、古典の日本人は「それでいゝぢやないか。」などとは言はなかつた筈である。「燃ゆる情熱と嚴肅」が、どの場合にも吾々の樣式である。矢一は非大陸的な吾が國民性は假借なく告發し叱責した。吾が社會人と、低級なる新聞とは、「眞摯ならぬ輕佻な風」として却けた。又徒に煩瑣な道德や習慣や、偏狹な國民性が、どのやうに互ひに制縛し合つて、最善なるものの成熟と偉大なるものの生育とを阻んでゐるであらう。これ以上の惡はあり得るか。今日のやうな軋轢擠排の風景からは、何物も偉大なるものは生れはしない。

從つて今日の吾が國の、人と精神との貧困を來したのである。併しながら、吾等は徒に沮喪することなく、再び彼の淸朗な古典の日を期待すればよい。このやうな時、人はロマン派に走つてもよいが、容易にたゞイロニイを弄ぶ文人流の樣式は、吾等は取らないのである。而して吾々は、次代の爲に、ニイチエの言つた「永い意志」を持續しなければならない。

私は父矢一の學的な仕事に就いて語る筈であつた。併しこれは、たゞ矢一への追憶で

ある。追憶である故に、強ひて學的なことに亙らず、彼が古典の様式と歌謠だけを見ようと思つたのである。近時日本精神に就いて多くを言はれるが、何一つ私を感動せしめたものはない。たゞ矢一のレンブラント的歌謠のみが私の胸を打ち、勇氣を與へてくれるのである。それは私だけであらうか。

何時か私はもつと暇を得て、矢一のことを語りたいと思ふ。彼の古典の多くの歌は、次代の爲に歌はれた。私達の行くべき道は一つなのである。私は屢〻父のことを忘れて生きてゐるが、眞摯になる時、知らず〱私はこの指導者であり警告者の指示する道を歩いてゐる自分を見出すのである。

昭和十二年二月一日印刷
昭和十二年二月六日發行

『芳賀矢一文集』
定價參圓五拾錢

著作權所有

編纂者　芳賀檀

發行所　東京市神田區神保町一丁目三番地
合資會社　冨山房

右代表者　冨山房社長　坂本嘉治馬

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十一番地
白井赫太郎

發行所　東京市神田區神保町一丁目三番地
合資會社　冨山房
振替東京五〇一番
電話神田(25)二二、一七一・二一七八番

精興社印刷